

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

海原 治

(元内閣国防会議事務局長)

オーラルヒストリー

〈下巻〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

目次

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 海原 治 オーラルヒストリー〈下巻〉

【第十一回】	1
・ 汝の敵を愛せよ——社会党対策	3
・ 国防の基本方針の原案を作る	10
・ 米三軍を相手に長期計画を説明	18
・ 防衛産業と国防族	26
【第十二回】	35
・ 集団的催眠状態の日本人	37
・ 駐米日本大使館に赴任	43
・ FXの機種選定問題	50
・ F104——危機感なき決定	57
【第十三回】	67
・ 「赤城構想」を潰す	69
・ 「全面戦」の可能性について	76
・ 「自主防衛」と「自前防衛」	86
・ 原子力潜水艦の寄港問題	91
【第十四回】	101
・ ナイキかホークか——「陸」と「空」の争い	103
・ バッジ・システムの受注競争	109
・ 岸・佐藤VS河野一郎——F104の後継機を巡って	117
・ 「上林山お国入り事件」の顛末	124
【第十五回】	133
・ 事前協議とは何か——ラオス問題	135
・ キューバ危機とCIA情報	144
・ 三次防と「照顧脚下」	152
・ 日米安保協議会の実態	160
【第十六回】	169
・ 「三矢研究」と「三矢計画」	171
・ 松野頼三長官の「大人事」	181
・ 悪事に加担せず——政治と防衛庁	186
・ 非現実的な国防論	193
【第十七回】	201
・ 海原清平の「二十五日会」	203
・ 自動延長か固定延長か——安保改定問題	207
・ 旧海軍派と「久住レポート」	215
・ 「有事駐留論」を排す	220
・ 反響を呼んだ「科学の驚異」	226
・ 日米間の技術格差——国産化問題	230

【第十八回】 237

兵器の国産化と「武器輸出三原則」 239

「巻き込まれ論」と朝日新聞 244

官房長更迭の一部始終 249

国防会議事務局とは？ 255

予算先取りの「沖縄配備」 264

【第十九回】 273

情けない日本の政治家たち 275

「中曽根構想」を潰す 281

「新防衛力整備計画」を解体する 289

「大綱」から「中曽根趣味」を除く 296

三島由紀夫と陸幕の関係 301

【第二十回】 307

大臣の三つのタイプ 309

「重要法案」を巡る攻防戦 313

勇退・留任、退官の真相 318

一兵卒の評論家として 325

誰が日本を滅ぼしたか 332

あとがき 340

資料 341

目次

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト 海原 治 オーラルヒストリー〈上巻〉

【第一回】 1

略歴の誤りを正す 3

伯父・父親のことなど 8

中学四年で一高へ 14

東京帝国大学に学ぶ 24

【第二回】 33

内務省入省——大臣官房文書課勤務 35

斎藤隆夫の肅軍演説を聴く 44

入営——第十一師団歩兵第四十三連隊 52

経理部幹部候補生になる 63

資材調達で朝鮮出張 72

【第三回】 81

内務班の初年兵教育を正す 83

区処と指揮 88

- ・本土移駐——決戦準備……………92
- ・戦争終結——復員業務に専念……………102

【第四回】……………115

- ・海原隊の解散・結婚……………117
- ・三カ月の交通課長……………124
- ・生活課長として——闇市・テキ屋対策……………130
- ・盟友・小佐野賢治との誓い……………139
- ・国警企画課長——警察法改正に着手……………144

【第五回】……………155

- ・警察法の改正——「法律の刑事」として……………157
- ・アメリカ視察でマッカーサーを「批判」……………164
- ・秘密裡にダレス特使と会食……………171
- ・警察予備隊の創設——人事を担当する……………175
- ・旧内務官僚vs.旧陸海軍……………184

【第六回】……………195

- ・自治体警察の連絡調整に当たる——東京警察管区本部警備部長……………197
- ・共産党の武力闘争の実態……………204
- ・保安課長の職務とは？——保安庁保安局……………215
- ・任務至上主義の弊害……………223

【第七回】……………231

- ・敬礼を巡る「陸」と「海」の対立……………233
- ・「陸原」と呼ばれて……………241

- ・池田・ロバートソン会談——公電を暗記する……………253
- ・歴史の「語り部」として……………260

【第八回】……………269

- ・人事異動の舞台裏……………271
- ・統合幕僚会議の設立に反対する……………283
- ・幻の防衛道路建設計画……………294

【第九回】……………307

- ・「日の丸」と「君が代」……………309
- ・階級の称呼に関して……………315
- ・日米安保体制の問題点……………322
- ・国防省への昇格ならず……………333

【第十回】……………341

- ・国防会議事務局を巡る争い……………343
- ・平均七カ月で替わる長官たち……………349
- ・「国産化率」の実態……………355
- ・検討されなかった郷土防衛隊構想……………361
- ・日米安保と日ソ国交回復……………367
- ・岸訪米に同行——「第一次防」を説明……………377

〈速記〉 丹羽 清隆

海原 治(かいほら おさむ) 略歴

- 1917年 2月 大阪に生まれる (本籍 徳島県)
- 1938年10月 高等文官試験行政科合格
- 1939年 3月 東京帝国大学法学部法律学科卒業
- 4月 内務省大臣官房文書課
- 1940年 1月 高知県地方事務官
- 2月 入営 歩兵二等兵
- 1945年 8月 主計大尉
- 9月 高知県渉外課長
- 1946年 8月 警視庁警視
- 1948年 8月 国家地方警察本部警視 総務部企画課長
- 1951年 6月 国家地方警察警視正 東京警察管区本部警備部長
- 1952年 8月 保安庁保安局保安課長
- 1954年 7月 防衛庁防衛局第一課長
- 1957年11月 外務省在アメリカ合衆国日本国大使館参事官
- 1960年 2月 防衛庁長官官房考査官
- 9月 防衛庁防衛審議官
- 12月 防衛庁防衛局長
- 1965年 6月 防衛庁長官官房長
- 1967年 7月 内閣国防会議事務局長
- 1972年12月 退官

海原 治
オーラルヒストリー
第11回

開催日：1999年9月9日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

牧原 出(東北大学法学部助教授)

第 11 回 質問項目

今回は保安課長時代を含めて、防衛力整備計画関係のお話をお願いします。

- ① 前回の最後に、米国側に提出した長期計画のお話がでました。重光外相が携行した計画の策定にも先生が関与されたとのことですが、その経緯、計画の内容、米国の反応等についてお聞かせ下さい。
- ② 当時、様々な立場からの再軍備案が出されていました。政党系、旧軍人関係、その他、軍備の規模や編成方針にも大きく差があったわけですが、制度調査会で検討した計画等も含めて、海原先生が関与された長期計画において参考とされたものはありますか。
- ③ 当時の改進黨が作った再軍備案などを見ると、陸上軍備よりも、航空、海上を極めて重視した計画のようです。限られた予算から軍備をしていくにあたり、何を重視していくかは重要な問題だったと思いますが、陸・海・空それぞれの整備について、どのような方針で進むべきかということについて、保安庁内と防衛庁内の合意はあったのでしょうか。あるとすれば、それはいつごろからでしょうか。
- ④ 防衛力整備につれて、在日米軍は順次撤退していきます。基地そのものは残りますが、地上兵力はほとんど引き揚げ、直接日本防衛に役立つほどの規模ではなくなります。前は「基地があればよいのです」と言われましたが、米軍と自衛隊の関係を、当時どのように考えられていたのでしょうか。米軍は海上及び航空戦力を提供し、日本本土防衛は日本の責任でやるということでしょうか。それとも、日本が時間を稼いでいる間に米軍の来援を待つということでしょうか。
- ⑤ 上の質問とも関連しますが、長期計画策定にあたっては、日本防衛のため、米軍には長期にわたり駐留してもらいたいと考えられていたのか、当然長期にわたる駐留をするだろうと思われていたのか、あるいは早く撤収してもらいたいと考えられていたのか、防衛関係者、政治家等の考えはどのようなものだったのでしょうか。
- ⑥ 以前も経団連の作った防衛計画のことに触れられましたが、経団連でも防衛生産委員会を中心に、「安定的な防衛生産のためにも長期計画を」という声が高まります。通産省に防衛生産監理長（皆川良三、金谷栄治郎）、防衛産業参事官（金谷栄治郎）というポストができたのも、このころ（昭和 29 年 11 月～昭和 34 年 4 月）でした。長期計画策定にあたって、通産省との折衝などはありましたか。あったとすれば、どのような問題でしたか。
- ⑦ 防衛生産関係では、米軍からの飛行機購入、一部ライセンス生産にともなう戦後の航空産業復活問題があります。日本の産業界の生産力等も勘案しながら計画を策定していくことになると思いますが、これなども通産省との交渉になる問題だったと思いますが、いかがでしょう。また、当時赤沢璋一航空機武器課長の下、日本製民間輸送機事業も始まります。まだ先の話とは言え、実現すれば防衛庁も購入という話になるわけですが、通産省が強力に進めるこういった計画について、防衛庁側はどのように見ておられましたか。
- ⑧ 旧海軍関係者が中心になって作った「海空技術調査会」という組織があります。海上護衛問題を中心に意見を公表していて、後のシーレーン問題につながる議論と思われるが、海原先生は著作の中で何度もその議論に批判を加えておられます。さて、自民党安全保障調査会編として出版された『日本の安全と防衛』は、「海空技術調査会」の論文を集めてできた形になっています。「海空技術調査会」と自民党の関係、同調査会の主張が自民党の意見に与えた影響等についてお願いします。同調査会は保科善四郎氏が中心だったと思いますが、それで自民党とのパイプが太いということでしょうか。
- ⑨ 昭和 32 年 6 月、一次防が国防会議で決定されます。この具体的な経緯や策定方針等についてお願いします。
- ⑩ 昭和 33 年、米国大使館に参事官として赴任されます。この経緯をお願いします。

汝の敵を愛せよ

——社会党対策

伊藤 海原先生は、海原清平と似ておられますか。

海原 さあ、それは私に聞かれても困りますが、顔は似ていないんです。伯父の顔はでこぼこしているでしょう。私は割とするつとした顔をしているんです。昔の話になりますが、伯父が「こんないでこぼこした顔になってるから、女にもてないんだ」と言った、という話を最初にしましたよ。

伊藤 彼は共立学園の理事もやっておられるんですね。

海原 やっておりますね。

伊藤 僕はいま『鳩山日記』を編集してまして、後の方は薫さんの日記なんです。その前々からずっと、「海原、海原」と出てくるわけですね。それで今度は共立学園の人としても出てくるので、これは同一人物であろうかと思つて、共立の歴史を見ましたら、ちゃんと海原清平が出てきました。

海原 娘が三人います、それが全部共立を卒業したものだから。それはもう鳩山さんとの縁なんです。いろいろありましてね。

伊藤 では、本題に入りますよ。

海原 いや、本題よりもそういう話の方が楽しいんですけどね。

伊藤 それは、間で時間をとりますから。

海原 そうですか。この前、「郷土防衛隊」の案を四つ紹介しましたね。あれが最終的に要項案としてまとまったものがあるんです。これ

もご参考になるものだからお渡しします。「郷土防衛隊設置要綱案(三〇・一〇・一八)」を示す」。一応日にちも入っていますね。あの四案について、最終的にはこうなったわけです。まじめに大臣が良いことを言ったわけですから、やろうとしたんです。それは陸上自衛隊のもですがね。それで私は、いいことを言うと思つて、本当にその通りだと思つて、ずっと彼の言うことを受け継いでいるわけです。

これは日本新聞協会です。「読売新聞」昭和四十七年十二月十七日／見出し「自衛隊では不十分、歩兵」国民組織で」を示す」。国防会議事務局長を辞める前です。アメリカに行つて四次防の説明をして帰つて来て、それで新聞協会に頼まれて話したんです。その時もこう言つたわけです。

佐道 海原先生の「上記新聞に載っている」お顔が何かちよつと違つような感じですね。

海原 いろいろあるんです。顔は、もうとにかく憎らしいような顔ですね。新聞は適当に使うんですね。しよつちゅう撮られていますから。

伊藤 同一人物と断定するのは難しいですね(笑い)。

海原 そんなことを言う奴の顔はこうなんですよ。しかし、私はこの前も言いましたように、いいことだから誰かが受け継げばいいでしょう。砂田さんも、船田さんもやると言つて、その二人がいなくなつたら、もう誰も言わないんです。それが政治家ですね。私はこれはいかにということ、ずっと言い続けているんです。私だけでしょう、こんなことを言っているのは。だから誰にも相手にされない。余計にこちらは腹が立つものだから、ごまめの歯ざしりをやっています。

伊藤 この前は一課長時代の防衛力整備計画の話で、そして最後は岸さんが渡米する時の話でしたね。

海原 その話を今日することになっているんです。

伊藤 そうですね。その前に、重光さんがアメリカに行かれた時も、先生が計画を作られたというお話でしたね。

海原 それは、同じものを適当にやっているといるんです。ご説明しないといけませんね。

伊藤 では一次防ですか。その話から伺いましょうか。

海原 これは読売の堂場君の本に出ているんです。「資料を渡す」。誰から誰に渡ったと書いてあるでしょう。「防衛力整備計画案の米側への提示状況」。私は作る方で、何次案となっていますけれども、中をちよつといじっているだけのことなんです。それは誰かがこういうふう整理したものですから、第何次案となる。見ていただくと、目標はほとんど変わらないでしょう。ですから、重光さんは行く時に持って行ったし、それから増原さんが渡している。最初にリτζジウエーに渡したとかあるんですね。それからロバートソン、これも私は知らないですよ。それから「防衛庁から米大使館へ」と書いてあるのもわかりませんね。それから増原次長が行った。そういうことで、同じ案を、ちよつと小手先で内容を変えたようなものを、みんなが適当に持って行っているんですよ。それらを全部整理したのが、今日、これからお話しする第一次防衛力整備計画になるわけです。

伊藤 ずっと継続していたんですか。

海原 大体同じものですね。それを時々、例えば陸・海・空のそれぞれが、この部隊をこうしたいと言うでしょう、それで手直しをするわけです。それが何次案となるわけです。そんなものは、こっちは考えていないんですけれどもね。よく調べる人がいて、そういうふうになっているわけですね。だから、みんな内容は同じなんです。

私は警視庁で婦人警察官を預かったでしょう、交通課長で。婦人警官をつくったのは私の前任者ですが。それで、私の時にいろいろ活用したんですが、その時に調べてみたんです。男性の中に女性が何人いたら効率がいいか、大学の先生に調べてもらったんです。男性六人の中に一人女性が入ればいいんです。ところが女性が二人になると、男が分かれるのだそうです。そういうのも調べたんです。私は警視庁で婦人警察官のお世話になったし、それから防衛庁では私が言い出して、婦人自衛官をつくったんですからね。六人のうちに一人女性がいるのが、ちよつと能率がいいそうです。調べて下さい。

伊藤 ちゃんと計画しまして（笑い）。

海原 女性がいないと、男はもう野郎どもで、みんな不法になるんです。女性が入っていると牽制する。やはり女にもてたいと思うんでしょうね。

伊藤 それはいい教訓です。

海原 いい教訓です、何かご参考までに。郷土防衛隊関係の資料はそういうことで「前記資料を渡す」、一応要項としてまとめたということです。しかし、砂田さんはすぐ辞められたし、それから船田さんが、後は俺が継ぐと言ったけれども、やらなかったということです。

ついでに、この前私が社会党と親しかったという話をしたら、「左翼ですか」と言われた。だから、これをご覧ください「『朝雲新聞』平成六年十一月三日／見出し「首相のシルクハット」を配る」。そう言えば左翼ですね。だって、ずっと私は社会党と付き合っていたわけですから。法案を通そうと思うと、与党は駄目なんです。社会党に行かなければ。

与党が社会党と話をつけないといけないでしょう。それはやって

くれないですよ。それは後で読んでいただければわかりますけれども、なかなか面白いこともあるんですよ。私は今の横路さんのお父さん、横路節雄さんとも親しかつたし、いろいろとお世話になりました。

伊藤 そのようなきつかけは何ですか。

海原 きつかけと言われましても、これまた長いんですけれども、私はそもそも敵をもうけない主義なんです。もし敵があったとすれば、その敵を中立にする、中立を味方にする。それが必要だと。

伊藤 それは政治の要諦ですね。

海原 そういうことを私は防衛庁で「制服」の諸君に説いたんです。ところが行った時は、まさに保安庁の連中、特に「制服」が、社会党は敵だ、と思っているでしょう。敵ならそれを味方にしないといけない。味方にする前に、まず中立にする。中立の時に引き込む。そういうことが必要なんだと。

それも一つの例で言いますと、学術会議が南極観測に行くでしょう。あの船を海上自衛隊でやってくれというふうになった。それで、どうするかということになった。そうすると幹部会議では海幕が絶対反対なんです。「特に学者の連中のうるさいのが揃っている。学術会議は『左』の集まりだ。そんな奴に協力するのは絶対に反対である」という意見ですよ。私は「間違っている」と言っただけです、「もし仮にあなたが言うように、先生方が全部左翼なら、その先生方と付き合うことが必要だ。それで、南極観測のための往復の船に、海上自衛隊も乗ってもらおう。それによってお互いが知り合うわけだ。そのことが大事なんだ。政府の行くべき時はないから、海上自衛隊のみんなで行くわけだ。当然やるべきだ。歓迎すべきである」と、中で言ったんです。そうしたら、しぶしぶ賛成した。それからずっと良くなったんです。

そういうことですね。私が行った頃、保安隊、警備隊はとにかく「社会党は敵」でしたよ。

伊藤 でも、そういうところの課長さんや何かが、ひよこひよここと社会党へ行ったら、社会党の方はあまり喜んで受け入れてくれるような感じではないでしょう。

海原 それはどう言うんでしょうか。間に一人、仲を取り持ってくれた人がいるんです。それは横路節雄さんの秘書です。辻さんという人で、今でも付き合っています。彼は中央大学を出て、すぐ社会党に入った人です。それで、横路さんが予算委員会で質問するでしょう。必ずそのすぐ後から、資料を持ってついてくる若い人がいるんです。あれは誰だということ調べたら、横路さんの秘書だった。いつペン会いたいということ出会ったら、これはなかなかいける人だ。中央大学の法学部を出て、すぐ秘書になった。それからいろいろと話をしていたわけです。そういうことになると、またいろいろと話があるんです。

伊藤 それから、だんだん人脈を広げていくことですか。

海原 そうです。私はクリスチャンでない、仏教徒であるけれども、汝の敵を愛せよだ、と言った覚えがあります。先ほど言いましたように、敵を中立にする、中立から味方にする、そういうことが大きな戦略じゃないか。あなた方幕僚はそういう戦術、戦略をやる立場ではないか。第一線の部隊長はそんなことはいいけれど、少なくとも中央で物を考える幕僚というのは、そういう物の考え方をすべきではないか、と言っただけです。そうしたら黙っちゃったですね。

伊藤 この前、不思議に思っていたことがよくわかりました。

海原 そうですね。その横路さんの秘書の辻君なんていうのは、先ほ

ど言いましたように、今でも付き合っています。その話が出ましたからついでに言いますと、横路節雄さんが亡くなったでしょう。亡くなった日にすぐに辻君から電話がかかってきました。実は横路が倒れました。それですぐ青山墓地のそばの議員会館に行っただけです。もうその時はお葬式の用意もされかかっていましたけれどもね。そんなことで、後はどうするかということを見ていたんです。当然私は、横路先生の秘書の辻君は若くて優秀な人ですから、社会党の書記局で働くと思っていました。彼もそれを期待していた。社会党書記局で働きたいと。

これから皆さんの知らない話ですけれども、そうしたら、当時石橋(政嗣)さんが後の面倒を見ていたんですね。書記長ですか。そうしたら社会党の長老方が四、五人、「辻君、君のことは面倒見る」と言っただけです。「君はぜひぶん今まで社会党のために尽くしてくれ。横路さんが亡くなったから、これから先どうするかいろいろ考えるだろうけれども、われわれが面倒見る」と言っただけです。それがあつたのだから、辻君は書記局で働きたいと言っただけです。そうしたら初めは「わかった」と言った。ところが二、三日して呼び出されて行ったら、「辻君、君に書記局で働いてもらおうと思っただけでも、内規があつて、君の年齢では二歳か三歳超過している。だから残念ながら書記局では働けない」と言うんですね。内規ですよ。そんなものは、二つや三つ超過したって、「お前の面倒見る」と言っているんだから面倒見ればいでしょうが。それで、さすがに辻君もがっかりしたんですね。それで、愛想を尽かしちゃった。

その前に私が「君、横路さんが亡くなった後、どこかいいところに行くかどうかけれども、切羽詰まったら僕が就職先をお世話する」と言

つてあつた。これは社会党の書記局が反対したんですね。当時は「左」の方が多かったから。横路さんというのは、どちらかと言えば中立か右寄り。辻が入って来ると書記局がガラッと変わるだろうということ、抵抗があつたわけですね。その抵抗が石橋さんの口を通じて、内規の年齢超過ということになったんです。そういうことなんです、世の中は。あの社会党ですら。

伊藤 「ですら」じゃなくて、社会党「だから」じゃないですか。

海原 さすがにその人の物の見方ですよ。伊藤先生もそうおっしゃいますか。私も「だから」だと思いましたが。それで、私が辻君の就職の面倒を見るんですがね。この話をしているいいですか。

私は国際興業の小佐野君は昔から知っていました。私と同じ年のものですから。それから小佐野君の秘書をしているのが私の中学の同期で、優秀な友人ですから、小佐野に頼もうと思つた。小佐野君のところへ行つて、ついてはこういうことで横路さんの秘書を何かに使ってくれと言つたら、小佐野君ははつきりと、「私は代議士の秘書は方針として使わない。それはあなたの言うことだから聞きたいけれども、大体政治家の秘書にろくな奴はいない。変に、政治家の親分の動きを見ていて、その親分の小型のようになるとするのが多い。方針として一切、誰から頼まれても、例えば金丸さんから頼まれても、代議士の秘書は面倒見ない」と、こう言うんです。「そうか。それはもう君の方針だからしょうがない」と。

そこで私も困つたなあ、と思つた。辻君の奥さんの里もいいんですよ。だから別に食うに困らないんですけども、やはり何か働きたいと言う。そこで考えたら、小坂徳三郎君がいた。彼も死にましたけれどもね。徳さんは朝日新聞の出身でしょう。若手で活躍していました。

あれはいろいろな団体を持っていましたから、徳さんのいろいろな関係している団体の中で使ってくれんかという話をしたんです。そうしたら彼はすぐに「わかった」ということでした。それで小坂君のところのどこかの団体、いろいろありますけれども、辻君の好むところで働かそうということになった。

その話が決まった二、三日後に小坂君から電話が来まして、「実は私はあなたに話をした時には政治の世界に行く気はなかった。ところが、どうしても政界に出ろということになって、出ることを決心したんだ。ついでには、自分の周りにはそういう選挙運動をやった奴がいな」と言うんです。それはそうですね。小坂家の財閥のお坊ちゃんだから。「ついでには、辻君を私の選挙運動に使っていいか」という電話があった。「それはあんたと辻君との話し合いであって、私はとにかくあなたに何か面倒見てくれと頼んだんだから、いちいち僕に了解を取ることにゃない。しかし社会党の横路さんの秘書をしたのが、自由党・保守党の小坂の選挙運動というのは複雑だな。しかし、それはもう本人の判断次第だ。僕は喜んで賛成する」と言ったんです。そうしたら小坂が口説いたんですね。そうして辻君が賛成した。最初に小坂が出た時には、辻君が全部やっただけです。彼は仏所護念会とか、いろいろ宗教団体とも関係があるんです。だから最初の選挙の時、東京からの選挙を仕切ったのは辻君なんです。そんな経緯があるんです。これはまだ後があるんです。いまだに私と辻君との交際は続いているんです。

伊藤 そこで、もう社会党との関係は切れちゃったということですか。

海原 もちろんそうです。もうちよつと言いますと、無事に小坂が当選するでしょう。その後で辻君から電話がかかってきた。ちよつとお

話したいと言うので、新橋の、私の馴染みのおでん屋で会った。そうしたら、「海原さん、あなたが言われたから私は小坂の選挙運動をやった。当選した」と。ところが当選したら、一族郎党の中から「俺が、俺が」というのが出てくるんですね。「私は選挙を仕切った以上は彼の秘書でやりたいと思った。ところが、どうもそれはしないようだ。ついでには、当選したんだから、もうこれで彼との縁を切りたい」と言っただけです。

それは考え違いだったんですよ。「君が社会党の横路さんの秘書だったのはみんな知っている。小坂の運動をしたことも知っている。それで小坂が当選した。それでも誰も文句を言わないのは、「社会党が」俺の方では採用しないと内規を使って断ったからだ。だから、社会党の連中から君に対しての悪口が出ないんだ。しかし、仮に君が小坂の議員秘書になってバツジをつけたら駄目だ。それはもう裏切り者と言われる。ならない方がいいんだ。この際、君は代議士の秘書になるようなことはせずに、一切政治とは手を切れ」と言っただけで、おでん屋で彼に訓戒を垂れたんです。そうしたら「わかりました」ということになった。

その後、信越化学の会社の方で働いて、しかも半導体の方の権威になっちゃった。今もそっちの方で結構やっていますけれどもね。そんな経緯があるんです。ですから、社会党と私との関係というのは曰く言い難いところがあるかも知れませんね。

だからこの前も言いましたように、増田さんが「防衛庁長官に」なった時に私が石橋さんのところへ頼みに行つて、「あれは頭が固い人だから」と言っただけ。そういうことをよくやっていたんですよ。私が思っているのは、社会党のおかげで自衛隊もここまで来れたんだと。そ

んなものですよ。

そこへ書いておきましたけれども、陸上自衛隊がホークを入れたでしょう。その前の年ですか、アメリカのエリコンというミサイルを横浜に陸揚げする時に大騒ぎしたんです、地区の委員会が。また同じことをやられては困るなど思った。今度は北海道ですけれどもね。それで、私は石橋さんには話しませんよ。横路さんと辻君の二人を、昔は中洲と言えば皆さん知っていた料亭街があるんです。そこに小さな料亭があるんですけども、そこで三人で食事をしまして、「実は今度自衛隊でホークを配置する。この前もアメリカから同じようなミサイルが来た時、大騒ぎだった。ホークの大事な部分は空輸する。後の関連資材は船で送る。ついでには、くだらない反対運動なんかがないように考えてもらいたい」と頼んだんです。そうしたら「わかった」と言う。横路さんは北海道でしょう。大事な機材は輸送機で送ったでしょう。後で船が着くわけです。苫小牧ですか。その苫小牧に船が着いた時には、地区の委員長がいらないんです。それは横路さんが指示して、どこかに出張しちやっただんです。だからデモも何もなし。まあ、そういうような経緯があるわけです。そんなことを話していると、もういろいろありますから。

伊藤 面白いですよ。

佐道 こういうところに真実があるんですね。

海原 そういうことがあります。私は書いたことがあります。世の中には案外表でお考えになるようなことでなしに、いろいろ、人と人とのつながりというのがありますね。

伊藤 そうですね。最後はやはり人と人のつながりですね。

海原 そういものでしょうね。もちろんプラスとマイナスがあります

すけれどもね。

そこで今日の予めいただいた問題点を申し上げますけれども、まず岸さんが行く前に国防の基本方針ですね。それから第一次防を決めました。この関係で、この読売新聞の『再軍備の軌跡』という本はありますか。『再軍備の軌跡』四〇八〜四一五ページのコピーを渡す。これに載っています。これは割によく取材しています。というのは、当時私はまだ防衛庁ですから。国防会議の事務局でどういう審議をしたか、国防会議でそれぞれ大臣方がどんな発言をしたかということが結構出ているんですね。

伊藤 これは取材されたんですね。

海原 これは特別に読売新聞が班を作ったんですね。

伊藤 そして海原さんにも取材が来たんですね。

海原 私にも一応来ました。しかし、その国防会議事務局というか、それから国防会議で誰がどういう発言をしたかということについては、私はこの本を見て、ああこんなことだったのかと思うわけです。三枚目「四一二ページ」ですね、「民主主義しきりに強調」と書いてあるでしょう。これは国防会議では、私も後で事務局長をしたからわかるんですけども、要旨の議事録があるんです。速記じゃない、要旨議事録というのがある。これは「ない」ということになっているんです。これは私がいる時に見たんですからね。仮にも国防会議だから、そこでどういことがあったのか、それはきちんと整理しておけないこととで、私の時に作らせた。ただし、それはあくまで秘密にしないといけないから、表向きは「ない」と言えと。ただし事務局には、少なくとも要旨があつて然るべきだろうということ、これはまあ参事官会議で決めただすけれども。これが細かく出ているんです、誰と誰が

どう言ったということが。

伊藤 それが出たということですね。

海原 そういうことですね。日本の国防については、この『再軍備の軌跡』で読売新聞の連中が調べたんですね。

伊藤 この本の海原さんの顔もまた全然違いますね。

海原 修正もしてありますしね。いろいろなボケた顔もありますしね。

佐道 眉毛が怒っておられるようですね。

海原 私は眉毛がないものだから、これは修正して描くんです。こういう写真の時には。

伊藤 それだけでもずいぶん違った感じになるんですね。

海原 なかなかいい写真は載せませんよ。載せてもらいたいですけれども駄目ですね。そういうことで、これを読んでいただくとはわかりますが、国防会議の国防の方針というのは、大臣方が最後は決められる。私たちが作るのはいき台ですからね。それほど、ああでもない、こうでもない、とか言わなかった。

ただし一つだけ注意したのは「独立」「平和」という言葉で、「平和と独立」にするか、どうするかということが実は問題になるわけです。なぜか。当時共産党の機関誌が『独立と平和』だったんですね。だから「独立と平和」と書くと、共産党と同じ表現になってしまう。だからこの二つの熟語を使うにしても「平和と独立」にすべきだとか、そんなことですよ。役人どものやることは。「独平」と出たら、共産党の連中がどう思うか。けしからんと言うかも知れないしね。そんな話があるんですよ。そういうことしか覚えていませんね。後はこの読売新聞特別取材班の方が詳しいわけで、よく書いてあるなと思います。

この国防方針を決めて、第一次の整備計画を決めて、これを持って

岸さんがアメリカに行くわけですね。そうしないと、これから日本はどうするんだという時に、今までは全部、先ほどお見せしましたようにいろいろな案ばかり言っていたわけでしょう。それでは駄目だと。今度は総理が行くんだし、私の内閣でこういうことをやります、ということを引きちんとやらないといけない。それが当時の政治の要請でしたね。それで、国防の基本方針、それから第一次の防衛力整備計画、この二つができたということでしょうね。

その第一次の計画については、国防会議の成立が遅かったものから、はじめは五年計画にしていたんですが、結局三年計画になるわけです。それを持って行ったわけです。それで私が「アメリカに」残った。

伊藤 それは最初からそういうふうなことで行くわけですか。先生が残る、ということ。

海原 そうです。岸さんが国防の基本方針と一次防と、この二つを持って行って、アメリカに、日本はこうしますと言うわけですね。それについては後でお話ししようと思っただけですけども、ダレスとの会談の時に、「この計画の内容については、防衛庁から海原課長が来ている。これを置いて行くから、彼から話を聞いてくれ」となるわけです。それで残るんです。

伊藤 行く時から、そういう命令で行くわけですか。

海原 もちろんそうです。もちろん外務省からも付いて行きますけれどもね。ですから、あの時の岸さんの渡米の目的につきましては、結局細かいところは全部私が説明したということになるわけです。それが要するに当時の私の任務でしたね。

伊藤 岸さんとは……。

海原 別にどうということはないですね。

伊藤 その時はいろいろお話しになったわけでしょう。

海原 いや、別に何も話しません。「あとは君、よろしく頼むよ」ということですよ。

伊藤 その場合、彼は個人的に「ちょっと」ということは何もありませんか。

海原 何もありませんね。前にもお話ししたと思いますけれども、私はなるべくそういう政治家には接触しない態度を取っていましたからね。

伊藤 さっきの社会党との話も、あれは政治家だと思えますけれどもね(笑い)。

海原 野党ですから。私は、野党つまり汝の敵を愛せよ、と言っているんですよ。クリスチャンじゃないけれども、敵を味方に、ということが私の大方針なんです。味方の連中と、いくらああたこうだと言ってもしょうがない。あの頃は対立していますからね。そういうことで、表では対立していても、その実は、ということを私は『朝雲新聞』の「首相のシルクハット」に書いたんですけれどもね。まあ、その頃のことを言い出しますと切りがないんですけれども、大雑把に言いますとそういうことです。

伊藤 それはさっきお話しになられました、それまでのものとは大きく変わらない。

海原 変わりませんね。特に国防の基本方針については大体言いましたが、一次防につきましては最初は長期防衛五カ年計画、これは保安庁の時からやっていますね。それを途中でぶった切ったわけです。

伊藤 それを三年にした、ということですね。

海原 そういうことです。国防会議ができるのが遅れましたね。そ

れで、当初の五年計画を三年計画にしたということです。内容的には変わっておりません。三年で一応終わったということですね。

伊藤 これは海原先生、どうですか。本当にこの内閣でやるんだぞということで、作文ではないわけですね。

海原 はい、そういうことですね。ちょうどそういう、日本語にはずいぶんいい表現がありますが、「気運」ですね。こういう情勢になったなということですから、だから、この際一気に決めるんだ、ということですね。

伊藤 その前の段階は、やっぱり作文みたいなものですか。

海原 それは一応用意してあったんですが、あれに書いてありましたでしょう。木村さんが九州で放言したとか何とかということ。内容はあれですよ。だから、あったものを三年計画にしてまとめてやっただけなんです。

国防の基本方針の原案を作る

牧原 『再軍備の軌跡』を拝見しているんですが、四〇九ページの左側のところなんですけれども、この基本方針の原案、これが十月八日というのは、昭和三十一年の十月ですよ。ですから、この段階ではまだ鳩山内閣ですか？

海原 この原案は、まず用意しろというから、私が書いたんです。

牧原 これは内閣とは関係なく、ですか。

海原 関係なしです。

牧原 どういう形でこれを決めるんですか。

海原 これは国防会議で決めるについては、やはり防衛庁が叩き台を出せと言う。叩き台となると、私になる。それで、私がここに書きましたように「原案が、防衛庁案として提出された」と。これはもう簡単なものです。こういうものはみんな、いろいろな意見を言う人がいますからね。どうせ上には次官がいる、大臣がいる、最後は国防会議で総理の下で決める。だから、叩き台です。文章となると、いろいろな言う人がいるんですよ。だから、とにかく何か用意しなければいけない。だから、どうでもいいようなものを作るといっておかしいけれども、そういう叩き台を私書いたということです。

牧原 ですから、この段階ではまだ岸訪米とかは関係なくて、内閣が岸内閣になって、訪米ということが具体的に出てきた段階でそれをお出しになったと。

海原 そうです。おっしゃるとおりです。これは十月ですからね。だから、とにかくそういうものを決めるんだという方向ではあったわけです。だから岸さんがなって、あれはいつ決めたか、ちよつとそこは知りませんが、訪米の材料になったんですね。もう早く決めなくてはいけないということになって、話が進んでいた。そこへちよつと岸さんが乗って来たということでしょうね。

それから長期計画につきましても、いろいろな人が渡したり、まだ案の段階のものを、案であるけれどもこういうことをやっているんだぞということ、向こうに知ってもらおうということでしょうね。だからいづれ、こういうふうな正式に決まるけれども、何も考えていないわけではない、日本ではやっているんだと言うために、それだけ

いろいろな人が持って行ったんでしよう。私も、それだけ持って行ったというのは実は知らなかったですよ。こっちは前にも申し上げましたけれども、政治的なことには関係なかったですからね。たまたまちよつと、その時期が良かったということでしょうね。それしか言えませんが、岸さんが行くからといってやったわけではないんです。誰が総理であろうが、今の日米関係においてはそういう段階が必要であるという認識を持っていたわけです。それで、日米安保条約でしょう。安保体制というのはどうするんだ、一体何になるか、ということですよ。

ちよつどいい質問いただいたんですが、実はこういうのを作った良かったなと思えました。それは岸訪米の話ですが、これは文部省の例の教材にも書いておきました。要するに向こうとの会議の席上で、ぴしゃつとアメリカの方が言った。その時は、ダレスが真ん中で、隣に統合参謀本部議長の、ラドフォード海軍大將がいるわけです。その当時、日本国内では岸の外交を「両岸外交」と一般的に言っていた。それで、前にも言いましたが、岸さんは雑誌に「両岸外交の名手」と書かれた。そういう時代です。だから、そういう背景をまず知っていただきたい。

まずダレスのところの会見では、ダレスから言われて、ラドフォード統合参謀本部議長が現在の世界の情勢を説明すると言いました。大きな地図が用意してありましたが、その地図を基にして、ヨーロッパはどうだ、アジアはどうだと説明するわけです。それが一応終わったあとで、話が始まるわけです。岸さんはアメリカ側の発言については通訳は要らない。英語もできてわかるから。ヒヤリングはいいんだ。しかし、日本側の主張については通訳を入れるということで、アメリカ側の発言は全部英語だけなんです。だから私は、付いて行った代議

士さん方がわかるかということをお心配したですけれどもね。そうなっちゃった。

伊藤 日本側はどういう方々ですか。

海原 そっち「テーブルの向かい側」に米側が座っているわけです。こっちに日本側が座っているんです。私なんかは随行員ですから、その後ろです。壁の下の椅子に腰掛けていた。そこに、町村さんなんかがいるわけです。

伊藤 その前はどんな構成なんですか。

海原 前は岸さん、それから官房長官の石田博英とか、それから千葉局長とか、そういうのが座っている。私たち随行員はテーブルから離れた壁側の席に座っているわけです。随行代議士もそうです。だから、こっち側「ダレスと岸さんが向い合っていて、ダレスの隣」に海軍大将のラドフォードが座っている。

伊藤 そうすると海原さんは岸さんの後ろですか。

海原 ちょうど岸さんの真後ろでメモを取っておりました。外務省の課長もちょうど私の横にいて、メモを取ってましたね。それで、始まるわけです。前の日に岸さんはアイゼンハワー（アイク）とゴルフをやっているでしょう。だから、そこでもちよつと話があつたんでしようね。そういうことを、ちらつと言っていました。「きのうミスター岸は大統領と一緒にゴルフをされて、いろいろな話もされた。それはそれとして」ということで、始まるわけです。そして世界情勢の説明をラドフォードがやるわけです、地図を前にして。その時の言葉で私が記憶しているのは、「いまアメリカはこれらの国と同盟条約を結んでいる。言えることはアメリカと同盟条約を結んだ国は、どの一つも決して困った立場には立っていない。すべてうまく行っている」と

言ったことです。

それから日本のことになるわけです。前にもお話ししましたが、「ところで現在の日本は、諸情勢を総合するに、ヤンキー・ゴー・ホームということが非常に高く言われている。（問題はその後です）。ところで、もしヤンキー・ゴー・ホームというのが日本国民の総意であるならば、今日この席でそれをはっきり言ってもらいたい」と言うんですね。「私も日本と仲良くしたいと思っている。日本を頼みにしたいと思っている。しかし歓迎されたいところにはいたくない。だからヤンキー・ゴー・ホームが日本の総意、日本国民の気持であるならば、ここで言ってくれ」と言うんですね。「そうしたら、明日、全米軍が引き揚げる」と言うんです。「We would withdraw.」言いました。びっくりしたですよ、それは驚きますね。

さあ私は、これに対して岸さん、どう言うだろうかと思った。後ろにいますから、顔は見えませんが、書くのをやめてじつと見ていたんです。その時私が、岸さんはさすがだと思ったのは、やはり「歌舞伎」ですね。一言も返事しない。黙っている。ラドフォードはそこ「岸の斜め前の席」でしょう。ラドフォードがそういうことを言ったことはわかっているわけでしょう。じつとダレスさんの顔を見ているんです。それで何分ぐらい経ったですかね。ずいぶん長いような気がしましたけれどもね。しかし気持ですから、実際には二、三分かも知れませんがね。何か、五分以上も経ったような気がする。一言も言わない。そうしたら、さすがにダレスです。もうその話はやめまして、次の話題に入った。

これが私は岸さん訪米の時の、そういう意味ではクライマックスだと思えました。それで、私たちが話をして終わった後で、まだ岸さん

は残りまして、岸さんと千葉局長、それから向こうはダレスが残って話していたですかね。私たちは全然もう関係なしです。だから、その後で何があったかはわからない。

くどいようですが、それが岸・ダレス会談のクライマックスでしたね。「ここで言え」と言うんですね。「ヤンキー・ゴー・ホーム、それが日本人の総意であるならば、今、この席で言ってもらいたい。そうしたら、明日、全米軍は引き揚げる」。そう言わせているんです、ダレスが。はあ、と思いましたね。私は初めて、そういう言葉が最高のポストの人によって言われるのを体験しましたよ。

さて、その次の問題がある。そういうことを発言したでしょう。私は控えたでしょう。これも前に言いましたが、正式の議事録を作る時には向こうからの申し入れで載っていないんです（笑い）。正式の議事録には、この大事なところは落ちていくんです。

伊藤 イレギュラーな発言なんですね（笑い）。

海原 どうですかね。みつともないんでしょね。言った方も言った方だから。向こうのメンツの問題なんですよ。後で、「しまった」と思ったのかも知れませんが。私は、むしろアメリカ側が「しまった」と思ったと思うんです。あんなこと言わんでもよかったです。それでおそらくアメリカ側が、その辺は知りませんが、頼み込んで、あれはひとつ正式の議事録からはカットさせていただきます。こっちはしようがない、結構ですということになるわけです。だから、正式の議事録に載っていないんです。しかし、それは私がちゃんと岸さんの後ろで聞いていてメモしているんですからね。そういうことがあった。

岸さんについてはいろいろな評価がありますけれども、この時の岸信介総理大臣は私は立派だと思いましたね。私ならどう言うかね。泡

を食って、「いや、そんなことない」と言うか、それとも、「いや、それは一部の報道である」とか、そういう言い訳はできませんけれどもね。一切言わない。ノー・エクスキューズ。これは、岸信介というのは政治家として相当なものだと思いましたが。私は吉田さんも池田さんもみな知っていますけれどもね。岸信介というのは「妖怪」というあだ名がつくぐらいで、巢鴨（プリズン）にも入っていましたね。いろいろな体験をしていますから。それは、そこら辺の今時出てきたような政治家とは違いますね。

好きか嫌いかと言えば、私は決して好きではないです、岸さんは。やり方が、もう少し明瞭であっていいと思うんですけどもね。あの人は満州国でもいろいろやりましたね、鮎川（義介）と組んで。とにかくできる人だったんでしょね。政治家・岸さんの横顔はその時初めて、ああ、と思った。そういうところですね。

だけど、ダレスもさすがですね。その問題はさりげなくスツと避けて、それで次の話題にいきましょうとやっつたんです。

ですから、これはその場におった者しかわからないでしょうね。しかも向こう側の言ったことは翻訳しませんからね。お供で来ていた代議士さんは知らないでしょうね、そういう外交であったことを。要するに政治家について、いろいろな人がいろいろなことを批評しますけれども、みんなそれぞれその時の断片しか見ていないと思うんです。だから全体的にどうだったと言われて、あれはどうだこうだと言るのは私は不可能だと思った。しかし、そういう批評家の言葉がまかり通っているのが今の日本じゃないですか。そういう意味では、やはり彼は立派でしたよ。

だから、例の安保反対で大騒ぎしている時に、結局最後は、岸と佐

藤と二人しか総理官邸に残らなかった。万一、ここへ殴り込んで来て
も、犬養さんの時みたいに暴徒が殴り込んで来て、ここで二人で死
のうじやないかと言ったというのは、多分本当でしょう。とにかく
なくなっちゃった、みんな。あれもひどいですね。本当に大騒ぎして
いるんだから、もつと家の子郎党が集まって来ていいでしょう。どう
いうものですかね。

それで、もう一度整理しますと、前から国防の基本方針とか、こう
いうものを決めなければいけないとか、それから第一次防をまとめた
ければいけないとか、という流れがあつて、その準備をしていた。そ
れがちやうど、時期が熟してできあがつて、それを持ってさつと岸さ
んが行ったということですね。だから、良かったわけです。

伊藤 その一次防の内容というのは、紙に描いた絵ではなくて……。

海原 はい。それまでに何回も渡していますから。もうできているわ
けです。それを持って行っただけです。

伊藤 かなり現実的なものだ、と海原先生ご自身も思われていまし
たか。

海原 思っていました。しかし、これも批判があるわけです。要する
に「陸」偏重であると。

佐道 一次防自体が「陸」偏重ということではなくて。

海原 全般的にですね。

佐道 ええ。

海原 それから、重光さんが携行した計画、これは要するに同じもの
をその都度手直ししたものを持って行っただけです。だから内容はほ
んど変わっていないです。だから、その中の手直しを少しずつやっ
ていたわけです。どの部隊ができるとかできないとかというようなこ

とです。ですから、これ「堂場氏の本」には、いろいろな人が持つて
行ったと書いてある。その内容はほとんど同じなんです。九分八厘ま
では同じですね。あとの二厘ぐらいちよつと手直ししているだけのこ
とで、目標はみんな同じでしょう。

佐道 一点だけ気になったのが、前回の終わりに、重光さんが携行し
た計画は先生ご自身が関与された、作ったとおっしゃいましたが、前
から、いわゆる制度調査会というのがありますよね。

海原 この前冒頭申し上げましたが、制度調査会は、私がこの問題を
取り上げてから、一切ノータッチ、全く関係なしです。あれはもう旧
帝国陸海軍軍人の希望がそのまま入っていますから、言うなれば「赤
城構想」と同じような考え方ですね。

佐道 あれも、それこそ六次案とか十次案とかありますけれども、相
当バリエーションがあつて、十次案とかになればなるほど、いわゆる
海原先生がお作りになった原案に近いような形になっていますよね。

海原 あれが、ですか。それがよくわからないんですよ。この前も申
し上げておりますけれども、あの人たちの好みでやっているわけでは
よう。だから、そういう外部の旧軍人さんの作った案というものとは
関係ないんだと。今ある、この姿でどうしたらいいかということをや
ろうとしたわけですから。しかし、旧軍人さんがそういうことをお
やりになったことについては、止める方法はないですね。だから、そ
れはそれでどうぞおやり下さいと。特に改進黨ですね。具体的には中
曾根君あたりが中心になっていろいろやっているわけです。それを
止める能力はもちろんないし、止めないでやらせた方がいいかも知れ
ない。それは吉田さんが私に言ったように、「それは今、芦田が一所
懸命言っているから、国防については芦田に言わせておくんだ。俺は

やらない」と。そこですよ。ああそうかとわかっていますから、こつちもその調子です。だから改進黨系や旧陸海軍の軍人さん方の団体、それから経団連などが、いろいろなことをやっていることは知っていました。しかし、それを私はいちいち何をやっているんだとは聞きもしないし、「そんなことをやるな」とも言いませんし、「どうぞおやり下さい」ですよ。

伊藤 応援団ですか。

海原 応援団ではありません。応援団にもなりませんね。「どうしますか」と、私は官房長の上村さんにも言いましたよ。そうしたら、「あれはやらしておけばいいよ」と言っていた。「そうですな」と言っている。

伊藤 そうですか。「ガス抜き」みたいなものですか。

海原 そうそう。また、それがその当時のあの人たちの楽しみだったんですから。

伊藤 生き甲斐ですね。

海原 もう生き甲斐ですよ。それで国防会議事務局を大きくして、二百人が三百人にして、そこへ俺たちは行くんだ、それで戦後の防衛体制は俺たちがつくるんだ、そう思っているんですからね。そんなことはできませんよ、と言う必要ないでしょう。いや、できるかも知れませんけれども。そういうことです。だから、非常にくだいようですけれども、またずるいようですけれども、「どうぞご自由に」ですよ。だから、お前は関係しているかと言われたら、何も関係していませんと。

佐道 ああいう動きとは別個にされたわけですか。

海原 はい。全く無関係です。そこでいろいろな批判が出るわけです。

私が作った第一次防衛力整備計画は「陸」偏重であるとかね。

佐道 これは制度調査会の資料にもあるんですけれども、改進黨系の案は「海」「空」偏重ではないか、ということですよ。

海原 それは私は知りませんね。私は全く無視しましたから。時々、そのやっている連中とは飲みましたよ。そこで、この間も申しましたけれども軍歌の競い合いをやるわけです。軍歌も歌えなくて何だ、ということですね。

佐道 防衛庁の中に、その制度調査会のお世話をしている人たちがいるわけですか。

海原 お世話というのは、それは調査課がやりましたからね。私は保安課長でやっていました。調査課の方で面倒見ていたわけです。それも「ガス抜き」ですよ。

佐道 その情報とかは？

海原 もちろん、そちらは内海君がやっていましたからね。「内海君、適当にやれよ」と言った。彼も心得たものです。そういうことです。だから、非常にずるいようですけれども、あの人たちも一所懸命ですから、それなりにやっていることを怒らせてはいけません。そんなものは駄目だと言ってもいけない。そこをほどほどにうまくやれよ、というところで、内海君がうまくやったわけですね。わが保安課長・海原治は、現にあるところの保安隊、警備隊をどうしていくか、そういうことしか頭がないんだ、ということの内海君はちゃんと心得ていましたからね。そういうことを言ったわけです。

そこで保安庁、防衛庁の合意があったかなかったかということですが、その合意が何を意味するか、ですね。

佐道 整備計画の重点をどこに置いていくかということ、防衛庁内、

保安庁内の合意はあったんでしようか。

海原 そこはこの間もご説明しましたが、まず第一に「陸」を整備して、ということになります。なぜか。理由が二つあります。一つはセイラーにしてもパイロットにしても養成に時間がかかるわけです。そのための期間、機会が必要ですね。ところが「陸」の方は昔は三カ月で一人前になったんです。「一期」の教育と言いますけれども、何も知らずに兵隊さんとして入って来て営門をくぐる。そして三カ月すると、そのまま戦場で使える。それは歩騎砲工輜重の時代ですからね。そんなもので簡単に、三カ月で一人前にするんだというのが「陸」ですね。「海」はそういうわけにはいけませんね。セイラーにしてもパイロットにしても、時間がかかりますね。だから、まず「陸」の方で一応きちんとしたものをつくらうと。それによってアメリカの陸軍、地上軍の撤退を求めよう。それは東京の周辺にアメリカの軍人がうろうろしているのは良くない、みつともない。これは一致しましたね。そこまでは一致しています。

しかし、外野がうるさいんですね。新聞記者諸君が、「陸」偏重であるとか言う。偏重でも何でもないんです。説明したらわかってくれるけれども、一度書きちゃったら、あれは間違っていましたとは絶対書かないですよ。「それはわかった、海原課長の言う通りだ」「それでは、あなた方は記事を取り消せ」「取り消しはできない」「修正は？」「それもできない」ということです。だから、最終的にバースと今の防衛庁、保安庁が考えている長期計画は「陸」偏重であるという活字が出たら、これはもう消えませぬ。それがずっと最後まで続いたということですね。

伊藤 それが「陸原」なんですね。

海原 はい。だから防衛庁の合意はあったかと言うと、これは合意はあったんですけども、そういう意味の合意ですね。何度も同じことを言いますが、昔の「空」と新しい「空」とでは意味が違うんですね。それは今はジェット戦闘機になっているでしょう。彼らが持っている知識は「〇〇式戦闘機」でしょう。違うんですよ。それは他の例で言いますと、最初に日本で国産飛行機を造りました。その時、川崎航空機の重役から私は直接聞いたんですけども、「やあ海原さん、アメリカのやり方を見てびっくりした」と言うんです。何かと言うと、日本では、川崎航空機は前から造っているでしょう。みんなそれぞれ熟練工がいて、その人の勘と経験でやるわけです。ところがアメリカでは要するに普通の教育、小学校を出た人がいたならば、皆が同じように作業できるように、ちゃんと初めに、ここに錨を打つか全部きちんとして決めているんですね。そういう「治具工具」です。治具は知らなかったですね、工具は知っています。治具を最初に用意するということを初めてアメリカで教わったと。それはアメリカはいっぱいいろいろな人が来ていますから、一応の学歴があれば誰でも同じように造れるように、きちんとそういう準備作業を徹底的にやる。

伊藤 それはマニュアル化ということですね。

海原 そういうことです。それがアメリカでした。日本はそうじゃない。みんな一種の名人芸みたいなもので、そういうものではなかったと言っていました。そういうことがありますから、もういっぺん整理しますと、要するにまず「陸」をきちんとして、アメリカの地上軍に帰ってもらおう。だから「海」と「空」は後だ、となるわけです。

伊藤 しかし、この段階だともう三カ月というわけにはいかないでしょう。

海原 それはいきませんね。それはいろいろあります。

伊藤 兵器も進歩しているしね。

海原 それでも、何が進歩しているかという、兵器そのものが進歩しているだけです。機関銃そのものは現に変わらないうちでしょう。だから、それを習得して使えるようになるのは同じようなものなんです。だって、要するに「陸」は何かと言ったら、歩騎砲工輜重ですよ、やることは。他に何かありますか。陸上抵抗力？ 何もありませんよ。だから歩兵、歩騎砲工輜重ですからね。やはり三、四カ月で一応できますね。しかし、水兵さんはそうはいかないでしょう。全部新しい機械に変わっていますしね。それから「空」となると、またパイロットとなると、これは大変なことですからね。

伊藤 これは向こうへ行つて訓練しなければならぬ。

海原 向こうへ行く前に、こっちで少しやっつけていかないといけないでしょう。向こうもいきなり「幼稚園」からやってくれるわけはありませんからね。そういう違いがあるから、どこから手を着けるかとなると、「陸」が先ですね。

それからもう一つ基本的には、私は日本の防衛力の統制を考えた場合、「陸」が絶対的だということを公言していました。その例として言うのは、フランスがナチス・ドイツに降伏したでしょう。あの時に、フランスの艦隊は健在だった。何十隻かあったんだけど、地上における抵抗力がなくなつたから、ペタン元帥が降伏したわけでしょう。その頃のことですからね。日本にどこかの敵が攻めて来る。それは要するに共産主義体制からの進軍である。ということは、政治体制の破壊を目的にしている。そうすると、それを守るのは何か。「海」じゃない、「空」じゃない、「陸」だ、となるわけですね。そういうこと

を、はつきり私は言っていました。だから私には、そういう意味では「陸」が絶対的なわけです。陸上抵抗力がなくなれば万事は終わりである、ということをお公に言っていました。それに対しては誰も反対しませんよ。

しかし、陰では「あの野郎」と言っている。そこで「あれは海原ではない、陸原だ」ということになる。それで私は甘んじて「俺は陸原だ」と言っていましたよ。私は、それを陸上幕僚監部の第三部長、昔の作戦部長ですね、彼に「私は『海』と『空』から評判が悪い。あいつは陸原だと言われているんだ」と言ったら、「とんでもない。私たちが『陸』は、あなたを陸原だと思つていません」と言われただけだね。そこで結論は、「陸海空治まらず」ということになる。「海原治」とはとんでもないと。これは実話です。

前にも言いましたが、「あれは海原ではない、陸原だ」と言い出したのは、私の一年下の堀田君です。人事局長に來ました。これまた防衛庁に來るについては、いろいろ経歴がありますからね。それがたまに新聞記者に、「あれは陸原だよ」と言つて、それがバーツと伝わつたんです。まあ、みんな一所懸命だったですね。私はそう言われても、別に何も思いませんでした。だから誰とでも私は話をしますよ。だから堂々と、ひとつ話し合い、論議をしましょうという態度は終始貫きました。

伊藤 それで、その陸上の兵力を増強する度合いに応じて、アメリカの地上部隊が撤退していくことになるわけですか。

海原 その最初は、この前も申しました北海道からの撤退ですね。

伊藤 そういう場合は、外交問題としてやるんですか。

海原 外交ではありませんね。防衛庁と米軍との話し合いです。そう

いうことをやるぞということは当時、安川君が外務省にいましたしね。同期で知り合いですから、全部話しています。正式に防衛庁から外務省への申し出というのではなしに、担当者同士の話し合いですね。それから大蔵省は村上孝太郎という有名な主計官がいて、これもわれわれと一緒になんです。だからそういう連中で話し合って、「こうしていくか」「うん、わかった」ということですね。いちいち防衛庁と外務省との話し合いとか、大蔵省との話し合いとか、そんなことありません。そんな時期ではないわけですからね。みんなが要するに一緒になって、物をつくりあげようという時ですから。さあ、どういうふうにつくるかということになってくると、いろいろと意見がありますけれども、最後はそうなりますね。

伊藤 今頃だったら、そうはいかないんでしょうね。

海原 でしょうね。ここまで来ますとね。昔と違って、私の知る限りですけれども、各省間のそういう話し合いはないようですね。何かもうきちんと、それぞれ決まっちゃっているんですね。

伊藤 非常に「縦割り」が強くなっちゃったんですね。

海原 その範囲内で動いている、ということのように感じますね。私たちの頃はそうじゃなかったと思うんですけどもね。いま言いましたように、外務省には安川がおる、大蔵省には村上がおる。電話一本で「おい、こうするぞ。どうだ」ということでやれますからね。通産省には赤沢君がいますしね。話の通りが割合早かったですね。今は、そういう関係がないようですね。やはりこれはある程度組織ができてきますと、それがいわゆる官僚組織になるんでしょうね。

米三軍を相手に長期計画を説明

伊藤 当時は、基地反対闘争がかなり盛んな時期ですね。

海原 そうです。これはこの前もご質問がありましたけれども、防衛庁は全然関係なしです。

伊藤 警察がやったんだと思いますが、米軍が引き揚げた基地をスムーズに自衛隊の駐屯地にするということは、結構難しかったんじゃないですか。

海原 必ずしもそうでもないですね。これは私はいろいろと折衝をさせられましたけれども、みんな一応知っているわけですよ。ですから、当時まだ「左」の方の勢力が強い、反対派が強いでしょう。だから新聞記者なんかが取材に行くと、反対と言いますけれども、じゃあ自衛隊が行かなくていいかという、実は困る。地域振興の関係もありますからね。そういうことがあるわけです。だから、新聞あるいは評論家のいろいろな記述と実際とはだいぶ違いますね。反対闘争と言っても、一応反対しますけれども、「実は……」ということがあつて、これは日本の社会ですから。

伊藤 やはり「歌舞伎」の世界ですか。

海原 それはありますね。だから何が本心なのか、どう伝えるかとなると、いざとなると、先ほど言われたように建前と本音みたいなことがありますね。例えば私の郷里、徳島に海上自衛隊の基地を置くについては全部反対です。最初は絶対反対。じゃあ、それはなくていいの

かとなる。私のところにも反対しに来ました。だから「海上自衛隊の基地を置いて飛行場を整備すれば、それは民間との共用もできるし、そうすれば阿波踊りにちゃんと大阪からも飛行機で来てくれるじゃないか」と言うと、「ああ、そうですね」となるわけですね。そういう話し合いが、それぞれについてあるわけです。だから勇ましく反対する連中が「基地反対」と言っているけれども、本当にそうかというところ、必ずしもそうじゃないんです。便宜的にそういう声を大きく声高にあげていても、「それで、いいか」と念を押すと、「うん、まあ、まあ」となる。それは「歌舞伎」ですよ。そう思います。それで、あちこち、昔軍がいたところとか、米軍がいたところへ部隊を置いていった。そういうしないと、新しいところには置けませんから。

それで、この間も申し上げたでしょう。後に防衛庁の大臣になる人が、絶対反対の陳情の先頭になって来たんですからね。その人は後で防衛庁長官になった時に、私は昔から防衛関係には理解を持っていたとか何とか言っているんですからね。世の中そんなものですよ。建前と本音のところではないですね、これは本当に。何枚舌かわからん、と私は言っているんです。

伊藤 それで、結局米軍が引き揚げて行きますね。当時のお考えとしては、いざという場合に、自衛隊とアメリカ陸軍の関係をどうするとお考えでしたか。

海原 これは、この前申し上げたでしょう。白河の線まで向こうが下がるということ。もともと日本陸軍が、日本の陸軍というのは陸上自衛隊のことですが、アメリカの陸軍と一緒にどうしようということとは考えていませんでしたね。まず、そういうことはないだろうと、私自身は思っていました。

伊藤 有事ということはない、ということですね。

海原 ええ、当分来ない。まず、基本的に米軍のいる日本を攻める国はない。これは大前提です。仮に攻めて来たらどうするか。一緒にやると言っても、こっちは訓練も何もしていないんですから。それは昔、満州に満軍というのがあったんです。関東軍があった。匪賊討伐なんかで一緒に行く場合があるんです。一番困るのは、一緒に行く時です。全然やり方が違うでしょう。

伊藤 でも満軍だって、日本式に訓練しているでしょう。

海原 それはまあそうですね、小学校の野球チームと大学の野球チームと一緒に混合チームを作るようなものですよ。そんなことは無理ですよ。そうでしたね。ですから、陸上自衛隊がアメリカの陸軍と一緒にどうしようかということ、少なくとも私の知る限り、一つもなかったですね。仮に共同作戦で共に戦うことになっても、それは場所を分けて戦う。それだけであって、同じ地域で並んでどうしようなんていうのは一回も考えなかったですね。そんなことはできないことだった。また「制服」の諸君にしてみても、そんな気持はなかったですね。

伊藤 実際問題として無理だということですか。

海原 そういうことですね。ですから「陸」偏重ということについては、先ほど申しましたようなことで、絶対そうではないんだということですね。

伊藤 やはりそれは、有事ということはない、という考えが非常に強かったということですか。

海原 それは、米軍がいる限り、ですね。日米安保体制の下で、国防の基本方針に決めたように。あの頃は、まだソ連の脅威がありました

からね。後でも出てきますけれども、のちに第三次世界大戦を危惧する声もいろいろ出てきましたし、それは目の前にそういうものがあるんですから、それに対してどうするか考えないといけない。ですけども、日本国内で米軍と一緒に戦うという考えは一つも出てきません。まず、そんなことを言う能力がこちらにはありませんからね。それはみんな知っていたようですね。さすがに景気のいい旧陸軍の軍人さんも、そんなことは言わないですよ。それよりも米軍に早く帰ってもらおうという気持が強かったですね。

伊藤 でもアメリカ陸軍が帰っちゃったら、海軍や空軍が残るわけですよ。

海原 そうですね。当分、海軍については基地の提供がありますね。こちらは海軍とは言えませんよ。沿岸警備隊だと言っていたんです、せいぜい当分の間は。みんなは気に入らんですよ。沿岸警備隊じゃないか、そんなもの。コーストガードだ。それでいいんだと言ったんです。それが、これもこの前申し上げた、「どぶさらい・小運送」になる。「どぶさらい・小運送」が嫌だと言って、じゃあ軍艦マーチを鳴らしてどこへ行くんだと言ったでしょう、私が。ここに問題があったわけです。しかし、事実上はそうですから、彼らにしてみても別に米海軍と一緒にどうこうするとは言わないでしょう。それはいいですよ。全然まだ初歩の段階でしょう。ですから、そういうことはなかったですね。あるとすれば「陸」ですけども、「陸」にしても武器が全然違う。だから、おっしゃったような点についての疑問といいますか、質疑応答みたいなことは全くなかったですね。

伊藤 有事が万が一あった場合には、要するにアメリカが戦ってくれと。

海原 ええ。そういうことですよ。アメリカがいる限りそういうことではないと。それはもうちゃんと先を見通しているわけですよ。万一あったとしても、それはもう「アメさん」にやってもらうよりしようがない。われわれにはそんな能力はない。当分持ち得ない。そういう点については合意がありましたね（笑い）。

伊藤 そうですか。じゃあアメリカ側は日本の自衛隊というものについて、どういうふうに認識していたとお考えですか。

海原 それは、いま伊藤さんのおっしゃった「アメリカ側」というのは難しいわけです。それはいろいろな人がいますから。私がワシントンでいろいろ説明してもわかるわけですけども、辞める直前ですが、「四次防」を私が決めて、アメリカで説明しました。そうしたら、二、三十名来ていて、その前で私は下手な英語で説明したんです。終わってから六人ばかりのジェネラルが来まして、「お前の説明は非常に明解であって、フランクであった。よくわかった。お前の言う通りだと思ふ。いい話を聞いた」と、みんなに握手されました。嬉しかったんですけどもね。それまでは、いろいろ景気のいいことばかり言っていたから。中曽根氏がその代表です。「今日の話は良かった」と言われましたよ。それで帰って来て、先ほどお話をしたようなこと「読売新聞、昭和四十七年十二月十七日の記事」をやったわけです。ですから、アメリカの方もそんなにオーバーな期待はなかったですね。向こうの方は、見て知っていますもの。オーバーな期待は、むしろ日本国内にあった。そう思います、私の体験では。

佐道 いろいろやり取りがある中で、「陸」はだいたい十八万人ぐらいいというのが固まってくわけですけども……。

海原 この十八万の根拠は実ははっきりしないんです。例の池田・口

パートソン会談でこつちが出して、その時に十八万と言った。そのくらいという感じもあつたでしょうね。十五万とか十八万とか。十五万ないし二十万程度じゃないでしょうか、最初漠然と考えたのは。それは徴集、応募の人員から言ひまして、その程度だろうと。それからここで申し上げておきたいのは、アメリカさんが三十二万五千とか三十四万八千とか言ひましたが、あれはアメリカ側が十の単位が必要だと言つたんです。テン・ユニット、それをアメリカ式に計算すると、一個師団三万二千五百ですから、そこで三十二万五千という数字が出たわけです。それが日本の新聞で独り歩きするわけです。これには困つたですけれども、ああいうのが出ると、もうしようがないですね。だから私が向こうに確かめたんですが、別に三十二万五千とか三十四万八千にどういう意味があると言ふのではないんです。少なくともテンのユニットが必要だと。そのユニットというのはディビジョンである、ここまでは私は確かめた。だから向こうさんが計算すれば、後藤田君の話にも出てきますけれども、死体冷凍中隊なわけです。そういうことなんです。ところが、その三十二万とか三十四万とかいうのは、テン・ユニット、ユニットはディビジョンであると。

伊藤 そのディビジョンは海外で戦争をする単位ですね。

海原 そういうことです。オーバーシーです。アメリカは「国内」ではないです。アメリカの外征部隊の師団の員数でもって掛けてあつたというだけです。それだけのことなんです。そういうことですから言ひますけれども、弾薬の計算の時にもアメリカの数字を使つてゐるんですよ。

この話はまだしなかつたですか。いずれまとめてしますけれども、池田総理の時です。国防会議の席上ですね。議員懇談会ですけれども。

ここで言いますと、国防会議で集まるでしょう。何かを決める時には国防会議なんです。それまでのいろいろな雑談、審議は全部議員懇談会ということにしているんです。だから議員懇談会でも国防会議でも内容は同じなんです。いわゆる国防会議、議員懇談会の席上で、当時、林敬三さんが統幕議長ですけれども、池田さんから「いま自衛隊はどれだけ戦えるか」という意味の質問があつた。そうしたら「はい、四十五日、ひと月半は戦えます」と林敬三さんが言つたんです。

私は聞いていてびっくりしたんですけれども、まあ、話をしていまして、間に入れないでしょう。それで、私は終わつて帰つて来てから、一カ月半、四十五日、どうやって戦うんだと調べたんです。弾はどれだけあるんだ、と聞いて、そこから話が発展するわけです。警察予備隊の時にアメリカから弾薬の基準について表をもらうわけです。基礎定数何発、それから戦闘に対して何発、戦闘備蓄と書いてある。そういう表をもらうんです。それで計算して四十五日ということなんです。ところが、その表はワシントンの補給用の表なんです。ワシントンで補給を考える場合の表なんというの、それからまだずっと先にあちこちに段階があるんです。自衛隊は第一線の部隊でしょう。そんなものを使うのは間違つてゐるんですよ。それを発見したのは私だけです。おかしい、どういう根拠で林統幕議長は四十五日戦うと言つたのか。その日量はいくらだ、それから戦闘予備と合わせていくらだ、それを調べてみた。そこが元機関銃手ですよ。何だ、こんなもの。どうして四十五日戦えるのか。そういうことなんです。それが、その頃のわが陸上自衛隊の幕僚の意識ですね。だから、まともに戦うということについての検討はしていません。

それからもう一つ例を言ひますと、これも私が発見したんですけれど

ども、よし、敵が攻めて来る。一体どのくらい、事前に艦砲射撃や爆弾投下があるんだと。何と五百トン以下ですよ。笑ったですよ。お前さん方、この前の戦争でサイパンとかあちこちで（戦闘が）あったけれども、どれだけの弾が使われているか、ちっとも参考にしないのかと。旅順と同じですよ。二百三高地の攻撃で、一メートルあたり兵隊が何人いるかというのと。そういうことでわかりますように、これは具体的な現実の戦闘行為を前提とした時に陸上部隊がどう動くか、海上部隊がどう動くか、ということとは一切関係ないです。

伊藤 先ほど一次防の内容が現実的なものであったかどうか伺いましたが、要するにそれだけは整備をすることであって、その整備をしたことによってどれだけ戦えるかということとはあまり関係ないということですね。

海原 あまりじゃなくて、全然関係ないですよ。それが、あとの二次計画の話にありますけれども、「赤城構想」というのがあって、あれを私がぶち壊したでしょう。「赤城構想」の時のことを調べたらおわかりになりますよ。全く空想的作文ですよ。「中曽根構想」もそうなんです。こればかりは私はいつも言うんですが、日本人の遺伝的体質ですね。作文だけです。そのいい例が、今日持って来ましたけれども、今年出た『防衛白書』ですよ。こんな立派なものができていますね。驚くことに、CD-ROMまで付いているんですよ、こんな立派な色つきで。この中で肝心の陸上自衛隊がどう戦うか、どう書いてありますか。完全な作文なんです、陸・海・空ともに。

だから、そのことは私は二年前の『this is 読売』でも書きました。皆さん方にはもう申し上げておられますけれども、全然変わっていない。だから何ともならないんだ。私は今年の『防衛白書』を見て、ああ、

これはもう駄目だ、と思いました。誰もそれに文句言わないですかね。後は野となれ山となれだ、と思ってるんです。しかし、それは六十三年前、昭和十一年の帝国国防方針と同じですよ。その時、何と言ったか。西太平洋の制海権を確保する、東亜大陸を制圧する、これがわが帝国陸海軍の意思ですからね。同じことです。これは何ともならないですかね、本当に。当分、私の生きてる限り、まだ米軍はいますしね。

あと、この若い人たちの世代になると一体どうなるんだと言っても、若い人は全然心配しないで。私が本に書いたり新聞に書いたりしていることを、みんなちょっとは読んでいるはずだと思うんですが、駄目ですね。今はもう私は完全に悟りの境地、悟りというか諦めの境地。しかし、死ぬまで言い続ける。砂田長官の意図を受けて、郷土防衛隊と言い続けているのは私一人でしょう。私以外にいないんですよ。これも不思議なんです。統幕議長をやった人はたくさんいるし、陸上幕僚長をやった人もいるんだから、防衛事務次官をやった人もいるんだから。「ああそうだ、海原の言う通りだ」と言ってくればいいですよ。誰も言わない。女房から言われましたよ、「いい加減にしなさい。あなた一人喚いたってしょうがないんだから」と。それはそうなんです。そう思うと余計腹が立つんですね。腹が立つと血圧が上がるだけですが、そういうことです。よくまあ、こういう立派な『防衛白書』をヌケヌケと出しますね。

佐道 ちょっと戻るんですけども、この一次防も作られて、岸さんはそれを持って行かれるわけですけども、できた時に総理にご説明されるわけですね。

海原 もちろんしました。

佐道 その段階で、政治レベルというか、防衛庁が上げていったものについて、岸さんなり上の方から何かありましたか。

海原 一次防の時には私は説明しません。もう大体固まっていますからね。上の人にやってもらいました。だから事務次官、官房長レベルです。一次防の目標はもういいですか？「陸」は、六管区隊、四混成団、十八万。それから「海」が、約十二万四千トン、飛行機は二百機。「空」は、三十三隊で千三百機。これが目標ですね。

しかし、所要経費が書いてないでしょう。私は所要経費を入れると言ったんです。見積りでは三年間で、大体四千五百三十億円という計算があるんです。これを入れるべきだということを主張した。ところが大蔵省が絶対反対。とうとう一次計画については所要経費はないんです。なぜ大蔵省が反対したか。それは予算の先取りになるという、いかにも大蔵省らしい、役人らしい言い方でした。そこで一応経費の見込みを参考事項として入れました。一次防の時にはそういうことをやった。後の計画ではちゃんと入れましたけれどもね。その頃はまた、経費の見込みを入れること、所要経費の見積りを入れることは予算の先取りであるということで、第一次防にはそれは入っておりません。ただし、いま申しましたように経費の見積りとして、これだけのものを一応見積もっている、参考事項として、ということを決めたんですね。後は別に具体的な問題はないです。

伊藤 それで、アメリカに先生はどのくらい残っていたわけですか。海原 まず、岸・ダレス会談は六月二十日です。(岸さんがアイクと)ゴルフをやった翌日ですね。朝九時から十一時まで二時間ですね。日本側は岸さん、石田(博英)官房長官。それから松本(滝蔵)さん、町村さん、保科さん、福田(赳夫)さん、朝海さん、千葉さんです。

アメリカ側は、ご参考までに言うと、ダレスさん、ロバートソン、マッカーサー、スクールエッグ、それからマーフィー、リチャード、ラドフォード、彼は私服を着ていましたが大将、他六名ですね。これがアメリカ側です。それがメインテーブルに座っている全員です。それで、やったわけです。

伊藤 それで、岸さんの方からは何を説明したわけですか。

海原 岸さんは、今度、国防の基本方針を作った。内容はこうだ。これで日本の防衛に関しての基本的な方針は決めた、ようやく決まったということの説明した。それから、これを受けて、最初の長期計画、三年計画であるけれども、一応作った。これについては防衛庁の課長、海原が後に残るから、彼から話を聞いてくれということになるわけです。大体、そういうことですね、こちら側が説明したのは。

伊藤 それについて何か意見が出るということはなかったのですか。

海原 なかったですね。先ほどのラドフォードの言葉で、「われわれ軍人としては敵か味方か(Friend or foe)、はつきりすることが必要である。ところで日本ではヤンキー・ゴー・ホームという声が非常に強いようであるけれども、もしも」と、こう続くわけです。後のことは覚えていませんね。

伊藤 じゃあ、日本側が一方的に説明したんですね。

海原 そういうことです。その時、やはり国防費の問題が出ました。その時にダレスの言ったことは、当時のことですからGNP対比の割合です。「アメリカは一一%、イギリスは一〇%、ヨーロッパの各国が八〜九%で、日本はわずか二%である。これではあまりにも各国の努力に差があり過ぎるではないか。アメリカは何も金持ちだからといって金を出すわけではない。それだけの必要があるから出すんで、日

本もその国防の基本方針で考えるならば、ひとつ具体的に防衛努力というものを高めてほしい」。そういう要望がありました。それが、この席における話でしたね。

私が残って説明した時にも、やはりこの問題が出ました。私が言ったのは、*slow but steady* で行くということです。そんな、急げと言っても急げない。能力がない。また、急いでもいいことはない。世界情勢を見て、日本に米軍のいる限り直ちにどうこうということはないと思うから、*slow but steady* にやっていくんだ、ということの説明しました。それが岸・ダレス会談の話です。

伊藤 どのぐらいいらっしやたわけですか。

海原 一日です。残ったのは一日ですけれども、ずいぶん疲れましたね。一人でやるわけですから。しかも、私の下手な英語でやるわけですから。大使館の駐在武官が聞いていましたけれども、これより私の方がうまいですよ（笑い）。「相手は」わかってくれたんでしょね。ちゃんと速記録が残りましたから。

それで、どれだけのことを言ったかと言いますと、念のためにちょっと箇条書きにしてみました。項目としましては、六項目あります。

まず第一が「日本の防衛生産関係の能力の問題」です。これを説明しました。それからアメリカの域外調達、要するにアメリカが日本で調達して、それを日本あるいは外国に渡すということです。OSP (*Offshore procurement*) という言葉がありますね。実は、このOSPで日本の護衛艦を二隻も買ったんです。これがまた面白いんです。後の計画ですけれども、向こうに英訳して出すでしょう。その時に予定している船に「O」をつけまして、「O」についてはOSPを期待する、と書いておいたんですね。そうしたら、向こうでは、それがな

にか約束だと思っちゃったんですね。こっちは期待するということですよ。ところが「O」をつけた二隻の護衛艦をOSPでもらったんですね。そういう裏もありますからね。

第二は、当時問題になった「F100か104か」。センチュリー・シリーズです。これは後で話します。

それからF86D、これは「全天候戦闘機の供与の問題」です。それから「いま日本のレーダーサイトはアメリカが運営しているが、それを日本に超越せという問題」。それから「将来の軍事協力の援助の見通しの問題」ですね。それから「アメリカの高射砲部隊が解体する、その後をどうすればいいか」ということです。大体、この六項目を主にして話をしたわけですよ。

それで、「F100か104か」という問題は、これだけでもちよっと話すと時間が必要になるんです。どの程度ご存知か知りませんが、これも、ロッキード、グラマンのグラマンのF11F-1Fですね。これは全然出ていないんです。F100かF104かだった。これは、どっちを採るかということが問題だった。これにつきまして私が質問したら、もう米軍は全部F104であるとはっきり言いました。極東空軍も太平洋空軍も、それから日本の顧問団もF104だと言った。というように、誰もF104と思っていたんです。F100かF104かの争いであって、しかも米軍の意識はF104である。これが邀撃戦闘機として適している。そう決まっていたものが、揉めるわけです。最初に私が質問して、F100か104かということについては、もう問題なくF104だということをはっきり言われたんです。これは六月二十四日の十三時三十五分から十六時四十分まで、ちょうど三時間です。米側はシャッフという国防次官補代理が長となりま

して、十五名。相当なものです。米軍の三軍の他に、特に空軍はこちらのF100かF104かの問題があるでしょう。あるから来たんです。それを前に、私一人です。両側に大使館のアタッシェがいまなくても、これは全然発言しない。できないんです。何も知らないことだから。私が一人で十五名を相手にした。相当疲れましたね、これは。

伊藤 向こうからも、かなり質問が出るんですね。

海原 はい。私は説明はするわ、質問は書かなければいけないわ、でしょう。さあ、そこで終わった。ミスター・ウェイさん、彼が国防省の東北アジア地方の日本担当責任者です。ウェイさんは前身は絵描きさんなんです。ところが日本に来ると、それが日本課長になるわけです。課長といっても一人しかいない。課に一人。だからその辺も、日本の新聞の報道がおかしいと思うんです。必ず日本式に課長とか何とか書くでしょう。担当者は一人です。ミスター・ウェイと私は仲良くしましたからね。彼に向かって「俺はあれだけ相手にして疲れた。ところで俺は、何をしゃべったか覚えていない。ついでには会議録があるだろう（向こうはちゃんと速記者が来てやっているわけですから）、その会議録をくれ」と言ったら、「それはそうだ、やる」と言っただけです。

そう言ったにも拘わらず、駄目なんです。翌日になって、「駄目だ。それはもう機密文書になった」と言うんです。だから官僚ですよ。前日にはミスター・ウェイが「ああ、わかった、それはもう当然だ」と言った。「俺は日本政府代表で、総理に言われて残って説明したんだ。こういうことを言って、相手がこういうことを答えたか、俺はしゃべって書いて書けないんだから、議事録が必要だ」「わかった、取っ

てある」と言っていたのに、翌日になって「ノー」と言うんですよ。

伊藤 やはりこちら側も議事録を取らなければいけないですね。

海原 だから、本来ならこっちも断って、誰か速記の人を連れて行かなければいけないでしょうね。その時、ミスター・ウェイが言ったことを忘れませんよ。「これが、ミスター・海原、官僚主義だ」と言うんですね。「俺の知っている『空』の中佐は、研究開発の報告を出した。それを寄越せと言ったら寄越さんのだ」と言うんです。書いたのはその男だ。例えば、伊藤さんが書いたことはわかるけれども、その伊藤さんが、それをくれと言っていると、駄目だと言う。「これが官僚主義、官僚制度の悪いところだ」と、ミスター・ウェイは言っていましたけれどもね。

「とにかく俺は困るから寄越せ」と言ったら、「わかった」と言っただけ、あちこち奔走してくれました。それは、私に渡してくれたけれどもね。とにかく、よくこんなことをしゃべったな、と思うようなことが書いてありました。とにかく、一人で三時間でしょう。英語でやるんですから、これは疲れますな。しかし、別にそうボロも出ななかつたです。そんな経緯がある。

伊藤 想定問答集があるわけじゃないでしょうからね。

海原 ないですよのね。付いているアタッシェが何もしなかつた。

佐道 その人たちはメモも取ってくれなかつたんですか。

海原 取ってくれと言ったけれども、取れないですよ（笑い）。あまり能力がないから。それは、もちろん言いました。しかし、出てきたのを見たら何も書いてない。〇〇について、ですよ。微妙なところの発言がわからない。言葉が大事なんですよ。

伊藤 それで、終わってすぐ帰られるわけですね。

海原 それが終わって、二日ばかり残りしました。それで帰るわけです。
伊藤 全然遊ぶ余裕もなしですか。
海原 遊ぶ余裕はないですね。安川君とゴルフしたぐらいですか。一日は遊びましたけれどもね。そんな記憶しかありません。誰も慰勞してくれないですよ（笑い）。使うだけ使って……。

防衛産業と国防族

伊藤 ところで、先ほどの説明の第一項目は何でしたか？

海原 最初は日本の防衛産業の能力です。

伊藤 それはどういふことですか。

海原 まあ、いろいろな能力がない、これから能力をつけていくんだ、ということなんです。ついでには、日本の防衛生産の能力を助けるためにも域外調達（OSP）が必要だと。買う力が、まだ日本にはない。防衛費が少ない。だからアメリカ側で買って、それを日本にくれと言うんですから、虫のいい話ですよ。相当の心臓ですがね。黙って聞いてくれたんですから。それもあって、結局二隻の護衛艦がタダで来たわけです。日本の防衛産業の能力を説明して、これからつくり上げていく段階なんだから、その間はアメリカの方でOSPでひとつ援助してほしい、ということをお話したわけです。考え方はわかった。「考え方はわかったけれども、その通りやるかどうかは、そこで相談だ」と。それは向こうだって、いきなり「よし」と言えないでしょう。

伊藤 OSPで来たその軍艦は、アメリカ製の軍艦ですか。

海原 いや、日本製のやつです。日本で造って、それをアメリカが買って、それを日本に供与するという形ですよ。これをオフショア・プロキユアメント、OSPと言うんですよ。まあ、ずいぶん図々しい要求ですね。「おんぶにだっこ」もいいところだと思っただけ（笑い）。それは承知の上で主張したんです。相当な心臓ですよ。駄目でもともとだと思っているから、やれるんですけれどもね。向こうにしてみれば、ずいぶん強引などうか、虫のいい要求だと思っただけ（笑い）うね。

伊藤 そういふ場合は軍艦の設計なんかはどうなるんですか。

海原 それはもう全部こちらですよ。

伊藤 こっちでやるんですか。

海原 はい。金だけ払ってくれ、ツケは回すから払ってくれという話ですね。だから伊藤先生、ご存知ないでしょう。そういうことも要求せざるを得なかったような事情なんです。と同時に、向こうは結構それをちゃんと受け入れてくれたんですよ。

伊藤 それは日本の戦略的な地位ということですね。

海原 そういふことですね。

伊藤 これだけが日本の頼みなんです。

海原 もちろん、そうですね。だから、いろいろなことがあるわけですよ。「鬼畜米英」がやってくれたんですからね（笑い）。

伊藤 ゴー・ホームもありましたね。

海原 だから私は、日本人はよくまあ勝手なことをね。「鬼畜米英」と言っておいて、「アメリカは鬼」だと言っておいて、「鬼」に頼むんですからね。まあ、ソ連のおかげですよ（笑い）。ソ連の脅威のお

かげで日本の復興ができた、私は思いますね。朝鮮戦争の朝鮮特需もありますしね、すべてがソ連様々ですよ。

伊藤 そのソ連が崩壊したもので、とたんに……。

海原 それがなくなっただから、みんなきよとんとしちゃった。まあ、しかし、崩壊した頃には一応自前で物を考えるだけの力はあるわけですからね。

そこで、先ほど言ったF104に固まっております。米軍側は全部、はつきり言ったんですから。ところが、なぜ揉めたか。これは、私が行ったのが六月でしょう。その後、永盛調査団が八月に米国に行く。そして調査をして、報告した。その時にF11F・1Fというグラマンの名前が出る。それから騒ぎになるわけです。

だから、永盛調査団がなぜF11F・1Fという名前を持って帰ったか。私は疑問だと思う。私は調べません。本当は、これを調べないといけないと思う。しかし、これは後で消えますからね。消えたことになるから、どうでもいいんですが。どうしてこれを持って帰ってきたのか。米空軍側は全部F104がいいんだと言っているわけでしょう。それなのに……。

伊藤 その調査団は、米空軍とは接触していないわけですか。

海原 私は知りません。本来なら、永盛調査団のことをもっと調べなければいけないんです。その時、ごたごたした時には、もう私はワシントンに行っていますからね。どうして日本で調べなかつたかと思えます。私なら、もちろんもつと永盛調査団を調べますね。どこからこのF11F・1Fの名前を聞いたのか。これをずっと読んでいても何も出てきませんよ。これに誰も疑問を持たない。私が新聞記者をやっていたら、そこを調べますね。堂場君もそれを調べていない。わから

ない、謎です。誰がこんな余計なものを持ち出したんだということですね。それが、当時センチユリー・シリーズと言っていましたけれど、行く前はF100かF104かだった。私はワシントンに勤務する前に赤沢（璋一）君に言ったんです。彼は、その後通産省に帰りますからね。F100になったら三菱、F104になったら川崎、それぞれ推薦会社が変わりますから、そこで造らせることにしたらどうだ、もう初めから決めておくと。どっちかに決まった場合、また競争になったら大変だから。もしF100に決まったら、それを言っていた三菱、F104になれば川崎、そういうふうな決まったらどうだ、と言ったら、彼もそうだとおっしゃったんですよ。

その当時、非常に激しい戦いがありました。これは余談のようなことですけれども、いかに業者は戦うかですよ。ある時、私はたまたま写真雑誌を見ました。『毎日グラフ』か何かですが、「完全なる美人」というのが出たんです。私はびっくりしたですよ。何だ、完全なる美人とは、そんなものがあるかと思ったら、何とF100の写真が見開きに大きく載っている。

それで、私は三菱の重役を呼んだんです。「なぜ、こんな広告を出すんだ。いま100と104で競争している最中で、三菱が出したことは間違いない。何が完全なる美人だ」と聞いた。そうしたら、「実は、これはノースロップが出せと言いました。アメリカ側の要請です」と。そういうことですよ。一体飛行機に対して「これが完全な美人だ」というのは、頭がおかしいんじゃないかと、三菱の重役を呼んで怒ったんですが。

伊藤 それは広告ですか。

海原 広告でしょうね。写真のグラビアに載っている。「完全なる美

人」と題して、F100が載っているんです。

伊藤 でも、広告じゃあないでしょう。

海原 どう言うんですか。今でもあるでしょう、記事のようにして広告を載せるのが。その先駆けでしょうね。広告と書いてないですよ。しかし、写真雑誌の二ページを使って、F100の宣伝をやっているわけです。その見出しが「完全なる美人」なんです。「何で、こんなバカな広告を出すんだ」と言ったら、「いや、アメリカの方の要請だ」と言う。それほど激しかったんです。ことほど左様に、関係者は一所懸命になっていたということの一例ですけれどもね。

伊藤 航空機の選定の問題というのは、これ以後ずっと続くわけですね。その最初の方の大きな問題ですね。

海原 そうです。この時いかに日本の専門家の知識が頼りないかというのを、この前ちよつとお話ししましたね。全天候型との関係ですね。そういうことになるわけです。その関係で『日本防衛体制の内幕』という本を私が書いたんですが、これはご存知ですか。

佐道 はい。あります。

海原 要するに、この前申し上げたようにF104を全天候型にする必要はなかったんですよ。それをしなくてはいけないと思ったのが間違いですね。また、できると思った。これも間違いです。だから、間違いが二重、三重になるわけです。しかも、航空幕僚長が二人揃って海軍出身の人なんです。片一方の言うことと違っちゃったんですね。そういうことですから、あれだけの大騒ぎになるわけです。どうしてそうなったのかわからないんです。私は残念なことだと思います。アメリカでは、そのF100かF104かということについての情報を取るわけですね。それは私の一つの仕事になるわけですけれども。

その話になりますと、ちよつと切る面が違いますけれども、私が防衛庁からアメリカの日本大使館に行く前は、F100かF104かだった。しかも、私が岸さんの後に残って質問したことに対して、米軍側は、極東空軍も米空軍も、それから在日顧問団も全部、F104だと明言したんです。それは東京での私の接触から言ってもそうなんです。だから、後であの問題が起こってから、航空自衛隊の担当者が喚ばれて国会で答えています。私どもはF104だと思っていた。どうして今度はグラマンの飛行機が入ってきたかわかりません」と。そういう正直な答えが出ていますよね。だから、そこに問題があるんです。しかし、これは誰も調べていません。それで、あれだけの大騒ぎになったわけですね。

伊藤 その一番最初の項目との関わりなんです。当時、日本の防衛産業を育成しなければならぬという考え方があったんですか。

海原 ありました。

伊藤 これは経団連や何かが……。

海原 もちろんそうですね。防衛生産委員会とかがありましたね。

伊藤 それは通産省がやはり応援をするわけですか。

海原 応援団ですね。

伊藤 通産省と防衛庁の関係というのはどういふものなんですか。

海原 これは省と庁との関係ではなしに、赤沢君が防衛庁にいたでしょう。それから向こうにまた帰りましたね、航空機武器課長ですか。そういう個人的な関係もありましたね。その方が強かったんじゃないですかね。省と庁という関係ではないと思いますね。

伊藤 では、悪くはなかったわけですね。協力的な感じということ。

海原 はい。C46の後継機のごときは、この前お話ししましたか。新

しい飛行機ですけれども。

伊藤 いえ、まだ伺っていないように思いますね。

海原 例のC46の後継機を造る。あれについて航空自衛隊は反対したんです。国産の飛行機、あれはYS11でしょう。YS11を通産省が造った。赤沢君はその方面の担当ですね。これを防衛庁にも買ってくれという要請が当然ありますね、通産省から。それをどうするかという会議がある。そうしたら装備審議会、これは庁議ではありませんが、装備審議会の委員が集まっている会議で、航空自衛隊の方から「あれは駄目だ」と言っています。なぜか。出入り口が横についている。飛び降りるためには後ろがいい、と言っていますね。今度できるYS11は、昔のC46と同じで横についている。だから、これは駄目だと言っています。そこでまた私は発言したんですが、「今まで使っていた古いC46では横でやっていた。それは、理想を言えば後ろにある方がいいだろう。しかし、せっかく日本で国産する輸送機を防衛庁が買わないとなったら、外国が買うはずがないじゃないか。防衛庁も使っていますということが信用供与になるんだ。防衛庁も買わないような飛行機を、どうして外国が買うか」と。そうしたら黙っちゃったですね。「今まで横についたものでやっているんだから我慢しろ。防衛庁という日本の役所としては、通産の主導しているYS11の輸出に協力するべきじゃないか」と言ったら、黙ったですね。そういう意見が出てくるんです。そういう点ですね、通産省との関係は。だからやはり私の意見が採用されました、あれを使うわけです。

伊藤 まあ、非常にいい関係ということですね。

海原 と思いますね。だから「日本の防衛庁が買わないような飛行機なら、売り込みの時に困るだろう。あなた方がセールスマンなら困る

じゃないですか。防衛庁も使っていますということになれば、ああそうかということになる。それを、おたくの防衛庁はどうですかと聞かれて、いや、防衛庁は使っていませんとなったら、これはまずいじゃないかと思う」と言ったら、航空自衛隊も引っ込みましたね。そういうことなんです。

伊藤 それ以降の航空機産業ですが、今度はYS11の後継機の問題がありますよね。

海原 そうそう、今度はYS11の後継機です、C1というやつ。これが、ある意味での航空機産業の問題です。C1も国産したでしょう。今はどうなっていますか。ないでしょう。これが問題なんです。というのは、あれは本来、航空自衛隊の要求していた性能がないんです。本来の要請は、当時C1を造る時には不整地からの離着陸ということが大きなことだったんですね。それまではコンクリートの滑走路から離着陸していた。それが不整地、要するにその辺の原っぱからでも飛べる、そこへも降りられる、そういう飛行機だとかいう、いろいろな要求性能がある。私は、それは無理だと言ったんです。もしそれができるとなると、アメリカだつてやっていますよ。そんな理想的な、希望的なことを言ったつて、今の日本の実力でそれはとても無理だと思うと言った。だから、そんな理想をいっばい掛けつないだような飛行機を造るよりは、C130の方がいいじゃないかと言ったんです。

そうしたら、航空自衛隊の連中は何と言ったと思いますか。「C130はもう、おんぼろ飛行機で駄目だ」と言っていますよ。それを今、使っているでしょう、防衛庁は。何十年経っていますか。私は「航空自衛隊の将来を考えたら、C130がいいと思う。これはアメリカがちゃんと長年使いこなしした飛行機だし、いざという時には役に立つ。

それから日本の将来を考えた場合には、あれが一番いいと思う」と言っただけです。そうしたら、「あれは、おんぼろだから駄目だ」と言うんです。それで、「新しいC1を造る時には、それは民需にも転向を考える」とか言う。「考えるじゃ駄目だ、通産から一本もらって来い。この要求性能通りのものができた場合には、国産のそれだけの飛行機だから、当然民間機にこれを使わせるということを一札取って来い」と言ったら、そこまではいかないんですが、うまくいったら通産省としてもどうこうするというのを一筆もらって来ました。そんな経緯がある。

しかし、あれを造って見たら、あれは上がるのにも高い梯子みたいなものが要るんですね。造った航空自衛隊の幕僚副長、田中耕二君はもう死にましたけれども、「あんなものができるとは思いませんでした」と言った。だからC1は、今ないでしょう。これでわかるように、専門家と称する人々の希望には、非常に空想的な希望が入っているんですね。それに一般の人が騙されちゃうんですね。

再度同じことを言いますが、後でC130を買って、それが今飛んでいるでしょう。これがいわゆる専門家の一つの大きなマイナスでしょうね。通産省との関係ではそういうことがありました。そういうことですかね。

佐道 海軍関係には海空技術調査会というのがあるんですが、これは伺っているのと長くなりますか。

海原 これは私は直接は関係していませんから、何をやっていたか知りません。ただ、海軍の人がこういう名前を使ってやっていることは知っていますし、いろいろな印刷物を出していますからね。それはそれで、もうその人たちの好みですから。この前も申し上げたかも知れ

ませんけれども、私は好みでやっていることについては妨害しないんです。しかし、それに同調してと言いますか、採用してとなると、私は考えるわけです。だって、この団体では核装備も言っていたでしょう。そういう人の集まりなんですよ。

核装備と言いますと、話が飛びますけれども、石原都知事、彼が一九七〇年に核装備を提唱したことはご存知ですか。この前言いましたか。『諸君』の一九七〇年十月号でしたか、「非核の神話は死んだ」というのを書いているんです。私は二カ月後にそれに対する反論を書いた。「非核は神話ではない」と。これはお渡ししていませんでしたか。

あの海空技術調査会というのは、その他いろいろ出しているんです。機雷をどうしろとかなかなかね。だから一言で言うと、旧海軍軍人さん方の意識を基に、希望的な将来の構想をしょっちゅう書いていましたね。私の『戦史に学ぶ』にも出てきますけれども、ずっと機雷原をつくれとか、そういうことばかり言っていましたね。だから、これは何ともなりませんね。

佐道 一つ関心があるのは、自民党の安全保障調査会との関係ですね。

海原 これはわかりません。ただ、私の勘で言いますと、当時の自民党では保科善四郎さんが結構いろいろ旗を振っていた。あの人は国防部会の中に小委員会というのを作りまして、自分が小委員会の長になったんですよ。そういう人です。

伊藤 国防委員会の長でもあったんじゃないですか。

海原 それは後ですね。だからそこに行く前に、自分で小さな小委員会を作った。極端な表現をすると、業界としては仕事が欲しいですからね。そういう意味からの、いろいろな要望が出るでしょう。また防

衛庁もある意味で、それに乗ったんですね。というのは、後の話になるんですが、私がワシントンにいる頃に、日本からの調査団が次の飛行機の選定の問題で来たわけですね。その会議が終わった後で、その団長さんだけが別室で、また十五分ばかり向こうの責任者と会って話していた。後で私がアメリカの方から聞いたことですがね。その時に何を話したかという、次の戦闘機が決まるまで、期間が空くでしょう。その数カ月の間のつなぎの飛行機生産ができないかと考えていた。

これは完全に日本のそういう関係の工場の生産ラインを考えている。それが非常に強かったですね。それも一つ、例の全天候戦闘機問題をこじらせる原因になりますね。いつ終わるから、それから後はどうするんだという「つなぎ」の問題ですね。それがあつたことは間違いありません。しかも「つなぎ」の間に仕事がなくなるから、その間だけ、ある特殊の飛行機を造るなんていうことをわざわざ言いに行くんですからね。そんなことは問題にならないでしょう。そういうことがありましたね。だから航空機産業だけではありません。防衛産業の人々は、何とかして工場の生産ラインを円滑に動かすようにということを考えて。それは、その立場に立てば当然でしょうがね。

伊藤 そういうことの窓口に、やはり自民党の国防部会が関係しているんですね。

海原 はい。それは後のことになりましたが、例えば私が担当したことでは言いますと、自民党の国防部会がナイキとホークの生産について、一つは三菱、一つは東芝、そういうふう決めてあるんですね。そんなこと、どうして決めるんだと。そのことを国会で質問されて、私ではありませんが、別の経理局長が「そういう決議があつたことは私も承知しています」と答弁していますよ。だから、ナイキが仮に三菱な

ら、ホークは東芝だと。そんなことを自民党の国防部会が決めるのはおかしいでしょうが。私は本にも書きましたけれども、そんなことを言えば、国鉄の車両の注文を自民党の運輸部会が決めるようなものだ。そんな馬鹿な話があるかと言ったんですが、事実そういう動きがあつたことは間違いない。そういうことも、いろいろと防衛関係の生産の問題を混乱させた一つの理由ですね。

伊藤 まあ、そういうのは国防族の権益と言いますか。

海原 メリットですね。国防族にいるプラスですね。これはどこにもありませんから。

伊藤 国防族は小さい方だと思いますけれども。

海原 そうですね。それで、案外力がないんですよ。それはこの前もお話ししたでしょう。総理になる人を呼んで来て、防衛についての考え方を聞くんだと言って、賛成、と言ってやったけれど、呼ばないんです。しかし、そういうふうには防衛産業の維持が大事だということ、いろいろと運動されたことは間違いないですね。

伊藤 またそれを、防衛庁の方では決してまずいことだと認識していたわけではないですよ。

海原 これはもうしようがない、ということですね。

伊藤 まあやってくださって結構、ということですか。

海原 どうぞ、それはご自由に、ですよ。いいとも悪いとも言えないですよ。

伊藤 でも通産省は推進する、ということですね。

海原 防衛産業というのは国産ですよ。何でも国産ですよ。だから中曽根氏がまた国産を言うわけですね。

伊藤 国産の話は、この前伺いましたから。

海原 だから、そこへいくわけですよ。国産することがいいことだと思っっているわけです。その前提があるから、防衛生産ということの強力な要請になるわけです。同じ流れですよ。その気持は私はわかってるんですよ。わかるけれども、そんな高いもので性能の劣ったものを買いますかと言って、私は田中総理に聞いたわけですから。そういうことがあるんですよ。

伊藤 そろそろ時間ですが、次回は昭和三十三年にアメリカ大使館に参事官として行かれるところから始めようと思いますが。

海原 今日はそこまでいきませんか。

伊藤 そこに行かれる経緯のところまでは、今日お話しただけかと思っておりますが。

海原 その経緯と言われましても、どういうことでしょうか。これはアメリカに陸・海・空のアタツシエが一人ずつ行っていますね。一佐ですから、一等書記官ですか。その陸・海・空の三人、それから外務省派遣の政務の参事官が行っていますね。安川君とか小川君がいるわけです。その他に、この陸・海・空の三つの制服を着たいわゆる駐在武官の上に、まとめる人間が必要じゃないかという意見が出てきたんですね。それは「制服」の方から出てきた。当然「制服」の諸君の方では、「陸」であろうが「海」であろうが、とにかくジェネラルを出したいと言う。将クラスですね。そこで私はまだ課長でしたから、私の上の局長さんは林一夫さんと言って内務省の先輩ですけども、彼は「制服」の要請に無条件でオーケーなんです。ジェネラルだと。

それに対して大蔵省が反対した。それはジェネラルでなくシビリアンであるべきだと。これはジェネラルが行っても、いろいろな具体的なことになりまして、言葉の問題もあるし、それからいろいろ物の考え

方で、「陸」の人は「陸」しか言えないし、「海」の人は「海」しか言えない。陸・海・空を通じて物が言えるようになったら、やはり「背広」だろうと。別に文官が武官を、じゃないですよ。「陸」の武官ならば「陸」に制約されるのは当然だろう。となると、陸・海・空全部についていろいろな調整をしたり、物も言ったりするとなれば、それは文官しかないじゃないかと。これが大蔵省の考え方で、意見が合わないんですよ。

予算の時には、要するにジェネラル職を置くと決めて、それが文官か武官は預かりになった。そのまま予算は通ったんです。その後で、また改めて大蔵省の主計官が村上君で、たまたま村上孝太郎君が防衛庁の他のことで話し合うことがあった。その話が終わった後で、林局長が村上君に、「あれはどうしても、ひとつ『制服』で認めてくれ」と陳情しているのを見ました。まあ、ことほど左様に両者の意見が合わない。しかし最後は大蔵省の方で、ちゃんと防衛庁の上に話したんです。文官になったんです。それで私が行くわけです。大蔵省は初めから私を候補者に考えていたようなんです。しかし、それが私一代で終わるわけです。その点は、この前お話ししたでしょう。

佐道 はい。先生の後はトルコに武官が行ったとか。

海原 そうそう。私の後に来ないんです。それはなぜかと言うと、自薦他薦が殺到して、これも情けない話だと思っただけですけども、防衛庁で捌ききれなかった。その時、朝海さんが私に言ったことは、「君がもう一年やったらいいじゃないか」ということでした。大体、私は行く時には三年だと言われたんです。三年のつもりで、銀行からも借金していますからね。それは個人的なことですけども。「いま君の後任で揉めているようだから、もう一年やれ」と言われた。これは、

この間の話に出ていますね。私は「よろしい。来る時から三年と言われているんだから」と言ったんですが、私の後任は寄越さない、その代わり私の予算でもつてトルコに「海」の武官が出たという話です。帰って来て私は、「どうして俺の後に来ないんだ」と言っただけです。そうしたら、「いや、実は、あれはなかなか……」ということなんです。そういうことがあるんです。

伊藤 そのジェネラルの場合も、やはり参事官というポストですか、その時考えていたことは。

海原 そうですね。日本大使館の参事官というのはなかなか大したポストなんです。各省ともに狙っているんですね。参事官というのは結構偉いんですね。「せっかく、防衛庁から初めて海原君、君が参事官になったんだから、もし後任が決まらないなら、もう一年やったらどうだ」というのが朝海大使の発言ですからね。それはもう私は喜んでやりますということになったんですけれども、肝心の東京がこうなっちゃった。

伊藤 それで、その参事官はどうなっちゃったんですか。

海原 今はないですよ。

伊藤 参事官がないのですか、アメリカ大使館に。

海原 終わりです。だって私の予算でもって、「海」の武官の予算に当てちゃったから。だから官制の問題じゃないですね。予算の問題です。

伊藤 そうですか。そこから二年間ということですか。

海原 私の場合は二年で終わりです。

伊藤 その二年の間に、またいろいろなことがあるわけですね。

海原 まあ、それはいろいろありますね。

伊藤 その二年のことを、この次の二時間で伺えるかどうかですね。

海原 今日は一応、海空技術調査会まで行きましたな。次回は、日本大使館の話ですね。ところで、全天候戦闘機の問題でこんなものが出てきたんです。「官界」という雑誌ですけれども「資料を示す」。今日お話ししたこの関係はこれに出ています。これ「『官界』での連載」が全部済んだら本にすると書いていたんですが、やめましたね。売れないと思ったんでしょう。

伊藤 これはずっと続いたんですか。何回ぐらいまでですか。

海原 二十何回ぐらい行きましたかね。

伊藤 これを貸してもらえるとありがたいですけどもね。

海原 いいですよ。そちらで複写していただければ。

伊藤 はい。貸して下さい。

今日は暑いところ、どうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第12回

開催日：1999年10月7日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 12 回 質問項目

- ① 昭和 32 年 11 月、米国大使館勤務となられますが、大使館員として直接担当された仕事はどのようなものでしたか。また、当時の大使館と一緒に勤務された方で、特に親しくされた方、印象に残る方はおられますか。
- ② 駐米大使館参事官として、特によく接した米国人にはどのような方がいますか。国務省や国防省で様々な方と接したと思いますが、印象に残る人などお聞かせください。
- ③ 先生が以前に築かれていた米国人脈、例えばハリー・カーン氏などには、米国駐在中もお会いになったと思いますが、そのような知日派米国人の動向や当時の対日観（例えば岸政権への評価）などはいかがでしたか。また、それら知日派にとどまらず、先生が接した米国人の対日観等はいかがでしたか。
- ④ 先生の在米中に、FX 選定をめぐる調査団等が来たり、調査依頼が来たことを御著書の中でも触れておられます。その一連の経緯について、なるべく順を追ってお聞かせください。
- ⑤ 先生が米国におられた頃は、日米安保改定に向けて交渉が進んでいた時期です。この問題に大使館はどのように関与していたのか、お聞かせください。また、先生ご自身はこの問題に関与されていたのか、あるいはいなかったのか、いかがでしょう。もし関与されていなかったとしたら、安保改定の動きについては、どの程度ご存知でいらっしゃいましたか。
- ⑥ 大使館におられる間のことで、防衛庁時代には接しなかったような人、あるいは事案など、印象に残っていることはありますか。
- ⑦ 大使館在勤中、ワシントンだけでなくアメリカ各地を回られましたか。どこか印象に残るところはありましたか。
- ⑧ 昭和 35 年(1960)2 月にご帰国になり、防衛庁長官官房考査官、9 月に防衛審議官、12 月に防衛局長になられます。考査官の職務内容はどのようなものですか。また、審議官から局長へ、非常に短い間に昇格されますが、この間の経緯等お願いします。

集団的催眠状態の日本人

海原 「三冊の自著『日本列島守備隊論』『治に居て乱を忘れず』『安全保障・日本の選択』を示しながら」この三冊は、大同小異です。同工異曲という言葉もありますけれど、言っていることは同じなんです。私は今まで十冊書いたんです。

伊藤 どうぞお座りください。だいぶ涼しくなりましたね。

海原 歩いてきたら暑いですね。今日は記者クラブからここまで歩いて来たんです。歩き出したら暑いんですね。

伊藤 今ごろは、風邪をひく危険性があるんですよ。

海原 私は先週入院していたんですよ。どこが悪いと思います。

伊藤 クイズですか（笑い）。

海原 二日ばかり、朝の二時、三時頃に胸が苦しくなりましたね。私の家には、六神丸という漢方薬があるんですね。それを飲んだら一応治まるんですね。それが二日続いたんです。これはおかしいな、と思っています。

伊藤 それは胸が苦しくなるとして圧迫されるんですか。

海原 圧迫されるというか、胸苦しくなるんですね。これはおかしいと思っ、去年自衛隊の中央病院に入りましたから、調べてもらおうと思っ、今も付き合っている伊藤圭一君に電話したんです。これがよく中央病院にお世話になっていて、院長さんと知り合いなんです。その

伊藤さんに電話したんです。こんなことは書かなくてもいいですからね。

伊藤 いや、これも歴史の一コマですから（笑い）。

海原 そして、伊藤さんから中央病院の副院長に電話したら、すぐに救急車で来なさいと言う。しかし、去年救急で入っているでしょう。みつともないから、タクシーを呼んで行ったんですよ。そうしたら狭心症なんです。感心しましたけれど、どこが詰まっているかわかるんです。造影剤を入れてモニターに出るんですよ。

伊藤 自分でも見られるんですか。

海原 見えるんです。ここ「右手首」からカテーテルを入れましてね。そうしたら上の方で一部が、大体九割詰まっている。わずかに割しか残っていない。心臓の周りの血管です。ということになりました、狭心症の一步手前だと言うんですね。このまま放っておくと狭心症になるか、心筋梗塞に行くかどうかだと言うんです。それですぐ入院です。八日間入っていました。

伊藤 あれは血管を広げるんですね。

海原 入れ方が面白いんですよ。カテーテルをここ「手首」から入れて、ずっと心臓まで持つていくというのが内科なんです。そこから入れたらなかなか届かないというので、大腿部のここ「足の付け根」から入れるのが外科なんです。

伊藤 流儀があるんですね（笑い）。

海原 それで、どっちで行きますか、と去年お世話になった主治医が言うんですね。その前に友人に話を聞きましたら、大腿部の付け根から入れると、二十四時間動かせないんだそうです。ここ「腹部」にずっと重しを乗せて、それが苦しいというんですね。それを聞いていた

ものですから、とにかくこっち「手首」からやってくれと。それで駄目ならしょうがない、こっち「大腿部付け根」からやってくれと。しかし私の親友が、だいぶ前ですが、こっち「大腿部の付け根」からやったら、二十四時間ずっと安静で、腹に重しを乗せられて、とにかく苦労したという話を聞いているから、手首からやって、駄目なら大腿部からやってくれと言った。そこでわかったんです。手首からやるのは内科で、大腿部からやるのは外科なんですよ（笑い）。

伊藤 陸海軍みたいなものですね（笑い）。

海原 そうですね。初めて知りましたよ。医者も曖昧模糊とした分野なんです。そこは俺だ、俺だと言っている。そこで幸い、私が去年世話になった内科の部長さんが手首の方からやったんですけれどね。それは非常に成功したんです。それも自分の横のモニターに出るんです。ここですよ、と言われてね。詰まっているんです。そこにバルーンを入れて拡張して、そこへ金属を入れるんですね。何か知りませんが、要するに合金でしょう。それを入れておくんだそうです。しかし血管の中ですから、いろいろものが溜まるんですね。そこで血をサラサラさせる薬とか、溜まったものを消す薬とかを朝晩飲まないといかんのですよ。だから、いま病人なんです。

伊藤 それぐらいのお歳で病気がないなんていう人は、まずいないですね。

海原 満八十二歳と七カ月ですけれどね。どこかおかしいんですよ。車と言えば、ボロボロになっていっているんですね。

伊藤 人間の耐用年数が……。

海原 もう耐用年数が超過しているんですから（笑い）。どこに痛みがくるかの問題ですね。まさか私は心臓は大丈夫だと思っていなくて

すけれどね。みんなが心臓が強い、強い、と言うものだから（笑い）。佐道 違う意味だったんじゃないですか（笑い）。

海原 そうそう。生の心臓の方は弱かったということです。

伊藤 でも、そのぐらいのお歳になれば、ほとんどみんなそうじゃないですか。

海原 それから私の友人で、死にましたが、倒れた後、血管がボロボロだったんですね。そうなる手術もできないんだそうです。そこへいくと私はまだ大丈夫です（笑い）。

伊藤 物事は何でも比較で考える以外にしようがないですね。

海原 そこで、ですよ。こんな感じで「オーラルヒストリーを」月一回やっていったら、いつ終わりが来るかわかりませんから（笑い）。

伊藤 まあそうおっしゃらずに。大丈夫ですよ。今の医学を信用しましょう（笑い）。

海原 そこで三冊持って来しました。『日本列島守備隊論』というのは出した当時、だいぶ問題にされたんですよ。特に旧陸海軍から。中味は、先ほど言ったように、同工異曲、大同小異ですけれどね。

伊藤 そんなに違ったことをしよっちゅう書くわけにはいかないですよ。

海原 『治に居て乱を忘れず』につきましたは、『諸君』という雑誌の書評で、正論だ、と書かれました。他にも書かれましたけれど。

『日本列島守備隊論』というのは、これで問題を起こしたということ、毎日新聞の編集顧問の松岡さんとの対談を十回ぐらいいやりましたね。その冒頭で、「最近お出しになった著書で、だいぶ世間を騒がせていますが」と言われたので、「何も私は騒がしていません」と言っただけなんです。有りのままを書いただけなんです。ところが自衛隊の「制

服」の中には、大体、自国の防衛についての弱点を暴き出すのはほとんどないという批評があったと言っています。今だから書けるんです、日米安保体制がある限り絶対に大丈夫だと。その間に言っておかないと、後で困りますよ、と言ったんですけれどね。自国の防衛体制についての弱点を暴露するとは、とんでもない奴だと言われたんですよ。

伊藤 じゃあ、批判はいかんといいことになりませんか。

海原 そういうことですね。そういう考えがあるんです。

伊藤 それはいつ頃の本ですか。いまお話しになっている時代よりは後ですね。

海原 昭和四十七年、辞める時です。

伊藤 じゃあ、だいぶ後ですね。それは、その時期にまた本のお話を伺いますので、その時に話してください。それでこの前のお話は、米国外務省勤務になられる経緯のところまで終わっているわけですね。ですから、大使館勤務のお話を今日は伺おうと思っております。

海原 その前にちょっと申し上げたいのは、海空技術懇談会（のち調査会）についてご質問があったでしょう。あれがいろいろ書いています。『戦史に学ぶ』にも引用してましたけれどね。あれは旧海軍の団体でして、そういうことを言っているかということ、これを持ってきたんです。「海空技術懇談会の出した地図を広げる」。こういうものを大いに宣伝していたんです。「日本のとるべきASW」。ASWというのは、アンタイ・サブマリン・ウオーフェアということ、その頃はもっぱら対潜水艦作戦というのが流行り言葉だったんです。これは海空技術懇談会が作った表なんです。こういうふうにはやらないといけないと主張しているんです。『地図の』赤い部分、これが後で「中曽根構想」で出ている航路帯なんです。中曽根氏がこれを採用

するわけです。しかし彼らは、こういうところ「赤い部分の外」に聴音機を置けと言っています。グアム、南鳥島、サイパン、こういうところの海底に聴音機を置いて、潜水艦の動静を探れと言っています。こういうことを、昔言っていたんです。

伊藤 それはロシアの潜水艦ですか。

海原 そういうことです。そういう能力を持つということですね。

伊藤 ということはその当時、こういうところにロシアの潜水艦が出没していたんですか。

海原 要するに、ウラジオを基地とせずと出ているんだから。

「A・B・Cの三ルートを守れ」ということがあったでしょう。A・B・Cというのは、まずサイパンに行つて、こういうルート「地図上を指で示す」があるでしょう。当時の「海軍」の主張として前に申し上げたと思いますが、A・B・Cの三つの海上ルートを守れと。それを脅かすのが国籍不明の潜水艦である、ということなんです。それに対してどうしたらいいか、こういうことをやれ「地図上の位置に聴音機を設置せよ」と言ったんです。海底ですよ。こういうことを堂々と主張して、しかも改進黨の諸君がこれを取り上げるわけですよ。それに私は、抵抗したんですよ。

伊藤 というのはどういうことですか。意味がないということですか。

海原 意味がないです。大体、公海にそういうものが置けますか。そんなものを置く技術がまずないでしょう。

伊藤 技術がないんですか。

海原 ないですよ、そんなもの。聴音機と言つても、遠くまで届くような聴音機はできないんです。まず技術的に無理ですね。経済的にも無理ですね。それから国際法的に無理ですよ。そういうことを堂々と

主張したのが海空技術懇談会なんです。すなわち旧海軍の団体です。

伊藤 一応彼らだって、技術や資金や、国際法上の問題だって考えて、根拠はあるんでしょう。

海原 知らないですよ。

伊藤 その説明はなし、なんでですか。

海原 なし、です。海空技術懇談会という名前でいろいろなものを出すんですよ。核装備をしるかか。当時の新聞記者に、よくあなたは殺されないで生きている、と言われたんですよ。昔なら殺されているだろうと。最初に『戦史に学ぶ』を持ってこられましたね。あの後ろにいろいろ書いてあるでしょう、現在の問題点。あれは海空技術懇談会と書いてあるでしょう。それです。そういうことを堂々と主張するグループがおったし、おるといことが問題なんですね。

伊藤 そんな技術的に駄目だったら、プランだけでプッシュも何もできないじゃないですか。

海原 これは作文ですよ。それは今の『防衛白書』と同じだ、ということなんです。

佐道 海空技術懇談会が問題になったのは、単に一民間の団体がわけのわからないことを言っているというだけではなく、自民党が自民党の名前で出した安全保障の本に出ているからなんですね。

海原 金丸氏とかなんとか、わけもわからなくて、頼まれたら書くんですよ。金丸氏だけではないですよ。元総理・福田さんが自ら責任編集した本がありますよ。全部適当なことが書いてある。そこに書いてあることは、全部海空技術懇談会の言っていることです。今度持って来てもいいですけどね。要するに政治家どもは考える能力がないんですよ。善意なんですね。旧帝国陸海軍軍人というのは国を思っちゃっ

たんだ、しかもいろいろな経験を踏んでいる、だから間違えるはずはない、その連中がこう言っているんだ、だからやれと、それだけです。それは全部駄目ですよ、と言ったのが私であって、「赤城構想」を潰した、「中曾根構想」を潰した。その「赤城構想」とか「中曾根構想」の元は全部これです。そこでもう一度申しますと、よく生きています。闇討ちにあってもおかしくないぐらいですね。そういうことです。

伊藤 さてそれで、昭和三十二年十一月に米国大使館勤務になられませんか。

海原 ちょっとその前にいいですか。最近のことです。「読売新聞、山形新聞の記事のコピーを配る」。本題に入る前の序曲か間奏曲として。この「政界ウオッチング」というのは読売新聞の九月十四日の記事です。これに、私が一地方紙に書いたということで、「原点の見直しで議論を広げよ」ということが書いてあるんですね。その一地方紙というのが、一緒に綴じてある下のコピー、山形新聞の「防衛白書は『虚構』』というものです。その四段目に、「二十三〇とする」というのが書いてあるでしょう。これは昔の東條総理や岸商工大臣が国民に保証した言葉だと書いてあるでしょう。この原稿を山形新聞に送ったんですね。そうしたら翌日、山形新聞の編集委員から、あれは一体どういうことですか、と言ってきたんです。「それを知りませんか」と言ったら、「知らない」とおっしゃる。

伊藤 いや、私も知りませんよ。

海原 それじゃ困るんですよ、史学会の方が。それで私の『治に居て乱を忘れず』を送ったんですね。この一〇八ページに書いてありますから、お読みくださいと言った。要するに昔の日本の最高幹部は、不

可能を可能とするという意識で戦争を始めたんです。それが今でも残っているんですよ、と言うわけです。だから、これは後でお読みいただくといんですが、「二十三〇とする」。こんなことは考えられないでしょう。しかしその当時はそれが言われて、しかも総理や岸商工大臣が言う、その講演を聴いた連中は、わかりました、やります、と言ったんですからね。ここで私は日本人というのは集团的催眠状態にかかりやすい体質を持っていると言います、司馬遼太郎さんの言葉で言えば、それが「日本人の遺伝的体質」であるということを行っているわけです。誰か偉い人がこうだと言うと、そうだ、となるわけですね。ワッショイ、ワッショイですよ。それが怖いということを言い続けているんです。それが私のいろいろな本の根底にある考え方ですね。

伊藤先生まで「二十三〇とする」をご存知ないとなったら、誰も知っている人はいないですよ。御前会議で岸商工大臣が、船舶の増強計画の説明をしている時に。商工大臣が主務大臣でしょう。その時に言っていることも書いてあるんです。この計画は、常識では達成不可能であります。それは平時の話だと。しかもこの船舶増強を達成しないことには、日本は戦争に勝てないんだと。その次です。だから「これまでの一切の行きがかりを捨てて、私たちが死んだ気になってやれば、この不可能なことが可能となります」と言っているんです。それを誰も批判しない。これが困ったことなんです。その意識が今でもあるというのが『防衛白書』なんです。

それを簡単に説明できるのが、この絵なんです。「『防衛白書』一七六〜七ページの四〜三図、「着上陸侵攻対処作戦の例」のカラーコピーを配る」。これは敵が攻めて来た時にどうするかというので、海岸

にずっと黒いものが描いてありますね。これは上陸阻止用の機雷原なんです。こんなことができるか、ということなんです。これが堂々と『防衛白書』に描いてあるんです。だから、私は昔と同じだと言っているんです。この「防衛白書は『虚構』」の記事で、私は「昭和十一年の『帝国国防方針』は、『米国、露国を目標とし併せて支那、英国に備う』と定め、『東亜大陸並西太平洋を制する』と宣言し」ている、と書いたんですね。そんなことは、できっこないことなんです。たまたま昭和十一年と平成十一年と同じですから、これを使っただけです。平成十一年の『防衛白書』を見ると、まさに昔の意識がそのまま残っているということなんです。これをどうするかは、皆さん方が考えていただかなければならない。くだいですけれど、伊藤先生はその方面の学会の偉い方ですから。

伊藤 まあまあ、そう嫌みをおっしゃらずに（笑い）。

海原 いや、嫌みではなくて、これは本当にお願しているんですよ。そういうことをお願いする人は他にいない。特に今の防衛庁の若い諸君なんて、誰もいませんよ。けしからん、と言う人もいませんね。どういうことですか、教えてください、と言う人もいませんね。困ったことだと思っっているんですけれどね。後は野となれ山となれというのが、今の私の気持なんです。ここでこういうことをお話ししていることが、ささやかなものにもなるかと思っ

伊藤 いや、後世にちゃんと残りますよ。

海原 先ほどの絵ですね。これは「中曽根構想」の航路帯と全く同じです。とにかくどうしたらいいか、皆さん方はこれから先があるわけですから、どうぞひとつその辺のところを考えていただきたいですね。私の言っていることに対して、私は誰とでも、どこでも討論するか

ら、と言っているんですが、いまだかつて討論しようという人はいない。それが困るんですね。それであちこちで、海原が言うのは極端だとか、あいつは陸原だとか、そんなことばかり言っているわけですよ。情けないと思うんですがね。しょうがないです、こればかりは。「二十三〇とする」という非常識な、不可能を可能とするという意識が、あの馬鹿馬鹿しい戦争をやらせた日本の最高幹部の意識なんです。同時にそれが、今の日本の意識でもあるということですね。それだけを付け加えさせていただきます。

それからいいですか。私が入院している最中に、あるロータリークラブで話をするという約束をしていたんです、ふた月前から。それで病院で許可をもらって行ったんです。その時に、この「政界ウオッチング」を取り上げたんです。五十名ぐらい来ていますね。ロータリークラブですから、結構みんなインテリでしょう。まず読売新聞というのは公称一千万部出ているでしょう。だから誰か読んでいるかと思っただんです。誰も読んでいないんです。読売新聞を取っているか、こんな「政界ウオッチング」なんていうところは見ないんですね。まして副題に「有事法制の整備」とか、「『原点』直視し議論を」なんて書いてあると、これだけで見る気がしないんですね。だからあなた方、九月十四日の読売新聞をご覧になりましたか、と聞いてみても、ゼロです。それまで私は、そういう人たちは結構興味を持って新聞を見ていると思っていた。

伊藤 いや、やっぱり新聞は、新聞紙（しんぶんがみ）なんですよ。

海原 もう、ちよつとその時はシヨックでしたね。

伊藤 私はそれほど熱心に新聞を見ている方ではありませんので、あれは紙だと思っただけです。

海原 伊藤先生まで、そうおっしゃったんじゃね。私は新聞が世の中を良くするんだと思っただけです。

伊藤 悪くするものだとは思っていますけれど、良くするものだと絶対には思いませんね（笑）。

海原 いや、困ったな。これは記録にとどめましょう（笑）。今度も読売新聞の編集局長以下、これをやってくれた三人ばかりと話をするんですよ。伊藤先生の名前は言いませんけれど、ある有識者に私が嘆いたら、新聞があつて初めて世の中が良くなるんだと思っただけところが、それは大間違いだと言われたと。そのぐらいのことを言っておきます。

伊藤 構わないです、一向に。

海原 そうなると、一体どうすればいいんですかね。

伊藤 すぐにはどうにもならない。

海原 なるようにしかならない。

伊藤 やっぱり、ロータリークラブであろうとなんであろうと、小さな努力を積み重ねていく以外に方法はない。

海原 この政策研究大学院大学で。

伊藤 これで残りますしね。

海原 いや、残るだけでは困るんです。

伊藤 ちゃんと然るべき方法を。

海原 然るべき方法を探っていたかかないとね。

伊藤 それはやりません。それでは先に進みましよう。最後までお話を伺って、最後に、海原先生の今後の日本の防衛についてのご意見も伺いたいですね。「それはできない」という話ではなくて、「こうしなければ駄目だ」という話まで伺おうと思っておりますので。ゆっく

り行きましよう。

海原 しかし私も入院しましたから、あと何年生きるかわからんですよ。だから早くやらんとね。

伊藤 そのためには早く進まない。結論に行くプロセスを少し早めて行きましよう。

海原 それでは、今日のプロセスにしたがって参ります。

駐米日本大使館に赴任

伊藤 アメリカの日本大使館に行かれましたが、その頃は飛行機でサツと行かれる時代ですか。

海原 ええ、特にセンチユリー・シリーズのことで行きますからね。

この「質問項目案(一二回)」の一番で、「大使館と一緒に勤務された方で、特に親しくされた方は誰か」と聞いていますが、これは当時の大使館の参事官、書記官であった安川(壮)、小川(平四郎)、向坊(隆)、この人たちと非常に親しかったですね。安川君は、後に駐米大使になった。小川君は中国の大使になった。向坊君は原子力の権威者ですね。この三人がみんな同期なんです。大学の卒業年次が、昭和十四年卒業です。安川、小川は前から知っています。下田(武三)さんが公使、朝海(浩一郎)さんが大使。下田さんも一高です。言えなれば、昔の仲間と一緒にいたようなもので、非常に居心地が良かったですね。島内(敏郎)君というのは、そういうことは関係なしに、

これは英語の達人でした。吉田茂さんの講和会議での演説が非常に評判が良かったのは、島内君の英語が良かったからだと言われているんです。そのぐらい英語の権威者でしたね。後に経団連の参事になりましたか。そういうことで、この連中と親しくしておったわけです。

しかし、「質問の」二番目にも関連してくるんですが、駐在武官、昔のアタッシェを出すについては、外務省と防衛庁の間で協定ができているんです。というのは、昔は陸海軍武官というのは大使の部下である形をとっていますが、実際にはそれぞれ陸軍省や海軍省と連絡していたんですね。当時は機密費がありました。その機密費を使って適当にやっていたんですね。そういうことをやられては困るといのが外務省の考えですね。そういうことはもちろんできないし、そういう意志もないということが外務次官と防衛次官との間で一札入っているんです。要するに、アタッシェ、防衛駐在官は大使の部下である。したがって、勝手に私信の交換は一切やらない、大使の部下として行動するということが一札入っていますから。そういうことを私も一緒になって決めたわけです。

そこで私なりの付き合いを求めるとはしなかったんです。大使に言われてどこに行く。安川、小川、あるいは下田公使、そういう人の意向に従って、どこに行って調べていこうと言われたら行くということ、もっぱら行動範囲は制限していたわけです。しかし、過去の陸海軍武官は機密費を持っていましたからね。ワシントンのかつての日本大使館の土地も、スイスの土地なんか全部臨時軍事費、機密費で買っていたんですね。あちこちにそういうものがあるんです。だから旧外務省にしてみれば、旧陸海軍武官というのは目の上のおぼなんでしょう。勝手なことをやって、外務省には言わないで……。当時は陸軍省、

海軍省ですから。そこで、そういうことは一切やらなくてくれというのが、アタツシエを出す時の約束になっていきますから。私もその点は充分注意して、できるだけプライベートな行動は慎んだというのが実態なんです。そこで、大使や公使から言われた範囲内で行動する。後は安川、小川に言われたことを調べるといふことですね。

特に問題はFXですね。センチユリー・シリーズで、F100か104かという問題についての情報をもつばら集めていました。

伊藤 それは命令で、ですか。

海原 東京から言ってきました。それを安川が、「お前やってくれ」ということなので、私が国防省に行ったり、空軍省に行ったりしましたね。それは公信で送ると同時に、大事なものは私信で送りしました。プライベート・レターですね。公電は外務省に行くでしょう。その通り行くかどうかわかりませんが、一応公電でこういうものを送った、内容はこうだということを、私のプライベートなレターで防衛庁に出しておきました。そんなことをやっています。

伊藤 それはいいんですか。

海原 それもやかましくいうと、どうですかね。いけないんでしょうが、そのぐらいは大目に見てくれたわけですね。私は大使には言っておきましたけれどね。外務省には公電を出す、しかしそのまま防衛庁に行くかどうかわからないから、私のプライベートな手紙で防衛庁にこういう公電を出したという連絡をいいか、という許可をもらいました。それはいいよ、ということでした。そんな程度です。だから、なかなか難しいんです。

したがって、質問の二番目、いわゆる知日派のいろいろな人と交際したかということですが、私はしませんでした。ただカーンは昔から

知っていますし、これは月に一遍ぐらいワシントンに来ていますから、来たら必ず一緒に飯を食って、いろいろな情報を取ったり、こっちから頼んだりもしました。しかし新しい人脈は作りませんでした。作ってはいけないと思った。

伊藤 作ろうと思えば作れたんですね。

海原 いや、できませんね。しかし例えば、前にグルーとかキャツスルとか、アイケルバーガーだとかと会っていますから、それを訪ねて行けばまたできるでしょうね。ただ、向こうも向こうなりに、現職と先輩との関係が結構あるんです。そういう中に入ってもつまらないし、やっても特別な意味はありませんからね。じっとしていました。ところが、戦闘機情報などは、新聞を読むだけでも大変なんです。それを要約して送らないといけないでしょう、解説しないといけないでしょう。それは後で出ると思いますが、東京というのは全天候戦闘機について全く認識がないんですね。もつばら東京の誤解を解きほぐすことを一所懸命やったということですね。

それから、この頃初めてテレタイプが入ったんです。一番初期の物ですね。それで安川と一緒に、外務省と通信しましたけれどね。

伊藤 それは、どんな具合の物ですか。

海原 あまり良くないですね。カチンカチンとタイプで出てくるだけで、言葉が出てくるのも遅いですし、今とは全然違いますから。これはあまり役に立ちませんでしたね。出てくるのは全部ローマ字でしょう。日本語は、ご存知のようにローマ字になると意味が分かりませんからね。

その次にやったことは、日本から来るお客さんの案内役です。これが馬鹿にならないんですね。日本人は、どうしてあんなに簡単に紹介

状を書くんですかね。例えば、伊藤先生が今度そちらに行かれます、ついでにはよろしく、と誰かが書くんですね。その書いた人を私は覚えていないですよ。

伊藤 ああ、知らない人から紹介されるんですか（笑い）。

海原 一遍ぐらい会ったんでしょう。前にも言いましたが、当時は、ニューヨークには商社が出ていましたね。代理店がある。ところがワシントンはゼロです。ワシントンには何もありません。ニューヨークに行けば、各商社がそれぞれ世話をするでしょう。ワシントンには誰も世話をする者がいないから、結局大使館に来るわけです。だから大使館の館員は、半分ぐらい日本からのお客さんの接待ですね。「ああ君、ワシントンに行くのか、ワシントンには海原というのがおるから、紹介状を書くから」とやるんですね。その人たちは、まず案内してくれと言うわけです。ワシントン見物。その次は、一遍ぐらい飯をご馳走になろうと思っているんですね。例えば、ワシントンからちよつと離れたところにマウントバーノンという町があつて、そこにワシントン「元大統領」の家があるんですね。車で三、四〇分かかると、何回行ったかわかりませんが、それからワシントン市内に大きなモニュメントがありますが、あそこにも何回もお供をしましたね。ちよつと塔の真ん中には日本から送った石があるんですが、この辺に日本から送った石がありますとかね。ガイドですよ。だからワシントンの日本大使館というのは、日本から来るお客さんの接待役をやっていましたね。

伊藤 それは、費用はどうするんですか。

海原 それが全部自分持ちなんです。日本から来る人は、接待費があると思つていられるんですね。接待費が使えるのは大使と公使だけ。参

事官以下、安川も小川も私も、全部自分の月給の中から払うんですよ。そんなことはみんな知らないでしょう。仮にも在米日本大使館の参事官ともなれば、接待費があると思つている。「ない」なんて言えないでしょう。だからもつぱら私たちは、できるだけ安い支那料理屋で食事をしましたよ。日本料理屋もありますから、そういう安いところへ連れて行く。

伊藤 日本料理屋は一般に高いでしょう。

海原 いや、安いところもあるんですよ。ちよつと離れたところに、おでん屋みたいな店が。それはピンからキリまでありますから。実は、こういうところがおいしいんですよ、とか言つてね（笑い）。東京で言えば、都心にある立派な料理屋には行かないで、ちよつと外れた川崎の付近とかですね。

いかに日本から来る人が勝手なことをやるかという例を申しますと、例えば政治家です。日本の政治家は威張つていますから、飛行場に参事官が迎えに行くでしょう。そうしたら、「なぜ大使が来ない」と言つて怒つた人もいるんですよ。名前は言いませんが、大使がいちいち行きますか。名刺を出して、〇〇参事官です、と言つと、大使はどうして来ない、と言つて。それが日本の政治家です。

ついでに政治家の悪口を言いますと、デュボンサークルというのが大使館のすぐそばにあるんですよ。そこにデュボンプラザという瀟洒なホテルがあるんですよ。これは約二カ月間、日本人お断りだったんですよ。その原因は何かというと、政治家の行動なんです。一つは、昔よく言われたように、日本人は風呂に入つて、水を入れっぱなしにして「水が」溢れるでしょう。溢れて、それが下まで落ちたんです。びしょびしょになった、これが一つ。もう一つは、日本のある代議士が酔っぱ

らって帰って来て、二階に上がる階段で大の字になって寝ちゃったんです。国会議員ですよ。この二つがあつたために、デュボンプラザは、当分日本人の政治家はお断り、となつたんです。それが日本の政治家です。

さらに悪口を言いますと、衆議院と参議院の議員が同時に来たことがあるんです。一日だけ滞在日がダブったんです。そうすると、任地の報告を大使がしますね。それをダブる日にやろうということになつたんです。五、六人ずつ来るわけですけど、ちょうどダブる日に任地の状況説明をすつて連絡に行つた。それは安川だつたと思つてんですけれどね。両方ともノー、と言つてます。なぜあつちと一緒にやるんだ、衆議院は衆議院、参議院は参議院だ、と言つてます。全く情けないと思ひましたね。何でもだらんことを言うのか。同じことを説明するんですから、衆議院議員と参議院議員を同じ日に、と言つても、両方ともウンと言わない。

伊藤 施政方針演説だつて、同じことを二回やらなければいけないんですよ。

海原 あれは両方あわせて、一遍にやればいいんですよ。

伊藤 それがどうしてもできないんだそうですね。

海原 私は、特に日本人はそんなものか、と思ひましたね。その次に政治家が何をやるかという、ワシントンに来て、国務省で誰かに会いたいと言つてます。それで「写真を撮らせろ」と言う。それで国務省には、日本人専用のカメラマンがおるんですよ。ただいま国務省と会つてゐるという写真を、何百枚と注文するんですから。選挙区に送るんです。だから日本の政治家は大変なお得意さまで。そういうことですから、当然絵葉書なども書くんですよ。あの人たちは忙しい

から、宛名と絵葉書を置いていくんです。真面目な人は、私がお供をして飛行場に送りに行つたら、飛行場の階段で宛名を一所懸命書いていましたよ。これはお話ししましたね。後の人は「頼む」と言つて、宛名と葉書を置いていくんです。それを大使館の館員が一所懸命書くわけです。情けない。

伊藤 海原先生もお書きになつたんですか。

海原 私は書かないです、そんなものは。ところが、それは大使館だけではないんですよ。ある有名な新聞社、そこでも同じことですよ。

新聞社の支局長は結構接待費を持っていますね。それがほとんど「日親善」に使われている。そのことを、後に支局長になつたその社の人、僕にこぼしていました。君もいづれ偉くなるんだから、その時の参考のために見ておけ、君が文句を言つても直るわけがない。今までもずつとやってきているんだから。だから各新聞の支局長の交際費は、全部対日用です。またそういうことを、連中は期待して来るんですよ。だから、大使館の館員というのは、私の体験から言えば、半分はツーリスト・ビューローみたいなものですな。しかも、そのための金がないんですから、苦勞するわけですよ。その辺が一番の問題ですよ。アメリカ人相手に付き合うより日本人相手に付き合う方が、時間的に言つても忙しかつたですな。それも、もちろん大事なことでありますけれどね。今はどうなつてゐるか知りません。今はワシントンにもいろいろな人がいますし、昔ほど珍しくありませんから。

それから、事のついでに言いますと、彼らも旅費が潤沢ではないでしょう。だから安いホテルに泊まるわけです。場合によつてはYMCAなんかに泊まることもある。YMCAというのは、トイレにドアがないんですよ。軍隊は掘つてあるものですからね。YMCAはさすがに

隣との側壁はありまして、表のドアはないんです。私も最初はびっくりしたんですが、どうするかというと、みんな新聞を持って行って読んでいます。ところが、そういうことに日本の人は慣れないですよ。それで、そばにアメリカのいろいろな大きな役所があるでしょう。その役所が九時に開きますね。そうすると、日本人がいつばい入って行くわけです。そういう苦労もありましたね。その頃はアメリカに行くのが大変な時代ですからね。

伊藤 昭和三十二年ですね。

海原 その辺でやめておきましょう。ですから、私が向こうで新しい友人を求めたことはありません。もつばら、国務省、国防省の関係者ですね。国防省といっても、日本担当の人は元絵描きのミスター・ウェイで、その他にマコミックという人がいました。ところが日本の新聞では、それが日本課長になっちゃうんです、国防省東北アジア局日本課長。そんなものはないですよ。ただ、アジア担当部局があつて、それはスタッフが数人いるだけです。その中で日本担当がミスター・ウェイである。それだけのことなんです。

伊藤 向こうは非常に行政が簡素だということですか。

海原 そういうことです。ことほど左様に、あまり当時は問題もなかったですね。

伊藤 それは相手が日本だから、という意味ですか。

海原 ではなくて、アジア自体がそうでしたな。今はどうなっているか知りません。しかし向こうは日本式に、何々局何々課ではありません。大勢いて、その中で日本担当、朝鮮担当、中国担当となっていましたね。ところがそれが、日本の新聞では必ずと言っていいほど日本課長になっていました。そんなものではないんです。

私がいる間、マコミック君とミスター・ウェイの二人が相手でした。もつばら彼らとは一緒に食事をしました。それから外交特権を利用すると、アルコールが安く買えるんです。それを彼らに実費で渡しました。だから私の車に積み込んで、ペンタゴンの駐車場に行つて、そこで渡したりしたんですよ（笑い）。

伊藤 それは、友好のためにはいろいろとね（笑い）。

海原 まあ、ウイスキーでは大したことはありませんけれど、彼らは喜ぶわけですよ。外交官は無税ですからね。それから、日本から来るお客さんが時計が買いたいと言うと、ワシントンの服部時計店みたいなところに案内して、私の名前を買つたりしたんですよ。ツアーリスト・ビューローです。

伊藤 いや、ツアーリスト・ビューローの方はいいんですが、FXのこととは、国防省、国務省との関わりですか。

海原 これはちょっと長くなりますが、細かく申し上げますか。『日本防衛体制の内幕』に詳しく書いてありますが、その話を先にしますか。それより「質問項目の」一番と二番が済んだので、三番目を先にしましょう。

伊藤 三番目はハリリー・カーンの話ですから、ハリリー・カーンのことを先に話してもらいましょう。

海原 もつばら私が利用したのは、彼です。先ほども言いましたように、私は大使の部下ということを守つていましたから。

伊藤 でも、ハリリー・カーンのことは、ちゃんと大使に言つてあるわけでしょう。

海原 もちろん言つてある。こういうことで前から付き合っていると。ハリリー・カーンは、大使や公使と会おうとしませんでした。はつき

り言って、島内君なども、あんな者は大したことはないと言っていた。本物の人たちとは親しくなかったですね。

伊藤 怪しい人間だと。

海原 そうですね、アメリカの国務省から言えば怪しいでしょうな。日本協会の人ですからね。アメリカの占領政策に反対したりしているわけですから。そこが非常に微妙なんです。だから大使、公使には、私はこういうことで昔からカーンと付き合っていますから、付き合いはありますがよろしいですか、と許可をもらっています。しかし、それ以外には言わないです。だから、カーンには、安川や小川を紹介しません。そこからマン・トウ・マンの関係でやったわけですね。しかし先ほど言いましたように、月に一回ぐらいは必ずワシントンに来ていましたから、そうしたら彼と一緒に食事をするわけです。彼の行きつけの場所が、『ラサール・ド・ボア』という料理店です。それからハーバードのクラブもありまして、そこで会っていました。

彼に頼んでやってもらったことは、まずその頃は沖縄は当然ですが、小笠原の返還の問題があったんですね。小笠原の返還は、本来政務ですから私が出るのはおかしいんですが、まあ情報収集ということで、陸海空軍がそれぞれどう考えているか探ってくれと。ついては、僕が行ったら向こうも警戒するだろう。お前もいろいろ人脈があるだろうから、と言ったら、「よしわかった」と言って、やってくれたんですね。

その結論を言いますと、陸軍省も空軍省も意見なし、ノー・オピニオン、いつ還してもいい。ところが海軍は面白いんです。日本が中立となった場合は困ると言うんです。その時に、小笠原の島は大変重要だと言うんですね。だから日本が中立になった時のことを考えると、

あの島は還したくないと言うわけです。そのことを私は、当時、上村健太郎さんが総務庁の副長官でいましたから、私信で送りました。その辺のところをはっきりすれば、簡単に還ってくる。だから、あなたの功績として小笠原の返還をやったらかどうか、ということをやったんですけれどね。そういう考え方をするわけですね。当時日本に対する信用がないですから。

伊藤 日本が中立するかもしれないという感じは……。

海原 それはまだ岸・アイク会談の後ですかね。「フレンド・オア・フォー」という話はしましたね。そういう感じですから、まだはつきりしない。日本はいつ中立になるかわからない。軍人というのは最悪の場合を考えていますからね。日本がニュートラルになったら、小笠原は、特に海軍にとっては補給基地として大事であるということになるんですね。

河野 ニュートラルになるといのは、例えば日本の国内の社会党の立場というようなものをわかった上で言っているわけですか。

海原 もちろんそうです。

河野 例えば、インドとかバンドン会議の動きとかは？

海原 アジアと言っても、日本は格別なんです。要するに日本に基地があるということは、日本の軍事工業能力を利用できますからね。それは朝鮮や台湾とは全然違います。

河野 朝鮮、台湾ではなくて、一九五四、五年のアジア・アフリカの動きは関係なかったんですね。

海原 アフリカは関係ありませんね。

河野 ではやはり、日本社会党の非武装中立のことを言っているんですね。

海原 そういうことでしょね。私がある後帰って来て、外国人と接した時に、彼らも日本社会党は安保反対、自衛隊違憲と思っているんですから。彼ら「アメリカ人」は当然のことですが、書いた物で判断しますからね。

河野 社会党の議席とか影響力よりも、そういうスローガンに敏感に反応したということですね。

海原 そういうことです。しかも石田博英さんですら、「このままで行けば、いつ自民党が負けるかもしれない」と言っていた頃ですから。だから、そういうことには敏感に反応するんですね。

河野 石田博英論文などはアメリカはちゃんと把握しているんですか。
海原 それはこの前も申し上げましたが、日本の週刊誌を全部翻訳していますからね。何でそんな馬鹿なことをやるのかと思っただけ、日本の新聞といいい雑誌といいい、全部翻訳している。それは単にCIAだけではなくて、陸軍省、海軍省も全部やっていますからね。それが集まって、一つの対日判断になるわけです。

河野 確かに石田論文と社会党のスローガンを組み合わせると、中立化というのはあり得ない選択肢ではない、という結論になるかもしれない、それが修正されないで、そのまま国防省なり国務省でかなり強い意見になっていくわけですか。

海原 そう思いますね、当時は。どう言ったらいいですかね。私がいろいろ話してみても、「お前はそう言うけれど」と言われるんです。日本の有名な総合雑誌に、「日本の政界十人の侍」が出て、岸さんが真ん中におって、「両岸外交の能手」と書いてあるんですからね。これは、彼らにとっては非常に大事なことでしょね。そういうことで、何と言いますか、この前ご説明しましたように、アメリカとしては日

本は友人であって欲しい、しかしフレンド・オア・フォー、はっきりしないのは困る、だからそれをはっきりしろと、ラドフォードが言ったのは当然でしょうね。当然というか、一般のアメリカ人の感じを代表しているんでしょうね。

伊藤 それはよくわかりますね。あの当時のことを考えますとね。

海原 そんなことです。私としてはなかなか動けないんです。それでカーンに頼んで、いろいろ情報を取ったということですね。

伊藤 カーンという人は、先生としては信頼できる人だという感じですか。

海原 はい。去年ですか、死にましたけれど、東京に来たら必ず私はいいますし、一緒に酒も飲みますしね。私にとっては彼が唯一のルートでした。彼を通じて、いろいろと情報を取ってもらった。その方が、私が紹介を受けて行って、どうだと聞くよりはスムーズなんです。しかもフランクな情報が取れますからね。

伊藤 情報といっても、それに対する評価もあるでしょうから。評価の方も比較的いいわけですね。

海原 評価というより、私はできるだけナマのものを送りましたね。こう言っている、ということですね。ただしソースはここだと。そうしませんと、外務省との関係があつて難しいんです。島内君は、カーンなんか大したことはないと言っているんです。要するに、カーンという人間に対しての評価も違うわけですね。これはなかなか難しいことですね。

伊藤 カーンという人間に対して、正統派とも言うべき人々は、何となく胡散臭いというイメージがある程度持っているわけですね。

海原 持っておったですね。そういう感じはしますね。だから日本の

雑誌にも出ていましたよ。カーンなんか大したことがないと、島内君がしゃべっていましたからね。

河野 それは島内さんのカーンに対する評価であり、外務省も……。

海原 も、そうでしょうね。私が付き合ってみても、例えば朝海大使や下田公使が、「海原君、それは一緒に飲もうか」と言わないですからね。普通なら言いますが、「君、そんなにカーンと親しいのか、じゃあ一緒にどうだ」というのが出ませんからね。だから、ああこれは難しいな、と思いましたね。

伊藤 回状が回っているんでしょう。この男、危険につきと（笑い）。

まあ、海原ぐらいは付き合わせておこうと。

海原 まあ、そんなことでしょうな。だからお前が大事なことは聞けということ、こつちもそのつもりでやっていましたから。それよりも、次に出てくるFXの問題で結構忙しかったものですからね。

FXの機種選定問題

伊藤 FXは案内人をやりながらやったわけですか。

海原 案内人は、当然私が付いて行きますからね。

そこで、FXについては、なるべく順序を追って申しましょう。

まず私がアメリカの大使館に行く前には、赤沢君が当時通産省から防衛庁に来ていました。二人で話し合って、赤沢君は通産省に帰りましたが、当時はF100かF104か、この争いだったんです。要す

るに三菱か川崎かの争いなんです。三菱がF100、川崎がF104だったんです。ところが、永盛調査団が昭和三十二年八月に渡米して、帰って来て報告するわけです。まだ私がワシントンに行く前です。この時に初めてグラマンのF11F・1Fというのを紹介するわけです。それまで誰も知らないんです。帰って来て報告書の中で、F100とかF104と一緒に並んで、これを紹介したわけです。それから問題が始まるわけです。

ところが不思議なことに、どうして永盛調査団がグラマンのF11F・1Fという名前を持って帰って来たか、誰も調べないんですね。ここが問題です。後にロッキードかグラマンかという争いになりますね。グラマンは全然話題にも上らなかつたんです。となると、永盛調査団がどういう調査をしたか、誰がこれを教えたのか、そういうことが当然調べられて然るべきでしょう。調べていない。私はその後でワシントンに来ましたし、機種選定にタッチしたくありませんから、全然知りません。

その後、ロッキードになる前、私が岸さんのお供をして一人残りましたね。その時の話をしましたね。そうしたら、米空軍は全部F104だと言ったわけです。東京の空気もそうでしょう。だから本来グラマンが出てくる理由がないんです。ところが、どこの新聞もこれを書かない。これは疑問ですね。なぜグラマンが出て来たか。しかも、これは海軍機でしょう。米海軍が使っている戦闘機を、どうして日本の「空」が使うんだ、ということになるわけです。こういう疑問点が、堂場君の解説を読んでもわかりませんね。したがって、わかりません。とにかく出たことは間違いない。それで、ロッキードかグラマンかの騒ぎになった。

それで今度は佐薙（毅）さん、彼は空幕長になりましたね。彼が来るわけです。これは昭和三十三年の一月ですか。私が向こうに行つてからです。来た時に私も立ち会いました。そして国防省に行つた。空軍省はどれがいいとは評価はしませんでした。それはあなた方が選択する問題だと。しかし全部機種は違う、特徴があると。

一言言いますと、私自身が後で空軍の幕僚副長などに会つて聞きましたが、「日本人は単一の機種で、いろいろな目的を達成できるものを作ろうとする、それは不可能だ」とはつきり言いました。インポッシブル。全天候戦闘機というのは中高度以下なんです。「高高度の邀撃戦闘機104とは全然意味が違うんだ。あなた方はアメリカは金持ちの国だと思つているかもしれないけれど、それぞれの飛行機によつて装備も違うし能力も違うから、多様な機種を組み合わせてやっているんだと。だから低高度と中高度と高高度、少なくとも三つぐらいの層に分けて、どういうことをやるかということで、いろいろな飛行機が必要になる。ところが日本から来る連中はみんな、一つで全部をまかなうことができるものを探す。特にスピード、マッハがどうだということばかり気にするけれど、おかしい」と言われました。

それを日本流に翻訳すると、私は「弁慶の七つ道具」だと言うんですね。そんなものはあり得ない。空軍のハッチンソンという少将やスマートという幕僚副長が、はつきり私に言いました。「いろいろ組み合わせるんだ、だから、いろいろな機種がある。それを日本から来る調査団は、単一の機種で全部の目的を達成できるものを造りたいと言ふ。それはインポッシブルだ」と言いました。私は、その通りに書いて日本に送りました。それは基本的な問題でしょうね。それから後は好みが入るわけです。価格もあるでしょう。

日本ではその頃どう言つていたかというところ、加藤防衛局長（陽三・私の前任者です）が国会で証言しているんですが、高高度、五万〜六万フィートということを使うんですね。具体的に言いますと、昭和三十四（一九五九）年十一月二十日の衆議院内閣委員会、加藤防衛局長が、「将来の邀撃戦闘機としては、敵機は六万フィートの高さ、速度一・五ないし一・八マッハで攻撃して来る敵機を対象とする」ということを答弁している。こうなるとわからないのは、高高度の邀撃戦闘機でしょう。それに全天候性なんて要らないんですよ。全天候性が問題になるのは、中高度以下のところに雲が多いからです。上は、三六五日晴れていますから関係ないんです。これをこつちやにしたんです。ここにいわゆる専門家の誤解があるわけです。日本では全天候性が必要だということをやっている。いろいろな経緯があります。最後はF104を決定する時に、社会党の人から念を押されているんですね。矢嶋三義さんが昭和三十四年十二月二十二日の参議院内閣委員会で、「それでは将来の邀撃戦闘機は一機あたりの価格が一〜五万ドル以下、全天候性を持つものにするんだな」と念を押している。「その通りです」と答えている。

この当時、F104には全天候性はないんです。それはなぜかというところ、後で私がびっくりしたんですが、ミサイルの問題だとわからないんですね。F104という飛行機はサイドワインダー（ガラガラ蛇）というミサイルを持つていたわけです。これは赤外線を追いかけるものなんです。赤外線を追いかける場合、横からでは駄目なんです。敵の後ろについて、一定の角度内の距離でないと追いかけれません。目標が太陽を背景にしている、あるいは雲の中だったら駄目なんです。サイドワインダーでは撃てない。そのことを私が防衛庁で、当時防衛

局長になっていましたが、説明をしたら、加藤さんの顔が変わった。それから林統幕議長の顔も変わった。知らないんです。横からでも真正面からでも撃てると思ってる。それはレーダー・ホーミングでない駄目なんです。ところがサイドワインダーについては、赤外線追尾方式ですから、必ず敵の後ろに回る。燃料を噴射しますね。あれを追いかけるわけです。その当時、サイドワインダーにレーダー・ホーミングの能力を持たせようとして、米空軍も研究していたことは事実なんです。まだ完成していません。ところが、日本側はそれができると思っていたんでしょ。サイドワインダーで、それがレーダー・ホーミングになると思ってたんでしょ。そのことを私は米空軍省のハッチンソンに聞きましたが、「あなた方は基本的に間違っている。飛行機とミサイルは一体となっている」と言いました。そして例を挙げましたが、「例えばF106という戦闘機は、それが積んでいるミサイルと一体として行動できるためには何年もかかった」と。別々のものを載せるわけにはいかないんです。そこが間違いなんですね。それを私はワシントンから照会しました。全天候型を造るということになったが、一体どういうミサイルを発射するための準備をすることを予定したのか、と聞いたら、上に出していないんです。簡単に皆さんは、飛行機を造って、できたものを載せればいいと思っただんですね。途方もない間違いです。

もう一度申しますと、高高度の戦闘機なら、全天候性は必要ないんです。五〜六万フィートで邀撃するなら、中高度で戦闘する必要はないんだから、全天候性の必要はない。ところが日本人は何となく全天候性がいいと思うんですな。全天候性を使用するなら、そのミサイルはレーダー・ホーミングでなければならぬ。今はサイドワインダー

を持っている。しかし、やがて持つかもしれない。持てるだろう、ということになるわけですね。そういう情報をワシントンから送ったわけです。東京ではご存知の通り、幕僚長は替わっちゃうし、言うことが全然違うわけですね。佐藤さんは「F104は非常にいい飛行機だが、安全が駄目だ。パイロットが次々と死んだ」というような証言をするでしょう。それまでは空幕はF104だと言っていたんですからね。ところが佐藤幕僚長はF104は不安全だと言う。

私は東京でそういう議論があることを新聞で知りましたから、すぐ連絡したんです。というのは、ドイツがF104を採用することを決めましたから、それを送った。ドイツ空軍が不安なものを採用するはずがない。ドイツ空軍の採用するものは、日本とは性能的に違いますが、しかし基本的には同じですね。ドイツ空軍は爆撃用にも使いますが、とにかくF104を採用する、それを日本では不安全だと言うのはおかしい。だから安全性を問題にすべきではない、ということをお電と私信と両方で送りました。にも拘わらず訂正されませんでしたね。そこで航空幕僚長の佐藤さん、元海軍軍人ですが、F104はテスト飛行でパイロットが何人死んだ、不安全だと言う。最後には、グラマンが日本の国情に合った飛行機であると言う。何ですか、「国情」というのは、よくわからない。国会でそう証言しているんですよ。「グラマンのF11F11Fは、日本の国情にあった飛行機だ」と。どうやら国情というのは、滑走路の長さを言っているのかもしれない。もしそうだとすると、アメリカ空軍が推奨したし、私も推奨したんですが、N156が一番いい。こういうことを言い出すと切りがないんですが、結論から言いますと、日本では何を造ろうとしているのか、わけがわからないんですよ。

そこで、永盛さんが持って帰ったのがグラマン。それから佐藤氏が来て、F104は駄目だと言った。それでゴタゴタして、源田（実）氏が来る。源田氏が調査して、源田調査団はF104がいいと言った。

そういうことなんですね。その全てを通じて言えることは、日本の専門家と称する人々が、全く具体的な知識がなかったということです。そこで、あれだけ混乱したということになるんでしような。これはいろいろ込み入っているんですが、簡単に整理するとそういうことです。

伊藤 それに政治が絡むわけですか。

海原 そういうことです。一知半解ですから。

伊藤 政治はどういうふうに……。

海原 誰かが情報を持って行くわけですよ。例えば赤坂のある有名なレストラントでは、片一方ではグラマンが、片隅ではロッキードが食事をしている、日本人が入っていたとか、いろいろな情報があるわけです。銀座のどこかのバーに行くと、どうだとか。大変でした。日本は有力な政治家を抱き込めということで、誰かに連絡するでしょう。そいつのところに行くわけです。そいつがまた怪文書みたいなものを出すわけです。そういうことで、ことさら混乱したということでしょうね。

伊藤 それはかなり高い買い物で、コミッションが商社などに入るわけですね。その性能の問題、具体的な日本の防衛計画との関係で、何が最も最適かということですよ。

海原 問題は、高高度邀撃戦闘が目的なのか、全天候戦闘機が目的なのか、この違いですよ。全天候という言葉がわからなかったんですね。くどくなりますが、中高度以下のところは雲がありますけれど、上の方は雲は一年中ないわけですから。

伊藤 それは攻めて来る時に、どの高さでやって来る可能性が高いか、とかですね。

海原 そこがはっきりしないんです。加藤防衛局長は国会で、「高度五万ないし六万フィートで、速度一・五マッハないし一・八マッハで、攻撃して来る。それを対象とする」と言っているんです。それなら全天候性は必要ないんですよ。ところが加藤さんも、その下にいた私の二年後輩の高橋（幹夫）君も知らなかった。空幕も知らない。ということ、どうしてこういう混乱状態を起したかわからないですね。

伊藤 要は、戦前以来の航空技術とまるで違ったものになっているわけですね。

海原 そういうことですね。ですから、はっきり基本的に調べればいいんですが、私が帰って来まして、最初調査官をやり、審議官になって、防衛局長になりましたね。その経緯も後で申し上げますけれど、防衛局長になって最初の庁内の会議で言った時に、前任者の加藤さんは官房長で座っているんですよ。どうしますか、伊藤さん。

伊藤 やりにくいですね（笑い）。

海原 困ったことなんです。しかも、その話になりましたから申しますと、私の異動は年末、御用納めの前の日、十二月二十七日です。

伊藤 それは、どこからどこへの異動ですか。

海原 私は帰って来て官房調査官になった。それから審議官になります。審議官から防衛局長になる。それは加藤さんが、とにかく一人で大変だから、一つ審議官が欲しいということを交渉するわけです。それで一人だけ審議官ができた。それが防衛局に付いた。その加藤さんが私に何と言ったか。「海原君、長期計画は僕がやる。君は他の仕事をやってくれ」ということなんです。他の仕事にどんなことがあるの

か。いろいろありますが、それは省略しましょう。その時のことを言いますと、また前後が複雑なんです。その時の状態は「赤城構想」というのがまずあった。赤城さんが札幌で発表した。「赤城構想」を防衛庁は国防会議事務局に持ち込んだ。それきり折衝をやっていないんです。「赤城構想」はとんでもない構想ですからね。国防会議事務局も困っちゃったんです。

そこで広岡さんが当時の局長でした。広岡さんは私らの大先輩ですが、この方が運動したんでしょう。要するに防衛局長を替えなければいけないということになった。それで暮れの御用納めの前の日に発令になるわけです。その日の朝、私が防衛庁に行きましたら、当時の今井さんという次官から電話がかかってきて、今日の昼、国際文化会館（鳥居坂にありますね）で昼飯を食べようと言うんです。はい、と言った。役人が昼飯と言ったら、もう異動ですよ。行ったら、そこに門叶（宗雄）さんもいた。門叶さんが官房長です。今井さんに「実は今度辞める。私の後任は門叶君がなる。門叶君の後任、すなわち官房長には加藤君になってもらう。その加藤君の後の防衛局長を君がやってくれ」と言われたんです。

私はそうなるとは思わないですからね。そこで私が言ったことは、「私が防衛局長になるということは、役人で言えば栄転である。私はありがたくお受けしたいけれど、私が防衛局長になると、いろいろと問題があるでしょう」と。私は審議官時代、その前の考査官の時代から、「赤城構想」を批判していましたから。誰にも公然と言っていませんから。だから、それは知っているわけです。特に「ヘリコプター母艦なんていうのは絶対反対」と言っていましたから。そこで「私が防衛局長になると、私に対していろいろ反対意見があるから、私はせ

つかくの申し出だけれど、お断りします」と言ったら、今井次官が、「実は昨日の晩、西村（直己）長官の私宅（赤坂表町です）に関係者が五、六人集まった。そこで今度の異動の話になった。その時に君が言うように、君が防衛局長になるについては反対意見があった（おそらく、統幕議長の林さん、それから加藤さんでしょう）。あったけれども、それは話が付いた」と言うわけです。「だから君がなってくれ」と言うから、「そうですね、そういうことであるのなら、私はなればなつたでいろいろやります」と。門叶さんが次官ならいい、昔警視庁で門叶さんが総監、私が課長と一緒にピッチャー、キャッチャーをやったんです。東京地検相手の野球の親善試合で、門叶さんがピッチャーで、私がキャッチャーなんです。

伊藤 本当の野球の話なんです（笑い）。

海原 そうです。私は、その前の晩、胃痙攣をやっていて、朝飯を食べていないんです。だから嫌だったんです。それで代わりの人に頼んだんです。そうしたら、門叶さんが、あれは駄目だ、お前がやれ、と言うんです。前にやっているものだから。それで、しょうがない。私は前の晩に胃痙攣をやって何も食べていないのに、キャッチャーをやったことがあるんです。それを例にとりまして、「じゃあ門叶さん、あなたがピッチャー、私がキャッチャーをやったんだから、その気持でやりましょう。しかし私が邪魔になったら、いつでも替えてください。そういうことならお受けします」と言ったんです。「それでいい」と言われたんです。それで食事をして帰ったわけです。

それからが大変で、これは速記に取られると困るんですがね。

伊藤 いや、そんなことを言わないで、後で消せばいいことですから。

海原 じゃあ、そうしましょう。そこには加藤さんはいないんですよ。

今井、門叶、私の三人ですよ。「加藤さんはどうなりますか」と言ったら、「いや加藤君は官房長だ」と言うから、「ああそうですか」と言っただけです。だから、当然加藤さんもOKしていると思った。帰って、加藤さんのところに報告に行った。「実はこう言われました」と言ったら、加藤さんは、「僕は反対だ」と言うんですね。どうしますか、そう言われたら。

伊藤 どうしますかね(笑い)。

海原 「僕は反対だ」と言うんですね。その時の話では、次官になるにはまず官房長からというルールがあつたんですね。何も自分が「将来」防衛事務次官になるに当たって、防衛局長から官房長にならないという理由はないだろうと。しかし、防衛局長からいきなりなつてもいいじゃないか、と言うから、それはそうです、と言っただけけれど、私は言われただけのことですからね。「肝心要の加藤さん、あなたが反対なら、今から言っ取り消してきます」と言っただけですよ。「いや、それはいい」と言うんですね。そんな経緯があるんですね。これは前代未聞でしょうね。だから加藤さんとしては不満だったんですね。それは「赤城構想」を持ち込んで、国防会議で話を決めようと思っただけなのに。

そこで説明になりますが、これから先は全部私の想像です。加藤さんというのは、ずっと警察にいた人なんです。軍隊経験はゼロです。そこで、加藤さんは警察と同じように思っていたんでしょうね。要するに、「制服」の陸・海・空の諸君が言うこと、幕僚の言うことは全部正しいと思っただけです。それを聞いてやって、ウンと言っただけで判子を捺せばいいと思っただけでしょう。私は、そういうことは昔の経験がありますからね。いかに陸・海・空の軍人がくだらないことをやっ

たかということに身を染みて知っていますからね。いちいち聞くでしょう。それがないわけです。だから加藤さんには軍隊経験がゼロ、私はそれが染みついていて、そういう違いがある。それにしても、「君がなることについて僕は反対だ」と言われたらね。

「じゃあ、今から私はお断りしてきます。私は気になったから、私が防衛局長になるについては、いろいろな方面で反対があると思う。だから最初は辞退した。ところがそれについては全部氷解したと、門叶さん、今度の次官がおっしゃるから、ああそうですか、それなら私は喜んでお引き受けしますと言っただけです。肝心要の加藤さん、あなたが反対なら私は受けるわけには行きませんが、今から行っ取り消してきますから」と言ったら、「それはしないでいい」と言う。これがわからないんですね。要するに非常に素直な人なんですな。

伊藤 素直、と言うんですか。

海原 「僕は反対だ」と言うんですね。どうしますか、そう言われたら。

伊藤 やつぱり同じようなことを言う以外しょうがないでしょう。

海原 だから私は、私が防衛局長になるについては反対があるということをお願いしたんだと。そうしたら、いや昨日西村大臣の家に集まって、みんなで相談したら、そのことについては一切氷解したと。

伊藤 その時その場には、加藤さんはいなかったんですか。

海原 いたんですね。だから困っちゃうでしょう。まずそういうことがあつたんです。私になるについては、これはどう解釈していいか、恥ずかしくて言えない話なんです。それで私がやったことは、加藤さんがまとめたやつをぶち壊したんですからね(笑い)。そこで、私になった後で加藤さんのところに行っただけです。言っただけは、「加

藤さん、あなたは軍隊の経験がないから、陸・海・空の幕僚、元参謀の言うことを信用されたでしょう。ところがその連中が言っていることは嘘が多いんだ。成果が正しくないことが多いんだ」と。そうするとびっくりするわけですね。警察では、下が言ったことを信用して、ウン、ウンと言っていればいいでしょう。

伊藤 警察というのは、そんなに信用できるんですか。

海原 まあ、それはそれとして。それで私は「加藤さん、あの『赤城構想』は駄目です」と言ったんです。「いろいろな問題があるんです。あなたはただ、『制服』の幕僚がこれがよろしいと言ってきたら、ああご苦労と言って、判を捺したんでしよう。それを後任の私がああだこうだというのは心苦しくてできない」と言ったんですよ。加藤さんがどこかに行けば別ですよ。官房長で座っているんですからね。だからとてもこれは私は務まらんと思ったら、「それは海原君、君は遠慮なくやってくれ。私は残念ながら軍隊の経験はない。そこで一〇〇パーセント『制服』の言うことを信用していた。『制服』の専門家の言うことが間違っているなら、それは君は堂々と訂正してくれ」と言うんです。それは、はつきり言ったんです。そういう人なんです。だから、どう言ったらいいんですかね。スラツとしている人なんです。伊藤 話の続きは、「反対」だと言って、後でいろいろゴタゴタ揉めたという話になるのかと思っただけなんです。海原 そうじゃないんです。だからわからないんです。人間のキャラクターの問題、性格の問題ですからね。私もびっくりしましたよ。形式的には前任者の防衛局長がまとめたことですからね。それを後任の海原がぶち壊すでしょう。だから耐えられませんか。しかも会議の度に官房長で座っているんですから。そういう辛い目にあっただけです。

しかし辛いことに私は加藤さんに仁義を切って、「あなたは『制服』の言うことを全部一〇〇パーセント信用したろうけれど、違うんです、こういうマイナスがあるんです。それを私は言っているんだ」と言ったら、「いや、それは僕は知らなかったから、どんどんやってくれ」と言ったんです。

それは一つは、先ほど言いましたが、サイドワインダーの能力の問題ですね。サイドワインダーというのは赤外線を追いかけるものだから、必ず敵の後ろに回らなければいかんと。一定の距離をおいて、しかも一定の角度にならないと発射しても当たらないということを知らないんです。横からでも、正面からでも撃てると思っただけ。それから六万フィートまで二分とか聞いているわけです。それを私は、最初の会議の時に言ったんです。そうしたら途端に林統幕議長の色が変ったんです。これは本にも書いておきましたけれど、彼は、ちょっと中座して自分の部屋に帰ったんです。それでノートを持って来た。それで「何月何日に航空幕僚監部の誰がどう言った」と言うんです。「それは誰がどう言っても、仮に言った人が幕僚長であっても、それは間違いである」と私は言ったんです。私はアメリカで、アメリカの空軍の最高責任者から聞いてきているんだから、私は専門のこともわかるし、間違っていますと云ったんです。そういう状態だったんです。要するに、「群盲象を撫でる」という言葉があります。まさに、それが当たるんです。群盲が象を撫でていたのが、あのロッキード、グラマンの問題です。自分の聞いたことが正しいとみんな思っている。それが一部分だけなんです。それがあの、グラマン、ロッキードの問題の基本にあるんじゃないでしょうか。私が強調したいのは、後任の海原防衛局長がいかに辛かったか、ということですから。

ど。加藤さんが警察にでも帰ってれば、それでいいですよ、いないんだから。そうじゃなくて官房長で座っているんだから。

それで高度六万フィートまで何分と言うでしょう。私が、それは駄目だ、絶対に違おうと、そこで邀撃するには十五、六分かかると言うことを言った。そこで林統幕議長は「ちよつと待って、海原君」と言つて、部屋に帰つてノートを持って来て、「何月何日に誰がどう言った」と言うから、「それは誰がどう言つても駄目なんだ」と。『インタラビア』という雑誌がありますが、それを見てみると、ドイツのF104と書いてある。どこで会敵して、そのための時間は何分かかかるか、十五、六分かかるんです。それがわからないんです。しかもそれは、空幕の人だけではないんです。日本の航空専門誌まで間違つたことを言っている。離陸したらすぐに音速の二倍になっていると思つているんですよ。そうじゃない。一万一千メートルまでは、〇・九マッハでしか飛べないんです。それはエンジンの性能上、そうなんです。

念のために書いてきたんですが、加藤さんが言つたことは、「高度六万フィート、速度一・五ないし一・八マッハで攻撃して来る敵を目標にする」ということですね。内閣委員会です。ところが、日本が造ろうとしたのは、F104Cですが、これが戦闘重量における上昇限度は五万五千フィートしかないんです。戦闘重量というのは何かというと、チップタンクと言ひまして、予備のタンクを付けてやるわけです。それから武装しているでしょう。何も付けていない時とは重さが違うわけです。それで調べてみると、戦闘重量における上昇限度は五万五千しかないんです。だから、六万フィートで会敵できないんです。そういうところが間違つているんです。

それから所要時間です。それは、サイドワインダーを二発付けて、

チップタンクを持って、五万フィートの高さに昇るためには、十七分かかるんです。六分ではできないんです。これが基本的なことで、本にも出ているんです。ところが日本の航空専門誌もそれを知らない。離陸した途端に二マッハになると思つている。そうではなしに、一遍上がつて、そこで水平飛行をして、この水平飛行で速度をつけて、それからまた上上がるんです。だから五万フィートなり、五万五千フィートで敵に会うためには、基地から何百キロも離れていなければなりません。三五六キロですね。

F104

——危機感なき決定

伊藤 僕らが、例えば家電製品を買う時に、その仕様や何かをカタログで見ますね。これはもつと高い買い物ですからね。

海原 そこでですよ、問題は。

伊藤 どういうわけでそうなるんですかね。

海原 わかりません。また別のことを言いますと、問題になつたのは滑走路の距離なんです。源田調査団が帰つて来て、滑走路はいくらでいいと言つたわけです。そこで、私が防衛局長になつて最初にやったことは、滑走路の延長なんです。

伊藤 足りなかつたわけですね。

海原 足りない。これが日本人の考え方ですね。私はアメリカ空軍の幕僚副長、参謀副長に聞きに行つたんです、「F104はどれだけの

距離が必要なんだ」と。その時になるほど思いましたのは、「ミスター海原、それは誰が、どういう状態で、そのF104を操縦するのかが問題だ」と言うんです。「会社のテストパイロットが乗るのと、実際の飛行機の部隊の平均的なパイロットが必要とする滑走距離は全然違う。そんなF104のための滑走距離は何メートルかというのは、最も愚かなる質問 (very stupid question) である」と言いましたよ。日本ではそうなんです。F104の滑走路は何メートルか。これは佐藤君も言っていますけれどね。そういうことでは決めていないんです。雨が降っている時と、氷や霜の上と、風が吹いている時と全部違うと言うんです。それから一人で行動する場合と、部隊で行動する場合とは違う。だから、アメリカではそういうふう具体的に分けて決めているんだと。それを日本では、F104のための滑走距離は何メートルだと言うけれど、最もスチューピッドだと。さらに、そんな飛行機だけのことを考えないで、地上の通信組織、持っている武装、そういうものを全般的に把握した、ウェポンズ・システムとして物を考えなければいけないと。わかりますね。「そうしないと、一人乗りの高い輸送機を買うことになる」と言うんです。それを私は、その通り公電で送りましたけれど、そういう物の見方の違いですね。「一人乗りの最も高価な輸送機」と言いましたよ。なるほど、それは言い得て妙だと思いましたよ。その通り公電にも私信にも書きましたけれどね。その時に言った言葉が「合理的に (rationally)、悪い気象条件の下での部隊としての行動のための所要滑走路となると、三、〇〇〇メートルだ」ということです。そう、はつきり言いましたよ。

海原　そういうことなんです。それが三、〇〇〇なんです。日本には三、〇〇〇はないです。源田氏が何と言ったか、二、四〇〇と言ったんです。その二、四〇〇を、私は三、〇〇メートル延ばしましたよ。二、七〇〇にするのが精一杯。これを国会で説明した。まず防衛庁の中で、防衛局の局長、自分の部下が反対ですよ。それは「局長はその時はいからしようがないけれど、源田はそうは言っていない。二、四〇〇と言った。それを今更三〇〇延ばすなんてとんでもない」と、まず部下が反対です。わが防衛局の局長です。それを話して、こういうことなんだ、と言ったら、渋々OKしました。

その次に誰が反対したかというところ、大蔵省から来ている経理局長。「これは引き継ぎに書いてあるんですよ。F104のための所要滑走路の長さは二、四〇〇でいいとなっている」と言うんです。「それは誰が乗るかで違うんだ、それでやれる人は会社のテストパイロットだ。しかしわれわれは、それほど優秀じゃないし、部隊としての行動、しかも合理的に悪い状況の下での部隊行動を前提にすれば、できれば三、〇〇〇欲しい。これは私が確かめた。しかし三、〇〇〇は取れない。だから少しでもそれに近づきたい。だから二、四〇〇を三、〇〇〇延ばして、二、七〇〇にしたいんだ、枉げて賛成してくれ」と言ったら、「国会で問題になる」と言うんです。「それは私が引き受ける」と言ったんです。「そうか、じゃあ国会が文句を言っても、それについては君が全部やるな」「やります」「わかった」となったんです。

そういうことで、まず防衛庁の中をまとめるのが一苦勞ですよ。それで今度は国会でしょう。国会では私は正直に言いました。それは二、四〇〇でもできる。それは、こういう条件の時なんだ。われわれの場合はそうは行かない。そこで、できれば三、〇〇〇にしたい。しかし、

一遍にはとても三、〇〇〇にはできない。せいぜい三〇〇メートル延ばすだけだけれども、それでも違うと言った。そうしたら、野党の社会党の先生方も嫌みを言いましたよ。「何だ防衛庁は、ゴムのひもみたいに延ばしたり縮めたり」と(笑い)。それでも勘弁してくれましたね。それは何分にも高価な機体と貴重な人命のためだから、ひとつそこは枉げてご承認願いたいと、頭を何遍下げたかわかりませんよ。

伊藤 社会党と仲良くして良かったですね(笑い)。

海原 そういう時にうまくいきましたね。ところが、ですよ。私が腹が立ったのは、航空幕僚監部からは一言もサンキューの言葉がないんですね。余計なことをしてくれと言った。私は、自殺した山口(二三)君、防衛部長に電話しましたよ。「おい、俺が滑走路を三〇〇延ばしたことで、君たちは何も俺のところを礼を言いに来ない。余計なことをしたな」と言ったら、「いやいや、そんなことはありません」と言っただけで、そういう状態です。これが真相です。しかし、どうしてあんなに揉めたか、ですね。

伊藤 それは政治の問題が絡んだから揉めたんでしょう。

海原 絡んだからですね。それから、何が正しいかわからないんですよ。グラマンがなぜいいのかわからない。全天候性がなぜ要るのかわからない。最後は源田という、当時の日本のパイロットとして最高の人ですから。

伊藤 その権威で決まったということですか。

海原 そうですね。そのために長官が替わりましたね。伊能(繁次郎)さんから赤城(宗徳)さんに。それで赤城さんの答弁が、この前もちよつと変わったことを言いましたけれど、「昔お前たちはこう言っただけじゃないか」という野党の質問に対して、「昔のことをいろいろ言わ

れても困る」と言っただけですよ(笑い)。「私になってからこうなったんだから」と。それで通っているんですね。私には「ゴムひもみたいに延ばしたり縮めたりする」と言いましたが、それで済んだんです。

伊藤 どうせ、社会党だつてよくわからないわけでしょうからね。

佐道 大使館におられて、FXのための調査をいろいろされたわけですね。資料を集めて来いと。それで公電とか私信とかで送られたわけですね。それには、そういった関係の話もあるわけですね。

海原 滑走路の話は最後です。まず問題にしたのは安全性。佐藤さんが言ったのは、不安全だと。確かにF104がいいと考えた時期がございます。ところがその後、どこでどういうことでパイロットが死にましたとか、優秀な人が死にましたとか言うわけです。そういう例を挙げた後で、「そこで改めて考えてみたら、F104ではなしに、グラマンのF11F11Fというのが、わが国情に最も適合した飛行機であることがわかりましたので、そういうことにしたいと思えます」と言うんです。その場合の国情とは何かと誰も聞いていないんです。そんなものです。政治家さんの議論というのは。ですからどう言ったらいいんでしょうか、なぜあれだけ揉めたかわからない。

これまた内輪話になるんですが、大臣が赤城さんに替わったでしょう。決めたのは、本当は空幕長ですな。一緒に辞めたら大変なことなので、佐藤氏が辞めたのは二カ月後です。同時に辞めたら大変なことになると。それがいわゆる政治的配慮でしょうね。そういうことをやっている。私がワシントンから一所懸命送った情報は何の効果もない。

佐道 どこへ行ったんですかね。

海原 それは、私に聞かれてもね(笑い)。

河野 そういうアメリカで集めた情報を、東京の防衛庁が受けて、何

らかの形で処理するシステムはなかったんですか。

海原 そうなると、まただんだん熱くなってきましたけれど、この時はやはり禁を破りまして、私信を書いたんですよ。一体防衛庁は何を造ろうとしているんだ、何が問題なんだということを、装備局の航空機課長（これは文官です）に聞きました。そうしたら、その文官から来た手紙には、初めからオールウェザーのものでいけるとは思っていないと言っているんです。取り敢えずはデファイター、昼間のもので出発して、新しくできたものに乗っける、と書いてあるんです。だから全然知らないわけです。それはアメリカの空軍の専門家が、飛行機はレーダーとか武装とか一体として考えなければ駄目だと。別に造って後で乗せるということは不可能だ、と言っているんですよ。知らないんです。だから初めからオールウェザーのものが造れるとは思いません、初めはデファイターでいって、途中で開発中のものができた時に、それに換えるという返事が来たんです。

ところが、その一週間後に会社から調査に来たんです。それが持つて来た手紙では、これは航空幕僚監部の技術部長の言葉ですが、初めから全天候型だと言っているんです。完全に違う。だから内局の装備局の航空機課長の言っていることと、空幕の技術部長が言っていることが完全に違う。それでは会社も困っちゃうでしょう。そういう状況でした。だから先ほど申しましたように「群盲象を撫でる」ですよ。みんなそれぞれ、自分なりに物事を考えて、自分なりに姿を描いて、ああでもないこうでもないと言っていたんでしょね。その一部を持つて、政治家のところに「ご注進、ご注進」と行く奴もいるしね。

河野 内局が初めはデファイターでいいと言っているのは、一番大きい要因は予算がつかないということですか。

海原 技術です。アメリカの方でも、F104にレーダー・ホーミングのミサイルが撃てるような、エアコントロールシステムと言っているんですが、それを研究していたことは事実なんです。

河野 今はそれがベストだと。

海原 それは結局できなかったんです。先ほど言いましたように、社会党の矢嶋代議士が、「じゃあ費用はいくらでこれができるな、全天候型になり得るな」と念を押しているんです。ならない。今は全部言いませんよ。「F104は、こういたします」と言ったことは全部嘘。しかも誰も問題にしない。それが日本です。よくあれで済んでいると思いますね。その時にいろいろ言っていた人が、全然知らん顔をしている。

伊藤 まあ、言った人が全然知らん顔をしているというのはよくあることなので、別に驚きもしないんですが。

海原 そういうことです。今まで申し上げたのは要点だけですが、要点で、そうなんですよ。

伊藤 アメリカでいろいろな調査をして、源田さんが来られたのも、向こうにいる間ですか。

海原 そうです。

伊藤 その時の向こうとの折衝とかは？

海原 やりません。

伊藤 その時は何をやるんですか。

海原 私はただ見ているだけです。一切タッチしません。向こうはあちこち回って来ていますからね。源田さんの場合は、結構長かったですよ。

伊藤 その間は、先生は何の役割もないわけですか。

海原 ありません。佐藤調査団が来た時は、空軍省と一緒に行きましたが。ですから、関係ないんです。

伊藤 参事官としておやりになったことで一番大きなことは、FX選定問題についての調査ということですね。

海原 調査ですね。つまり関係情報を集めたんですね。ドイツはF104を採用するとか。

伊藤 送る場合は、さつきおっしゃったように外務省に送るわけですね。

海原 もちろんそうです。なお、念のために私信で防衛庁に送るということです。本来は私信もやったらいけないでしょうけれど、安川君あたりには断りました。「これは難しいから、一応同じことを防衛庁に言っておくぞ」「いいよ」ということです。彼は「おい、お前」の関係ですからね。

伊藤 外務省はそれを受け取って、どうするわけですか。

海原 またあるんですよ。そのお話が出たから言いますと、後に防衛庁の渉外参事官に来た人で青木（盛夫）さんという人がいます。この間、問題になった青木（盛久）大使、あの人のお父さんです。私はよく付き合っていました。その青木さんが外務省におりまして、それから連絡が来たんです。「このFXの問題については、東京で政治的に物事を決定するから、ワシントンからいろいろ言ってくるな」と言うんですよ。東京からの照会に対してのみ答えろ、と言うんです。

伊藤 自分の意見は言うな、ということですね。

海原 そういう指令が来るんですよ。

伊藤 機種選定に対して外務省は？

海原 外務省の関係ではないですよ。防衛庁なんです、アメリカの

日本大使館から参考情報として言ってくるでしょう。そういうものは一切要らない、寄越すな、と。東京からの照会に対してのみ答えろと。私は安川君と笑ったんです。こんなことが訓令で来たんですから、しようがないです。そういうものなんです。ですから、新聞で建前とか言いますでしょう。感情を持った人間の世界ですね。機種選定に対しては、東京からの照会に対してのみ回答して欲しいと。だから任意に情報を送ることは一切要らないと。それで終わりです。それが実状ですな。ああ、こんなことかと思いましたがね。

それで思い出したのは、昔、ソ連参戦の情報を小野寺武官が東京に送ったでしょう。それが採用されない。要するに本省で情報を集める時に、いろいろなものには要らないんですね。中で大体方向が決まっています、それに都合のいいものだけを情報として取り上げるわけですな。そんなものかと思いましたよ。

伊藤 それは組織じゃなくても、人間だってそうです。自分に都合のいい情報だけ聞くわけですね。

海原 オーバーに言えばそういうことです。なるほど、これなら馬鹿な戦争をやったわけだと思つてね。日本からもずいぶん陸軍武官、海軍武官が行っていたのね。そういう武官連中の言っていることを一切中央は考慮しなかった。こういうことだと思いましたがね。

河野 政治的に決めていいということだと、安全保障上の切実な危機感が希薄だったんですね。本当に、そういう高度からソ連の戦闘機が来るはずだ、という事態ではないんです。

海原 それはおっしゃる通りで、日米安保体制があれば大丈夫だと。

伊藤 “アメさん”がやってくれるんだと。全部それです。

河野 だから政治的に決めていいということですね。

海原 そうそう。だからそれが何であろうが、フォードであろうがシボレーであろうが、大きな差はないんだと、簡単に言えばそういうことです。おっしゃる通りです。まあそんなものでしょうね。そこまで達観してしまえば、何もそんなに、ああでもない、こうでもないと言うことはないんですよ。要するに飛んでいればいいんですよ（笑い）。音速の一・五倍とか二倍とかでね。訓練なんかやっていないですから。

伊藤 そうですか。ではFXの問題はそういうことにして、五番目の質問に対してはいかがでしょう。

海原 もう一遍言っておきますと、F104は三万五千フィートまでは〇・九マッハでしか上がれない。そこで三分から五分、水平飛行をやるんです。そして一・七マッハから二マッハにして、それで勢いをつけて上に上がるんです。こういうふうになるんです。「手振りで上昇の仕方を示す」。それで先ほど言いましたように、サイドワインダーを二発付けると、二三〇キロ先まで行くのに十四分、三五六キロ先まで行くには十八分かかるんです。だから、加藤さんが国会で言ったような数字は全部間違っている。これが当時の大問題で、群盲象を撫でたということです。ですから全天候性なんて何も関係ないですよ。

さて五番目の質問は、日米交渉、安保改定ですか。全然私は関与していません。

伊藤 もう、FX一本ですか。

海原 はい、それだけです。私は強いて関与しなかつたんです。安川君からいろいろ聞いていました。

伊藤 お聞きになつてはいたんですか。

海原 もちろん。それは仲間、友だちですからね。ああそうか、と言うだけです。

伊藤 そのああそうか、という内容はどうですか。

海原 どうっていいことないですね。私は全然問題を感じませんでしたね。それは決裁の時に来て、いろいろ話しているでしょう。そういうことがありますからね。だんだんまともな方向に行きつつあるな、というだけのことですね。強いて何も言いません。だから五番は、全く関与しません、ということですね。

それから六番目ですね。大使館にいる間にどうだったか。これはちよつとやらないといけませんね。この時に一つだけ申しますと、フルシチョフがアメリカに来たんですね。三十四年九月二十五日です。見に行きましたよ。郊外の飛行場に着いてから車で来るでしょう。みんな、じいっと見ているだけです。凝視しているだけです。というのは、月の世界に「紋章」を送り届けたでしょう。そんなことはアメリカはやっています。その前に衛星一個だけ。だからみんなまるで怖いものを見るような顔でした。みんな歓迎しないんです。しかしブーという声も出ないですね。じいっと、まるで怖いものを見るような顔でした。なるほど、アメリカの一般人はソ連にやられた、というふうにしか考えないでしょうね。これが一つですね。

もう一つは、それから先の米議会の動きですね。なるほど思つたのは、確かに一つの合戦（バトル）は失った、ソ連にやられた、しかしウォーが失われたわけではない、今からアメリカは追いつく、追い越せる。今世紀中に人間を月に送り届けるということを大統領は言いましたね。アポロ計画。アメリカの技術はソ連と比べて劣っていない、やれるんだ、やろう、ということですね。これを見ていてびっくりしましたね。向こうの新聞とか議会の質疑応答録を読んでいまして、なるほどこれがヤンキー魂かと思いましたね。アポロ計画の発足です。

しかし、フルシチヨフが来た時にはみんな怖いものを見るような感じでした。わざわざ月の上に「紋章」を置いたでしょう。それがありません。

それで七番目に行きますが、アメリカ国内でどこに行ったかということですね。ナイアガラに行きました。これは読売の堂場君を案内して行った。それからウイリアムズバーグとかあっちの方、建国の昔のところを見に行きました。他は行きません。先ほど言いましたように、あちこち行く暇がないんです。ワシントンの案内でね。だから案内の言葉なんて全部暗記しましたね（笑い）。はあ、これが日本人かと思えましたね。

その次の八番目に行きましょう。簡単に言いますと、まず官房審査官、これは三十五年二月一日になりました。審査官というのは二人おりました、一人は防衛施設庁関係、もう一人の私は特命事項で防衛関係。赤城さんが長官の時です。『防衛白書』を作ろうということで、最初のやつを私に起草しろということ、小さいものを書いたんです。結局これは採用になりませんでした、それをやった。それから私のいない間の次期防、「赤城構想」ですね。これをずっと関係者から話を聞いていた。というのは私は、いずれはそっちに行くだろうと思っていましたから。

二月一日から「審査官として」いて、今度は審議官になりました。審議官になったのが九月ですから、約半年です。九月一日、その時には加藤さんに、「長期計画は私がやります、それ以外の雑務、日常的な業務はあなたがやってくれ」と言われた。どんなことをやったかと言いますと、私が行く前からパイロットの演習をやった時に、冬季、北の方で救難事故がありますね。その時に信号の発信が必要なんです。

その波長の割り当てです。アメリカに行く前から私は言っておいた。しかし、帰って来ても「空」と「海」はまだ喧嘩しているんです。私はすぐに両方の防衛部長を呼んだ。そうしたら、波長がないとか言う。それはあつたんです。「海」の方の演習用の波長があつた。それしかないんです、防衛庁に割り当てられているのは。これは演習用の波長だから、パイロットの救難のために使えないと「海」は言っているんです。私は、「わかりました。私は行く前、二年半前にあなた方にそういうことについて言っておいた。二年半後、帰って来ても、こういうことで喧嘩しているということを、私は大臣に言います。大臣はすぐに両幕僚長を呼ぶでしょう。だから、お帰りになって、幕僚長にそう言っておきなさい。どういう返事をするか」と。途端にOKになった。

伊藤 それは恫喝ですね（笑い）。

海原 ひどいものです。パイロットの救難に行くのに、波長の割り当てですよ。海上自衛隊の持っているやつを超越せと言っても駄目だと言って、喧嘩しているんです。だから昔いかに陸・海で喧嘩したかというのがわかりましたね。これも先ほど申しましたように、人間のさがですな。それから十二月の二十七日に局長になりました。その話は申し上げましたね。

伊藤 防衛審議官の期間は短いですね。

海原 はい、わずかででした。それで今でも付き合っていますけれど、伊藤君というのが部員にいます、これが私に何と言ったか。「今まで局長のサインをもらうのにも苦労したのに、またもう一人、もっとうるさいのが来た」と言っていました。私はめくら判を絶対につきませんからね。そう宣言していましたから。

それから局長になるわけです。局長に発令されて最初にやったことは何かと言うと、まず国防会議の事務局に行つて挨拶をして、次期防の問題がありますから、ついでには来年早々参事官会議を招集してくれと。一般的な計画はまた改めてやるから、取り敢えず「陸」の十三師団の問題だけ決めてくれということ、そのための費用の用意は要らないということ、やるから、ということ、OKになりました。それが局長になつてすぐ、御用納めの日に国防会議事務局に行つて頼んだことです。そこまでで終わりですね。

伊藤 わかりました。

海原 一応、そう言うことで整理して参りましたので。

伊藤 ありがとうございます。次回の防衛局長の時代の話も、結構時間がかかると思っています。

海原 整理して参ります。

伊藤 だいぶ書類はございますか。

海原 ありますね。

伊藤 なるべく捨てないでくださいね。

海原 いやそれが、今まで整理しちゃっているんですね。まさかこんなことになるとは思いませんからね。

伊藤 残っているものだけでも大事にお願いいたします。

海原 そうします。先ほどの専門誌がどれほど間違っていることを書いてあるか。F104につきまして、読んでみますね。「離着重量九、九〇〇キロ、サイドワインダーAM二基を持って離陸する。その滑走距離は九五〇から一、〇〇〇メートルである。離陸後の上昇中に超音速となる。高度九、一五〇メートルから一二、二〇〇メートルに達するまでにマッハ一・六、一・七に達する。これまでの上昇所要時間は一

分五十秒ないし二分十秒程度である」。これが航空専門誌に書いてあることです。十六分かかるんです。いかに日本という社会での知識がないかということの証明ですね。

佐道 その間違つた数字は一体どこから持つて来たんでしょうね。

海原 それはわからない。

伊藤 やっぱり軍事というものが全く軽視されていますから、専門家が大概にいればそういうことはあり得ないはずだと思いますが、ごくわずかな人でしょう。

海原 そうですよ。その人が言うことがもう絶対なんです。そんなことはない、と言う人がいないんですよ。

伊藤 チェックできるだけの人数がいらないでしょう。

海原 今でもそうじゃないですかね。

伊藤 そうだと思いますね。

海原 残念なことですね。

伊藤 だって、どこの大学にも軍事学の講座がないわけですからね。

海原 そうです、問題は。それから、伊藤先生、戦時国際法を教えている講座はありますか。

伊藤 ちよつとわかりませんね。

海原 ないです。どうしてかと思えますけれどね。勉強だけはしないといかんです。それから伊藤先生の方で、各国の憲法はわかりますか。どういふことが書いてあるか。

伊藤 いや、僕自身はわかりません。

海原 そうですか。イタリアの憲法には「日本の」憲法第九条と同じような規定があるんですね。ところがその次に、兵役の義務が書いてあるんです。だから、それが書いてあれば問題はないでしょう。別条

項で並んで書いてあるんです。日本は九条だけあるものだから、今でもまだゴタゴタしているでしょう。

伊藤 でも今度は自民党と民主党の総裁選挙の際、それぞれ憲法改正、九条問題が話題になったでしょう。

海原 何の話題ですか。

伊藤 いや、いいでしょう、話題になれば。だって今までは話題にもならないんですから。

海原 話題にするだけでしよう。それは困るんです。話題にすれば、それで何となく問題が進行しているように思うんです。

伊藤 話題にならないよりはましでしょう。

海原 そうですかねえ。それは体制派の意見ですよ。

伊藤 先生は反体制派ですか(笑い)。それは知らなかった。社会党に近いところがあるんですね(笑い)。

海原 いや、いろいろ裏話もあるんです。面白いですよ。しかし私が言ったように、社会党の村山さんが総理になっても、別に変わらないでしょう。日本人は「歌舞伎」ですね。

それでは、この本「冒頭の三冊の自著」を置いて行きます。

伊藤 ありがとうございます。大学としていただきます。このプロジエクトが終わりましたら、図書館に置きますので。

佐道 「海原文庫」にいたします。

伊藤 どうもありがとうございます。次回よろしくお願いいたします。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第13回

開催日：1999年11月4日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時20分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第13回 質問項目

前回は、在米大使館時代のお話でした。今回は、いよいよ防衛局長時代に入りたいと思います。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 1960年に日本に戻られますが、ちょうど安保を巡る紛争があった年です。この騒動をどのように見ておられましたか。また、安保の騒動の時、自衛隊の出動が一時考慮されたと言われています。この点についてお願いします。
- ② 先生は「赤城構想」を批判し、これを廃して2次防を作り直されたわけですが、「赤城構想」の問題点、そして長官が認めたものをどのようにして潰したのか、その経過等お願いします。
- ③ 先生が作られた2次防の基本的考え方、内容等お願いします。
- ④ 1961年1月も衆院予算委員会で、西村防衛庁長官が防衛費は国民所得の2%前後が目標という答弁をしています。このような具体的な目標値の設定などはどのように行われたのか、その経緯等についてお話しください。
- ⑤ 先生は1961年3月の国防会議議員懇談会で、米国の対日軍事援助が漸減するので、自主防衛に切り替えなくてはならないと話されたことが新聞に出ています。その辺りの事情、そして先生が言われた「自主防衛」の内容などお願いします。
- ⑥ 当時、基地問題に対応するため、「基地対策協議会」あるいは「基地問題閣僚懇談会」の設置が検討されています。この点についてご記憶のことをお願いします。
- ⑦ 政府・自民・産業界は、防衛装備国産化推進のため、「防衛装備国産化懇談会」設置の方針を決めたと当時の新聞にあります。実際、この懇談会はできるわけですが、この懇談会について何かご記憶の点はありますか。
- ⑧ この時期、調達庁と建設本部を合併し、防衛施設庁設置が決まります。この経緯等をお願いします。
- ⑨ 1963年は米の原子力潜水艦の寄港問題がクローズアップされました。米からの寄港申し入れに対し、外務省を中心に対応が検討されたらと当時の新聞にありますが、防衛庁側は、そして先生はどのような対応をされていたのでしょうか。
- ⑩ この時期、後の先生に対する怪文書攻撃につながるバジ・システムの導入問題、ロッキードF104の後継機問題が出て参ります。それぞれ重要な問題で経緯も複雑だと思いますが、なるべく時系列的にご説明いただけますか。
- ⑪ 二次防の後を受け、三次防の策定に入るわけですが、三次防の基本構想や内容、策定の経緯等をお願いします。

「赤城構想」を潰す

海原 ……「狭心症の経過について」私は二カ所詰まっているんです。上の方は、九割ぐらい詰まっているんです。そこを手術したわけですが、下の方はそこまで行かない、五割ぐらい詰まっているんですね。それで手術の後、薬を飲んでいきますけれど、その結果を見て、来年の二月頃にまた手術をやるかどうか決めると言っていますね。

伊藤 薬で少し溶かそうということですか。

海原 ええ。そういうやり方もあるんですね。ですから、血管の血流を良くするとか、ゴミが溜まらないようにするとか、いろいろな薬があります、七種類ぐらい朝晩と飲むんです。

伊藤 薬漬けですね。それでどのぐらい入院されたんですか。

海原 私は十日間でした。

伊藤 その十日間のうち、手術は何回ですか。

海原 一回だけでした。

伊藤 それは最初の日ではないでしょうか？

海原 四日目ですね。

伊藤 そうですか。その前に検査をやったりするんですね。

海原 それでどっちで「上からか下からか」やるか、と。

伊藤 残りの時間は何をしていますか。

海原 ずっと後の様子を見ているんですね。すぐ動けと言われても、困りますからね。

伊藤 それで、大体良からうということで退院になるんですね。

海原 そういうことです。それで月に一回行っているわけです。

伊藤 それはレントゲンか何かで見えるわけですか。

海原 レントゲンを撮るんです。

伊藤 そうすると、どれぐらい詰まっているかわかるんですか。

海原 わかるんですね。それから血液検査ですね。血液検査でいろいろなことがわかるようです。だから時々は、歳をとったら検査入院をお勧めしますね。あれをやっていると、血液の検査だけで、どこがおかしいか全部わかるそうですね。

伊藤 僕もちよつと具合が悪いと、すぐ血液検査をやってもらうんですけど、なかなか引つかからないんですよ。

海原 前回言いましたが、カテーテルを手首のところから入れるか、足の付け根から入れるかで内科か外科に分かれます。私は手首の方からやってくれと言った。後で女房が言っていました、「あんなに、あなたが自分の意見を主張したのは珍しい」と。

伊藤 そうですか（笑い）。

海原 そうですよ。私はおとなしいんですから（笑い）。

佐道 ご家庭の中のことでないんですか（笑い）。

伊藤 いや、自己イメージと他人のイメージはだいぶ違うんです。

海原 それが違うことを後で申し上げますけれどね。

伊藤 では、始めていただきましょう。もし前回の追加がなければ、一九六〇年に日本にお帰りになって、防衛局長になられるところから始めていただければと思います。

海原 一応書いたものを持って来たんです。私が防衛局長になった経緯はこの前申し上げましたかな。要するに、赤城さんが作った「赤城

構想」を国防会議に持ち込んだ。それで、お互いに話し合いをしないんですね。国防会議事務局の方では、とてもこんな案は駄目だと言うところ。ところが防衛庁の方は、どうしてもこれでやるんだということで正面衝突なんです。それから先は私の推定ですが、当時の防衛庁長官は西村さん。私は西村さんに警視庁で仕えたことがある。先輩で、警務部長で来られて、その頃から知っていたんです。それから国防会議事務局長の広岡さんは、やはり内務省の大先輩で、徳島の先輩でもある。だから、個人的にいろいろ指導していただいた。

それで質問項目にあることですが、私がどうして変更ができたかということですね。防衛審議官の時にも、ちゃんと問題点を書いて回していたんです。「陸上自衛隊の自衛官の充足について」という資料を配る。それは日付も書いてありますね。これは後で読んでいただければわかりますが、いろいろ問題点を挙げていますね。皆さんは、こういう具体的な事実関係を知らないでやっているんですね。

先ほど言ったように、防衛庁と国防会議事務局で対立したままで、全然話が進まない。そこで局長を替えるということになったと思うんです。これは広岡さんと西村さんの話し合いだったと思うんですね。ただ、これも申し上げたと思いますが、私が「防衛局長に」なるについては、こういうことで批判的な意見を出していましたから。これは全部私は関係のところに戻していますからね。私が防衛局長になると、「海上自衛隊のヘリ空母は完全に沈む」と、みんな思うわけですね。そういうことで、今井さん、門叶さんと私の三人での昼飯の時に、「私が防衛局長になったら、いろいろ私に反対する意見もあるから、かえって迷惑になると思う」と言ったら、「いや、それは夕べ西村長官の私宅に関係者が集まって相談した。だからその問題は解決してい

る」と言われました。その一番大きな問題がヘリ空母です。海原が防衛局長になったら「ヘリ空母が沈む」というのがザッと流れるわけですね。それはこういうふうには、私が問題点を書いて配っていたからです。

それで二次計画について、どうしてそれがなくなったかということ、こういうものを渡していたんです。「二次計画についての問題（その一、一般的方針）」という資料を配る。この配布先は、大臣、内局の各局長、それから統合幕僚会議の議長、陸・海・空の幕僚長で、ここに全部回したわけです。

伊藤 こういうものにはサインをしないのですか。「書いた人の」名前を書かないんですか。

海原 だって、これは私の個人的な意見ですから、防衛局長としての意見ではないですからね。

伊藤 でも、「海原」とは書かないわけですか。

海原 これを、渡す時の上書きには書いたんです。海原審議官とか、海原防衛局長とか。

伊藤 それがなくなると、誰が書いたかわからなくなるわけですね。

海原 わからなくなりますが、なぜそういうことをするかというと、「赤城構想」というものを一年以上かけてやって来たでしょう。「赤城構想」といつても、赤城さんの時ではないんです。前の伊能（繁次郎）さんの時にやっているわけです。それまで陸・海・空でやっていて、それでOKになったわけですからね。さあ、どこがどういことを言っているかわからないわけですからね。だから問題だと思ふことを、私は全部拾い上げたいです。それで三回、こういうものを出しました。その第一回目がその「一般的方針」というもので、一体二次計画はど

ういう考え方であるかという問題点。私が問題だと思っことを書いて、
こういう形で配ったわけです。そうしませんと、例えば陸・海・空の
担当の部長を呼んで話してみても、それが直ちにその通り伝わるかと
いうと、まず伝わらないですよ。ああいう社会では、自分が言ったこ
とがその通り伝わるなんていうことはまず奇跡ですね。全部聞いた人
の、それぞれの思いが入って、ニュアンスが違ってきますからね。そ
れで私は、文章にして出すよりしようがないと思った。ただし、それ
は防衛局長として言っているのかどうかかわからないですね。防衛局長
としておかしいということならば、私の名前で、統幕議長なり、陸・
海・空幕僚長宛に出さなければならぬでしょう。そうすると問題が
大きくなりますから、全然そういうことなしに、誰が書いたかわから
ないような形にして、これをひとつ、みなさん読んでくださいという
ことをやっただんです。それで、この二次計画については三回やりまし
た。

伊藤 そうすると、こういう文書というのは、文書としては役所に残
っていないわけですね。

海原 役所の方にはないでしょうね。

伊藤 そうでしょうね。正規に編綴することはないわけですね。

海原 ないですね。あり得ないわけです。私が新しい防衛局長として、
二次計画を作るについてはこう考えておりますという、私見ですね。
これについて、どうお考えになるかご検討をお願いします、というこ
とで出しているわけですからね。もう全然形は残らないわけです。私
は三回出したでしょう。「その一」は一般的方針、「その二」はヘリ
空母なんです。それについての問題点をずっと書いた。「その三」は、
また別の具体的なことですね。これをいちいちご説明すると、

それだけで時間がなくなってしまふんですけれどね。例えばいまお渡
しした「二次計画についての問題（その一、一般的方針）」の中で、
三ページの4に、航空自衛隊の最も重要な7レベルの空曹（下士官）
とありますね。レベル7というのは一番高い練度なんです。練度に応
じて、7、5、3とあるんです。それはアメリカ方式なんです。一番
重要な、一番練度が高い、昔の日本の陸軍で言うベテラン、特務曹
長みたいなものがレベル7、一番高い空曹ですが、その現状はどうか
ということですね。

上に「ジェットエンジン整備定員」というのがありますね。最初に
書いてあるのが「所要定数」、それは「現在はどれだけか」というこ
とです。一二五名いなくてはいけないうところに三二名しかない。わ
ずか二六%です。一体、こんなことでうまく行くはずがないでしょう。
これは偉い人はみんな知らないんです。こういうものを私は出したわ
けですね。ですから、その増員についても、部隊をどうするかという
ことについても書いてあるわけですね。一番大事なのが下士官、下士
官が精強だったのが日本の軍隊だったんですからね。その下士官のと
ころで一番大事な7レベルの空曹の定員が、こんなことなんです。見
てください、例えば気象観測は充足率一五%です。これはすぐに養成
できませんからね。こういう定員を決めている以上は、それだけの定
員がなければその部隊は動かないということになる。そうすると、定
員の一〇〇%は難しいにしても、大体どの程度まで埋まればいいのか、
またそれは埋められるのか、そのための教育はどうするのか、そうい
うことが大事なんです。

ところがそういうことについては、この間もちょっと申し上げたと
思いますが、各幕の担当幕僚のところでも、上に言わないんです。だ

から私の前の局長・加藤さんは、空幕とか統幕で検討した上で、こうするああるということを書いておくと、結構です」と言っているんですね。その一番根本のところは、こういう状況なんです。だから、一体これで何をつくるんですか、ということを書いたわけです。要するに見せかけだけのものをつくるのか、それとも将来のことを考えて、本当に実力のある部隊をつくっていくのか、そういうことについて方針を決めて欲しいということが、ここに書いてあるんです。後で読んでいただけたらと思います。こういうものを文書にして配りましたからね。これについては各幕とも、例えば幕僚長が見て、びっくりしたでしょうね。何だ、こんなことになっているのかと。

伊藤 幕僚長自身が、ですか。

海原 そうですよ。弾のことまで知らないから。この前もお話したように、サイドワインダーなんていうものは、正面からでも撃てる、横からでも撃てると思ってるんだから。とんでもない、後ろに回って、一定の角度の中に入って、距離がどれだけでないと駄目なんだということにわからないんですね。そういうところに間違いがあるんですね。

伊藤 でも、この定員充足の問題は「統計月報」をご利用になっているわけですから、みんなわかるわけですよ。

海原 見たらわかる。見ないんですよ（笑い）。「統計月報は」ちゃんと印刷してあるんですよ。私が特別にスパイを養成したわけではないんですからね。そういう状態なんです。これは私の防衛庁における体験なんです、おそらく日本の役所は、他の役所もそうではないですか。似たようなことがあるんじゃないですか。

伊藤 現実を把握していないということですか。

海原 そうですね。だからこの間の原子力発電所の事故も、何だ、と思うでしょう。一体何のために、あそこに所長さんがおるんですか。その下の部長さんがおるんですか。また、それを監督している原子力関係の役所も実態を知らない。要するに、「大丈夫であります」「そうか」ということでしょうか（笑い）。

私に言わせると、日露戦争の時の大山元帥が悪いんですよ。有名な話があるでしょう。参謀長の見玉源太郎以下が打ち合わせをしている時に、「今日はすいぶん騒がしくて弾の音がするが、何があるんですか」と聞いたという。それ式のもが理想的な指揮官だという妙な伝説があるんです。大山さんはちゃんと実態を知った上で、そういうことを言っているわけですよ。ところがわが昭和の防衛庁とか、上のトップの人々は、実態を知らないで、「よし、ご苦労」と言うことだけを真似したと思うんですね。そうでなければ、私一人が替わったからといって、一年半かかってまとめたものがガラガラと潰れるはずはないでしょう。

赤城さんの時だけではない、「中曽根構想」もまたそうですからね。その時は私は国防会議事務局長でしたから、そんなもの「問題点を指摘するペーパー」は回さないで、防衛庁の代表者を集めて、一問一答をやったんです。それを全部録音しました。それで誰にも聞けるようにした。どういうやり取りがあったかということをいちいち書いていたら、「中曽根構想」は特に大変なことになりますよ。その時、私は国防会議の事務局長という立場ですから、当然、防衛庁を相手に質問できるわけです。各幕からは幕僚が来ている。その人に質問する。それを全部録音しておきまして、誰でもそれを聞けるということをやったんです。

伊藤 こういうもの「海原氏がコピーして配布した「陸上自衛隊の自衛官の充足について」「二次計画についての問題（その一、一般的方針）」を指す」は、私見ということになるんですか。

海原 それは難しいですね。書いているのは防衛局長である海原個人ですからね。これは西尾書記長の、「書記長たる西尾個人が金を受け取ったのであつて」という、あの論理ですな。

伊藤 このタイプを打ったりするのは、ちゃんと職員がやるわけですよ。

海原 もちろんそうです。原文はこういうものですからね「原文が手書きされている用箋を示す」。防衛局のタイプリストが打つわけです。

伊藤 これはタイプ印書ですね。

海原 ええ。ここには防衛局長とも何とも書いてない。日にちも書いてない。

佐道 これだけだったらわからないですね。

海原 わからない。誰が書いたか。さっきの防衛審議官の時も、私が後で言ったんです。これも誰が書いたかわからないんです。

伊藤 ああ、誰かが書いたんですか。

海原 私が書いたんです。しかし、誰が書いたかわからないようにして、どうぞご検討くださいとしたんです。そういうふうにしなないと、ああいう寄合所帯では難しいんです。陸・海・空でしょう。それから旧陸海軍でしょう。だから、いろいろなことを考えなければいけないわけです。その中で、何度も同じことを言いますが、防衛庁長官が正式に発表したものを、言うなれば全部根底から覆すわけですからね。これは、ある意味で大変なことですよ。こういうふうには、私はこういうところに問題があると思う、これをどう思うか、ということを検討し

ましようということ、前以って幅広く配っておかないと、進みませぬ。それで、これで二次計画が遅れるわけです。

しかし、こんなことは部外者の方はわからないでしょう。精強な部隊をつくると言っておきながら、一番大事な部隊の下士官のところがかんなことで、どうして精強な部隊ができるんですか、ということですよ。だから飛行機が入ってきたら、全部すぐ飛べるように思っている。言うなれば、そんな感じでした。だから私は、「各幕僚監部で作っている、いわゆる防衛力整備計画は、単なる買物計画ではない」と言ったんです。防衛力ではない、「力」にならない。「力」にするためには人が必要なんだ。ちゃんと訓練された人ですね。その人の養成は短時日ではできない。時間がかかるんだ、ということですね。

そこで、これはこの前お話ししたんですが、海原は「陸」優先だ、海・空には冷淡だと言われますが、そうではないんです。海・空の必要な下士官を養成するには時間がかかるんですよ。またそれが揃わないことには、部隊としての「力」が出てこないんです。そういうことを無視して突っ走ろうとしたのが、旧陸海軍の軍人さん方を中心とした勢力ですね。それが第一回の制度調査委員会の報告になるわけです。怖いですよ。

伊藤 こういう定員と現員の差というのは、どうして生まれてくるんですか。

海原 所望の人が得られないんです。それから、隊員が得られないと同時に、養成に時間がかかるわけです。日本としては初めて触るものばかりでしょう。だから練度を上げるのは大変なんです。全ての面でこういうことがあるんです。一番新しい航空自衛隊の部隊について、こうなんです。ということは、他の、「海」でも「陸」でも同じこと

ですよ、と言っているわけです。「空」が一番遅いでしょう。「陸」が一番早くできていますから、それだけの歴史がありますから、状態は少しはいいでしょうが、似たようなものです。皆さんが、「空」だ、「空」だ、とおっしゃるけれど、「空」の状況はこんなことですよ、ということですね。だから、おそらく航空幕僚長も知らなかったんじゃないですか。月報は出ているけれど。そういうのは本来は航空幕僚長の下にいる装備部長であるとか、防衛部長がちゃんと取り仕切つてやらないといけない。しかし、それをやると評判が悪いから、みんな「結構」と言つて、めくら判を捺すわけですね。

伊藤 これは、この時期の高度成長で、自衛隊に人が来ない、という状況なんですか。

海原 そういうことではなくて、むしろ「空」の方が人気があるんですけれどね。パイロットはみんな憧れます。そのパイロットを養成するための基礎のところですよ。そこが、こういう状況なんです。

もつといい例を言いますと、これは朝日新聞が出した本に出ていますけれど、F104が来た時に、最初はバルカン砲が当たらなかつたんです。新しくもらつた航空自衛隊の第一線部隊が使つてみると、弾が当たらない。そこで、怒り出す隊員も出てくると書いてある。それが、配置から二年半経つて当たり出したと書いてある。なぜか、は書いてないんです。これが当時の日本人の考え方、証明になるんですが、F104の持つている新しいミサイル、レーダー関係を、良好な状態に保つためには、平均故障間隔(MTBF)というのがあるんですね。例えば十五時間毎に点検するとか。それは人間の目ではできないんです。

だからアメリカにはF104のために、ウォータックという検査の

ための機械があるんです。それは大きなものですが、そこにF104の機首を突っ込みますと、それだけで中のものが全部わかる。今の医者さんが血液検査でいろいろわかるのと同じことですね。私はそれを航空専門誌で見ましたから、航空幕僚監部の防衛部長、田中耕二君(優秀な人でしたが、もう死にました)に、「F104が来る以上は、このウォータックという機械が必要であると、国際的に権威のある『インタラビア』という雑誌に出ている。これを買う必要がある。予算で要求したか」と聞いたんです。「要求していません」と言う。要求してなくても、やりくりで買う場合がありますね。だから「買わないと駄目だ」と言つたんです。そうしたら「調査します」と言つて、私の前から引き下がつたんですが、四、五日して来て、「局長、ご心配なく。装備部長(これも旧軍人さんです)にそのことを聞いたら、いや日本の隊員はみんな優秀だから、そんな機械に頼る必要はないと言つた」と言うんですね。みんな、この感覚なんです。それで結局、そのウォータックを買い取らないんです。予算が付いていないなら、大蔵省と話し合つて、実行予算で買え、と言つたんですが。

だから、その点検するためのウォータックという機械のないままに、F104は北海道に配備された。点検できないから駄目なんですよ。どこが悪いかわからない。そこでこれはいかん、まずい、ということ、空幕の装備部長が防衛部長と相談して、私に内緒で、実行予算でウォータックという機械を買っているんですよ(笑)。こういうことまでお話ししないと、当時のいわゆる「制服」の担当者と内局の文官との関係がおわかりにならないと思うんです。何も隠すことはないですよ。私がアメリカの専門誌を読むと、F104のための機器の整備のためには、こういう機械がないと駄目だと書いてあるから、「要

求めているか」と言ったら「要求していません」と言う。「それでは駄目だ、実行予算で要求しろ、今からでも遅くない。もし駄目だったら、俺が大蔵省に行つて掛け合つてもらつてくる」と言ったら、「いや、それには及びません」ということで、先ほど申しましたように、結論は、「わが航空自衛隊の隊員は優秀でありますから、そんな機械は要りません」と言うんですよ。それならそれでいい。ああそうか。しかしアメリカ人が必要とするのに、日本人は要らないという論理は、昔の大和魂が思い出されて、どうも合点がいかない。しかし、要らないと言う以上しようがないでしょう。

ところが、私に黙つて、実行予算で買っているんです。それから、弾が当たり出したんです。その経緯が全然出ていないんです。それはみっともなく説明できないでしょうね。だから初めはF104の機関砲が全く当たらなかったのに、二年半したら当たるようになった。なぜか、これを説明するのが、朝日もそうですし、毎日もそうですが、新聞記者の責任じゃないかと言うと、「うーん」となるんですね。そういうことなんです。

だからいかに、私の体験した日本の役所では、上の人が下の者に百パーセント信頼感を持っているかですね。持つのはいいですよ。しかし、それをチェックするだけの能力がなければ駄目だろうと思うんですけれどね。それで私は憎まれるわけです。そういうことなんです。それで、予めこういうこと「二次計画についての問題(その一、一般的方針)」などを書いてあるんです。それでこういう点について問題を感じますが、どう思われますか、と。それは具体的な検討の過程でも、私から申し上げますが、その前にこういう点は考えておいてくださいと。そういうことを前後三回出したんです。それが一般的

方針、二番目がヘリ空母、これは要らないということですね。そういうことをやりました。

これは、ご質問があったからご説明しているわけです。こういうことをご説明しないと、なぜ局長が替わつただけで、天下に発表したもの、大臣がわざわざ北海道の宿舎で発表したものが全部ご破算になるかわかりにならないだろうと思う。

なぜ、そんな宿舎で発表したか、となりますと、これもまた背景があるんです。どう思われますか。こんな大事な次の計画を、北海道の宿舎で発表するんです。おかしいと思いませんか。当然、本来なら防衛庁の記者クラブで、大臣が幕僚を従えて発表することになるべきでしょうね。そうならないんです。赤城さんは大臣になりました、慣例になつているから、部隊を見に行く。その時にそろそろ記者が付いて行くわけです。これまた妙なことです。旅先で、楽な、くつろいだ気分、何か記事になることをしゃべるといのが、当時の慣習だったんですね。

伊藤 今でもそうじゃないですか。

海原 今でもそうです。そういう悪い癖があるんですね。何でわざわざ旅先で、しかも宿舎でそんな大事なことをしゃべるのか。大事なことであれば、当然防衛庁の記者クラブできちんと、いま言いましたような陸・海・空の幕僚長を従えて、具体的なことについては幕僚から返事をさせるという形でやるべきでしょう。そうじゃないんですね。今度北海道に行くから、と言うと、みんな記者がそろそろ付いて行く。当然お土産があると思つていらっしゃるんですね。悪い癖ですね。そういうことを言つても切りがありませんがね。

では、どういうふうに潰したかと。そこで私の意見を文書にして、

まず渡したんですね。この「二次計画について」は三回配布しました。「赤城構想」についての問題点はいっぱいあるんですが、そのうちの大きなものについて触れますと、まず第一が、十の師団、管区隊があったわけです。その十を十三にする。十三師団への改編の問題、これはこの通りやりました。その次はバッジ・システムの問題です。それから三番目がミサイルの問題ですね。この三つが大きな問題だと思います。そこで、それなりにご説明していいでしょうか。まず、長官が認めたものをどのようにして潰したかということですが、潰したというと言葉が悪いですね。「これでいいんですか」と念を押したんですね（笑い）。こういう問題点があるんですが、これでいいんですね、という念のためのご注意を書いて、無名で配布したんですね。

「全面戦」の可能性について

伊藤 それがこれ「資料」「二次計画」についての問題（その一）「なんですね。」

海原 そうなんです。それしかやり方がないんです。何度も同じことを言いますが、大臣が発表しちゃっているでしょう。それも、前の局長さんが警察に帰っていただければいいですよ。偉くなって（次官候補で当時偉いと思われる）官房長で座っているんですからね。その人の目の前で、その人がまとめたものをやっつけるわけでしょう。これは大変辛いことですよ。その時改めて私が、なるほどこういうことかと

思いましたのは、「大義親を滅す」という言葉がありますね。これは「大義親を滅す」だと自分に言い聞かせまして、やったわけです。もちろん私一人ではできませんから、私の下の課長、その下の部員と一緒にやってやるわけです。そういう目でもって問題を見ていくわけです。それまでは全然そういう目で問題を見ていないわけです。だから見えないわけです。それが、私が「天皇」と言われた理由かもしれないかもしれませんね。それは大臣が決めて発表したものをご破算にしちゃったんですから、そういう悪口が出るのもしょうがないです。ここが「大義親を滅す」という言葉で、こんないい加減なことでもいいのか、ということですね。

その「赤城構想」の問題点を、大きなところで三つ申し上げましたが、もう一度整理しますと、十個師団を十三個師団にした。それからバッジ。もう一つがミサイルなんですね。それから一番大事な点ですが、陸・海・空の各自衛隊の燃料・弾薬、これは戦時所要三カ月分と決めているんです。この全部の物の考え方の背景にあるのは何か。「全面戦」を考えているんです。これに私は挑戦したわけです。どういことが具体的にあるかということなんですが、「全面戦」というのは、要するにアメリカとソ連との「全面戦」ですね。一体、そんなことが考えられるんですか、ということですね。

その頃の幕僚監部の考え方を紹介しますと、こういう言葉になっているんです。「予想される敵の上着陸侵攻に対して、核戦下と制空権下とを問わず、長期に渉り強靱なる作戦を実施、敵を阻止し、領域を確保し、国家の戦争遂行の中核となって国土の防衛をする」。これは陸上幕僚監部の文章ですが、「陸」がこう言っているわけです。

「海」も負けていません。「強大な潜水艦の脅威と優勢な敵航空勢

力の下に、海上自衛隊は海上交通確保を達成するためには」と書いてあるんです。これが当時の各幕僚監部の考え方ですね。核戦争も考えているんですよ。エツと思われるでしょう。全面戦争を考えているんですよ。

伊藤 米ソの、ですね。

海原 それ以外ないですからね。当時まだ中国は核を持っていませんからね、だから米ソ戦争です。米ソの全面戦争の下にあっても、ということですね。同じことを源田さんが長沼裁判の時の証人で言っています。長沼裁判で証人として、当時は源田さんは参議院議員でしたからね。源田さんは日本の最高の権威者だと誰もが認める。この人はもつとひどいことを言っているんです。要するに日本の陸・海・空自衛隊の任務は、米ソ全面戦争の場合、アメリカを助けることだと言っているんです。具体的には航空自衛隊は、アメリカの航空機をソ連に誘導してやる、また帰りをうまく誘導する。そういうことを裁判所の証人で言っているんです。こんなことは不可能です。しかし、それが当時の人々の物の考え方を代表してしましようね。源田さんがそう言うとき、みんながハイと言うわけですね。そこで、こういう文章になるわけです。下の方がこういうことを言っていますから、上は「ご苦労さん」となるわけです。ここまで言わないと、なぜ「赤城構想」が成り立たか理解されないと思うんですね。当時の風土はこうだったということです。「陸」も「海」も、ソ連との全面戦争の場合、どう行動するかということですね。

私に言わせると、みんな猩紅熱にかかっているようなものです。そうでも言わないと、わからないと思います。長官が認めたものをどのようにして潰したのか。潰したわけではないんですよ。結果的に潰れ

ただで、私は潰そうと思ったわけではない。こういう重大な問題点をどうお考えになるんですか、これでよろしいんですか、という念を押しただけなんです。

それは、一つだけ例を言いますと、ミサイルを持つのでボマークを考えていたんです。ボマークとナイキとホーク、この三種類のミサイルを「赤城構想」では持つと言っているんですね。それを決める前に、統合幕僚会議で、どこがどれだけ持つかを決めているわけです。それで、ボマークは「空」、ナイキ、ホークは「陸」と、統合幕僚会議で決めて、そのための文書も作っているんです。

問題はこのボマークなんです。これは会社の説明書にも書いてありましたが、これは地对空のミサイルであるけれども、地对地のミサイルとしても使えると。要するに、上に撃つ代わりに水平にも撃てるということですね。その時の能力は何百キロまで、ということが説明書に書いてある。当然ボマークの弾頭は核です。そこで私が防衛庁の会議で問題を出したんです。「会社の説明書に、このボマークは地对地ミサイルとしても使えると書いてある。それからすると、沿海州も攻撃できますよ、弾頭は核ですよ。そうしたら当然国会で問題になりますね。その時に、いやそういう能力を持っているけれど、そういうふうには使わない。あくまで地对空のミサイルとしてしか使わない。しかも核弾頭は使用しない、ということが頑張りますね。答弁するのは私ですから」と言ったんです。そうしたら「いやあ、それは」となるわけです。そこまではつきり会社の説明書にあるものを、そういうふうに強弁することは、いくらなんでも難しいということ、ボマークの装備は駄目になるんです。ボマークは持たないことになる。

私が「国会で質問が出ますが、その時には、いやボマークはそ

う能力は持っているけれども、それはアメリカその他の国が使う場合であって、わが国としては、一切そういうふうには使いません。単に地对空のミサイルとして使うだけです。しかも弾頭は通常弾頭を使用しますと言う。これで「行きますね」と念を押したんです。そうしたらみんなは「いや、ちよつとそれは無理だ」と言う。

河野 その無理だ、というのはどういう意味ですか。

海原 いや、核は持たないと。

河野 もちろんそうですが、その説明が無理だというわけですか。

海原 そうなんです。核は使いませんと。「両方使えるけれど、使いません。日本が持つ場合には通常弾頭しか使いません、ということに通しますね、頑張りますね」と言ったら、「それはちよつと無理だろう」と言う。

河野 ということは、無理だと言っている人たちの論理は、可能性はあるが、核を持たないという意思表示はしないで、そこは空けておきたいということですか。

海原 それは知りませんね。それは私は聞いていませんから。そういうことをいちいち聞いていくと、中のまとまりが問題になるんです。誰がそういうことを言い出したか、とかね。私は内局でしょう、「背広」でしょう。「制服」の方ではボマークに決めている。統合幕僚会議で決めている。それを受けて計画ができていますからね。それを防衛庁では私の前任者まで判を捺しているわけですから。加藤さんは、そういうことを知らないんです、ボマークがどういうものかということ。ここに問題がある。おそらく統合幕僚会議の議長、林さんも知らなかったでしょう。会社がそういう説明書を出しているということ。そこに意味があるんです。そういうことがありましたね。

伊藤 さっきの話に戻りますが、米ソ全面戦争はあり得ないというのが先生のお考えなんですね。

海原 はい、そうです。私はあり得ないと思うが、仮にあったとしても、その時には何もできないということです。だから考えない。

伊藤 そうなっちゃったら、もう如何ともしがたい、ということですね。

海原 ええ、しがたいです。もう運命に任せるよりない。

河野 そういうお考えは防衛庁の中で少数だったんですか。

海原 少数でしょうね。現にこう言っているんですからね。くどいようですが、いま読みました陸上幕僚監部の文章なんです。予想される敵の上着陸侵攻に対して、核戦下と制空権下とを問わず、長期に渉り強靱なる作戦を実施、敵を阻止し」ということが、陸上幕僚監部の文章に書いてある。意気盛んなるものがある。そういう気持を持った人が多かったということですね。

伊藤 そうすると、核戦争はあり得ない、全面戦争はあり得ないということが前提だと先生はお考えでしょう。ただ、実際にそれが起こった場合には、日本の自衛隊としては役割を果たすことができませんね。

海原 できることをやるだけだ、と。その時に何ができるかということを考えてなければならぬ。全面戦争が起こるのを抑制するような力はゼロであるということですね。その出発点が違うわけです。

「赤城構想」に盛り込まれている気持は、全面戦争の場合でも通常戦争の場合でも、やるんだ、ということですね。それを裏付けるのが、長沼裁判の時の源田証人の証言です。当時はそういうムードであったということですね。全面戦争を戦うんだ、また、戦えるんだ、ということなんです。ここが問題なんですね。

河野 そういふ問題に関しての、アメリカ側との意見交換というのはあつたんですか。

海原 やつていません。そういうことを説明したら、向こうは「うん」と言つたかもしれませんよ。しかし、合意に達するような話し合いはやつていませんね。それをはつきり言えませんのは、後になりまして、ヘリ空母については、海幕が向こうの顧問団と打ち合わせをやつてゐるんです。ヘリコプターを何機積む、その費用をどうする、ということまで全部話をしてゐた。それは単に在日米海軍顧問団とだけではなしに、ワシントンにまで行つてゐるんです。そういうことをやつてゐますから、あるいはこのミサイルについても向こうとやつていたかもしれない。そこまで私は追及しません。やつたかもしれませんが、その辺が難しいところですね。

要するにボマークに代表されますが、両用兵器、核でも非核でも両方使えるものですね。ナイキはそうですけれどね。ナイキは核弾頭と非核弾頭と両方あるんです。しかし、ナイキの方は核弾頭は使わない、非核弾頭だけで行きますということを言つたわけです。それで乗り切つたんですが、ボマークの方はもつと性能がいいですから、そういう言い方では乗り切れないんです。

伊藤 それは沿海州に届く、ということですか。

海原 そういうことです。国会ではつきりと、日本から沿海州を攻撃するようなものを持たないと言つていますからね。敵の基地を叩くことはあり得ても、こちらから攻撃するようない能力を持たないと言つていますからね。それを覚悟の上でやりますね、と念を押したんです。

伊藤 敵の基地を叩くというのは前から言つてゐるんじゃないですか。

海原 それは言つてゐます。どんな兵器で叩くか言つてゐないんです。

そこが問題ですね。核兵器で叩くかどうかという問題です。叩きようもありますから。勇ましいでしょう、敵の基地を叩くというのは。何をすれば叩くことになるのかわかりませんけれどね。

伊藤 一般的な議論として敵の基地を叩くということは言われているわけですね。

海原 だから「小説」を書いてゐるわけですよ。

伊藤 ボマークを持ち込めば、「小説」ではなくなるといふことですか。

海原 そんなのは、叩けませんよ。撃ち込めたとて相手は痛さを感じませんね。叩くと言つても、平手で叩いたつて痛くないですよ。

河野 ソ連を叩いた場合ですね。

海原 ええ。そこが要するに日本人の専門家の心理過程ですね。いつも司馬遼太郎さんの言葉を引用するんですが、「遺伝的体質」です。敵の基地を叩く。叩くというのはどうすることなのか。やつつけるのか、壊すのか、それとも大砲で撃てばいいのか。全部含めて叩く、と言つてゐます。それで済んじゃうんですね。そういうことを詰めないで来たんですね。

ここでまた昔の話に戻るわけですが、私は兵隊時代の体験がありまして、五分間の射撃で弾がなくなる。一体、それで戦争ができるのかと言つたわけです。その気持ですつと来ていますからね。実戦的に考えるわけですよ。ところが、防衛庁の担当責任者は全然実戦的に考えない。

伊藤 つまり目標を設定して、それに見合う計画を立てるといふことですね。

海原 もちろんそうです。その場合、目標ですね。それが手の届く目

標なのかどうか、ということを検討しろと言うんですね。

伊藤 逆に言えば、その目標を現実の自分の力に合わせて設定しろということですか。

海原 別の言い方をしますと、これは本にも書きましたが、すぐに「できる」と言うんですね。日本人は「できる」ということを言う時には、何かをしたい、しようではないか、やればできる、という三段論法でくるわけですね。

「できる」という場合には、私は三つの可能性を考える必要があると言うんです。まず技術的可能性ですね。そして経済的・財政的可能性、金があるかどうかですね。それから法律的可能性、国内法・国際法ですね。この三つの面でできるかできないかということを検討して、結論がOKになれば「できる」ということですが、その検討を全然やらないうで、それを「したい」と思うと、それが即ち「できる」になる。その間を取り持つものは何か。ことわざですよ。「我に不可能の文字はなし」ということになるんです。これが私が一貫して言っている、この方面の幕僚諸君の考え方ですね。

そこで私は言うんですが、名月についての川柳がありますね。「名月を取ってくれろと泣く子かな」。背中に背負っている子どもが、名月を取ってくれと言うんですね。これが日本の幕僚諸君の気持ちじゃないか。「赤城構想」はそれなんです。その名月は何かというところ、ヘリコプター空母、ボマー、となるわけですね。

伊藤 そうすると、基本的な考え方を覚えて、現実の二次防衛では目標設定を変えていくということですね。

海原 そういうことですね。「赤城構想」を一応ご破算にして、もつと現実的な、具体的な努力目標を決めようじゃないか。自分の現在持

っている力から割り出して、これだけやったらこういふことができる、ということをも十分検討した上で、何をしよう、かにもしようと言っべきであると。簡単に言えばそういうことですね。

河野 ただ、全面戦争があるんだと思っている「制服」の人たちに、それは根底的にないよ、という形で説得することは難しいのでは？

海原 ないよ、というのではなくて、ありますか、と聞いているんです。ないよ、とは言わないんです。

河野 それには、根底的な国際認識を変えないと、先生の考え方に付いて行くのは困難なような気もするんですが。

海原 困難があるでしょうね。

河野 そうすると、制服組が米ソの核戦争も一つの可能性としてあると考えていた背景が、この時期から弱くなってなくなっていくという流れなんですね。それとも、もう少し残っているんですか。

海原 その点は全然検討していません。私はそこまで踏み込んで議論をしないんです。それをすると、彼らの存在の価値を問題にするようになりますからね。彼らは夢を見て楽しんでるんですから。夢を見る分には勝手にどうぞ、お楽しみください、ということですよ。これはなかなか中に入って体験していただかないとわからないですよ。

とにかくし、何度も同じことを言っただけで恐縮ですが、私が入って質問したら、「赤城構想」なるものはガラガラツと潰れちゃったんですからね。壮麗なる御殿ができていたわけです。そして私が一つずつ、これはいいですね、大丈夫ですね、とやっていたら、ガラツと潰れちゃったんです。ということは、そういう点について何も考えていなかったということですね。いま河野先生のおっしゃった言葉で、ぜひ申し上げたいと思うのは、「制服組」と言われたでしょう。「組」

なんかないですよ。これは、何かあると必ず「制服組」「背広組」と言うんですが、私は土建屋じゃないぞ、と言っていたんです。

河野 失礼しました。

海原 「赤城構想」は、制服組も文官組も一緒になって作ったんですからね。だから「制服さん」の独特の物の考え方ではないんですね。

河野 海原先生は時々「旧軍人さん」とおっしゃるでしょう。それは「制服組」に近いんじゃないですか。

海原 「制服組」の中心が「旧軍人」ですからね。そういう意味です。だって、他の人は発言する資格がないと思っっているから。

河野 そういうテクニカルなことに、ですね。

海原 そういうことです。体験がありますからね。要するに「制服」の仲間では、旧軍人さんは、俺たちは専門家だと思っっているわけですよ。

佐道 今のことに関連するんですが、「制服組」かどうかは別として、「赤城構想」を作る一番の中心となったのは幕僚の方々で、それをよく考えずに、内局の方々も、その時にはこれでいいじゃないかという話になったわけですね。

海原 そうです。

佐道 そもそも、先生が主導して最初の長期計画等々を作る時に、統幕の方にこういうものを作るから案を出して来い、という話をしたら、作れませんかと言われたと。それで「統幕から内局に」作ってくださいと言われたという話があったと思いますが。

海原 それは大部分正しいんですが、一部分訂正しますと、「長期防衛力整備計画なるものは内局の防衛局で起案しないで、統合幕僚会議ができた以上は、統合幕僚会議事務局で作るべきでしょう」と言った

わけですね。そういう意味の指令を大臣から出してもらったんですね。それに対して、林さんが「できません」と言ってきた。そういうお話をしたんですね。

佐道 そうすると、そういうプランを作る主導権というのは、その時の話からすると、内局の方にあつて、統幕の方ではないような感じがしたんですが。

海原 その時はそうですね。

佐道 それがいつの間にか、この二次防というか「赤城構想」を作る段階では……。

海原 私がいない時ですから。

佐道 海原先生がいない間に、ということでしょうか。

海原 それもあるんです。お話ししたくなかったんですが、私が二年間ワシントン行っているでしょう。その間に、「海原が帰って来るまでにやっちまえ」という空気があつたんです。その具体例を言いますと、これは証人がいますが、方面隊というのができています。私がある時から、陸上自衛隊は方面隊をつくりたいと言っっていました。そんなものは要らない、と私は言っただけです。方面隊は「中二階」です。実際に部隊が動く時に指揮の単位としては必要でしょう。いちいち東京からやるよりも、北海道とか仙台とかでやればいい。だから方面総監というのは有事の場合につくれればいいと言っただけです。私がある時には、そういうものをつくりたいというのをピシヤッと抑えていた。私がワシントンに行った留守中に、海原がいないうちにやっちまえ、ということをやったという事は、私が帰ってからある席で、当時の幕僚副長をしていた人から聞きました。これは旧軍人です。「いやどうも、お留守の間に」と言っていましたよ(笑)。

佐道 先生が戻って来たら引っくり返されちゃうわけですね。

海原 何の意味もないんですね。なぜかという、私は警察の管区の体験があるでしょう。警察の管区学校というのは、警察における予備警察力を置いておくところなんです。それなりの意味はあるんですが、仕事としては何もありませんよ。中央で、予算から何から全部やるでしょう。それを都道府県に配分するでしょう。管区はただ、ああそうですかというだけの話で、中間機関ですからね。何かある時は警察でも必要なんです。ところが陸上自衛隊に各方面隊をつくって、そこに方面總監を置いて幕僚が付きますと、何もありません。そういう例があります、私のいない間にこの「赤城構想」ができちゃったんですから。だから私がおったらどうなるか、というのは、作る時からいろいろ問題になったんじゃないかな(笑い)。

佐道 それで先生が局長になられて、部下の方、課長とか部員の方と一緒に改めて勉強し直してやったというお話でしたが、その方々が、後にいわゆる「海原学校」と言われたところの生徒さんになられたということですか。

海原 そういうことになりますね。担当は計画官というポストだったんです。一般の世間、新聞等では久保防衛課長がやったと言うけれど、これはそうではないんです。長期計画というのは、防衛計画官というのがあって、それがやったんです。この人を替えて、村上君になってもらったんです。村上君というのは、一次防の時に海堀君がやりましたが、その海堀君に付けておいたんですね。村上信二郎君と言いました、これは大蔵省の有名な村上孝太郎君の弟です。この村上信二郎君が亡くなりました、その息子さんがいま代議士をやっていますけれどね。その村上君に計画官になってもらって、村上君が「赤城構想」を

改めて精査したんですね。それで問題点を指摘した。それを私が一緒になってやった、ということですよ。

それで彼は非常に仕事熱心な男でして、二つの例を言います。村上君の下で働いていた部員さんがいるわけですね。部員が三人か四人付きますが、毎晩遅くなるわけですよ。そうすると奥さんが私のところに来られまして、「主人は毎晩遅くなるんだけど、一体そんなに遅くまで仕事があるだろうか」と言うわけですね。「いや奥さん、それは申し訳ない。私が直接やっているわけじゃないんだけど、村上君は仕事熱心だから、お宅の旦那さんを引き留めて申し訳ない。ほどほどにするように言いますよ」と言ったことがある。

それから各幕を集めてやるでしょう。晩になると夜食を取りますね。防衛庁の前に『龍土軒』という有名な洋食屋があったんです。そこから出前を取るでしょう。毎晩毎晩十数人前の出前が行くけれど、支払いは大丈夫かと言って、洋食屋の責任者が防衛局の庶務に確かめに来たことがあるんです。それで私は「村上君、いい加減にしろよ、毎晩遅くまでやっているよだけれど、ほどほどにしてくれ」と注意したことがあるんです。

それでわかりますように、村上信二郎君が主になって、具体的にやりました。それを私が受け止めて代弁したわけですね。だから「赤城構想」を潰したのは、具体的には村上君なんです。その村上君は、一次計画の時に海堀君の副として付けておきましたから、その時に仕事のやり方を勉強していたわけですよ。だから私は、一次計画は大蔵省から来た海堀君が作ったと。二次計画は村上君が作ったと。私じゃありません。しかし私は、そういうことで表で物を言った、と言っているんですけれどね。それが実態なんです。しかし、こういうもの「冒

頭で配った資料」を私も出していきますからね、名無しの権兵衛で。

そういうように、三、四人が一緒になって、いわゆる同志的結合の下で努力すれば、なるほどできるものだな、と思いましたがね。今の日本の役所の組織でも三、四人が必要ですね。一人では絶対にできませんよ、それは。

三、四人が結合すれば強いということは、私が体験したことで、昔の日本がそうですよ。服部卓四郎、辻政信、瀬島龍三の各氏等もそうですしね。これだけの人でしよう。これは前にお話ししたと思うんですが、アメリカの大使館から頼まれて、アメリカで勉強していた学生が私のところに来た。最初の質問は、「関東軍にいた辻と服部は、ノモンハン事件の失敗の責任者じゃないか。その人がどうして大本営の中枢に居続けたか」ということなんです。困ったですね、私も。これはこの間もちよっとお話ししましたが、「いや、それは日本の社会では、一遍失敗したら、その失敗がプラスになって、二度と同じ過ちはしない、というふうに考える考え方がずいぶん強い。失敗した奴の方が、何もそういうことをしていない者よりは、二度と同じ過ちをしないだろうということで、庇って使うということがある。それから三人ばかりが一緒になると、他の連中は物を言わなくなる。この二つの条件からして、服部、辻というコンビが満州で失敗しているのに、大本営の中枢にいて、馬鹿な作戦をやったんだ」と。そういうことでしょうかね。

私の体験でも言えますね。私と村上君、それからの下の人を含めて、四、五人ですね。どうだ、こうじゃないか、そうだ、やろう、となつてやると、できちゃうんです。そう思いましたね。

伊藤 その作り直した二次防と、ももとの二次防の一番の違いは何

ですか。

海原 それは「全面戦」なんて考えないことです。それからヘリコプター空母を落としました。『沈没』しました。それからボマークを落としました。それから三カ月戦うための弾薬を持つということに対して、三カ月なんて戦えないと私は言った。せいせい一カ月。一カ月は無理だと思わんですが、三カ月と出しているのに、ゼロにはできないでしょう。一週間というわけには行かないですから、二次防では一カ月にした。それが大きな点ですね。

伊藤 先生は前から、補給をもっと重視しなければならぬというお話をなさっていました、今のお話ですと逆のような気がするんですが。

海原 当然そうですよ。そういうことが前提になっている。補給能力もないのに、ということですよ。補給を改めて申し上げようと思ったのは弾のことですね。今でもそうですけれど、弾の話になるとそれだけでも時間がかかるんですけれどね。

伊藤 いいですよ。

海原 いや、その時お話ししようと思ったんですが、要点は、私の海原二等兵の体験ですよ。五分間の射撃で弾がなくなるんです。後はどうするんですか、伊藤中隊長殿。

伊藤 今のお話を伺っていて、それを海原さんはおやりになったと思っただんですが、そうじゃないんですか。

海原 そうじゃないんです。三カ月も戦えるはずないじゃないですか。どれだけ戦う力があるかということです。そういう夢を見ないで、いま持っている力で何ができるかを考えようと。一言で言えば、もともと足が地に着いた現実的な計画を作ろうではないかと。そんな、「お月

様を取って来たい」なんて夢を見ないで、現実で行こうと。それは、この前申し上げましたが、私が制度調査委員会の報告に対して、そんなものは夢だ、しようがないから、ということ増原さんに言ったわけですね。それは内海君が調査課長の担当ですから、ああいう旧陸海軍の人がそういう考え方を持っていることがわかっただけでも大きなプラスかもしれません。しかし、われわれはそれに拘束される必要は毛頭ない、もつと現実的に行こうということでもやりましたから、それなりに私は良かったと思いますけれどね。

しかし、あの制度調査委員会の考え方はその後ずっと生きているんですよ。それで何かあると顔を出すわけですね。要するに現実を考えない。それがいま『防衛白書』の文章に出ているわけですよ。

それで今度また「山形新聞」にこの前の続きを書いておきましたよ。続きとして書いたのは、アメリカから来ていましたアワーという少佐(当時)が『蘇る日本海軍』の中で書いていたことです。このアワーと私は付き合っていたんです。私のことを「先生」なんて言っていましたけれどね。アワーが書いているのは、いま持っている海上自衛隊の機雷八千個でしたか、その半数を敷設可能な状態にするのに六カ月かかると書いてあるんです。いま持っているのは、一般に「ドンガラ」と言っていますが、外側の容器があるだけです、大湊地方隊に。使えないんです。あなた方は、大湊地方隊に機雷が千個ありますと言ったら、すぐにさつと使えると思うでしょう。とんでもないですよ。大湊にあるのは「ドンガラ」です。あれはこの言葉でしょうね。容器のことです。

伊藤 「ドンガラ」というのは、他にも使いますからね。

海原 私が辞書を引いても「ドンガラ」とは出てこないんですよ。こ

の間ある本を見ていたら、容器のことを「ドンガラ」と書いてあったから、ああいいんだなと思ったんです。大湊にある「ドンガラ」を、千葉に民間の火薬工場があるんですが、そこに送りまして、その火薬工場の中に火薬を詰めるわけです。その詰めたものをまた鉄道輸送で大湊に送り返す。それを受け取った地方隊が、機雷によって違いますが、調整をするわけです。そして初めて機雷として使えるわけです。だから、アワー少佐が指摘しているのは、八千個のうちの半数を敷設可能にするには六カ月かかると。そういう状態なんです。この前お見せした『防衛白書』には立派な絵が描いてありますが、それでは、敵が来るところに機雷原ができるはずがないでしょう。昔の昭和五十五年の『防衛白書』には、海上自衛隊の方で、戦力の状態について、後方面、特に備蓄する弾薬等について諸施策が必要であると書いてあるんです。それがだんだんなくなっちゃいました。一体どうなっているのかわからない。まあ、そういう状況なんです。こういうことを言いますと切りがありませんけれどね。

私が一貫して言いますことは、そんな夢を見るな、ということなんです。個人としては夢を見ることが必要だろうけれど、組織として、役所として、国家として夢を見たら悲惨なことにはならないんだ。そういうことをわれわれは体験したじゃないか、ということを新聞にも書いたわけですからね。

伊藤 その二次防で、一度策定されたものを作り直すというのは、どういう手続きでやるわけですか。

海原 手続きと言っても、あれは赤城さんが発表しただけですからね。そういうことで私があちこちやって、今度はきちんとするわけですね。新しく作ったもので、中で決裁を取るわけです。

伊藤 でも前の段階でも、一度決裁を取っているわけでしょう。

海原 もちろんそうです。決裁した赤城さんが発表したわけですから。

伊藤 その一度決裁したものが廃棄になったということですか。

海原 そうですね。しかし、防衛庁としてはまだ案としては残っていますからね。国防会議で決めなければなりませんから。決めるのは国防会議ですから。だから防衛庁としての案ですね。

伊藤 それはあくまでも案なんですね。案を作り直したということですね。

海原 そうということですね。

伊藤 そうすると、防衛局で案を作るわけですか。

海原 ええ、そうです。

伊藤 それから先はどういう手続きになるんですか。

海原 作ってから、今度は国防会議事務局で審議するわけですね。

伊藤 国防会議事務局に持ち込むわけですね。

海原 そういうわけですね。そこで事務局が審議するんです。それで正式に国防会議で決めるわけですね。

伊藤 その過程で、前のものは国防会議まで行ったわけですか。

海原 行ったんです。だから、それを取り戻して差し替えたんです。考え方を改めました、ということでもやるわけですね。

伊藤 その間にどのくらいの期間があるわけですか。

海原 それはいつから勘定するか、ですね。

伊藤 一遍、決裁を防衛庁長官がしてからですね。

海原 それは防衛庁長官が発表していますからね。それから二次計画が決まるまでの間は、どのぐらいかかりましたかな。

伊藤 時間はかなりかかったわけですか。

海原 ええ、もちろんかかりました。

伊藤 そのこと自体は世の中に公になったわけですか。

海原 もちろんなっていました。

伊藤 そうすると、議会などで、これは一体どういうことだと大問題になりますね。

海原 大問題にはなりません。なりませんでしたな。こっちは大問題にしてみたいですけれどね。

伊藤 なるべく触れないように、ということですか。

海原 どうだか。それだけ熱意がないわけですよ。第二次防衛力整備

計画についての閣議決定は三十六年七月十八日ですからね。赤城さんが発表したのはいつでしたかね。

伊藤 三十五年ですね。

海原 発表したのは確か七月か八月頃ですね。

伊藤 では一年ぐらい時間がかかったんですね。先生がお出しになったさっきの書類「冒頭で配付した資料」、「二次計画についての問題（その一、一般的方針）」を見ますと三十六年二月ですから、これから

やり直しとなるまでは時間がかかるでしょうから。

海原 しかし問題点は、項目としては大してありませんからね。考え方の問題ですからね。後はそれを計算していけばいいんですから。

それで間に話がいふ入りましたが、私が局長になりましたのが、十二月の御用納めの前の日でしょう。それですぐに国防会議に行きまして、「今度私が局長になりました。ついては出していた『赤城構想』は引つ込めます。それで来年早々に参事官会議を開いてください。そこで決めてもらいたいことは、『陸』の十個師団（管区隊）を十三個師団にすること、これだけをやってください」と言いました。それは

OKになりました、それを決めたわけです。ただし、それに特別の予算を必要としないという条件を付けまして、十師団を十三個師団に、これは翌年決まりました。

伊藤 予算は要らないわけですか。

海原 ええ、要らないんです。それが条件です。だって、予算書は出していますからね。それをいじるわけにいきませんからね。必要とあれば実行予算でやるよりしようがないわけです。まあ、要らないんですね。十の単位は、いざという時に動かすのが難しいので、十三にするということですね。これはそれなりに了解してくれまして、その時に、とにかく私が全部作り直すから、ヘリコプター空母なんか要らないから、と言って、わかった、というようなことになるわけですよ。

佐道 「赤城構想」で、防衛庁と国防会議の意見が対立したことは？

海原 初めから対立したんです。

佐道 国防会議は、海原先生がおっしゃるような点で反対をしていたんですか。

海原 そうでしょうね。要するに同じことの繰り返しになります。が、「全面戦」の場合も考えて、というようなことは考えられない、というのが国防会議事務局の考え方ですね。そんな大きなことを言ったら、それがいいことかどうかという問題ですね。第一、それだけの力がないじゃないか、いつのことを考えているんだ、ということになるわけです、事務局としては。広岡さんは局長としてもそういうことを言っておられるし、局長の下に三人の参事官がいますからね。それは各省の課長のちよっと上ぐらい、大蔵、外務、防衛から来ている。そういうことで、「赤城構想」では何ともならないということが、防衛局長交替の根拠にもなりまして、それで私が、あれは作り直すと。へ

リコプター空母はやらないということも言って、とにかく陸上自衛隊の十三個師団への改変だけは認めてくれと。ただし予算の増額は要求しないと。それじゃあ良からうということになるわけです。それが私が防衛局長になって最初にやった仕事ですね。

「自主防衛」と「自前防衛」

伊藤 二次防というのはいつからの防衛計画なんですか。当然、予算の問題と絡むわけでしょう。

海原 「書類を調べて」二次防は昭和三十七年から四十一年です。

伊藤 昭和三十六年の七月にできたとおっしゃいましたが、それでも次の年度に間に合うわけですか。

海原 間に合います。決定されましたのは三十六年七月十八日ですからね。

伊藤 今度はそれに基づいて、次年度の予算要求をやっていくわけですね。

海原 はい、そういうことです。ここで予算の話になりましたが、この長期計画は、大蔵省の意向で細かく詰めるわけです。私は長期計画は大体のところを押さえておいて、毎年度の予算で勝負したいじゃないかと言ったんですが、なかなか大蔵省の方はそれを承知しないんです。やっぱり長期計画の時に細かくやるべきであると。

伊藤 ということは逆に言えば、長期計画で決めたものはやるよ、と

いうことになりませぬ。

海原 そうです。ですから、われわれにとつてはむしろプラスですけど、大蔵省との予算の詰めは、やるのが大変なんですよ（笑い）。

それは大蔵省の主計官の補佐のところで作るわけですが、防衛庁の各担当者としては大変なんですよ。細かい詰めをやりませぬから。そこまでやらんでいいんじゃないか、ということになるわけですね。

伊藤 それは、もう一度予算の時にやるわけですね。

海原 そういうことです。三次防の時は二次計画と違ひまして、まとめたものはないんです。時間をおきまして、三回に分けて決めていませぬから。

伊藤 ああ、そうですか、まとまった一つの文書ではないんですか。

海原 ないんです。そういうことでゴタゴタしましたから決められないんですが、最初に決めたのは、「第三次防衛力整備計画の大綱」というものです。これは昭和四十一年十一月二十九日に国防会議及び閣議で決定しました。これは「大綱」です。その次が「第三次防衛力整備計画の主要項目」で、これは四十二年三月十三日に国防会議で決定、閣議では翌三月十四日に決定です。それから「第三次防衛力整備計画の所要経費について」も、やはり三月十三日の国防会議で決定し、十四日の閣議で決定しました。所要経費につきましては、この時はいろいろな経緯があるんですが、「第三次防衛力整備計画の実施に必要な五カ年間の防衛関係経費の総額は、二兆三四〇〇億円を目処とし、上下に二五〇億円程度の幅を見込むものとする」となっているんですね。要するに「目処」という言葉を入れて、上下の幅は、物価の問題もあるんでしようが、二五〇億円。こういうことで、この三つの決定をまとめて三次防と言っているんです。

伊藤 そうですか。では二次防の時はどうなんですか。

海原 それは全部書いてあります。

伊藤 全部一緒なんですか。

海原 一つの決定です。三次防の場合は、もう一度言うのと、「大綱」「主要項目」「所要経費」という決定を別々にやって、これをまとめて一般には三次防と言っているわけですね。だからちよつと二次防とは違ふんですね。そういうことで、その時々々の政治情勢にもよるんですね。

伊藤 以後も、大体そうなるんですか。

海原 その後は、「大綱」が決まった後で「長期計画」はやっていないでしょう。また、この「大綱」が問題なんですね。今までの計画のようなことはありません。大蔵省の方も、防衛庁の方も担当部局が大変ですよ。毎年度予算と同じようなことでやるわけですから。

伊藤 少し話が戻りますが、六〇年安保の問題ですね。ちよつと先生がお帰りになった時には、安保の大騒ぎの真っ直中だったと思ひますが、あれをどういふふうにご覧になっていましたか。

海原 いや、どういふふうに見たかと言われても、ああ大変だな、と思つただけですよ。

伊藤 ああ大変だな、と思われましたか。まあ大したことはない、と思われたのかな、とも思いましたが。

海原 大変だ、というのは、大騒ぎをしているな、という意味ですよ。しかし、どうつてことないと思ひましたね。例によつてやってるな、と思つただけの話です。ですから、どう言つたらいいでしょう。防衛庁としての出勤がどうだこうだという質問が出ていましたが、そういう議論があつたことは事実ですね。それは、いつも出るんです、ああ

いう騒動がある時には。警察は弱い、だから保安隊が出て行け、という話を前に申し上げましたね。ああいう考え方がありましたね。警察が弱いということになると、直ぐに、じゃあ自衛隊を出せとなるのが自民党、国防部会ですよ。私はそんな考え方はあまりにも単純過ぎて駄目だということ、この前お話ししたような例を出してやるわけですからね。結構そう思っている人が多いですね。

安保騒動では、六〇年安保の問題よりは、後の七〇年安保の改定の問題の方が、こんなものかと思つたことがありますね。あの時に、期限を付けないでいくか、それとも期限を付けるかということが問題になるわけです。自民党の各部会、国防部会とか、安全保障調査会とか、外交部会などに私も行きました。その時に私は、どうしてこんな考え方をするんだろうと思つたんですね。それは後で申し上げようと思つたんですが、その時の自民党の関係者は、「十年という期限を付ける」という意見が強かつたんですね。その理由はわかりますか。今の安全保障はどうなっているか、ご存知ですか。

伊藤 十年じゃないですか。

海原 いや、期間はないですよ。一年の予告でもって終わりになるんです。

河野 予告をしなければ、ずっと続くわけですね。十年にすると、また十年経つて更新する時に、六〇年安保と同じことが起きるから十年にしたくない、という声があつたように思います。

海原 いろいろ言われているんですけどね。安保に改めて十年間の期限を付けようという固定延長論者たちは、単純な、どうしてこんな考え方をするのかという理由を言うんです。おそらく皆さん方には考えつかないですよ。それは十年後にはひよつとしたら社会党が

天下を取っているかもしれない、自民党は漸滅の方向にあるので、社会党が天下を取ったら困ると言うんです。日本で社会党が天下を取ったら、アメリカはもうやめようと言うかもしれない。ところが十年という期間を付けておけば、日本で社会党の内閣ができて、アメリカの方は十年の義務に縛られて守ってくれる、というのが固定延長論者の論拠なんです。私は笑いましたね。あなたね、日本で社会党の政権ができたなら、アメリカがそんなのじゃ困ると言つて日本との縁を切ると思うのが間違っている。社会党だつていつ天下を取るかわからない。まず、そんなことには拘束されませんよ。その次に、本当に社会党じゃ困るからと向こうが思つたら、十年という期間があつても、いざという時には、役に立ちませんよと。要するに日本に対する信頼感がなくなつた時だから、国と国としての信頼感がなくなつた時には、条約の上で日本を守る義務を決めていても、アメリカはその義務には拘束されませんよ。あなた方は政治をやつておつて、そんなことは私が説明するまでもなくおわかりでしょう、ということは何回も言いましたね。

当時、自民党だけではありません。一般の旧軍人方の団体で、固定延長論者が多かつたですよ。その連中が私のところに来まして、官房長は固定延長に反対しているそうだが、と言うから、当り前ですよ、と説明したんですが、みんな同じ理由ですね。アメリカを縛れ、と言うんです。条約で十年間日本を守るといふ義務をアメリカに与えておけば、こつちがどうなるともアメリカはちゃんと日本を守ってくれると言う。私は、そんな論理はおかしいと思う。まるで小学校以前の議論じゃないかと言つたんですけれどね。

その時、もう一つびっくりしたのは、増田甲子七さん、後の防衛庁

長官でタカ派ですね。増田さんが言っていることを聞いてびっくりしたんですけれどね。前にも話しましたが、安保改定で固定延長にするか、今までの自動延長でいくか、それを決めるのは七〇年だが、その時の治安状態の判断が必要であると。その治安状態の判断は誰がするか、最高検察庁の検事総長がやるんだと言うんですね。こういう議論を増田甲子七閣下がやるんですね(笑い)。増田さんと言えば、内務省の大先輩ですけれどね。どうして検事総長が判断するんでしょう。そういうことを言うんですよ。

まあ、いろいろな議論をする人がいましたね。私は無意味だということと言った。当時の外務大臣の小坂善太郎さんも海原君の言う通りだということで、私の言うことを信じてくれました。その結果、結論は自動延長です。今では、もうやめようと言えば、一年後に終わりになるということで、いわゆる自動延長になっているんですね。あの当時は自動延長か固定延長か、固定延長にしてアメリカを縛らないと将来心配だというのが、日本の政界の一般的空気でした。これは今の落ち着いた時に申し上げても、ご理解いただくのは難しいんじゃないかと思うんですがね。そういう時代でしたからね。

伊藤 では、六〇年安保の時には、あまり関心がなかった？

海原 私はアメリカから帰ったばかりで、騒いでいるな、と思っただけです。そうすると、役人というのはきわめて冷淡なものでして、私の守備範囲じゃないですからね(笑い)。私は私の人生観で、自分のできることとできないことを確かめて、自分のやるべきことだったら悩まないといけません、守備範囲じゃなければね(笑い)。そんなことと思えば真面目じゃないです。

伊藤 次に、一九六一年の衆院予算委員会で西村防衛庁長官が「防衛

費は国民所得の二%前後が目標だ」という答弁をしたことについてですが、これは戻られて二次防の洗い出しをやっている頃でしょう。

海原 「二%」のことですね。これは私もちょっと調べてみましたが、もちろん当時知りませんでしたし、今度調べてみてもはつきりしませんね。岸・アイク会談の時に、アメリカ側が各国の国防費の割合を出しましたし、私に対しても質問があったことは、この前申し上げたと思います。まあ、ああいうことで、日本があまりにも低いという指摘がありました。ただ、二%がいいという、その根拠はわかりません。西村さんが言ったんですが、誰からかそういう入れ知恵をされたんでしょうね。その他は、坂田(道太)さんの時に「防衛問題を考える会」ができて、そこでもいろいろパーセンテージを問題にしています。私はパーセンテージというのは結果として出てくるものであって、それならいいという目標にするのはおかしいという考えです。

それから、「自主防衛」ということを私が言ったという質問がありますが、私は「自主防衛」という言葉は使ったことがないんです。むしろ「自主防衛」ということを批判していったんです。その場合の「自主」というのはどういうことかと、いつも言っていたんです。それを政治家が特に使っていましたね。じゃあ今の防衛は何ですか、「他主防衛」ですか、と言ったんですね。その「他主防衛」というのは、アメリカに依存している、おんぶにだっこだということかもしれない。私は「自主防衛」という言葉を批判していましたから、私自身は使った覚えはないんです。私は、だんだんアメリカの対日援助費がなくなってくる、したがって、日本側の負担が当然増えていく、自前の金だんだん増えていきますよ、ということには言ったかもしれません。自前で出さなければならぬ分が増えてくるということを、「自主防衛」

と記者が受け取ったかもしれないけれど、この記事は私は記憶がありません。今度図書館に行つて調べてみようと思います。むしろ「自主防衛」なんていう言葉は曖昧な言葉で、使つてはいけないという意味の論文を私は書いておりますから。

佐道 海原先生が「自主防衛」という言葉を使われた場合、自主防衛とは何だろうか、と思つて「質問項目に」書いたんですけれどもね。

海原 これは私は全然覚えがないんですけれども、あるいは「自前防衛」というようなことは言つたかもしれないですね。自前の金です。というの「赤城構想」などを読んでみましても、あの時はアメリカの金を引つ張り出すことをずいぶん考えているようですからね。そんなことは無理だ、だんだん日本も経済力がついてきたんだし、自前の支出が増えてくるのは当たり前かと言つた覚えはあります。しかし、「自主防衛」ということは言っていないと思うんですが、今度調べてきますけれど。「自前防衛」と言つたのが、そうなつたのかもしれないですね。

伊藤 国防会議の議員懇談会というのは何なんですか。

海原 国防会議議員懇談会というのは、実は国防会議なんです。ただ国防会議のメンバーが集まつて会議をやるんですが、これは慣習でして、そこで何かを決める時には国防会議という名称を使つて、例えば二次防衛を決めるとか。それ以外に集まつた時のことは国防会議議員懇談会と言つて、ちよつと格が下だということですかね。事実上、集まつて相談した。国防会議の議員さん方が集まつて話をしたというのが、いわゆる懇談会であつて、正式に政府の閣議で決定する案を決めた時に国防会議と言つています。

伊藤 閣僚懇談会というのと同じような言い方ですね。

海原 そういうことですね。それは私も、何もそんなふうに分けなくてもいいじゃないかと思うんですけど、そういうふうには広岡さんの時からなっていますから、ああそうですか、ということになるわけです。

伊藤 その次の「質問項目の」基地問題はどうか。これはアメリカ軍の基地の問題ですね。

佐道 そうですね。これはアメリカ軍の基地に対する騒音だとか、いろいろな問題がありましたね。

海原 これは私は関係ないです。もつぱら防衛施設庁の関係です。私にはなるべく自分の守備範囲に関係のないことは言わんことにしています。

伊藤 わかりました（笑い）。

海原 私の守備範囲のことはしようがないからやりませうけれどね。それ以外のことは言つてみてもしようがないし、そういうことを言つていると、評判が良くないですからね。

伊藤 では、その次の「質問項目の」防衛装備国産化懇談会というのは、どういうものですか。

海原 これはもつぱら政治的なものですね。

伊藤 これは関係ないんですか。

海原 これも関係ありません。ただ、防衛装備懇談会に行つて、私も話をしたことはあります。これは、もつぱら経団連の関係ではないですかね。私は経団連の団体の関係で言ったことがあるんですが、それはあなた方国産、国産、とおっしゃるけれど、その時考へてもらいたいことは、一体国産とは何か、です。前にも申し上げたと思いますが、本当にできるのか、という問題です。要するに、「ライセンス生産で、

向こうさんの設計図を借りて、その通り物を造ることが国産なんですか。最初はそうだけれど、後は自前で物を造るんですか。そのためには時間がかかりますよ。よそで十年かかってやったものを日本で一年でやろうと言っても、それは無理な話だ。あなた方は国産ということの内容について、どういうことを考えておられるか。本当にあなた方が兵器の国産を考えるなら、あなた方の会社が関係している商事会社が、きれいなパンフレットを作って、防衛庁の陸・海・空の幕僚のところに行つて宣伝するのをやめさせなさい。例えばアメリカの物がすぐできるわけじゃない。アメリカの兵器はそれなりの歴史がある。それを急に日本だから、日本人は器用だからすぐできると言う。あなた方が本当に兵器の国産をやりたいと思うなら、これがいい、あれがいいと宣伝するのをやめさせなさい」と言ったことは覚えていますね。

伊藤 それはどういう意味ですか。パンフレット云々というのは？

海原 例えばナイキはこういうものですか、ボマークがありますとか、みんな商社が持つて来るんですよ。

伊藤 それはそうでしょうね、売り込みですからね。

海原 だから、それをやめさせなさいと言うんです。売り込みをやめさせないと、あなた方が考えている装備の国産はできませんよ。国産にしたら、性能が落ちることは決まっていますからね。これは、この前申し上げましたかな。田中内閣の時にその話が出まして、中曽根さんが通産大臣で「国産、国産」と言っていたでしょう。だからみなさん、何でも国産できるなんて大間違いだよ。いわゆるサイドワインダーの国産についても、数年間日本の会社がやっているけれど、日本で国産しようとしている兵器は、同じ性能のものではありませんよ。アメリカから買って、いま使っているサイドワインダーよりも能

力が落ちる。それで価格は六倍ぐらいいちますよ。それを国産だからと言つて造るんですか、と言つたことがあるんです。そういうことを言いました。だから、何を造るか、「国産」という言葉に酔つてはいけませんよ、と言つたことは覚えていますが、その程度のことですね。

これは自民党の国防部の、当時は保科善四郎さんですか、あの人もなんか中心になってしきりに言っていましたね。何でも国産だ。だから三菱と川崎と両方でミサイルを造れとか、そういうことを決めているんですよ。また、それに踊る人もいるわけです。岸さんのところに連絡に行く人もいますね。ですから、この辺のところは、私は、みなさんがやっているな、と思つている程度です。この辺は主として次官と官房長の仕事ですからね。私はできるだけ発言をしないことにしていたんです。

原子力潜水艦の寄港問題

伊藤 その次の質問項目「調達庁と建設本部を合併し防衛施設庁設置が決まること」も、そんなものですか。

海原 これも私は直接関係しません。しかし、これはもともとご存知のように、終戦連絡事務局関係で、調達庁は公法人で発足したんですね。進駐軍の関係です。ここには組合がありまして、進駐軍労組みたいなものです。基地のある各府県にありまして、その関係でできたわけです。最初は公法人だったんですよ。それが今のままではいけない

からということ、どこかがちゃんとしたものとして受け取るということ、外務省か労働省か、と言って、最後は防衛庁になるわけですよ。防衛庁も嫌がりましたが、しかし一番関係があるんですから。それで防衛庁が引き受けて一緒にやるわけです。

ところが、中における人々は、当時みんなが悪口を言うんです。いわゆる満州浪人で、満州から引き揚げた人が多かったです。それは、例えば華北交通（株式会社）などにいた人たちです。支那にありますね、ああいうところの満州とか支那におった人が引き揚げて来て、ここに入ったんです。それは当時のことです。"引き"もあつたんです。だから、満州帰りが多かったんです。それから労働組合が強くて、総評に入っていました。それが今度は防衛庁に来ることになりました。

これは直接関係がありませんけれど、会議の席で出た話をご紹介しますと、当時の官房総務課長が、「今度、調達庁の連中が防衛庁に来ることになった。ついては、あの連中は労働組合でも進駐軍労組で左の先鋭な方だ。赤旗が立つ。この防衛庁の中でそんな赤旗が立ったり、赤旗を振られたら困る」と言うんです。それは困るでしょうな。どうするか。総務課長が言うんですよ。堀、垣根を作ると言うんです（笑い）。ここまでは防衛庁、ここから先が施設庁と。それを会議で言うんですよ。「ちよつと待て（これは正式の防衛庁の会議ですから）、それはないだろう。防衛庁の外局であっても、防衛庁の職員になるんだから、温かく抱きかかえなければしょうがない。それを、お前さんは俺たちとは違うんだと言って垣根をわざわざ作るなんて、そんな馬鹿なことが考えられるか」と言って、僕は怒ったんです。大きな声を出して怒ったのは、その課長さんは警察の後輩で親しいものですから。

高等学校も私の後輩ですし、「おい、そんなことは冗談にしておけ、冗談も休み休み言え」ということで収まったんですが、そういうムードでした。それは一般の人は、あいつらが来て、労働組合の連中に赤旗を振られたり、六本木の防衛庁の構内でメーデーの歌を歌われたら困るといふ感じを持っていました。厄介者が来るという感じがありました。それを代表するのが垣根を作れという案ですよ。それを私が抑えたことは、会議ですから知れ渡りまして、私は調達庁の人には評判が良かったですよ（笑い）。

そういう空気でした。それでわかりでしょう。厄介者扱いされたんですよ。かわいそうですよ、そんなことは。しかし中央でまともに世話をする人がいないということで、防衛庁に来たわけですね。それは満州の引き揚げ者が多かったということです。そういういろいろなきがあるんですよ。思いもかけないことを考える人がいますね。

佐道 実際に、その赤旗が翻々と翻することはあつたんですか。

海原 いや、ないですよ。あり得ませんわ。そういうものだと思ひ込んでいます。それは赤旗が乱舞したんじゃないんです。あせん。何も赤旗が乱舞するようなことをしなければいいですね。あいつらが来たら乱舞するに違いないと思ひ込んでいますからね。「おいおい、それは一緒にやるかどうかの前の議論であつて、防衛庁に来ると決まったなら、それは今までの経緯も全部捨てて、温かく迎えてやるべきじゃないか、それがいわゆる日本の古来からの武士たる者の考え方ではないか」と言って、説教したことを覚えてますよ。それが会議ですから、伝わるんですね。だから私は施設庁の連中からは好感を持たれた。

その時に一緒にしてくれと言うことで、私らのところに陳情が来ま

すね。その時に陳情に来た奴が言ったことは、二等級の役職がこれだけある、これだけ増えますよ、ということをやったと思えますね。結構優遇されたんですね。局長クラスのポストが増えるんです。どうしてそうなるのか知りませんが、特別調達庁、後の調達庁ではこれだけ二等級のポストがあります、それだけいいじゃないですかと、そんなことを言いに来る人がいましたね。困った立場に立ちますと、いろいろなことを考えるんでしょうね。

伊藤 これはしかし、外局の外局になりますね。庁の下に庁があつて。

海原 それはおかしいですよ。

伊藤 これは他に例があるんですか。

海原 知りませんね。当然今度の行政改革で省になると思っていましたから。これは前にも申しましたように、防衛庁を省にするのは政治家の責任だと言つて佐藤総理が大見得を切つたんですからね。その前から、もう砂田さんの頃から「省昇格」が出ているわけですね。そういうことを言つていて、やらないんですからね。

伊藤 どこで引つかかるんですかね。

海原 わかりません。要するに、庁を省にすることの意味がよくわからない面がありますな。なぜ最初に庁にしたかということですね。規模から言えば、当然省ですよ。それを庁にしたのは、いきなり省にすると旧軍の復活を考えているように言われるからですかね。しかし砂田さんの頃からすでに、本来省であるべきだと。それは、庁というのは「中二階」ですよ。「中二階」の存在であつてはおかしいという意味で、真面目な意味での省ですね。そのうちだんだん、庁の下に庁が付くのはおかしいとなつたり、かわいそうだとか、変な意味が付きましてね。もともと庁がおかしいんですが、保安庁の庁がそのまま

残つたんでしょうね。私はそう思いますけれどね。警察予備隊ができて、それが保安庁になつた。その時にいきなり省にするのは、おかしいと。それがだんだん大きくなってきたから、この辺で省になつてもいいんじゃないかと。これは自然発生的な、蛹がどうなるかということと同じだと思ふんですけれどね。

佐道 防衛庁ができたあたりは、例えば自治庁が自治省になつていますね。

海原 だから、本当に継子扱いされている感じになるわけです。防衛という仕事汚いものだ。こんなことを言う問題になります。汚い仕事をやっているのがお前たちだということになるかもしれない。予算規模から言つても、人員から言つても、自治省なんて、あんなものが省ですからね(笑い)。これだけの国家予算をもらつて、人間もいるでしょう。しかも、事柄は国家の防衛なんですからね。本来、当然省であるべきだ、省にならないのがおかしいということを言わないんですな。今まで虐待しておつた、済まなかつたと言えはいいと思ふんですけれどね。済まなかつたということでは省にしよう、特別に軍事大国化だとか何とか、すぐそつちに行つちやいますね(笑い)。だから、これはわかりません。わかりませんが、われわれは砂田さんの時から聞いていますからね。それから佐藤さんが防衛大学の学生にそう言い切つたから、当然なつては思ふんです。ところが、だんだんしぼんで来ちゃつた。この辺がわかりません。私は日本の政治家の政策とか理念とか、いろいろなことをおつしやいますが、こうすると言つておきながら、それを決めない。そのこと自体おかしいと思ふんですが、ことほど左様にデリケートな問題なんですかね。

伊藤 大体、国防というのは国家にとって致命的なものでしょう。そ

それが省でなくて、何で庁であるのかというのがよくわからないんですけれどね。

海原 そうですね。どこで判断するかという問題ですよ。行政管理庁ですか、法制局ですか。誰が決めているんでしょう。しかし三度も四度も同じことを繰り返して恐縮ですけど、総理大臣の中でも割に力があると見られていた佐藤栄作氏ですら、防大でそういうことを言明したことを忘れるんですかね。どうなんでしょう、そういう人であると困るんですね。

伊藤 反対する人がいるんですね。防衛庁を省にすることに抵抗があるんでしょうね。やっぱり、さっきの軍事大国云々ですよ。

海原 話が出ましたので言いますと、軍隊と呼ぶかどうか、今でも問題にしている人がいますね。しかし木村さんの時に答弁しているんですよ。私が木村さんに話して、国会で答弁してもらったんですよ。というのは、軍隊というものの定義はないんですよ。何を軍隊と言うか。それは国家を代表して、国家権力を行使する制服を着た集団を軍隊と言うなら、当然軍隊だと。そういうふうには木村さんに答弁してもらったんですよ。その時以来、自衛隊は軍隊と言うのなら軍隊だと言っているわけですから。だから何で今更そういう言葉をたしなむ半面、情緒的になりませんか。どうも日本人というのは俳句をたしなむ半面、情緒的な言葉の選択で神経を消耗するんですかね。自衛隊は軍隊だと言うのが、またちよつと問題になっているでしょう。当り前のことじゃないですか、と言うんです。木村さんに言ったら、それはそうだと言ったんですからね。

私が「軍隊の定義はありません。国家権力を代行して武装して武力を使うのが軍隊ならば、保安隊は軍隊ですと言ってください」と言っ

たら、「うん、いいよ」と言ってやってくれたんですよ。だからもう木村保安庁長官の時から、自衛隊は軍隊なり、なんですよ。これが後になって、言葉が問題になるんだから。

伊藤 でも、その時は問題になったわけではないんでしょう。

海原 何も問題にならない。「私見によれば」と彼は言いましたけれども、「軍隊であります。軍隊についての国際的な定義はございません。これは解釈の問題で、国家権力を代表して武力を行使するものを軍隊と言うならば、保安隊は軍隊です」と、はっきり言ってもらったんですよ。当時の新聞にも出ています。それがまた今頃ゴタゴタ言っているでしょう。その辺がどうもわからんですね。俳句の言葉の遊びみたいな気がしますけれどね。

伊藤 その次に原子力潜水艦の香港問題なんですが、この問題もあまり関係のないことですか。

海原 これは関係があったんですよ。というのは、まず国会で、原子力潜水艦というのはどういうものかという質問があったり、サブロックの問題もありましたね。外務省や原子力関係の人といる国会で答弁させられましたからね。それで現地、佐世保にも私は行きました。それで市長にも会って頼んだんですよ。簡単に言いますと、原子力潜水艦は原子炉を使っているから大変危険であるとか、原子力潜水艦が入ってくると海が汚染されて、汚染度がどうか、一時新聞で騒ぎましたね。私は言ったんですよ。「アメリカはニューヨークの川に入ってきていますよ。そばで子どもが魚を釣っていますよ。関係ないことなんだ。日本人が騒ぐ以前に、アメリカの人だって敏感なはずなんだから。悠々とアメリカ、イギリス、フランス等が使っているものが、日本の港に入っただけでどうしていけないんですか」と。そうしたら、

最初は汚染されるということですよ。だから、汚染度を測れとか騒いだでしょう。講演に行ったりしましたよ。そういう面では外務省の安川君が担当者で、私は防衛庁を代表して話に行きました。

佐世保の市長さんは、いい市長さんでしたね。あの方がずいぶん理解されました。最初にあそこに入れましたのは、横須賀では東京に近過ぎるんですよ。「騒ぎが大きくなるから、済まんけれど、九州の佐世保に来てもらうから」と言いました。九州で騒いでも大したことがない。「しかし、同じ騒ぎが横須賀で起こったら蜂の巣をつついたようになるから、これだけは市長さん、申し訳ないけれど、もともと佐世保というのは昔から軍港で、こういう面と関係があるんだし、入ってくるものもおかしなものではないんだし、これを機会に佐世保との関係も出てくるだろうし、基地問題でもプラスになると思うから」と話したんです。そうしたら、それはよくわかりましたと言って、まず市長さんがOKをくれたんです。それで良かったんです。

最初の船が佐世保に入った。その佐世保に入った潜水艦の艦長は、ユーモアを解すると思いましたね。あの時見ましたら、大きな垂れ幕で、「熱烈な歓迎ありがとう」と書いてあったんですよ。それは反対派の連中が小舟に乗ったりしているでしょう。だから、日本人の熱烈な歓迎に対して謝意を表すと言う。これは誰が知恵をつけたか知りませんが、面白かったですね。そういうことがありました。

私は、実はアメリカに志賀（健次郎）さんのお供をして行くでしょう。その時に帰りにハワイで、こちらから希望して、アメリカの原子力潜水艦に乗せてもらったんです。それは、こちらが希望したんです。志賀さんが行くについては、その二代前の西村さんが防衛庁長官の時にアメリカに、一遍アメリカの主立った軍事施設を見せてもらいたい

と。日米同盟の仲間であろうと。未だ誰も保安庁長官、防衛庁長官は招待されていないということで、西村さんの時に申し込んだんです。これは西村さんから直接聞きました。西村さんの時に申し込んだものが、志賀さんの時に、どうぞいらっしやい、となったわけです。それで、私が随行で行くわけです。

その時にあちらに行くについては、原子力問題ももちろんあるわけです。それで帰りにハワイで原子力潜水艦に乗るわけです。われわれは乗って、艦内に降りて行って、長官も私も交互に操舵輪ですか、あれを触ってみましたですね。軽いものですよ、車の運転よりも障害がありませんからね。ちよつと触れると上がったり下がったり、非常に軽く動くんですね。そういう体験をしました。その時の潜水艦の艦長が言った言葉が未だに忘れられません。「この艦内は地球上もとても清潔なところである。温度といい空気の汚染度といい、地球上これほど清潔なところはありませぬ」と言ったんですね。なるほど見てわかるんですよ。

その時、ハワイのアメリカの潜水艦隊司令長官が迎えに来まして、艦上で私に話しかけたんです。英語をしゃべるのが私だけなものですからね。彼は「一体いつ入れるか」と聞くわけです。いつになったら日本はわれわれを受け入れてくれるかと言われましたから、「それはあなた方がそう思われるのは当然だ。しかし日本人は、まだわれわれのPRが足りないせいもあるけれど、原潜を怖いものだと思っている。そんなものではないということ、私自身も佐世保に行つて市長に会つて話しているところだから、時間をもつと欲しい」と言ったんです。「どのぐらいか」と言うから、「そうですね、一年は必要だ」と言ったら、「そんなにかかるか」と言うから、「そのぐらいかかるんだ。」

しかし一年以内で何とかできると思う」と言ったことを覚えています。向こうでも気にしているわけです。

国会でも気にしています、「なぜ原子力潜水艦を入れなければいけないか」と言う。私が答えたんですが、「アメリカの海軍の演習については、必ず原子力潜水艦と一緒に来ている。日本の南の方で演習がある。演習が終わって、さて一般の船はどこに行くか。佐世保か横須賀に行く。その時に、一緒に演習をやっていた原子力潜水艦に、お前だけは駄目だよと言うのは、これはどうでしょう。彼らにとっては、横須賀や佐世保の灯火が恋しいんだ」と。そうしたら笑っていましたけれどね。新聞にもちよつと出ました。「私も軍隊生活の体験があるから、演習が終わった後は、ひとつ、くつろごうと思う。他の連中はみんな横須賀、佐世保に行く。ところがお前さんだけは駄目だとなる」と、これは士気の上から言ってもおかしい。なぜ日本人は自分たちだけを除け者にするんだ、と思うだろう。そういうことです」と言っていました。だから、横須賀と佐世保の灯火が恋しいんだと言ったら、その通り新聞に出ていましたけれどね。

そんなことで、もっぱらこの問題に関してはPRをやりました。それでアメリカの原子力潜水艦が入って来ましたけれどね。私がアメリカの艦隊の司令長官に約束した、ちようどぎりぎりの期限ぐらいでした。要するに怖いとか、海が汚染されるとか、そういうことで反対なんです。だから困りましたね。特に学術会議の連中が反対するんですね。あの先生方はどうということなんでしょうね。

伊藤 いや、あれは共産党系ですよ。

海原 私は昔、先生と言えば偉い人だと思っていましたからね。

伊藤 いや、先生と言われるほどの馬鹿じゃなし、と言っているじゃ

ないですか。

海原 いや、あの頃の学術会議は結構反対運動がありましたよ。平気で言いますからね。私が尊敬していた末川法学博士まで反対論を展開していましたからね。その理由が納得できないんですね。危険であるとか、海が汚染されるとかね。そういう事実があるのかと聞くと、黙っちゃうんですね。だから先ほども言いましたように、何か俳句でも作っているような感じで、言葉の感じですかね。そういう情感で左右されるようなものですから。いろいろ関係はありますが、そういう側面的な運動をしていたということですね。

佐道 外務省の担当は安川さん、とおっしゃいましたが、北米局ですか。

海原 そうです。当時安川はアメリカ局長でしたな。その前は課長で、名前は忘れましたが、担当でした。安川とはご存知のように一高以来の友人ですから。

伊藤 では、その次に、ロッキードF104の問題ですね。

佐道 ここはきつと長くなると思いますね。

伊藤 それでは、これは次回にしますか。

海原 用意はしてありますが、ここ「質問項目」に、時系列的と書いてあるのはどうということなんですか。

佐道 順番にということですか。

海原 年次別に、ということですか。ちようどバッジが六二、六三年頃でしょう。FXというのは、六八年とずっと後になりますからね。それから、これは私が官房長になってからですが、怪文書が出たんです。これは面白いですよ。私を罷免しろという世論調査をやっているんですよ。葉書を今度持って来ますけれどね。海原官房長とはこう

いう悪い奴だから、あなたは罷免に賛成するかどうかという葉書があるんです。その葉書が、私のところまで送られてきたんです（笑い）。小名（孝雄）というのはある意味では面白い男ですね。びっくりしましたよ。

佐道 ペンネームが北郷源太郎という人ですか。まだ『軍事研究』に書いていますよね。

海原 北郷ですね。まだやっていますね。彼は初めは、あの雑誌に私のことは良く書いてあったんですよ。それが海原けしからんと書き出したのは、秦野君が警視總監の時に、ああいうものをみんな抑えたからなんですね。人物評を書いて、何課長はどうだこうだ、将来どうだとか、そんなことをしている雑誌を全部ストップしちゃったんですよ。各省庁の購買部で売らせない。それを聞いたものですから、私も『軍事研究』を売らせないことにしたんです。それを恨みに思って、それ以来私の悪口を書いているんです。

佐道 そういう経緯があったんですね。

海原 それまでは私のことを若手だけれど堅実であるとか、誉めてくれていたんだけれどね。一切そういうものは防衛庁の売店では売らんじゃない、ということにしたんです。それから私の悪口が始まった。ところがこれには付録がありまして、私の同期の者が「調本」（調達実施本部）におったんですが、そいつが役所の金で私の悪口を書いてある本をだいぶ買い込んで配っていた。いろいろ、こういう社会部的な話を言い出すと切りがないんですよ。

伊藤 いや、是非そういう話も（笑い）。

佐道 それも含めて、次回はこちらと長いと思いますので。

海原 今度はどの程度お話ししたらいいですかね。

伊藤 いや、詳しく話してください。

海原 こんなことを話していいのかな、と思うんですけれどね。例えば、いまちよつと志賀さんの話が出たでしょう。あと二次防から三次防になるわけですね。その三次防の基本構想とか内容とかはいいんですが、なかなかややこしくなりますのは、大臣が全部替わっているんですね。松野（頼三）氏がなるでしょう。ところが三次防になる前に三矢研究が入ったんです。あれに、私はかかりきりになったんです。ですから、三次防の準備作業は、私は官房長ですから関係しません。私が三矢研究に関係したのは防衛局長の時なんです。なぜ私が防衛局長として答弁することになったか。あれは三矢研究であって、計画ではないんです。岡田（春夫）さんはあれを計画と称したんです。研究ですと、これは教育局長の担当になるんです。防衛局長は関係ないんですよ。私の担当は防衛の基本ということでしょう。装備の基本、行動の基本。だから本来なら私が答弁することになるわけがないんです。それがなぜ私が矢面に立ったか。今、いいですか。

伊藤 いいですよ。

海原 それは河野一郎さんが当時無任所の国務大臣でしたかな。彼から防衛庁長官に連絡があって、こういう時に役所の各局長、政府委員が担当ごとに答弁していると、答弁が食い違う恐れがある。だから一人にやらせる。ついては、海原がいいと言ったわけです。私は防衛局長としては関係がない。ただ、私の下におった久保防衛課長がオブザーバーとして参加しているんですよ。それだけのことなんです。ところが岡田さんも、あなたの所の課長が行っているのだから局長も知っているはずだろうと言う。久保君はオブザーバーで行ったわけです。それで私になっちゃった。本来なら担当者は教育局長なんです。そ

れが私一人が矢面に立ったんですから、それにかかりきりになっちゃったんです。

だから三次防の方は、官房長になりますと、私は関係しないことにしたんです。ということは、私に加藤さんの後でやった経験がありますからね。防衛局長から官房長に移ったら、発言しないと決めました。三次防のやり方については、見ていたんです。だから三次防の時のこととはあまり言えませんが、横から見ていることでよければ申し上げます。

伊藤 お願いします。

海原 その辺のところ、この次の前段としてあるんですね。三矢研究にかかりきりだったんです。

伊藤 その話も是非お聞きしたいと思います。

佐道 先生の防衛局長時代というのは四年半以上あって、他の方よりもずいぶん長いんですね。

海原 ええ。

佐道 ですから、防衛局長時代には三矢研究以外にもまだいろいろなことがあると思いますので。

海原 いやいや、そういう思い出話になりますと、だんだん切りがなくなるんですね。整理してきますと、次から次に思い出すんですね。

佐道 思い出していただくためにいろいろと伺っているんです。

海原 それは私にとってプラスになるんですけれど、皆さん方の何の参考になるかなと思うと……。

伊藤 心配しないで、長い目でやっていただければ。

海原 そうですか。ではそうします。この前、石原慎太郎の核武装論を言いましたか。言いませんか。

伊藤 伺ったような気がします。

海原 あの人がその後どうであったかという問題があるんですが、私が『諸君』に反論を書いたことは言いましたかな。

佐道 石原さんが言って、それに反論を書かれたということは言われませんでした。

海原 例えば『自由』という雑誌に彼は書いています。だから、こういうことをなぜ新聞記者は質問しないか。これは一九七〇年十月号の『諸君』に彼が書いた「非核の神話は消えた」というものですが、それに対して私は「消えていない、彼の言い方は間違っている」ということを書いたんですね。それに対して、一九七二年の『自由』という雑誌ですが、これに石原慎太郎さんが、この時は国会議員でしたが、「『防衛』の発想転換の要件」というものを出しているんです。自由民主党参議院議員ですね。その中にまた出てくるんです。ご参考までに私の関係のところでは「『自由』一九七二年五月号二八〇二九ページのコピーを配る」が、こういうことを言っているんですね。「そのいい例が、私の嘗ての日米核戦略論に対する防衛庁の海原氏の、多分に道義的観念的な反論であったと思う」と、これで片づけられているんです。私は別に観念的ではなくて、むしろ彼の言っていることが観念的だと思うんですがね。依然として、まだ彼も核武装論者なのかどうかですね。ああいう政治家の言うことはよくわかりませんね。ということをご参考までに。

伊藤 これはいずれ後で話が出てくるわけでしょう。

海原 そういうことを話してよければ申し上げますけれどね。あの人の事務所にも私は二、三回行ったことがあるんですよ。だから個人的には好きな人なんですけれど、どうもあの人の思想はわかりませんな。

伊藤 はい、大変勉強になりました。こういうもの「二次計画についての問題（その一、一般的方針）」などが出て来ましたしね。

海原 こういうものを出すのは、なかなか勇気がいるんですよ。しかし私たちはこのまま行くといかな、ということがありましてね。

伊藤 そこまで是非話してくださいよ。

海原 今はもう諦めの境地ですよ。

伊藤 諦めにしては、いろいろおっしゃっているじゃないですか（笑い）。

海原 いや、言いながら諦めているんです。坊主がお経を読んでいるようなものですね。それで最後に、ご参考までにいかに専門家なる者がいい加減なことを言うかという例です「毎日新聞・昭和二十五年二月十九日夕刊「国鉄が『飛行列車』の夢」の記事のコピーを示す」。知らないでしょう。これはちよつと拡大したのですが、昭和二十五年です。東京―大阪間三時間、こういう列車を造ろうと言ったんですよ。

伊藤 いいじゃないですか、新幹線ができたから（笑い）。

海原 ですから、笑い話じゃないですか。専門家と称する人々がいかにも現実的なことを言うかということの一例ですよ。伊藤先生、これをご存知ないでしょう。

伊藤 僕は全然知りませんけれどね。まあ、現在では百の非常識なことを研究して、一つぐらい当たるといふことですから、それは笑えないですよ。

海原 しかし、これはひどいですよ。私が新聞記者なら、この構想がどうして新幹線の構想に変わったかを調べたいですね。いま私が個人としておかしいなと思っているのは、リニアモーターカーですよ。あ

んなものを実験場を造ってやっていますけれど、あれを実用化するのにどれだけ金がかかって、効果は何だと。一時間で大阪まで行くことに何の意味があるかと。しかも、「狭い日本、そんなに急いでどこに行く」というわけですからね。

伊藤 いま一所懸命、奥野誠亮さんがやっているじゃないですか。

海原 どうですかね。まあ、余計なことを言いましたが、そんなことですね。

佐道 また改めて質問項目をお送りします。

伊藤 どうもありがとうございます。

海原 いや、だんだんしゃべっているうちに腹が立つてくることもあるんです。代表が松野氏です。あんな人が長老になっているんだから困っちゃうんですね。ちようと、三次防の時ですね。三次防の時にずいぶん長くぐたぐたしましたのは、彼がローリングシステムなんて言い出したんです。あの人は「佐藤四奉行」の一人と言われていたでしょう。そこで三次防の総額については、俺と大蔵大臣と総理と三人で決めると言ったんです。役人としては、大臣がそう言う、ああそうかな、と思うでしょうね。それに従って行動しないといけないでしょう。しかも、彼はローリングシステムをやると言うんです。誰が知恵をつけたんでしょうね。それは六年計画にして、三年ごとに見直すんです。何の意味があるか知りませんがね。そんなことは実際問題としては難しくなる。また、そういうのに仕えるわけです。話し始めると切りがないので、それではこの次はここからやります。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第14回

開催日：1998年12月9日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 14 回 質問項目

今回は、防衛局長時代の続きのお話をお願いします。それについてお話をいたadenaか、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① まず、バッジ・システム導入問題からお願いします。かなり複雑な経緯だと思いますが、なるべく経過に沿ってご説明いただきたいと思います。
- ② 少し後になりますが、ロッキード F104 の後継機問題についてお願いします。後の先生への怪文書攻撃にもつながる問題ですが、これも経過にしたがってお話し下さい。
- ③ 1961年3月16日、防衛庁は「治安出動における行動の基準」を発表しています。これの作成の経緯や内容について、ご記憶の点をお願いします。
- ④ 1962年5月2日付の朝日新聞によれば、防衛庁では、退職になった幕僚長などの将官クラスを処遇するため、防衛参議官(仮称)制度の検討を始めたという記事が出ています。この制度についてお願いします。
- ⑤ 1962年5月には、ラオス問題で在日米軍機がタイへ出動したことについて、事前協議の対象になるか否かという問題が起こりました。「対象にはならないが遺憾である」というのが当時の政府答弁ですが、先生はどのように考えておいででしたか。
- ⑥ 1962年6月、防衛庁は米国と「防衛技術資料交換計画」による協定を準備中という報道が出ました。どういった協定か、内容や背景等についてお願いします。
- ⑦ 1962年12月、東京新聞によれば、志賀防衛庁長官が自衛隊教育の再検討と、近代兵器を重点に研究開発を促進するよう事務当局に指示を出したと伝えられています。これは具体的にはどのようなことだったのでしょうか。
- ⑧ 1962年10月には、キューバ危機が起こりました。米ソが核戦争の瀬戸際まで行ったわけですが、このとき防衛庁にはどの程度の情報が入り、そしてどのような対応をしていたのでしょうか。
- ⑨ 1963年2月、防衛庁は、防空体制の強化、対潜水艦作戦に重点をおいた三次防の基礎構想の検討に入ったと新聞が伝えています。三次防の内容や特徴、審議経過などをお願いします。
- ⑩ 1963年1月、日米安保協議委員会の第三回会合が開かれています。新聞によれば、日米で中共の脅威に対する認識に違いがあったと伝えられていますが、実際はいかがだったのでしょう。
- ⑪ 1965年2月の国会は、いわゆる「三矢研究」の追及で揺れます。防衛庁の対応も大変だったと思いますが、いかがでしたか。

ナイキかホークか

——「陸」と「空」の争い

海原 「持参した資料を広げながら」……昔の資料をお見せしないことには、三矢研究はどんなものかと言ってもわかりませんからね。いろいろなことが絡んでくるんです。質問される方は、「怪文書にも関係しますが」と言うけれど、この怪文書がまた大変なんです。どの程度までお話ししていいかわからないので、いろいろな資料を持って来るわけです。例えば怪文書の元は、私は本に書きました。それが間違いないことが判明するのが、十三年後の例の松野（頼三）氏の証言の時です。それまでは海原治が言ったといっても駄目なんです。松野氏はちゃんと五億円もらっているんですからね。それで政治資金に使ったと言って終わりでしょう。角さんは五億円であんなことになるでしょう。おかしいですね。だから、こういうものをお見せしないといけないと思つて……。

今でも松野氏は長老ということで喋っているけれど、あんなのが長老で顔を出すのがおかしい。昔を知っている新聞記者だったらわかるんです。今の新聞記者は、松野氏は佐藤（栄作）の「四奉行」の一人だった、それだけですからね。奉行にもいろいろありまして、代官にも悪代官がいるようにね（一同笑い）。私は当時から言っていたんですけれど、親父さんの松野鶴平氏は「ずるへい」と言われていたんです。あれは陽性の悪だ、息子は陰性の悪だ、悪であることは間違いない。悪にも陽性の悪と陰性の悪がある、と言っていたんですけれどね。

陰性の悪であることが証明されるのは、ずっと後なんです。日商岩井の問題で検査の調査があるんですが、それに大体出ていますからね。海原の追放を考えた、とか言っているわけです。

伊藤 大体、質問項目に沿ってお話しいただけますか。

海原 なるべく行ったり来たり来たりしないように思うんですが。

伊藤 行ったり来たりでも構いません。今日はここから話したいというのであれば、それでも結構です。

海原 では、まず前回の補足をやります。この前、「赤城構想」とは申し上げましたね。基本的な問題は、どういうことかということですね。「赤城構想」では全面戦争を考えていた。「相当大規模な武力侵攻に対して、少なくとも初期の作戦を独力で遂行」ということを言っているんですね。問題はこの「相当大規模な武力侵攻」とは、どんなものかということです。日本の防衛論議でいつも私が言っていることですが、どの程度のことを考えているのかですね。仮にも戦争のことですから、相手は「空」なら何百機、陸上部隊は何個師団、そういうことがわからなければ「相当大規模な武力侵攻」と言ったってわからないですね。それから当然外国が侵攻してくるには、その前に空襲もやるし、爆弾投下もありますよね。いろいろなことがあるんですね。それをどう考えているのか全然わからない。それから「初期の作戦は独力で遂行する」と言っても、「初期の作戦」が一体何カ月なのか、こちら側はどの程度までできるのか、全部謎ですよ。

そのままでずっと進行しているんですね。今でもそうでしょう。それは要するに、旧帝国陸軍・海軍の時の国策と同じなんです。「西太平洋における制海権、大陸における地歩を確保する」、そういう抽象的な言葉、私がいつも言う「華麗な作文」でごまかしている。それ

がまた「赤城構想」に出てきたんですね。出てくるのは当り前なんです。それを作ったのが、そもそも最初の制度調査委員会の連中ですからね。旧陸海軍の人たちでしょう。それはもう直りませぬね。それは昔たたき込まれたことは、絶対こうだと言っても駄目ですね。今でもそれが生きてるのが、「一千海里の海上交通の安全の確保」でしょう。まだ今でも政策になっっているんですよ。日本の公約になっっている。そんなことが不可能だということを、私は何回雑誌に書いたかわかりませんが、今でもそうでしょう。それでわかりますように、「赤城構想」の時に、すでに全面戦争を前提にしていた。「これはいかん」と反対しました。それをずっとやっっているんですけれどね。それは、この前申し上げました。

それからミサイルですね。ボマーク、ナイキ、ホークという三つを持つことを当然予定していた。それは元はと言えば、「制服」の方で、統合幕僚会議で決定しているんです。これはこの前申し上げなかつたと思うんですが、「防空に関する協定」というのがありまして、これはボマークを四個中隊、ナイキを八個中隊、ホークを四個中隊。ボマークは「空」、ナイキ、ホークは「陸」と決めていた。それを、この前申し上げたように私が、「そんなボマークなんか持てるんですか。持つていいんですね」と言ったら、とたんに黙ったでしょう。それで、なくなっちゃった。そうすると、この統合幕僚会議で決めた所屬でいくと、「空」はミサイルがないわけです。だって、ナイキもホークも「陸」と決めているんですからね。ところが、ボマークがなくなったら、「空」の方がナイキは俺の方だ、と言い出した。そこでナイキをどうするかということが大問題になるんです。

この間は申し上げませんでした、これを巡って大変な騒ぎになっ

たんです。要するに、「空」にはミサイルが来ないとすると、大変だ、となるわけです。それまではナイキもホークも「陸」であると決めているのに、それをナイキは俺のものだということを「空」が言い出すわけです。それを統合幕僚会議が捌けないんです。私は初めは、そんなことは兵器の種類の問題ですから、文官が関係することではく、全然口を挟まなかった。ところが、いつまで経っても決まらないわけです。そうすると、来年の予算の要求をどうするかということになるし、それから二次計画の作成についてどうするかになるでしょう。否でも応でもこれを決めてもらわなくてはいかんことになる。さあ、そこでこの所屬に関して私が引っぱり込まれるわけです。

これがまた長いんです。私の本にも書いておきました、ナイキの所屬の問題ですね。これはお持ちでしたね「『日本防衛体制の内幕』の本を示す」。これに詳しく書いてありますが、いろいろな問題があるわけです。この前、志賀（健次郎）さんがアメリカに行く時に私がお供で行ったと申しましたね。その時にテキサスのミサイルの実弾射撃場で、ホークとかナイキを見せてもらったんです。そこにはボマークはないんですが。

その、行く時の話をしたかどうか覚えていないんですけども、まず私が付いて行くことは決まった。そして、私の他に「制服」の随員がいるわけです。初めは「陸」の坂本一佐が考えられていました。元NHKの記者で、私と仲のいい男でした。統幕議長の本林さんなんか推薦したんです。私はそれに反対はしませんけれども、そのうちに「空」の方から、防衛局長と坂本一佐とは親しいから、この二人で今度の旅行中に大臣を洗脳するんじゃないかという勘ぐり、推測の発言が聞こえて来たんです。これはまずいなと思いましたから、私は林さ

んのところへ行つて、あなたはご存知ないだろうけれども、坂本君が行くと、私も親しいし、二人で大臣を洗脳して、「空」はミサイルを持っていないことになるのではないかと心配している。やはり、これはまずい。だから「空」の方からのお供を連れて行きましょう、と話ししました。後に日本大使館の武官になりましたけれども、高橋君という、背も高いスラッとしている人、英語は坂本君の方がうまいけれども、その高橋君に付いて行つてもらつた。行く前に、そんな経緯がありました。

そこで旅行中、一切私はその話をしなかった。しかしテキサスの実弾射撃を見て、ああ、これがいわゆるナイキか、ホークか、ということが大にわかるわけです。ずっとアメリカ中を旅行して帰つて来て、羽田に着きました。そうしたらちようど雨が降っていたんですが、私は一番後で降りた。いつも大臣のお供は「制服」が行くのですが、その時は志賀さんのお嬢さんが奥さんの代理で行きましたから、一行をまず出しておいて、一番後から私は降りて行つたんです（昭和三十七年十一月二十六日）。

そこへ次官の門叶（宗雄）さんが寄つて来まして、「海原君、後で記者会見があるだろう。その時に、もし記者から質問が出て、例のミサイルの問題、ナイキをどうするかという問題が出たら、これは『空』に所属させるということを大臣から答えてもらつてくれ。君がそれに補助してくれ」と言う。「ちよつと待つて下さい。大臣や私がアメリカに出張している間に、陸・空から話を聞いたんですか」と聞いたから、「やっていない」と言うんです。「じゃあ、何人で相談したんですか」と聞いたら、門叶さんは「政務次官と統幕議長と三人で相談して決めた」と言いますから、「それはまずい。それは門叶さん、あな

たも私も内務省ですし、内務省みたいな役所では上の方の数人が話をすればそれで収まる。しかし、ここはもうご存知のように陸・海・空とあつて、しかも新しい『空』が意気込んでいる中で、統幕議長と次官二人とで相談して決めたというのでは駄目だ。それはやはり志賀長官が、三幕僚長それぞれから意見を聞いて、その上で決めるといふ形にしないと駄目ですよ。だからもし質問が出たら、『ミサイルが何かを知らなかったけれども、アメリカでそれを勉強してきたから、いろいろな人の意見を聞いてから決める』ということにしましょう」と言つたんです。そうしたら、門叶さんも「それはそうだな」ということになつた。けれども、幸いにその時には記者団から質問が出なかつたんです。

さあ、そういう状態なんです。私たちのいない間に、統幕議長と事務次官、政務次官の三人で、「ナイキは『空』と決めているわけです。それを私が献策したものですから、各幕僚長から聞こうという方法をとつたわけです。それぞれ持ち時間一時間。前半は、それぞれの幕僚長が自分の考えを説明する。それに対して大臣、政務次官等が質問をするのです。私は、そこには入りません。そういう段取りをつけた上で決めたんですが、なかなかこの案件は難しく決まらなかつたんです。

要するに、私が言うことは簡単なんです。大体、ナイキとかホークとかは、全部高射砲の進歩したものでしょう。「陸」にはちゃんと高射砲の部隊はあるし、高射砲の経験を持った人がいるんですから、そこがやるのがまず第一に一番楽ですよ。その次は、「空」でミサイルとなると、言わば助太刀の方ですね。本流ではないですね、傍流でしょう。「陸」だったら、ナイキの部隊長が幕僚長になるかも知れない。

しかし、「空」の方ではミサイルの部隊にいた人が幕僚長になることはまずないですからね。そういう将来のことも考えて、物は決めるべきであるということを書いていたんです。

そういうようなことで空幕長、陸幕長、統幕議長の三人から大臣はそれぞれ一時間話を聞いて、もちろん大臣は質問をして、その結果決めたんですね。それは、「陸」でまず建設をする、しかし所属は「空」ということになった。将来「空」に行くのなら、造る時から「陸」の経験者を転換させて「空」の制服を着せて、そしてナイキの建設部隊をつくって、そのまま「空」に残したらいいじゃないか、ということになったわけです。しかし、それは私はちよつと問題だと言った。取り敢えず養成期間中は、「空」には高射砲に触った人が誰もいないんですから、「陸」がお手伝いの格好で建設だけやる。建設後に、もし「空」になるのなら、その建設をやった「陸」の連中はまた「陸」に帰ってよろしいということを決めておいた上で、そういう処置を取ったらどうだと言ったら、そうしようということになった。こういうことでおわかりのように、大変なんです。ボマークがなくなったものだから、どうしても対空ミサイルに触りたいんですね、陸・海・空ともに。そんなことがあった。

結論としてそういうことになるわけですが、その時に源田さんが空幕長でしょう。その源田幕僚長が大臣に言った言葉を間接的に聞いたんです。どういうことを言ったと思いますか。要するに「いざ実戦になったら、邀撃戦闘機、それから対空ミサイルで共同動作をやらなければいけない。そうすると、一応受け持ちを決めていても、場合によっては下からのミサイルで、味方の戦闘機が撃墜されるかも知れない。そういうことも事故としてはあり得る。その時に同じ制服の『空』の

ミサイルで撃墜されるならまだいいけれども、『陸』のミサイルで撃墜されたら困る」。そういうことを言ったという話が、私は確認していませんが、伝わって来るんですからわかりますよね。まさに源田さんらしい。一応範囲を決めているんです。地上で決めているわけですから、撃つた時にどうなるかわからない。それでわかりただけのように、「空」も「陸」も必死なんですね。「陸」にしてみれば両方とも自分の物だと思っていた。「空」はボマークが来なくなったから、ナイキを超越せということになる。そうなると大騒ぎですよ。

前に敬礼の統一の問題をお話ししましたが、あの時に林さんまで、数の多い方で決めると言ったでしょう。ことほど左様に、いかに陸・海・空と別れてしまうと、人間というものは林さんのような常識のある紳士でも、そういうことをおっしゃるかということですね。そういうことでやったわけです。ですから、結論が出るまでにはちよつとごたごたしましたけれども、私は渦中に入らなかつた。文書で防衛局の判断を出しておいたんです。それは先ほど申し上げたように、本来ミサイルと言っても、高射砲の進歩したのだから、基礎知識は全部「陸」にある。その「陸」の制服を脱がせて、「空」の制服を着せて、そして「『空』で一先お前は過ごすんだ」ということにするのはおかしいと思う、ということを書いておいたんですが、駄目でしたね。やはり源田さんの方が強かつた。そういう話があるんです。

それから前回の補足として、ヘリ空母の問題で、ちよつと補足しておくことがあるんです。このヘリコプター母艦を持つことについては、海幕とアメリカの海軍ではちゃんと打ち合わせができていたんです。これは私がアメリカにいた間のことですから事実を知りませんが、文書が残っているわけです。細かいことは言いませんが、費用の分担ま

で決めているんです。海幕の防衛部の文書ですが、母艦の建造費の負担の割合は日本側が八〇・五%、アメリカ側が一九・五%です。ヘリコプター二十七機分の予算は日本側が四七・八%、アメリカ側が五二・二%です。そういうところまで決めていきます。経費全般の割合を言いますと、日本側が六二・八%、アメリカ側が三七・二%の負担になります。これはワシントンまで話が行っているんです。私はこんなことまで決めていることは知らなかったです。しかし、そこまで詰めているということは、私がヘリ空母を沈めたことはアメリカの方にとっても衝撃だったんですね。

その副産物があるんです。私はいろいろ話をされましたも、直ぐにはOKとは言わないんです。考える、調べてみるです。私の紺色のネクタイにはO・Kと書いてあるんです。オサム・カイハラです。Every thing is all right.のOKです。そのネクタイを、顧問団に行く時は締めているんです。ところが、あいつはOKじゃない、NOKだと言う。ミスター・ノーだと言うんです。その証人がいるんです。今でも親しくしてありますが、阿嘉さんという二世がいるんです。その阿嘉さんはレイモンド・アカと言って、勲三等の勲章を最後にもらったんですが、彼が顧問団の中で、「ミスター海原は、アメリカ側の俺たちの言うことを全部直ぐには認めない。あいつは『赤』じゃないかと言うが、彼はまず日本人だということを皆さんは知る必要がある。日本人としての物の考え方をまず言っている」と言ったら、最後はその阿嘉さんまでが「あいつは名前がアカで、レッドだ。レッドではないけれども、ピンクだ」ということになった。これは笑い話です。

当時のこういう問題は、単に日本だけで決まらないんです。海幕の方でASW（対潜水艦作戦）の調査団というものを出しているんです。

当然、大臣まで報告が届くでしょうね。ハワイには太平洋対潜水艦部隊がいるでしょう。そこで話しているわけです。

そこで防衛部の文書に書いてあるんですけれども、要するに「米国の援助はアメリカの議会が決定するが、米海軍としてはその実現のためできる限りの尽力をしてくれるものと確信している。なぜか、それは太平洋における米軍の戦略構想に合致する」からであると。そういうことを米海軍が言っているわけです。そこで決まっているものを私をご破算にしちゃったわけです。だから、これは大変な問題になるわけです、彼等にとっては。

佐道 米海軍のその文書が載っているのは何年のものですか。

海原 これは昭和三十六年一月一日の海幕の防衛部の文書ですが、「ヘリコプター母艦について」というものなんです。これも長いですが、これもそこへ出ている言葉です。ここまで詰めていた。だから日米海軍の合意なんですね。しかもそれは先ほど言いました、米海軍の太平洋における戦略構想に合致するんだという裏書きまでもらっている。

伊藤 その文書は誰と誰がサインしているのですか。

海原 これは元は知りませんが、海幕の防衛部の文書にそう書いてある。私はそれを持って来いとは言いません。これが私の唯一の根拠ですからね。

伊藤 そういう場合は向こうは？

海原 顧問団です。顧問団ですが、その顧問団が仲立ちして、ハワイのASW対潜水艦作戦部に話をし、それからワシントンに連絡して、ということですよ。

伊藤 ワシントンも一応了承したということでしょうね。

海原 そういうことは私の時ではないですよ。私はいないんですから

ね。要するに、いない間に「赤城構想」が決まるわけですから。私が二年間いない間で、私への引き継ぎはゼロなんです。そこで問題は、こういうことを海幕がやるのについて、私の前任者の加藤さん、あるいはその下の課長さんは一体どの程度まで聞いていたのか、聞かされなかったのか。ここに問題がある。だから、ここに出てくるのはいわゆるシビリアン・コントロールの問題ですね。少なくともアメリカとそんな経費の分担の打ち合わせまでするくらいなら、当然防衛庁として赤城さんの前の伊能（繁次郎）長官の下で会議があつて然るべきでしょう。しかし、一切私はそういうことは聞いていない。

佐道 海原先生ご自身は、これはいつの段階でお知りになったんですか。

海原 それは帰って来てからです。

佐道 帰って来て直ぐに、ということですか。

海原 そうですね。最初は調査官でしょう。その時、次期防についての話を聞きますからね。この前もお話したように、私の意見もちゃんと書いて渡しておいた。その段階です。

佐道 それで、海幕の方の意見を聞かれたりされたわけですね。

海原 それはありません。調査官が、直接海幕とやったのではまずいですからね。だから、内局の防衛局の担当者に聞くわけです。どうなったのかと。それだけのことです。どうしてそこまで話が行くまでの間に、防衛庁として中で検討しないのか、それが問題なんだと思います。その頃は「制服」の方はもう向こうの「制服」と直接話し合つて、それぞれ陸・海・空が話し合つて、「話がつきました、これでやりましょう」というふうにやっていたんでしょね。そういうことですから、私が防衛局長になるについては大変な問題とされるわけです。そ

ういうことを一応補足しておきます。要するにアメリカの海軍、ワシントンまで行っているんでしょ。それをご破算にしちゃったんですから、これはやはりちよつとショックでしょうね。

佐道 ですから、アメリカまで合意しているものを、よく潰せたなあと思います。

海原 だからこの間も言ったように、潰したんじゃないのです。「ここが問題ですよ」ということを、いちいち聞いていったわけですよ。だから、これはヘリコプター母艦の話だけでも時間がかかります。どういうことだということを、本に書いてある以外に、それをサポートするものがありますからね。とにかく、そこまで詰まっていたわけですよ。それを私も後で知つて、ああそうか、そこまでやっていたのかと思ひましたね。しかし前任者の時に、アメリカの方と費用の負担まで決めるなんていうことをやるなら、どうして防衛庁の中で伊能さんなり赤城さんなりの時に検討していなかったか、これは問題ですね。そういうことを補足しておきます。ですから私は、先ほども言いましたように「海原はアカじやないか」ということを言われた。「あいつは何でもノーと言う」と。それに対して阿嘉君が、「彼はまず日本人であるということを知れ」と言つたということですね。決して反米ではありません。

そこでもう一つ補足しておきますと、三次防の話に関連しますが、二次防の時にははつきり「局地戦以下の侵略」ということを言っておきました。それから「骨幹的防衛力」というのを出すわけです。というのは一次防に「骨幹的防衛力」が出ていますから、「その内容を充実」という言葉を使うことにしたわけです。その辺のところは三次防では、いきなり「侵略に対する抑止力として有効な防衛力を整備する」

となっちゃった。これは、言葉の上だけですけれども、全然違うでしょう。「骨幹的防衛力」とは何かと言われるんですが、要するに骸骨、骨組みですよ。まだ骨組みを作る段階でしかない、ということが一次防でした。

二次防では、その骨組みに少し肉を付けると言っていた。それしかできないということで設置したわけですが、「赤城構想」では先ほどから言っていますように、現実の「力」になっちゃっているんです。しかも「全面戦」を前提にして、それに対して有効に対応するだけの力を持つんだと言う。ここに非常に思想の「変わり」があるんですね。だから、そこが難しいように思うんです。

それで、三次防の話になりますが、この時は私は官房長になっておりますから、もう物は言わないことにしたんです。私の後任の島田（豊）君が防衛局長で、次官の三輪（良雄）君とやるわけです。そういうことですから、三次防について私は何をしたかというご質問があります。私は会議の時々話を聞くだけです。その時に私の疑問点を質問するというだけで、その三次防の三つの大綱とか目標とかというものについては一切口出しをしません。それをまず申し上げておきます。だから簡単に言えば、三次防は私は全然無関係です。

伊藤 でも先ほどの話を伺っていると、いろいろ質問されることによつて、ぶつ壊れたりすることがあるわけですね（笑い）。

海原 いや、大体、ぶつ壊れるものはぶつ壊れちゃったんですから。三次防の時は確か私の記憶が正しければ、課長は今泉（正隆）君、後で警視總監になった今泉君じゃないかと思うんですがね。もう一つ、これは知られていないことですが、一応三次防の原案がまとまった時に、それが朝日にスッパ抜かれたんです。それで急にまた言葉を換え

ちゃったんですね。そういうことがある。だから三次防自体、いわゆる第三次防衛力整備計画は、この前申し上げたように三つあるんですね。あれがバラバラになつてきたら、そういうことだと思つたらうし、そこに書いてある言葉はそれほど中で厳密に、ああだこうだという議論はしてないと思うんです。そんな経緯があるんです。それはどこにも出ていませんから、皆さん方はご存知ないと思いますけれども、朝日がそっくり抜いちゃったんですね。それで、急遽その言葉を直した。それが最初の大綱だと思つています。

バッジ・システムの受注競争

伊藤 朝日新聞はそういうものをどうやってスッパ抜くんですか。

海原 それは知りません。

伊藤 想像もつかないですか。

海原 ええ。先ほど言いましたように、私は三次防については全然実質的に関与していません。というのは、防衛庁の方で三矢研究の問題があつたものですからね。こつちが大騒ぎなんです。だからくどくどありますが、もう私は一応ピッチャーの役は、お役御免になつています。替わっているわけですからね。替わった私は三矢研究でもって大騒ぎです。それから、とても他人様のやつていふことをどうだこうだとは言えないわけです。ああこんなことかな、ということ、私は見ていたわけですね。そういう経緯ですね。

ここまでが一応の補足説明になります。これから質問項目の順番に行きましょう。まずバッジの問題からですね。バッジにつきましては、私はこの『日本防衛体制の内幕』に書いておいたので、詳しくはそれを参考にしていただきますよう。

その前にF104のことで、サイドワインダーでは、ちゃんと目標の後ろに位置して発射しなければいけないということは申しましたね。それから、この前二次計画のものは差し上げましたね。バッジについても簡単にまとめたものを差し上げます「資料を配付する」。

「バッジ」という言葉自体がどういう意味かということのご説明ですが、これ『日本防衛体制の内幕』は持っておられますね。ここに書いておきましたが、Base Air Defence Ground Environment という英語の頭文字を合わせますと、BADGEになるんです。それでバッジ、バッジと言っているわけです。そのバッジについて、まずどういうものかと言うと、それまでは飛行機のスピードが遅いですね。レーダーサイトで捕まえた目標を、三角定規と分度器で計算してやっていたわけです。しかし、これが音速になりますと、そうはいかんわけです。そこでアメリカの方ではちゃんと大型の組織をつくったわけです。アメリカはカナダと米本土の両方をカバーするものをノード(NORAD II 北米防空司令部)でつくりましたから、その小型のものを日本につくろうということ、BADGEになるわけです。そういうことです。全然こっちに知識と技術はないわけです。全部それは米国にあるわけですね。そしてアメリカでも海兵隊と空軍とで違うわけです。海兵隊はリットンです。空軍はGE (General Electric) です。日本でも当然GEのものを使うだろうと思われていました。というのは米軍がGEを使っていますから、沖縄にもそれが

あるわけです。GEというと東芝になる。そこへ割り込んでくると言う語弊があるかも知れませんが、入ってきたのが問題のヒューズなんです。ヒューズと手を組んだのが日本電気です。そういうことから、こんがらかった争いになるわけです。

その前に自民党の国防部会、これは私が後で知ったんですけれども、東芝と三菱とに、それぞれミサイルの国産をやらせることを決めていたんです。そういうことで、いろいろ思惑が入ってくるわけです。そういうことがあるものですから、名乗りを上げたのが東芝と三菱と日本電気ですね。日本電気はヒューズと組んだんですね。その競争になるだろう、当然なるだろうと、みんな思うわけです。そこで飛行機の時一千億円の空中戦になりましたから、今度もまた三つ巴の争いになるだろうと。先ほど言いましたように、日本には技術がない。完全に向こうのものをもらうわけですから、商社が入りますね。そこでまた視察に行く。そして、いろいろと帰って来て報告するのですが、必ずしもはつきりしないわけです。そこにいろいろと揉める材料があるわけです。

もう一度申しますと、当然東芝は米空軍がGEのものを使っているんだから、GEになるだろうと思っているわけです。それに対して、ヒューズが巻き返しをやるというようなことになるわけです。これが大きな背景ですね。東芝は当然俺のところ注文を受けると思って安心していたのが、結果的にはヒューズになったということ、それが怪文書の問題になるわけです。その頃のことですから、とにかく日本もいろいろな産業の面でも向こうと提携してどうだこうだとなるでしょう。ホークの国産の場合がその適例です。もともと三菱がホークを造っているレイセオンと縁があったのではなく、縁があったのは別的小

小さな会社なんですが、それが三菱電機に合体したわけです。だから当然、三菱が全部受けるはずなんです。そういくべきなんです。それに対して東芝の土光（敏夫）さんが巻き返しをするわけです。

それで、アメリカの方には、私が国会でも証言しましたけれども、岸さんのレターなるものが行くわけです。紹介先がレイセオンという会社です。三井物産の担当者二名が行くからということで名前も挙げて、紹介状を書いていくわけです。しかも手紙に、防衛庁は東芝に発注したというように書いてある。そのことで三井物産の担当者が打ち合わせに行くからよろしくと。東芝と三井ですからね。防衛庁は何も決めていません。なぜこんなことを言っているかという、それほど当時は大変だったということです。

事柄をもう一つ採めさせた原因は、ヒューズは伊藤忠が間に入っているわけです。当時は、伊藤忠と言えば河野一郎氏でしょう。それで河野・佐藤の対決というのが大きなバックにあったわけです。そういうことが全部に影響しているわけです。それで、私は河野派になっちゃっているのです。防衛庁は海原が牛耳っている。怪文書に出てきますけれども、「海原天皇ご存知ですか」ということで、要するに海原と言えば河野派である。海原は言うならば河野の番頭みたいなものだ、これを追っ払うためにということで、松野某が来るわけです。こういう大きな背景があるんです。その中のいろいろな受注競争なんですね。

伊藤 このバッジ・システムそのものは、トータルとして相当大きな額のものなんですか。

海原 これは何かわからないんですが、一応予算に入れていたのが初めが二百億ぐらいでしたかね。金を一応見積もって、リーダーサイト

の近代化ということで予算に入れました。先ほど言いかけてましたが、今までの時速六〇〇キロ程度の戦闘機だったら三角定規と分度器でやりますけれども、音速の二倍、二マッハと言うと、東京―大阪間を十分です（摂氏〇度で秒速三三三メートル）。そういうものだったら、間に合いませんよ。そこで自動的にやる。あれは本当は正式には全部が自動的ではないんです。半自動なんです。というのはデータは人間が入れますから。どういうデータを人間が入れて、それを受けてコンピュータが計算する。どういう武器が一番いいか。そういう状況では飛行機がいいか、ミサイルがいいか、何がいいかということまで判別するわけです。そうした上で、どれを使いなさいということを示す。今はコンピュータが一般的になっていきますからおわかりでしょうけれども、われわれの時は何もわからない。しかも、例えばコンピュータの上に表示をするマークを、△と□と○にするとか、色をつけるかつかないかとか、そういうことが全部それぞれの組織によって違うわけです。だから、まさに五里霧中で調査団が行くわけです。

最初に行った調査団に対して、一応現物としては東芝の推しているGE関係のものがあるわけです。現にアメリカでも使っていますからね。だから、これをこうします、ああしますという説明があるわけです。他の、ヒューズにしろリットンにしろ、実物はないわけですよ。こうしますという文書があるだけです。こういうものをつくりますという計画書があるだけで、モノはないわけなんです。東芝の方は、GEの現に使っているものがありますから、この部分をこうしますとか、これをこうしますとか言えますけれども、ヒューズとリットンにはそれがありません。ただ、私の方ではこういうものをつくりますという、単なる設計書があるだけです。今のマンションの販売で、建築はあそこへ

行つて見て下さいというのがありますね。それがGEにはあるわけです。ところが、リットンとヒューズにはないわけです。ここに大きな違いがある。

そこで最初に行つた調査団の報告について、国会で、今の横路さんのお父さんの横路（節雄）さんが質問しているいろいろ言っているわけです。ヒューズにいたつては0点だと。0点だというのは、モノがないからしようがないですね。東芝は九十点だというようなことを言っているけれども、それは誰かから聞いたんでしよう。そんなことで始まつたわけです。手探りですね。

もう一度申しますが、全然自分たちが体験したこともない、新しい立派な、言うならばマンションを造りたい。金はどのぐらいかかるかというようなことで、やるわけですね。だから、全部知識は向こうにあるわけです。こちらはそれを聞いて、それを理解して、どうするか、ということになるわけですからね。こつちが準備的な能力がゼロなんです。その犠牲になつたのが空幕の防衛部長の山口（二三）君で、将来は空幕長だと言われていた人ですがね。山口君を私はよく知っているんですが、彼が自殺しましたね。本にも書いておいたですかね、山口君の最期。

話が途中ですが、ちよつと本題から離れた話をします。彼が死んだのは玉川上水で、水深三十センチぐらいのところですよ。夜、睡眠薬を飲んで、上水のほとりに腰掛けていたんでしようね。そのまま逝つちやつたんです。彼が死んだのが火曜の夜でしたか。その前の週の金曜日に、私は当時国防会議の事務局長でしたが、私の部屋から山口君の部屋に電話したんです。彼は非常に優秀な、将来の幕僚長間違いないと言われたような人なんですがね。私が電話で「山口君、今度は君が

どうも照準にされている。しかし頑張り。悪い奴がいっぱいいる。いわゆる怪文書その他で画策する奴もいるけれども、負けるな」と言つたところ、今でも忘れませんが、「局長、ご心配なく。私も元帝国軍人です」と言うんです。「ああそうか、それならいい。頑張つてくれ。どうもいまそつちに全部行つていようだから。しかし人間というのは時として虚しくなる。僕も何回かそういう体験があるけれども、そこへ行つて君を励ますわけにいかないから、電話で失礼する」と言つたんです。それに対する答えが、「私も元帝国陸軍軍人です」ということなんです。私は「わかつた。頑張り」と言つた。それが金曜です。だから土、日、月と三日あるんですが、死んじゃう……。

それから先は完全に私の推測なんです。その前日の月曜日の夜に空幕と米軍とのパーティがあつて、人々が出かける前に、山口君は人事部長に、これは昔の陸軍で一緒の人ですが、彼に辞表を出したんです。それを人事部長が「預かつておく」と言つて受け取つたんです。この一言が、私の想像では問題です。「お前、こんなもの出さな。何をやっているんだ」と言つて返せば良かったと思つてくれどもね。「預かつておく」と言つた。「今から、お前も知つていられるだろうけれども、パーティがあつて、幕僚長のお供をして行かないといけないから」ということで、山口君の書いた辞表を預かつちやつた。人事部長に悪意はないですよ。しかし、それが僕は山口君にとっては一つの大きなショックであつたと思つてですね。

亡くなつた日は、奥さんにはちよつと友人のところへ行くとか言つて、夜ふらつと出かけるんですが、世の中が虚しくなつたと思つてですね。というのが、そのバツジを一所懸命やつたのは山口君だし、その横にいて建設をサポートしたのが川崎（健吉）という人で、これま

た機密漏洩ということで訴えられたわけですからね。これもつまらん話なんです、機密なんていうのは全部アメリカにしかないんです。それを翻訳してこっちに持って来るでしょう。それを防衛庁空幕の担当のところが受け取ると、全部「秘」になっちゃうんですね。それで、機密漏洩になる。どこに漏らしたかという問題になるわけですからね。結局、川崎君がそのことで辞めるわけです。その川崎君は、山口君が保証した男なんです。そこで遺書のように、「自分の不明を恥じる、申し訳ない」ということを書くわけです。それは要するに、バツジを川崎にやらせたということが申し訳なかった、ということになるんじゃないかね。真意はわかりませんがね。

彼が亡くなった時は本当に惜しい人を殺したと思いましたがね。そこまで行くまでには山口君が一所懸命やって築き上げて、土台を作る材料まで全部揃えたわけですから。それが機密漏洩というようなことになるわけです。

これも本筋に関係ないんですけども、いかに当時大変であったかということの一つの例として言いますと、空幕の幕僚長宛に投書が来たわけです。今度、川崎というのが防衛課長になるらしいけれども、これはそんな信頼できる男じゃないという意味の中傷の、立派な字で書かれた投書が来た。私も見せてもらいました。これは犯人が誰かということでも一所懸命調べるんですが、筆跡調査をやってもわからないです。そういうこともあった。なぜこんなことを申し上げているかと言うと、それほどいろいろと皆が注目し、それぞれに問題を感じ、それぞれにいろいろな手を打っていた、そういう中で出来事だということ。これがあの頃の防衛庁の、そういう大きな予算を使う、建設の部門ですね。山口君は本当に気の毒だと思うんですが、こういう

ことを本に書いておいたんですね。

そういうことで、政治家、経済界、防衛庁の中で、いろいろあるわけです。それが全部入り組んでいますからね。簡単にスツと、通り一遍の説明ではご理解いただけられないのではないかと思う。

「資料を配付する」これは先ほど申し上げたナイキのことですが。先ほど申し上げたことを簡単にまとめてありますので、後でご参考にしていただきます。

「資料を配付『自衛隊』二〇ページのコピーとWORTACの写真」それから、これはF104の機関砲の問題ですね。F104の問題は、前回の補足になりますかね。ウォータックの話をしましたね。それがこれです。現物がこの左の上の大きなものです。これを私が雑誌で見たわけです。これを買えと言った。その時に朝日新聞社が出しました『自衛隊』の中で、と言いましたけれども、私の記憶が間違っていたので訂正しておきます。二年半経っているんです。北海道に配備したF104の機関砲が当たるようになったのが二年半後のことであると、ここに書いてありますけれども、私はこの前何カ月とか言ったので「速記録を」直しておきました。要するに、二年半後ですね。

考えてみると、私から言われて、これをまたアメリカに注文したわけですからね、黙って。だから、そのくらい時間かかっているわけです。だから、二年半も当たらなかったわけですよ。私に言えばいいのにね。私がちゃんと「これを買え、買わなければ駄目だぞ」と言っているのに、「いや、大丈夫です」と言ってお見栄を切った手前、情けないと思うんですけれどもね。元帝国軍人が二人、防衛部長も装備部長も、いや局長、ご指摘の通りでしたと言えはいいのに、黙ってやっている。何かの時にポロッと言ったんです。酒を飲んでる時でした

か、「実は局長、済みません」と言うから、「何が済まないんだ」と言ったら、「いや、こういうことでF104の機関砲が当たるようになりまして」と言う。これは物事の技術の進歩がこんなものであつて、それに対して日本人がどう対処するかということの一つの具体的な例ですね。

また、もう一つ別の話になりますけれども、『インタラビア』という英語の本はご利用になりますか。何十冊もあるんですが、もう今は取っていないんです。もう捨てるだけなんです。おたくの方で全部引き取っていただきますようか。私は女房に、俺が死んだら、資料は全部処分しろと言っているんです。だから、整理し始めているんです。

伊藤 整理しても、燃やさないでくださいね。

海原 『インタラビア』というのは、結構いい航空方面の専門誌ですからね。航空自衛隊はもちろん取っていました。

とにかく、F104を北海道に配備していて弾丸が当たらない。けしからんですね。と同時に、この間も言いましたが、そういう記事を書いている新聞記者は、「なぜか」ということを、なぜ調べないんですかね。それが私はどうしてもわからない。そこが私の期待する新聞記者諸君と違うんですね。報道するだけなら、単なる小学生でも新聞記者になれるからですね。

伊藤 記者会見だけで物事を済まそうと思えば、そうなりますからね。

海原 そうなんですな。情けないというより悲しいと思うんですけれどもね、ある意味で。

伊藤 職業意識がないというか。

海原 そういうことですな。これでいいですか、先生。

伊藤 いけないに決まっているじゃないですか。

海原 何とかしてください。昔はそれなりにそれぞれに職人は職人で、技師は技師で、全部生き甲斐を持っていたはずですがね。

伊藤 自分の職業についてですね。

海原 帝国陸軍の経験で言いますと、下士官は下士官、準士官は準士官としての誇りがありましたしね。全部それぞれのポストで誇りと生き甲斐を持っていたはずですが、今は何もなくなっちゃったですね。

伊藤 何もなくなつたということはないんですが、やはり非常に弱くなつたということは間違いないですね。

海原 神奈川県警なんかを見ましても、何であんなことに……。神奈川県だけじゃないんですよ。もう世も末だ、まさに世紀末的現象。ただただ慨嘆するだけです。もう「さよなら」を言うだけです。

伊藤 もつとも、昔もあつて、本当は隠しおおせていたのかも知れないですね。

海原 かも知れませんがね。それはわかりません。

さて、バッジの話ですね。さっきは、横路さんが国会で質問したところまで申し上げましたね。丸田調査団の報告では、GEは合格点だけれども、後は点数をつけられないと。国会で、そんなものは0点だと言うわけです。当時は、正直に言いますと、空幕の中でも意見が分かれたんです。幕僚長と担当の人々と、また関係者の間でもです。その時の中の会議で何派が何人だということを横路さんが言っていますけれども、ことほど左様に揉めたわけです。物差しがみんな違います。しかし、最終的には、バッジは志賀さんが決めるわけです。「よし」ということですね。志賀健次郎大臣はなかなか面白い人です。ヒューズに決まるわけですね。

伊藤 しかしヒューズは、まだモノがないわけですね。

海原 はい、ないです。設計書だけです。だから、その技術を信頼を
するかどうかです。これは誤解を恐れず敢えて申し上げますと、GE
というのは、例えばこの部屋全体を暖房とか冷房にするわけです。と
ころがヒューズの機械は、部屋全体となると大きくなりますから、機
械ごとにちゃんと温度調節の装置がついている。そういうふうに見て
いただいたらい。それから、先ほど申しましたように、敵を表示
するのに△にするか□にするか、色をつけるかとか、そういう点が設
計書や説明書に非常に詳しく書いてあるんです。それで、「これで行
こう」となるわけです。ですから現物があつて、これの小型で、どこ
を改良したものとこのを採るか、それとも全く何も実物のない設計
書、説明書だけで、それに全幅の信頼を置くかどうかということです
ね。だから非常に難しいんです。車を見て、フードがいいか、シボ
レーがいいか、ベンツがいいか、というのは違うわけです。既にあ
るものと、私の方はこういうものを造りますという設計書ですから、
採めるはずです。しかも、基本的な技術はこつちに全然なかったわけ
です。しかし、先ほど言いました山口君や川崎君が一所懸命苦労して
調べた。わけのわからない難しいテクニカルチームなんか調べて、
これがいいでしょうということになったわけです。それで私たちも、
それに同意したわけです。

伊藤 これがいいでしょうというのは、ヒューズの話ですか。

海原 はい。その選択が正しかったという事は、これは少し小説的
な話になりますけれども。当時、私は防衛局長です。本来、これは装
備局の担当ですね。装備局長というのは伊藤三郎君で、彼は一高の私
の同期なんです。それから経理局長は一高の一年先輩の上田克郎君、
彼は大蔵省から来ました。三人とも同じ高等学校。防衛局長と装備局

長は同期なんです。よく三人で飲んだ仲間なんです。飲むこととは関係
なしに、何でも物が言える仲です。それが良かったと思うんですね。
本来、主たる責任者は装備局長だった。ところが私が防衛局長で、「要
求性能」を出すだけの存在なんです。」「こういうものが欲しい」と
いう「要求性能」を出すだけです。「それにはこれがいいんだ」と言
うのが装備局長なんです。本来なら怪文書で問題にされるのは装備局
長である伊藤君でなければならぬのに、海原に来るわけです。それ
は要するに、海原は河野派で、ということになるわけです。

伊藤 なぜ河野派なんですか。

海原 それがまた、三矢研究に原因があるんです。

伊藤 そっちの方で関わるわけですか。

海原 そうなんです。だから、いろいろ絡んできます。私は河野一郎
さんには三回か四回しか会っていません。そのうち二回は、河野一郎
さんが当時無任所大臣で、長官から「あの人はうるさいから、海原君、
行って防衛計画、将来の構想等を説明してくれ」と言われて行ったん
です。長官の命令で行ったわけで、別に私が河野さんを好きで行った
わけではないんですよ、絶対にね。私の友人の平井君は、結局河野さ
んに尽くすことになるわけです。警察から建設省へ行きましたからね。
それは警察庁長官の柏村さんというのが私のボスですが、河野さんが
建設大臣の時に建設省に来てみたら、あそこに技官と事務官がいるん
ですね。事務官の方は、間口が狭いでしょう。ところが警察は旧内務
官僚ということでいっぱい人を抱えているから、少し人を寄せよとい
うことで、河野さんが柏村警察庁長官に要求したんです。それは結構
ですということ、じゃあ私の方から出しましょうとなって、建設省
に行ったのが、後に代議士になる山本幸雄さんという課長と、平井君

の二人です。彼は、本来建設事務次官になるはずだったんですが、事件がありまして役人を辞めます。その辞めた理由について、河野派對佐藤派の争いの渦中に巻き込まれたと言っているわけですね。

話が途中になりましたけれども、私が河野派になるのは、三矢研究の問題が起こって、その時に河野さんが、今の小泉（純一郎）さんの親父さんですけども、小泉純也大臣に電話をかけてきて、「こういう時に役所の各局長（全部政府委員です）が、各局ごとに答弁していたのでは答弁に差が出る、食い違いが出る。そこを突かれるから、答弁は一人にやらせる。僕の考えでは海原君がいい」と言っちゃったんです。

伊藤 それは河野さんが、ですか。

海原 ええ。それは前にご説明に行ったことがあるからだと思うんです。それでも知れませんが、それで「一人にやらせる。ついでには防衛局長がいいのではないか」ということを言った。その時に小泉大臣がわかりましたと言つて「海原君、君やれ」となるわけです。これは、現物を持って来ました「三矢研究の書類を示す」が、「三矢計画」じゃないんですよ。「研究」なんです。研修なんです。研修だというと、それは教育局長の受け持ちなんです。これは現物を持って来ました、当時配られた三矢研究なんです。汚れていますが、当時のものはこんなにあるんです「五十〜六十センチを両手で示す」。全部がおわかりになる最初のもですが、下に「統裁部」と書いてある。研究なんです。「図上研究（三矢研究）」と書いてあります。部数は八十部ですね。

伊藤 これは八十部のうちの八十番ということですかね。

海原 そういうことでしょうか。それは私は、事件が起こってからもら

ったわけですからね。要するに、全部でこんなにあるんです。それは答案も何も、みな入っていますから。それを岡田（春夫）さんは「三矢計画」と言ったわけです。それがまず岡田さん一流の質問の手法です。計画でも何でもありません。要するに、幕僚の勉強なんです。そうなる」と教育局長の責任でしょう、答弁は。だから私がやる必要はないんですよ。それはもう教育研修ですから、会社の社内研修みたいなものです。ところが、河野さんからの電話で「一人にやらせる。ついでには海原君がいいと思う」と言われたために、私が全部この三矢関係の、防衛庁の責任者になる。

そこで、これは三次防と関係あるんですが、もう三次防の方は見る暇がないんです。この二月に準備作業が始まるわけです。これ「三矢」が始まったのが二月ですからね。そこで三次防については私は関係していない。

伊藤 どういうふうにお聞きしたらよろしいですかね。

海原 そこでですね。三矢研究だけのお話をしますか、それとも、このまま順番で行きますか。

伊藤 どちらでも構いません。もう時間があと五十分ばかりですから、途中で切れるというのでもまずいから、どちらにいたしますか。

海原 じゃあ、「三矢」をまずまとめましょうか。

伊藤 今のバッジと非常に絡むわけですね。

海原 絡みません。むしろ絡むのはF104のほうです。怪文書ですね。怪文書の方をやりましょうか。この順番で。

伊藤 じゃあ、それをお願いします。

海原 一応バッジの導入の問題はそれを見ていただいて、結局ヒューズに決めましたということですか。私たちの選択が良かったということ

は、後にNATOが同じような組織をヨーロッパにつくるんです。その時にやはりヒューズのものを採用したんです。

伊藤 これは在日米軍が沖縄で使っているものとの連絡等は差し支えないわけですか。

海原 それはまた別です。その地域だけです。ヨーロッパはヨーロッパだけです。それとNORAD（北米防空司令部）とは関係ありません。それは別ですから。ですから、ヨーロッパのNATOもやはり日本と同じシステムを採用したということで、私たちがバッジの機種にヒューズのものを選んだことが正しかったということが具体的に証明された。それは後のことです。

佐道 金額的にもヒューズの方がかなり安かったということですか。

海原 安いです。それはやはり先ほども言いましたように部屋全体を冷暖房するか、それとも機械そのものの中にそれだけのものを置くかで、コストはだいぶ違ってきますね。ところが、くどくなりますけれども、モノがないでしょう。「私のところはこういうものをつくります」ということです。そのヒューズ社の技術能力に対して百パーセントの信頼をおかないとできないわけです。

伊藤 そうですね。もしできなかつたら大変なことになりますね。

海原 そういうことです。特に私は米空軍が問題を感じてのではないかと思つた。というのは、自分たちはGEの関係ですからね。そうしたら、米空軍はワシントンでも「日本の選択は正しかった、賢明な選択をした」と言ってくれたんです。ただ米空軍の中で、GEの方の関係者の一人はこのことが理由で辞めた、ということをお聞きしましたけれどもね、顧問団から。「それは悪かったな」と言つたんですけれども、しかし、米空軍は「日本の選択は正しい」ということを言

つてくれたんです。そういうことがある。

伊藤 これはどのくらいの期間なんですか。そのバッジの問題が起つて最終的に決着がつくまでというのは。

海原 それは、いつから数えるかですよ。私の記憶が正しければ、三年はかかりましたね。

伊藤 いや、大体のところでは？

海原 最後は、志賀さんが決めましたからね（注・昭和三十八年六月七日）。

岸・佐藤 VS. 河野一郎

— F104の後継機を巡って

伊藤 これは二次防なんですね。

海原 長期防衛力計画の中ではそうですね。バッジに決定したところですから。もう昔のことになりますと、日にちが前後します。

さて、F104の後継問題に行きますか。このF104の後継問題については怪文書と関係があるんですが、この怪文書の口火を切ったのが、この新聞の記事なんです。「帝都日日新聞」です。「コピーを示す」。本にも書いておきました。こういう新聞があるんです。ここにあるでしょう。「昭和四十年十月十四日」、年月もあっていますけれども、これに「低性能機種の内産化計画、海原防衛庁官房長が中心」と書いてある。これがそもそも怪文書の走りになるわけです。ここに「ノースロップT38購入の舞台裏」とありますね。このT38とい

う飛行機は、F104の後継機とされたファントムの対抗馬であるF5戦闘機につながるのです。T38というのは、「T」でわかりやすいように練習機です。F5というのはファイターの「F」で戦闘機なんです。しかし同じ会社で、しかも機体の三分の一、前の方が違うだけで、後は全部同じなんです。だから練習機のT38をもし買いますと、それはノースロップのF5にずっと行きますよね、自然の流れとして。そういうふうに皆が見るわけです。

T38がなぜ出てきたか。F104という戦闘機のパイロットを訓練しますね。そのためには目標機が要ります。超音速の戦闘機ですから、それまでのものでは、F104の訓練の対象の航空機がないんです。T38という練習機のジェット機が、F104の訓練目標機として必要だと航空幕僚監部が言ったわけです。それをその通り私が国会で答弁したんです。予算になって出ましたから。頭を出しましたから。したがって、「このT38はF104の戦闘機の戦闘訓練のための目標機として必要です。こういうふうに航空自衛隊は考えております」ということを、私は国会で話した。いま言いましたように空幕の希望を取り入れたわけなんです。ところが、私が「このT38を買え」と言っているということになったんです。そういうふうに怪文書はなるわけです。舞台裏になるわけですが、私はただそういう空幕の主張を取り次いだけなんです。ところが、このT38を買う金が付かなかった。しかし私には、「F104のパイロットの戦闘訓練のためには、目標機としてT38が絶対必要不可欠であります」ということを、空幕の防衛部長も言ったんです。ところが、それが間違っているわけです。

伊藤 間違っている、というのは？

海原 やめちゃったんですから。私にそう言って、予算にも組んだんです。T38の購入のための予算をね。ところが、F104の追加生産のための金が足りなくなったために、T38の購入をやめちゃったんです。そこがまた、わからないところでしょう。もう一遍言いますよ。「F104のパイロットを養成するには、高速目標機が要ります。それにはT38がよろしゅうございます」と、航空幕僚監部が言った。そういうことで予算も要求したわけです。何十億円だったか今は覚えていませんけれども。ところが今度は、F104の追加生産をやったんです。その追加生産のための予算が足りなくなったので、このT38はやめちゃったんです。だから、私は本に書きましたけれども、二階に上がって梯子を外されたんです。あたかも私自身がT38がいいと言ったように受け取られるわけです。そういうからくりがあるんですがね。

そこで、『帝都日日新聞』の、この記事になるわけです。「海原防衛庁官房長が中心」と書いてあるでしょう。この時は官房長になっていきますからね。とんでもないですよ。さっきのウオータックの話でおわかりでしょう。空幕の部長さんともあろう人が、昔で言えば中将さんですよ。両方とも旧軍人です。やめるならやめると言えばいいですよ。それを、「T38の予算はF104の追加生産の方に流用して結構だ」ということを装備部長が大蔵省に行って、言って回ったんです。そこで結局、私自身が必要だと言ったようになっちゃうわけです。そういう話を記者が聞くんでしょうね。こういうことが、いわゆる怪文書の材料になるわけです。

河野 T38は別に低性能だったから駄目になったわけではないんですね。

海原 購入しないんです。

河野 購入しないというこの理由は、F104を追加生産するためで、そちらに予算が回った。だから購入できなくなった。

海原 ええ、その予算がなくなりました。それが一つと、もう一つ、いま思い出しましたが、空幕の部長が大蔵省に説明に行くのに、「これは伊藤忠だ。だから降りるのはいつでも降りるから、とにかく『芽』を出したんだ」ということを言ったらいいんですね。これは確かめていませんからわかりませんよ。ややこしくなりますから、そういう話になるべくしないようにしたいんですが、そういうこともあった。私にそれを、また言わないんですよ。私は一所懸命国会で「F104のパイロットの訓練のためには高速の目標練習機が必要であります。それにはT38がよろしゅうございます」ということを言っただけなんですからね。私がそう言っていることは、彼等も知っているわけですよ。それが予算を大蔵省から指摘された時に、さっさと降りちゃった。私に言わせれば、けしからんと思うんですけれどもね。そういうことがいっぱいあるんですよ。

河野 やはりけしからんと思いいになつて、関係者に事情をお聞きしたりとかということはないのですか。もうこういうふうに決まると、ああそうなんだということ、納得されたわけですか。

海原 もうしようがないですよ。

河野 ということは、もし突つくと、やはり担当商社も入っていて、いろいろ利権もあるということをご存知だったんですね。

海原 それはあの頃のことですから、商社とか政治家とか、また出て来ます。要するに、大臣になった人がそれまで勉強していないでしょう。みんな防衛庁長官に凶らずもなるわけですから、何も知らんで

しょう。そうすると誰かに意見を聞きたいわけです。本来、下の役人の言うことを聞いていけばいいんですが、役人の意見を聞かない連中ですからね。そうすると誰に聞くか。新聞記者ですよ。だから新聞記者が必ず出て来ますね。それはもう防衛庁記者クラブにおりますし、それから他の記者の人もいますしね。だって、これがそうでしょう。これも新聞記者でしょう、『帝都日日新聞』も。確かめればいいですよ。しかし、要するに書きなぐる。いろいろな記者がいるんですよ。だから大臣と新聞記者との関係というのは面白いですよ。私が新聞記者なら書きましますけれどもね。みんな、いるんです。松野大臣にも『東京新聞』の記者がちゃんと出てくるわけです。

佐道 昭和四十年代当時の『帝都日日新聞』というのは、どういう存在だったんですか。

海原 これはもういい加減な、今のスポーツ紙みたいなものですよ。

伊藤 いや、スポーツ紙の方がましですよ。これは、もっぱらそういう政界の裏話を書いたりしている。要するに怪文書みたいなものを新聞の形で出している、と言ったほうが正確じゃないですか。

海原 かも知れませんがね。いまだどうなったか。これはどうして消えたかを調べたら面白いですよ。やはりこういうものは、現物をお見せしないとわかりにならないと思つて持つて来ました。ただ私が言葉で『帝都日日』と言つても、それはどんなのかわからないでしょうからね。

伊藤 ここに「社主兼主筆」と書いてある野依秀一、これは彼がやつていたわけですよ。

海原 そうですよ。これが要するに昔の言葉で言うところ「政治ゴロ」ですよ。そういうゴロツキがいっぱいいるんですよ。

伊藤 ただ、ここに書いてあるように、「昭和七年創刊『帝都日日新

間「これはやはり一応権威なわけですよ。」

河野 歴史があるということですか。

海原 こういうのがみんなお金をもらいに来るんです、派閥の親分のところへ。いや、親分のところへは行かないです。派閥の子分のところへ行くんですね、番頭のところへ。それで、なにがしかをもらうわけです。今ではこれがパーティをやつて、パーティ券を買ってもらうような形になるようですね。まあ魑魅魍魎が跋扈していたことは間違いないですけどもね。

伊藤 今度はこういう新聞じゃなくて、何かガリ版刷りとか無署名の怪しげな怪文書にもなるわけですか。

海原 なりますね。

伊藤 何か、封筒の裏にもっともらしい団体の名前があつて、パーツとあちこちに送りつけるというか。

海原 そうです。まあ、いろいろあるんです。怪文書の話になります、私は告訴しましたね。怪文書で騒がれますから、どんなものが怪文書なのかということ、これはお見せしなければいけないですね。

伊藤 それはそうですね。怪文書は自分のところにも送ってくるものですか。

海原 怪文書はご覧になりましたか。

伊藤 僕は歴史の関係で、戦前にばらまかれたいろいろな怪文書などは持っています。

海原 これが現物です「怪文書と書かれたファイルを示す」。

伊藤 ずいぶん立派な怪文書ですね。

海原 それがばらまかれたんです。

伊藤 戦前と違って、やはりタイプで打つてある。戦前のものはガリ

版刷りですよ。

海原 ちゃんと私は本に書きましたけれども、これは上質の紙ですよ。しかも、これを出すのに相当の金がかかりますね。

伊藤 こういうのは署名も、もちろんないわけですね。

海原 もちろんありません。一番最初のやつに「ATOM」と書いてありませんか。

伊藤 書いてあります。みんな「ATOM」と書いてある。最後のだけはちよつと違いますけれども。

海原 「ATOM」と書いてあるだけです。

伊藤 防衛庁幹部の乱脈な女性関係、とか（笑い）。

海原 それは面白いでしょう。置いて行きます。それを書いた奴は誰か。

伊藤 わかつたんですか。

海原 ええ。後で逮捕されるんです「新聞記事のコピーを示す」。『週刊文春』の記者です。ところが『文春』はすぐクビを切っちゃった。

それで私のところではありませんと言う。もう発覚してからです。両方とも私は知っていますけれどもね。ああ、あいつかと思つたんですけれどもね。

伊藤 恩田と言うんですか。

海原 恩田です。その恩田が『文春』の記者。下を見てください。『週刊文春』の責任者が語っているでしょう。優秀な記者で、彼は忙しいから怪文書を書く暇はなかったはずだ、なんて書いてある。

伊藤 ずいぶん立派な怪文書ですね。

佐道 本当にそうですね。

海原 そうでしょう。だから金がかかりますよ。

佐道 誰かスポンサーがいないと。

海原 だから私は、これで直ぐ犯人の見当はついたんです。これは新聞記者か雑誌記者だ。なぜか。最初来た封筒ですよ。私のところに送って来たんですから。それに「防衛庁第二号館」と書いてある。「防衛記者会御中」と書いてある。これがヒントですよ。わかりますか。

まず、皆さん記者クラブはご存知でしょう。防衛記者会なんていう名前は知らないでしょう。正式な名前は防衛記者会なんです。普通は「記者クラブ御中」ですね。しかも、「防衛庁第二号館内」と書いてある。防衛庁にはたくさん建物がありますね。二号館なんて知っている人は、普通の人なら、まずいけませんよ。その宛名は「第二号館」の「防衛記者会御中」ですからね。これはもう、その道の人間だと。だから新聞記者か週刊誌の記者か、いずれかの記者だと私は言ったんです。それ以外はわからない。結果的には一人は『週刊文春』の記者だし、もう一人は『国防経済通信』という通信社の記者です。

伊藤 記者自身と言っても、やはりその裏にスポンサーが付いていないければそんなものは出せないでしょう。

海原 そういうことです。ですから、なぜこんなものが出たかという、要するに私を追い落とすためなんです。その目標は三つあると書いてあります。それはまず、私がいるとファントムに行かないだろうと思うわけです。それは、まさにそうです。

F5というのはもともとN156。これを言うときまた話がだんだん遡るんですが、次期戦闘機の選定の時に、アメリカの空軍がN156というのを推薦したんです。これは本に書いておきました。第一回の調査団が来た時にこれを言うわけですからね。要するに100とか104とか、そういうものはアメリカのような広いところで使うのにい

いんだと。しかし日本の国土は狭い。それから整備にも時間がかかる。いろいろな経費がかかる。そういうのはまずいから、小さな国の戦闘のために考えたのがN156だということです。はっきり彼等は説明したんです。私がいいた時に佐藤さんの調査団が来た。その時に、私が敢えて質問をしたんです。「これは日本のものだけではないに、日本で生産することになったら、他の各国にアメリカは援助を送っていますが、その援助の品目に加えてくれるか」と。「どうぞ、加える」と言うんです。アメリカのような広い国土のためのものじゃないんだ。国土が小さなところで、しかも割に整備が簡単で、いろいろ数字がありますけれども、そういうことで考えたんだから、他の国、アメリカが援助を与えている小さな国にもこれは出せる、ということをはっきり言ったわけです。だから日本だけの需要ではなくて、もっと需要は膨らんでくるということを言うわけです。

そこで私は念のために、「そこまで考えてくれるのなら、仮にF104を日本が採用して、これを日本で造った場合、その各国の援助用のF104も日本で買ってくれるか」と、その佐藤さんを前に置いて聞いたんです。そうしたらシャッフという国防省の代表が空軍の担当者と相談して言ったことは、「いや、それは駄目だ」です。なぜならばF104はアメリカで現に造っているから、外国にやるのなら、日本で造ったものではなくアメリカのものをやる。しかしN156というのは小さな国のためにわざわざ設計したものだから、日本で造れば他の国にも日本で造ったものを渡せる、とはつきり言ったんです。

結果的に言いますと、全部で三千機ぐらい造っているはずですが。だからもし日本がN156(F5)を採用すれば、これは三千機は少なくとも生産したはずですね。そういう意味から言っても、日本の産業

のためにも、私はこのF104を選んだのは間違ったと思うんですけどもね。それはずっと関係してきますけれども、そういう話もあるんです。日本のパイロット達はスピードの点ばかり問題にするけれどもと言つて、敵機を邀撃する際に、どれだけの差が出るかということを書いてくれた。そういう経緯があるものですから、このT38を入れると、その次はF5だと。F5というのはN156のファイターとしての正式の名前なんです。だからT38を入れれば、先ほど言いましたように機体の三分の一が違うだけです。当然F5が入つてくるということになるわけです。私がいると、そっちに決まる。そうするとファントムは入らないということになる。これが一つの『海原排撃』の理由になるわけです。

もう一つはミサイルです。これは自民党の国防部会が東芝と三菱とにそれぞれ別々に造らせる、ナイキはどこ、ホークはどこ、というふうに勝手に自民党の国防部会は決めていっているんです。それを私は知らなかった。後でそういうことを聞いて知りました。そういうことで、私はいろいろと関係してくるでしょう。だから私が入つて行くと、自民党の国防部会が決めたように、ナイキは東芝、ホークは三菱なんというふうにはならないですね。そっちの方もあっていいでしょうね。

だから飛行機の問題とミサイルの問題と、両方に私が関係してくる。それで私を追放しようという動きになるわけです。これはあくまで私の推理です。ですからその二つです。ミサイルと戦闘機。ところが案外ミサイルの方のことは皆さん知らないで、戦闘機のことばかりおっしゃるんですね。そうじゃないんです。私はむしろ三菱と東芝との争いの方が、例えば岸さんあたりに対する働きかけは強かったんじゃないかと思う。それはもう岸さんと土光さん、要するに東芝との結び付

きの方が重要ですから。ということとは、だんだんと怪文書のところが出てくるわけです。要するに、私は邪魔者だということですよ。伊藤 ある方面から邪魔者であれば、他方面からは味方と思われるということになるわけですよ。

海原 味方はいませんでしたね。私は孤軍奮闘ですよ、本当に。私は国会で証言して、「私には敵はいません。ただし味方もいません」と言つたんですからね。これは議事録に書いてあります。その時に私が言つたことは、大体その筋で、海部（八郎）さんの検事調書で出てくるわけです。「朝日新聞・昭和五十四年十二月十一日のコピー『汚い商法さまざま』を示す」。これでもつて証明されるんです。これは検事局が出したものですからね。左の下の方に黒い線が引つ張つてありますから、その辺を見ていただくとわかります。

読んでみますと、「F4Eのころ、防衛庁は海原官房長が実力を持ち、要職も（同氏に近い人々で）しめられていた。海原氏は伊藤忠が代理人をしている競争機のT38を支持していた」と。これはさっきのT38ですね。私が支持したのではなくて、空幕が欲しいと言つたから、それを代弁しただけなんですけれどもね。こう書いてある。これは海部氏が検事に言つたことが出てくるわけですね。

「空幕長の後任人事で都合のよい人をお思い、中村長芳氏に人事面で配慮をお願いし、成功した」と書いてあるでしょう。これは本来ならば、みんな田中耕二君が当然幕僚長になると思つていた。田中君と私とは親しかつたんです。それで、田中が幕僚長になつたら海原―田中の線で行つてしまうということになるわけです。それで、田中がならないで牟田（弘国）君がなるわけです。

しかし私のところに来た空幕の人が二人ばかりいましたが、「当然、

この次は田中さんです」と言っている。それで、牟田君が来たから、「君がなるそうじゃないか」と言ったら、「とんでもない。私はそうではありません」と言う。「じゃあ、君は誰がいいんだ」と聞いたら「田中がいいです」と言うんですからね。そういう人事の予定だったんですよね。ところが、田中は海原と親しいから、ということではない。そういうことも、この海部君が説明していますからね。

伊藤 この中村氏というのは岸さんの秘書ですか。

海原 ええ、政治秘書です。彼が動いたわけです。この空幕長の後任人事、これは何度も言いますが、東京地裁での日商岩井航空機疑惑事件の第三回公判で証拠採用された、海部八郎被告の供述証書の要旨ですからね。これは客観的にきわめて権威がありますよね。この「A」というのは朝日新聞です。「防衛庁人事も工作」という見出しですね。伊藤 これは十二月十一日という意味ですか。

海原 ええ。これはこの年に、この事件の記事あったということですね。朝日新聞に出っていました。だから相当なものですよ、これは。

伊藤 その後、海原氏は国防会議に転出したというところまで、ずっとつながるんですか。

海原 これは供述調書の要旨ですから、そこはわかりません。だけど多分そうでしょうね。そういうことで私は追い出されるわけですから。

伊藤 国防会議の事務局長に、ですね。

海原 私は事務次官になると言われていたわけですが、一般的には。それが増田長官の時に替わるわけですから。その時に私を持って行くとしたのが佐藤氏の線なんです。工作了。中村長芳は佐藤さんの秘書ではありませんけれども、岸さんの秘書ですからね。その線です。だからもう完全に私は岸・佐藤の方から憎まれていた。『照準』され

ていたんです。

伊藤 岸・佐藤の敵は河野なわけですか。

海原 そうです。防衛庁では海原ですからね。松野が長官になったのも、これは佐藤の命令を受けて入ってくるわけです。要するに、伊藤忠すなわち河野一郎、河野派追い出しという、もう単純な図式です。そして海原の親しい奴が全部要職にいる。これを全部追い出すんだということなんです。ですから私の後に、私が人事について本に書きましたように、私を追い出した後、内局に麻生（茂）君を持って来て、私の一分と言われた有吉（久雄）君、これは亡くなりましたが、有吉君を防衛研究所の所長にするんですからね。二階級特進です。普通、あの所長というのは参事官が行くわけですから。わざわざ有吉君を防衛研究所の所長にする。当時の所長は、私と同期の麻生君がやっていたんです。麻生君は私と同じですから、十四年「内務省人省」ですね。その後十八年の有吉君を持って行った。そんなに飛ぶ理由がないわけでしょう。それは要するに有吉は海原の一の子分だ。これを内局に置いておいてはまずい。だから出せ、ということを出すわけです。そういうのを全部画策するわけですね。そんなことを申し上げていくと、ゴタゴタしますから。

伊藤 これは本当に政治問題なんですね。

海原 政治問題というか、政治家の策動によって、私らなんかは将棋の駒みたいに動かされたわけですよ。そして政治家の声を代弁して動くのは全部秘書ですよ。だって見てごらんさい。中曽根氏がリクルートの株をもらうでしょう、あれは全部秘書じゃないですか、女性も含めて。私は秘書というのは、もう代議士そのものだと思っただけですね。それを中曽根氏の秘書が三人全部もらったでしょう。あれは中曽根氏

がもらったのと同じことですよ。出す方は、秘書に渡すと、それは本人に行ったと思いますからね。そういうことです。今の日本の社会の構図、構図と言いますか、構造と言いますかね。

これは一番客観的なものでしょうね。検察庁で海部君が喋った供述の要旨ですからね。しかも新聞に出ているわけですからね。まさに中村長芳秘書のところまで動いているわけです。「人事のことは松野氏にも頼んだ」と書いてあるでしょう。それで、「岸元首相らにお礼してくれ」なんて書いてあるんだから。まあドロドロしたものです。私と言っても皆さん方は信用されないけれども、やはりこれを見ると、なるほどそうかということになるわけです。検察庁での供述調書ですからね。いかに当時はそういう政治家どもの争いが盛んであって、そのためにはいろいろな手を使ったということがわかるわけです。先ほどもちよつと言いましたが、政治家は、新聞記者を使うんですね。新聞記者が入れ知恵するんですね。

この前に私がお話し申し上げようと思ったのは、上林山(栄吉)さんの問題ですね。この「上林山お国入り事件」というのは知りませんか。

伊藤 ええ。聞いたことがあります。

「上林山お国入り事件」の顛末

海原 「上林山事件」については、どの程度までご存知ですか。

伊藤 あまりよくわかりません。政治的意味ですか。

海原 なぜ、あんなに揉めたか。上林山長官は「元帥」と言われたんです。あの経緯を言いますと、まず上林山さんというのはどうして長官になったかわからないんです。俗説によると、彼は非常に総理夫人に運動して、総理夫人からの推薦でもって一本釣りされたということになってはいるんですがね。これは私が確かめたわけではありませんからわかりませんが、とにかくなぜあの人が防衛庁長官になったかわからない。それはともかく、防衛庁長官になりますと、次官と官房長が二人で挨拶に行くわけです。それで、私は三輪次官のお供をして行ったわけです。政府委員室で会うわけです。雑談みたいなことを話していた。私は会うのは初めてですからね。そうしたらいきなり上林山さんが、「防衛庁長官は、昔の軍隊の階級で言えば何になるだろう」と聞くわけです。そんなもの比較するのが間違っているんですけれども、誰かが「それは元帥ですね」と言っただけです。そうしたら、「そうか、元帥か」と言っただけです。これが「上林山元帥」の起りなんです。それからしばらくしましたら、二階堂官房長官から私の官房長室へ電話がかかってきました。「海原君、君が官房長をしていて、なぜ上林山のために元帥服なんかを作るんだ」と言うんですね。「元帥服って何ですか」と言っただけです(笑い)。そうしたら、そういう話がちやんと伝わっていると。元帥服、これは誰が入れ知恵したかわかりますか。というのは長官が地方へ視察か何かに行くでしょう。その時に防衛庁長官は制服がないですね。

伊藤 軍人じゃありませんからね。

海原 普通の背広で行きますね。だけど背広は動きにくいでしょう。そうすると作業着みたいなものを着て行きますね。そういう人が多い

わけですけれども、背広で行くか、あるいは現場を視察する時には作業着に着替える。そういう時に作業着だと何も階級がないでしょう。そこで「元帥服を作れ」ということを、ある新聞記者が上林山さんに言ったんですね。上林山さんに、いろいろ入れ知恵した人ですよ。名前もわかっていきますけれども、言いませんが。これが「元帥服を作れ」と言った。そうしないと、大臣が来たということが現場でわからんと。単なる作業着を着ただけでは駄目だ。だから帽子もどこかへ徽章を付ける。それがだんだん話が伝わって、二階堂氏のところへ行ったらいいんです。「海原君、君が官房長をしていて、元帥服作らせるか」と言うから、「そんなの知りませんよ」と私は言った。調べたら、ある新聞記者が入れ知恵したんです。そういうふうには防衛庁長官になった人は、結構新聞記者を使いますね。

この上林山さんに入れ知恵した人が、また次の進言をするんです。「六本木の『制服』の諸君が通勤する時はみんな背広ですよ。あれはいけない。制服で通勤させる」と言ったんですね。彼はさっそくそれは良い案だと言って、命令しようとした。私はそれを聞いたから、大臣に言ったんです。「それは無理です。できませんよ。なぜか。理由は簡単です。例えば『陸』の方はボタンが少ないけれども、海上自衛隊なんかボタンがいっぱい付いているし、袖には派手なモールが付いているでしょう。あれで満員電車の中に乗ってごらん下さい。押し合ひへし合う中に陸・海・空の佐官ぐらいいはいるわけです。乗れません。しかも出勤時間は早いでしょう。だから制服を着たら、とてもあの中に入れていきません。だから大臣、それは無理です」と言ったんですけれどもね。「ああ、そうか。そんなものか」ということですね。これを入れ知恵したのも、やはり新聞記者です。しかし、これは全然実

施できませんね。

ことのついでに、背広と制服の問題ですけれども、林敬三さんはしきりに制服を着用させると言った人です。私がたまたまイギリスに行った時、ロンドンで向こうの参謀総長に会った時に質問してみたんです。というのは、向こうの海軍省へ行っても空軍省へ行っても、みんな背広なんです。私の会った、日本で言うところの統合幕僚会議議長に相当する人も背広なんです。日本で自衛官は背広か制服かということでは揉めましたけれども、ロンドンの官庁の軍人さんは全部背広ではないかと聞いたたら、それは背広がいんだと言うんです。部隊では制服が絶対必要だ。しかし海軍省、陸軍省、空軍省あるいはそれを統合したところ、そういうところでは背広のほうがベターだと言うんです。なぜかと聞いたたら、制服だと否でも階級章が目に入る。階級章があるとフリーで活発な議論ができないと言うんです。ああ、そんなものかと思いましたが。だから部隊では絶対に制服だけでも、官庁では背広の方がいい。それがわれわれの体験だし、今のしきたりだと言われたんです。そのことを私は帰って報告しましたけれどもね。しかし、「仮にも自衛官たるものは制服を着用すべきである」というようなことを新聞記者が言うのと、「ああ、そうだ」となるわけです。それで、長官から命令が出ても、全然実行できません。

なぜこんなことを申し上げているかと言うと、防衛庁長官なる人が往々ブレーンとして使うのは新聞記者だということです。松野氏も伊大知(いだいち)という東京新聞の記者を使いましたね。これが付いて回って、これがいろいろな情報の提供元ですね。だから必ずと言っていいほど、防衛庁長官になった人には新聞記者が付きますね。

河野 その場合の新聞記者というのは、記者クラブに属したことのあ

る記者ですか。

海原 それもあります。記者クラブか、あるいは本社の政治部か社会部かですね。

伊藤 ちゃんとした新聞の記者ですね。朝日とか毎日とか読売とか。

海原 それがまた、いい例があるんです。「上林山お国入り事件」もありましたけれども、この時にいろいろ問題があつたんですね。荒船清十郎さんの「急行ストップ事件」というのを覚えておられますか。あれが急行を止めた。他にも政務次官の渋谷さんでしたか、どこかへ派手なお国入りをしたということがありまして、要するに新聞や雑誌が狙っているわけです。そのことを聞きましたから、私は次官にも言つたし、それから直接秘書官にも言つて、上林山さんがお国入りを派手にやると、みんな狙っているようだから、極めて地味にやつてほしいと言つたんです。そうしたら、「わかつた、十分注意するから」ということだつたんです。それで行つたわけです。

そうしたら、「上林山お国入り事件」ということになるわけです。どこが派手であつたかと言うと、まず軍楽隊が付いたわけです（笑い）。これは防衛庁が企画したわけではないですよ。音楽隊が付いたのは、地元の後援会、父兄会、そういうところが交渉するわけです。それぞれが申請するわけです。そうすると例えば、西部方面隊に音楽隊があるでしょう。そこへ連絡しますと、ちゃんと出してくれるわけです。だから一言で言うと、上林山さんの後援会があちこちで軍楽隊を出しているんです。

私はお供して鹿児島に着きました。私は、結果的には幸いだったんだけれども、大臣一行には入っていないんです。それは大臣のお国入りですから、東京からの随行記者団がいる。これとの歓談、会食が必

要でしょう。それを全部秘書官がやっているわけです。どこでやるのかを見に行つたんです。そうしたら秘書官が、地元の鹿児島の「地連」（地方連絡部）の部長さん（これは上林山さんの親戚になるんですが）に連絡したらしいですね。それで、どこどこに取りましたと言うから、それを見に行つた。そのために私は一行から離れたわけです。飛行機は一緒ですが、降りて長官を送つておいて、すぐ今晚の会食の場所を見に行つたんです。そうしたら、何と「地連」の部長が選んだのは、中学生なんかが行く旅館なんです。その旅館の経営者が上林山さんの親戚なんですね。だから、よく利用していたんです。そこへ行って、今晚の記者との会食はどこでやるんだと聞いたら、案内されたのが要するに食堂ですよ。学生の修学旅行のお宿ですから、普通の食堂で、折り畳みの椅子で座つてやると言うんですね。これはいかんと思つた。こんなことをさせてはいかん。やはり、どこかきちんとしたところでやらんといかんと考えました。

と言つても、私は鹿児島は初めてでしょう。どうしたと思ひますか。誰かにこれは知恵を借りないといけないです。そこで咄嗟に思いついたのが、私は元警察にいましたから、警察本部です。その総務部長に話をして、私は元警察にいた人間で、後藤田と同期だと言えればわかりますからね。ついては、こういうことで長官のお供で来たんだけれども、今晚長官と新聞記者との会食をやるのにどこか場所を教えてくださいと言つたんです。君ならわかつているだろうからと聞いたら、「ああわかりました」と言つて、すぐ教えてくれた。教えてくれたところは、やはり立派な料亭でした。しかも次の晩、地元の記者が大臣を歓迎する場所なんです。同じ場所が良かったわけです。秘書官どもに任せておいたら、中学生が泊まる旅館の食堂だったわけです。そうしたら随

行記者も怒るでしょうね。

今日はちよつと余談ばかり出ますけれども、随行記者に問題がありました。「上林山お国入り事件」というのは『週刊文春』が書いて初めて問題になるんです。新聞は一言も書かなかつた。それで、私は安心したんです。軍楽隊が付いたというのは地元が要請して、バーバーやったわけですから、全部みんな知っていますね。しかし、中央紙も地方紙も全然そのことは書かない。ところが『週刊文春』が取り上げたわけです。これは先ほど申しましたように、当時「荒船事件」がある。それから他にも事件がある。佐藤内閣の綱紀が弛んでいるということで、記事にしましたね。『週刊文春』に、こういうことだということでも材料を提供した人も知っていますけれどもね。

そこで『文春』が取り上げてから大問題なんです、「上林山お国入り」が。ところが、その時に大臣はいないんです。アメリカに行っちゃっているんです。だからアメリカに行っている留守に、『週刊文春』の記事に載って一斉にワーツとなるわけです。大臣が軍楽隊を先頭にお国入りしたということで、国会で臨時に委員会が召集される。答弁に立ったのが政務次官の長谷川仁さんと私です。その頃大臣はアメリカです。もう大変だったですね。私が答弁に立ったことについて、朝日新聞の夕刊でしたか、私が答弁に立ったら、「こいつが悪いんだ」とヤジが出たと（笑い）。私は何も知らないんだけれどもね。そういうことで、最初大変な騒ぎだったんです。

米国にいる時に「上林山さんが」泊まった場所は忘れましたが、部隊の迎賓館に泊まったんですね。そこへ東京の各社から電話がいくので、時差があるでしょう、もう大変な騒ぎになったですからね。上林山さんが帰って来て、改めて国会が開かれる。そこで吊し上げを食ら

うわけです。

その留守中の出来事です。まず最初、大臣が向こうにいる時、長谷川政務次官と私とが委員会に喚び出される。そうしたら大臣が不在ですから、まず長谷川さんが代理をするわけです。どう答弁するかということ、政務次官、事務次官、私と三人で相談するんですが、政務次官、事務次官は「謝ってしまえ」と言うから、私は「何を謝るんだ」と言っただけです。何が悪いのか。というのは先ほど言いましたように、新聞には全然出ていないんですからね、派手な部分は。ただ、週刊誌には書いてある。それが元で、どうも向こうから狙われている。だからいきなり謝るのはおかしい。留守番が真っ先に謝っちゃったら、もう後が大変なことになるから、謝るのはおかしいということで、謝らなかつたんです。その代わり、いろいろ答弁した。

そうしたら、まず資料提出でしょう。そうすると新聞記者、防衛記者会と一緒に行ったということがわかるわけです。向こうからも要求があつて、例えば今回の出張のための使用飛行機の経費いくらというのを出す。使用機二機と出したわけです。事実、YS11が二機行つたんですから。これは説明しますと、長官機が飛ぶ時には予備機が一機くつつくんです。それがあつたので二機になった。その二番目の第二号機には新聞記者諸君が乗っているわけです。この新聞記者が付いて行くことについても問題があるわけです。私は大臣に「できるだけ派手にしないほうがいいですよ」と言った。大臣は「よくわかつてい

るから」と言っただけですけれどもね。

この随行記者団の中に朝日と毎日が入らなかつた。朝日は初めから行かなかつた。毎日直前になってやめたんです。そのことをTBSテレビの日曜放談で細川隆元さんが取り上げました。細川さんが日曜

放談で、「さすがに朝日と毎日立派だ。今度の上林山大臣の随行記者の中には朝日、毎日が入っていないかった」と言っただけです。ところが、それを聞いていたのが某社の社長さんなんです。「いや、俺のところも行ってないんだ」と。それで、放送局に電話したわけです。ところが、実際は行っていません。これで問題になる。行っていたことを社長は知りません。というのは、その人は当時の防衛庁記者クラブの、当番制ですが、幹事なんです。まあ、いい人ですけどね。行った連中は全部合わせて二十名ぐらいいましたが、正式に届けを出した者、休暇を取った者、無届け、この三種類があっただけです。俺のところの記者も行ってない、と言った社の記者は、無届けで行っちゃったんです。その社長さん、なかなか難しい社長さんなんで有名でした。さあ、そこで問題になるわけです。

そして、どうしたらいいかということで、その記者クラブのトップから連絡があつたので、「それは俺の方で判断できない。お前さんの方の記者クラブで、ひとつ社会党の理事と話してくれ。それによって対応を考えよう」と言っただけです。「私が頼んでもしょうがない」。そうしたら「わかった」ということで、その時は共同通信の記者が世話役でしたが、これが社会党の理事と相談して、その件は質問しないことになったんです。ところが、その留守中の最初の委員会に、長谷川さんと私が行くでしょう。最初に質問に立ったのは村山（喜一）さんという鹿児島選出の代議士です。その村山さんが、「この提出資料を見ると、使用飛行機は一機になっている。あの時二機飛んでいるはずだ」と言っただけです。それは、たまたま自分は民間機で鹿児島に降りた。そのすぐ後に自衛隊の飛行機が降りたが、次の民間機は降りるのにしばらく待たされたと言うんです。防衛庁長官の飛行機一機が

降りて、二機機が降りる間、待たされた。約二十分上空で待機させられた。だから飛行機は二機行っているはずだ、となるわけです。

それについては先ほど言ったように、話がついているはずだと思っただ。そうしたら社会党の理事がいらないんです。私は困っちゃったんです。質問をする村山さんにいろいろ言って、その間に防衛庁の政府委員室の人に「理事を探して来い」と言っただけです。それで理事が来て何か耳元でささやいたら、「この飛行機の件は事情があるようだから、これはやめます」となりました（笑い）。そういう経緯なんです。いかに官房長というのはくだらんことで神経を遣うかわかりでしょう。参ったですね。「あの時、飛行機は確か二機行っただけです。防衛庁の提出資料には一機と書いてある。これは間違いである。虚偽の資料を提出してけしからん」と。実際の事実は言えないじゃないですか。理事がいらないわけです。それで政府委員室の担当者を呼んで理事を探してくれと頼むというようなことがあつた。

今日はそういう雑談みたいなことがずいぶん出ましたけれども、そういういろいろなことがあるんです。だからなかなか、あの時なぜこうなったのかということも、そう簡単に、一十二二三です、というふうにはいけません。

伊藤 もうそろそろ時間ですので、今日はそんなところで終わりにしましょうか。

海原 上林山さんの話で終わっちゃったですね。

伊藤 まだいろいろ問題はたくさん残っておりますので、ゆっくりと行きたいと思えます。

海原 いいですか。私が余計なことを申し上げたようで。

伊藤 いえいえ。質問要項の中で、これは大した問題ではないとおつ

しゃれば、そこはどんどん飛ばして参ります。

海原 そこで例の三矢研究の締め括りですが、これは一体誰が誰に渡したか、です。あれについては松本清張さんが書いていますね。松本清張氏のところへ来たんですね。誰が渡したとは書いてないです。しかし記者筋であると書いてある。それで松本清張氏から岡田春夫氏に連絡が行く。そして岡田さんがやった。これは岡田さんの本にちゃんと書いてあります。それだけわかりました。ですから私が、とにかくこれはクラブだと言った。まだ三矢研究の話は全部済んでいませんでしたね。

伊藤 三矢研究の話は次回まとめてお話しただけだと思います。

海原 じゃあ、そうしましょう。上林山さんの話でいろいろ申しました。

伊藤 なかなか面白い話ではありませんね。

海原 面白い話なんです。しかし、ご参考にはならんでしようが。

伊藤 海原先生が何を面白いかとお考えになられているかがわかって、面白いわけです。やはりその時代背景みたいなものがありますからね。それは大事なことですから。

海原 それから先ほど言いましたが、政治家は新聞記者を使うし、頼るわけですね。

伊藤 それと、やはり利権の問題ですよ。その利権ということを取って先生はあまりおっしゃいませんでしたけれどもね。

海原 いやあ、それはまたあるんですよ。要するに、岸対河野の争いですね。

伊藤 それは佐藤対河野でもあるわけですね。

海原 ええ。その大きな渦があることは事実ですね。私が河野派にな

っちゃったのは……。

伊藤 なっちゃったというのは？

海原 いや、だから後からいろいろあるんです。それは河野さんが、海原君はなかなかいいと言つて、「次の選挙には、海原は河野派から出る」なんて言われたんです。

佐道 それはもう明確な河野派ですね（笑い）。

海原 河野派と言えば伊藤忠でしょう。伊藤忠だからということ、いろいろ条件が揃つたような感じですね。

佐道 状況証拠的には揃いましたね。

伊藤 真つ黒になっちゃいますね（笑い）。

海原 本当ですよ。

伊藤 次回は三矢研究を思いっきり喋ってください。

海原 それには、はつきり「研究」と書いてあるでしょう。それを「計画」と言うんです。これがやはり岡田流なんですね。

伊藤 あまり今日は言わないでください。

海原 これも参考までに「資料を配付」。ヘリ空母につきましたは、自民党の国防部会が総理に陳情しているんです。海原が局長になったらもう潰れるということですね。そういうもつぱらの評判でしたから。

佐道 評判通りになりましたね。

海原 なつたわけです。その時、山梨（勝之進）大将のところまで、ある民間人が工作に行つたんです。今度、防衛局長に海原がなるらしいが、彼がなると海上関係者がかねて期待しているヘリ空母が実現しなくなる。何と山梨大将のところまで。その情報を誰が教えてくれたか。堂場君です。「君、気を付けろ」と言われた。気を付けろと言われても気を付けようがないです。そんなことでした。だから、よ

く私は殺されなかったなと思いますね。

伊藤 殺すにはちよつと危ない。

海原 もうあいつは放つておいても終わりだと。ところで、いま改めて司馬さんの『坂の上の雲』を読んでいるんですけれどもね。本当に昔と今とはいかに違うか。昨日が八日でしょう。

伊藤 開戦記念日です。

海原 開戦記念日ですけれども、「大詔奉戴日」という名前はご存知ですか。

伊藤 私の子どもの頃は「大詔奉戴日」がございました。

海原 ありましたね。ところが、若い人に聞いたら誰も知らない。

伊藤 それはそうですよ。教えるわけがないんですから。

海原 「大詔奉戴日」、ご存知ないでしょう。

河野 どういう字を書くんですか。

伊藤 「開戦の大詔を戴く」という。

海原 戴いて何をするんですか。

伊藤 大体、あの日は日の丸弁当か何かを……。

海原 「すいとん」ですね。昔を偲んで、「すいとん」なんです。そういう「大詔奉戴」という名前を知っていますかと聞いたんですね、

昨日。

伊藤 それは無理ですよ、そんな。

海原 そうすると、これはどういうことになるんだろうなと思う。私

が言いたいことは、いかに役人は苦勞するかです。

伊藤 苦勞しない役人もいますけれど（笑い）。

海原 私は三矢問題では小泉純也さんに仕えたんですからね。この三

矢問題について、ちよつといま雑談的に申し上げていいですか。私は

あの時、田中さんはさすがだと思いましたね。

伊藤 角栄の話ですか。

海原 はい。「国会の大臣室に至急来てくれ」と電話があるんです。

行ってみたら、大臣と次官が立っています。総理から何から全部いる前です。二階堂さんが当時、いろいろ野党との連絡役をやっていたんですね。何かと思った。長官と次官とがいるんですから。そうしたら

「野党は三矢研究の責任者を処罰しろ」と言っている。「そうしないことには予算審議に応じないから」と。「とんでもない」と私は言っ

たんです。院内大臣室ですよ。大臣方がみんないる。わが大臣と次官は立っている。「海原君、こういうことになった。関係者、責任者の

処分をしろが、再開の条件だ」と言う。私は、「とんでもない。何も悪いことしてないのに。本来やるべきことをやっただけのはずだ」と

言ったんです。後で総理も、そう言いましたけれどもね。やるべきことだと。「研究」であって、何も計画ではない。それを処分なんてと

んでもないと、いろいろ理由を言ったわけです。

その時に田中さんは立派だった。大蔵大臣で、総理の隣に座っているんです。私がひとしきり、とんでもないことだと言ったら、「そ

うだ。そうだな。うん、そんな責任者の処分はやらん」と、こう言っ

たですね。そうしたら二階堂さんが、「そうしたら止まりますよ、国

会は」と言った。田中さんは、「止まってもいい。暫定予算だ」とい

う感じですね。「それは防衛局長の言う通りだ。何も悪いことをした

わけではないんだから。悪いこともしていないのに、関係者の処分が

国会の予算審議の再開の条件になっているなら、そういう条件は呑ま

ない。呑んじゃいけない。それはもう防衛局長の言う通りだ」と言っ

たですね。私は嬉しかったですね。

伊藤 そうなっただんですか。

海原 なっただんです。三日間止まりました。二階堂さんはやはり連絡係でいろいろ苦労しているからでしょうね。「それなら、海原君、審議が止まるぞ」と言う。「それは私の問題じゃありません」と言っただんですが（笑い）。

佐道 それはそうですよね。

海原 その大蔵大臣、田中角さんが「わかった」と言った。あの人はすぐ「わかった」と言う。「うん。もう止まってい、そんなものは暫定予算だ」と言ったですね。もう総理は一言も発言しないんですよ。その途端に、私は彼に惚れましたね、角さんに。あの人は瞬時にそういう決断ができる人ですよ。そして、それをはつきり言う人ですね。

伊藤 政治にとって決断というのは一番大事なことですからね。

海原 そうですね。惜しい人でしたね。

伊藤 まあ、いろいろ問題はあつたんだろうと思いますが。

海原 雑談ばかりしていますが、面白いでしょうか。こっちは申し上げているうちに、いろいろと思ひ出しましたよ。

伊藤 思ひ出されるでしょう、話しておられるうちに。

海原 「資料を配付」それは治安行動の要領「昭和三十五年五月、陸上幕僚監部『治安行動の参考』」です、ご参考までに。こういうものがあつたということです。こういうものが基礎になつていっているわけですし、私は結論を言いますと、これには関係していません。質問にありました、そういうことです。

伊藤 この質問「第十四回質問項目の三番目」は、関係ありません、ということですね。どうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第15回

開催日：2000年1月11日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 15 回 質問項目

今回も、防衛局長時代の続きのお話をお願いします。特に今回は「三矢研究」の問題を中心に伺いたいと思いますが、その前にいくつかの質問にお答えいただき、その後でじっくり「三矢研究」についてお話しいただければと存じます。

- ① 1962年5月2日付の朝日新聞によれば、防衛庁では、退職になった幕僚長などの将官クラスを処遇するため、防衛参議官(仮称)制度の検討を始めたという記事が出ています。この制度についてお願いします。
- ② 1962年5月には、ラオス問題で在日米軍機がタイへ出動したことについて、事前協議の対象になるか否かという問題が起きました。「対象にはならないが遺憾である」というのが当時の政府答弁ですが、先生はどのように考えておいででしたか。
- ③ 1962年6月、防衛庁は米国と「防衛技術資料交換計画」による協定を準備中という報道が出ました。どういった協定か、内容や背景等についてお願いします。
- ④ 1962年12月、東京新聞によれば、志賀防衛庁長官が自衛隊教育の再検討と、近代兵器を重点に研究開発を促進するよう事務当局に指示を出したと伝えられています。これは具体的にはどのようなことだったのでしょうか。
- ⑤ 1962年10月には、キューバ危機が起きました。米ソが核戦争の瀬戸際まで行ったわけですが、このとき防衛庁にはどの程度の情報が入り、そしてどのような対応をしていたのでしょうか。
- ⑥ 1963年2月、防衛庁は、防空体制の強化、対潜水艦作戦に重点をおいた三次防の基礎構想の検討に入ったと新聞が伝えています。三次防の内容や特徴、審議経過などをお願いします。
- ⑦ 1963年1月、日米安保協議委員会の第三回会合が開かれています。新聞によれば、日米で中共の脅威に対する認識に違いがあったと伝えられていますが、実際はいかがだったのでしょうか。
- ⑧ 1965年2月の国会は、いわゆる「三矢研究」の追及で揺れます。防衛庁の対応も大変だったと思いますが、いかがでしたか。発端から順になるべく時間軸に沿ってお話しいただけますか。

事前協議とは何か

——ラオス問題

海原 これはご存知ですか「一高の小冊子『向陵』を示す」。これを読みますと、時代の裏がよくわかると思います。私も書いてあるんです。「一高の三年間を偲ぶ」です。これを読みますと、当時の日本の動きが、高等学校の寮生活を通じてわかると思うんです。後ろの方に付箋があるのは中国の留学生の記録で、憲兵隊に調べられたというよな話も出ています。東大に森巨という総長がおったでしょう。彼は私の女房と小学校六年間の幼な友達なんです。その森君も書いています。何らかのご参考になるかと思つて持つて来ました。

伊藤 僕が大学に入った時には、駒場にはまだ一高の雰囲気少し残っていましたよ。まだ一高生がいたんです。留年していた連中ですね。海原 その本は原稿料の代わりに数冊もらいましたので、これは、と思う人に差し上げていますので、ゆつくり読んでください。

それから、これは後から申し上げようと思つたんですが、これはクイズです。

伊藤 先生のクイズは難しいから(笑)。

海原 私はびっくりしたんですが、まずこの『Time』と『Newsweek』をご覧ください。これは新しい、一月のものです。見てください。『Welcome to the 21st Century』と書いてある。うちらも『Welcome to the New Century』と書いてある。私は、青山学院大学の寺谷(弘王)君に電話して、「君、『Time』と『Newsweek』を読んだか」と聞

いたんです。「まだ読んでない」と言うから、「おかしいじゃないか」と言つたんです。今年はまだ二十世紀ですね。それを『Time』と『Newsweek』の両方が、表紙にこう書いてあると言つたんです。寺谷君というのは、英語とロシア語がべらべらですからね。どうしてこういうことになるんですかね。日本でも間違えて、「もう二十一世紀だ」と言う人がいるんです。

伊藤 少しいますね。でも大体は、二十世紀の最後の年だと言つていますね。

海原 それなのに、これはひどいでしょう。

伊藤 アメリカでは、そう思っているんですかね。

海原 そこなんです、問題は。そこで私が読んだ記憶では、中国とイギリスとは、今年から二十一世紀だと言っているんですね。それはもうだいたい前のことです。だから説が分かれるわけです。

伊藤 でも、紀元0年というのがなければならぬわけですね(笑)。

海原 これは話になるでしょう。どこもこれを取り上げませんよ。青学の寺谷君は英語がべらべらの人ですから、「お前さん、二十一世紀はどうなんだ」と言つたら、「それは、もちろん二〇〇一年からです」と言うから、「それなら、何でアメリカの二大週刊誌がこう書いているのか」と聞いたんですね。僕の知る限りでは、日本の新聞雑誌で、おかしいということはどこも言っていないですよ。

伊藤 おかしいとは言っていないませんが、新聞は、「今年は二十世紀最後の年だ」と書いていますよ。

海原 ボソツとね。でも、これがおかしいと言う人はいないんですよ。どうですかね。

伊藤 どういうつもりですかね。

海原 それを知りたいんですよ。歴史学会の会長さんとしては、重大な問題でしょう。

伊藤 たぶん、紀元0年というのがあると思ってるんですよ(笑い)。

海原 ことほど左様に、これは世界的な問題でしょう。僕が間違っていると思って、念のために辞書を引いたんです、研究社の大辞典。そうしたら、まだ今年は二十世紀の最後だと書いてある。ところが、こうでしょう。くどくなりますが、それを問題にしないのがおかしいと思います。どうでしょう。昔、私はテレビ番組を持っていましたが、今もあればテレビで言うんですけれどね。おかしいでしょう。

佐道 これは本当におかしいですね。

海原 しかし『Time』や『Newsweek』の表紙は出てこないでしょう。まさか間違ったことを書いてあるとは思わないから。中を見ても、New Centuryと書いてありますよ。

佐道 新聞は「二〇〇〇年問題」を追いかける方が先で、全然気が付いていないんじゃないですか(笑い)。

海原 その「二〇〇〇年問題」になると、あれはキリスト歴ですね。しかも、実際の生まれた年より四年違うとかという話もあるでしょう。それから先は私の独壇場なんですけれど、各国ともに、それぞれの歴史があるんですよ。五千年の歴史とか、七千年の歴史とか。それからいくと日本は二六六〇年ですからね。その方が大事ですからね。

伊藤 昭和十五年が二六〇〇年ですね。

海原 あの時、紀元は二六〇〇年」という歌まで作って歌われたんです。

伊藤 あれは、ちゃんと歌えますよ。

海原 私は新聞が平成十二年はいいけれど、なぜ「皇紀」を書かない

かと言うんですね。それぞれの国に歴史があるんだから。キリストが生まれてから何年と言っても正確にはわからないんだから。同じことで、神話の日本の歴史があってもいいじゃないかと。

伊藤 今、われわれは「教科書の会」で作っておりますので。

海原 中国は四千年と言うでしょう。エジプトは七千年ですか。

伊藤 中国は、そういう経年的な数え方はないですね。

海原 私はクリスチャンじゃないですからね。「西暦は」クリスチャンの歴史なんです。しかも間違っているわけでしょう。

伊藤 間違ってもいいんですよ(笑い)。

海原 要するに目安ですからね。それなら日本は皇紀を使え、と言ったら、否、だつて年号があると言う。何だと言ったら、平成だと言う。それは今の天皇の年号であつて、そんなものは歴史とは違うと言ったんです。そうしたら黙っちゃいましたけれどね。

伊藤 いやいよ皇紀を使いますか。

海原 使ってくださいよ。

伊藤 イスラムはイスラム歴でやっているでしょう。ロシアはどうしているのか知りませんがね。

海原 みんなそれぞれの国の歴史があるんですからね。他所はともかくとして、大日本帝国の歴史があるわけですからね。

伊藤 まあ、大日本帝国というのは短い期間ですからね。

海原 その一つだけけれど、紀元は二六〇〇年と国中がお祝ひしたでしょう。これは過去の否定できない事実ですね。これが今日の「開会の辞」というか。

伊藤 本年の年頭にあたつて。

海原 年頭の訓辞みたいなものですかね。

伊藤 それでは具体的なお話をお願いします。質問の項目に必ずしも沿わなくてもいいんですがね。

海原 これ「質問項目」を読んできましたので、そのつもりでやりま

す。

伊藤 最初は「一九六二年五月の」防衛参議官制度の検討の問題です

ね。

海原 簡単に言いますと、まず第一に、藤枝（泉介）さんの時ですね。

この防衛参議官について、全然私は知りませんでした。この前も申しましたが、大臣というのは、自分がなった時に、変わったことと

か新機軸を出したいんですね。そこに入れ知恵をする人ももちろんい

る。その大本は新聞記者だと申し上げましたが、そういうところから

出たんでしょね。私は、政治家というのはそういうものだと思うて

いますから、全然興味を持ちませんでした。

伊藤 そういう話も聞いていなかっただけですか。

海原 聞いていません。新聞に出ますからね。朝日新聞ですから、お

そらく藤枝さんも誰かに言われて、それはいいアイデアだ、というこ

とでやったんじゃないですかね。あの頃は、大臣は旧陸海軍軍人を大

事にしなければいけないという一般的な思想がありましたからね。そ

の流れではないかと思えます。私は知りません。私に相談があれば、

そんなものはやめなさい、と言いますからね。あいつに言うのと反対さ

れると思つて（笑い）。

伊藤 逆に、こういうことは駄目ですよ、と言つたら、いやいや、

と言うかも知れない（笑い）。

海原 藤枝さんが信頼した秘書官は、今でも付き合っている伊藤君と

いう私の仲間なんです。だからおそらく伊藤君あたりに相談したら、

それは言わない方がいいと言つたんじゃないですか。これは私の憶測

ですけれどね。

伊藤 では、そういうところは飛ばしましょう。

海原 その次は「一九六二年五月の」ラオス問題ですね。これは、日

米安全保障条約の条文をご存知ですか「安全保障条約の条文コピーを

配る」。どういう時に協議するかということを決めてるわけですね。

そこに書いてありますように、「アメリカ合衆国軍隊の日本国への配

置における重要な変更、同軍隊の装備における重要な変更（これは核

ですね、核などの持ち込みを言います）、ならびに日本国から行なわ

れる戦闘作戦行動」、これについては事前に協議することだつ

たんですが、この三つだけですね。

在日米軍ということについての解釈が皆さんはつきりされないんで

すが、これは日本の区域に入ったら在日米軍なんです。出れば、「在

日」ではないんです。その米軍がどう行動するかということは、こち

らは一切聞かないことにしている。だから日本にいた米国軍の一部が、

例えばベトナムに行くとか、どこに行くとかについては、全くわれ関

せずです。現に朝鮮戦争の時には、板付からアメリカの戦闘機が飛び

立つたわけですからね。

そういうことで、「協議がなかった」ということについての質問で

すね。それに対して「対象にならん」と言つたわけですね。しかし連

絡はあつて然るべきだと思ふんですね。当然連絡はあつたと思ひます。

しかし、それを公表するかどうかはまた別問題になるんですね。だか

ら公に問題にされた時には、知りません、ということにならざるを得

ないと思ひます。その当時のことで、私たちは当然そう思つていま

す。事柄は外務省の問題ですから、経緯はよく知りません。そういうこと

で、日本の基地から作戦行動に出て行く時には、協議しないといけない。しかし移動の場合には、何も協議の対象ではないんですね。

それから、もう一つ余計なことですが、当時は、日本に言ったら漏れると、アメリカの連中は思っているわけです。現にそうですし、秘密保護の規定がないでしょう。日本の自衛隊が米軍の下請けをやって通信情報を取っていた時の話がありますね。瀬谷の通信所の話はしませんでしたか。それは、私が防衛局長の時にアメリカと交渉したという話です。通信傍受の機械は全部アメリカのものなんです。それを使って、日本側が取っているわけですね。例えば東京のそばでは瀬谷ですが、あちこちにあるわけです。いわゆる「象のオリ」というのがあるでしょう。北海道や沖縄にもありますが、あちこちにあるわけです。あれは全部通信情報なんです。それを自衛隊が行って、手伝っているわけですね。ところが、こういう通信情報が取れたのかという答えは、こちらに寄越さないんです。私は直接米空軍の責任者に会って言ったんです。私の方は要員を出してお手伝いしている。しかし、それは機械で入って来ているので、それを渡す。

伊藤 それは暗号になっているわけですね。

海原 まあ、暗号みたいなものですね。それを解読したものが英文に直るわけですね。

伊藤 英文にして渡しているわけではないでしょう。

海原 ダーツと機械で入っているものをそのまま渡すんです。だから何かわからないんです。それを向こうで解読するわけですからね。どういいう情報を取っているのか、一切こちらには知らせてくれない。それでは、まるでわが保安隊、自衛隊の連中は使役をやっているようなものだ。おかしいじゃないか。機械はお前さんの方のものだけだと、

それを取っているのはわが方の隊員だ。だから、どういいう情報が取れているのかということぐらいは知らせて然るべきじゃないか、と私は言ったんです。

向こうの責任者は大佐でしたが、そのとき言いました、「何分にも、お国には秘密保護法がない」と。それで私は、「アメリカには嚴重な秘密保護の規定があった。しかし一番大事な原爆の秘密はソ連に盗まれているじゃないか。だから、そういうことは法律の問題ではない。人間対人間の問題で行くべきではないか。これは当然現地では判断できないだろうから、ワシントンに聞いてくれ」と言ったんです。そうしたら「わかった」と言った。それから二週間経って、ちゃんとOKになりましたよ。その時にアメリカの責任者、大佐が言ったことは、「今まで渡さなかったのは、日本に渡すところに漏れるかわからない。しかも、それを取り締まる秘密保護の法律もないということで、渡さなかったんだ。けれども、あなたから言われてみると、まさにそれはあなた方の仲間が取っているものだから、こういう情報であるということ、英文であるけれども渡す」と。それで私「防衛局長在任中」までは定期的に来たんです。後は知りませんよ。そういうことで、マン・トウ・マンの信頼関係で情報を寄越せと交渉して、初めて手に入ったんですね。

伊藤 その施設はアメリカ軍の施設なんですか。

海原 どう言ったらいいますかね。あれは提供しているわけです。

伊藤 日本が施設を提供しているんですか。

海原 そうです。

伊藤 そうすると、それはアメリカ軍の施設ということになるんですね。

海原 そうですね。保土ヶ谷のゴルフ場があそこに移りましたね。そのそばにあるんです。そこでどういう情報を取っているかというところ、非常に面白いですね。例えば、こういうことがありました。フロリダの警察のパトカーの電波を日本でキャッチしたことがあるんです。そういうことで、通信情報というのは非常に大事なんですね。しかも、どこそこの情報をキャッチするというためには、地点が決まるんですね。角度がありましてね。そういうものなんです。

伊藤 それは海原さんのところで止まるんですか。

海原 いや、私は上に回します。

伊藤 上げるわけですね。「極秘」とかにするわけですね。

海原 もちろんそうです。そういうふうには、基本的には日本には秘密保護法がないわけですね。これは私は国会で答弁しましたが、およそ国家である以上は国家の秘密がある。国家の秘密がある以上は、それを守ることが必要である。それが守られるか守られないかは別問題であって、守るための体制がなくてはならない。相手はそういうことを考えるんだから当然だと思う、と言ったんです。

くどくなりますが、私は国会で「国家に秘密があるのは当たり前だ。秘密がある以上はそれを守るための制度、組織があつて然るべきだ。ところが秘密保護法がない。そのことは、いろいろな面でマイナスの効果をもたらしています」と言っただけですけれどね。一時、自民党の方で秘密保護法を作れなんていうことを言っていました。その後全然ないでしょう。だから日本は、そういう意味での秘密を守る意思のない国だ、ということになっているんですよ。それは向こうとしてはそうでしょうね。

伊藤 重要な情報は流せないということですね。

海原 それが後のキューバの時にも関係するんですね。

伊藤 それは、その時にお願います。このラオス問題の時は、米軍機は日本の基地を離れてタイに行つたんですね。

海原 もう日本の基地を離れたらそれっ切りですね。いちいち、どこへ行くとは言わないです。例えば、どこにきている何部隊は何月何日にどこに移動しますなんていうことは言わないですよ。

伊藤 それは軍事機密ですね。

海原 そういうことですね。だから、それはいちいち言わないのは当たり前のことです。ただし、私は事実上連絡はあつたと思うんです。先ほど申しましたように、「あつた」ということは言わないわけですね。言えないわけですね。その辺のところ、何だ」ということになる可能性はありますけれどね。

伊藤 日本政府云々と言っている時は外務省の扱いになるわけですね。

海原 当然そうですね。防衛庁ではありません。扱いは外務省。しかし事実上は陸上自衛隊第二部別室というところで行っていますから、通信情報は。それが二部別室情報としてずっと上まで行くわけです。だから例の大韓航空機が撃ち墜された時などは、後藤田君が官房長官をしていましたから、彼は知っているわけです。防衛庁がそういう情報を取っているということは、だからお前のところに来ているはずだ、寄越せ、と言つて取るわけですね。そういうことがあるということは一部の者しか知らない。公にすべきものではないですね。だからできない、ということですね。そういうことになっていますので。

佐道 防衛庁に国際問題担当の参事官がいらつしゃいますね。

海原 ええ、外務省から来ております。

伊藤 外務省から来ていますね。そういう方が、こういう問題

が起こった時には外務省と防衛庁の連絡をされるわけですね。

海原 当然そうです。その話が出ましたので申しますと、当時安川君が外務省の課長をしていましたからね。私と昔からの友達です。「これから先、防衛庁でいろいろなことをやるについて、外務省は当然知っておくべきことがいろいろ出てくるであろう。参事官が一人来ただけでは駄目だ。防衛局と装備局（これは部隊建設の実務をやります）、その課長クラスに一人、それぞれ若い人を寄せ。装備局と防衛局を見ていけば、何が起きているか、起ころうとしているかわかるから、参事官の補佐のためにも外務省から若い優秀なのを一人ずつ寄せたらどうだ」と言ったんですね。そうしたら向こうも、そうだ、ということになりまして、例えば防衛局防衛課には沢木君という、後に大使を二つも三つもやって、もう死にましたが、その人が来るわけですね。沢木正男君です。

佐道 ああ、沢木大使ですね。お会いしました。

海原 ご存知ですか。それからもう一人、ポール沢田という、同じ「沢」の字がつく男が来た。あれは沢田（廉三）大使の息子です。この二人が私の部下でした。二人とも一高の後輩なんですけれどね。これがまた暴れん坊なんです。だから当時の防衛一課、私の課長時代は、「制服」の諸君は何と言ったと思いますか。「防衛一課は暴力一課だ」と言っていたんですね（笑い）。

それから住田（正二）君、JR東日本の最高顧問をしていますが、彼も部下だったんですね。その沢木、沢田、住田という、全部暴れん坊を集めたんですね。だから私の部下には、各省から本省と喧嘩できる奴を持って来た。だから「暴力一課」と言われていた。それが課長時代ですね。そういうことで、いろいろやりましたね。何からこん

な話になったのか。

伊藤 外務省との関わりですね。

海原 その沢木君の話をしますと、彼は非常に優秀なんです。彼が来る時に、向こうから「じゃじゃ馬でもいいか」と言われたんですね。「おい、じゃじゃ馬って何だ」と聞いたんですね。来たら、やっぱりじゃじゃ馬でした。

ある時、外務省の連中と一緒に会食をした時に、私が沢木君のことをしきりに誉めたんですね。「あれは優秀だ」と言ったら、下田（武三）さんが真顔で、「海原さん、彼は別に外務省の代表ではありませんからね」と言ったんですね（一同笑い）。そんな経緯があった。

それから沢田君というのは沢田大使の息子さんで、ニューヨークに行ったでしょう。この二人が気が合うんですね。「沢の字一家」なんて言っている。だから楽しかったですよ。そのことを住田君が、日本経済新聞の「私の履歴書」で書きましたね。「私どもは海原課長の下で暴力一家と言われた」と。そんなことが図らずもありましたけれど、そういうことで、いろいろ積極的な情報交換をやっていましたからね。だから、知らなければならぬことは知っていたわけです。それを言うか言わないかは別問題ですね。したがってラオスの問題も、全部外務省ですし、外務省はおそらく連絡は受けていたと思うんです。それを発表しないということだと思えます。だから、日本が全く知らされていなかったということではないと思いますね。

伊藤 でも知らされていないという形にはなっているわけですね。

海原 そういうことですね。形はそうですね。だから、それは公表すべきものではない。事実上、僕は連絡があったと思いますけれど。

その次の、「防衛技術資料交換計画」についてはどうかということ

ですが、これは理解していただくために一つ例を言います。日本は偉そうなことを言うんですが、交換するものが何もないんですよ。もうものだけなんです(笑)。それはバツジの時もそうでしょう、こっちは何もないんですから。それではちよつと体裁が悪いからというので、「交換計画」にするんですよ。そういう状態なんです。

それだけでなしに、例を言いますと、例えば私は、国防会議の議員懇談会で説明したんですが、サイドワインダーというミサイルの国産の問題です。ところが、できないんです。デッドコピーを造るんですよ。そのデッドコピーが造れないんです。似たものができても値段が五、六倍なんです。その頃、しかし中曽根さんがしきりに国産、国産と言った時代ですね。田中さんが総理ですが、私は国防会議の議員懇談会で、「皆さん方は国産、国産とおっしゃるけれど、国産をする技術がないんですよ」ということで、AAM1というサイドワインダーの国産の例を出しました。「アメリカから買えば一〇万円で買えるものが、日本はその関係の開発を十年もやっているけれど、できたものは六倍、六〇〇万円もする。しかも精度は悪い。それが今の日本の現状です」と。中曽根氏は通産大臣でありましたが、説明したんです。「それでも国産をやりますか」と言ったら、「それは駄目だ」となりましたね。そういう時代ですからね。

伊藤 三十年前ですね。今とは技術水準がずいぶん違うわけですね。

海原 そうですね。どこが違うかというと、基礎的な面での日本の投資がないんですね。金をかけていない。日本はすぐ真似をして造ろうとするわけです。アメリカは例えば百回のテストをする。それだけ金を付ける。ところが、日本は十回のテストしかしない。たまたまそれがうまくいったのでそれを採用するというのが、初めて三次元レーダ

ーを採用した時の話です。

三菱の三次元レーダー、3D(スリー・ディ)と言っていたのは、距離と高さと方角を同時に全部捉まえるレーダーなんです。当時、装備局長は伊藤(三郎)君という一高の同期ですが、彼が言っていたのが、「それは外国のものでやつてもいいけれど、日本で国産でやりたい。装置が大きいかもしれないがどうだろう」と言うから、「結構だ」と言っただけです。それが完成しまして、三菱電機のものを防衛庁は採用したんです。私は現場に行つて、技師に聞きました。その時、その技師から言われたことは、「アメリカなら百回テストするところを、日本は金がないから十回のテストしかやらなかった。たまたまその十回のテストで結果が出たので、これを採用しました」ということです。そういう違いがあるんですね。その頃の技術開発力では。

だから「交換」と言つても、何もないわけです。しかし、それではみつともないということで、こういう「技術交換計画」という名前になったものと、私は了解していますけれどね。

伊藤 これは実現したわけですか。

海原 似たものができましたね。「計画」と言いますが、「協定」みたいなものが用意されたと思うんですが、正式には私は知りません。

伊藤 こういふことは、どこがやるわけですか。装備局ですか。

海原 はい、装備局です。

伊藤 防衛庁の技術研究所は装備局の下にあるんですか。

海原 下ではありませんが、一応長官が監督しますからね。その長官の監督の補佐をするのが装備局です。防衛局は関係ありません。

伊藤 その当時から比べれば、今はだいぶ向上しているんでしょうね。

海原 宇宙計画で日本が大いに寄与したなんていうことを聞いたこと

がありますけれどね。何をやっているかと言ったら、カメラですよ。

それはカメラはいいかもしれないけれど、本体的なところでは何も寄与するものがないんです。まだまだ力はないですな。投資が違います。伊藤 アメリカでも今は軍事技術に対する投資はちよつと減っているわけですね。

海原 そう思いますが、それまでの時代に大変な投資をしていますからね。

伊藤 今度はそれが民間に流れているわけでしょう。

海原 そうですね。だから、向こうとこちらを比べたら、基礎的な投資が桁違いですよ。

伊藤 カメラというのは民間の技術でしょう。

海原 そうですよ。それに関連していろいろなことがあるんですけどね。日本で、国産、国産というのは結構なことだけれど、直ぐにはいいものができませんよ。できるはずがない。いいものができましたと言ってOKになって、据え付けてみたら駄目だった、という例がいっぱいあるんですよ。

伊藤 その3Dはどうだったんですか。

海原 これは結構動いているんです。ただ、馬鹿でかいということですよ。同時に三つのことを捉まえらるということですから。しかし、これもずいぶん叩かれましたよ。そんなでかいものと言って。

伊藤 そんなにでかいんですか。

海原 それは何倍かの体積でしようね。

佐道 日本は大きいものを小さくするのが得意なはずなんですけれどもね(笑い)。

海原 まず大きなものをつくって、それをあちこちいじっていくんで

すね。

伊藤 今ごろ小さくなっているかもしれない(笑い)。

海原 さて、いかに技術が一般に駄目かということ、私がアメリカ大使館にいる時のお話をしましたかな。日本からダットサンの売り込みに来たんです。二台買っていただければ幾らになりますと割り引くんですね。誰も買わないんです。危なくて、ハイウェイで乗れないんです。それが今は走っているわけですからね。やっぱり時間をかけないと駄目ですな。そういうものだと思います。

伊藤 それも日本の民間の技術ですね。

海原 ということで、これは名前だけで何もなかったですね。

その次に「一九六二年十二月の」東京新聞に載った志賀(健次郎)さんの発言ですね。これは志賀さんが言ったとすると、志賀さんらしいですね「志賀防衛庁長官が自衛隊教育の再検討、近代兵器を重点に研究開発を促進するよう事務当局に指示を出した」。あの人はそういうことが非常に楽しいんです。日本でやるんだ、と意気軒昂たるものがありますからね。私が仕えた大臣ですからよく知っていますけれどね。この人は邪気は一つもないです。しかし、まさに日本人ですな。それは俺たちがやらんといかん、ということ、しかも酒が好きですからね。大体、夜の八時以降は一杯入っているわけです、宮沢(喜一)さんと同じですよ(笑い)。だから、その発言をしたのは何時だ、と聞くんですね。

伊藤 それじゃあ、新聞記者のいいカモになりますね。

海原 そうです。結構そういう政治家は多かったですね。

伊藤 新聞記者は、自分の記事を載せたいわけでしょう。新聞記者が飛びつきそうな話をしたいわけでしょう。

海原 書けばいいんですね。それが合っていると違っているとかという問題じゃないんですね。私が見た新聞記者の姿はそうですね。書きなぐると言った方がいいですよ。きちんとチェックして正しいものしか書かない、というのはいま少し少ないですね。

伊藤 それは新聞記者の立場になったら、そうなるでしょうね。

海原 しかしこの前もお話ししたように、堂場君なんかは、その少ない一人でしょうね。朝日では死んだ篠原(宏)君ですね。これは元海軍ですね。彼はやっぱり分をわきまえている。それが少ないんですね。要するに、特ダネ的な報道の記事を書くことが新聞記者の使命だと思っっている人が結構多かったんですね。後はどうでもいいんですよ。

伊藤 長官だってそうでしょう。

海原 まあ、そうですね。

伊藤 志賀長官はかく語った、というのが出ればいいわけでしょう。

海原 そういうことですね。その最たるものが「赤城構想」ですよ。あれだけ大騒ぎをしてね。この前申しましたが、アメリカにまで話をつけているやつをご破算にした。だから私が憎まれるのは当然だと思えますけれどね。しかしここで、「大義親を滅す」ということです。そんなことですね。とにかく、これは私は具体的によく知りません。一杯飲んで言ったかもしれないね。志賀さんは面白い、楽しい人でした。部下として楽しかったですね。

伊藤 そうですか。どういうふうに楽しいんですか。

海原 「それは大臣、駄目でしょう」と言うと、「ああそうか、じゃあ駄目だ」という感じですからね。拘泥しませんよ。「俺言っちゃった、だけど取り消す」とかね。だから極めて、何もなかった人ですね。佐道 特に防衛問題について何か考えているというタイプではないわ

けですね。

海原 ないですよ。そういう人を寄越してくれということ、何人かの総理に頼みましたけれどね。志賀さんというのは選挙の時にどういふことを言ったか、「私は志賀健次郎であります。シガケンです。エノケンではありません」と言ってます(笑い)。それで当選したんですよ。面白いでしょう。

その息子さんが、今の志賀(節)氏ですよ。彼はまた大学生でした。アメリカに行った時に、大臣専用機が付くでしょう。そうしたら、これはオフレコですが、ワシントンで大臣が、「海原君、ちょうど息子がこちらに勉強に来ているけれど、帰りに連れて帰りたい」と言ってますよ。奥さんがおられませんから、奥さんの代理でお嬢さんがいるでしょう。だから志賀一家ですよ。専用機に息子を乗せて帰りたいから、交渉しろと言ってます。「これは政府の公用機ですから、それはどうでしょう。その気持はわかりますが」と言っただんですが、「君、何とかしろ」と言うから、交渉したわけです。そうしたら、向こうも初めは渋っていましたね。それは日本の防衛庁長官、国務大臣のための飛行機でしょう。それにプライベートに留学帰りの息子を乗せるということですからね。もちろん実費は出すと言ってますが、実費の問題じゃないんですよ。どうも難しい、と言うから、「僕もそう思う。思うけれど、そこはひとつ何とか考えてくれないか。日本人の心理というか、温情をもって対処できるのではないか。あなたの判断ではできないだろうけれど、上に一遍言ってくれ」と言った。そうしたら上でもゴタゴタしたようですが、結局OKになった。だから、今の、あの志賀さんは同じ飛行機で帰って来たんです。

伊藤 それは公になったらまずいわけでしょう。

海原 まずくもないでしょう。

伊藤 それは日本だと許されるということですか(笑い)。

海原 実費を払うと言うけれど、実費を払いようがない(笑い)。どうせ空席があるんだから、実費はゼロでしょう。そんなことがあるんですよ。その志賀さんが今や国会議員として時々名前が出ていますからね。面白いですよ。

伊藤 志賀さんには、就任して防衛問題を勉強しようという気構えはあつたんですか。

海原 あつても駄目ですね。能力がないですから、それは無理ですよ。それまでの予備知識なしに來ているんですからね。軍隊経験があれば別ですよ。軍隊を知らないわけですからね。そうすると、ちよつと無理でしょうね、まず言葉の意味からして。機関銃だつて、撃つたことがないんですから。これは説明してもわかりませんしね。

伊藤 実物を持って行くとか。

海原 それで撃ちなさいとか。そこまではやる時間がないから。そういうことです。

キューバ危機とCIA情報

伊藤 それではキューバ危機の問題に行きましょう。

海原 キューバ危機ですね。この時は十月二十四日ですか。ここで具體的なことになるんですが、この日の朝九時頃ですか、私のところに

電話がかかってきました。CIAの日本代表からです。「実はこういうことがあつて、総理官邸に連絡に行く。あなたのところにも連絡しないといけないんだけど、時間がない。進駐軍放送を聴いてくれ」と言う。当時ラジオでやっていたんです。進駐軍放送が何時からあるから聴いてくれと言ってます。「そうか、わかつた」と言つて、私は進駐軍放送を聴いたんです。そうしたら、「海上封鎖」という言葉が出てきたんですね。おやつと思ひましたよ。封鎖と言えば戦時行動ですからね。大変なことになると思ひましたね。それが私への連絡です。その進駐軍放送を聴いてくれたらわかるから、と言われて、私はすぐにラジオを聴いた。quarantineという英語がありましたからね。封鎖というのは戦時国際法ですね。別にキューバと戦争しているわけではないのに、と思つて聴いたら、ああいうことだつたんですね。

そこでアメリカ側は、特に航空部隊しかいませんけれど、「デフコン」と言ひまして、待機の一、二、三、四というデイグリーがあるんですが、それを上げましたね。例えば「デフコン」の五ですね。いつでも直ちに戦闘できるような状態にしろということになるわけです。

伊藤 一番上の段階ですか。

海原 一番上です。それは戦争覚悟ということですよ。一番緊張度の高い待機の姿勢が下令されたんです。そうすると、こつちも同じ基地にいるでしょう。そこで放つておくわけにはいけませんね。仲間がそういう態勢に入つたわけですから、俺は知らんというわけにもいかんだらうということよ、私は次官に話しまして、「この際演習をやりましょう。日本側もアメリカ側と同じように、演習ということよ、アメリカと同じ程度に待機の姿勢を取りましょう」と言った。「そうしよう」ということになりました。

当時、テレビに出ました。わが航空自衛隊の基地もアメリカと相呼応して待機姿勢を取ったということが。国会でも質問がありました。「それはたまたまその時期に、私たちはこれはいいチャンスだということと演習をやりました」という答弁で勘弁してもらったんですね。

伊藤 それはあまり国会では議論にはならなかったんですか。

海原 議論にはなりません。一応質問がありましたから。いま言いましたように、ちゃんとテレビに出ましたからね。わが航空自衛隊は、というふうに基地が映るわけです。そうしたら待機姿勢を取っている。一番厳しい待機姿勢であることは間違いないんです。それに入ったということとです。それはただし演習だと。別にアメリカがキューバで何かやった時にどうこうということではないけれど、在日米軍基地も同じ米軍ですから、そういう警戒態勢を取る。それに合わせて、わが自衛隊も演習としてやりましたということを、私は国会で説明しました。

伊藤 これはソ連が引つ込んだから良かったんですが、本当に戦争一歩手前という感じでしたか。

海原 一歩手前でしたね。感じはそうです。後で、ソ連の方ではフルシチョフが議会で説明していましたよ。喩えてみれば、と喩えて言っていましたけれど、山奥の深い谷の上の一本の橋の上で二頭の山羊が出会った。アメリカとソ連ですね。相手が非常に強情な奴でわけがわからんから、このまま行けばぶつかって、二頭とも谷底に墜落する。それではいけないから、こっちが退いたんだ、ということとソ連の議会で説明していますね。そういうことですね。その時にはわかりませんよ。何で、こんなところでやるんだろうと思いましたが。もっと違った意味で、私の判断は最初は、南米のどこかで局地紛争でもあるの

かな、と思ったんです。まさかあんな目の前のキューバに、ソ連がミサイル基地を造るなんて思いも寄りませんからね。これはまさに挑戦でしょう。CIAはそこまで言いませんでしたから。とにかく進駐軍放送を聴いてくれというだけでした。だからそれは、連絡と言えは連絡でしょうね。その程度です。

河野 米軍側から、その後詳しい説明とか報告とかは一切なしですか。

海原 なしです。

河野 それでは先生は、事件については新聞とか一般的なニュースからの理解だったんですか。

海原 そうです。その後で、二、三日してからこうだったということとは聞きましたけれどね。その頃は週一回ぐらいCIAとは会っていましたから。

伊藤 CIAの日本代表というのがいるわけですか。

海原 いるんです。それから電話がかかってきたんです。今から総理官邸に連絡に行くんだけど、お前さんのところには行く時間がないから、済まないけれど進駐軍放送を聴いてくれという連絡ですね。

伊藤 そのCIAの日本代表というのは覆面なんですか。

海原 もちろんそうです。

伊藤 でも海原さんとは絶えず連絡を取っていたんですね。

海原 ええ。絶えずというか、一緒に飲んだり、週に一回会って、どうだこうだという話をする。そういう付き合いはしていました。

伊藤 情報交換ですね。結構向こうからも情報は入るわけですね。

海原 入りますね。ですからそれは、先ほども申しましたけれど、情報担当者の個人同士の付き合いという形になるわけですね。正式な接触のルートはないわけです。向こうとしては、日本は秘密保護がない

のだから、そういうところとは付き合いはできないと。当然そう思うでしょうね。

伊藤 だから相手を信頼して、ということですね。

海原 そういうことです。

伊藤 では相手が替われば？

海原 それで終わりですね。だから誰という名前も言いませんしね。

ワシントンでもそうでした。CIAと大使館そのものは関係はないですが、そういうことで東京で顔馴染みの方もいますしね。そのルートは充分にありました。しかし、これは表向きは言えませんからね。

伊藤 だから私が、そのCIAの人はどういう人ですか、と聞くわけにもいかないんですね（笑い）。

海原 聞かれても、わかりません、ということですね。本当に知らんわけです。お互いにどんな奴だか知りませんからね。

伊藤 向こうは海原さんを知っているわけですよ。

海原 もちろんそうでしょう。日本語はべらべらですよ。一体あなたはどこで日本語の勉強をしたのか、そういう野暮なことは聞かないわけです。時々一緒に酒を飲んで話をするというような付き合いはありましたね。当然それは外務省もやっていたでしょうね。

佐道 自衛隊の演習をなさったということですが、外務省あるいは官邸と、これ以上の待機態勢についてどうするかという検討はされないんですか。

海原 それは、いまお話ししたことで推測できましようが、公には何も無いわけなんです。だから私は、日本人としてはごく少ない一人になると思いますが、保土ヶ谷のゴルフ場のそばにアメリカの施設があるわけですが、そこを見せてくれましたよ。それで、どういうことを

やっているかということをも具体的に説明してもらおうわけです。例えば、録音を聴かせてくれました。これは今、沿海州のソ連のどこの基地での放送を録音しているんだと。この音は戦闘機がこれから舞い上がる時の音だと。それから後は、上空で射撃をやるわけですね。そのミサイルの発射の音だと。というようなことを全部録音しているんです。

伊藤 それは方向性があるわけでしょう。常にいろいろな方向から取るわけですね。

海原 だから、施設のあるところでないかわからないということですね。沿海州のこの基地の情報については、北海道のどこでしか取れないとか、沖縄のどこでしか取れない、どこが取れないとか、一カ所ではありませんからね。そういうことを総合して彼等は判断をするわけですよ。

伊藤 そうすると、ある方向だと、例えばフロリダも入っちゃうということもあるわけですね。

海原 そういうことですね。電波というのは非常に微妙なものだということの例として私が言われたのは、フロリダの警察のパトロールカーの会話がハワイでキャッチできたとか。だから、いろいろあるわけです。いま北海道にもあるでしょう。たまに新聞に出たりしますけれどもね。当時はソ連というのは大変危ない仮想敵国ですからね。そういうところの通信情報は全部取っている。一般に「象のオリ」と言われているものですね。

伊藤 アンテナがあるでしょう。だから、すぐわかりますね。

海原 見ればわかりますね。何をやっているのか。そんなことですね。ですからここでご質問がありましたように、ラオスの時のように問題

のない時には向こうは連絡しませんけれど、一応日本に関係があると思われような事については、それぞれの部門でちゃんと連絡があったと思いますね。私の体験を通じて、そう思います。

伊藤 今の演習の話でも、官邸との連絡も一応はちゃんとやっているということですね。

海原 そうということですね。

伊藤 公のどうこうということではないにしても、ですね。

海原 だから日米安保協議委員会の話も出ていますが、これに私も出たことがあります。そこで何が話されたかは一切お互いが言わないことになっていきます。だから記録もないことになっていきます。しかし、実際には記録はあるわけです。

伊藤 大体、記録がないというのは、あるということですよ。

海原 あるけれど、公表できないということですね。それが記録がないということの実際の意味なんですね。

伊藤 実際に何か協議して記録を作らなかつたら、お互いに無責任なことになるわけですからね。

海原 そういうことで、キューバの場合は、後になって大変びっくりしましたね。なるほどこうだったのかと。

伊藤 その時びっくりされたんじゃないかなかったですね。

海原 その時は海上封鎖というものですから、これは大変なことだと思っただけです。大変というのはアメリカとしての決意が、ですね。なぜキューバに海上封鎖をするのか。まさかソ連が目と鼻の先にミサイル基地を造るなんて思いませんからね。後からいろいろ新聞雑誌に出ましたけれど、初めソ連は否定したでしょう。それをアメリカが写真を見せて、お前、こうじゃないかとやったものだから、わかったわけ

ですね。あの写真がなければ、知らぬ存せぬで済んだんでしような。そんなものですよ、国と国との交渉というものは。

伊藤 やはり情報を持つていないと駄目、ということですね。

海原 おっしゃる通りですね。情報と言いますと技術にも関係しますが、例えば中国で核実験をやったと。それがどんなものかということ。私がCIAに交渉したんです。「あなた方は、中国の情報を知っているはずだ。なぜ連絡してくれないんだ」と。前にも言いましたが、向こうは「それは日本側に秘密を守る体制がないからだ。しかし日本とアメリカは同盟国だ、だから、同盟国の関係において申し上げることは申し上げる。そのためには、しかしワシントンでしか言えない」と言うんです。だから、ミスター海原がワシントンに来れば、中国の核実験の状況を全部ご説明するという話だったんです。それで私はアメリカに行くわけです。

伊藤 それは、いつの話ですか。

海原 この後ですね。

伊藤 それは衛星からの写真ですか。

海原 そうです。ワシントンで私一人のために順繰りに説明に来ましたね。向こうにも関係者がいますから。その時に写真を持って来るわけですね。その写真は航空写真です。衛星のものもあるでしょう。何月何日の写真はこれだ、その一カ月後の写真はこれだ、その二週間後の写真はこれだ、と全部違うわけですね。最初は何も無い、建物だけがある。その次は道路ができたり電線が張られたりしている。これで完全に実験開始の状況になっている。そういう写真を見せてくれて説明してくれるわけです。そのために全部専門家が来てくれる。ところ

が、その写真に「外国人には見せるべからず」と書いてあるんです（笑い）。やっぱりお役所ですね。日本式に言えば機密ですよ。そういうことがある。それが国と国との付き合いといいますが、それぞれ担当機関ごとの付き合いでしょうね。東京では話せない、しかしワシントンに來たら、ちゃんと説明ができるということでしたね。

伊藤 その写真は、準備ができて、最後にドカンとこういうもの「キノコ雲の写真」が出るんですか。

海原 いや、ドカンのところはないです。その前の段階です。

伊藤 前の段階ですか。やるぞやるぞ、と言っている段階ですね。

海原 実験準備の進捗状況ですね。ここまで現在の段階では中国の核実験は進んでいると。その根拠はこうだという説明になるわけです。ですからどくなりませんが、マン・トウ・マンの信頼関係で、お互い同盟国じゃないか、俺は日本側の責任者だ、お前はアメリカ側の責任者だ、人間同士の信頼関係でいこう、というわけです。そういう付き合いでしたね。おそらく私がやったような付き合いは、外務省も担当の人がやっているでしょう。

佐道 もう本当に個別に、人と人との関係でやっているということですね。

海原 そうです。

伊藤 例えば自衛隊も、陸上、航空、海上とありますが、それぞれがやっているということですか。

海原 いや、それはありません。そちらの関係は、陸上自衛隊の第二部調査部の関係です。

佐道 例えば、海上自衛隊がアメリカ海軍と連絡を取っているということはありませんか。

海原 それは、どの程度かわかりません。しかしこの前お話ししたように、ヘリ空母のああいふ話までしているわけですから、それは緊密な関係のわけですね。それぞれに付き合いがある。

伊藤 そういう線が絶えずつながってればいいわけですね。全部切れたら本当にアウトですね。

海原 そうですね。しかしその後を見てみると、どうも私がおった時のようにはいつていないように思いますね。何となしにそういう感じがします。これは、しかしわかりません。感じだけの問題ですけれどね。向こうも、もう教えるものはない、与えるものはないという態度にだんだんなってきたいますね。それは、こちら側が能力を持ってきたということでしょうし、まず世の中が変わったことではないですね。あの頃は、とにかくソ連というのが大変な仮想敵国だったわけですからね。

伊藤 さっきのCIAの話ですが、あれは海原さんが防衛庁にいる間の話ですか。

海原 そうです。だって私が行くまでの間は、そういう使役を出していても、どういう情報を取っているかということは、こっちに超越さないとすから。私の前の時は誰もそういうことを問題にしていなかったんです。防衛局長は何人もいたわけですからね。私はそれを問題にしたわけです。単なる使役では駄目だ。日米が本当の同盟関係とということであるなら、どういう情報をお前さん方が取っているかと。

伊藤 それは在日米軍ですね。

海原 向こうの指揮関係はややこしくなりますけれどね。

伊藤 一体どういふふうに、在日米軍と防衛庁との関係はなっているんですか。まず、在日米軍というのは一本なんですか。

海原 在日米軍というのは通称なんです。ですから、例えば日本に入ってきた途端に在日米軍と呼ばれるわけですね。日本にいる間は、在日米軍最高司令官の指揮下になるわけです。それだけのことなんです。ね。

伊藤 在日米軍というのは、空軍も陸軍も海軍もいるわけですね。

海原 それぞれありまして、その上に在日米軍司令部というのがあるわけです。これはお役所ですから、形だけなんです。全部バラバラです。横須賀は横須賀で威張っていますし、府中は府中で威張っていますしね。アメリカの陸軍というのは、あまり東京にはいないでしょう。地方に行っていますからね。だから、これも建前と実態とは違ってくるわけです。日本の防衛庁みたいに東京に全部いるわけではないですから。

伊藤 在日米軍との連絡というのは、どういう形になるんですか。

海原 基地に同居している場合は、それぞれやりますね。そうでない時には中央で統合司令部的などところとの関係はある。後はないですね。伊藤 さっきおっしゃった、下請けみたいな形でおかしいじゃないかという場合に、言う相手はどこなんですか。

海原 それはその時々々の相手ですね。在日米軍でも、そういう情報関係をやっているのは府中の空軍の方だというと、その責任者に連絡するわけです。それがまたずつと連絡していくんでしょうね。

伊藤 そうすると、在日米軍の主立った人たちは大体わかっているわけですね。

海原 と思いますけれどね。

伊藤 いや、海原さんはわかっていたわけでしょう。

海原 私は必ずしもそうではありません。例えば陸軍の関係はないで

すから。情報関係は空軍の方でしたからね。空軍大佐でした。ではそれは空軍かという、必ずしもそうではないんですね。ややこしいんですけれど、在日米軍統合司令部の担当者が、空軍の大佐だということなんです。ね。

河野 その時期ですと、もう在日米軍の陸上部隊というのはほぼ引き揚げていて、日本には補給、兵站部隊しかいないという時期ですか。

海原 大体そうですね。実働部隊はいません。しかし補給関係が残っているわけですね。

河野 そこにもかなり情報が入っているんですね。

海原 いや、そこは関係ないです。いまお話ししているのは全部実戦部隊の話です。

河野 それで主に空軍なんですね。

海原 そうです。海軍は横須賀ですね。

伊藤 そういうトップの人たちとの日常的な接触というのはあるんですか。

海原 まず、ないですね。することがないですから。

伊藤 時々、パーティをやるとか。

海原 それはありますね。親しく付き合っていますけれど、仕事の上での交渉とかの付き合いはないですね。

伊藤 そういう付き合いとCIAとの付き合いは、また全然違うわけですか。

海原 これは全然違いますね。向こうも組織で違うんですよ。日本もそうですけれどね。

伊藤 大体CIAの人というのは、ジャーナリストとか公務員とか、例えば名刺をもらったなら肩書きがあるわけでしょう。

海原 何も書いてないですね。私は聞かないことにしているんです。

日本人の癖で、政治家が特にそうですけど、出身学校から奥さんまで知っているのがおりますけれど、そんなことはしらないです。それはその人の好みです。人事の佐藤なんて、佐藤栄作氏はとにかくその方面はすごいですからね。

伊藤 佐藤さんだけではなくて、竹下（登）さんもそうですね。でも、知り合いになるというのは、どこかで何かのきっかけがなければおかしいですね。

海原 それは、私の体験から言いますと、引き継ぎですね。前からの引き継ぎです。

伊藤 それで何となく向こうから連絡が来ると。こちらからの連絡はないんですね。

海原 ないですね。普通には必要としませんから。仮に伊藤先生がアメリカの軍人だったら、東京におったってどうっていいことないでしょう。自衛隊との関係が起るはずはないですから。ただ日本にいるというだけのことですから。

伊藤 しかし同業者だから。

海原 それほどのこともないですね。

伊藤 でも付き合いたしてパーティなんかはあるわけでしょう。

海原 それはあります。

伊藤 CIAの人だつて、本当に一対一で会っているだけでなくて、大きなパーティの中で顔を合わせるということもあるわけでしょう。

海原 そういう機会もありますけれど、そういう機会に知り合ったとか、前任者の引き継ぎを受けたということで、個人的に親しくなることの方が多いですね。それが一般的な姿でしたね。世の中が平穩無事

である限りは要らないんです。

伊藤 しかしこの時期、そんなに平穩無事な時代ではないと思いますけれどね。

河野 ちょっと話がずれるかもしれませんが、さっきの中国の核実験の話で、確か核実験が行なわれたという知らせは六四年の十月頃だったと思うんです。その翌年の初めに日米首脳会談があつて、向こうの国務長官が、中国が前年秋に核実験をしているじゃないか、それにも拘わらず日本側の安全保障なり防衛体制に対する意識は低い、と言つた。そういうことが首脳会談の前の打ち合わせで話題になつたけれど、日本側ではあまり中国の核実験に関する情報を持っていないんですね。ただ先生は、その後アメリカにいらつしやつて、写真を段階的に見て、かなり掴んでいらしたようなんですが、そういうニュースは上には行かないんですね。

海原 それは具体的な例を言いますと、浅沼稻次郎さんが中国に行つたでしょう。向こうで共同声明を出しているんです。

河野 「日中共同の敵」というものですね。

海原 その声明をやつて、核実験の研究、実験、開発はやらない、してはいけないと言つた、直ぐその後をやつたんですからね。そんなものなんです。そんな世の中ですから、言うはずがないです。

河野 言うはずがないというのは、何を、ですか。

海原 連絡をするはずがないです。

伊藤 中国が、ですね。

河野 中国はもちろん連絡をするはずがないですが、アメリカから見ると、日本はそういう事態に対して危機感が薄いのではないかという発言が、そのミーティング議事録を見るとあつたものですから、だいぶ

差があるのかなと思っただけです。

海原 日本は、そういう危機感がないんです。ソ連の核のことはしきりに脅威だと言うけれど。今では北朝鮮の核は大変な脅威になっているけれど、それじゃあ中国がどれだけの核を持っているかと言ったら、それは大変なものですよ。その中国の核について脅威を感じないのと同じですね。だから私は笑うんです。北朝鮮の一発や二発のミサイルで大騒ぎするなら、中国の核のことを騒げ、ロシアの核についても騒げ、と言うんですけれど、新聞記者諸君はキョトンとしていますよ。

それが日本の全般的な姿であることは間違いないですね。だから何かあると、その時その時に騒ぎますけれど、基本的にどうかというと、基本的には呑気なんです。

伊藤 それはよくわかりますね。

海原 呑気なんです。それしか言いようがないですね。

伊藤 まあ、どうしようもないから、見て見ぬふりをしているという以外にないというか。

海原 それはもう大悟徹底していますね。諦観と言いますかね。

伊藤 なったらその時のことだ、ということですかね。

海原 それは私が前も申し上げたと思いますが、自民党の各派閥が勉強する時に、全部行きましたよ。それでこういうことだ、と安全保障の話は四十分ぐらいうると、必ず言われることは、「海原君の言うことはよくわかった。そういうことだろう。しかし君、何とかなるよ」と言うんですね。だから私が笑うわけです。「それは皆さんが何とかなるよとおっしゃっている通り、何とかなかった。しかし十年前の日本と今の日本では、国際社会における存在の意味が違いますよ。特にアメリカの方から見た場合には違ってくる。だから今までこれで良かったけれど、これから先もそれでいいということにはなりませんよ」というような話もするわけです。こちらでも言われたままでは駄目ですからね。私が一通り追加説明をする。そうすると、「十年前の日本と今の日本とは違う、違わねばならないということもよくわかる。しかしなあ君、何とかなるよ」と言う。だから私は、これを「何とかなるよの哲学」と言っているんですけれどね。

伊藤 そうですよ、それからまた三十年も経って、まあ何とかなっているから。

海原 ソ連は勝手に潰れちゃったでしょう。しかしソ連の脅威は、ロシアの脅威として残っているはずなんです。実態は変わっていないんだから。しかし誰も考えていないでしょう。だからこればかりは、あなたが言われたように、日本はそういう意味の認識というか危機感が乏しい。ないと言われたら、その通りですよ。

伊藤 やはり国際関係における最悪の事態というものを想定する。そして、それに対する最低の備えはとにかくするという基本的な発想がまずないんですね。

海原 ないんですね。今おっしゃったことは一番大切なことなんです。それが安全保障の根本的な物の見方だと思っただけでいいですね。

伊藤 アメリカは最悪の事態を想定していると思っただけでいいですね。

海原 それは当然のことです。最悪の事態を考え、最善を尽くす。これは基本的な公理ですね。

伊藤 それは軍事だけではないですね。ありとあらゆるものがそうですね。

海原 と思いますが、何とかなるよ、という哲学があるんですね。まあ、日本人のいいところでしょう。いいところは同時に悪いところ

ですね。

伊藤 何とかなればいいんですけれどね。

海原 今までは何とかなっちゃったんですよ（笑い）。

伊藤 その代わり、いろいろな代償を払っているわけですけれどね。

海原 そういうことですね。同時に、それでいいかどうかと思うんですけれどね。片一方では、また日本はアジアの指導者になれとか、東北アジアの指導者になれとか、景気のいいことを言う人がいるんですね。私の言う「宣伝の文句」だけですな。

伊藤 まあ空念仏は多いですね。

海原 念仏の方がもつと意味があると思うな（笑い）。

三次防と「照顧脚下」

伊藤 それでは先に行きましょう。今度は三次防の問題について伺いましょう。

海原 三次防は、この前もご説明しましたが、三つの決議ができていくわけです。それをまとめて三次防と言っているわけです。第二次防衛力整備計画のような、まとまったものはないわけです。これは後から出てくるんですが、三次防は、四十一年度に終わる二次防の後を受けた計画でなくてはならない。そうすると、四十年二月頃から検討が始められるわけです。ところが、この二月に「三矢」が起こるわ

けです。それで、私はそっちの方に忙殺されましたね。それで官房長にもなります。結局、六月に私は松野新長官の下で官房長になるわけです。防衛局長は後輩の島田（豊）君がなるわけです。したがって最初の間は、「三矢」で防衛庁を代表する格好になるわけです。これについてはこの間少し申しましたが、どうしてそうなったかというのは、河野さんが、答弁を各局ごとにやっていたのでは駄目だ、一人にやらせろということでした。

伊藤 防衛局長として、それをやることになったわけですか。

海原 そうなんです。たまたま理屈をつけられたのは、防衛一課長の久保君がオブザーバーで行っているわけです。それもありません。海原がやるんだということになるわけです。それはオブザーバーで行っているだけの話ですから、何も私が行くことはないんです。本来ならば人事教育局長がやらなければいけないんです。しかし、それが私になってしまった。そういう経緯があるんです。それで私は「三矢」の方に忙殺されましたから、三次防については全く発言しない。

伊藤 具体的には誰がやりましたか。

海原 三次防は私の後任の防衛局長です。

伊藤 最初の構想の段階では？

海原 もう検討の時に私は「三矢」に入っていますから。ですから今日は、「三矢」の話が主な話になっているような感じですね。岡田さんの爆弾発言というのがあって大騒ぎになるわけです。それで私が防衛庁の代表者みたいな格好になって、それにかかり切りですからね。

三次防自体が三つに分かれたのはなぜかと言うと、松野さんが防衛庁長官に来ましたね。その松野さんが新しいアイデアを出すわけですが、ローリングシステムということで、よく意味が分からないんですが、

六年計画にして三年ごとに見直すんだというようなことを言うわけです。誰がそんな知恵を付けたか知りませんよ。全然わけがわからんです。しかし、そう言い出されるものですから、中がゴタゴタするわけです。松野さんが防衛庁長官になったのは、彼が三矢問題の予算委員会の小委員会の委員長になるわけです。その関係でしょうね。それで佐藤さんが、防衛庁をしつかり締めつけてくれというようなことで「松野さんが」来たと思うんです。そういうことですから、三次防についてどの程度までお話をしたらいいか、ですね。「三矢」とどつちを先にやりますか。

佐道 新聞等々から言うと、「三矢」は一九六五（昭和四十）年二月ですね。その前の段階の、六三（昭和三十八）年あたりから、三次防の構想の検討に入ったということなんですけれどね。

海原 どこからそういうことをお調べになったか知りませんが、私の立場は、二次防をやってきていますから、そんな新しい構想が出る余裕はないんです。ただ肉付けをしていくだけなんです。ここが三次防とそれまでの計画との違いなんです。でき上がったものを見ると、三次防では言葉が具体的な「防衛力」になっているんです。ところが一次防では「骨組みを作る」と言ったでしょう。二次防では「骨幹的勢力の肉付けをする」と言った。三次防もそのままで行くべきなんです。ところが、でき上がった三次防では、いかにも防衛力ができるかのような表現になっちゃったんです。これは私の趣味ではありません。私はそういうことをしてはいけないというようなことを、この前お見せしたような文章でも回しておいたんですけれどね。ですから、でき上がった三次防についての説明をしると言われると、私はできないですね。はっきり言えば、私はこういうものが三次防になるとは思

っていないかっただんです。しかし、これは人が替わりましたから発言すべきではないと思って、していない。そういうことですね。

伊藤 それは官房長になったから、ということですか。

海原 そうです、松野の時に。私は加藤さんが作ったものをぶち壊したわけでしょう。また加藤さんは官房長で何も言わないわけでしょう、また言えないわけでしょう。同じ立場に立ったわけですよ。役所というのはそういうものですよ。野球で言えば、今までピッチャーをやっていた奴が辞めたら、後のことを言うべきではないですね。俺ならあんな球を投げないなんて言ったってしようがない。もうマウンドを降りたら、後はよろしくとやるのが、役所の組織というものだと思うんですね。私なら、あんな三次防は作りません。

伊藤 防衛局長と官房長というのはどういう関係になるんですか。

海原 関係というと、各局長は大臣の補佐官ですから、本来、横の関係はないんですよ。はっきりしています。だから問題は、大臣にどういう人が来るかによって決まるわけです。この前、上林山さんのお話をしましたのは、ああいう人も来るんだということを知っていたために、そのいい例として申し上げたわけですね。苦勞するのは下の役人ですよ。だから、その間首尾一貫して説明しろと言われても、これは一貫しないんですよ。

伊藤 官房長というのは、局長との関係は直接的にはないわけですね。

海原 大臣の補佐ですから。総括的な補佐官ということですね。庶務課長ですよ。

伊藤 いや、総括的と言えば、各局と関わるわけですね。

海原 総括というより庶務課長です。それは意見があれば、参事官として発言すればいいんです。参事官として発言する時には大臣に対し

ての発言ですね。ここが非常にややこしいところですが、建前はそう
なっているわけです。

伊藤 私は役人の経験がないから、どうもよくわからないんですね。
それは個人的な関係というのは、またそれぞれ別だと思えますけれど。
それでは三次防は後回しにして「三矢」の問題に行きますか。

海原 三次防そのものは、三つの決定でできていますから、あまり意
味がないんですけれどね。言葉自体は、私は充分検討した言葉ではな
いと思いますから、そう変わりはないんです。陸・海・空の自衛隊の
本当の力というものは、この前申しましたように、パイロットの養成
に何年かかるか、戦車兵の養成に何年かかるか考えますと、二年や三
年経って、そう変わるわけがないんですね。そこが問題でしょうな。
言葉だけ、文章だけが先走っていくわけですね。できたものは、それ
がまた新しい基礎になりますから、いわゆる三次防によって力ができ
たようにみんな思っただんじやないでしょうか。私はそれが怖いと思っ
てますが、何ともなりません。

伊藤 しかし、三次防の過程でたくさんの予算が注ぎ込まれたわけで
すから、ある程度防衛力は増強したわけでしょう。

海原 それは、今まで中古の戦車だったものが新品の戦車になったと
か、新しい性能を持った船ができたとか、飛行機ができたとか、新し
い新式の装備品が一応形を整えたというだけなんです。それは、私
の考えからいくと力ではないということです。

伊藤 それを力にするためには時間がかかると。

海原 そういうことです。それは絶対的に「時間が」必要でしょうね。
それから力という以上は、いざという時の戦闘力を考えなければなら
ないと、私は前から言っているんですが、それは弾の問題ですね。敵

を倒すものは、人間×弾薬であるということを、ずっと言い続けてお
りますからね。その弾薬の方の準備は全然できていないわけです。例
えば、魚雷とか機雷というものは直ぐに使えるものではないんだと言
うわけですが、それがわかっていても、認めないんですね。この前、
機雷のお話をしたでしょう。今でもそうです。

佐道 今でもそうですか。

海原 はい。それが『防衛白書』に出てこないところが、私は問題だ
と言っているんです。だから天下泰平だとみんな思っているんでしょ
うね。天下泰平なら天下泰平だと言え、と言っただけで。

伊藤 泥縄でもできると思っっているんですかね。

海原 さあ、泥縄ではできないんですけれどね。当分、そんなものは
使うことはないと思っっているんですね。

伊藤 まあ、何とかすると。

海原 そういうことです。

佐道 確認しますと、海原先生ご自身は二次防の延長というか、充実
の形で三次防ができると思っただけじゃないでしょうか、ご自身が官
房長になられて、防衛局長は島田さんがなられて、実際の検討が進ん
でいった結果、海原先生が思っただけのものとはかなり性格の違っ
たものになったということですね。

海原 違うものになったんですね。この前、要員の確保の問題はお話
しましたか。ちょっと例を言いましたが、私はこういうものを書いて
いるんです。「『照顧脚下No.6』要員の確保について」40.5.21」
のコピーを示す(資料5)」。つまり、「脚下照顧」ということですね。

伊藤 この頭に書かれている「No.6」というのは何ですか。

海原 これは「照顧脚下」というのを何回も出していますから。これ

は私が各幕僚監部の責任者のところに配るわけです。

伊藤 上に、ではなくてですか。

海原 上ではありません。幕僚長ではありません。部長のところですか。

伊藤 大臣とかには？

海原 大臣には渡しません。まず下の方の担当の責任者のところですね。だから「二次防についての意見」というのも出しているんです。

河野 それは個人的な意見書になるんですか。

海原 この前も聞かれましたが、私の名前も書いてありませんからね。いつも私はそういうことをやっている。例えば後の話になりますが、四次防の時にもこういうものを出しているわけです。「昭和四十七年八月二十八日、防衛庁『四次防の問題点』に対する見解」。

佐道 これはもう国防会議に行かれています時のものですね。

海原 そうです。私は防衛庁にいる時からやっていますでしたが、こういうことは個人の意見としてなかなか浸透しませんからね。それはご参考までです。

伊藤 この資料は四次防の時に使わせてもらいます。

佐道 コピーを取らせていただきます。

海原 どうぞ。そういうことをずっとやっているわけです。

伊藤 これ「照顧脚下No.6」は四十年五月二十一日という日付が入っていますから、三矢研究の問題で追及されている時期ではないですか。

海原 いや、「三矢」にかかり切りだというのは中での話で、時々こういうものを渡しているわけです（一同爆笑）。あくまで「脚下照顧」ですよ。足下を見ようということですね。だから、どうってということはないんですよ。

河野 いやいや、どうっていうことはありませんよ。

海原 言われたように、これはNo.6ですから、それまでずっと出しているわけです。

佐道 少なくとも六回は出ているわけですね。

海原 そう、出ているわけです。

河野 この前のNo.5までがあるわけですね。

海原 あるはずですね。

佐道 これから、先生の「忙殺」という言葉の意味を考えてみます（笑い）。

海原 こういうことでもしないと、なかなかああいふ組織では、問題点の認識が一致しないんです。簡単に言えば、陸・海・空の防衛部長がおりますね。そういう人に言えば、それが帰ってこうだと言ってくれば、こんなことをすることはないんです。そうはいかないんですよ。わかりましたと言っても、どの程度わかったかわからないんですね。だからしょうがないから、問題点をはつきりさせるためにこういうものを書いて、私は出していたわけです。そういうことをしょっちゅうやっているわけです。どうしていいかわからないなら、「脚下照顧」として、誰が書いたかわからないようにして、ご参考までにというようなことで出すんですね。こういうことでもしないと、ああいふ組織で思想の統一といえますか、問題点の認識が一致しません。

伊藤 この四十年というのは、もう官房長になっているわけですね。

海原 後任の島田君がやっているのを見ていて危ないから、ついそういう気になるんですよ。

佐道 「官房長に」なる直前ですね。六月からおなりになるんですね。

海原 そうですね。

伊藤 これは三次防との関わりで書いておられるわけですね。

海原 そういうことです。しかし、宛名もなしです。おっしゃったように、私が官房長になるのは、四十年六月三日ですから、その直前です。だから、最後のところで取り敢えず書いたんですね。いろいろその時々であるんです。

伊藤 いや、「三次防については」何も話すことがないような話だったけれど、全然違うじゃないですか(笑い)。

海原 厳しいですね(笑い)。

佐道 三次防の審議は何をやっておるんだ、ということでお出しになったわけですね。

海原 そうそう。あくまでも「脚下照顧」ですね。足下を見なさいということですよ。見るか見ないかは、その人の判断ですからね。この辺がなかなか難しいんですよ、伊藤先生。ああいう組織の中で、しかも自分が防衛局長でしょう。そうするとなかなか、そうでなくても煙たがられて嫌がられているのに。しかし問題は問題ですから、何とかして言わないといけない。どうしたらいいかと思うと、こういうことしかないんですね。

伊藤 これを見ていると、例えば一ページで、「ナイキを空自に所属させる場合の問題点、37・12・17防衛局」。次のページでは「40・4・13の空幕防衛課作成の『第二高射砲特科群の新編時における特技別所要人員および充足見積について』」と、いろいろな文書を見ながらやっているわけですね。

海原 そういうものがあるから、それに対して物を言うわけですね。しかし参考にしてくれというだけの話で、まあ参考にされませんか。

伊藤 参考にされないんですか。

海原 はい。例えば二次計画についての問題点はこの前差し上げませ

んでしたか。

伊藤 やはり防衛局長の段階では、絶えずこういうふうな三次防に向けていろいろおやりになっているわけですね。少なくともこれはNo.6ですからね。

海原 「三矢」さえなければ、もつとはつきり物が言えたはずですけどね。しかし三矢事件が出て来たので、それに忙殺されたということですね。

伊藤 少なくともこの前に五つはあるわけですから、いろいろ注意を喚起していたと了解してよろしいですか。

海原 まあ、そういうことですね。やはり気になるものですからね。しかし、後に来た人のメンツの問題もありますしね。島田君というのは、私より二年後輩の内務省の男ですが、これが局長でおりますしね。しかし私から言うと、島田君は何も知らないですよ。前任者の加藤さんが何も知らなかったと同じように。「うん、ご苦労」と言う方です。

伊藤 まあ、海原さんが特別だったわけですね(笑い)。

海原 いや、後藤田君だってなかなかウンとは言わない男でしたよ。

伊藤 それはそうですね。そういう顔つきをしていますから(笑い)。

海原 これは生き方の問題があるんですね。

佐道 決め方の問題なんですけど、二次防については、先生がアメリカから戻って来られる前に「赤城構想」とかがあって、その再検討を先生が中心になされたわけですね。それははっきり言って内局主導といえますか、防衛局主導でおやりになったと思うんです。それが三次防の場合は、各幕僚監部にこういうものをお出しになったということですが、各陸幕、空幕、海幕が具体的に、こういうふうな三次防を作っ

てくれという数字とかを積み上げてきて、それを若干調整して決めるというやり方になってきているということでしょうか。

海原 大雑把に言うのと、そういうことでしょうかね。

伊藤 頭から作っていくということではないんですね。

海原 ないですね。これは微妙な点があるんですね。どう言ったらいいでしょうか、三次防に盛るべき事柄の内容にかかってくるんですね。例えばナイキの基地ができるでしょう。そのナイキの基地はうまくいっているかということについて、私が行ってみると、とんでもないことだ、ということをやったことがあるんです。そういうことがありませんから、防衛力整備計画の内容として何を織り込んでいくかという問題は、その時その時の状況によって違ってきますね。しかしそれとは別に、内局の方では計画としていろいろなものを用意するわけですね。その間の、何と云うか落差があるんです。実態を知らないで文書だけでいく人が多いですね。

伊藤 それは内局の側の話ですか。

海原 内局の方でも、ということですね。

伊藤 両方とも、ということですね。

海原 はい、「制服」の方でもです。

伊藤 しかし「制服」は、実際に自分でいろいろいじっているわけですから。

海原 ところが、この話は前にしませんでしたか。まだしてないですね。ナイキというものがいよいよ建設に入りますね。いろいろ前後しますが、ナイキの建設の時に陸幕長の方から、「建設、教育訓練が終了いたしましたから、この部隊に対しては作戦任務を与えていただきたい結構である」という上申が来たんです。この話はまだしていません

ね。これは例として申し上げるんですが、陸幕長の方から上申が来たんです。それで私はたまたま土曜日でしたが、「陸」と「空」の防衛部長を連れて、ナイキの陣地を見に行つたんです。行つてみたらひどいんです。そのことは『日本防衛体制の内幕』にも書いておきました。が、呆れ果てたんですね。先ほど言いましたように、一応ナイキ部隊の教育が完了したから、作戦任務を付与していただきたいという上申が来たんですよ。ですから、念のために私は基地を見に行つたんです。

行つてみてびっくりしたのは、発射の指揮をする司令室がありますね。その中に入つたら、時計を置く台があるけれど、時計がないわけです。その勤務員の腕時計がぶら下がっているんです。それから発射の司令室は、精密な機械を置くから、構造上防湿になっているべきで、湿気があつてはいけません。温度と湿度が一定になっていなければならぬ。ところが、まず設計から言いますと、二重の扉にはなっているんですが、場所が同じなんです。ということは、外の扉を開けますね。そして次の扉を開けますね。そうすると、スーツと外の空気が入ってくるわけです。中の気密とか温度、湿度を一定に保つならば、表の扉と次の扉とは位置が別になつていなければならぬでしょう。誰でもそう思うでしょう。ところが、同じところなんです。だから、出入りするたびにダーツと外の空気が入ってくる。そういう設計なんです。

それで私は、これはおかしい、これでナイキの作戦準備下令して然るべし、なんておかしいじゃないかということ、ずっと調べ上げてたんです。それを「陸」の方に出したんですよ。十項目ぐらいありましたかな。『日本防衛体制の内幕』に書いておきましたけれどね。

もちろん、私が言ったことに対して処置をしました。そういう処置

が必要な状態であるにも拘わらず、全部部隊の教育は完了したから作戦任務を与えて然るべしという上申が来たんですよ。簡単な例を言いますと、便所がない。本部と基地はだいぶ離れていますからね。私は、ここは満州ですか、と言ったんですよ（笑い）。トイレがない。それから水道がない。そういう状態ですよ。私はこの時、はつきり怒ったですね。一体、陸幕長というのは何を言っているのかと。それで十項目ばかりの要処置事項を書きまして、出しました。そうしたら「陸」は大変恐縮しましたが、それが陸幕長の検閲の実態なんですよ。

そうしたら、私が言った結果、いろいろなことが処置されたということでしょう。神奈川県武山基地からも、是非また来てくれと言って来たんです。それはお断りしました。私は「陸」の監察官ではない、二つの基地ができて、片一方の基地を見て、これはおかしいと指摘した、それだけで充分だ。後は陸幕長がそれぞれ判断しておやりになるだろうということで、私は断ったんですけれどね。そういうことがあるんです。

伊藤 陸幕長というのは、実戦部隊の専門家でしょう。

海原 だからそこです。幕僚長の検閲と言えば、当然、下の武官が付いて行って、調べるわけですよ。これで充分だ、百点満点だということとで、作戦任務を与えてくれという上申を出しているんですよ。それを文官が見に行ったら、これはおかしい、これはおかしいということになるんですからね。

伊藤 向こうから見たら、姑に見えるでしょう（笑い）。

海原 いやいや（笑い）。だから困っちゃうんですね。なぜそういうことをしたかと言われても、せざるを得ないんですよ。だから私は内局の防衛局長という文官が、そんなことを言うのはおかしいと言った

んです。おかしいけれど、現実はそのなんだ。どうしますか、伊藤さん。

伊藤 どうしようもないでしょう。やる以外ないでしょう（笑い）。

海原 そうでしょう。やはり「大義親を滅す」ですよ。だからしようがない、お国のために、と思つてやるでしょう。そうすると、あいつは、となるわけですよ。それから「海原天皇」になるわけですよ。

伊藤 それは、こういう形でどんどん直していくことですね。

海原 そういうことをしないことには部隊ができませんね。

伊藤 せっかくこれ「照顧脚下」はNo.6があるので、No.5まで欲しいですね。探してください。

海原 ほとんど処分しましたからね。

伊藤 いやいや、処分したって、これ「No.6」が残っているんですから。

海原 いや、それはたまたま残っていたんです。

伊藤 他のものもたまたま残っているでしょう。海原さんの用語についてだいたいわかるようになりましたよ。「忙殺されて何もできない」というのは、こういうものを書いてあるんですね。

海原 私が憎まれ口を言われながら大きな顔をしていたのは、こういうことがあるからなんです。

伊藤 そういうことがなくて、ただ単に威張つていても駄目でしょう。

海原 しかし誰も評価してくれませんからね。うるさい奴だと言われただけで。

伊藤 しかし実際、その知らせによって改善されるわけですから。

海原 どうでしょうかね。

佐道 実際に、そうやって現場をご覧になっていたわけですね。

海原 必ず私は現場に行った。ですからこれだけは言えますのは、私の前にも後にも、現場を見ないんですよ。文官だけでなしに武官もそうですね。

伊藤 しかし十項目ぐらい言われたら、実はあなたに指摘された十項目は全部やりましたけれど、その他になお三項目問題点を見つけて、これも解決いたしました、と報告したいですね。

海原 ところが、『海原二等兵』が厳しいものだから、三項目も出てこないんですよ。あいつさえ来なければのんびりできたのに、とまっているでしょう。

伊藤 でも、言われたことによって彼等だつて良かったわけでしょう。

海原 本来なら幕僚長は譴責の処分を受けて然るべきですね。だつてそういう文書を出して来たんですからね。ナイキの教育は終わりました、だから作戦任務の下令をしていただきますと。そういう虚偽の報告ですね。それで恬然としているんですよ。だからああいう体質は、昨今はやりの大銀行の頭取さんと同じだと思ふんですけれどね。どうも日本人は、昔と人が変わったのかなという気がするんですけれどね。

佐道 先生の関東軍のご経験以来、参謀は現場を知らない。その敵討ちをされているような感じですね（笑い）。

海原 敵討ちというより、だから、と言って心配するわけです。本当に心配するわけです。

伊藤 日本人の人間性はあまり変わっていない。人間性というより、組織のあり方とか、そういうことですね。

海原 ですから、防衛事務次官を務めた人が何人もおるわけですね。その人たちが次官にいる間に、何を改善したのかということを担当に聞きたいですね。

佐道 先生の部下とか後輩にあたられるような方で、現場の状況をよく見ようとされたような方はいらつしやいますか。

海原 いまですね。

伊藤 でも海原先生の薫陶を受けて……。

佐道 「海原学校」の生徒ですね。

海原 「海原学校」というのがあった。その学校の連中は全部ちりちりバラバラになってしまいました。駄目ですよ、警察に帰った者もいるしね。

伊藤 警察に帰ったら警察でやっているでしょう。

海原 そうだと思えますけれど、これ以上言うと、いろいろ具体的なことになってきますからね。どう言ったらいいんでしょうかね。

一番いい例で言うと、海上交通の安全の確保、そんなことはできないということをおは私に文書にしないでいぶん出しました。公開質問をした。しかし今の事務次官以下、全部やると言っているでしょう。これは私の部下ですが、例えば夏目（晴雄）君なんて次官になりましたけれど、彼だつて国会答弁をした時に、「航路帯をつくるならば」と言っているんですよ。私は航路帯なんてできない、と言っているんです。本にも書いています。ところが彼等は、航路帯をつくるならば、こういうことになりますという説明で終わりますよ。

伊藤 それは基ができないのだから、できないということをお願いしたいわけですか。

海原 そうなんでしょう。

伊藤 それなら結論としては同じことじゃないですか。

海原 いや、彼等はできないとは言わないですよ。

伊藤 それはできないとは言えないんですよ。そこまでのいろいろ

な積み上げがあるから。

海原 困ったことですよ。だから鈴木善幸さんがワシントンに行つて大見得を切るわけでしょう。日本から一千海里離れた海域までの海上交通の安全を確保すると。あの時の話になりますと、話はちよつと飛びますが、ちよつど私はテレビ「番組」を一つ持っていたんです。日本テレビで、週二回やっていました。朝十時頃からの世相講談ですね。その日の朝の新聞に大きく「防衛庁の次官が統幕議長などと一緒に鈴木総理のところに行つて説明をした」と書いてある。その後で次官の談話として、「私たちの説明を総理は充分理解された。要するに防衛は点ではない、面であるということを理解されたと思う」と、一千海里の話が大きく出たんですね。私は、「今日お話しすることは重大なことだから、防衛庁、外務省の人はちゃんと録画をしておいてくれ」と予め連絡したんです。昨日防衛庁の幹部が総理に「ご進講」に行つて、海上交通の安全の確保を言ったけれど、これはできないこととだ、そこをはつきり勉強していかないことには、とんでもないことになりますよと警告した上で、テレビでしゃべったんです。

しかし、全然駄目ですね。だけど鈴木さんがワシントンのナシヨナル・プレスクラブで一千海里の話をしちゃったでしょう。これが日本の公約になって、今でもまだ公約になっていますよ。それを国会で質問されたら、私が指導した夏目君が防衛局長として、「航路帯をつくるならば、こういうことをいたします」と言っている。もう処置なしですね。それでずっと来ている。また私は辞めてからも、「海上交通路の安全の確保なんてできないことだ」と、公開質問の形でずいぶん出しました。いずれ後でお話ししようと思つているんですけれどね。

伊藤 是非、それを伺いたいと思います。

海原 全然影響なしです。やはり一評論家では駄目ですな。

伊藤 やはりその職になれば駄目ですか。

海原 そういうことです。組織の中にいないと、外でいくら喚いてみても駄目だということをつくづく感じました。

日米安保協議会の実態

伊藤 もう時間があまりありませんので、「三矢」の一つ手前のことですが、さつき河野先生が伺ったことについて少し話して下さい。

河野 そうですね。「一九六三年一月の」日米安保協議会の会合ですね。

海原 これは私は行きません。第三回とか書いてあるんですが、果たしてそうだったのか。新聞というのはいい加減な推測の記事を書きますからね。大体、安保協議会の内容は発表しないことになっているんですよ。

河野 ただ、安保協議会の議事録というのがありますね。

海原 あるはずですね。

河野 アメリカのナシヨナル・セキュリティ・アーカイブズとかに請求すると出ているんですよ。その一部を見たことがあります、日本にもあるわけですか。

海原 日本にも、外務省にあるはずですよ。防衛庁は違う。主管は外務省ですからね。

伊藤 防衛庁は全然それに関わっていないわけではないでしょう。

河野 出席していますね。

海原 全部出ます。防衛局長が出ている場合もありますからね。私も

二、三度出たことがありますけれど。

伊藤 あるんですか。

海原 あります。

河野 防衛局長の時ではなくて、ですか。

海原 はい。ただし、正式に後で議事録を作る場合と作らない場合があるんですね。ですから、なかなか二×二＝四にはならないんですよ。三になったり、二になったりするんですね。

河野 この「中共」の脅威に対する認識の違いというのは、あまり意識されたことはないんですね。

海原 どうでしょうか。認識の違いというより、日本側の認識不足と言いますか、アメリカから言わせれば危機感がないということになるでしょうね。

河野 そうですね。六五年当時のアメリカ側の対日観はそうですね。

海原 だから先ほどの、何とかなるよということですね。その違いですね。

伊藤 この日米安保協議会に、防衛局長時代にご出席になったことは何回かあるわけですか。

海原 あります。しかし、そんな大事なことを議論した覚えはありませんね。意見の食い違いとかも……。あれは一種の儀式ですからね。

河野 いや、セレモニーではないでしょう。一応意見のやり取りはありますよ。

海原 さあ、私が記憶していることはないですね。例えばギル・パト

リックが来た時にどうだったとか書いてありますけれど、そのギルさんが何を言ったか私は知りませんよ。

伊藤 それは、とぼけているわけではないんですね。

海原 (笑い) ないですね。ギル・パトリックという名前が出ましたね。志賀さんの時でしたか、その時の話をしますと、その時懸案だった問題があるんです。ナイキの所属の問題とか、ですね。ギル・パトリックが防衛庁長官のところに来て挨拶をした。その後で私が入って行って、私に加わった席のことです。志賀さんはいい人だと先ほど申しましたね。感じて物を言う人ですね。「六月までに決めるんだ」と言っていたんですよ。ギル・パトリックが総理に会った後ですか。

伊藤 何を決めるんですか。

海原 ナイキの所属です。いや、ヒューズの問題かな、バッジの問題でしたか、ちよつと案件は忘れましたが、ギル・パトリックに何かを決めるとおっしゃったんですよ。私の隣に次官の門叶さんが座っていて、その向こうに林さんが座っていた。私は「大臣が今、あんなことを言ったけれど、決められますか。志賀さんは決めたいと思ってるけれど、決められる状況ではないじゃないですか」と言ったんです。そうしたら二人とも、門叶さんも林さんも、黙っているんです。私は英語が一応わかりますから。通訳を通して、志賀さんが決めると言った。とても決められることではないんですよ。

そこでちよつと発言を求めて、「先ほど大臣はこうおっしゃっていただけけれど、大臣としては決めたいというご希望の発言だろうと思いますが、実務を担当している私どもとしては、その時期までには決まらないと思う」ということを言っちゃったんです。それは池田さんの後に来たんですから、志賀さんの言ったことが公約になりますからね。

その場で私は次官と統幕議長に、「あんなことを大臣が言っても大丈夫なんでしょうか」と言ったら、「うん」と言っているわけですから。それは大臣としては決められると思っただけで、どうも実務を担当する私たちとしては、それは大臣のご希望であっても、そのようにはいかないと思う。いろいろと複雑な事情がありますからということをやったわけです。この発言が後で問題になるわけです。

伊藤 どこで、ですか。

海原 次の藤枝（泉介）さんの時に引き継ぎがあったんですね。あの時の海原君の発言は少し勇み足ではないかということ、藤枝さんの秘書をしていた伊藤君という、僕のかつての部下で今でも付き合い合っていますけれど、彼から聞かされたんです。藤枝さんはこう言った。ああそうか、しかしあの時は言わざるを得なかったんだと。結局、志賀さんの言ったようには決まらないわけです。そういうことがある。

ですから、日米の会議でこう決まったとか、こういう発言があったと言っても、なかなかその通りはいかないということを知っていたらきたいために申し上げたんです。だから、その記録なるものの信憑性といえますか、実現性といえますか、それが問題ですね。あれは一つの儀式ですから。日米相互安全保障会議でいろいろ検討されるということになっていきますけれど、とてもそんな簡単なものではないです。事柄は全部下の方で具体的な話がついてからでないと上げてきませんからね。

河野 下というのは、つまり米軍側と防衛庁で詰めて、それが上がってくるということですか。

海原 そういうことですね。だから何の問題かということがないとわからないですね。

伊藤 この協議委員会は議題というものがあるわけですか。

海原 あるんですが、私は実質的にはゼロだと思えます。何もなし。その時、その時の儀式ですよ。

河野 この協議委員会は安保改定の時につくられたけれど、あまり機能していないと書いてある本があって、そうなのかなと思って議事録を見ると、結構大事なことが出てくるのでよくわからないんですが。

海原 常にそうだとはいませんが、私がタッチした会議の空気は単に一つの儀式ですね。そこで決まるはずがないんです。この話はまだしていなかったと思うんですが、日米両方の共通の指揮母体みたいなものをつくらうという話が初めに出るわけですね。それが結局、実を結ばなかったんです。

伊藤 それは有事の際の話ですね。

海原 そうです。まさにこの会議で取り上げるべき問題なんですね。それで、日米はお互いに安保条約を結んでいるわけですから、日本の防衛のためにどういふふうな組織で統合司令部をつくるかということですね、簡単に言いますと。これは私が関係しましたから言えるんですが、これが決まらないんです。というのは、アメリカ側は、統合司令官はアメリカの軍人だと言うわけです。これに対して統幕議長は、日本人だと言うんです。それが防衛庁で問題になるわけです。私は、統合司令部ができる以上は、現在の自衛隊の能力からいけば、統合司令官はアメリカに決まっていると言ったんです。それでは駄目だ、というのが林さんの主張なんです。

河野 米韓の場合は確かアメリカですよ。

海原 そうです。日本側が決められないんです。

河野 日本側がそれでは駄目だと言うんですね。

海原 林さんがそれでは駄目だと言う。日本を守るのに、その司令官が米軍人では駄目だと言う。それは例のイギリスのモントゴメリー元帥がアイクの下についたでしょう。これが彼のメモワールによると、これほどの屈辱はなかったと書いてあるでしょう。それを例に出すわけですよ。それはイギリスの場合と日本の場合とは違うだろうと。わが方には力がないんだから、統合司令部ができるのなら、司令官は米軍でいいじゃないですか、と私は言ったんです。それに対して林さんが駄目だと言う。それでは死ねない、と言う。そういう議論になるわけです。結局、統合司令部はできないわけです。そういう経緯があるんです。これは私も関係した一つの具体的な例ですからね。結局日本に対して外国が攻撃をして来た時に統合司令部はどうするのか、うやむやですよ。

伊藤 個々別々に戦うということですか。

海原 そういうことになっちゃうんです。

伊藤 連合軍をつくった時に、最高司令官をどうするかというのは、世界の歴史の中で非常に難しい問題ですね。

海原 おっしゃる通りです。しかし今の状態では、米軍と日本の自衛隊を比べたら、米軍司令官が当り前じゃないですか、と言ったんですよ。これは私が関係していたから言えるんですよ。そうしたら、「海原君、それは駄目だ。それでは日本人は死ねない」という議論になるわけですよ。

伊藤 アメリカは、日本人が最高司令官になったらどうするか。

河野 死ねるんですかね（笑い）。

海原 だから、その話は結論出さず、ですね。この前お話ししたでしょう。ソ連が北海道に攻めて来たたら、米軍は退いて、白河の線で防衛す

ると。これに対しても、林さんがけしからんと言ったものですからね。彼がまさに、そういう純日本人的発想なんです。そういうことがあると決められないんですよ。

それからもう一つの例を言いますと、日米安保条約の実行のための統合委員会をつくらうとしたんです。これは結局できていないんです。名前は「日米安保条約の実行のための委員会」ですね。なぜ、できなかったか。

伊藤 それは安保協議会とは違うんですか。

海原 違うんです。安保協議会みたいなものですが、実際の具体的な軍の活動の問題ですね。

河野 ACSAみたいなものですね。

海原 その上の委員会みたいなものですね。日米で合同で日本を防衛するための委員会ですね。それがなぜできなかったか。それも、加藤さんがそこに防衛局長を入れると言うんですね。それは日本のシビリアン・コントロールの建前をしきりに言うわけです。アメリカは、そんな防衛局長みたいな文官が入ってきたら困ると言うんですね。そうしたら向こうも大使を入れる、と言うわけです。日本側が文官を出すなら、アメリカ側としては大使を入れると言う。こちらは大使なんか来たつてしようがないと思うでしょう。これで揉めたんです。できなかった。そういう基本的な例でもおわかりのように、お互いの思惑、希望が一致しないといけないんですよ。

伊藤 でも今のお話を伺っていると、いろいろ議論があったということですね。

海原 そうですね。事前の議論ですね。できないんですから。

伊藤 できないことばかりだったら、協議会を開いてどうするんです

か。

海原 だから、そういう名前だけだと言うんです、私が言いたいのは。しかしそう言うと、外務省あたりは怒るでしょう。

河野 では実際には機能していたわけではないんですね。

海原 幸い、今まで何もありませんからね。だから何回も申し上げていますが、儀式みたいなものです。歌舞伎の舞台だと私は受け取りましたね。今、ないでしょう。どうなっていますか。

河野 沖縄返還の時は、返還の直前に安保協議会のやり取りとか、ちよつと具体的なセンチメンスが浮かばないんですが、やり取りがあったような記憶があるんですけれどね。あまり実質的な話ではないんですね。

海原 と思いますけれど、昔の話ですからね。沖縄の話になると今の話ですから。沖縄はずつと後ですからね。

伊藤 いや、ずつとでもないですよ。

河野 返還直前というか、一九六〇年代の後半ぐらいですけれどね。だいぶ違いますかね。

伊藤 やはり問題がある時とない時とあるでしょうからね。

海原 ありますね。それから案外日本側で向こうに行つてしゃべっているのが、そのまま向こうに記録されているのがあるんです。それがあたかも日本側の意思であるかの如くにね。

伊藤 それは当然そうなりますね。

海原 例えば私の先輩の北村（隆）さんがアメリカに行つて、ちよつどギル・パトリックさんが来た後ですが、何かしゃべっている。それが向こう側に記録として残っているんです。私が北村さんに聞いたなら、俺はそんなこと言つたかな、と言つていましたからね。必ずしもきち

んとしたのではないことが、向こうの記録に残っているかもしれないね。

伊藤 それは記録を作るといふことの重要性についての違いがあると思いますね。だから話をしたら、必ずその議事録を作る、ということですね。それで、こちら側の議事録にはそんなことは書いてない、ということを示して出さなければなりませんね。

海原 私がそういう公にされた議事録について、個人的には必ずしも信頼を持たないのは、岸・アイク会談の時のことを言つたでしょう。

河野 引き揚げる、という話を削除したという話ですね。

海原 一番大事なところが載っていないんですからね。われわれは明日、all forcesをwithdrawと言つたんですね。それが全然載っていない。そういうこともありまますので、私は後で調べる人がどういふ記録を見るかということと同じだと思ふんです。往々にして大事なことが載っていない。残念なことですが、それはわかりません。日米安保協議会なるものの実態は、ゼロという用語と語弊がありますが、見るべきものはないんじゃないかと思ふんですね。

伊藤 少なくとも海原さんがご経験なさつた範囲では、ですね。

海原 はい。その基本には、いま申し上げたように指揮官が誰であるかという問題とか、軍事行動を指揮決定する委員会の中に防衛局長を入れるとか、そういうことがあるわけです。それが決まらなかった根拠ですけれどね。と同時に、別にいま決めなくてもいいじゃないかというのが一般的な空気でしたね。

伊藤 まあ、どうにかなるという例のやつですね。

海原 しかし記録に載ると、その記録が具体的に活字になりますからね。これ、お前どうなんだと言われてもちよつと困るんですね。特に

日本側の表現は曖昧ですからね。日本人の対外発言はほとんど全てが曖昧だと言っているんじゃないでしょうか。

伊藤 曖昧というか、かなりはつきり言っちゃっているんじゃないですか。

海原 そうですかね。

伊藤 それを翻訳すると、断定的な言葉になるわけですね。日本語のニュアンスとしては曖昧なだけけれど。

海原 私が例を言いますよ。前から講演の時にも言っているんですが、よく佐藤総理が国会で使った言葉で、野党からいろいろ質問された時に、彼は「ご趣旨はよくわかりました。前向きの姿勢で対処します」と言うんですね。これは佐藤さんの常套句ですね。そう言われたら、「そうか、しつかりやってくれ」というのが日本でしょう。

この「前向きの姿勢で対処する」というのは、何も言っていないんですね。姿勢を言っているんですね。前を向いていると言っただけですよ。大人が横を向いたり後ろを向いたりして物を言うか、と言うんです。「前向きの姿勢で対処します」と言っているのであって、対処するというのは前進することではない、処置すると言っているだけですね。だから、佐藤総理の常套句である「前向きの姿勢で対処します」というのは何も言っていないんだと。しかしそれを総理が言うのと、「わかった、しつかりやれ」というのが日本だと言うんです。

そうしたら、何と「前向きの姿勢」というのが英語になりました。「Forward looking posture」と言っただけですね。どうですか、前向きの姿勢ですよ。姿勢で対処すると言っても何をやるのかわからない。これが通っているんですからね。これは、先ほどの何とかなるよと表裏一体だと思っただけですね。これは何ともなりません。しかし今で

もこれは英語で使われていますね。「Forward looking posture」というのは。だから極端に言いますと、日米安保協議会の決定事項なるものは全部「forward looking posture」ですよ。しかも大事なことは決まっていらない。どっちが司令官になるかは大事なことです。これはもう決まりましたか？

伊藤 いや決まっていらないでしょう。決まるわけがないです（笑い）。その時になったら決まるんじゃないかと、みんな思っているんですね。海原 まあその辺は適当に、君、やったらいいじゃないか、ということですよ。

伊藤 その時になったらワーツと決めるんですよ。

海原 そのプラスとマイナスと両方ありますから、いい悪いと簡単にとは言えませんが、そういうふうなやってきたことは間違いないですね。だから、どうにでも解釈ができるような言葉を使うのが日本の政治家の癖ですね。何でも解釈できる。くどくなりますが、前向きの姿勢ですよ。前進しますとは言っていないんですからね。この佐藤さんの表現が一般的になりましたね。

伊藤 そろそろ時間ですので、やはり三矢研究は次回に思い切りお話しただくということにいたしました。

海原 そうですね。資料は用意して来ました。三矢研究について防衛庁が発表したんですが、私が原文を作文したものです。「昭和三十八年度統合防衛図上研究（三矢研究）」について「を配布する（資料6）」。それから当時の情勢を知っていたために持つて来たのが、『文藝春秋』の切り抜きです。「文藝春秋」昭和四十年四月号「新聞エンマ帖」（報道にも申す）の「コピー」を配布。それから、これは岡田さんが書いたものです。「三矢研究」と日米安保体制「岡田春夫／世界」

昭和四十年四月号のコピーを配布」。今日は「三矢」が話せると思っただけれど、済みませんでした。

伊藤 この『文藝春秋』のものは、先生がお書きになったものですか。

海原 いえ、書きません。『文藝春秋』に載っていたものです。

伊藤 これは無署名なんですか。

海原 誰が書いたか。書名が入っているのは最近じゃないですか。前はなかったように思いますけれどね。私が書いたではありません。これは各新聞の扱いが違ふということの紹介ですね。それから岡田さんの書いたものは、要するに研究か計画かということなんです。それは例の長沼裁判の時にも出てくるわけです。

伊藤 ナイキの長沼ですね。

海原 長沼裁判の時に、統幕の事務局長の田中（義男）さんというのが行って証言していますが、防衛計画に反映するものだと思うと言っているんですが、とんでもないことなんです。ここに書いてありますように、部数があるんです。私は全部読みました。三矢研究ですから、数カ月間の研究で、ページ数は一、一四九ページです。七つの段階に分けてまして、二十四の問題、それに対する答案が出ているわけです。一、一四九ページの「三矢研究」なるもの、これを私は全部読みました。結論を言いますと、全部出してもおかしくないんです。みっともない内容なんです。こんなことをやっているのか、ということになるんです。それは正直に書いてあるんです。要するに、幕僚の勉強のためにやったんですからね。

例えば、「国家が非常時になった、さあどういふ法律を用意するか」なんていう質問が出るわけですね。書いているのを見ると、「私は全然経験がないからわからない、ついでには昔の戦時動員計画の例を引用

する」と答えているんです。そういう類ですよ。これはまさに家に帰って宿題でやっているわけですからね。約一、二〇〇ページ、私は家に持って帰って、責任上、全部読んだんです。これは実際情けないと思いましたがね。だから、出してもいいんです。出してもいいんですが、みなさんががっかりされる。

伊藤 研究不足なんですか。

海原 勉強不足なんですか。何だ、自衛隊の幕僚はこんなものか、ということになるでしょう。それからもう一つは、議会とか政治家に対しては、そういう部内の単なる研究資料もいちいち出さないといけないのかということで、国会と政府との問題になるわけですね。防衛庁が仮にそういうことをやりますと、それが例になりまして、各省に対して国会から資料を寄越せということになる。とんでもないことですよ。それで出さないわけです。そういう経緯があるんです。一、一四九ページというのは相当なものですよ。

伊藤 読むだけでも大変ですね。

海原 それを全部私が読んだんですから。

伊藤 博士論文だってそんなに長いのはないですね（笑い）。

佐道 そんなに長いのを書いたら却下されるでしょう（笑い）。

海原 冒頭で私が「三矢」にかかり切りだと申し上げたのは、そういうことまでやらされたからですよ。答弁する以上は、どういうやり取りをしたのかということ調べたんですよ。

伊藤 岡田さんはそれを全部読んだわけですかね。

海原 それは一部なんです。それは岡田さんのものを書いてあります。

伊藤 では、これは次回伺いますので。今日のお話は、いろいろと本当に面白かったです。やっぱりいろいろなことがわかります。

海原 そういうことで私が「三矢」にかかり切りで、三次防どころではないんです。

伊藤 というような話を伺って、真に受けてはいけない(笑い)。

海原 今日お話ししようと思っていたのは、例の怪文書の件で、こういうものがあつたんですよ。ご参考までに「軍事研究社よりの匿名アンケート(往復葉書)のコピーを配布」。私を罷免すべしというアンケートを、私のところまで送って来たんですよ。

伊藤 「官房長殿」で来ていますね(笑い)。

海原 これが現物です「往復葉書の現物を示す」。これは小名(孝雄)から来たんですよ。

佐道 まだやっていますね、この軍事研究社というのは。

海原 ひどいものですね。懲戒免職にするかどうか、と言うんですからね。

伊藤 「現に東京地方検察庁に告発されております」と書いてありますね。

海原 私を告発した、告発したと書くわけです。

伊藤 この告発は受理されたんですか。

海原 そこで、ですよ。伊藤先生までそうおっしゃるでしょう。告発を受理したというのはどういうことですか。

佐道 告発を受理したら、喚んで調べたりするわけですね。

海原 受理したというのはどういうことかということですよ。これは持つて行ったら受け取った、というだけのことなんです。誰でも検察庁に告発すれば、それは受け取りますよ。それだけのことなんです。受け取って、さあそれをどうするかということとは全く別の問題なんです。ところが日本のマスコミでは、受け取ったら、受理した、となる

わけですね。だから困るわけです。

伊藤 その告発状みたいなものを手に入れられましたか。

海原 それはもらいません。それは検察庁はくれませんよ。

伊藤 せっかくだから参考のために。

海原 これは当時の解説です。これは『週刊文春』の解説です「怪文書スター海原官房長の実力」という見出しの記事のコピーを配布」。小名君の写真が出ていますので持って来たんです。これを「北郷源太郎」という名前でやるわけですね、小名孝雄が。この匿名アンケートの葉書には、私はびっくりしましたよ。

佐道 アンケートの項目がすごいですね。「①即刻懲戒免職、②即刻辞任させよ、③即刻休職にさせ、捜査当局の結果待つて処分」ですかね。「免職する必要なし」というのがないんですね(笑い)。

海原 みなさん笑っておられますけれど、そういうのを出されたらどういう気になりますか。

佐道 それはそうですね。今だから笑って言えますけれどね。

海原 この当ても笑っていましたけれど、馬鹿なことをやるなと思つてね。しかし、まあいい加減なことですよ。みんな面白がつて書くわけですよ。即刻懲戒免職にしろとかね。

伊藤 いいですね、そういうふうな話題になつてもらえばね。この世に生きている甲斐があるというものです(笑い)。怪文書の対象にもされないというのはね。

海原 官房長殿で来るんですからね。

伊藤 もう自動的にできていますね。面白いですね。

海原 面白いというけれど、狙撃された方はたまつたものじゃないですよ。

伊藤 弾が当たるわけじゃないですから。

海原 しかし、この前言いませんでしたか。私は当時伊藤圭一君が官房の広報課長でしたから、彼が各社に連絡しまして、怪文書に書いてあることは全部事実無根であるということで抗議に行くわけです。取り消せ、と言っただけで、絶対にやらない、一誌を除いては。三鬼陽之助さんの『財界』だけは書いたです。それには、「特報で書いたものに対して防衛庁から抗議があつて、調べてみたら、まさに事実無根であつた。当方の調査不十分につき、全文取り消します」と書いてあつた。こちらがいくら言ってみても、それに応じたのは『財界』だけでした。後はみな、私を慰み者にしましたね。辛かつたですな。

伊藤 辛いですか。

海原 辛いですよ。伊藤先生まで、そういうことをおっしゃる。

伊藤 大いに話題になつて良かったなと思ひまして。

海原 その時の笑い話を言いますと、私の弟の女房が言ったことです。「あれだけ怪文書が出たんだから、もつと色艶のあるものが出ても良かった。お義兄さんには、一つもそれが無い」と（一同笑い）。全くね。

伊藤 それはいい発言ですね。色艶の話が出てこないな（笑い）。次は色艶のある話を楽しみにしています。ありがとうございます。次回、よろしく願ひいたします。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第16回

開催日：2000年2月10日

開始時刻：14時20分

終了時刻：16時50分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 16 回 質問項目

今回は、前回伺えなかった「三矢研究」の問題から入りたいと思います。

- ① 1965 年 2 月の国会で、社会党岡田議員の質問から「三矢研究」事件が始まります。当初は佐藤総理まで怒っていたわけですが、「三矢研究」が国会で取り上げられたとき、防衛庁の対応並びに先生ご自身の対応はどのようなものでしたか。まず、どのように国会を乗り切ろうとされたのでしょうか。それから、国会での審議状況の具体的経過、決着の経緯等についてお願いします。
- ② 「三矢研究」について、マスコミ一般は、「防衛庁はけしからん」という論調がほとんどだったと思います。国会対応で大変だったと思いますが、当時の論調等について、どのような感想をお持ちになりましたか。
- ③ 自衛隊が有事の際の研究をするというのは、本来当然のことであるのに、「三矢研究」事件以後なぜか悪であるという風潮がマスコミ等にできたと思います。この事件を振り返って、どのようにお考えになりますか。また、この事件が防衛庁・自衛隊に対して与えた影響として、どのようなことが考えられますか。
- ④ 三次防が本格的検討に入った 65 年（昭和 40 年）～66 年（同 41 年）、先生は官房長となり、長官は松野頼三氏でした。松野長官はかなり頻繁にマスコミで発言し、特に自主防衛力充実、兵器国産化について語っています。以前のオーラルで、松野氏にかなり厳しいコメントをされていましたし、官房長になって三次防は直接担当してはいないというお話でしたが、官房長として長官との接触は相当多かったと思います。防衛庁長官としての松野氏の評価、並びに三次防検討状況などについてお願いします。
- ⑤ 当時、日米安保条約の 70 年期限切れ問題に関し、自動延長問題や条約期限問題等、様々な議論が出てきました。いわゆる 70 年問題について、政党、あるいは防衛庁、外務省における議論、考え方などについてお願いします。
- ⑥ 上の問題とも関連しますが、66 年頃、野党では民社党を中心に、安保全面改定と常時駐留廃止、貸与基地原則撤廃という主張が出ています。自民党でも中曽根氏が同様の主張をするわけですが、これは安保条約の基本に触れる重要な問題と思いますが、当時の議論の状況等をお願いします。
- ⑦ 防衛庁政策の PR 映画『日米安全保障体制』が『科学の驚異』とタイトルを変えて、全国の松竹系映画館で子供向け怪獣映画と一緒に封切られるという記事があります（毎日 67 年 3 月 4 日夕刊）。実際行われたとしたら、反響はいかがでしたか。マスコミ一般の風潮は防衛庁の行うことには厳しかった時期だと思いますが、子供に見せるということで反発等はありませんでしたか。
- ⑧ 67 年 7 月、官房長から国防会議事務局長に転出されます。その時のことについては、ご著書『日本防衛体制の内幕』にも記述がありますが、先生のご経歴の流れとして重要な点ですので、その時のことを改めてお話し下さい。

「三矢研究」と「三矢計画」

海原 長谷川才次さんはご存知ですか「同氏の著した小冊子『国家百年の大計』（社・外交知識普及会）を伊藤氏に渡す」。

伊藤 ええ、もう有名な方ですから。

海原 その人が一九七五年には日米安全保障条約はなくなるといふことを言っているんです。今日その話が出ますから、何か「関係のある資料が」ないかと思つたら、これが出て来たんです。その頃は安保改定の問題ではいろいろありましたね。いい加減なことを、みなさんおっしゃいますよ。長谷川才次さんと言つたら、当時は有名ですからね。

伊藤 「渡された小冊子の一部を読む」「われわれ国民としては、好むと好まざるに拘わらず、日本国憲法の再検討の必要に迫られることになる。そういうふうに覚悟してかかるのが賢明だと思ふ」というのは、いいじゃないですか。

海原 今日は基地問題や安保が出ますからね。何かないかと思つたら、これが出て来たんです。

伊藤 今日のメインテーマは三矢事件でしょう。話しにくいですか。

海原 話しにくいことはありませんけれどね。

伊藤 これは思う存分話していただかないと。

海原 思う存分といつても何もありませんが、まず補足的なことを申し上げておきます。その中にも大事なことで、どうでもいいことがあるりますね。いかに偉い人が勝手なことを言っているかというのが、ま

ずそれ「長谷川才次氏の小冊子」ですね。

伊藤 これはいい加減なんですか。

海原 だって、安保は廃棄だと言っているでしょう。

伊藤 いや、「七五年を境目に動きが出てくるのではなかるうか」と言っているんですよ。

海原 最もひどいのはこれです「八三年八月二十二日『月評』のコピ―を示す。今をときめく東京都知事さんが、「第三次世界大戦が九〇%以上の確率で起こる」と言っているんですからね。どう解釈されますか。村松（剛）さんも私はよく知っています。石原慎太郎さんと二人で、世界大戦の可能性は大だ、と言っています。九〇%以上の確率で、まず起こると言うんですね。そういう話がいろいろあつた時代だといふことを、まずご認識願いたいわけです。

伊藤 これは「石原慎太郎が」自分が言っているんじゃないですね。

「米国防総省は……言っている」と言っているんですね。

海原 そこなんです、問題は。石原慎太郎氏はいつてもアメリカを使うんです。嘘つばちです、そんなものは。『中曽根某』も使うんですが、CIAの情報ではこうだと言つてね。全部違っている。

伊藤 やはり一種の情報操作じゃないんですか。

海原 そういうことですかね。それは憶測ですからわかりません。しかし普通に考えれば、世界大戦の可能性なんてとんでもないことです。くどくなりますが、しかもそれが九〇%以上の確率だと言っているから。私は、そういうことを言つてもいいと思ふけれど、後であるは間違つた、間違つた理由はこうだということ言えば、と言つて、誰もやしません。

伊藤 まあ、大体評論をやる方はそうじゃないですか。

海原 私も評論家ですが（笑い）。

伊藤 海原先生はいかがですか。今までのものを全部調べないといけませんね（笑い）。

海原 次はテストなんです。先生方にテストするというのは申し訳ないんですが。

河野 難しいテストなんですよ。

海原 常識的テストなんです。

伊藤 いや、それが一番怖いんです。

海原 ニューヨークに行つて、必ず見たい像があるでしょう。島の上立っている。

河野 「自由の女神」の像ですか。

海原 いま何とおっしゃいました。「女神」でしょう。その「女神」というのは、どこから来ているか、ということですよ。お調べください。

伊藤 考えたこともない。

河野 初めから「女神」だと思つていましたが。

海原 日本人はそういうふうになつちやつていっている。ところが外国ではどうか。「女神」の「神」はないんです。「Lady Liberty」なんです。

「The Japan Times」二〇〇〇年二月九日の「コピー」を示す」。

伊藤 神様じゃないということですよ。

河野 そうすると、どこで神様になつたんでしょう。

海原 そんなんです。上にちよつと書いてあるでしょう。これはJALの出した案内書です。それにやはり「自由の女神」と書いてある。

これは、元はフランスにありますからね。セーヌ川にもありますし、公園にもありますね。単なる「Statue」（像）なんです。女性の像ではない。それが日本に来ると、全部「女神」になつちやう。

伊藤 やはり天照大神ですか（笑い）。

海原 これはたまたま、その意味がいま問題になつていましてね。何のモニュメントか、奴隷解放のモニュメントではないか、という説がいま有力になりつつある。意味は全然違いますね。ということで、何かの時のご参考までに。

伊藤 何かエッセイを書く時に（笑い）。

海原 「自由の女神」だと思ひ込みますよ、日本人は。向こうはそうは言っていない。神様ではないんです。単なる「Statue」、女性像なんです。こういうところが、お互いの認識の問題ですね。

伊藤 「自由の女神」のところに行つて、お賽銭を上げたという話は聞いたことがない。

海原 日本人は直ぐに神を思い起こすんですね。死ねば全部神になる。それを私は外国人に説明するんです。「日本人は死ねば全部神様なんだ、それが日本民族の昔からの言い伝えなんだ。それをいい悪いと言つてもしょうがない。あなた方の言うGod、Goddessとは違うんだ」と

言つと、「ああそうか」と言つてね。そういうところがあるんです。たまたま、この見出しの「Lady Liberty」というのを見て、あつ

と思つたんです。私もこの新聞を見るまで神様だと思つていたんです。「自由の女神」だと思つていた。どこにも「女神」というのは出てこ

ない。ちよつとお調べください、先生。どこで違つたか、ですよ。

佐道 本当ですね。最初に訳した人が「自由の女神」と言つたんでしょうね。

海原 アメリカは、そんな間違つたことは言わないですよ。「自由の女神」と、単なる「自由の像」とでは、意味が違ってきますね。私はパリに行った時に、最初に友人に案内されました。これがニューヨ

クの「自由の女神」の元の像です、と言われて、公園にある小さな像を見せられました。それから、セーヌ川の中にもある。ああそうかと思つて、ずっと「女神」だと思つていましたよ。そうしたら神じゃないんです。「Lady Liberty」と書いてあるでしょう。「あつ」と思つたんです。何で「Lady」なんだろう。「Goddess」じゃないんですね。勝手に日本人はそう思い込んでいます。伊藤先生もおそらく「女神」だと思つていたでしょう。

伊藤 深く考えたことはないんですが、そういう名前だと思つていましたね。

海原 ことほど左様に、認識というものが違い得るかということのいい証拠です。

それからこの前、方向探知のことを申しました。これに、米軍の基地が出ていたので持つて来ました。「朝日新聞／平成四年十月三十一日「北海道の米軍秘密チーム」のコピーを示す」。これは「象のオリ」ではありません。「象のオリ」は別にあります。こういうところで監視しているわけですね。方向探知です。これは外から見ればわかりますからね。秘密でも何でもありません。ただ、そこで何を取っているかは秘密なんです。

伊藤 これは空軍の基地ですね。

海原 はい。

伊藤 そこで日本の航空自衛隊がやっているわけですか。

海原 航空自衛隊は関係ありません。陸幕に別室というのがあります。陸上幕僚監部の第二部、これは情報部ですが、その別室というところがこの関係をやっているんです。その情報が内閣調査室、「内調」に行くわけです。それで総理まで行くということですね。

伊藤 この前は内容を教えてもらえないという話でした。これは今でもアメリカ軍の基地ですか。

海原 提供基地です。それで、この前の補足をしておきます。ナイキの基地を私が見に行ったという話はしましたね。そこで項目を指摘したということも申しました。最後は話したかね。私の本に書いたんですが、その写しを取つて来ました。陸幕長から、作戦任務を与えてください、準備はできましたという上申があつて、私が見に行ったわけですね。その結果、どういふことになつたかということを書いたんです。これは陸幕の文書をそのまま写したものです。こういうことをお話しするのが、今日の「三矢」についての前座になるわけです。

「三矢研究に対する当時の論調について」お前さんはどう思ったか、ということが質問に書いてありますね。私は岡田（春夫）さんが爆弾質問をするということはわかつていたわけですね。どうも今日、岡田さんから質問があるらしい。政府委員室からの情報です。岡田さんも、そう言つていたんでしょう。あの人は質問をする前に、新聞記者に「今日やるから」とか言うわけですね。

伊藤 そうでなくても、政府の側が情報取りで行くわけでしょう。

海原 もちろん行くんですが、教えてくれませんか。あの人は日本には教えないで、中国とかソ連に教えるんです。質問が終わつたら、必ずやっているんです。もともとそういう人です。だから、今日は岡田さんの爆弾質問があるということはわかつています。しかし、何かということにはわからない。その辺から入つて行きますかな。

伊藤 それは全然わかりませんでしたか。

海原 内容は全然わかりませんでした。しかし、お前さんは慌てな

ったか、というようなことが質問票に書いてあるけれど、私は全く慌てないんです。何か爆弾質問があるということはわかっていますけれども、まさかああいう大騒ぎになるような内容だとは思わなかった。まず最初は、戒厳令の話から入ってくるわけです。それは、増原さんが「戒厳令が必要だ」ということを、どこかで喋っているんですね。それから入ってくるんです。だから、ああそつちから来たな、と思って、それに関連する話だろうと思ったんです。そうしたらいきなり、「制服」の連中がこういうことで「三矢計画」を作っていると言う。「計画」という言葉を使いましたね。「研究」じゃないんです。

そこで、この質問には、総理は初め怒ったと「質問票に」書いていますね。しかし、これは新聞がそう報道しただけで、佐藤総理はああいう方ですから、別に驚かないんです。「岡田さんのおっしゃる通りであるならば、事実がそういうことであるならば、それは由々しきことだ」と言ったんですね。「上」に条件が付いているんです。「私は知らんけれど、もし岡田さんの言う通りのことであるならば、それは由々しきことだ」と答弁したんです。私は聞いていました。それはそうですね。ところが新聞報道では、「上」が飛んじやっているんです。「それは大事件だ、由々しいことだ」となるわけです。

私は岡田さんの言っていることは、ああそんなことか、と思っただ。というのは、前にも申しましたが、陸幕の勉強の内容を知っていますからね。まあ、いろいろなことをやっているなど。それは考えるのは当然ですからね。それから私の直接の部下の久保君が課長でしたから、彼がそれにオブザーバーで参加したことも申しました。久保君は、非常時にどういう対策をとるかという問題があつて、それに対する助言者として行っているわけです。「行きますが、いいですか」と

「久保氏が」言うから、「結構だ」ということで、そこから話はちょっと聞いているわけですね。「何をやっているんだ」と言ったら、「こんなことです」と言うから、「ああそうか」というような調子ですよ。それから数カ月は経っているでしょう。ですから、それについての質問だったら、別に大したことはないと思っっているわけです。

それは前にも申しましたか、警備実施計画とか年度の統合計画というものについては大変な問題があることを、私は指摘していますからね。どうせ、そんなことだろうと思っっているわけです。だから慌てない。ですから、お前はどう思っただかというご質問に対しましては、全然慌てなかった、また始まったな、ぐらいのことでした。

しかし、その研究の内容をバラ撒き始めましたからね。ああ、これは現物を持っているなど思いましたよ。ちゃんと用意してきて、それをみんな配るわけです。それを基にして言うわけでしょう。

この前もご質問にありましたけれど、それ「岡田氏が配ったもの」は一部なんです。全部で二、二〇〇ページぐらありますからね。そのうちのきわどいところで、自分が見えるところをバラ撒いたんですね。配っているものは私のところにも来ますから、ああこれが問題かと思っただ。私は何も困ったなという気持にはなりません。それは事実です。ですから、途中でいろいろ答弁をする時にも、慌てなかったですね。ああこれが、このことか、どうせ例によって膨らませて、ああでもない、こうでもないと言っただろう、と思っただから、平気だったんです。

しかし、小泉（純也）大臣は、なにしろ防衛庁に来たばかりでしょう、知らないんです。だから彼としては非常にびっくりするんですね。事前にわかっていたら説明しますが、そこでいきなり出たわけですか

らね。総理が座っている、大蔵大臣が座っている。その隣に小泉さんがいるでしょう。そこに行つて、私がいろいろ打ち合わせをするわけです。こうです、ああです、というわけですが、その程度です。だから、小泉さんがびつくりするのは当たり前です。

そういう調子ですから、いちいち私が大臣に話をして、大臣から答弁をするというと時間がかかりますね。そうすると、この前もちょっと申しましたが、角さんが、田中大蔵大臣が、質問があると「防衛局長！」と言うんですね。委員長が指名する前に「防衛局長！」と言つて、それで仕方がない、私が手を挙げて、「委員長！」と言つと、委員長が「防衛局長」と言うわけです。これは、小泉さんにとっては非常に腹立たしいわけです。本来なら、私が小泉さんに説明して、それを受けて彼が答弁しなければいけないのに、いきなり私にくるでしょう。だから、ご機嫌があまり良くなかったらしいですね。新聞記者に後で聞きました。しかし、しょうがない、そういうことになった。

伊藤 田中さんは、その時に海原さんに答弁させようとしたんですか。

海原 そういうことですね。予算委員会ですから、総理がいるでしょう。その隣に大蔵大臣が座っているわけです。あと関係の大臣が座っていますからね。ふつうは、委員長の指名を待つて行かなくてはいけません。委員長の言う前に角さんが「防衛局長！」と言うわけですから（笑い）。

伊藤 それは非常に異例のことなんですか。

海原 それは異例ですね。それは、お前答弁しろ、ということですね。それを受けて、委員長がおもむろに「防衛局長」と言う。そうすると出て行くわけです。そういうやり取りで始まったんですね。相当時間がかかりましたね。しかし、同じことの繰り返しで恐縮ですが、私は、

ああ、あれか、大したことないな、と思いましたよ。

そこで、話すとき長くなりますが、審議の例を言いますと、岡田さんが、質問したのは自分に都合のいい要点だけなんです。前後が落ちているわけです。これはいかな、と思つた。委員会はピーンとしてますからね。岡田さんが、「日米交戦規則というのがあるだろう、それを出せ」と言つて。文書の番号まで言いました。だから「その番号はございます。しかしいま岡田先生は、『日米交戦規則』とおっしゃいました。日本とアメリカが戦争をする規則なんてありません」と、私が言つたんです（笑い）。そうしたら総理以下、笑つているんですね。その時の速記録を読んでもみるとわかりますが、「そうだ、当たり前だ」と言つて、怒つているんです。これは岡田さんの早とちりなんです。『日・米／交戦規則』となつていっています。交戦規則というのは、英語の「rules of engagement」なんです。戦争する場合の連絡方法、やり取りなんです。日本とアメリカで共同戦闘をする場合には、どういうふうにするかというルールを書いているだけです。それを岡田さんは一気に「日米交戦規則」と読んじやったんですね。そう言いますから、私はしめた、と思つたんですね。それで、「いま岡田先生は、『日米交戦規則』とおっしゃいましたけれど、日本とアメリカが交戦する規則なんてございません」と言つたんです。そうしたら岡田さんがすぐ後で、「それは当たり前だ、日本とアメリカは同盟国じゃないか。もしそれが不適當なら、お前の方が間違つているんだ」と言つて。しかし、これで議場の空気は一変しましたね。みんな笑つちやう。私は、空気が張りつめていましたから、どこかで少し巻き返さないといかんと思つたんです。それで、その日の帰りには総理から、「海原君、君もなかなかやるな」なんて言われた

んです（笑い）。そんなこともありましたが。だから適当に議場をほぐしていこうと思ったんです。相手は知らないんですから。自分の都合のいいところだけ拾っているわけですね。

この前も申しましたが、一、二七九ページ、約二、二〇〇ページのものを読みまして、ああこんなものだと思います。その前に、先ほども言いましたが、年度の作戦計画とか、統合計画とかを読んでいますから、その程度のことしかまだ書けないな、と思っていました。だから、手の内はわかっているわけです。そういう人たちが集まって何か月か研究をしたわけですからね。どうだ、こうだと批評に値するものではないと、私は思いましたね。そういうことでしたから、私としては割に、これで済んで良かったな、ということでした。佐藤さんは、「もし、それが事実だとすれば由々しきことだ」と言いましたね。それを新聞は、「総理も怒った」と書いたわけです。しかし外国人との記者会見では、「幕僚が研究するのは当然のことだ」と言っていますからね。だから私は、これはいいPRになったと思います。

それで一時ゴタゴタした後、小康状態になった時に、たまたま国会の廊下で岡田さんに一対一で会いました。私は丁寧に頭を下げて、お礼を言ったんですよ、「岡田さん、どうもありがとうございます」と。そうしたら「何だ、何で君が礼を言うんだ」と言うから、「いや、あなたのおかげで、これだけ日本中にPRができました。とてもそんなことまで、役所の広報関係ではできません。謹んでお礼を申し上げます」と言った。「おい、嫌味を言うな」と言うから、「嫌味ではないですよ。本当にあなたのおかげだ。私は広報関係の立場から言っただけで、日本中にはこんなことを考えるというのを考えてもらえないチャンスを与えていただいた。これは嫌味ではありません。心

からお礼申し上げます」と言ったんです。

伊藤 それは怒ったでしょうね（笑い）。

海原 彼とは個人的には割合に親しかったんです。例えば、たまたま私が国会図書館に行くつもりで歩いていたら、向こうから「おい、海原君、海原君」と声をかけてくるんですよ。岡田さんですよ。嫌な奴だったら、声はかけませんよ。会っても知らん顔でしょう。それを向こうから声をかけてきて、「おい、海原君どうだ、最近どうしている」なんて言われますから、もともと人が好いんですね。そう思いました。そんなことで、私も、したがって防衛庁も、大事件とは思っていません。

伊藤 しかし、そういう文書は一部を摘んだと言っても、元のものは取っているんでしょうね。

海原 もちろん、そうですね。その時から私は新聞記者クラブだと思いました。その前に松本清張が書いているんです。「週刊文春」か何かにちらつと書いたんです。松本清張さんの言葉で、「自分が問題にした時はどこも取り上げなくて、岡田君が質問したらあれだけの大事（おおごと）になった」と、どっかでぼやいていますよ。私は、これは間違いなしに新聞記者ルートだと思いましたが。本来なら、社会党でなしに共産党に行くはずですよ。ところが、共産党では相手にされない恐れがある。むしろ社会党だからこそ問題になると思ったんじゃないですかね。ですから、あれだけのものが、ごく一部ですけれど、そのままごっそり行っているわけですからね。それは、私は新聞記者の筋だと思った。

伊藤 新聞記者にそういうものが渡るといことは……。

海原 充分あり得ます。それは例の安川君の時の問題があるでしょう。

外務省の機密漏洩事件ですよ。そういうことで新聞記者諸君も、ちゃんとやらせようというのがあるんですよ。

伊藤 別段、情を通じなくても？（笑い）。

海原 西山太吉さんの問題ですね（笑い）。安川君というのは僕の友人ですから、「おい、困ったな、参ったな」と言っていました。情を通じてまで取ろうとするわけです。ことほど左様に、当時は防衛問題という、みんなが神経を尖らせましたね。だからこれはクラブだな、と思った。クラブであることは間違いないけれど、クラブの誰がやったのか、それは調べてもわからんです。

伊藤 この「計画」という言葉は訂正されたんですか。

海原 ええ、しました。しましたが、なかなか改めませんでした。総理も何回か、「岡田さん、計画じゃありませんよ。幕僚研究ですよ」ということを、言っていますね。

伊藤 そういう研究すらいかん、とは言わないんですね。

海原 それは言わない。それは当然だということを、佐藤総理も外人記者クラブで言っている。

伊藤 岡田さんの方はどうですか。

海原 言いません。研究するにしても、内容がけしからんと言うわけです。緊急の事態には、法案を出して一週間で通すとかいうのがあるでしょう。それは国会を無視、軽視している、となるわけです。

伊藤 国会を重視して、国が滅びると（笑い）。

海原 そういうまともな話にはならないですよ。相手が相手ですからね。それからクーデター、と言うわけです。国会無視だ。十幾つかの法案を一週間で通すとは何事だ、と言うわけです。だから文句を言おうと思えば、いくらでもタネはあるわけです。ですから、

約一、二〇〇ページを家に持って帰って読んでみて、ホッとすると、この間申しました。がっかりしたとも申しました。このまま出していいんです。しかし、あまりにもひどいんですね。

伊藤 研究として充分ではないということですね。

海原 ないんです。何度も申しますが、年度の防衛計画とか見ていると、全部昔の大本營の作文そのままでしょう。その程度だと思つていきますから、私は最初から驚かなかつたし、慌てなかつたですね。しかし、初めて知った小泉さんなんかはびっくり仰天したでしょうね。佐藤総理も、これは三度か四度同じことを言いますが、「岡田さんの言う通りであるならば、それは極めて由々しきことである」と言っているんです。上」の「であるならば」が新聞では飛んじやっているんです。それで日本中の新聞・雑誌があれだけ書いた。

伊藤 これは先生がもつぱら答弁に当たることになったという話を伺いましたが、総理などの打ち合わせもあるんですか。

海原 しません。

伊藤 総理との打ち合わせというのは、どのレベルでやるわけですか。

海原 総理は、ただ聞いています。

伊藤 総理も引っぱり出されて答弁させられることがあるわけでしょう。

海原 それはありますけれど、私たちのやり取りを聞いていて、そのまま言うわけです。だから誰とも相談しません。防衛庁の中でも、私は誰にも相談していません。する相手がいませんから。

伊藤 官房は？

海原 それは全部私に……。

伊藤 預けちゃった、ということですか。

海原 そういうことです。あいつに全部やらせろ、ということですよ。そこが意味で、ありがたいやら悲しいやらで、冷たいものですよ。だって、それはそうでしょう。本来なら人事教育局長の所管なんですよ。だから、防衛局長にあんなにやらせたら悪いから、私もやりましよう、ということぐらいいい言った方がいいでしょう。後で次官になった男ですけれどね。

伊藤 いや、せっかくやつてくださるのだから、脇から妨害するようなことをやったらまずいんじゃないんですか（笑い）。

海原 まあ、そういう理屈にもなりますね。くどくなりますが、河野さんが、一人に答弁させるべきだと。各局長ごとにやっていると食い違う。食い違ったところを突かれる。そうすると収拾がつかなくなつて、みつともないことになるから、一人でやらせろということですね。それは賛成ですよ。それが海原だ、ということになるとね（笑い）。その理屈付けが、私の下の課長の久保君がそれ「三矢研究」に参加しているということなんです。参加していると言っても、オブザーバーで行ったわけですからね。何も研究員ではないんですよ。それも、もちろん説明していただけますけれど、相手はそんなことを聞きませんね。全て、そういうとおかしいですけど、私が一人でやって、良かったと思いますね。相談するとなると、ちよつとした言葉の端で食い違いますよ。しかも議会は、話が食い違いますと、直ぐワーツとなるわけですから。

伊藤 そこで中断するわけですね。

海原 それで一番しつこかったのは淡谷悠蔵さんですね。というのは留学生の数を一時期聞きまして、それを控えていて、局長が答弁するでしょう。さつき君はこう言った、それで計算すると違う、というよ

うなことをやるんですよ。そういう人もいるわけですよ。それは防衛二法案の時ですけれどね。細かいんですよ。留学生の数で、何年に何名行きました、何名来ました、と言うでしょう。資料をもらうわけです。計算すると合わないとかね。そういうことを言う人もいますよ。いろいろな政治家がいますからね。しかし国会の委員会での質問となると、これは丁重にお答えしないといかんでしょう。だから、役人には役人の苦勞があるんです。

冒頭の話ですが、予め何を聞くということを教えてくれる人もおります。全然教えない人もいます。教えてくれないことを教える人もいます（笑い）。だから政府委員として徽章を付けて座っていると、本当に胃が悪くなりますね。

伊藤 一応、その場合は想定問答を作るわけでしょうか？

海原 それは聞きに行くでしょう、「伊藤先生、どういふご質問をなさいますか？」と。そうすると、正直に教えてくれる先生もいるわけです。それから漠然と教える先生もいるわけです。それを全然違うことを言う先生もいる。それに従つて、防衛庁の中で各局ごとに答弁を書くわけです。用意をするわけです。ところが全然違うことを聞かれたら処置なしですね。それで岡田さんの場合は、予めそういうことはない。何か爆弾質問があるらしいということだけしかわかっていない。

伊藤 想像もつかないということですか。

海原 つきませんね。先ほど言いましたように、冒頭は戒厳令の問題から入つて来たわけです。それから何とかという「二尉グループ」があるか、とかね。その代表者が志村某だ、それが怪文書を書いて処分されたはずだとか言つて、「防衛局長、君なら知っているだろう」と

言うから、「そんなのはありません」と言うわけです。序論はそんなところから入ってくるわけです。何だこんなことか、と思ったところが、クーデター、となるわけです。今から思い返しますと、本当にいろいろありましたね。

佐道 爆弾質問というか、何を聞かれるかわからないという時には、答える側としては、全局長が政府委員として出られるわけですか。

海原 もちろん来ているわけです。来ていますが、誰も助けようとしません。

伊藤 いや、一番最初の場面はどうですか。

海原 一番最初の場面は、たまたま「海原局長は知っているだろう」ときたわけです。

伊藤 岡田さんの方から、ですか。

海原 ええ、ご指名なんです。小泉さんは、「防衛庁長官に」なったばかりだから知らんだろうと言うんですね。

佐道 やり合うんだったら、この人だと思っただんじやないですか。

海原 どうか知りませんが、小泉さんはなつたばかりですから、昔のことを聞いても、私は知りませんと言うでしょうね。だから、敵もさる者で、最初の質問が「防衛局長なら知っているはずだ」ということになるわけです。「防衛局長は答えなさい」と言っているんです。それでしょうがない、「委員長」と言うと、「防衛局長」と指名される。そういうところから始まるわけです。

伊藤 それで、「知っております」と言ったわけですね。

海原 だんだんと深みに入っていくわけです。

伊藤 成り行きがそうだったら、それは海原さんがやる以外にないんですね。

海原 そうでしょうね。向こうも知らない人と議論してもしようがないでしょうからね。

伊藤 でも、あんまり知っている人と議論して、自分が負けたらまずいんじゃないですか。

佐道 負けると思わなかったんでしょ。

海原 あいつなら叩き甲斐があると思ったんでしょ。しかし、その時は疲れましたね。朝の十時からでしょう。とにかく国会の、特に予算委員会の空気というのは特別ですからね。全大臣がいるでしょう。傍聴者もいっぱいいるし、ライトは煌々としていますね。

伊藤 その頃はテレビでも放映していましたか。

海原 もちろん入っています。大変ですよ。

伊藤 じゃあ、防衛局長は脚光を浴びたわけですね。

海原 まさに脚光を浴びましたね。だから悪口を言う奴は、海原はあれを楽しんでいると言うんですからね。冗談じゃないですよ。代わりに楽しいのをやってくれと言ったんですけれどね。あいつにやらしておけ、あいつは結構楽しんでるんだと、心ないことを言うのがいっぱいありましたな。

伊藤 しかし、結果として結構楽しまれたんじゃないですか。

海原 まあ、楽しもうと思いましたがね。そうしないと、こっちの健康状態が悪くなりますから。この機会に、よしこれはPRだ、何が悪い、やるのは当たり前だろう、ということを開き直ったことは事実ですね。当時はまだ防衛局長ですからね。広報関係もやらんといかんと思っていますから、よし、この際だ、ということですね。せっかく岡田さんにそういう質問をしていただいたんだから、この際やろうという気持はありましたね。

伊藤 じゃあ、任せたと。長官も他の幹部たちも本当にお任せになったんですか。

海原 全くお任せですね。

伊藤 それはやりやすかったですね。

海原 だって、俺でないとやれないぞ、と言ったんですよ。この前、「三矢研究について」という文書をお渡ししたでしょう「昭和四十年三月十日付「昭和三十八年度統合防衛図上研究（三矢研究）」について／防衛庁」。これは私が書いたんですけど、しかしそれは本来官房長の仕事ですね。しかし官房長が書いたのは細かいもので、役人の弁解書みたいなものですから、これではいかん、堂々と受けて立つという事で、私が書いたんですね。

伊藤 役人なんて言っているけれど、ご自分が役人じゃないですか（笑い）。

海原 そういうことを言われると、定義如何によりますけれどね（笑い）。その辺が、強いて言うならば、旧内務省的感觉ですかね。とにかく私たちは十カ月は見習いをしましたから、その間にいろいろ先輩から教えてもらいました。先憂後楽であるとか、いろいろなことを言われて、ああそういうものかと思いました。

ところが例えば、中曽根君は昭和十六年の採用ですね。彼について、町村金五さんが言っていますよ、「中曽根君も内務省と言うけれど、あれは来て直ぐ海軍に行っちゃったんだから、あんな者は内務省じゃないんだ」と。それ式に言えば、せいぜい昭和十年代までに入った人ですかね。私が昭和十四年で、見習期間が十カ月ですからね。この十カ月は大事ですね。

伊藤 最初の十カ月ですね。

海原 本省とか地方の県庁で、内務省というのはどんな役所か教えられますからね。その間の教育期間がありますし、研修もありますから。これを受けているかいないかによって違うでしょうね。昭和十五年以降の人は、来て直ぐ兵隊に行っちゃったんですよ。短期現役か何かで。

伊藤 数カ月ぐらいいはあったんでしょう。

海原 いや、二カ月ぐらいですね。辞令をもらってからせいぜい一カ月半ですね。だから、何もないですよ。昭和十五年以降の内務省採用を、内務省の人間だと言われたら困ると町村さんが言うのもわかりますけれどね。

伊藤 三月十日付の文書は、どういう性格のものなんですか。

海原 これは委員会に対する説明書です。

伊藤 委員会に配るんですか。

海原 配りました。正規文書ではなしに参考資料ということですね。

伊藤 そういふものがあるんですか。向こうから請求されたのではなくて、こちらから配布するんですか。

海原 こういふことでございます、防衛庁はこういう考えであります、という事で渡したわけです。

伊藤 こういふものを出せば、またそれに対して質問が……。

海原 何も言われませんでした。もう最初の爆弾質問で、それでいいと思って終わりですね。後はそれを知らない人が、ああでもない、こうでもないと言つて、枝葉を付けてやっていただけです。

伊藤 岡田さんは一種のパフォーマンスをやったと。

海原 もちろんそうですね。

伊藤 岡田さんは、これで有名になったわけですね。

海原 そういふことです。松本清張さんが怒っているくらいですから。

「俺が書いた時には世間が問題にしない、岡田君が国会でやったら、あれだけの大騒ぎになった。やっぱり政治家は違う」とかね。事実そうでしょうね。

伊藤 これに対する新聞報道には、かなりどぎついのものがあつたんじゃないですか。

海原 これは必ずしもそうではありませんね。まとめたものがありますから、この次持つて来ますか。三矢研究について、こんな厚い「指で三々四センチの幅を示す」ものですが、新聞報道などをまとめたものがあるんです。

伊藤 どこでまとめたんですか。

海原 防衛庁です。そんなものは意味がないかと思ひましてね。

伊藤 それは面白いじゃないですか。当時、どういう姿勢で新聞が報道していたか。いま読むと面白いと思うんですね。

松野頼三長官の“大人事”

海原 この前、ナイキの基地の問題をお話ししましたね。これは「三矢」に関わるんですね。

伊藤 どういうふうに関わるんですか。

海原 こういうことで、幕僚の素質の程度がわかっていきますからね。どうせ大したことはないということですよ。三矢研究と言ったってね。それで私は実物を見ているでしょう。だから慌てなかつたんです。ク

ーデータとか、何とか計画だとか新聞は騒いでいますけれど、またいろいろな評論家が勝手なことを言っているけれど、全然知らないわけですから。それらの人は岡田さんの言う言葉を常識的に解釈して、そういうものが行なわれたんだろうという想定になっているわけですね。実態がそうじゃないんです。それがわかっていきますから、慌てなかつたということでしょうね。二度も三度も同じことを申し上げて恐縮ですが。そんなの、お前さん、慌てないのはおかしいじゃないか、ということになるかも知れませんか。

伊藤 あれは全部出せ、という要求もあつたんじゃないですか。

海原 ありました。それは、この前もちよつと申しましたが、国会と政府との関係になるんですね。これは政府の文書じゃないわけで、部内の研究資料ですからね。部内の研究資料で、公文書でも何でもないわけですね。そういうものをいちいち「何をやっているのか、出せ」と言われて、各省共にそれが波及していったら大変なことになるでしょう。だから防衛庁だけ出すわけにはいかんですよ。それは説明しましたし、最後は国会の方も了解してくれました。防衛庁だけがいい顔をして困るんです。外交文書も同じことですからね。岡田さんも、初めはクーデターを計画しているというふうにやっていたわけですからね。そんなものじゃないということがわかってくると、例によってあの調子か、ということになるわけです。ですから時日を経過することに、そうであつたかということをお話していただくということですかね。

伊藤 でもあれは、岡田さんをして、名を成さしめたでしょうね。

海原 そうでしょうね。わざわざそのために小委員会までできたんですから。その小委員会の委員長が松野頼三さんになつたわけですね。それが、防衛庁長官になるきっかけなんですよ。それは防衛庁の

様子を見なくちゃ駄目だ、しつかりせんといかんということをやった
と思いますよ。だって、あの時に「佐藤四奉行」の一人と言われている
たんですからね。角さんも含めてね。

佐道 それまでは松野さんは防衛庁とは接点はなかったんですか。

海原 ないですね。この前、私が松野さんのことを評判が良くないと
言っていた、と書いていましたね。

佐道 「厳しいコメント」ということですね。

海原 松野頼三さんの親父さんの鶴平さんは陽性の悪だと言われたけ
れど、息子の頼三さんの方は陰性の悪だと言われていました、と言っ
た。その辺のことだと思うんですけれどね。それを裏書きするほどで
もないんですが、去年でしたか一昨年でしたか、虎ノ門の地下鉄の駅
で、ぱったり元朝日の記者に会ったんです。この方はワシントン支局
長もした人で、フォーリン・プレスセンターの理事長もやった人です
が、その人と久しぶりに会った。「やあ、海原さん」と言っただけ
時に出了た話題が松野頼三の話です。『週刊朝日』が、松野さんに「自
民党の長老」という形容詞を付けたんです。今でも長老、というこ
とになっているようですが、それを彼が言い出したんです。「海原さ
ん、今の記者は知らないものだから、松野のことを長老扱いするが、
とんでもない」と言うから、「お前さんの古巣じゃないか」と言っ
たんですけれどね。私も松野頼三さんがいまだに自民党の長老扱いにな
っているとする、自民党も大したことがないと思えますね。しかし、
そういう立ち回りはうまい人です。

私がなぜあの人のことを厳しく言うかと言いますと、大臣が発令さ
れますね。そうすると、特に防衛庁のようなところでは、各幕僚長、
統幕議長が、事務の報告をやるわけです。こういうことをやっており

ますから、という説明をしますね。それがあって初めて、いろいろ大
臣からのご下問がある筈なんです。松野さんは、その各幕僚長のご
進講を受け付けられないんです。俺は聞かん、と言うんです。そうしたら
次官が困って、僕にどういうわけだか聞いてきてくれ、と言っています。
次官が直接聞けばいいことですね。しかし、しょうがない、「大臣、
どういうわけで部下のご進講をお聞きになりませんか」と言ったら、
「俺が君たちの話を聞いたら、俺の頭は君たちの頭と同じになる」と。
そういう論法なんです。「常識でやる」とおっしゃるんです。

伊藤 洗脳されちゃう、ということですね。

海原 そうですね。だから私は、「それは大臣、おっしゃることもわ
かります。しかし、大臣は昔の軍隊の経験がどうだったか知りませ
んけれど、防衛庁というところは英語の略語も入ってきますし、どん
なことがあるかということは、一応部下からの報告を聞いていたかな
いことには。あなたは三軍の長なんだから、部下に対する信頼感がな
くては務まりませんよ。それをどう扱うかはあなたの判断だけれど、
一応各幕僚長からどういう問題があるかということを知りたいだけ
ことが、儀礼上、形式的にも必要なことだ」と言ったら、「うんそう
か、わかった」ということになるわけです。

伊藤 わかったんですね。

海原 わかった。それで部下のご進講を聞くわけですが、部下のご進
講を聞く前に、「空」の幹部と会食したんですね。夕方ですから酒も
入るんですが、このとき「空」のある幹部、この人が少し心配りが足
りないと思うんですが、「長官、T38はよろしくお願いします」と
言っちゃったんですね。練習機ですね。そうしたら松野長官は何と言
ったか。「あれは伊藤忠だろ、あれは駄目だよ」と言っているんです。

この一言です。T38の売り込みは伊藤忠関係だ、伊藤忠は河野だ、ということになるわけです。その背後にF5、F156からくる系列があるわけです。そういうことを言ったんですね。私はびっくりしましたね。お願いする空幕の幹部も幹部ですが、それに対して、「あれは伊藤忠だろ、あれは駄目だよ」と言う人です。

これでおわかりでしょう、どういう人か。要するに松野が大臣になったというのは、対河野の関係であるということがみんなわかっちゃいますよ。そういう人なんです。それは上手の手から水が漏れたということになりますかね。ああそうか、そんな大事なものと云っておけばいいんですよ。部下からの報告も何も聞かないで、「あれは駄目だよ」というのは、あれを潰せ、あれを採用するな、ということを誰かから言われてきている証拠になるでしょう。具体的な事実で申し上げると、そういうことがある。だから怖い人ですね。

彼のプライベートでいろいろ文句を言う人もいますが、これはしょうがないです。赤坂の芸者がどうだこうだという話とか。松野の事務所の電話番号を教えてもらって、そこにかけたら女性が出て来た、赤坂の芸者だった、という話もあるわけです。それから焼けたホテルニュージャパンに一室持っていて、夏のことですが、新聞記者が会いに行ったら、パンツ一枚で出て来たとか、そんな話がありますけれどね。それから学生時代どうか。それは別ですよ、仕事の話になると。そういう人でした。

伊藤 つまり、佐藤さんと河野派が対立している。

海原 それは、これだけではないんです。先の話ですが、「松野氏は」防衛庁長官をやめて農林大臣になるでしょう。この時にも変わったことをやるわけですね。防衛庁長官時代に使った秘書官を農林省に連れ

て行っちゃった。普通は役所が替われば、秘書官は役所の職員がなるわけです。

伊藤 防衛庁のお役人を農林省に連れて行っただけですか。

海原 そうです。高橋君というんですが、気に入ったんでしょうね。当時の農林省の次官は武田誠三という私の一高の仲間ですが、武田から電話がかかってきて、「おい、誠に済まんけれど、松野大臣が防衛庁時代の秘書官がいいと言うから、彼を秘書官にするけれど了解してくれ」と言うから、「何だ、お前のところから出さぬか」と言ったら、「いや大臣がそう言うからしょうがない」と言うわけです。そういうことは普通やりませんよ。

それから、もう一つおかしなことをやった。農林大臣になって、大臣専用のトイレを作らせたんです。防衛庁は、アメリカの後の庁舎ですから、大臣専用のトイレがあるんです。一般の官庁にはありませんね。大臣といえども普通の人と同じトイレに行くでしょう。松野農林大臣は、防衛庁では大臣専用トイレがあつたからと言って、農林大臣専用トイレを作らせた。そういう人です。

それから大臣の権威を見せるためでしょうか。防衛庁長官として、統幕議長、陸・海・空幕僚長を同時に全部替えましたよ。こんなことは前にもなければ後にもありません。要するに俺は偉いんだ、人事権を持つているんだということを顕示したんですね。

同日付で、統幕議長、陸・海・空幕僚長の四人を替えました。

伊藤 替えるというのは、どういうふうに替えるんですか。

海原 発令ですよ。

伊藤 発令でしょうけれど、大臣の命でそれはできるんですか。

海原 できますよ。それは役所の中の人事ですから。

伊藤 その人事を補佐する人はいないんですか。

海原 それは外務省とか、長い歴史のある役所はそうですね。防衛庁というところは伝統もなければ、下に具体的な権威がないんですね。だから大臣がこうだと言えば、「イエス、サー」ですよ。

伊藤 それはわかりますが、誰を推したらいいかということは、自分で考えられることではないでしょう。

海原 そこはこの前も申しました、大臣が使うのは新聞記者だと。情報を集めるのはね。この前は少し通り越して、上林山さんの話を申し上げましたね。あれがいい例なんです。上林山大臣が、下の言うことを聞いていれば、あんなことは絶対起こらない。それを、俺は大臣だということで、大臣の権威を誇示し、それを実践したいんですな。だから松野さんが幕僚長三人を同時に替えても、何の意味もない。

伊藤 その人選は新聞記者なんかに相談して、ということですか。

海原 でしょうね。

河野 普通、後任はいるわけですね。

海原 例えば私の例をとりますか。私は当然次官になると言われていたんです。防衛局長をずっとやっていますし、官房長になる。次は次官になると言われていたけれど、なりません。私は増田（甲子七）さんから国防会議の方に行ってくれと言われて、行ったでしょう。そういうことを、同時に彼がやったわけです。

松野の人事で一番目を引いたのが、飛行機との関係で言うと、空幕長の人事なんです。前にも言いましたが、田中耕二という男がおりまして、衆目の見るところ、これが幕僚長になると言われていたんです。ところが田中は海原と仲がいいということ、田中がならんわけです。牟田（弘国）君というのがなった。これも決して悪い人ではありません。

ん。しかし田中耕二君と比べれば落ちるわけですね。その牟田君がたまたまた来た時に、「今度君がなるようじゃないか」と言ったら、「とんでもない、幕僚長は田中しかいません」と、その人が言ったんですから。しかし彼が幕僚長になるわけです。そういうことで、大臣として三人の幕僚長を同時に、下世話な言い方をすればクビを切ったわけです。それによって松野大臣の権威を示したわけですね。

伊藤 それは本当に権威になったわけですか。

海原 なりませんよ。それが問題なんです。そんな奴だな、というわけです。ここまで申し上げないとおわかりにならないと思いますから。私は個々の人の批評はしないことにしているんです、人生観として。プラスもマイナスもありますから。どの点を見ればプラスか、どの点を見ればマイナスか。中曽根康弘なんて大勲位でしょう。どうしてあの人が大勲位をもらったかわからないですよ、あんな人。よく知っていますから。内務省は二年後輩ですし、彼の言動は悉く知っていますから。あんなのが大勲位をもらうなんていうのは、僕は世の中信じられないと思う（笑い）。そういうことで、人間の評価というのは、見る角度によって、切り口によって違ってきますから、私は人の評価はしないことにしているんです。

伊藤 でも「私の評価」というのはあるわけでしょう。

海原 あります。それから言えば、中曽根なんか物の数ではないですね。よくまあ大勲位だと思っっているわけです。勲章が泣きますね、ということですよ。

伊藤 松野さんは、具体的に海原さんのことを知っているわけですか。

海原 いろいろ聞いたでしょうね。一言で言えば、私を敬遠していました。

伊藤 その「三矢」の時の小委員長ですね。

海原 小委員長として、私が答弁しますね。聞いていますから、それはそれなりに私を評価したでしょうね。それで松野が長官になって、私が官房長になるわけですから。官房長と言えば、大臣の直接の補佐役でしょう。そういうところへ私を据えたわけです。敬遠して……。

伊藤 それは敬遠したんですか。

海原 防衛局長であれば、ミサイルの選択の問題とか、飛行機の選択の問題について発言があるでしょう、守備範囲だから。官房長というのはそうではない、部内の取りまとめをする。この前申し上げたように、単なる庶務課長なんです。いかにも官房長と言うと偉そうに見えるでしょうけれど、実権はないんですよ。

佐道 でも、役所の序列としては偉いですよね。

海原 それがまた、役所によって違うんです。例えば審議官という制度があるでしょう。これは役所によって参事官の上であったり下であったりする。防衛庁の審議官というのは、局長の一つ下なんです。外務省では上なんです。だから同じ名前を使っても、実態は違うということを皆さん方は認識しないといけない。そこで、ぐちゃぐちゃしちゃうわけです。

伊藤 しかし、官房長というのは、次は次官ということですね。

海原 普通はそうですね。

伊藤 それは防衛庁においても、そうだったわけですね。

海原 私が防衛局長になった時に、加藤陽三さんが官房長になる。それは次官含みの官房長です。その時、加藤さんは言いました。「何も次官になるのに官房長から行かなくてはいけないという法はないだろう。防衛局長から行ってもいいじゃないか」と言うから、「それはお

っしやる通りです。おっしやる通りですが、今までの慣例では、一応官房長になり、次官になるとというのが普通です。それに従って、今井さんが退陣して門叶さんが次官になったんじゃないですか」と申し上げたんですね。もちろんこれは各役所と、それぞれの大臣、次官の考えですね。別にこうだというのはありません。ただし、いま言いましたように審議官と言っても、省によっては参事官の上であり、省によっては下なんです。それから誤解が起こるわけですね。だから私が当然次の次官だと自他共に思っていたわけですが、それがならない。人事というのはそういうことで、決まった規則はないんです。

伊藤 国防会議に出された時は、松野さんが長官ですか。

海原 いや、増田さんです。

伊藤 それじゃあ、松野さんの時期というのは、敬遠されたということですか。

海原 官房長というのは、庶務課長とか秘書課長みたいなものなんです。実権はないんです。

伊藤 実権はなくても非常に大事なポストですから。

海原 大事だと思わないんです。それは大臣の使い方です。大臣がどう使うかによって、官房長の意味が変わってくるんですね。防衛庁については、そういう状況でした。しかし、それは歴史が古い役所、例えば外務省ですと、そうはいかない。みんな決まっていますから、大臣がそうおっしゃってもと、下が抵抗すれば駄目ですな。いかんせん、防衛庁というのはまだ歴史が浅い役所ですからね。

伊藤 政党人というか議員が、大臣になればそれだけ人事に嘴を入れることができるわけですね。

海原 そういうことですね。その程度のことはね。

伊藤 その程度と言つても、三幕僚長を替えるというのは大人事じゃないですか。

海原 それを新聞も批判しないんですからね。それを批判するものがあるとするは新聞でしょう。

伊藤 いや、新聞はよくやった、という方なんじゃないですか。何でも人事刷新だったらいい、嬉しいと。

海原 松野農林大臣は、農林大臣としても人事をいろいろやるわけです。農林省はもともと河野派の色彩の強いところですよ。そこで局長の入れ替えをやるわけです。結局は同じことになる。あの人は自分の権威を誇示するために人事を弄んだ、と言うと語弊がありますが、一般にはそういう言い方ができるでしょうね。

伊藤 しかし単なる権威ではなくて、河野派を叩くために、ですね。

海原 そういうことですね。河野派と伊藤忠をやっつける。

伊藤 それで佐藤さんに忠勤を励むということですね。

海原 そういうことですね。

悪事に加担せず

——政治と防衛庁

佐道 海原先生ご自身がどうかは別として、海原先生も河野派だと見られていたんですね。

海原 この前申しましたけれど、見られていたんですね。そこで私は政治の世界に出るとずいぶん言われたんですよ。話が出ましたから言

いますと、まず河野派の話があるでしょう。

それから、これは私自身が悪かったんですが、たまたま大臣が内閣委員会の連中を呼ぶわけですね。食事に招待する。その時に私の前に社会党の議員が座っていたわけです。飛鳥田（一雄）さんなんかね。それで話になって、海原局長もいざれ政界に出るんだろうと言うわけですね。みんなワーワー言っているわけです。だからその場の話として、「いや、私は全然政治には興味がない。しかしもし政治家になるなら、私は社会党から出ます」と言っただけです。言った相手が飛鳥田さんとか石橋（政嗣）さんですね。そうしたら真顔になって、「もし本当に、君ね、出るのなら俺たちが地盤を用意する」と言うんですよ（笑い）。その時に、なぜ社会党が理由を聞かれたんです。「だって私が自民党から出たら、一年生代議士だ。一年生代議士というのはいかに哀れかよく知っている。出席を取ります、じゃないか。あっちの委員会の定数が足りないから『行け』とかね。それは与党では一年生代議士はどこに行っても当り前のことだ。ところが社会党に行けば、予算委員会では防衛庁長官に質問ができますから」と言っただけ（笑い）。

この話がずっと後まで続きましてね。海原は今度社会党から出ると。その前に河野派から出るというのがあって、それから社会党から出ると。それから役人を辞めた時、民社党の永末（英一）さんと佐々木（良作）さんから、九段下のホテルで昼飯に呼ばれまして、何だと思つて行つてみたら、「君、自民党と約束があるか」と言うんですね。「いや約束なんかありません」と言ったら、「是非、わが民社党から出てくれ」と言うんですよ。私は「政党としては民社党が一番言うことがまともだと思うけれど、私は伯父との関係で、嫌というほど政治の世

界の裏を知っている。絶対に私はあの世界はお断りします」と断ったんです。そういうことで、あっちこっちの政党から話があった。

最後はまた自民党から、参議院議員の選挙に出ると言われたんです。これは死んだ小佐野君から電話がかかってきました。小佐野が秋田に出張している時です。朝早く電話で、「君に言うのを忘れた」と言うから、「何だ?」と聞いたら、「角さんから頼まれておった。今度の参議院の選挙に出ろ。金は全部自民党が用意する」と言うんです(笑い)。そういう申し入れもあつたんですね。それで、「いや僕は、そっちの方は興味がないからお断りする。ご厚意はありがたい」と言つたんですけれどね。事のついでに全部申し上げたんですが、みんなから言われたんです。

伊藤 田中さんの話というのは、さっきの「防衛局長!」と言つた前後からずっとあるわけですか。もつと前ですか、田中さんとの接点とこのは。

海原 それはあります。いつからかはわかりませんが。

伊藤 その「防衛局長!答弁しろ」と言つた時は?

海原 昭和三十五年の暮れに防衛局長になつてからでしょうか。

伊藤 この人間が「海原」という男で、こういう人間だということを認識したわけですね。

海原 それはありますね。田中さんが私を認識したというのは沖縄返還の時ですかね。秘書が二人おりましたね。麓(邦明)君と早坂(茂三)君が。この二人が私のところに来たわけです。これはずっと後ですけれどね。国防会議の事務局長の時です。下田(武三)さんがまだ次官で、駐米大使に行かれる直前ですね。下田さんが新聞で語つたんですが、「核付き返還しかない」と。それを受けて田中角さんの秘

書二人が来たわけですね。それで私に「どうだ」と聞くから、別に核は要らない、と言つたんです。当時沖縄にはメース「米空軍の飛行機型戦術用地対地ミサイル」がありましたからね。メースA、Bとありますが、古い方です。こんなものは役に立たないし、ポラリス潜水艦もできたことだし、沖縄に核は要らないということを幾々説明したんです。

そうしたら早坂、麓の二人が、「今の話を明日、角さんにしてくれ」と言うんです。私は、「それはいいよ、時間はどのくらいだ」と言つたら、「一時間だ」と言う。「じゃあ、君たち二人がそばに付いてくれ。角さんは人の話を聞くと言つて聞かない人だ。聞くと言いなから自分の説をしゃべるんだから。それは止められないだろう。しかし俺に話をしろという以上は、持ち時間を平等にしろ。向こうが十分しゃべつたら、こっちも十分しゃべる。それを君たち二人でやってくるなら行く」と言つたんです。そうしたら、「わかりました」と言う。それで私が行つたわけですね。

それで約五十分、沖縄に核は要らないということを説明したわけですね。写真を持って行つて。そうしたら、「わかった」と言うんですね。あの人の言い方で。「明日、党の幹部を集めるから、そこでもう一遍今の話をしてくれ」と言うんですね。それで私は、「それは田中さん、謹んでお断りします。私が今日ここに来たのは、あなたの秘書二人が来て、幹事長に説明してくれと言うから来たのであつて、私は防衛庁を追い出された人間だ。下田さんは沖縄に核は必要だと言っている。その後で、私が自民党の幹部連中に沖縄に核は要らんと言つたら、これは形を変えた正面衝突になる。それは役人としてできません。今日は、私はあなたに説明に来たんだから、あなたが私の言うことを理解

されて、正しいと思うのなら、あなたがおやりなさい」と言っただけです。そうしたら「わかった」と言うんです（笑い）。

伊藤 何でもよくわかる人なんですね。

海原 あの人はすぐわかるんです。そういうことなんです。この話は漏れないと思っただら、何とナベツネ、渡邊恒雄さんが『中央公論』に書いたんです。「無学歴首相のブレインは誰か」というものです。ご存知ないですか、今度持つて来ますよ。そこに、「海原治が田中角栄のところに行つて、要領よく沖繩に核は要らないということの説明した」と「書かれています」。その日は角さんが朝日新聞の首脳と会談する日だったんです。それを私は知らなかったんです。それで、私から一時間聞いたことをそのまま話したというんですね。「これはよく言えば、受け売りだ。しかし海原学説を一時間聞いて、その通り一時間しゃべるといふことは、政治家としての独特の能力である」と書いてあるんですよ。これが『中央公論』に出ているんですよ。それをあちこちに引用されているんですけど、ご存知ないですか。今度持つて来ます。それで有名になつたんですけれどね。

それまで角さんは、核は必要だと思つていたらしいんですね。当時の首相秘書官がどこかで書いていましたけれど、どうして変わったんだらうと。私が行つてご進講したことを、彼は知らないんです。それまではもちろん、沖繩に核は必要だと考えていたのです。何となれば、源田さんなんかも核は必要だと言つていたものだから。

伊藤 海原さんがそれをレクチャーしたということはどうしてわかつたんですか。やつぱり秘書から聞いたんですか。

海原 そうです。早坂か麓に聞いたんでしょうね。というのは、『日本列島改造論』は、あの二人で書いたんですからね。それをナベツネ

さんが、当時新聞記者の第一線ですから、取材しているんですよ。それで訪ねて行つたら、二人が目を通つて赤にして、「改造論」を書いていたということ、『中央公論』に書いてあるわけです。「その日に海原治が……」と書いてあるんです。

伊藤 その頃は海原さんは本当に有名なんだ。

海原 そんなこともありました。何からこんな話になつたか……。要するに、政治の世界に出ないかという話ですね。お誘いはあつちこつちからあつたんです。一番困つたのは、「社会党から出る」ということでしたね。それは私が言つたんですよ。しかも初めはみんなザワザワしているわけですよ、会食の席ですからね。ところが、その話になつたらみんなシーンとしちゃうんです。だから、やめるわけにいかんでしよう。「冗談ですよ」と言いながら言つたんですがね。

佐道 それは国防会議事務局長時代ですか。

海原 いや、これは防衛庁時代に言われた。

佐道 防衛庁時代、ですか。

海原 はい、防衛庁時代です。国防会議事務局長時代は参議院から出るということ、角さんから言われた。それを小佐野君が聞いていたのを、「君に伝えるのを忘れた、金は全部党が持つから」と言つて電話をしてきた。金の問題ではない、俺はともあんな世界に入つて行く気がしない、命を縮めるだけだから、と言つて断つたわけです。

佐道 ついでに何うと、河野派は噂だけなんですか。実際のお誘いはなかつたんですか。

海原 それはありません。それは河野派の勉強会に三回くらい行きましたかな。そこでお話をしたのがきっかけなんです。その時、私は頼み事をしました。この人は話が分かるなと思つたから、「統幕議長と

陸・海・空の幕僚長を認証官にしてくれ」と言っただけです。「そういう要求がある。下の方でやってもうまく行かない」と言っただけところが、「それは海原君、下でやっても駄目だ、これは上からやらんといかん。当然だ、認証官は検事もなっているから。幕僚長、統幕議長が認証官になるのは当り前だ」と賛成してくれたんです。「ありがとうございます」と言ってお願ひしたんです。

それが三矢事件の前なんです。お願いして、「うんわかった、俺がちゃんと手を打ってやるから」と言われた一カ月後に、この「三矢」が始まっちゃった。そうしたら河野さんから電話が来まして、「海原君、こうなっちゃったから、あの認証官問題は飛んだよ」と言う。「それはそうですね。今、とてもそんな問題を出すのはいけませんね」と言っただけですがね。河野さんというのはそういう人でした。そんなことがありまして、「三矢」で飛んじやったんですな。

佐道 じゃあ、河野さんが亡くならなかったら、なんていう話にはならないわけですね。

海原 これは何をもって河野派かと言うんですけれどね。平井学君の話はしましたね。山本幸雄さんと平井君の二人が、河野さんに請われて警察から建設省に行った話ですね。その山本幸雄さんが建設次官をやって、三重から立候補するわけですが、選挙の時の資金に橋梁業者二十一社から一社三〇万ずつ、合わせて六三〇万円の政治資金を受け取った。それを受け取ったのが平井君なんです。建設省の官房長です。それを山本さんに渡した。ところが一社三〇万とすると、中には不平が出るでしょう。投書が行ったわけですね。それで事件が表沙汰になる。それでどうなったか。結論を言いますと、もらった山本幸雄さんは無罪、受け取って渡した平井君は有罪、但し執行猶予付きですね。

ということ、平井君は建設事務次官になるはずのところ、その問題のために役人を辞めるわけです。そんな経緯があるんです。

しかし、そのことで山本幸雄さんとか平井学君は河野派ということになるわけですが、別に河野さんを慕って行ったわけではない。警察の人事で、二人の事務系がたまたま建設省に行った。それを河野さんが使った、というだけです。だから一般的に言いまして、何派、何派という区分けをしますが、それはもちろんいろいろな場合がありますから、何とも言えませんけれどね。

伊藤 結果として、そうなることもあるわけですね。

海原 私の場合は、河野さんに別に何も頼んだことはないし。

伊藤 今、頼んだとおっしゃったじゃないんですか(笑)。

海原 認証官の問題、これはたまたま講義に行った時に、終わってから、「ところで、こういう問題があるんですが」と言っただけですよ。

まあ、頼んだうちに入りますかな(笑)。そういうことです。私は河野さんは好きでした。なかなかいろいろなことをやっていますけれどね。あの親父さんに比べると、松野さんじゃないけれど、洋平君はどうもね。みんな、二代、三代になると駄目ですね。

佐道 河野さん自身の安保問題とか防衛問題についての意見を、何かお聞きになったことはありませんか。

海原 何もありません。全くなかったですね。あの人は具体的にはそういう面では何も持っておられませんでした。ということは要するに、当面は日米安保があるから、それでいいんじゃないかということ。自衛隊も今のいいじゃないかと。それこそ現状維持です。それから、この前も申しました「何とかなるよ」という哲学ですね。これは基本的に当時の自民党のメンバーがそうでした。というのは、

あの人たちが真面目に物を考えていないな、と思いましたのは、「省昇格」の問題ですよ。それで池田総理が低姿勢だったんですね。その池田さんの低姿勢を攻撃したのが佐藤派なんです。その佐藤さんが総理になったから当然やってくれると思ったら、何もやらないですよ。これだけ見ても、どう言ったらいいんでしょうか、国家の大事な安全保障という問題を、簡単に道具としてしか扱っていないなと思いましたね。

伊藤 政治家の中で防衛問題、安全保障の問題をある程度深刻に考えていた人はいらつしやいますか。

海原 これはそれぞれの人との接触の度合いですが、私がいまだに郷土防衛隊を言っていますのは、砂田重政長官が言われたからなんです。あの人はしかし四カ月で辞められました。その後、船田中さんが砂田さんの考えを受け継いでやると言われたのに、何もやりません。せっかく要綱まで作ったんですから、大事なことです。誰かが受け継がないといけないでしょう。それで行っているのは私だけです。しかしその後で、政治家は誰も言いませんね。おかしいですよ。これは何ともならないと思います。

伊藤 自民党の大物で、防衛問題なり安全保障問題について、ある程度積極的だったというような人はあまり見当らないわけですか。

海原 いまですね。藤尾（正行）君が一時やっていましたけれどね。藤尾君が堂場君とも親しかったですけれどね。彼は福田派でしょう。藤尾さんから言われて、福田さんと四人で食事をしたことがありますけれどね。それで福田さんに、防衛問題をしっかりとやってくれとか言っていました。それで福田さんは安倍（晋太郎）さんが仲間を集めて作った本の責任監修をやっていますけれど、それだけです。具体的

に誰もあの問題に取り組む人はいませんね。

伊藤 防衛族というのはいいんですか。

海原 いまですね。いたら教えてください。防衛族というのは、これから先はあまり言うのもあれですけど、政治の現実の世界では、やはり金との結び付きが必要ですね。今、何もありません。それはナイキ、ホークにしてみても、ファントムにしても、どこが造るかということは、その方面の業界との問題が出て来ますからね。松野自身は日商岩井から五億円も受け取っているわけですよ。それで政治資金に使ったと国会でも言っているわけでしょう。それで何ともならない。同じ五億円を田中さんはもらって、ああいうことになっちゃった。だから基準がわかりませんね。

伊藤 防衛庁というのは、防衛予算の問題で利権と関わるわけですね。そうすると、いかにも防衛族というのがたくさん出て来そうな感じがすけれど。

海原 ないですね。私の知る限り、一人もいませんね。国防部会というのがありますけれどね。あの国防部会では保科善四郎さんぐらいですかね。

伊藤 あと、有馬さんがやっていたでしょう。

海原 有馬元治さん。これは名前だけでしようね。具体的に何もなかったんじゃないですかね。ということ、例えば中曽根さんがしきりに国産、国産と言いましたが、一体何を国産するのかとなると、わけがわからないですね。何かありそうなんです。ありそうなんです。さて、となると、ないですね。

伊藤 自民党の国防部会などに集まっている人たちというのは、防衛問題に熱心だというわけでは必ずしもないんですかね。

海原 ないでしょうね。今、国防が国の大事であるということをお経の文句のように言う人はいますよ。じゃあ、どうするんですかと言ったら、何もありませんね。それから言いますと、一時と違って力はないですな。一時はナイキをどうする、ホークをどうする、三菱がやるか東芝がやるか。飛行機は何だ、とやっていますましたけれどね。

伊藤 空中戦ですね。

海原 今はないですな。ロッキード事件でああいうことになったからかもしれませんけれどね。わかりません。

伊藤 ないということは、大体配分が決まっているということですか。

海原 現在ですか。一言で言いますと、いま言われている防衛力整備計画なるものは、装備品更新計画・調達計画、もっと下世話に言いますと、「買い物計画」なんです。

伊藤 防衛計画ではないですね。

海原 ないですね。それだけです。

伊藤 でも、その「買い物計画」は相当金額が大きいですよ。

海原 大きい筈なんです。最近のことは知りません。調達の変な問題がありましたでしょう。あれを見ていると、一体何をやっているんだと思いますけれど。私は現状は知りません。

伊藤 海原先生が防衛局長だった時代は、まさにそういう、どこだ、ここだという問題の真っ只中におられたんですね。これは全く政治がらみの話になってくるわけですね。

海原 政治がらみという言葉の内容ですが、そういうことでしょね。

伊藤 決定過程に必ずそれが入ってくるという意味です。

海原 影響ですね。応援団です。

伊藤 こっちの応援団か、あっちの応援団か、ということでしょう。

海原 その辺のところですね。その頃は何と言いますか、各政治家の秘書が活躍しましたね。例えば岸さんの秘書が五人いる、六人いると。秘書として行くと、岸さんが行ったのと同じことになるわけですね。そこが問題ですね。その後の具体的なことは知りませんがね。

伊藤 岸さんというのは、そういう方面でも秘書を通じて力があつたんですね。

海原 でしょうね。

伊藤 何ていう名前だったかな。

海原 川部君ですか。これは政治秘書みたいなものですね。ヨーロッパで日本館みたいなことをやっていた。あれはカーンの秘書もやりましたけれどね。これはカーンとの関係で出て来ました。川部美智雄君と言いましたかね。これもお話ししたでしょう。東芝にミサイルの国産計画を立てるという防衛庁からの依頼があつた、ついでにはこういう者が行くからよろしくと。レイセオンの社長に対する紹介状が、「ノブスケ・キシ」の名前でレターで出ているわけです。そのレターを持って、二人の社員が行っているわけです。その手紙を私は持っています。国会でも質問されました。いま持っているかと言うから、持っていますと答えた。

それで川部君を呼んで、「ノブスケ・キシと書いてあるけれど、これは君は知っているか」と言ったら、「知らない」と言う。「これが岸さんだとすると、まず防衛庁は兵器の生産計画を出していない。いかにも現在完了で書いてあるから誤解される。調べてくれ」と言ったら、「調べます」と言ってそれっ切りです。それ以来縁は切れませんでしたけれどね。そういうことで、行っていることは間違いないです、東芝の連中が。

伊藤 どこにですか。

海原 アメリカのレイセオンの社長のところに。しかし、そのレイセオンと関係があったのは、日本無線という小さな会社だったんですね。日本無線が三菱電機の系列に入ったわけです。当然、三菱がもらうでしょうね。東芝は、それをひったくろうとしても無理なんですよ。それでいろいろありまして、ゴタゴタして、結局七・三ぐらいの割合で、両方の共同受注みたいなことになったんですね。しかしそのために一人装備局長が自殺しましたしね、森田（三喜男）君が。いろいろなことがあったんですよ。ことほど左様に、あの当時は激しかったですね。他に仕事がなかったんです、政治家にとって。

伊藤 しかしそういう中で、よく海原さんは怪我をなさらずに。

海原 あちこちかすり傷を負いましたよ。しかし私の人生観ですが、悪事に加担せずと言っていましたからね。親父の教育のおかげです。何も悪事に加担する必要はない。結果が良かったか悪かったかわかりませんが（笑い）。しかし、今まで生きてきましたから、まあまあ良かったんでしょね。何からこんな話になったんですかね。

伊藤 政治と防衛庁との関わりです。そこにおられる人、官僚というものが政治家とどういう関係にあるかということですね。

海原 今は何も無いんじゃないでしょうか。新しい物は何も無いでしょう。ある物の更新だけじゃないですか。だから、下世話な話をしますと旨味がないんじゃないですか。しかし本当に防衛をどうするかという問題、つまりこの状態の下における自衛隊の、本当の意味での精強なる部隊はどうやったらかつくれるか、中曽根総理大臣の訓辞の言葉を採用しますと、「盤石の防衛体制」というのは、どうやったらかつくれるかということを考える必要があるんですね。

それで今日申し上げようと思っていましたのは、この間のご質問にあったんですが、私は現場をずいぶん見ているんです。例えば北海道の白神、青森の竜飛、あそこに海上自衛隊の監視所がありますが、そこにも行っています。それから四国の由良というところにもありますし、さらには江田島のすぐそばに海上自衛隊の弾薬の整備所がある。そこも行っています。さらに対馬の警備所にも行っています。そういうところに行つて、現場を見ているわけです。そういうことを今はやらないでしょね、特に内局の局長諸君は。その前には、私の軍隊の経験があるわけです。

伊藤 経験がないので、見に行つてもわからないということはあるんじゃないですか。

海原 それはありますね、充分勉強しないと。そこが内局の勤務職員の問題なんです。例えば機関銃をどうやって撃つのか。これを知らない、見に行つてもしょうがないでしょう。一般的に言いますと、内局の偉い人が地方の部隊に行くとなると、司令部に行きますね。そこでチャートを示されて、こうなっています、あんなっていますという説明を聞いて、それからどこかの部隊に行きましょと言われて部隊を見る。それで終わりです。私は一切それをやらない。いきなり第一線の部隊に行く。嫌でしょうね（笑い）。

伊藤 嫌でしょうね（笑い）。

海原 それは心得ていますけれど、昔の私の旧軍における体験があるからです。司令部の計画がいかに立派であっても、第一線の部隊はみんないろいろな問題を抱えて苦労しているんですよ。だから中央は第一線の部隊の困っていること、悩んでいることを吸い上げてやる。それに対する対策を立ててやる。そういうものであるべきだと言つてい

るんです。私が防衛庁にいる時には、努めて若い連中を第一線に出しました。そうしますと、例えばソナーで海の中の状態をずっと聴いていますね。イワシの群れと、クジラと、船と、全部違うんです。しかしその違いがわかるためには、そういう訓練をしないと駄目なんです。ここが問題なんですね。そういうものか、ということがわかる。ソナーと言え、何でも立ちどころにわかるように思っちゃうわけです。決してそうではないんです。ですから、ここ「前回速記録」に敵討ちと書いてありましたけれど、昔の敵討ちをするつもりは毛頭ないわけで、第一線の実状をよく知ることが必要だというのが、私の基本的な考え方でした。

非現実的な国防論

伊藤 先ほど三矢研究の問題で大変PRになったとおっしゃいましたが、逆に防衛庁の中で、そういう研究をすることが非常に非常に抑制されるという結果をも生んだのではないのでしょうか。

海原 生みませんね、それは。というのは、非常に厳しい批判をしますと、研究の問題自体がおかしいんです。朝鮮で事件が起こって、それが逐次日本に波及すると。これは申し上げようかと思つてやめたんですが、小委員会です。質問が出たんです。質問したのは誰か。社会党の議員さんです。「三矢研究を見ると、朝鮮で事態が悪化して、それが逐次日本に波及するとなつてきているけれど、なぜそんなことを考え

るんだ」と言うんですね。「もし、日本がいきなりやられたらどうなるか。そういうことから研究しろ」という質問をした社会党議員がいるんですよ。

伊藤 それは立派な質問ですね。

海原 そうです。だから「おっしゃる通りでございます。私どもは今までそういう点についての知恵がなかったものですから、これからはおっしゃった通りをいたします」と答弁しましたよ。いろいろあるんですね。だから社会党議員だからと言って、頭から自衛隊否定ではないんですね。私は個人としては、皆さん現状肯定だ。しかしそれを社会党議員としては言えない。そういうこともわかるから、そこはほどほどお互いに身の程を心得て、と言つていたわけですけれどね。だから、小委員会での回答は、ある意味で面白かったですね。

伊藤 それが「三矢」の小委員会の話ですね。その小委員会というのは、どこに置かれたんですか。

海原 予算委員会の中の小委員会です。

伊藤 それは議事録はあるわけですね。

海原 あります。

佐道 そうすると、三矢研究のような幕僚研究は、当然繰り返し研究を続けているということですね。

海原 それは、答えから言いますと、ノーですね。というのは三矢研究の問題自体が非常に非現実的なんです。

伊藤 非現実的であろうと何であろうと、いろいろな場合を想定して、それに対処する仕方を考える。

海原 それが伊藤先生がおっしゃるようにはなっていないんですね。年度の統合計画に問題があるということは、この前もちよつと申しま

した。質問事項を百何十項目出したとか、七十何項目出したとか。それでわかりますように、作文だけなんです。そこが問題でしょうね。

伊藤 作文もできないということだつてあり得るでしょう。

海原 作文も立派にできていないんです。現実的にできていない。

伊藤 現実的に作るうと思つたら、それは大変ですね。

海原 大変かどうか。私は中曽根総理が言つたような精強の自衛隊をつくるためには、まず現実はどういう問題があるか、それを知ることが先ではないかと言つていたんです。同時に昔の『防衛白書』を見ますと、私がいつも言つている弾薬、機雷とか魚雷の整備に問題があると書いてあるわけです。そういうことは、ちゃんとやらなければいかんと書いてある。それが、いつの間にか消えちゃった。去年の『防衛白書』でも、一昨年の『防衛白書』でもその辺は落ちていきますね。

伊藤 また「一会戦分」ですか。

海原 どうしているかわからないんです。「戦争が」ないと思つていないんじゃないですか。

伊藤 現実にはない、ということですね。

海原 それは、日米安保体制がある限りは、絶対に自衛隊がドンパチをやることはないということでしょうね。私は大筋はそうだと思いますよ。だからといって、自衛隊は何もしないでいいのか、そこが問題だ。鉄砲というのは撃たなければ技術は上がらないですからね。そうやるのが必要だと。北海道の雪祭りで皆さん大騒ぎをして、あれで何千台トラックが出てくるかご存知ですか。私はこれは不思議だと思ふんですが、自衛隊の協力がなければ絶対に雪祭りは成功しませんね。

伊藤 テレビでもそう言っていますよ。

海原 あんなところに出ていいんですか。

伊藤 どうでしょう。訓練じゃないんですか(笑い)。

海原 何の訓練ですか。

伊藤 動かさないと錆び付くから(笑い)。

海原 昔、野党の先生方も連れて行ったことがありますよ、北海道へ。そうしたら、もう亡くなりましたが、民主党の代議士が言いました。

「北海道においては自衛隊と道民とが一体となって地域の振興のためにやっている。こういう姿は立派だ。他でもこういうふうにやりたい」と。あれは本当に自衛隊の協力は大変なものですよ。しかし、何のためにやっているんですかね、伊藤先生。

伊藤 PRでしょう。

海原 自衛隊が動かなければできませんよ。

伊藤 でも、やっている人たちの中には、自衛隊反対の人もたくさんいるわけでしょうね、北海道ですから。

海原 おっしゃるように、確かに訓練になると思うんですが、昔の話になりますと、私が仕えた第十一師団の師団長と参謀長とは兵の使用の認識が違ふんです。冒頭にお話ししましたが、私たちは満州の東北の虎林にいましたね。満州国から湿地を貸与してもらいまして、そこを耕地にした。そういうこともやったわけですけれどね。その時に湿地干拓のために兵隊を使うかどうか、これが大問題になった。師団長鷹森孝中将は兵力を使ってよろしいと言ふんです。参謀長はノーと言ふんです。そんなものは兵隊のやることじゃない、経理部が金を出して、満農を使ってやれ、と言ふんですね。こういうように真つ向から対立する。同じ軍人ですよ、師団長と参謀長。

これはだいたいお前にお話ししましたが、湿地演習がありました、師団全部が湿地で野営する。参謀長が他のところに視察に行った。その留

守を使って、私は経理部長を唆かして、師団長に湿地干拓計画を説明させたんです。そうしたら師団長はいたくご機嫌で、鷹森閣下は、よくできた、OKと判を捺したんですね。それで今度は参謀長が前線の視察から帰って来たのを見て、「実は師団長からお呼びがありました、経理部長が行って説明をしてご了解いただきました」と言ったら、「うっ」と言って、「師団長がOKしたか」「はい、しました」「よし」ということですね。そういうふうに、旧軍でも違うんです。だから、なかなか難しいですね。具体的に何をどうするかということになると。

問題は、北海道雪祭りの話ですね。簡単なことですが、隊員が雪を運ぶのも、演習の場合に何かを運ぶのも輸送は同じですね。だから雪を運ぶのに、輸送演習の目的をこめてやっているかどうか、そこが問題になると思いますね。私が敢えて師団長と参謀長の意見の違いを申し上げたのは、人によって違ってくるというわけです。だからそれに意味を見出す人と、見出さない人とがいるわけです。そんなものは自衛隊がやるものじゃない、金を出して雇ってやれ、ということになるか、その辺のところですね。

伊藤 しかし、もうあれだけ積み重なると、行かなければ駄目でしょうね。

海原 できないでしょうね。

伊藤 自衛隊のおかげでできなかったという、エライことになりま

すから。
佐道 再度確認なんですが、三矢研究というのは昭和三十八年度統合防衛図上研究ですよ。そうすると、この三十八年の三矢研究に類するような、昭和三十九年度統合防衛図上研究とか、昭和四十年年度統合防衛図上研究というものは行なわれなかったんですか。

海原 ありませんね。

佐道 では、なぜ三十八年度の「三矢」だけがあるんでしょう。たまたま、ですか。

海原 おっしゃったように、たまたまです。

佐道 あるいは、ちよくちよくこういうことをやっていたのを、この三矢研究で大騒ぎになったので、その後はやめてしまったのか。

海原 結果的にはそういうことですね。やっても虚しかった。成果がなかったということですよ。先ほどもちよつと言いましたが、長沼裁判では、これが将来の日本の防衛作戦計画に非常に参考になるんだというのを、田中統幕事務局長が証言していますけれどね。私に言わせれば、何も参考にならないですよ。それでも言わないでしょうがないでしょうね。幕僚の研究ですから、勉強になることは間違いない。
佐道 成果がなかったというのは、この研究をやって成果が出なかったということなんでしょうね。

海原 何の成果があったかと言っ

伊藤 でもその成果というのは、どうやって計るんですか。

海原 何を問題として出したか、それに対してどういう解答があったかということですよ。そうすると、まずなぜそんな問題を出したか、ということになるわけです。例えば日本が有事の際に必要な法令の制定とか、そんなことを幕僚諸君が自分で書いても、経験がないからわからん。だから、昔の陸軍の軍需動員計画をそのまま借用すると書いてあるんですからね。目的がはっきりしないんです。私に言わせれば、そんなことより、現在持っている自衛隊の力はどれだけだ、弾薬はどれだけだ、そういう研究の方が大事だと思っ

伊藤 現実的にはどれぐらいのことができるか、ということですか。

海原 そうです。それが全ての出発点だと思うんです。ところがそれが、今でもできていないんじゃないですか。

伊藤 それからもうずいぶん時間が経っていますけれどね。

佐道 最初のところで、「日・米／交戦規則」の話が出ましたが、交戦規則はROEですね。これは戦闘状態に入る場合にどういうことが許されるかとか、非常に重要な問題ですね。先般のガイドラインの時にも、これすら今の日本の自衛隊にはないではないか、という話が出ました。しかし、三矢研究のあたりまでは、決める決めないは別にしても、こういう検討をしようということはしていたけれど、そのままずっと来てしまったということですか。

海原 そうでしょうね。私は今の現実知りません。しかし見たところ、どうもそういうことをやった形跡はないですね。

佐道 少なくとも海原先生が在籍しておられた時は、気配はなかったというか、やっていなかったんですね。

海原 ないですね。その話になりますと、今度は「中曽根構想」になるわけです。私が国防会議事務局に移ってから「中曽根構想」、四次防の時までの間のことを考えてみましても、おっしゃったような具体的なものはないですね。だいたい前にご説明したと思うんですが、航空幕僚監部が、高い金を払って万一の場合はどうなるかという研究をやるわけですね。ところがその条件として、「敵襲があっても、地上の通信施設、後方支援施設は破壊されない」と書いてあるんですよ。一体そんなことが考えられますか。どうやったらそういうことが可能なのか。そういうことで済ましているんです。それが私にはわからないと言っていますけれどね。

もう一つ例を言いますと、例えば北海道に敵が上陸して来る場合、

予め爆撃するわけですね。数カ所のところを全部合わせても、五百トンとか七百トンしか爆弾を落とさないと言うんですよ。それで済むのか、と言うんですけれどね。沖繩の例を見てみる、朝鮮はどうだったんだ、と言うと黙っちゃう。それで終わりですな。

だから私に言わせると、極めて非現実的な想定の下で、非現実的な図上演習をやっていることではないんです。一体それでいいのか、と言うと黙っちゃうんですね。しかし、自衛隊を辞めた六人の幹部が、民間人二人と一緒に出している『国防論』（一九七七年・国防研究会）を見ると、ソ連の数百機が日本に襲いかかると。全面縦深同時爆撃するんですよ。数百機ですよ。四百機、五百機、六百機の飛行機が攻めて来たら一体どうなるんですかと私が聞くと、黙っちゃう。そういう大事なことが全然できていない。

それから先の話で、四次防になるんですが、海上自衛隊は三カ月間戦うと言っている。陸上自衛隊は一カ月だと言う。なぜ違うんだと聞くと、海上自衛隊の方は二カ月余計ですが、それは事前のことを考えていると言うんですね。実際に攻撃が始まる前の二カ月は日本の周囲は海だから、この周囲で行動するというのが入るんですね。そこで何が起るんだと聞くと、何もありません。

こういうことを言い出すと切りがないんですが、一言で片づけると、非現実的な想定ではないんです。それで今でも来ているでしょうね。今のことは私は知りませんが、その後その方面が改善されたということは聞いていませんからね。

伊藤 さて、時間はどうでしょうか。ちょうど質問票の二ページが終わったような感じですので、残りを次回にお願いいたします。安保条約の延長問題ですね。そこからお願したいと思えます。先生もまだい

ろいろ語れないこともあるのかもしれませんが、多少歯切れの悪いところがありましたね（笑い）。

海原 もっと何を話せ、と言えばね。今度の日米安保条約も面白いんですね。これはどうですか。「三 米軍基地問題の展望」のコピーを示す」。とにかく日本を代表する人々ですからね。その人々がそういうものを書いたということですね。それから有事駐留の問題もありますからね。これは錚々たる人がこういうものを出しているんです。これが民社党のいわゆる有事駐留論の根拠です。見てください。久住忠男、神谷不二、岸田純之助、高坂正堯、錚々たる日本を代表する人々ですよ。こういう人たちがこういうものを出している。これはご存知ですか。要するに有事駐留を説いている。

佐道 この資料はどこからお取りになったんですか。

伊藤 これは拙著『私の国防白書』の資料編です。

伊藤 この元になっている安全保障問題研究会の資料は公になっているわけですか。

海原 さあ、それは知りませんね。

伊藤 この提言だけを先生は問題にしているわけですか。

海原 そうです。

伊藤 この研究会自体は、どういう性格のものなんですか。

海原 その経緯は私は調べませんでしたかね。

河野 「沖縄問題懇談会」の後身と言いますか、「沖懇」の中に基地問題研究会という小委員会ができて、その延長ですか。

海原 わかりません。特に政府は、基地問題研究会とかこういうものを作るのが好きなんです。少し差し障りがあるかもしれませんが、末次一郎さんなんか出ているでしょう。こういう人は結構政治的に

動く人なんです。また名前を見れば錚々たる人ですからね。政府はこういう研究グループをブレイクと称して使うわけです。それがどの程度の背景と言いますか、重さ、権威をもって答申したのか。また受け取った方がどういうふうに見えるか、これはわかりませんね。

伊藤 この顔ぶれを見ると、みんな「沖懇」ですね。沖縄問題で一番活躍した人たちですね。

海原 沖縄問題でどう活躍したか知らないんですけどね。

伊藤 若泉敬さんとか、末次さんとか、みんなそうですね。

河野 アメリカとシンポジウムをして、アメリカ側の懐に入った人たちのようですね。

海原 私は外の人とは接触しませんでしたのでね。こういう人と接触していたらおかしくなりますよ。

河野 先生がおっしゃる非現実的な話になっていくんでしょうか。

海原 はい。

伊藤 でも、こういう人たちを現実的にしなければいけないんじゃないんですか。

海原 それはできませんね。不可能ですよ。僕は高坂正堯君はよく知っているんです。しかし彼の『海洋国家日本の構想』とかあるでしょう。あれを見ると、どうして彼がこんなことを言うのかと思うんですけれどね。

佐道 いつかそれをお聞きしたいと思つていたんですけど。

伊藤 それはこの次の課題にしておきましょう。

海原 それから、石原さんのものはお渡ししましたか。「非核の神話は消えた」に対して、私が反論しているんです。「非核は神話ではない」と。石原慎太郎氏は、核ミサイルを備えた原子力潜水艦を持ってと

海原 日本大使館が、事実はどうでしたというのを送っているんです。こういうことが多いんですよ。

伊藤 まあ、あまり人のことは言えないけれど。

海原 これは番外ですが、私は諦めているんです。これは去年ロータリークラブに行つて話をしたんですね「東京西南ロータリークラブ・ウィークリーレポート、平成十一年九月二十九日号のコピーを示す」。私はロータリークラブの人はみんな知識人だと思つてはいるんですね。だから冒頭に言つたように、読売新聞は一千万部出ていますから、半分ぐらいの人は見ていると思つたんです。これをご覧になつた方はおられますか、と聞いたたら、誰もいないんです。いかにおしやべりをして駄目かということの具体的な証拠ですね。

伊藤 読まない人にはしゃべる以外にはないですよ。そんなにみんな勉強していませんよ。

海原 詮無い事ですが、やつております。

伊藤 お元氣なうちは頑張ってください。

海原 ここにこの前の速記録があるんですが、佐道さんが「敵討ち」と言っているんですよ。「先生の関東軍のご経験以来、参謀は現場を知らない。その敵討ちをされているような感じですね」と。敵討ちということはないですけど、そういう体験を踏まえているんですね。

伊藤 でも、やつぱりそういうニュアンスがありますよ(笑い)。

海原 あります。敵討ちですか。怖いと思うんですね。私しか残念ながら言う人がいないものですかね。

伊藤 それはしかし日本の自衛隊に固有なものですかね。

海原 わかりません。それは伊藤先生に伺いたいですよ。

伊藤 外国の軍隊はそんなにきちんとした立派なものなのかどうかと

いうのは、僕にもよくわかりませんが、実際に戦闘を比較的最近にやつた軍隊は、いろいろ経験を持っていると思えますね。日本は全然戦闘していないでしょう。戦闘に近い場面にも行っていないわけですね。参戦武官というのは昔よく出ていましたが、今は実際に戦争があつた場合に、自衛隊は参戦武官を出していますか。

海原 いませんね。

伊藤 戦闘を見なければ……。

海原 そういうことをすると世間が騒ぐから、ということですよ。

伊藤 それは海原防衛局長なり官房長だったら、やると思いませんか。

海原 私ならやらせませぬ。私は事を好んだ方なんですから。

伊藤 いや、自分で行くと言いかもしれない(笑い)。

海原 それは言うかもしれないませぬ。それから冒頭に言いましたが、岡田さんのおかしな点。これも一つの例ですが、お渡ししておきましたよ「予算委員会議事録、昭和四十年三月十二日・参議院」のコピーを示す。赤で引いたところです。配つたものどこが違うかというのを例に書いておいたんです。「議事録を読む」「岡田委員の配布された資料の中で……」。

伊藤 「引き取つて読む」「情勢が切迫してまいります」と在日米軍が自衛隊を指揮する、こういうような表現になっております。

海原 岡田さんの配つたものは、そういうふうになっています。

そんなことは書いてないんです。

伊藤 「これは、そういうことは全然ございません。原文は、もともと、これは有事の場合のアメリカの陸海空の軍隊についての指揮権のことでございます、原文には、これは在日米軍司令官と、司令官という言葉が入っているわけです」。

海原 要するに、在日米軍司令官がやるということを言っているんですね。自衛隊が司令を受けるわけではないんです。

河野 在日米軍司令官が、在日米軍を司令するということですね。

海原 そこにちよつと書いているんです。その辺が岡田さんのずるいというか、うまいところですね。そんなことで、例を挙げたら切りがありませんけれどね。

これは前にお渡ししましたかね「『朝雲新聞』平成六年十一月三日「首相のシルクハット（特別寄稿）海原治」のコピーを示す」。

私は、社会党の人と付き合つたと申し上げましたが、この時「昭和三十八年八月社会党議員団のF104等視察の時」は、北海道をお供したでしょう。この時、三輪（良雄）君が官房長で来ていたんですね。ところが三輪君が言ったことは、「私は今まで付き合つたことがない。誰も知らん。だから本来なら官房長がご案内するんだけど、君、防衛局長で行ってくれるか」と言うので、私が喜んで、ということで行つたんですね。そんな経緯もあるわけです。

三輪さんというのは私は昔から知っていました、「柏村一家」と言われて、柏村、三輪、海原の三人は仲が良かったんです。三輪さんの同期に新井（裕）というのがいたんです。昭和十二年組です。私は、柏村さんは三輪と新井とを分けると思つたんですね。一人が警察庁長官、一人が警視總監。そう分けると思つていたんですが、三輪を防衛庁に送り込んできたわけです。その時に私どもの先輩と同期が、「今度、三輪が防衛庁に行く。それはお前が出世する邪魔になるけれど、仲がいいようだから勘弁しろ」なんていうことで、わざわざ私のところに来たんですね。そんなことで、長く付き合つたんですけれど。

これが例の判断のものです「手書きの作戦解析のコピーを示す（資

料7）。敵襲を受けても、地上の被害は考慮しないと。そんなことはあり得ますか、日本を攻撃して。それがわが「空軍」の研究の文書です。昔の海軍兵学校と同じですな。

佐道 有事の際は、「海」は三ヵ月、「陸」はひと月、「空」は何時間なんですかね。そんな単位でしょう（笑い）。

海原 笑い事で済んでいる間はいいんですけれどね。

伊藤 いや、ありがとうございます。また次回をよろしく願います。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー
第17回

開催日：2000年3月14日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 17 回 質問項目

今回は、官房長時代のお話を中心に伺いたいと思います。

- ① 1965 年頃から、日米安保条約の 70 年期限切れ問題に関し、自動延長問題や条約期限問題等、様々な議論が出てきました。いわゆる 70 年問題について、政党、あるいは防衛庁、外務省における議論、考え方などについてお願いします。
- ② 上の問題とも関連しますが、66 年頃、野党では民社党を中心に、安保全面改定と常時駐留廃止、貸与基地原則撤廃という主張が出ています。自民党でも中曽根氏が同様の主張をするわけですが、これは安保条約の基本に触れる重要な問題と思いますが、当時の議論の状況等をお願いします。
- ③ この当時、三次防がまとまる過程で、防衛装備品の国産問題が起きています。特に、松野長官はホーク、ナイキも国産化するため米国へ技術調査団を派遣すると述べていますが（朝日 66 年 4 月 14 日）、当時どの程度まで国産化を考えていたのでしょうか。
- ④ 兵器生産の関連で質問すると、佐藤総理は共産圏、紛争当事国、国連で決議した国等へは兵器輸出を慎んでいると衆議院予算委員会で答弁しています（朝日 67 年 4 月 22 日）。いわゆる武器輸出三原則ですが、三次防で兵器国産化の話が進んでいるわけですから、そうすると購入する兵器は高騰してしまいます（現にいま、大変高額の兵器を購入しています）。この点について、防衛庁として何か議論はあったのでしょうか。
- ⑤ 66 年ごろから、アメリカの原子力空母エンタープライズの寄港問題が持ち上がります。66 年 9 月に申し入れがあり、それを延期してもらって、実際の入港は 68 年 1 月でした。この問題をめぐって、外務省とのやりとりその他、ご記憶のことはありますか。
- ⑥ 防衛庁政策の PR 映画『日米安全保障体制』が『科学の驚異』とタイトルを変えて、全国の松竹系映画館で子供向け怪獣映画と一緒に封切られるという記事があります（毎日 67 年 3 月 4 日夕刊）。実際行われたとしたら、反響はいかがでしたか。マスコミ一般の風潮は防衛庁の行うことには厳しかった時期だと思いますが、子供に見せるということで反発等はありませんでしたか。
- ⑦ 67 年 7 月、官房長から国防会議事務局長に転出されます。その時のことについては、ご著書『日本防衛体制の内幕』にも記述がありますが、先生のご経歴の流れとして重要な点ですので、その時のことを改めてお話し下さい。

海原清平の「二十五日会」

海原 遅れて済みません。

伊藤 大学の授業も大体十分遅れて、十分早く終わるといいんです。一時間五分だと長すぎるんですよ。休憩の時間がないんです。間を空けないと、移動の時間もないんです。

海原 社会に出るから私が教えられましたのは、「宴会に呼ばれた時は遅れて行け、人を呼んでいる時は十分早く行け」ということなんです。何かな、と思ったんですけれど、「お客で行った時にきちんとして、揃っていないことがある」と言うんですね。だから呼ばれている時は、五分か十分遅れて行って、やあやあ済みません、と言う。人を呼んだ時には、必ず時間前に行く。

伊藤 役人生活の中では呼んだり呼ばれたりがあると思いますね。

海原 これは「三矢」の資料です。「三矢研究問題の主要新聞報道および論調等資料(その一)」という小冊子。「その一」となっていますが、「その二」はないんです。

佐道 これはいい資料ですね。

海原 ご参考になるかも知れません。その頃は大騒ぎでしたから。

伊藤 今、せっかく宴会の話が出ましたので、ちよつとお聞きしますが、料理屋はどういうところに行きますか。

海原 料亭ですか。私がいましたのは、演舞場のすぐ前の小さな料亭でした。女将さんは死にました。『本如月』というのがありました

が、そのすぐそばの『新春』という小料理屋です。その名前は私が付けたんです。銀座に『新富寿司』というのがありますね。古い人はみんな知っています。その女将さんなんです。それが新橋で小料理屋をやるからと言って、私に名前を付けろと言うから、『新春』とした。それは新橋の「新」と、女将さんの名前が「春」というので、その二つを付けたんですね。これは「にいはる」というのも難しいから、「しんはる」とした。そこをもつぱら使っていましたね。

伊藤 やつぱり重箱読みなんだな。「しんしゅん」と読みそうですが(笑い)。

海原 ちょうど演舞場のすぐ前です。大体、そこが私の巣でした。人を呼ぶにも、呼ばれるにも。

伊藤 呼ばれる時もそうなんですか。

海原 呼ばれる時は、どこがいいですかと言うから、目立たないところになりますね。くどい話になりますが、昔ですと、いろいろなところがあるわけです。柳橋もあればね。そういう時にどこで会うかが問題なんです。

伊藤 どういうふうの問題なんですか。

海原 いろいろと情報が伝わりますから。一番いい例を言いますと、今の横路さんの親父さんと非常に仲良かったというか、意気投合したんですね。その秘書が辻君と言うんです。この三人が会うのは、横路さんの巣なんです、芳町ですね。

河野 人形町の方ですね。

海原 そうです。あの辺ですね。それぞれそういう巣を持っているわけです。

伊藤 そうすると『新春』は先生の巣だったわけですか。

海原 そうです。この話をすると、また二、三十分かかりますよ（笑い）。『新富寿司』というところ、昔のお寿司屋さんはみんな知っています。高いし、うるさいですね。例えばマグロなんかは、『新富』の親爺が行って買うのが一番いいところなんです。あとを、他の寿司屋が買うとかね。こんな話をし始めると……。

伊藤 また暇な時にゆつくりと伺いましょう。

海原 速記者がない時ですね。

伊藤 いや、そういう話を速記に残さないと、将来の人はわからないですよ。

海原 わかつてもしようがないですよ。

伊藤 いやいや、そうじゃないんです。例えば誰かの日記があるでしょう。どういう料亭に行っているかというイメージが全然ないわけですよ。

海原 それはそうでしょうね。しかし、この十年で変わりましたね。

例えば、近くまた新橋で「東をどり」が始まりますよ。昔は「東をどり」を見に全国から来ましたよ。金沢にしろ、京都にしろ、各地の芸者方が大勢見に来るわけですね。夜と昼が違っていました。大変なものだった。今はせいぜい三日ももたないでしょう。「新橋東をどり」というのは、京都の祇園祭より有名だったぐらいです。世の中変わりましたね。

それもこれも、カラオケができてから駄目なんです。あれは安易で、楽ですからね。私は、今に芸者はいなくなるぞ、と言っていたんですがね。いま新橋は灯が消えたようなものですね。まず会社同士の宴会がなくなつたでしょう。それからお役人を接待することがなくなつたでしょう。これがなくなつたらもう駄目ですよ。

伊藤 「官官接待」もありませぬ（笑い）。

海原 私は主義としまして、昔の内務省ですが、絶対に呼ばれたら呼び返せ、ということにしています。できれば、その晩の二次会でもいい、翌日でもいい。それから相手は金持ちなんだから豪華な接待を受けても、こっちは分に應じてやれと。絶対にただ酒を飲むな、と教えられましたよ、昭和十四年に内務省に入った時に。この間も警察の不祥事のようなものが出ていましたが、大蔵省の税務署長とか、警察の署長なんていうのは、若くして大学を出たぐらいで行って、地方では名士ですからね。いい気になってご馳走になる。それは絶対に悪の始まりである、と言われましたね。とことん言われました。ああなるほどな、と思いましたね。その時に、ただ酒は飲むな、ただのお酒は絶対に飲むな。ご馳走になったら必ずお返しをしろ。規模は十分の一でもいいから、とにかくお返しをしろ。これは嫌というほど教えられましたね。

伊藤 規模は十分の一でもいいわけですか。

海原 そうなんですよ。

伊藤 ああ、それは大変いい教えですね（笑い）。

佐道 対等だと思つて、できませんからね。

海原 向こうは楽しいんですから、それで。

佐道 先生が行かれた『新春』も、たくさんの方が入るお座敷とかがあるんですね。

海原 もちろんあるんです。元は銀座四丁目で、その前は新橋で、寿司屋では有名な親爺さんが握っていたんですね。それが料理屋をやりたいということ、たまたま売りが出たので買った。私に「海原さん、こういう名前にしようか」ということで、じゃあ俺が考えてみよう

言って一晩考えて、「どうだ、『新春』というのは」と言っただけです。「これは『しんはる』と読ませるんだ。新橋の『新』と、お春さんの『春』だ。これはいい名前だと思う」と言ったら、それがいいということになった。そこを私はもっぱら使っていましたね。

その話になりますと、海原清平が盛んでしたね。院外団の団長もしましたし、いろいろな関係がありますね。伯父は私たち若い連中を集めて話を聞くのが好きなんです。それは、前もちょっとお話ししましたかな。共立学園の父兄会の理事長とか会長をやっているでしょう。だから時々しゃべられるんですね。その材料を仕込むんですね。

伊藤 そういう関係ですか。

海原 私が伯父に言ったのは、「伯父さん、一つ教えてあげる。ドイツ語では教育はエルツィーエンと言う。これは語源的に言うと、引っぱり出すということだ。日本では教育というのは授けると言う。これはほとんどない。ドイツ語のエルツィーエンという言葉がいい。教師というものは、生徒の持っているいいところを引っ張り出す。それが教師の本来の使命だ」ということです。「ああ、それはいい。治、それはもらうぞ」と言って、さっそくそれをやったらいいですね。ああ、「清平」先生はいいことを言うところになったんでしよう(笑い)。

伊藤 伯父さんは、それをどういうところでやるんですか。

海原 それも、その『新春』です。そこで、毎月二十五日に必ず会をやるんです。「二十五日会」と言いましたね。それには、亡くなりませんが柏村信雄という警察庁長官、岸さんの時にアイクの訪日問題でバタバタした時にきちんと物を言った人ですが、この柏村さんを主賓にして、あと若い連中を入れて、お客を呼ぶわけです。私と後藤田君とかが、誰を呼ぼう、彼を呼ぼうと言うわけです。

伊藤 じゃあ幹事役なんですか。

海原 伯父が全部出すものだからね。「海原会」とも言っていますが、伯父が「二十五日会」というのを持っていました。これはもともと、私が警察から保安庁に替わったでしょう。その時に、伯父にしてみれば、「治をよろしく」ということもあるわけです。要は人を集めて、いろいろ話を聴きたいんですね。そういうことが好きだった。だから木村篤太郎さんが来るとか、近藤鶴代さんが来るとか、必ずお客さんが来るんです。

そのとき中曽根なんかは、十六年「内務省入省」だから、末座に座っている。私や後藤田君は十四年でしょう。十四年がある、十五年がある、中曽根康弘さんなんかは末座ですよ。例の「青雲塾」というのを作った頃ですよ。だから「青雲塾」の歌を歌ったりしましたね。必ず、一人一芸をやらんといかんです。柏村さんは詩吟をやるわけです。歌でも詩吟でも何でもいということ、決まっているわけです。後藤田君は「磯節」をやるわけです。高等学校で水戸にいて習ったんですね。

ところが、話が飛びますが、今の新聞記者は後藤田君が歌うということを知らないですね。あいつは水戸で修行をしたんです。ちゃんと時間も三分三十秒なんです。だから私が若い新聞記者に、「後藤田と酒を飲んで歌う」と言ったら、「えっ、後藤田先生歌いますか」と言うから、「それもわからんじゃあ、記事取れないよ」と言うんです。が、そういう会があったんです。これは伯父が死ぬまでやっています。

伊藤 佐藤栄作さんの日記を見ますと、「木曜会」だとか、「月曜会」だとかたくさんあるでしょう。やはり先生もそういう定期的な

会はありませんか。

海原 いや、その伯父の会だけです。これは「伯父が」死ぬ直前までやっていたからね。そういうことですから、別に何の色も付いていないわけです。われわれの仲間でワーワー騒ぐ会ですから。それ以外の人にとっては、あまりいい気がしませんかね。

それで伯父が死んだ後ですが、これには証人もいます。その頃の仲居頭がいまおでん屋をやっていますが、中曽根康弘君が「あの会をそのまま譲り受けた」と言っただけです。そうしたらその女将さんが、「それは駄目です。あの会は海原先生の会です。あなたがやりたいのなら、あなたは改めてやりなさい」と言った。そういうこともあるんですよ。昔のことですけどね。後藤田も来るし、歌も歌うし、踊りもやりますしね。結構面白い会でした。毎月必ず二十五日、二十五日が休みの時は二十六日。

伊藤 海原先生は何をおやりになるんですか。

海原 私は「開会の辞」をやるんです。

伊藤 「開会の辞」ですか。それは芸なんですか。

海原 「よさこい」です。私は高知に一時いましたね。県庁にいた。開会の辞は「唄いなされよ、お唄いなされ、唄で御器量は下がりやせぬ」と歌ったんです。それは「よさこい節」です。私はその「開会の辞」をやるんです。そして宴半ばにして、伯父が先に帰るわけです。歳ですからね。そうすると警察の先輩が、喇叭を吹くという感じで、昔の喇叭の調子で伯父を送るわけです（笑い）。まあ楽しい時代でした。今日はいきなりこんな話ですが（笑い）。

伊藤 いや、こういう話は面白いんですよ。お聞きしておかないとわからないんですよ。

海原 おわかりにならないでしょうね。後から活字で読んでも、新聞記者諸君もわからないですよ。毎回十四、五人集まるわけですから、相当な金がかかるけれど、伯父が出していた。院外団の団長をやっていたから、そっちの方からの金があるんだろうと思います。どうなっているのかわかりませんが、支払いは伯父の海原清平がやっていた。そういう会ですから、別に何の利益の関係もないですからね。

伊藤 中曽根さんが引き継ぐんじゃないかと、甥が引き継いで、「海原会」で、ボンとお金を出せば（笑い）。

海原 私にはそんな金がないですからね（笑い）。そういう意味では、いい時代でした。

さて、今日は、先月山形新聞に書いたものをコピーして来ました「山形新聞・二〇〇〇年二月八日「直言・防衛力世界四位の誤解」の記事コピー」。山形新聞には、頼まれて時々書くんです。読んでいただけばわかりますが、防衛費をドルで換算して、世界第何位だと書いているんです。それはおかしいと思いますので、念のために書いておいた。

それから、これは「正論」です。「産経新聞・一九八九年九月十九日「正論・軍事力で誤認の土井構想」の記事コピー」。日本人はすぐ防衛費で軍事力を考えるんですが、とんでもないことなんです。それを山形新聞に引用したんですが、土井構想では「世界第三位の軍事力を持った自衛隊」と言うわけですね。それを参議院議員の小山一平さんが、参議院の本会議で言うわけです。今や自衛隊は世界第三位の軍事力である、と。とんでもないことなんです。それが、また今度出る怖れがあるんです。

これは『ジャパントタイムズ』ですが、その書評欄で、参考になるからと言って紹介してありますからね。おそらくこんなことを言うのは

私しかないと思うんです。私は、しょうがない、こういう道に入ったものですから、念のために、ということを書いてあるわけです。本当にこれが困るんですね。昔は世界の五大国の一つだとか、三大強国の一つであるとかいうことで、日本はとんでもないことをやった。今や世界第三位というのが定着しそうですね。

しかし中国の軍事力と比べて、日本がどうして上なんですかね。防衛費なんて、中国の場合は、ご存知のように現物支給もありますし、軍隊が産業をやっていますしね。兵隊にしても、ロシアの兵隊の給料と日本とでは全然違いますからね。ところが朝日新聞は、この世界第三位というのを書くんです。それが抜けませんね。後でまた言いますが、朝日というのはどうしてあんな新聞になりましたかね。

伊藤 いや、前からそうです。

海原 しかし、この前亡くなった社長がいるでしょう。松下（宗之）君。彼は昔から知っているものですからね。彼が重役になり社長になったら変わるかと思ったら、全然変わりませんね。本当に困ったものだと思うんですけれどね。

伊藤 人じゃなくて組織ですから。

海原 今日もまた朝日新聞の悪口を言いますが、悪口を言うほど彼らは力があるんですね。それが困ったことなんです。力がなければ問題にしませんけれどね。それに、朝日の主張をサポートするのが、学術会議関係の先生方なんですよ。頑張ってくださいよ、先生。

伊藤 僕は学術会議は関係ないんですよ。

海原 それじゃあいけないんですよ。史学会でしょう。

佐道 伊藤先生は孤塁を守ってこられたんです。

海原 私もどうしてかと思うんですけれどね。日本人というのは、学

者先生の言うことは百十点ぐらい上げて信用しますね。

伊藤 いや、それはお好みのことを言うからですよ。

自動延長か固定延長か

— 安保改定問題 —

海原 それでは本題に入りましょう。今日は、日米安保条約の改定問題が最初に出てきますが、この前、沖縄の核の問題を言いましたね。私が角さんのところに行って、「沖縄に核は要らない」と言ったことを、読売の渡邊さんが書きました。それで、この「無学歴宰相のブレーションは誰か」というのを持って来ましたので、それを渡しておきますよ。

伊藤 予め一部送っていたら、こちらでコピーしておきますよ。

海原 私も、この会があるために整理しなければいけませんからね。

しかし、全部お話しすると時間がなくなっちゃう。それから、土井たか子さんの話はしませんでしたか。いかに日本人の英語が通用しないか、という話ですね。

河野 伺いましたね。

海原 これも後で読んでいただくとわかりますが「『新潮45』・昭和六十二年十一月号「私の日本人・気の毒な気の毒な土井たか子さん」（ウィリアム・ホートン）の記事」、全然通用しなかった。私も、どうして土井さんがアメリカに行って、英語でやったのかわからないんです。通じると思っているんでしょうね。だから、そばにスタッフ

が付いていて、おやめなさい、と言ってあげればいいんですけれどね。これをお読みください、気の毒ですよ。まさに「気の毒な気の毒な土井たか子さん」。そういうところがあると思うんですね。

防衛力世界第三位なんというのも、そうだと思うんです。社会党の委員長が言うわけでしょう。下がおかしいんですね。いかに社会党のスタッフが良くないかということなんです。これはまた、それを立証する事実があるんですが、それは別にしましてね。朝日も、二、三の人がギャーギャー言うのと、そういう人間が引き抜かれるんですかね。日本人の体質には、そういうところがありますけれどね。

伊藤 第三位とか第四位とか言っているのは、防衛力が大きすぎる、削減しろ、ということにつながるわけでしょう。そのためにワーツと言っているわけですから。

海原 バレる嘘を言つては駄目ですよ。私はバレない嘘を言えと（笑い）。

伊藤 バレる人は少ししかいないんですよ（笑い）。

海原 本当はそうかも知れませんか。

伊藤 みんな、ああそういうものか、と思うわけです。自衛隊はすごいな、お金がいっぱいあるんだな、ということになるわけでしょう。

海原 私の本なんか買って読んでくれませんか。ソ連の兵隊がいくらもらっているかということですね。私一人でやっているんですが、あと誰もいませんからね。

伊藤 やはり仲間を作らなければいけませんね。

海原 仲間なんかいませんね。私が物が言えますのは、昔の帝国陸軍における体験があるし、自衛隊の中の体験があるでしょう。何度も同じことを言いますが、「赤城構想」をご破算にしたり、「中曽根構想」

をご破算にしたり。それで、物を書いていますし、言っていますからね。本も今まで八冊出しました。

私はもう、あいつは、となっちゃうんです。あれはああいう男だ、何を言つても駄目だということになるんです。誰か後を継いでくれると思つたんですが、私の後を継いでくれると思つたのが二人とも死にました。久保（卓也）君も死にましたし、有吉（久雄）も死にました。両方とも十八年「内務省入省」ですけれど。いま残っているのが伊藤圭一君という、今日のお話に関連する男ですが、元特攻隊の生き残りですけれどね。その伊藤圭一君が今日お話しする映画を作ってくれました。

さてそこで、「無学歴宰相のブレインは誰か」ですが、この前、私と角さんの因縁を聞かれましたね。これに書いておきましたが、私が防衛局長になってからですね、向こうが「私を」注目し始めたのは。ただしその前に、角さんが自分の政策を出しましたね。『日本列島改造論』ですが、あれを書いたのは、この前も申しましたが、二人の秘書、麓君と早坂君ですね。この麓、早坂の両秘書は私のところに時々来ていました。それで「海原さん、これはどうだ、ああだ」ということで、私と接触していることは、角さんももちろん知っていたわけでしょう。

もう一つは、これは極めてプライベートな面ですが、田中角さんは、小佐野賢治君と非常に仲が良かったわけです。小佐野賢治は私と同年なんです。昔から知っているわけです。その関係がありますから、小佐野と田中との話の間で、私の名前が出ておつたことは間違いないことです。ただし、役人として、防衛庁の人間としての海原が、田中さんとのつながりを持つようになるのは、やはり私が政府委員になって

からですね。防衛局長になってからです。否でも応でも国会でやられますからね。

したがって、ずっと後になるんですが、後藤田君の選挙の時に私が選挙資金を、佐藤昭さん、「越山会の女王」のところにもらいに行くわけです。その時も佐藤さんが、「田中が信頼している役人は、後藤田さんと秦野さんと、あなたです」と言うんですからね。そういうことで、前から、ああ、ああいうのがおるなということを知っていたんだと思いますけれど。しかし具体的には、この沖縄問題の核のことで、角さんのところに話に行つて、それ以来ということでしょうね。

その前に、「無学歴宰相のブレーンは誰か」という記事では、私についてはこれだけしか書いてありません。この前も申しましたように、下田さんが新聞で沖縄に核は必要だということを言ったわけです。それを受けて、麓君と早坂君が、僕のところに来たということになるわけですね。それで、私がしゃべったことを田中さんは理解してくれて、「わかった」ということで、朝日新聞に行つてしゃべった。それで変わるわけです。

それまでは佐藤栄作さん以下、全部沖縄に核が必要だという考え方で統一されていたんですね。何となれば、源田さんなんか、核は絶対に必要なんだとしゃべっているわけですから。それが私が角さんに話をし、こういうことですよと言いましたら、「そうか」ということになった。話が前後しましたが、その時に麓君と早坂君は、一時間話してくれと言つて来たわけです。しかし私は、「五十分にしてくれ」と言つたんです。「どうしてか」と言うから、「後の十分、俺が言いたいことがある」と言つたわけです。これはこの間申し上げませんでしたね。そこで、五十分で沖縄の核についてのお話を、写真も持

つて行きました、これが何々ですということで見せた。

その後の十分で私がお話したことです。が、「いま自民党は、アメリカの政党、民主党と共和党、この二大政党とどういうコンタクトを持っているのか」と聞いたわけです。「ない」と言うんですね。それは駄目だと言つたんです。「外交は外務省を通じてやるものであるけれど、しかしアメリカの議会というのは大変な権限があるんだ、力があるんだから、そのアメリカの議会の然るべき人間と、わが日本を代表する自民党の然るべき人間が絶えず接触し、電話で話ができるようにしなければいかん。通訳を入れてもいいから、そういうことをしなければいかんじゃないか」と言つたんです。「角さん、ひとつそのための事務局を作りなさい。何なら私がその局長になつてもいい」と言つたんです。それが後の十分間の話なんです。これは今まで誰にも話しませんでした。

伊藤 それは「わかった」とは言わなかつたんですか。

海原 「わかった」とは言わない。「うん」でしたね(笑い)。「あなた方は、外交は外務省がやると思っている。それも大事なだけけれど、それだけではなしに、自民党としてアメリカの二大政党の立つた人間とのパーソン・トゥ・パーソンの人間関係が必要だと私は思う。どうですか」と言つたら、「それはそうだ」と言う。「何かありますか、あなたは誰かを知っていますか」と言つたら、「いや知らん」と言う。「たまたま英語のできるような人が個人的に連絡を取っているだけでは駄目だ、党としてそういうチャネルが必要だと思う。そのための組織を作りなさい」と言つたんです。それが一時間のうちの十分間だったんです。これはなかなか時間がかかりますし、誰を選ぶかということになると、これまた非常に難しくなるわけです。「だから事

務局長の人選に困るだろう、それなら私がやってもいいですよ」とま
で言っただけです。

それで、後で後藤田君の選挙資金をもらいに行った時に、佐藤昭さ
んから、「あなたは事務局長をやってもいいと言いましたよね」と言
われたんですね。しかし、事務局ができないじゃないかと。田中角栄
の事務局じゃない。自民党として外交問題をやるための事務局だから、
何か考えなければ駄目だ、と言っただけですね。そんな経緯です。
それ以外はありませぬ。

たまたま渡邊恒雄さんが書いたけれど、これはどこから調べたんで
すかね。「無学歴宰相のブレーンは誰か」と書いてくれたものですか
ら、これはあちこちで使われました。私は使われたのを見てから調べ
たんですね。なかなか面白いですよ、この『中央公論』は。お
調べになったら面白いと思います。

今日の主題は、まず日米安保体制のことですね。これもどの程度ま
でお話をしようかとちよつと困っただけですが、順番に行きます。「安
保条約に」期限を付けるか、いつでも一年でやめられるようにするか
という問題なんですね。自民党の中でも分かれたんです。ちゃんと引
用されていますが、期限付きでやるということが案として決まりかか
ったんですね。

伊藤 期限付きというのは、五年とか十年とかですね。

海原 はい。その理由が面白いんです。私も自民党に呼ばれて、
自分の意見を言っただけです。前にもお話ししましたが、この日米安
全保障条約をどうするかという問題になってくると、アメリカを縛っ
ておかないと困ると言うんですね。五年とか十年ということでアメリ
カを縛っておきたい。というのは、ひよつとすると社会党政権ができ

るかもしれない。そうするとアメリカの方からやめた、と言うかもし
れない。それじゃあ困る、という議論が多かったですね。私は笑った
んです。「これは外交関係で、アメリカという国と日本という国の関
係だから、アメリカという国の国民が、日本人は信用できないと思っ
たら、そこで終わりですよ。大体、条約なんていうのは、事情変更の
原則がある。これは国際的に認められている考え方です。その条約が
できるに至った、その時の根本的な事情が変わった場合には、事情変
更の原則ということで、そこで終わりになる。これは慣習法的にある
んだ。だから日本に社会党政権ができて、その社会党政権がアメリカ
との同盟関係は嫌だと言ったら、向こうは、あつそうか、となるん
です。当然じゃないですか。それをあなた方は、社会党政権ができた
困るから、その時に備えてアメリカを縛っておく、拘束すると言うの
はおかしい」と言っただけです。そんな甘つちよろい考え方では、絶対
に国としての基本的な方針をどうするかということは言えないはずだ
と、私は説明しました。どうしてこんなに脳天気と言いますか、人が
好いかと思いましたがね。そういうように、社会党政権になったら困
るから、アメリカを縛っておきたいと。これが固定延長なんです。

同時に外野席で、期限の制限がないと、年がら年中、安保廃棄の運
動が起こるということを、特に「海」の連中が言っておったですね。

安保廃棄の運動が日常茶飯事になる。だから期限を付けた延長にしな
いといけない、ということですね。当時の海空技術懇談会という、旧
海軍軍人の団体がそういう主張をしておりましたね。要するに、安保
廃棄の運動が日常茶飯事になって、年がら年中デモが横行して、これ
に対して政府は応接にいとまがなくなる、それでは困るということを、
言うんですね。それがこれです「野村No.608」安保条約改定の提案」

(昭和四十一年四月十五日) 水交会内「土曜会」という資料を示す。

伊藤 水交会ですね。

海原 これは水交会という、海軍の団体の中にできています。福留(繁)さんが出ているでしょう。要するに軍事知識を普及させるための団体なんです。これは中を見ていただくと、いま私が言ったようなことが書いてある。

伊藤 この「野村ナンバー」は何でしょう。

海原 それはずっと出しているんです。野村大将の提唱で始まった団体なんです。例えば、これは安保条約の問題ですが、核装備をしろとか、たくさん出しているんです。

伊藤 いろいろな提案をしているわけですね。

海原 先生、ご存知ないですか。これはいっぱいあるわけです。

伊藤 これは六〇八番ですからね。

海原 だから調べたらいいと思います。これは水交会の中にあるわけですから。陸軍は偕行社ですね。こちらは水交会です。そういうもので、しきりに煽るわけです。そういう主張が自民党のタカ派、素心会というのがありましたね。増田甲子七さんが会長になっていた。

そこに話が行くわけです。後でお話ししますが、旧海軍の連中が焚きつけると、それを鸚鵡返しするように伝声管として伝えるのが、素心会の連中です。その連中は、絶対に期限を決めて延長説でいく、その間は大丈夫だ、と言うんですね。それに対して、当時の小坂(善太郎)外務大臣は私と同じで、自動延長ですね。「そんなことは無理だ。縛るといふ発想そのものがおかしい」と、しきりに言うわけです。ですから、私もそれと一緒にやってやったわけですね。

伊藤 先生のご意見はどういうことなんですか。

海原 自動延長です。

伊藤 期限なしで。

海原 これはお互いの信頼関係の問題だから、駄目だと思ったらそれで終わりだよ。国際関係はそういうものだ。この土曜会はそういうパンフレットをいっぱい出していますから。それは核装備をしろとか、安保の延長は期限付きでやれとか、そういうことを言っておった。

佐道 海空技術懇談会との直接のつながりはないのですか。

海原 直接のつながりはないんですが、気脈を通じていますね。ですから、同じ穴の貉(むじな)というのがあるでしょう。海空技術懇談会と言っていることは大体同じです。

佐道 おそらくメンバーも……。

海原 大部分ダブっているでしょうね。そういうものが結構いっぱい出たこと。それからそういう人たちが、政治家に誠意をこめて意見を具申しておったこと。政治家は、あの連中は一所懸命のことを考えて努力した連中だ、間違ったことを言うはずはないということ、そのまま鵜呑みにするわけです。こういうことから安保の固定延長論がバツとなるわけです。

佐道 ちょっと逸れますが、土曜会のようなものが出ている。自民党の安全保障部会とかに焚きつけるという言い方をされましたね。旧海軍系の人たち、それから海上自衛隊に流れて行ったような人たちが、自民党の安全保障政策についても、特に声が大きくて、影響を与えていたということですか。

海原 そう思いますね。それは自然の姿でしょうね。そういうことがありますから、国産問題の時には具体的に出てくるわけですね。後でちよっとお話ししますが、それをお話ししないことにはおわかりにな

らないと思います。後で国産の問題が出てくるでしょう。一番いい例を申しますと、海上幕僚長が辞めて、例えば川崎航空機の顧問になるわけですね。その人が、こういうものを造ろうじゃないかと。いま話題にしているものは、PXL、対潜哨戒機です。この国産が、一政党の方でも、旧海軍の方でも喧しくなってきた。その時にある人が仲介しまして、私と川崎航空機の幹部とを会わせて、十人ぐらいの会が新橋であつたんです。『本如月』というところで、私に対する一種の陳情ですね。何を言っているかと言うと、要するに對潜哨戒機を国産する、と言うんです。それで私が、「国産、国産というが、何を国産するんだ」と言つたんですね。この前も申し上げましたように、ウォータックという機械が来ないと、せっかくもらつたF104のミサイルが当たらなかつたという話があるでしょう。これが全てを代表するんですね。要するに、日本の技術は低いわけです。特にエレクトロニクスであるとか、ミサイルであるとか、それから對潜哨戒機であれば潜水艦を見つける技術とかですね。飛行機はできません。これを通称「ドンガラ」と言いますが、胴体はできるわけです。しかし、その中に積み込む機器、電波探知機であるとか、そういうものが日本ではできないんです。川崎航空機の幹部が言いました。「前の幕僚長の意見を聞いたら、それは当然国産だと言うので、わが社は木型を作つた」と言う。それはご自由でしょう。それは会社としての一種の賭けなんだから。それはドンガラは、飛行機はできません。飛行機はできるけれど、その中に入れる心臓、肺臓、胃その他内臓関係が大事なんだ、特に對潜哨戒機となれば。しかし海の上を飛んで、海の中に潜っている潜水艦の所在を発見するという方面の技術が日本にはゼロだ。それまで国産はできない。やりますか」と言つたら、やれない。要するに、

あなたは飛行機を造りたいという話だ。しかし、国産ということの内容が問題だ、と言つたんですよ。そうしたら黙っちゃいましたね。そういうことがあつた。

このことは誰にも今まで話しませんでしたけれどね。間に入った人が、川崎航空機の幹部と会つてくれと言うから、ああいいですよ、誰とでも会うから、と言つて会つた。そうしたら是非国産したいと言う。もう一度言いますが、前の幕僚長がちゃんと顧問で来ている。その顧問になつて幕僚長が、川崎の技術であれば造れるはずだと言つているというから、本当にそうですか、と聞いたんです。その幕僚長は、技術を知っているんですか。飛行機を造る技術はあるでしょう。大事なのは、中に積み込む関係の機器だ。それが日本ではゼロでしょう。それを国産するのなら、どこで国産するんですか、と聞いたら、返事がない。それが要するに、国産、国産と言う人々が、当然日本で国産できるはずだ、せねばならんと言うことの内容なんです。

後にも出てきますが、そういうことで歴代大臣は必ず業界からの陳情を受けて、国産と言う。その頂点に立つのが中曽根君ですよ。全然できやしない。というのが、当時のいわゆる国産運動の実態ですね。私は国産をやめろ、と言っているわけではないですよ。国産の内容をご存知ですか、と言っているわけです。この前も例のサイドワインダーをご説明したでしょう。サイドワインダーは完全にデッドコピーでした。それがアメリカの六倍の値段で、しかも能力が劣る。一体それをやりますかと、私は国防会議の場で言つたんですからね。田中総理大臣、中曽根通産大臣の前で。いやそれは駄目だ、となるわけでしょう。それが当時のいわゆる国産運動なんです。だから、これ以上は言いようがないんですが、国産、国産というムードは非常に高かつた。し

かし実態は何かと云って一歩踏み込むと、もう何も無い。どうも日本にはそういうところがありますね。

伊藤 まあ、日本人は、と云ってしまえるかどうかわかりませんが、どね。その当時はそうだったのかも知れませんが。

河野 ちょっと七〇年安保の問題に戻ってもよろしいですか。その期限問題で、固定延長の議論が非常に強かったという。しかも、そのバックにあったのが旧陸海軍だということがわかりましたが、小坂善太郎さんは自動延長論だったということですね。

海原 小坂さんは外務大臣ですね。

河野 小坂さんのような考え方は、当時は少数派だったわけですか。

海原 少数です。完全に少数です。

河野 しかし現実には、その少数派の自動延長論でまとまっていまいますね。そのあたりはどういうことだったんでしょうか。

海原 自民党内部の問題点はわかりませんが、自民党内部では素心会と申しましたが、いわゆるタカ派がいて、中心人物は増田甲子七でした。彼らは実態を知らないのに意気盛んなんですね。気概だけは盛んです。増田甲子七の考え方は、この前申しましたでしょう。自動延長か固定延長かというのは、期限の切れる年の国内情勢で、検事総長の判断によって決める、なんていうことを言ったんですからね。

河野 先生がご覧になっていて、それまで固定延長論が非常に強くて、自動延長は少数派だったという事態が変わったきっかけというのは、覚えていらっしゃいますか。

海原 それはわかります。それは私たちの話を聞かない間は、みんな固定延長だった。アメリカを縛れと言う。今のままで自民党がいつまでも天下を取っているわけではない。そのうちに社会党の力が伸びて

くる。そういう論文を出した人がいるでしょう。そうなると困る、と云うんです。アメリカの援助が必要だと。ところが日本に社会党政権ができれば、アメリカは日本を見限るだろう。これが第二の判断ですね。そうなるのは困るから、そうならないためにはアメリカを縛れ、ということになるわけです。発想が極めて子供じみていますね。

河野 それが先生たちのご意見が浸透して行って、自動延長に変わっていったのは、どういう「場」でしょうか。

海原 「場」というのは、私は何回も行っていますから。

河野 自民党の面々との間の非公開の場ですか。

海原 外交問題研究会とか、国防部会とか、両方の合同部会とか、向こうもいろいろな会があるわけです。

河野 向こうから、先生のご意見を聴きたいからどうぞ、という形でくるわけですか。

海原 来てください、というわけです。君は固定延長に反対だそうだけれど、なぜだ、というわけです。

河野 そういう時の議事録のようなものはないんですか。

海原 それは自民党の会ですからね。

河野 自民党が残しているかどうか、ということですね。

海原 そうですね。ないですね。

河野 でも先生に、これでいいですかという形でチェックを求められたりはしませんか。

海原 それはしません。

河野 しないんですか。

海原 彼らは、そんな書く能力なんてないですよ。

伊藤 記録しないんですかね。

海原 しないですね、ます。

河野 じゃあ、何となく「場」の雰囲気ですうなるんですね。

海原 それが自民党の政治家のやり口ですね。話をしながら、結論を出す。決まったところだけ残っているわけです。何月何日に、どういうことを決めたと。おっしゃる通り、その過程が私は大事だと思うんですが、過程はゼロですよ。

例えば別の例を言いますと、増原さんは憲法改正は六、七年経てばできると思っていたと、この間申し上げたでしょう。誰がそう言ったというわけではないんですよ。そういう人が集まって話をすると、仲間同士で話が弾むから、この憲法は改正せんといかんとか、やらんといかん、とか言う。じゃあ、どのぐらい時間がかかるだろう。まあ、このぐらいか、ということで終わりですね。それが日本の政治家の集まりの内容です。

河野 自動延長論の時には、いつも小坂善太郎さんのお名前が出るんですが、小坂さん以外にどういう方がいらっしやったか、ご記憶にございませぬか。

海原 それは、わかりませぬね。

河野 小坂さん以外にも外相経験者として、ということですね。

海原 もちろん、そうですね。

河野 では、人数的にはあまり多くない。

海原 ないですね。防衛庁の防衛局長である海原は、こういう考えだということ、小坂さんしてみれば「海原君来てくれ」ということになるわけですよ。

伊藤 外務省の中はどうですか。

海原 中は大丈夫です。外務省の中だけそうだと、外務大臣の下にな

っちゃうでしょう。私は防衛庁の防衛局長だから意味があるんですね。同じことをアメリカ局長であるとか、審議会が言っても駄目なんです。防衛庁の防衛局長である海原がこう言っているとみると、これは違うんです。

河野 当時の新聞論調ですと、いまおっしゃったような審議会などのバックには防衛庁がいるかのように書かれているんですね。

海原 それは勉強しない新聞記者がそう書くんですよ。新聞記者にもいろいろありますからね。

佐道 ただ、海原先生が自動延長だとおっしゃると、防衛庁内の異論を持つている人たちは言いにくいという面もありますね。

海原 それは言えはいんですよ（笑い）。誰も反論はありませんよ。

佐道 先生に面と向かつてはね。

海原 誰もいない。ゼロです。

河野 では中で議論があつて、ということではないんですね。

海原 ない。私は単独行為です。誰にも相談しませんよ。それは今までご説明したことでおわかりでしょう。直接の上司が加藤さんとか、林さんとか、違う考え方ですからね。

佐道 次官と、その話題についてお話をされたことはないんですか。

海原 しませんね。反論しない。私は常に大声で言っていますからね。だから、「海原が、ああ言っているな」ということを、私は黙認したと取るわけです。黙っているから。間違っているなら呼ばれて、お前はこういうことを言っているのか、そんなことはやめろという指示がくるのが当然でしょう。ないから、いつも書いて渡すわけですね。

伊藤 こういふ時も、ああいうメモを出すわけですね。

海原 ええ、メモ式のもですね。そうしないことには駄目なんです、

ああいう組織は。

河野 そのメモを、先生はまだ持っていらっしやいますか。

海原 持っていません、そんなものは。

伊藤 いや、探せば出てくるんですよ（笑い）。

佐道 その時、書いて出されたということは、それなりの声は聞こえて来ていたということですか。

海原 それは、もちろんそうですね。こういうことを言うと、だんだん内輪の恥をさらけ出すようだけれど、人々はみんな自分に都合のいいようにニユアンスを変えて書きちゃうんですね。それが怖いわけですよ。私がそんなことを言ったと言われても、そうじゃない。私の書いた物を見ると、海原はこう言ったとなっているとか。これは怖いのですから。物を書いて渡すということは、なかなか勇気の要ることです。と同時に、そういう誤解を与えないような意味なんですね。それは、ああいう社会では難しいことですね。それで私は、「脚下照顧」であるとか、メモを書くでしょう。私の前にも後にも、そういうことをやった人はいないでしょう。

防衛庁というところは陸・海・空とあって、それぞれ同じことを求めているようであっても、方法が違いますから、結果的には違ってくるんですよ。そういう中での議論となると、やはり大事なところは整理しておかないと、後で、ああでもない、こうでもない、となる。そこで、ああいうことをやったわけです。

この前もご質問がありました。防衛局長とはどこにも書いてない。書いてないから意味があるんです。ご参考までに、こういう問題について考えてくださいということでもやるしか方法がなかったですね。

伊藤 誰かの文書の中に、「何年何月何日に、海原治から受け取った」

ということが書いてあれば、どういう性格の文書かというのがわかるわけですね。

海原 そうです。わからないところに意味がある（笑い）。

伊藤 いや、後世の歴史家に必ずわかるように、誰かが書いておいてくれる（笑い）。

海原 それは史学会の会長さんとして、あまりにも現実を知らない。とても日本の官僚組織の中ではできませんね。物事が決まるまでは、みんな勝手なことを言いますからね。また、それがいいことだと思えます。ところが後になってから、俺はそんなことは言わなかったと言われると困るわけです。

旧海軍派と「久住レポート」

河野 話がずれると申し訳ないんですが、久住忠男さんという人をご記憶ありませんか。

海原 記憶はありますよ。あれは徳島の人なんです。彼は私に好意を持っていましたね。私がいろいろ言うものだから、「海原さん、あなたは旧海軍に敵意を持っていると言う奴が多いので、困りますよ」と言うんですよ。

この話はしていませんでしたかね。私は短期現役を振られたでしょう。短期現役の二期に受けて、当然海軍に行けると思った。そうしたら、午前中が身体検査で、午後が筆記試験で、身体検査の最後で、お

前は痔瘻だと言われてアウトになっちゃった。そのために私は東大の二科目、日本法制史と西洋法制史とを一年間勉強したのに振っちゃったわけです。それが元で、海原は旧海軍に敵意を持っている、となるわけです。そういうことがあるものだから、久住さんも途中までは、海原の野郎、と思っていたかも知れませんが、だんだん話しているうちに、「いや海原さん、ずいぶん中では弁護しています」と言うからね。同じ徳島の人なんです。それでも弁護しきれない点があるんでしような。あれを見るとわかるでしょう。「安全保障条約の改定」

「水交会の小冊子」とか、こういうものに全部賛成するわけですから。河野 久住さんはやはりこちら「安全保障条約の改定」を書いた水交会」の方ですか。

海原 久住さんは、「有事協力戦略」の方に名前が出ているでしょう。ですから、どちらかというと、こちらの方でしょう、私に言わせれば。彼は「有事協力戦略」の有力なメンバーだったんですからね。その辺が難しいわけです。同じことを申しますが、私は彼は好きでした。一緒に酒も飲みましたしね。

河野 この自動延長に関する意見などでは……。

海原 それについては話したことはなかったですね。

河野 沖繩の核もですか。

海原 ないですね。そういう点は、彼もある意味で賢いから、正面衝突する話題は避けるわけです。そのぐらいの配慮はお互いにあるわけです。

伊藤 意見がそこそこ合点なところで話をするわけですからね。

海原 そうそう。今は平穩無事ですけど、当時はこういうものが大変なんです。久住さんは旧海軍の一人ですから、要するに大海軍を持

ちたいわけでしょう。航空母艦も必要だと、野村大将の下でやるわけですから。こっちは、それに対してやっていくわけですからね。だから、表だって私をサポートするわけにはいかん。しかし、あまりにも私がネガティブに攻撃をされると、いやそんな男じゃないと庇うことはしたそうですね。

要するに私という人間は、旧海軍からは目の敵です。航空母艦をどう潰しちゃったわけですからね。私も新聞記者に言ったことがありますよ。よく俺は生きている、昔なら殺されたかもしれないと。

河野 久住さんは、沖繩問題にしても日米安保条約の自動延長問題にしても、どちらかというと、海軍OBにしては柔軟な人だということに書かれていますね。

海原 そう思います、私も感じとしては。だから時に、私の弁護に回ったんでしょうね。それが本質的に合うのか、そういうテクニクをとったのか、そこは知りません。とにかく当時は、どういったらいいのか、旧軍人さんの方々は、制度調査会の報告でもわかるように、大変な希望を持っていたわけですからね。

河野 できると思っていたわけですね。

海原 そうそう。だって、瀬島さんだってそうですよ。あの人は今でも非常に尊敬されているのが、私はどうしてもわからんですけれどね。それは人間というのは、その立場に立つと、それなりの物の考え方に左右されるでしょうね。それ以上は言えませんね。別に私は旧海軍に敵意があったわけじゃあないのに……。

このことを敢えて言いますのは、これも一遍お話したと思います。が、たまたま大臣主催の軍事専門家との夕食会があった時に、私の目の前に二人、旧海軍出身の評論家が座ったわけです。しばらく酒のや

り取りをしているうちに、「時に海原局長は旧帝国海軍に何か恨みを持っているようですが」と聞いたのが、大井さんですよ。

伊藤 大井篤さんですか。

海原 そうです。それが私が「短現」で落第した話ですよ。だから私は笑い出したんだけど、そういうのが伝わるわけです。海原は旧海軍に敵意があると。

そのことがずっと後になって出て来ますのは、私が国防会議の事務局長になった時です。佐藤総理の下で、官房長官は保利(茂)さんです。今の保利(耕輔)さんの親父さん。私が国防会議の事務局長になっても、しばらく保利さんは私と会おうとしなかったんです。それは私が危険人物だからですね。任命されてから二カ月ぐらい経った時ですかね、ポツンと保利さんが私に言ったのは、「海原君、君は『海軍』と『空軍』には冷たいと総理が言っておったよ」と言うから、私は笑い出したんです。「そうですね。保利さんまでそういうふうにお聞きになりましたか」と。というのは、佐藤総理のところまで伝わっているんですね。海原は「陸」だと。

河野 陸原だという話ですか(笑い)。

海原 「海」と「空」には冷たいんだと。だから私は笑ったわけです。官房長官にわざわざ総理が言うほど、伝わっているわけです。死んだ三島由紀夫さんまでが佐藤総理に、「海原はどうも『海』に冷たいよ。うだ」ということを言っているんです。そういう空気ですから、推して知るべしです。

河野 「久住レポート」というものはご記憶にないですか。

海原 ありませんね。

河野 基地問題研究会から先生にコンタクトを取ったようなご記憶は

ないですか。

海原 ありません。全くないです。例のあれはびっくりしましたしね。私は何度も同じことを言うようですが、はつきり物を言う方ですから。それから、大事な問題については書いた物を渡しますから、「海原はこうだ」ということを言いようがないですね。だから、あいつはこうだ、ということが客観的にわかっているわけです。だから誰も接触しません。私はいつでも一対一で議論するよと言っているんですが、未だかつてないですね。

これは前に申しましたか、防大一期生の連中が、海原さんの話を聞きたいということで、六本木の防衛庁のすぐ前の小さな料理屋に集まる。幹部連中でしょうね。言ってみたら、「海」がいないんです。「陸」と「空」は来ているけれど、「海」はこないんです。私のところに連絡に来た奴に『海』がいないのはどういふことだ』と言ったら、「いや『海』の連中は参加しません」と言う。ことほど左様に、私は旧海軍からは、何と言ったらいいか、嫌がられており、憎まれておったんですね。

河野 久住さんは最終的にはどうも核抜き本土並論になったというふうに、アメリカの沖縄問題研究家の間では評価をされているんですね。ですから、みんなその「久住レポート」に興味を持って手に入れたがるんですが、先生のこれまでのお話の核に対するご意見を、久住さんは受け入れているような流れになるんでしょうか。

海原 そこは、はつきり言っておけません。話したことがないですからね。

河野 それについてはね。では、阿吽の呼吸みたいなものですかね。

海原 人によって、ちよつとしたことでも、特に日本には曖昧に話す

人が多いですから、わかりませんね。一回も、私と久住君との間では核についての話はありません。しかし、他でどう言われているかわかりません。

それに類したことを言いますと、私は評論家になってから、テレビなどにもよく出たわけですが、未だかつてNHKのテレビには出たことがない。一回だけあるんですが、それは飛行機の国産問題で、他の二人と一緒に話したんですけれどね。後はNHKからはお呼びがない。このことについて、今でも付き合っている伊藤君が、NHKの担当の上の奴に聞いた。どうして海原さんと呼ばないんだと。例を言いますと、潜水艦の発見の問題、海上交通の安全の確保、そういうことについて今度NHKが研究会をやるからというので、講師には「私を」呼ぶんですよ。話を聴きたいというから、行くんですよ。そこに六人ぐらいいるわけですね。そして三時間ぐらいろいろお話しするわけです。そういうことで、材料を仕入れる時には私を呼ぶわけです。しかし、いざ肝心の放映の話し合いになると、呼ばないんです。そういうことをやるんです。私も、ああそんなものかと思っていましたから、別に腹は立ちませんけれど、そのことについて伊藤君が、どうして海原さんと呼ばないんだと聞いたら、いや、あれを呼ぶと他の連中が来ないと言うんですね、嫌がると。

伊藤 やられるから(笑い)。

海原 ということを、伊藤君に答えたんですね。

伊藤 わかるような気がします(笑い)。

海原 「誰が来るか？」とみんな一応聞くでしょう。それで海原が来ると言うと、あいつが出るのなら俺は行かん、というのがほとんどなんです。何と言ったらいいんですかね。

伊藤 放映されるところで、滅多矢鱈にやられて、醜態を晒したくないから(笑い)。

海原 いや、そんなにやりませんよ(笑い)。しかし、その例を言いますと、有馬元治君と、朝日新聞で対談したことがあるんです。一面全部出ました。その時に彼が海上交通の安全の確保と言いますから、私は「どこの国もそれはやっていますよ」と言っただけです。「そんなことはない」と言うから、「じゃあ、どこがやっていますか」と聞いたんです。答えはない、答えられない。そういうことがあるわけです。伊藤 大体、そうなるんですよ(笑い)。

海原 そういうことがあって、お前が悪いんだと言われれば、ああそうですか、ということになっちゃうんですけれどね(笑い)。NHKにはそういう具合で出たことがないんですね。

伊藤 NHKの座談会なんていうのは、最後は和気藹々と終わるわけです。いきなりやられるといけないわけですから。

佐道 番組が成り立たなくなる。

河野 最後に決裂してしまうと困るんですね。

海原 そこが基本的に違いますからね。私は決して私の考え方を強制はしませんよ。しかし、こういうことですよ、それを前提に判断をしていただきたいと言っています。前提になるべき事実関係を知らないで、仮定でおっしゃるのは困る、と言っています。

伊藤 さつきおっしゃったような紙に、はつきりと書いて、お配りになる。それはどれぐらいの範囲に配るんですか、場合によって違いますが。

海原 陸・海・空それぞれの部課長ですね。例えば防衛部長、その下の課長ですから、結構な部数になりますね。それから内局の方は、局

長に渡します。もちろん、次官にも行きます。

伊藤 防衛庁の外には出ないわけですか。

海原 出ないと思いますけれど。

伊藤 渡した以上はわからないわけですね。

海原 わからない。言葉のついでに申し上げますと、これもお話ししませんでしたか、防衛庁の中の会議の状況は逐一関係商社に行っています。それは、装備品の国産の問題であるとか、バッジの時にごうするかどうかですね。バッジの例で言いますと、伊藤忠になるか日本電気になるか、でしょう。その時に私が後で某所から手に入れたのは、伊藤忠の報告書です。こんな厚さ「指を一〜二センチ開く」です。その一部ですが、伊藤忠と名前を出していない。「防衛局長の海原は、この会議の最中、末席にいて、絶えず外ばかり見ていた」と書いてあるんです。それは事実なんです。本にも書きましたけれどね。それは私の親父が死んだ後で、世の中が虚しかった。それから政務次官の生田（宏一）氏が会議を主催して、そういうことをしてはいけないと言われているのに、事務次官のいる前で、この政務次官さんは、三つの商社に全部ワタリをつけたんですからね。お前のところを採用したらどうするとか。そんなことがあるわけです。そういう会議があった時に、全部書いてある。「海原局長は末席に座って、絶えず外ばかり見ていた」と。事実そうなんです。

伊藤 そんなに分厚いということは、いろいろな人の発言が全部記録されているんですか。

海原 解説があるわけです。防衛庁の中の人脈とか。これを私がもらったのは、もう死にましたが、ある新聞記者からです。

佐道 それは瀬島さんがいる伊藤忠が、一番そういうことをしている

わけですか。

海原 そこへ行っちゃうから困るんです。伊藤忠というと瀬島さんでしょう。それが困るんですけれどね。

佐道 実際に、機密漏洩云々でお辞めになった人がいますね。

海原 おります。そこで「待った」を入れたんですが、一体、機密とは何か、ということなんです。この前もご説明したと思うんですが、バッジという知識は日本でやったものではないですね。アメリカのものでしょう。日本側は知識はゼロなんです。だから、全部向こうから教えてもらうわけです。英語で来ている。それを商社が日本語に翻訳する。それをもらうわけです。それを読むわけでしょう。それは、全部向こうから来ているわけです。それを川崎（健吉）君が漏らしたということでは起訴されるわけですね。向こうのものをそのまま言っているんだから、秘密でも何でもないんですよ。それが日本語になって、防衛庁関係の印刷物になると、「マル秘」の判が捺されるわけです。そうすると形としては、お前さんの話はどういうことだろうと渡すでしょう。そうすると機密漏洩になる。元々は向こうのものなんです。

伊藤 向こうのものは秘密ではないんですか。

海原 何でもありません。向こうでは、秘密のものもあるでしょうし、すでにオープンになっているものもあるでしょうし、わからない。ところが、日本側にとっては全部それが秘密なんです。ここに問題があるわけです。だから非常に難しいですね。だから川崎が機密漏洩で逮捕されたと言うけれど、また死んだ山口（二三）君もその責任を感じたと言うけれど、そのとき私が聞いたのは、秘密って何だ、ということなんです。「元々そのインフォメーションは向こうのものじゃないか。それは全部向こうの会社、製造会社と仲介している商社が持っている

わけで、商社が持っているものを、こつちが日本語に訳して、それをどうかと聞いたら、これが機密漏洩になるのか」と言ったら、「うん」と言うわけですね。そんなものは秘密でも何でもありませんよ。そういう解説をしないですね、防衛庁の機密漏洩事件については。

伊藤 機密漏洩の問題ではなくて、情報がスースーと行っているということですね。

海原 そこでこの前も申しましたが、G Eは百点、他のところは零点または零点以下だと横路さんが言うわけですね。零点以下というのは、何で零点以下かわからない。ことほど左様に、一切の国産に関係してくるんですが、いかにこつちが無知か、何も知らないか、ということなんです。全部知識は向こうのものなんですからね。それを中曽根大臣が、国産するんだ、国産するんだと言う。経団連の防衛生産委員会も国産だ、国産だと言うから、何を国産だと言うんですか、と聞くわけです。そうすると、あいつは国産に反対だ、ということになるわけです。それが当時の一般的なムードでしたね。

「有事駐留論」を排す

伊藤 国産の問題に移る前に、二番目の問題ですが、安保条約そのものの内容の改定ですね。

佐道 いわゆる民社党などが言った、有事駐留の問題ですね。

海原 それが次の大きな問題ですね。「有事駐留」というのは言葉が

いいんですね。私は民社党に招かれまして、民社党で講演したんです。あれで五十名くらいおったですかね。そのとき私は、「あなた方民社党は良識の党と言っておられる。私もそう思いたい。しかし、この有事駐留なるものは、全くおかしい理論だ。平たく言えば、『お前たち「米軍」が普段いると、いろいろ問題が起るから、ハワイかグアムに帰っている。いざという時には電話をかけるから、直ぐに来てくれ。間に合うように来いよ』ということだと思う。こつちも、アメリカから電話がかかったら行くのなら話もわかる。お互い様だ。しかし『こつちは憲法で行けない。そんなことはお前たち「米軍」が十分知っているだろう。お前たちが俺たちに押し付けたものだから』と言って、『普段はお前たちのことは邪魔だ。だから日本から出て行け。でも、いざという時は直ぐに電話をかけるから来いよ』と言う。こんな得手勝手な議論がありますか。これを良識の党という民社党が言うのは、私はどうしてもわからない』と言った。それが第一です。

第二に、「いざという時には間に合いません」と言っただけです。「私が仮にソ連の司令官であれば、最初にレーダーサイトを無能力にする方法はいくらでもある。二十八カ所のレーダーサイトが無能力になれば、後は悠々と入って来られる。新潟のレーダーサイトが働かなくなれば、ソ連の戦闘機、爆撃機は悠々と来られる。そうなったら、アメリカの援助で一番早く来られる空軍も来られませんよ。レーダーサイトが駄目になったら動けない。当然、飛行場もやられてくる。空軍は来られない。じゃあ、アメリカの陸軍が船に乗って来るためにはどれだけかかるか。三週間か四週間かかる。最低でも三週間かかる。その間に、『自由日本』は、『共産日本』になっていますよ。だから、あなた方の言っている有事駐留論は、実際の場合には何の役にも立たない

と私は思います」と言っただけです。それをゆっくり話したんですね。それっ切り民社党は有事駐留論を言わなくなった。

それから半年ほど経ちまして、私は新聞に書いたんです。「民社党はかつてこう言っておった。その後どうなったか。何も言わないから、依然としてそういう考え方を持っているとしたら」と書いたんです。当時事務局はこの辺「虎ノ門」にあったんじゃないですか。私も二度ほど来たことがあります。電話がかかってきて、「海原さん、あれはもう言わないことにしました」と言う。言わないことにしました、じゃないんで、やめたらやめたで、天下の公党の政策だから、堂々と機会のある時に言っただけ。「ああそうか、やめたか」と言ったら、やめましたと言っていた。

そういう調子なんです。それが日本の政治家の姿ですね。私が役人を辞めた時に、民社党から「選挙に」出ると言われたんですからね、佐々木良作氏と永末氏から。私も、出るのなら民社党がいいな、と思っただけですけどね。社会党からも出ると言われていましたから。私は民社党は好きだったんですけどね。

佐道 話に行っただけは、何年頃ですか。民社党も有事駐留を正式に言い始めて、しばらくはそれを言っていたと思いますが。

海原 言い始めて、一年ぐらいですかね。国会の委員会で、法制局長官の高辻（正己）さんが、「佐藤総理が（有事駐留は）ちょっと困った問題だ、耳に入りやすい言葉だから、と言われます。海原さん、何とかありませんか」と言うから、「わかった、私が連絡を取って、あれはこういうわけで間違っていると行って、潰しましょう」と言って、それで潰したんです。だから、一年半ぐらい言っていましたかね。佐藤総理も、あれは非常にわかりやすいから、と言っていた。それは

わかりやすいでしょうな。呼ばばすぐ来ると言うんだから。だけど、来られませんよ。

伊藤 出前ですね。

海原 そういうことですね。

佐道 最近も、それを言っておられる方がいますが（笑い）。

海原 日本人というのは、何と言っているか、自分のことしか考えないんですね、自分の都合しか。相手のことを考えないですよ。お互い様だと言うんですがね。

その前に、アメリカ人という人種はないということ言うんですが、これがわからないんですね。アメリカ国民はいますよ。しかし、まだアメリカ人はできていませんと言うと、みんなびつくりしますよ。だから、「アメリカは」という言い方をするのは基本的に間違っている、と言うんですけどね。

それは僕は、向こうに行つて、向こうの会議の時にたまたま『エスクワイア』の編集長から言われたんです。たまたま会議の席で隣に座っていましたからね。「アメリカは」と言ったら、「ミスター海原、『アメリカは』は駄目だ。アメリカは広い国だ。日本みたいにカリフォルニアの州と同じぐらいの広さじゃないんだ。世界中の人間が集まって来ている。建国以来二百年で、まだアメリカ人はいないんだ。外国人は、アメリカの一部分を見て、その体験でもって、帰って、『アメリカは』と言う。このぐらいお互いにとつてマイナスなことはない」と言うんですね。なるほどな、と思いましたがね。爾来、私はそれを言い続けているんですけどね。

だから、アメリカにいる人、アメリカ国民はいるけれど、アメリカ人はまだできていません。それは全部、イギリス人、フランス人、

ドイツ人、イタリー人、日本人、中国人、朝鮮人、それぞれの文化と伝統をもって、それぞれがそれぞれの地域に住んでいる。まだ渾然一体としたアメリカ人なるものではない。当分できないでしょう、と言っているんですけれどね。これが基本的に問題ではないでしょうかね。

伊藤 民社党が向こうの意見を聞いたわけではなくて、先生がそれに対して一方的におっしゃったわけですね。民社党がこういうことを考えたというのは、一体何なんですかね。

海原 それは久住さんなんかの団体もああいうものを出しているでしょう。有事駐留論とか。

伊藤 それに乗せられたということですかね。

海原 そういうことですよ。何と言えはいいんですか、要するに人が好いんですね。単一民族でずっと来ましたから。ペリーによって開国したもの、世の中を知らんわけですよ。日本人がいいと思えば、それが全部いいことだという感じがあるんじゃないですかね。

これはお話ししませんでしたか、『ジャパントイズ』の昔の投書欄を見ていましたら、女性の投書があつて、「アジア人の中で日本だけが白色人種と対抗してこうなった。だから他のアジアの人たちにも日本人と同じような姿を求めてもらいたい。そのための方法は何か。白い飯を食べて、味噌汁をいただければいいんだ」と書いてある。これは投書ですよ。そういう感覚ですね。ご飯を食べて味噌汁を飲んでいれば、日本のように、フィリピンその他の国々も良くなるんだと信じて疑わないんですね。

伊藤 そんな話、聞いたことないですね。

河野 さっきの久住さんたちのグループも、確かに有事駐留論を言う

んですが、それはもう一つ含意というか裏があつて、平時はアメリカ軍はいない。いないところは自主防衛論的な、日本の防衛力を高めることでカバーするという有事駐留論で、民社党の言っている有事駐留論と違うのではないのでしょうか。同じなんですかね。

海原 そこは私はわかりません。安全保障問題研究会のものは読みましたが、あれを読んでみてもわかるはずがないんです。それは、あれに参加している人々が、みんな同じ考え方では絶対にならないですからね。

河野 民社党には安全保障政策のブレンみたいな人はいたんでしょうか。

海原 それはわかりませんね。私はそういう人はいないと思うんですけどね。そういうふりをする人は結構いますよ、各政党について。

例えば亡くなった木村武夫さんというのは割に有名な人ですよ。この人は、俺は影の外務大臣だなんて言つて、インドネシア問題などいろいろな口を利いたでしょう。それは自分の利権のためですよ。そういう人がいっぱいいるんですよ。それ以外の人は、名前は言いませんが、それに類した人がいますな。いちいち、私はフィリピンの大統領とは親しいんだと言つと、ああそうですか、とみんな思つちゃうでしょう。本当にそうか、調べませんね。日本人はそういう点では非常に単純ではないですか。

佐道 今の質問と重なるんですが、後で中曽根さんが防衛庁長官になつて、自衛隊を増強して、米軍の肩代わりをしていって、アメリカは段階的に撤退をしていくという意味のことをおっしゃいましたね。

海原 ちよつと待つてください。それは何に書いてありますか。

佐道 彼が防衛庁長官になつてからの発言とか……。

海原 あの人ぐらいいね、言うことが変わった人はいないと思うんです、

私の知っている人で。また変わった理由を言わないですよ。ここがおかしいと思うんですね。例えば一人だけでは悪いから他の例も出しますが、中曽根という人は、私は具体的に知っているわけです。内務省の二年後輩で、私が警視庁の課長時代に警視庁に来て、監察官をやったんですから。その後で政治に行きますね。彼は優秀な人だと思っ
て見ていましたけれど、言っていることがその度その度違うんですよ。違ってもいいです。チャーチルも違いましたからね。なぜ違ったか、ということを書きだすと私は思うんです。一切言わないです。

河野 先生がご覧になっていて、最も許せないというか、変わったのは、いつどこで、ですか。

海原 許せないんじゃないんです。ああ、こんな人か、ということですね。一番簡単なのは、保安隊が自衛隊に変わる過程で、国会の予算委員会で河野一郎氏の横について、吉田さんに質問しているんですよ。「今度政府は、警察予備隊を防衛隊にしようとしている。それはとんでもないことだ。私は警察予備隊を見に行ってきた。高射砲なんかを持とうとしている。今の姿でも、パラグアイやウルグアイの軍隊よりは強い」と言った。いいですか、比較の対象がパラグアイとウルグアイですよ。

佐道 よく例に挙げた、という感じがしますね。

海原 まあまあ……。これが防衛隊ともなれば、今でも憲法違反の疑いがある……。と言う。予算委員会の場ですよ。「これが吉田さんの言っているような防衛隊ともなれば、憲法蹂躪も甚だしい」と言っているんですよ。それを河野一郎の横について質問しているんですよ。全然取り消していませんよ。それが、佐藤内閣の時に防衛庁長官になったら、「よくぞ、佐藤総理は私を防衛庁長官にしてくれた」と

言っているんですから。そんな男なんですよ。「防衛隊ともなれば憲法蹂躪も甚だしい。そんなことが政治家として許されるのか」と言った。こんな発言をしておいて、さっきも言いましたが、変えるなら変えるでいいですよ。あの時はああ言ったけれど、俺はこうだと、一言も弁解していませんからね。

河野 そこが問題だというわけですね。

海原 そういうことです。だから、その時その時に勝手なことを言っているだけです。口から出任せの男です。それで風見鶏と言われるんですよ。英語で weather vane と言う。九州でアメリカ大使館の主催で、九州地方のジャーナリズムの会同があった。その時にアメリカ大使館の参事官から頼まれて、海原さん一緒に行ってくれと。それで行った。前の日に、本国から三名ばかり来たんです。いわゆるジャーナリストです。その時に、前の晩のハイボールを飲みながらの話ですけれどね。「ミスター中曽根は風見鶏 (weather vane) と言われている。風見鶏というのは本来いもんじゃないか」と僕に聞くんですね。「風がどちらから吹いてくるか、それがわかるんだから、いいじゃないか。しかし、どうも日本のミスター中曽根に対する評価の風見鶏は良い意味じゃないようだ。どういうわけか」と聞くから、「それは違うんだ、オポチュニストの意味なんだ。そっちから風がくると、そっちに変わる。こっちから吹くと、こっちに変わる。そういうふうに変わり身が早い。その時その時のオポチュニストだ」ということが、日本語で言う風見鶏だ」と言ったら、「ああ、それでわかった」と言うんですよ。ことほど左様に、同じ言葉、weather vane と言っても、受け取り方が違うんですね。まさに中曽根康弘は weather vane ですよ。
伊藤 だけど、政治家は多かれ少なかれそうですね。

海原 そこが私は、先生、好きな人にはそう言って大目に見るわけですよ。多かれ少なかれ、それじゃあ困るんですよ。

伊藤 でも、固定していてもね。

海原 固定しろとは言っていないよ。変わるのはいいい、理由を言え、と言うんです。だから今の東京都知事も、あれは核装備論者ですからね。大変なことですよ。日本は複数弾頭を持った原子力潜水艦を数隻、日本海に浮かべると。これが日本の国のあるべき姿だと言っているんですから、大変なことですよ。堂々と書いてあるんだから。その考え方が変わったかどうか、どうして日本の新聞記者は質問しないんだ、と言うわけです。

伊藤 それは忘れていくんですよ。

海原 だからそこなんです、問題は。日本人はみんなお人好しなんです。その時その時、政治家の言ったことはワツと聞いている。だから、私が信じられない政治家はいっぱいいますよ。

伊藤 そうおっしゃったなら、みんな信じられないでしょう(笑い)。

海原 いや、違う(笑い)。大事なことで、ということ。大事なことに、国家国民の基本に関するようなことで、こうだと言ったのは、変えてもいい、変わるべきかもしれない。しかし、理由を言いなさい、それから変わったと言えということですよ。

佐道 中曽根さんの話から政治家論になってしまったんですが、河野先生と私の質問の趣旨は、いわゆる自主防衛論というのを唱えている人たちが有事駐留の議論に入っていたような形があるわけですね。

海原 学校の先生方は簡単に整理されますけれど、そこで資料を持って来たんです。「自主防衛論を弾劾する」です。

佐道 まるで質問の先を読んでいるようですね(笑い)。

海原 これを差し上げます「社会新報、一九六九年十一月十九日付」『自主防衛』論を弾劾する」の記事コピー」。こういう主張があつて、それに追い打ちをかけるというか、朝日新聞がどう言ったか、「平和に生きる日本を求めて」です。これはご覧になりましたか「朝日新聞、一九七二年一月一日付「平和に生きる日本を求めて」の記事コピー」。この中見出しの「日米の軍事的関係、薄める方向へ」というのは何を言っているのかわからない。これは朝日新聞が考えるところで、論説委員じゃないですね。どうやって朝日新聞の考え方が決まったのかと聞いているんですが、誰も答えませんね。どういう経過を経て、これが決まったのか。

伊藤 線の引いてあるところが問題なんですね。

海原 「平和に生きる日本を求めて」は、今から二十八年前の一月一日の朝日新聞ですね。これが背景にあるわけです。このように日米の軍事的関係を薄めて、何があるんですか、と私は言うわけです。どうすればいいんですか、どうしたいんですか、と朝日の記者に聞いても、俺はわからんと言う。俺がわからんことを朝日新聞が主張するのはおかしいじゃないか、と言うんですけれどね。

それと同じようにして出てきたのが、社会新報の「『自主防衛』論を弾劾する」ですね。要するに、自主防衛論も同時に出てくるんですね。この時のことを整理して言えといつても、無理ですね。

伊藤 複雑であれば整理しなければ……。

海原 同時多発的なんです。一種のムードですね。

伊藤 要するに朝日が求めている方向というのは、日米安保体制の解消ということですね。はっきり書いてありますよ。

海原 一貫してそうですよ。その道筋を考えろということでしょう。

どうい道筋があるのか。

伊藤 そこで言っているのは、「米、中、ソ三国との不可侵条約による平和保障体制」(朝日新聞、同記事より)なんですね。

海原 それは社会党も言っているわけですね、石橋さんの時に。私はそんなものができるのか、と聞いているんです。

伊藤 これは、できないことを言っているんです(笑い)。

海原 そこで先ほども言いましたが、日本人というのはそういう特色があるのかな、ということなんです。

伊藤 それは、架空のお話を作って、そのお話の中で生きていく。それは朝日新聞がやってきたやり方ですね。

海原 では先生は肯定されるんですか。

伊藤 いや、事実を言っているんです。

河野 この朝日の七二年の先生が線をお引きになったところですね。

「民社党は、一時は安保肯定に傾斜したかに見えて、再び段階的解消論になる」。これがそうなんです。肯定論に傾斜したというのは、先ほどおっしゃった「出前」の議論とは違うんでしょう。

海原 わからないです。そういう言葉の意味が、私から言うと吟味されていません。それはいちいち吟味しだすと切りがないですね、論説委員といえども。

河野 わかっているんで書いてあるということですか。

海原 そういうことです。そう思いますね。

伊藤 やはりこういう作文を書かなければならないという、朝日の社是みたいなものが暗黙にあるわけですね。

海原 残念なことだと思うんですけどね。私は新聞というものを非常に高く評価していて、新聞が世の中を導くんだと言っているんです。

けれどね。

伊藤 ええ？ 嘘でしょう(笑い)。そんなはずがない。

河野 ここでもう一度触れたいんですが、先ほどの有事駐留と同じように、段階的解消も実は二極化していて、解消して、その分自主防衛をしようというグループもあるし、朝日のように、解消して多国間非核構想にしようという、二つの水と油の勢力が解消論という同じ言葉を言っているという感じではないでしょうか。

海原 それが私にはわからないんです。解消論を言うのはいいですよ。じゃあ、解消するのはなぜいいんだ、と聞くんですね。だからそこに書いてありますように、二つの方法でしょう。アジアのことに介入するというのと。そんなもの、右か左かという全然違う対象を二つ出して、どっちを選ぶかと言うこと自体が間違っている。およそ新聞の態度ではないと思うんですね。そんなに世の中、簡単なものじゃないと思うんですね。まるで子供の議論なんですよ。

もつとはつきり言えば、まともに取り上げるに値しない論文ですね。私が先生であれば、零点を付けますね。マイナスを付けるかもしれない。これが「大朝日」の新聞記者の言うことか、ということですよ。

伊藤 それは朝日に対する過大な期待というものです。朝日というのは、こういうものだと思えばね。

海原 それは昔の軍人と同じです。

伊藤 だって、じゃあ朝日をどうするんですか。爆破するわけにはいかんですから。

海原 そうなっちゃうんですよ。言うことを聞かなければしようがない(一同爆笑)。そうなるんですね。一人一殺論になっちゃう。だから、あまり真面目に考えないことですよ。

河野 真面目に考えるとわかりませんね。

海原 真面目に考えると、とても無理だと私は思います。

先ほどの話の続きをしますと、その中曽根氏が大勲位でしょう。僕は勲章が泣くぞ、と言っているんです。

伊藤 あまり大勲位にこだわらないでください(笑い)。

海原 だって、大勲位というのは偉い人ですよ。吉田総理もそうですし。

伊藤 そうですか。誰もそんなに偉いと思っていないから。

河野 偉いと思っていないから、大丈夫です。

伊藤 偉いと思っているのは、海原先生なんですよ。

反響を呼んだ『科学の驚異』

海原 そういうことを言うと議論がぶち壊しになりますが、そんなことですな、有事駐留論は。だんだん時間がなくなってきましたが、『科学の驚異』の映画の話に行きませんか。これは、いかに海原官房長が努力したかの具体的な例ですからね。『科学の驚異』はご覧になったことがありますか。

伊藤 いや、ないんです。

海原 それは一遍、ご覧いただくことにしますかね。私が官房長になりましてやったことですが、当時三次防をどうしたかと言われましたね。三次防は防衛局長の島田君がやっていますからね。それから「三

矢」があつたでしょう。官房長というのは、もっと一般にPRせんといかん、ということになった。私がまずなつてやったことは、広報課長に伊藤圭一君を起用した。今でも付き合っています。これは特攻隊上がりです。戦争がもう一週間か十日続いていたら、特攻隊で戦死していたかもしれませんね。そういう男です。

それまで防衛庁の官房長が広報課長を選ぶのに、どういう点に着目して選んだか、面白いですよ、これは。仮に伊藤先生が官房長だとしたら、防衛庁の広報課長を選ぶのにどうしますか。伊藤官房長なら、どういう点に着目して広報課長を選ぶか。新聞記者相手の仕事でしょう、難しいでしょう、防衛庁の仕事を理解してもらわないといかん。仲間と仕事をするんじゃないですから、難しいんです。記者クラブが相手でしょう。広報課長選定の条件は何ですか。

伊藤 それは難しいですね。

海原 本場に難しい。しかも防衛庁という陸・海・空自衛隊をつくり上げる過程でしょう。いろいろなことがあるでしょう。

伊藤 誰でも選べるということではなくて、選べる範囲が決まっているわけでしょう。

海原 その中で選ぶわけですよ。

伊藤 誰でも選べるというのなら考えようがありますが、具体的な頭数を見て、その中で誰かを選ばなければいけないわけでしょう。

海原 官房長が自ら広報課長を兼務できませんしね。

伊藤 いや、してもいいんじゃないですか。

海原 それは月給を……。組織をご存知でしょうが、組織にはそれぞれ課長がおり係長がおる。そういうところで捌いていくことがありますからね。私が官房長になって、広報課長をどういう基準で選んだの

かを調べて、びっくりしましたよ。

伊藤 それ以前のことですね。

海原 ええ。

伊藤 そういうことには基準があるんですか。

海原 基準ではなくて、伊藤先生が選ぶ場合、どういう点に着目しますか。例えば佐道さんを広報課長にするなら、これならいいと思われる点はどこか。

伊藤 限られた選択肢の中で、ですね。僕はお役人の中で広報課長、広報ということができるような人がいるかなあ、という感じがしますけれどね。

海原 でも、とにかく選ばないといけない。

伊藤 やっぱり常識のある人がいいんじゃないですか。

海原 常識というのは何ですか。

伊藤 常識というのは、外の世界と話のできる人ですね。

海原 なるほど、うまいことを言われますな。

伊藤 大体、役所の中の会議なり、先生たちの会議なりというのは、その中で使われる独特の言葉があるわけです。それで了解して、みんなをやっているわけです。そうじゃなくて、違った世界の人たちと話ができる人が必要だということですね。

海原 さあ、そこで具体的に、それまでどういう人選をしていたか、見てびっくりしたんです。まずクラブとの付き合いですから、麻雀ができる人、それからお酒の強い人、この二つが条件。

伊藤 記者のことだけ考えたら、それは絶対必要ですよ。

海原 記者クラブの記者諸君を相手にするには、麻雀、酒の二つ。これで選んでいるんですね。

伊藤 それができなかったら相手にしてもらえないでしょう。

海原 そんなことじゃ駄目だ、と言ったんです。それで伊藤（圭一）君を選んだのは、広報課長というのは防衛庁の顔ですから、官房長の代理で、どんな物が言える人ということで選んだんです。彼は非常に変わった経歴があるんです。先ほども言いましたが、旧海軍の特攻隊要員だった。戦後は秋田の女学校の先生をした。『若い人』という石坂洋二郎氏の小説がありましたね。あの舞台になった秋田の女学校の先生なんです。それから人事院を経由して防衛庁に来たわけですね。奥さんも秋田の女学校の先生なんです。そういうことで、一般とは、ちよつと変わっているわけですね。たまたま防衛一課で私の後で働いておつて、教育課にもおつた。その仕事ぶりを見ていますから、これならいいと思つて、伊藤君に、「済まんけど君な、広報課長になつてくれ」と頼んだんです。

伊藤 じゃあ、やっぱり僕が言ったのでいいじゃないですか（笑い）。

ただ、彼は麻雀と酒はどうですか。

海原 両方ともやりますよ（笑い）。

佐道 一応その条件は満たしているわけですね。

海原 うまいとか強いではなくてね。それで、この広報関係を彼と一緒にやったわけです。それで具体的に言つと、いま大評判の音楽祭、あれも伊藤君がやったんですね。

伊藤 そうですか、私は毎年楽しみにしているんです。

海原 そうですか。あの音楽祭を作るのに反対はすいぶん強かったですよ。何だ、自衛隊がちんどん屋みたいな真似をすることはおかしいと。自衛隊は二十四時間もつと訓練に精を出せとか。あの音楽祭を、ああいう形に大きくしたのが、伊藤君です。

その彼と、この広報関係の映画を作るわけです。要するに、実状を紹介するための映画を作ろうということで、やるわけですね。そして、アメリカにも交渉しまして、作ったわけです。できたのが『日米安保体制』で、真正面から日本とアメリカとの関係を取り上げたわけですが、ただし、これを一般に公開する時には名前を変えていいということで、伊藤君に私が言つて、どこが上映するかを決めてもらいました。全部やると言つたんです。東宝も松竹も何もね。しかし、当時一番上映館が多かったのは松竹でした。一つ条件を出したのは、お子さま向けの番組と一緒に上映するというので、松竹に決まつたんです。それで松竹が一年間やったわけです。

佐道 それで子供向け怪獣映画と一緒にやつたんですね。

海原 そうです。名前を『科学の驚異』と変えてね。元の名前は『日米安保体制』ですが、一般上映に関しては名前を変えてもいいかと言うから、結構だと。そうしたら『科学の驚異』ということになった。これはまた話をするのと長いんですが、一つだけ触りを言いますと、この英語版を作つたんです。それで顧問団の阿嘉さんに頼んで、英語で吹き込んでもらった。それで映画を作つてアメリカに進呈したんです。アメリカの陸・海・空の兵学校に。日本ではこういうことで宣伝をやつてると。これが向こうには非常に歓迎されましたね。それで、伊藤君はアメリカから招待を受けて行くわけです。僕は伊藤君に、「俺じゃないのか、お前に招待が来たか」と言つたんですけれど（笑い）。

佐道 広報課長ですから。

海原 「いやあ伊藤君、これは君じゃないんじゃないか。宛名は俺のはずだ」と言つたのです。アメリカも感謝しまして、課長が招待されました。一度だけじゃないんです。翌年も招待が来たんです。

その時の防衛庁の上がおかしいのは、何も広報課長だけ二回行くこととは言いようですよ。その頃はまだアメリカに行くのは羨ましいんでしような。結局、伊藤君は一回しか行けないんですが、私は「二回行け。そうしたら、広報課長には毎年招待が来るようになるから。道ができるんだから」と言つたんですが、駄目でしたね。

そんなことがあるんですが、さて英語版を作りましたね。お世話になつた阿嘉さん夫妻などを呼んで、先ほどの新橋の料亭で打ち上げをやつたわけです。その頃は芸者さんも来ますね。そうしたら一人の芸者が、私が昔から知っている人ですが、「その映画なら私知っている」と言うんです。どうしてだと聞いたたら、実は息子が小学校何年生だったか、昨日だか一昨日だか、帰つて来るのが遅かつた。というのは、子供の雑誌か何かに付録があつて、劇場の割引券か何かあるんでしょ。それで映画を観に行くと言われて、「いいよ」と言つただけけれど、時間がずいぶんかかつた。「どうした」と聞いたたら、入つたらちようど途中だったんですね。二つやつていたそうです。それで、わが『科学の驚異』を途中から観た。そうしたら一緒に行った友達と、もう一回始めから観ようじゃないかとなつて、一回半、観たらいいんですね。どうだったと聞いたたら、非常に喜んでいたという。一番最後のシーンは、富士山をバックにして、F104の編隊がズーツと飛んで行くところなんですね。そういうふうなラストシーンは締め括つてあるわけです。それを観て、日本も捨てたもんじゃない、と言つたというんです。それを、お母さんである芸者さんが私に言うんですね。「ああそうか。そういう感じを持つてくれたとしたら非常に嬉しい」と言つたことがあるんです。

ことほど左様に、割に評判が良かったんですね。だから一年間ずつ

と松竹が上映してくれたわけですから。それを朝日が批判的に書いたのが、国費の無駄遣いだというようなことで、国会でも一回だけ質問がありました。

伊藤 社会党ですか。

海原 はい。無駄遣いではありません、これは広報の一環でありまして、と説明したんですね。そういうことなんです。だから非常に楽しかったですね。

伊藤 これは『日米安全保障体制』という形で作ったのが、何で『科学の驚異』になるんですか。

海原 それは私に聞かれても困るんですけれどね。松竹の方で名前を変えていいかと。そういう話が伊藤君からあったから、いいよ、上映しやすいようにと。『日米安保体制』では、当時の状況として受け入れられないんでしょうね。私も『科学の驚異』という名前を見て、エッと思ったんですけれどね。それは、いろいろ出て来ますからね。軍事関係の日本の力がどうだ、アメリカがどうだということが出て来ますし、ミサイルが出て来ますしね。そういう意味ではサイエンスの凝縮したものでしょうね。そんなことで、一年間でどのくらいの人が観たか計算すれば出てくるんですが、良かったと思います。

伊藤 そうですか。一度観たいな。ビデオか何かあるのかな。

海原 これは全部あります。地方連絡部にありますしね。

佐道 今でもありますか。

海原 要望があれば。これは総理もご覧になったんです。首相官邸に持って行って見せました。佐藤総理です。

佐道 最新のものでは、ビデオを作られたりしていますね。

海原 でしょうね。私はいま出ているものは必ずしも感心しないんで

すけれどね。

佐道 どういった点で？

海原 私の作った方がいいと思っているから（一同笑い）。

佐道 見比べてみなければわかりませんよ（笑い）。

伊藤 確か、音楽祭に行った時にビデオを売っていましたよ。

佐道 陸・海・空それぞれの自衛隊のものが、今はいろいろありますね。

伊藤 音楽祭は、初め招待があったから行ったんですけれど、一般に切符を売って見せているんですね。そういうのも、いっぱいあるんですね。

海原 そういうことで、広報関係は大いに力を入れてやっただけです。それなりなことはあったと思いますし、楽しかったですね。伊藤君はその後、日本の経団連関係のトップをアメリカに案内して、向こうを見学したこともありますね。いろいろやってくれたんです。伊藤圭一君が広報課長としていたわけです。

私が追い出された後で、「海原学校」と言われた奴は全部整理されたんですからね。一番ひどい例は、私の直接の部下であった有吉君は課長でしたが、これは防衛研修所の所長に、形の上では栄転させるわけです。二階級特進です。その時の防衛研修所の所長は、私と同期の麻生（茂）君でした。死にましたけれどね。それをわざわざ引き戻して、内局の人事教育局長にするわけです。そして有吉君を、有吉は海原の一の子分である、これを内局に置いてはまずい、ということをやったんです。そういう露骨な人事をやったわけです。ですから、先ほどの旧海軍の話にも関係してきますが、なかなか難しいんです、人事関係は。

伊藤 そういう人事の背景には政治があるんですか。

海原 政治ですね。政治のみです。要するに、海原は悪い奴つた、というわけです。あいつの息のかかった奴は全部悪い奴だとなる。内局に置いておくとまずいと。

伊藤 それは防衛庁の中の政治の問題ですね。

海原 そういうことは外からも来るわけです。替える、というのが。これを言い出すと切りがありませんし、証拠はありませんから言いませんが。

伊藤 自民党筋のあるグループとか。

海原 はい。もちろん、そこに仲介しているのが新聞記者です。この前、上林山さんの話をずいぶんしたでしょう。あの話をわざわざしましたのは、誰か新聞記者で仲間を作るといふことなんです。その人をブレンとする。新聞記者を使うと言えば聞こえがいいでしょう。ブレンとなった新聞記者の質の問題です。私が出た後の人事は、全部新聞記者の筋書きです。増田さんは単に言われた通りにしたことです。まあ、考えてみれば政治家も気の毒なことですね。

伊藤 気の毒と言っているのかどうかわかりませんが。

海原 それは松野さんが統幕議長と三幕僚長を全部同時に替えてみたり、防衛庁から農林省に行った時に、向こうで秘書官を探らないでわざわざ防衛庁で使った奴を秘書官にするとかね。各政治家は、それにそれぞれの器量に合わせて、自分の保身に精一杯ですね。それは言えましょうね。

伊藤 保身ですか。

海原 はい、保身の中には、自分の思う通りにしたいということも入りますよ。

伊藤 やはり、いろいろなことをやるのに、海原は邪魔であるとなるわけですね。

海原 簡単に言えば、そういうことですね。

伊藤 これをバラバラにしてしまおうと。

海原 「海原学校」は解散ということですが、だから私が、『This is 読売』か何かでしゃべっています、『『海原学校』はどうなりましたか』という質問をされましたから、『『海原学校』は全部雲散霧消しました』と言ったんです。そうせんと、落ち着かんのでしような。妙な話になりましたけれどね。

日米間の技術格差

——国産化問題

伊藤 時間が来ましたから、どこかで切りましょう。国産の話で、松野長官はどうされたんですか。

海原 これは話が出ませんでしたけれど、申し上げたことは、いかに国産と言っても技術が難しいかということを知っていたら良かったんです。

伊藤 この段階での日米技術格差は非常に大きかったということですね。でも今度は、松野長官は、そのために米国に技術調査団を派遣するとか。

海原 駄目です、そんなもの。行きません、出せませんよ。まず、行って勉強するだけの用意がないです。それが先ほど申し上げた、川崎

航空機の例のPXLの問題ですね。木型はできるんですよ。

伊藤 防衛庁の技術研究所は、この段階ではどうだったんですか。

海原 それは伊藤先生、申し上げますと、アメリカという国は基礎的な技術の研究に大変な人と金をかけているんです。日本はゼロなんです。日本の防衛生産というのは、見様見真似でやっているだけのことなんです。それは三菱電機の3Dでよくわかったんですけれどね。で、きないんです。全然違いますからね。だから、勉強に行くと言っても、何を勉強するかです。先ほども言いましたが、バッジですね。これは基本的な理論もわからない。ですから、そういう勉強に行くだけの基礎的な知識がないということでしょうな。

伊藤 日本の科学技術の水準を上げていかなければ……。

海原 そのためには時間がかかりますね。大臣が替わって人をどうしたからといって、絶対にバツと動くものではありません。少なくとも十年という期間は必要でしょうね。その十年をかけて、何かをやるという長期マラソンの計画は日本人はできませんね。俺の時に、これをした、あれをしたということですからね。

伊藤 それもありますし、大体、予算制度が単年度主義ですから。

海原 そうですね。特に経団連もそうなんですよ。だから私は何回か行って言いました。「本当に日本で国産したいなら、それらしい取り組みをしないか。あなたの方がやっていることは、単に模倣しているだけじゃないか」と言ったことがありますよ。それは例えば戦車一つ取っても、日本で三菱が造った戦車について、朝日新聞が世界の一流だと書いたことがあります。とんでもない、世界の三流です。

それは、私がドイツの戦車工場に行つて質問しました。そのとき迂闊にも、模型がいっぱい並んでいますから、「どの戦車がいいんだ」

と聞いたんです。これは話しましたね。そうしたら、「お前さんの質問は間違っている」と言われた。それは、どういう時に使う戦車の中で、どれがいいかと言えないといけない。戦車にはいろいろな役割があるんだから。簡単に言えば、ヨーロッパのような広い平野で機動戦をやる場合と、日本のような狭いところで、水田があるところで動く場合と、全部違うと言っているんです。それぞれ全部のナンバーワンはあり得ない。だからどういふところで、何の目的のために使う戦車ではどれがいいか聞け、と言う。これで、ああ、と思いました。私の質問が全てを物語っていますね。日本では、どこがいいか、ということになる。

佐道 「制服」の人たちはどうだったんですか。海外の最先端の物がいいと言うのか、やっぱり国産の方なのか。

海原 いや全て国産です。

佐道 「制服」の人たちも、ですか。

海原 「制服」が、ですよ。造らんといかんと。そういう技術を持たないといかんと。

伊藤 それは納得されるわけでしょう。

海原 何年かかると、と聞くわけです。

伊藤 そこから先ですね。

海原 それから、持てる物と持てない物があるんです。それは吉田さんの話は何回か前にお話ししたでしょう。あの人が旧軍人から言われて、アメリカ式のやつは身体から言っても日本人向きじゃない。だから日本人向きの物を考えろと。そうすると、アジアに兵器が輸出できる。まさに後は考え方が違うんです。そういう発想もあるわけです。どちらで行くかですね。

伊藤 結局、車では小型車を造って、それでやって行ったということと同じことですね。

海原 そうですね。時間がかかりますわね。日本車がいま世界で活躍をしているのは、それなりの努力があるわけです。トヨタにしる日産にしる。その努力そのものが、兵器産業では待てないんです。それは私自身が体験したことです。FXの時に、何にしたら何か月間、工場が空いちやう。その間のつなぎに飛行機を造れないかと、幕僚長がわざわざワシントンでアメリカの空幕長に聞くんですからね。恥ずかしいことですよ。しかし、そういう感覚です。このままで行くと、プロダクション・ラインが何か月間アイドルになる。それではまずい。その間に何かを造らなければいかん。そういう面が非常に強かったですね。今でもそうじゃないですかね。

伊藤 まあ、どうですかね。六〇年代と今とは同じとは思えないんですが。

海原 そこは物の考え方ですが、会社自体の差し当ってのプロダクション・ラインがどうなるかということの方が、問題としては大きくなっているんじゃないですか。

伊藤 あとエンタープライズの問題を伺って、国防会議のお話と武器輸出三原則の話がありますね。

海原 私は時間は構いません。

佐道 五番目のエンタープライズの問題は時間がかからないと思えますが。

海原 エンタープライズの問題は、防衛庁としてはないんです。ただ外務省との関係で、当時外務省の局長と親しかつたので、何も私は問題がないと思っただけですけどね。地元を抑えるのに時間がかかった。

佐世保とか横須賀ですね。全てを通じて言えることですが、核というものについては、必要以上に神経過敏でしたね。一番初めに、原子力潜水艦が入ってくる。そうすると港が汚れるとか放射能がどうかとか。それは学術会議が中心でしたね。それが一番初めの問題です。要するに港が汚染される。日本人は魚を食している、だからそれは困ると言う、それだけです。それで、そんなことはありませんよということを言っていて、ああそうですかとになった、というのが実状でしょうね。

伊藤 それに一年数カ月かかったということですね。

海原 私が、志賀長官のお供をしてアメリカに行った帰りに、ハワイで原子力潜水艦に乗ったというお話をしましたね。あの時に向こうの潜水艦隊司令長官から、「なぜ日本人はそんなに嫌がるんだ」と聞かれた。その時に、「それは核について神経過敏だから、これを鎮めるには時間が必要だ」と言ったんです。「どのくらい待てばいいか」と聞きますので、「まあ二年は必要だ」と言ったんです。ちょうど二年で潜水艦が入って来た。二年とは長過ぎると言うんですが、そのぐらいかかるんだ、と言っただけですけどね。とにかく日本人は核については、皆さん方がとても理解できないほどの神経過敏だと。私は佐世保とか横須賀に行っているいろいろな人と話をしているけれど、特に一番困るのは学術会議の先生方だと。

伊藤 学術会議というのは左翼の団体なんですから。

海原 そういう先生方がいったんこうだと言われたら、改心するには時間がかかるんですね。

伊藤 改心しないんです。

海原 改心する人はまだ良い方ですね。ちょうど二年目に入ったんですね。そんなことがありました。エンタープライズは、ただでかいと

いうことですね。だから当然核を装備しているだろうということ、私もずいぶんあちこちで説明しましたが。

伊藤 やはり説明に歩かれましたか。

海原 行きました。官房長としての仕事の半分はそれをやりましたね。広報関係、PR。それはやってくれというものですから、行きましたけれどね。伊藤君と手分けしてやりましたよ。

伊藤 やはり地元が問題なんですね。

海原 そうですね。その件では、佐世保の市長をしておられた方が非常に好意的といえますか、理解していただきまして、ご苦労をかけた。特に安川君が外務省にいまして、彼もあちこちに行つてやっています。途中から、だんだんみんなわかつてきたんですね。そこに行くまで、話を聞こうというムードになるまでが時間がかかる。

伊藤 聞けばいいわけですね。

海原 聞けばいいんですが、なかなか聞こうというムードにならない。伊藤 先ほど、核に対して神経質だとおっしゃったけれど、それにしてもこの間の事故「JCOの事故」はずいぶん無神経というか、どうしてああ極端なのか。

海原 驚きましたね。驚くことが多くて困りますが。

伊藤 驚きがなくなっても困るんですけれど。さて、どうしましょうか。

佐道 切りがいいのは、武器輸出三原則のお話まで伺って、次回国防会議のお話から、ということにすればと思いますが。

伊藤 武器輸出三原則ですね。

海原 これは政治的発言ですから、その後、三木さんの時まで後が響くわけですね。これは別にどうこうということはなかったですけれど

ね。何がお知りになりたいことですか。

佐道 実際、三次防で兵器国産化という話が進んでいるわけですね。国産化という話をしていて、それこそ吉田さんの頃に遡ると、兵器を東南アジアに売るとか、そういう話もある一方で、そういうことをすると、兵器の値段は高騰せざるを得ないという問題もありますね。

海原 それは途中になりますね。一般的に言いますと、「触らぬ神に祟りなし」が多かったですね。外務省といえども兵器輸出については。例えば練習機の引き合いがインドネシアからあった。練習機を持つて行って、向こうで機関銃を乗せれば兵器になると言うんですね。外務省がそういう調子です。それが受け入れられるんですね。しょうがない。そんなことのために、一般的に変な誤解をされては困るのではないかとということで、私たちはしばらく様子を見ようじゃないかということになってきたことは事実ですね。

伊藤 練習機をそういう形で輸出ができれば、一機あたりのコストはずいぶん下がるわけですね。

海原 そう思いますね。しかし、なかなかそういうリーズナブルな検討にはなりませんね。それから、得てして一般的には、政治的な要請に対しては「イエス、サー」が多いですな。「イエス、バット」はななんです。まあ、「触らぬ神に祟りなし」ですね。

伊藤 おそらく、これをこういう形でやらなければ衆議院で大いに揉めるといふことでしょうね。

海原 国会に社会党がいますからね。物わりのいい人ではありませんから。揉めることが問題なんです。私らは大いに揉めていいと思っ

ていたんですけれどね。

佐道 一方で、経団連の防衛生産委員会とかは、それほどの力がなか

ったということですね。

海原 力はありません。

伊藤 政治的な力はないんですか。

海原 ないですね。あるような格好をしているだけです。それは、防衛生産委員会が出て来て、忙しいことをおっしゃる政治家がいますが、その人たちがどれだけ事実上サポートしているか。駄目ですよ。

伊藤 社会党の説得とか。

海原 一切やりません。この前お話ししたのですが、例えば自民党の国防部会で、当時池田さんの低姿勢が問題だった。それをなじる人は、いわゆる佐藤派ですよ。その佐藤派がしきりに現政権はどうだ、こうだと言うでしょう。そしてお話ししたことで、「これからは総裁候補者は国防部に連れて来て、国防部会でどういう考え方を持っているか質問しようじゃないか」ということを、ある議員が言った。「賛成、賛成」と言って全員が賛成なんです。誰もやらないです。その後で佐藤氏が総理になったでしょう。みんな黙っている。そんなものですよ。

そのとき私は、たまたま国防会議の事務局長をしておったのが私の先輩ですから、佐藤さんがなる前、「この次の総理は佐藤さんに決まっているんだから、暇な夏に軽井沢に行って、佐藤さんに防衛問題を話していらっしやい。そして東南アジアの国も視察してくるように言いなさい」と言ったら、「よし」と言っ行って行ったんですね。私の前の北村さんです。やったけれど、結局何も言わないです。そんな程度です。それは真剣に物を考える人はいませんでしたね。そこにあるのは、「当分日米安保体制がある、大丈夫だよ、何とかなるよ」ですよ。

佐道 国防会議に所属している議員さんなんていうのは、先生からこ

覧になると、どこの派閥の人が多いか、そういうことはありますか。

海原 駄目ですね。

佐道 各派閥でバラバラですか。

海原 バラバラで駄目ですよ。

河野 国防会議は最初の頃は、野村さんとか保科さんとか、そういう出身の方が強かったわけですね。

海原 強かったというより、この人たちは特定の兵器の生産に対して関心があつたわけですね。

河野 では、安全保障政策全体に影響力というのはなかったんですか。

海原 ないですね。そういう発言をする人はゼロでした。また、私に言わせれば能力がないんですよ。先ほど言いましたが、日米安保条約にしても、「縛れ」という感覚の人ですからね。

河野 その人たちは世代的にはどちらかというと戦中派で、そこから世代的に変わってきた時期というのはないですか、国防会議で。

海原 ないですね。もう一つの例で言いますと、先程から何度も話が出ていますが、国産ということについて、物事をみんな簡単に考えておられる。ナイキ、ホークの国産というところ、簡単にできると思っているんです。それは大変難しいことだということを知らないんですよ。だからナイキはどこで、ホークはどこで、東芝が片一方をやるなら三菱がもう一方をやるのか、分けて発注しよう、賛成、ということになっちゃう。そんな簡単なものじゃない。あなたの方が提案していることは大変難しいことなんですよ、ということも言ってもわからないんですよ。日本人は優秀であるという考え方が基本的にあるんですな。

それは皆さん方はおわかりにならないでしょうが、飛行機を造る時に治具、工具が要りますね。治具（ジグ）というのは英語なんですな。

日本語を当てたんです。それはどういうことかと言うと、例えば飛行機の翼に穴を開けるのに、きちんと穴を開けるものを予め用意したものがあるんですね。翼のどこにリベットを打ち込めというのがある。それが治具なんですね。日本では、こんなことは昔はやらなかった。全部職人が勘でやっていたんです。川崎の技師から聞きましたが、「いやびっくりしました、アメリカは全部そういうことまできちんとか決めていきます」と言うんです。ということは、向こうではあまり教育のない人もいるでしょう。だから誰でも間違いないし、どこに釘を打つてどうするということをきちんとか決めているんですね。それに必要な工具も全部用意している。そんなことは日本ではやっていなかった。一事が万事なんですね。

だから、普通の小学校を出たような人がやつても失敗のないように、生産のための手段を整備して、それから生産に入るといのがアメリカ方式なんですね。それが日本にはなかったんですな。それをやると大変金がかかるんですね。それは大変なことなんです。そういう、いわゆるアメリカ式の近代的な兵器生産のための基礎的技術を習得するのに時間がかかりましたね。そういうことは政治家の先生方はご存知ないんです。何でも国産が簡単にできると思っているんですね。〇〇戦闘機をつくったとか、「隼」があるじゃないかとか言うんですね。佐道 国産でアメリカと戦ったわけですから、その記憶があるんでしょうね。

海原 そんなことでした。

伊藤 今日ここで切り上げて、次回、一番問題の国防会議事務局長に転出するところをお願いします。もう語り尽くされたかもしれませんが、これもお話の流れとしてどうしても必要なので、もう一度お願

いします。

海原 どこまで申し上げていいかわからんわけですね。一つ言いますと、私が慌てなかったのは、これは本に書きましたが、後藤田君から電話がかかってきたことなんです。クビになる一週間か二週間ぐらい前に、「海原、おい、今度喧嘩する時には俺のところに来いよ」と言ったんですね。「喧嘩って誰と喧嘩をするんだ」「わかっているだろう、お前のことだよ」「俺は別に誰とも喧嘩する気はない」「お前も案外呑気だな」と言うんですね。それが電話のやりとりです。それでわかりました。ああそうか、俺をクビにしようとしているんだな、と思った。

ところが、私をクビにした増田さんがどういことを言ったかというところ、「海原君、僕は君が大好きだ」と言うんですね。三年越しの防衛二法が通った後で金一封をもらったわけです。十何万円入っていた。それで新聞記者諸君と慰労会をやった後なんです。「いろいろ言う奴がおるけれど、俺は君が好きだよ」と言ったんですよ、増田甲子七閣下が。「ああそうですか、どうも恐れ入ります」と礼を言ったんです。その増田甲子七大臣が、北村さんの後に行けと言うでしょう。

伊藤 それは、にっこり笑って人を切るということですよ（笑い）。

海原 彼はそれほどの度胸はなかったですね。それから、今日初めて言うことなんです、肝心の北村さんに話してなかったんです。私の先輩ですよ。その北村さんに了解を取ってからやればいいでしょう。取っていなかった。それで官房副長官の石岡（実）が北村さんのところに夜、口説きに行ったんです。そうしたら、北村さんは俺は辞めないと。辞める理由がないと言う。なぜいま俺が辞めなくちゃいけないんだと言ってね。それを納得させるのに時間がかかっている。そ

んなことがあるんですね。

佐道 今回の話を次回はプロローグとしてお願いします。

海原 クビの話は大変ですよ。しかし、後藤田君の電話は助かったですね。まさか、私は防衛二法案が通ったばかりで、ご苦労さんと言われて、増田大臣から金一封をもらって、慰労会をやれと言われて、やった直後ですよ。まさかと思った。ところがああそうか、ということ、で、私なりに考えたんですけどね。

何度も同じことを言いますが、後藤田君の電話は助かりましたね。あいつが知っているんだから、そういう動きがずっと上まで行っていたんですね。私もついぶん先輩とか、その他親しい人がいるけれど、誰一人言ってきたりしませんよ。私の異動について知っていたという人がいるんですが、その人だって言わないですね。そんなものなんですね。

伊藤 今度ゆっくり伺います。人事は一体どうやって決まるのか、深く伺ってみたいと思います。切られる方はわからないですからね。

海原 私がお話するのはいいんですが、何の役に立つのか。あまり面白くないようで、済みません。

伊藤 どうもありがとうございます。お気を付けてお帰りください。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第18回

開催日：2000年4月13日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時40分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 18 回 質問項目

今回は、官房長から国防会議事務局長になられた時代のお話を中心に伺いたいと思います。

- ① 1967 年、官房長から国防会議事務局長に転出されます。まず、その時の経緯等からお願いします。前回の質問項目にも書きましたが、その時のことについては、ご著書『日本防衛体制の内幕』にも記述があります。先生のご経歴の流れとして重要な点ですので、改めて詳しくお願いいたします。
- ② 先生が移られた当時、国防会議には防衛庁や外務省の情報ほどの程度入ってきていたのでしょうか。それに関連して、国防会議の構成、権限、問題点等をお願いします。また、事務局長に就任されて、まず取り組まれたのはどういった仕事でしたか。
- ③ 1968 年 6 月、米軍機が九大工学部に墜落するという事件があり、これを契機に板付基地移転問題、さらに米軍基地の整理統合問題が浮上し、アメリカと交渉が始められました。こういった問題については、国防会議にはどのような情報が入るのでしょうか。また、先生ご自身はこの問題についてどのようにお考えでしたでしょうか。
- ④ 69 年に入った頃から、防衛庁は沖縄返還に伴う沖縄防衛計画の準備にかかったという報道があります。沖縄防衛についてどのような計画が検討されていたか、ご存知の点をお願いします。また、沖縄が本土に復帰すること自体、日本の防衛問題から見た場合どのような意味があったか、先生のお考えをお聞かせ下さい。
- ⑤ 1970 年 1 月、中曽根康弘氏が防衛庁長官に就任します。中曽根長官の下で「国防の基本方針」改定問題、四次防策定問題がありますが、中曽根長官が行おうとした諸施策について、当時どのようにお考えでしたか。
- ⑥ 中曽根長官の下で、策定が進められた四次防ですが、航路帯建設を中心とする「中曽根構想」に先生は異議を唱えられました。この問題について、同構想の内容、問題点、当時の議論の動向などについてお願いします。
- ⑦ 1970 年 11 月、三島由紀夫と「楯の会」会員が東部方面総監部に侵入、クーデターを呼び掛けた後、割腹自殺するという事件がありました。この事件をどのようにご覧になりましたか。また、自衛隊内の反響はどうだったのでしょうか。
- ⑧ 72 年 2 月から 3 月にかけて、四次防予算先取り問題をきっかけに、シビリアン・コントロールの問題が浮上し、各党がこの問題で、例えば社会党が自衛隊を調査する特別委員会を設置する構想を出したり、民社党、自民党が防衛常任委員会を設置すべきだと主張していますが、この問題についてご記憶のことがあればお願いします。
- ⑨ 72 年 4 月、佐藤総理が、国防会議の拡大、討議事項の再検討を指示したと朝日新聞が報道しています(4月17日夕刊)。その経緯や結果等についてお願いします。
- ⑩ 72 年 12 月に先生は国防会議事務局長をお辞めになり、評論家の生活に入られます。同事務局長をお辞めになる経緯などをお願いします。また、同職在職中、最も印象に残っていることはどのようなことでしょうか。

兵器の国産化と「武器輸出三原則」

伊藤 質問に入る前に、前回の追加のお話をお願いいたします。

海原 はい、しきりに国産化のことを問題にしておられますね。

伊藤 われわれが問題にしているというより、当時の文書を見ますと、その問題がたくさん出て来るといふことですね。

海原 この映画の記事は差し上げましたか「朝日新聞・昭和四十一年二月一日付「米軍あつての安全・防衛庁がPR、映画つくり全国に」という見出しの記事のコピー」。

佐道 映画の話は伺いましたが、その新聞は見ておりません。

海原 当時の新聞が出て来ました。取り上げたのは朝日だけです。これで国会で質問されましたが、ここに書いてあるように、「判断は国民が下す。その判断の材料を提供しただけです」と、私は言ったんです。みなさんが、自衛隊はどんなものか、米軍はどんなものかご存知ないわけですから。これ「映画」は評判が良かったですよ。一年やりましたからね。

伊藤 衛藤（藩吉）さんがコメントしていますが、「姿勢は正しいと思う」ということですね。

海原 この頃は、しかし楽しかったですね。何をやっても叩かれますから。

伊藤 この前のお話では、「前・後編」があったという話はなかったように思いますね。

海原 後編というのは、私たちではない。後で作ったんです。あるいは、『中立国の国防』というのを作りましたので、それを後編と書いたのかもしれない。それは確かめられませんでした。

伊藤 「後編は、四十一年度予算で制作にかかるが『極東の平和』に焦点を合わせ」云々と書いてありますね。

海原 そうですか。では違うものですね。

伊藤 しかし、「前・後編を通じての構想は、防衛庁の海原官房長が立てた」と書いてありますよ。

海原 そうかもしれません。それから、この前松野さんの問題がだいぶ出ていましたから、その頃の松野さんについての資料が出て来ましたので、ご参考までにどうぞ「『政界往来』六十年十一月号「政界のはぐれガラス松野頼三・にんげん全データ」（山川要）のコピー」。「はぐれガラス」というのはどういう意味なんですかね。

伊藤 はぐれたんでしょう。

海原 いい意味じゃないでしょうな。

伊藤 いや、独立独歩ということと同じです（笑い）。

海原 いい意味にとるのか、伺わなければわかりませんな。

伊藤 それでは先生が大変気になさっている、国産化問題をお話しいただきましよう。

海原 国産化問題を補足的にお話しします。これは現物があります。これは読売新聞が出した『航空自衛隊』という本から取ってきたものです「同書一四八〜一五九ページのコピーを示す」。最初は、このC-46という飛行機を使っていたんですね。アメリカの中古です。これをアメリカからもらいまして、これで、空挺団の輸送もやったわけです。それが古くなり、老朽化してきたので、造ろうということになっ

て、国産のYS-11ができるわけです。YS-11は民間にもずいぶん売りましたし、輸出もしました。その後継が、ジェットのC-11になるわけです。その後が、アメリカから買ったロッキードのC-130Hという大型の輸送機です。

それが今までの経歴なんですが、まずC-46を使って、これを輸送用にしました。それから空挺隊の使用機にもしたわけです。これが古くなりましたので、YS-11になるわけですが、そのYS-11を日本が造り、外国にも送り込もう、売り込もうということで、通産省が中心になって、売り込んだわけです。その時に防衛庁にも、これをC-46の後継機として使ってくれという連絡があったわけです。

これにつきましては、防衛庁の中に装備審議会というのがあります。これは防衛局長、装備局長等関係者が集まって、どういう装備を入れるかという検討会です。これは防衛局長も個人で委員になっています。その席で出て来たのは、「航空自衛隊はC-46という古いものを今まで使っていた。それは乗降の入り口が横に付いている。航空自衛隊、それから陸上自衛隊の空挺団も、後ろに開いている方がいい、後部に開閉口があった方がいい」と言う意見です。「だからYS-11はC-46と同じで、横に出入り口があるから駄目だ」と言って、全員反対なんです。

そこで私は、「今までC-46でやっていたじゃないか。だとすると、今度のYS-11でもいいんじゃないか。日本政府としては、これを各国に売り込む、言うならば国策として外国に売ろうという時に、お国の航空自衛隊が使っていますかと言われて、いや使っていません、ということでは、私が責任者であっても売り込めない」と言っただけですね。「当然、日本の防衛庁が採用すべきだと思う。出入り口が横に

あるなんていう不便は当然我慢しろ。どうしても後ろから出入りするようになりたいのなら、アメリカのC-130を買え」と言っただけです。そうしたら、その時に何と言ったか。航空自衛隊の幹部連中が全部、「あんなボロ飛行機は駄目だ。おんぼろ飛行機で年数が経っているし、とてもそんなものは使えません」と断ったわけです。それじゃあ、ということ、新しい輸送機を造るわけです。

その新しい輸送機が川崎のC-11です。これが出て来た後、この後継機にC-130を買ったんです。私が二十年前に、この飛行機がいい、これなら自衛隊があちこちに行くのに使えるからと言った時に、あれは古くて駄目ですと言った飛行機をいま使っているんですよ。そして「新しい国産の川崎のC-11は、いい飛行機だ」と、彼らがしきりに言うわけです。どういう点がいいか。特徴が六つくらいあるんですが、その代表的な例が、普通の運動場にも降りられるし、そこからも飛び上がれるというんですね。要するに、滑走路がないところでも離着陸できる。これは非常に運用上便利だ。これは最優先の要求性能ですね。そういう特徴が六つくらいあるという。ところが、全部駄目。そんなものはできないんですよ。

私は、「そういうものができるのなら、アメリカだって造っているだろう」と言っただけです。「どこの国も、皆さん方が必要とするような要求性能を持った飛行機が欲しいと思って、やっただけに違いない。しかし、それはできないんだ。だからアメリカはこの飛行機「C-130」を使っているんだと思う」と言ったら、「いや、よその国がどうあるうとも、わが日本の技術をもってすれば、その要求性能通りの飛行機ができます」と断言したんです。装備審議会の席上でも、そうです。その後、予算要求の段階になった時も、私が調べて、どうもこれ

は無理だということで、夜、わざわざ航空幕僚長のところまで行きまして、「この要求は取り下げろ」と言ったんです。「いや、絶対に大丈夫ですから」と言って聞かないんです。

それで、できたのがC-11ですが、「こういう新しい性能を持っておりませう」と言った性能は全部駄目、駄目なんです。実現しない。滑走路が整備されていないところで離着陸できるということについては、試験飛行すら危なくてできないんです。やっていない。そういうことで、いろいろな利点を盛り込んだ飛行機のはずが、結局駄目なものですから、年数が来たら、それでもうお払い箱になったわけです。そして今度はC-1130を手に入れたということなんです。前にも、お話ししましたが、そういう経緯なんです。これが、いわゆる国産化問題の象徴的な姿です。

伊藤 このYS-11は国産なんですね。

海原 それは国産です。しかし駄目です。これはもう造っていません。

伊藤 もちろん造っていませんが、われわれが目にしたことがある飛行機ですから。

海原 これも問題があるんです。というのは、C-46という飛行機は外国製のものですが、翼が最初は水平に出ている、それから上がっているんです。ところがこのC-11は、いきなり胴体から斜めに上がっている。このために、ある速度での旋回飛行をやった場合に落ちる恐れがある。それは試験飛行をした時のパイロットの証言にあるわけです。だから問題機なんです。そういう問題がある。

伊藤 でもこれ「YS-11」は民間機として、ずいぶん後まで使われていましたね。

海原 ええ、使われていました。それは通産省から航空会社に言いま

すからね。短距離でしょう。大して時間の節約もしませんからね。それで政府・通産省主導でできた航空機ですから。しかし、売れませぬよ。十機か十数機売れましたかな。そういう経緯があるんです。

ことほど左様に、日本の技術関係者は、簡単に、単純に、「いや、日本人の技術をもってすれば」ということを言うわけですが、実際にやってみると、いろいろなところに問題があつてできないということですね。というのも、この前も申し上げましたが、基礎的な重要な問題についての研究開発の金が付いていないから。それはアメリカがやっていることと比べたら、格段の相違がありますね。向こうは、基礎研究に膨大な金を注ぎ込んでいます。ヨーロッパもそうです。ところが残念ながら日本は、そういう点の努力が足りませんから。

伊藤 それに、飛行機の生産が禁止されていた期間がかなりありますよね。

海原 ありますね。それと、いい飛行機を造っていたという自負ですね。これは自惚れです。そんないい飛行機じゃないんです。そういうものがあるものですから。この前、戦車のお話をしたでしょう。あれができた時には、朝日新聞までが、世界の一流だと書いたんですよ。とんでもないです。そういうことです。それで、この間から問題になっていました兵器国産化の問題の、最後の例として、取りまとめになるかと思つて、コピーを持って来たわけです。要するに研究者は、意欲盛んなんです。しかし、やってみるとできない。

伊藤 海原先生としては、国産はあきらめて、全て海外から買った方がよろしいという主張ですね。

海原 そうです。同時に、もしどうしても国産をやるといふのなら、吉田（茂）さんが言ったように、日本はアジアの兵器廠になるといふ

決心をして、日本人の身体なり、アジア人の身体に合ったような兵器を造る。そういうことをやればいいですよ。

伊藤 武器輸出ですね。

海原 武器輸出です。それを「輸出三原則」だとか言って、輸出はしないと云っているんですからね。これは手足を縛って、お前やれ、というようなものですよ。矛盾しています。その辺に政策としての一貫性がないわけです。それじゃあ、国費で研究費を出すかと言ったら出さなんでしょう。「研究費は」大体、会社が持つでしょう。会社は計算しますね。そうすると、いいものができるはずがないんですよ。

伊藤 国家的な政策としてやらなければ無理だということですね。

海原 そういうことですね。

伊藤 それなら、国産化はあるいは可能かもしれないと。

海原 ものによつては可能かもしれない。

伊藤 何もかも国産化しろということでは、もちろんないと思います。

海原 ところが兵器関係者は、何でも国産と言うわけです。それは、中曽根君あたりが国産で行くんだと言いますからね。それに乗るわけです。そういうことは懲りているはずですが、駄目でしたな。

伊藤 しかし、今はどうですか。

海原 今は全然そういう声が出ないでしょう。需要がないからです。経団連の防衛生産委員会が中心ですが、そういう関係の会社には、結構防衛庁や陸海軍の軍人さんの古い人が行って、その人たちの仕事でそういう注文を取ることですからね。この前申しました、海幕長が顧問に入った川崎は木型を作ったとか、そういうことをやっちゃうわけです。それができるんだ、と言いますから、どうしてそういうこ

とが言えるんだ、と私は言うんです。ところが、自民党の中には、防衛生産委員会がありますし、国防部会有るし、保科さんなんかが大いに気炎を上げています。そういう人の言うことを信用しちゃうんです。私のところに意見を聴きに来ると、私は事実を有りのままに言いますから、あいつは冷淡だ、ということになる。

佐道 経団連の防衛生産委員会が、国産化、国産化と言っている動きや声は、一九六〇年代から七〇年代の初め頃が一番盛んだった。中曽根さんが防衛庁長官になったりしましたね。その後は、あまり国産化、国産化とは言わずに、アメリカのものを買ったりしていますが、それはいまおっしゃった保科さんとか、そういう方がだんだん政界からいなくなつたからです。

海原 それもありますし、いま言つたような例がいっぱいあるからです。この前はミサイルの例をお話したでしょう。空対空のミサイルのサイドワインダー、これと全く同じいわゆるデッドコピーを造つても、スピードは出ない、値段は六倍もする。そんな国産でもやるんですか、と言つたんですね。

お笑いなことを言いますと、私がアメリカのサイドワインダーは、これだけの速度、マッハが出るぞと言いましたら、私のところに説明に来た「制服」が言うんです。「それは乗っている母機、飛行機のスピードが入っています」と。そんな馬鹿な話はないですね。ミサイルは離れて飛んで行くのに、いつまでも乗っている飛行機のスピードが影響するはずがないでしょう。マッハ二の飛行機を撃つのに、一・五ではしようがないでしょう。平気で、そういうことを言っています。こゝほど左様に、子供がおもちゃを欲しい、と言つると同じ気持ちです。伊藤 でもやはり、国防の問題というのは、自分の国で兵器が造れな

かつたら大変だという気持ちがかなり強いんじゃないですか。

海原 何ですか。

伊藤 自国で、自分の国の兵器を造れなかったら困るといふ……。

海原 そこまで行っていないんです。

伊藤 いや、基本的な気持として、ですね。それを将来的な展望としてどういふふうを考えるか、という問題ではないんですか。

海原 そういうふうには真正面から取り組んでいけば、話はわかります。それがありません。そういうことをまとめる人は誰もいません。バラバラですね。例えば飛行機なら、どの会社とどの会社とが一緒になつてやるとか、どういう兵器はどこがやるとか、まとめがないんですね。

伊藤 つまり日本の今の技術で可能な、一歩先ぐらいのものから順次整備していく以外にはないわけでしょう。

海原 そういうことですね。最初はデッドコピーです。それから、いまおっしゃった何歩か先を見て、ただそのためには時間がかかるんです。それが待てないんです。

伊藤 長期計画ですね。

海原 待てないんです。政治家も自分がいる間に、「俺がやった」ということにしたいんですね。どうも日本人というのは、司馬遼太郎さんの言葉で言うと、「遺伝的体質」があるんじゃないですか。

伊藤 みんな遺伝的になつてしまふ。

海原 そうとしか言いようがない。私が防衛庁にいた時には、「研究開発費は、喻えは悪いかもしれないけれど、どぶに捨てる金だ。しかし、それが大事なんだ。それを百やって、そのうちの十〜二十が実を結ばばいいんじゃないか。そういうものなんだ。諸外国はそれをやつ

ているんだ。だから、そのつもりでやらんといかん」と言つても、それには賛成しないんです。基礎研究に金を出せ、と言つても、どうなるか、と言ふ。これが欲しい、このデッドコピーが欲しい、造ればもつといいものができます、と言ふ。そればかりです。だから、結局いま何もないでしょう。兵器で何か残っていますかね。輸送機は、アメリカのおんぼろのC-130が今でも飛んでいるじゃないですか。何もないです。長続き、マラソンができないのが日本人の遺伝子にあるのかもしれない。

伊藤 いや、マラソンは強いんですよ。

河野 大体、戦後のいろいろな産業分野を見ていくと、例えば鉄鋼とか機械という分野についても、当初は輸入論であつたものが、だんだん民間が強くなつて、結局は国産できるようになつて、技術もそれに伴つてくるわけですけれど、航空機産業だけは最後まで国産ができなかつたという、むしろ例外的な業種ですね。

海原 はい。それは需要が少ないからです。

伊藤 いや、売っちゃいけないわけだから。

河野 輸出ができないというのが非常に大きいんですね。

海原 だから余計、気が入らないんですよ。やっぱり会社というのは、五年先を考える人はいませんね。せいぜい三年先ぐらいまでですな。

三、四年の間で勝負しないことにはいかん、という体質の弱さもあるんじゃないですかね、わかりませんけれど。政府も、本当に兵器の生産に本腰を入れて援助するのなら、もう少し金を注ぎ込んで、これとこれとはやるんだ、ということではなければね。

簡単に言いますと、スウェーデンとかスイスが造っている武器が造れないんです。スイスのエリコンなんていうのは、ミサイルのいいも

のを持っていきますから、日本は買っていますね。そういう小さな国が、そういう面がいいところを持っているんですね。

伊藤 それは世界市場に向けて造っているわけですね。

海原 そうです。そういうことです。

伊藤 日本で自衛隊だけを当てにしていたんじゃないかと、とても駄目ですね。

海原 ああ、駄目ですね。だから何度も同じことを言いますが、吉田さんが、アジアを目標にしてやれ、自衛隊だけの需要では駄目だと言った。十八万とか二十万、三十万人ぐらの需要では、そんないいものができるはずがない。しかし日本人向けにいいものができるれば、それは中国にも東南アジアにも行くんじゃないか、と言っていた。その通りだと思っんです。

伊藤 いま中国がやっていますよ。

海原 でしょうね。そういうことです。

伊藤 では国産問題はそういうことです。

海原 それ「読売『航空自衛隊』のコピー」を読んでいただければ、これが非常にいい例だと思っんです。

「巻き込まれ論」と朝日新聞

伊藤 今回は、六七年に官房長から国防会議の事務局長にお出になるところのお話です。これはご本にも書かれていらつしやいますし、お話の流れとして、繰り返しになるかもしれませんが、その経緯をお話

してください。

海原 何回話してもいいです、それは自分のことですから。

その前に、日米安保条約関係で前回申し上げたことを整理しておきますと、例の自民党での「期限」の問題がありましたね。固定にするか、自動延長にするかというのが一つですね。その背後にあるのが、要するに社会党が天下を取ったら困る、アメリカを縛れ、という馬鹿馬鹿しい話でした。これが一つの大きな節です。もう一つは、アメリカ軍の基地をどう思うか。これが安保についての考え方の大きなバツクグラウンドなんです。米軍の基地があると、日本は、アメリカがどこかの国と戦争をやった場合に巻き込まれる。そういう「巻き込まれ論」が案外強かったですね。到る所で、そういうことをおっしゃる人が、大学教授の中にもいましたね。

伊藤 今でも言っている人がたくさんいます。

海原 いますね。どうしてそういう議論が出るかわからないですけどね。例えば代表的なのは末川（博）先生で、アメリカの基地があると、アメリカの戦争に巻き込まれるんだと言っんです。これは、私はわからないんです。表で講演をする時に言っんですが、日本はアメリカを巻き込むことの意味があるんだ。だから巻き込まれるとされたって、いいじゃないか。お前が立場を変えて、自分の都合だけを言ったら、世の中成り立たない。考えてごらんなさい、と言っくと、みんな笑っんです。日本はアメリカを戦争に巻き込むことによって、これ以上ない安心感を手にしているのに、こっちは向こうに巻き込まれるから嫌だ、というのはどういふことですか、と言っくと、みんな笑っりますよ。ここです、問題は。

ところが、当時は「巻き込まれ論」が強かったですね。NHKの放送討論会で、社会党のある有名な人ですが、当時ベトナム戦争があるでしょう。「アメリカの爆撃機がベトナムに行く。いまベトナムに空軍がないからいいけれど、もし空軍があつたら、北ベトナムの空軍機がアメリカのB52の後を付けて来て、日本に来て、日本の板付基地を爆撃する。困るじゃないか」ということを、NHKで堂々とやっているんですね。誰もそれを抑えないんですね。ベトナムにはその時でも、空軍があるんですよ。あつたつて、B52の後を付けて、日本まで来るような能力はない。そういう議論が、当時日本中到处にありましたね。それが民社党の有事駐留論に変わるでしょう。私は自分も日本人なんですが、どうしてそんなに自分のことばかり、自分の都合のことしか考えないのか、と思いましたね。

伊藤 それは自分の都合じゃなくて、社会主義の成功のために、なんじゃないですか。

海原 それは一理ありますね。そんな社会主義を別にしても、末川総長までが、基地があると巻き込まれる、だからアメリカとの安保体制には反対だと、よく言えると思うんですけれどね。それはしようがないですね。基地についての「巻き込まれ論」が大きな背景にあります。それをバックアップしているのは朝日新聞ですね。この前申し上げましたような社説というか、「朝日新聞は考える」ということを書いてた。その後も時々出てくるんですが、「軍事関係を薄めて」と言うんですよ。アメリカには協力が必要だ。しかし軍事関係を薄めて、と言うんですね。薄めるというのはどういうことか、聞いてもわからないです。これは国と国との関係なんだから、向こうにとつても大事なことです。日本のために、東京のためにワシントンが犠牲になるか、

ということになるわけだから。それはアメリカ人の立場に立つて考えなさい、と言うと黙っちゃいますね。私と話している時は黙っちゃうんですが、帰ったらまた同じことを言っている。これはもう何ともならん、ということですよ。しかし、映画も作りましたし、ある意味で一般にPRの効果もあつたでしょう、だんだん鎮まってきました。それから沖縄の問題になるわけですね。沖縄については、この前申しましたか。

伊藤 沖縄については、今日の質問に入っています。

海原 では、その時にしましょう。そういうことで、基地というものが、非常に大きな、反対派にとつての攻撃の材料であつた。今ごろは、誰も基地がどうのこうの言いませんけれどね。

伊藤 社会党がある時期まで基地反対闘争を表に出してやっていますたが、やはり村山内閣ができて以降、大変静かになりました。今また政権から離れたから、少し社民党はガタガタやっていますね。

海原 あの社民党というのは、何もしない人たちですよ。

さつき、食事の時に会合があつて、その時に、石原都知事の「第三国人」発言について話したんですね。石原先生自身が知らないだろうと思うんですよ。

これは余談になりますが、ちょうど私は、終戦の年は高知で課長をしていましたね。翌年、警視庁の交通課長になったんです。私は、交通課長は何をするかわからないので、調べてみた。一体、警視庁の管内に車輛が何台あるのか、わかりません、と言う。車輛が何台あるかわからない。なぜか。それは旧陸海軍の持っていた車輛が、いわゆる隠匿物資で、あつちこつちに払い下げられていて、わからないんですね。それから自分が持っていた車が、どこかに行っちゃったのもあ

るでしょう。

車が何台あるかもわからないで、交通行政ができるかと言って、私はナンバーの切り換えをやれと言ったんです。登録の切り換えですね。そうしたら、それは警察の経費ではできません、都の経費ですと言っています。それで俺が話を付けてくると言って、東京都に行きまして、こういうことでナンバーの切り換えをやりたいと思うと言ったら、わかりましたということで、予算を出してくれた。

その時に私は調べたんですが、今まで一番車があつたのは昭和八年か九年で、大体九万台くらいあつたんです。だから九九、九九九までナンバーを付けておけばいいと思つたんですよ。何せ、白バイが六台の時期ですからね。しかし、一般の民間車と営業車と分ける。民間車は若い番号、一番から五〇〇番までは認める。後は全部切り換える。それから日本人と外国人を区別する。

そして問題になつたのが、いわゆる「第三国人」ですよ。朝鮮人、中国人。そこで、第三国人には二万番台のナンバーを与えることにしました。そうしたら、朝鮮総連とか、華僑の代表が来て文句を言いましたよ。「なぜ、われわれだけを差別する」と言う。「あなた方は、しかし日本人じゃないでしょう」「違う」「アメリカ人でもないでしょう」「違う」「戦勝国でもない」「ならば第三国人だ」と、自分たちで言っていた。「第三国人」というのは、彼らが言っていたんですよ。要するに、日本人じゃない、戦勝国民でもない、そうでない「第三国人」がわれわれだ、と言っている。あなた方が自身で、「第三国人」と言っているんだから、そこで第三国人には二万番台を与えようと云つたら、黙っちゃったですね。反駁できない。「じゃあ、日本人と一緒にしますか」「嫌です」「しかし、アメリカ人でもないでしょう。

しようがない、あなた方自身が、俺たちは『第三国人』だと言っているんだから、そういう扱いにしましょう」ということでやつたんですよ。それが元で、別に差別用語でもなんでもないんです、あんなものは。

しかし、そこまで石原さんは知らないでしょうな、ああいう言葉を使った背景までは。だから「第三国人」とあなた方が言つたんだから、その通りの名前を採用しただけのことですと云つておけばいいのに、何か余計なことを言つたんですね、差別用語であるとかないとか。

伊藤 いや、差別用語だと言われたんですね。そんなわけはないだろうと。昔、使つていたと。

海原 彼もまだその頃いけませんからね。そういうことなんですよ、「第三国人」という言葉は、彼ら自身が言つたんだから。

伊藤 彼らは戦勝国民だとは言わなかつたんですか。

海原 それは言いません。

河野 中国は、戦勝国のつもりだつたんじゃないですか。

海原 後になればそうなんです。「第三国人」が出て来たのは、戦争直後ですからね。まだ平和条約もできていませんしね。

河野 ポツダム宣言の時も中国は入っていた。

海原 しかし、台湾はあれでしょう。その辺は難しいんです。そういう喧しいことはなくて、彼ら自身が俺たちは「第三国人」だと言っているのだから、あなた方は自分で言っているじゃないですか、ということ。別に日本の外務省とか総理府が考え出したものではないですね。

伊藤 いまアメリカ人とおっしゃいましたが、要するにGHQの人たちの車、占領軍の車ですね。

海原 そうです。まだ日本独立前ですからね。占領下です。占領下においては、日本人と、日本人でない「第三国人」と、占領軍の家族と、これしかないわけです。

伊藤 例えばヨーロッパから来ているプレスの中は、どっちに入りますか。

海原 外交官ナンバーですね。

伊藤 いや、新聞記者はどうなんですか。

海原 一般の人は「第三国人」になる。外国人ということ、外国人登録証があれば、アメリカ人と同じになるわけです。だから朝鮮はそうじゃないでしょう。台湾も、華僑はよくわからない。まだゴタゴタしていますからね。今ほどきつちりしていませんから。要するに時代が、占領直後の日本独立前の時代だということにしていたかかないと、話がわからないですからね。

伊藤 それはわかりますが、中国人で、占領者として代表部に来てやっている人たちは、占領軍の中に入るわけですか。

海原 違うんです。それが「第三国人」なんです。要するに、日本の警察権が及びませんから。例えば闇市に行っても、日本人の警察官は取り締まりができない。アメリカのMPに行っても。そういう時代なんです。だから闇市に店を出していても、その店を捜索するための令状は憲兵司令部から出してもらいます。そういう扱いなんです。

伊藤 日本人と日本人以外というのが、一番大きな区別ですね。

海原 そうですね。大きく言うと。

伊藤 日本人以外の、占領軍の配下にある人たち、それはアメリカ人であろうとイギリス人であろうと……。

海原 占領軍です。

伊藤 それ以外の者が……。

河野 「第三」なんですね。

伊藤 一、二、三となるわけですね。それで三万番台ですか。

海原 いや、二万番台にしたんです。外国人を三万番台にしました。

「第三国人」は二万番台です。外国人が三万番台です。

伊藤 日本人は一から始まるんですか。

海原 五〇〇番までが昔の車のナンバーを認める。

伊藤 あと、九、九九九まで、ですか。

海原 それは営業車も入っている。それで四万番台を官庁にするとか、したわけです。営業車は五万番台以降とか、区分してやったわけです。伊藤 そうですか、「第三国人」というのは、われわれが区別したのではなくて、彼らが言った言葉ですか。

海原 そうです。あなた方がそうおっしゃっているから、そう使いました、というだけのことです。「俺たちは第三国人だ」と。「そうで、戦勝国民じゃありませんか」と言うと、「ない」と言う。日本人でもないと言う。じゃあなんですか、と聞くと、「第三国人だ」と言うわけです。そういう意味では極めて論理的なんです。それを石原さんはどこから仕入れたか知らないけれど、あんなふうに使ったんですね。

伊藤 普通に使った言葉ですからね。

海原 しかし、騒擾とか内乱とかを関係づけるために、不穏な不逞外国人と言う。

伊藤 不逞な輩、ですか。

海原 どうも、それが入っている感じですね。

佐道 石原さんの発言はそうですね。

海原 それから、もう一つ悪いことが時々出てくる。関東大震災の時の朝鮮人虐殺事件ですね。それにすぐ話が行きますからね。まず言葉を使ったと思いましたがよ。そういうことで、日本式に言うのと、他意はなかったと思いますけれどね。

佐道 本当になかったのかどうか、わかりませんけれどね(笑い)。

海原 あったかもしれませんね(笑い)。

伊藤 挑発したとか(笑い)。

海原 いかにもしそうな感じがしますね。それから、日米安保条約のことで、言い忘れましたが、前田寿夫さんですか、哲男さんですか、「日米安保条約には百害あって一利なし」ということを国会で証言しているんです。この人は新聞記者ですかね。

佐道 防衛研究所にいらっしゃった方です。

海原 この証言した時の資格はわかりますけれどね。

佐道 前田寿夫さんと、哲男さんがいますね。前田寿夫さんの方は、昔防衛庁関係の方です。

海原 証言した時には、ここに書いてあります。

伊藤 「産業能率大学異文化研究所員」ですね。

佐道 そちらに移ったんですね。八四年ですね。『市民版防衛白書』とかを書かれていますね。防衛研究所にいらしたんですね。

海原 この人が「日米安保はわが国にとって百害あって一利なしだ」とこのように私は考えます」と言っているんです。

佐道 いま宇都宮さんの『軍縮問題』とかに書かれていますから、そのタイプの人です。

海原 これは国会での証言ですよ。私なら反論しますけれどね。「百害あって一利なし」というのはどういうことか、具体的に言いなさい

と言えはいいのに、誰も聞いていない。

伊藤 長谷川正安とか、永井道雄とか、こういう人たちだから。

海原 防衛庁ですか？

佐道 防衛研究所にいらっしゃって、課長さんか何かまで務められて、お辞めになったんです。

海原 私は新聞記者かと思った。よく防衛庁におつて、こんなことが言えますね。

佐道 そう思います。不思議な人です。最近も宇都宮さんの雑誌とかに書いていますから。

海原 あの系統だったらわかりますね。しかし、堂々と「百害あって一利なし」なんてね。

佐道 政府にいらっしゃった方で、辞めた後、全く反対の方に行かれる人もいますね。外務省にいらした浅井基文さんとかですね。

海原 あの人は変わっていますね。僕はあるところで一緒になってびっくりしましたけれどね。今でも結構テレビでしゃべっているでしょう。テレビ局もよく使うな、と思うんですけれどね。面白いから使うんでしようけれど。

伊藤 一八〇度転換というやつでしょう。

海原 私がおかしく思うのは、そういうことを言った時に、議員さん方が「百害あって一利なし」の「百害」というのはどんな害ですか、と聞けばいいんですよ。誰も質問しない。そうですか、防衛研究所ですか。じゃあ、わが仲間だ。

伊藤 「獅子身中の虫」というやつです。

佐道 どこかで海原局長とすれ違ったかもしれませんが。

海原 私が会っていれば、絶対に忘れませんけれどね。それから、こ

れはお話ししましたかね。ちょっと後になってから、日米同盟を「脅威同盟」と言っているんですね「朝日新聞・平成二年五月十四日付」安保三十年、冷戦後への模索」の記事のコピー」。それは論説委員ですかね。

佐道 中馬（清福）さんですね。論説主幹までなさった方ですね。防衛問題で本も書かれた。

海原 朝日新聞というのは、そういうことしか書きませんからね。「脅威同盟」ですからね。まあ、そんなことですね。それから今日の話題に入ります。

官房長更送の一部始終

伊藤 今日のお話は、ご自分のことですよ。

海原 これは整理しますと、昔のことを思い出しまして、あまり面白くないですね。

伊藤 面白くないことを思い出していただくんです。

海原 莊子の言葉に、「五十にして四十九歳の非を知る」という言葉があるんです。私も、そう思いましたね。この前も申しまして、本にも書きましたが、後藤田君から電話をもらったんですね。これで助かりました。自分の一生のことですから忘れもしないんですが、一週間ぐらい前に、後藤田君から電話が来て、「おい、海原」と普通の調子で、「喧嘩するなら、する前に俺のところ来いよ」と言うから、「え

えっ」と言ったんですね。「俺は別に喧嘩する相手はいないよ」と言った。そうしたら、「おまえも案外、うといな」と言う。「誰のことだ」と聞いたら、私のことだと言う。そう言われたら、わかりますからね。追いつくとして、「どこへ行くんだ」と聞いたら、「それは北村さんのところに決まっているじゃないか」と言う。北村さんというのは、私の内務省の大先輩で、当時国防会議の事務局長ですから、「ああ、そうか。わかった。俺は別に喧嘩しないよ」と言ったんです。

そういう電話を後藤田君からもらった後、何も動きがないものから、後藤田君はときどき早耳で間違うこともあるから、間違ったのかな、とも思った。しかし、何とはなしに、そう思っただけで、動きはわかるんですね。

そして当日になりましたら、クラブの連中、いつも来る篠原君とかが来まして、朝十時頃に官房長室で「おめでとう」と言う。「何がめでたいんだ」と言ったら、「しらばくせるなよ」と言うので、「何もしらばくれてはない」と言った。「だって今日、会見があるだろう」と言うから、「いや知らない」と言った。そうしたら、「ちゃんと次官から連絡があった。黒板に書いてある。『午後六時、大臣会見』」と言う。「ええっ」と言っただけです。私は、エッと思いましたよ。クラブとの関係は官房長が連絡役でしょう。官房長が全然知らないんですから。ああ、これは、後藤田君の言う通りだなと思った。

たまたまその日は十二時半からホテルニューオータニで、外務省の北米局長、東郷（文彦）君という同期の人ですが、彼と沖縄その他の問題もあるから打ち合わせをしようということになっていた。それでホテルに行ったわけです。そして二人きりになったんですけれど、そ

ういう状況ですから、東郷が「これから先、沖繩をどうするか」なんて言っても、「ちよつと待て、俺はそれどころじゃないんだ。もう追い出されるころなんだ」と言った。彼もびつくりして、「どうする？」と言うけれど、「それは道は簡単だ。黙って行くか、抵抗するか、辞めるか、三つしかない。まあ、どうせ話は夕方だろう。それまでに考えるよ」と言っただけですけれどね。そうなる、食事をしているもビールもうまくないですよ。「そうか、そんなことになっているのか」ということで、東郷君から言われていた沖繩の今後のいろいろな問題についての打ち合わせはできなかった。

それで帰って来て夕方まで待っていても、どこからも何もない。六時になれば退庁ですからね。連絡がない。後藤田はあ言ったけれど、ひよつとして誰かの耳に入って、どうするこうするということで揉めたんじゃないか。過去に、そういう例があつたんです。官房長を替えるとなると、いろいろ連絡するでしょうからね。そう思っていたら、そこへまた新聞記者が入って来た。それで「何か連絡があつたか」と言うから、「ない」と言った。「大臣の記者会見は取りやめか」と聞いたら、「いや、まだ書いてある」と言う。そう言っていたら、「大臣がお呼びです」という電話が来たわけです。見たら、ちょうど六時です。

これはおかしいんですね。私の上に次官がいるわけです。次官は昔からの友人ですからね。三輪（良雄）氏が防衛庁の官房長になるにについては、この前申し上げたと思いますが、警察から私のところに連絡が来たわけです。だから、普通なら三輪次官から話があるはずだと思うけれど、何もない。いきなり大臣がお呼びだと言う。

それで大臣室に行ったら、「まあ座れ」と。座ったら、途端に「国

防会議の方へ、君、今度行ってくれ」と言う。「行ってくれとおっしゃっても、法律が通つたばかりですよ」と言った。

これは三年越しでしたか、防衛二法案が通つた。この防衛二法案が通るといふのは大変なことなんです。少し経緯を言いますと、定員を百人増やすのでも法律を変えなければいけない。その法律の時に、定員の問題は予算書にも出るし、行政組織全部の話が出るし、何も、防衛庁法、自衛隊法にいちいち書くことはないと反対したんです。そうしたら加藤陽三さんとか麻生君とかが、いや、自衛官についての扱いは嚴重にすることが必要だということで、入れるというわけです。しかしそれをやると、法律を通す、通さんで揉める、俺が社会党だったら、そういうふうに使うぞ、と言ったら、そんなことは……と言つて押し切られた。そういう経緯があるんですね。

事実、防衛二法案と言っているんですが、自民党も形の上では重要法案にするわけです。すると、社会党も重要法案にするわけですね。そうすると出された法案のうち、どれだけ通さなかつたかということが、当時の社会党の功績になるわけですね。何が重要法案かと思うんですね。自衛官を百名増やすのが重要法案か。必ず延びるんです。それで二、三年してようやく通る。そういう習慣があつたものですから、私が官房長になって、今まで溜まっていたものを増田大臣と一緒になつて通したわけです。しかも「ご苦労さん」と言われて、大臣から金一封をもらっているんですね。そのお金で仲間と一緒に会食した直後です。そういうことですから、まさかと思う気持ちが強いわけです。

しかし行つたら、「まあ座りたまえ」ということで、直ぐにそういうことを言われた。そこで、先ほども言いましたように、後藤田君から言われておつたし、こちらの言うセリフはいろいろ考えていたわけで

す。舞台上言うセリフを。その通り、増田さんに話した。「私も長年、役人生活の大部分を防衛庁関係で過ごしてきました。いろいろと自分なりにやりたいこともありますから、少し時間をください」と言ったわけです。「何も、そんなこと考えることないじゃないか。僕は国防会議を強化しようと思ってる。そこに行くんだし、君の大先輩の後じゃないか」と言ってます。「そうですね。しかし、いろいろ考えたこともありますので」と言ったら、「じゃあ一時間以内に返事しろ」と言うんですね。一時間じゃ、ちよつと時間が少なすぎる。私は、「女房にも相談したい」と言った。なぜ私が女房のことを言ったかというのと、増田さんが奥さんのことを常々「同志」と言っていた。それを私もいただいた、「私の同志に相談する」と言っただけです。「これは電話ではなんだし、長年防衛庁におったんだから、家に帰って女房に相談したい」と言っただけです。どういう反応を示すかと思っただけですが、そうしたら、「奥さんとは電話で話したまえ」と言う。それだけです。「じゃあ君、一時間以内に返事してくれ」と言う。

その後、「君、外部と連絡を取るな」と言うんですね。「どうしてですか。私にも相談したい人がおりますから」と言ったら、「外部とは連絡を取るな、君のためにならないよ」と言う。これが増田さんとの会話の全てです。

伊藤 増田さんがその時「外部」と言っただけで考えていたのは社会党ですか（笑い）。

海原 そうじゃないでしょうね。私を防衛局長にしたのは西村直己さんですからね。彼は自民党でも結構力があつたから、そういうところだと思ふ。私があちこちのいろいろな人を知っていることは、増田さんも知っていますから、それでそういうことを言っただけなんです。

私が部屋に帰って連絡したのは西村さんです。というのは、私は西村さんに防衛局長を任命されましたからね。

「実は今、こういうことで増田さんから申し渡しを受けて、替われということだ」と言ったら、彼は電話口でびっくりしました。「増田君は今日の昼に来たけれど、君のことは一言も言わなかった」「何て言っていましたか」「次官は替えないと言った」。この辺は老獪ですね。要するに、三輪次官は動かさないと。一般的には三輪が辞める、その後に僕が行く、ということになっていたでしょう。その三輪を動かさない、ということだけを言ったんですな。しかし、「海原を出す」ということは言っていない。「増田さんは君のことは言わなかった」「それは増田さんのお心遣いでしょう」と言っただけですがね。

もう一人は辻トシコと言って、益谷秀次さんの秘書官を長くやった女性ですが、これに「実は、今度替わるから。君に電話するのは何かをしてくれではない。こういうことがあつたということの証人になつてもらいたい。僕が外部の人に電話するのは、西村さんが一人目で、あなたが二人目だ」と。この二人だけです。

それで次に女房に電話をしたらびっくりされましたね。「それはひどい」と言うけれど、ひどいと言われてもね（笑い）。ということなんです。それに三十分ぐらいいかりましたかね。そうすると、あともう十五分ぐらいいでしょう。約束通り、七時に大臣室に行った。それで、「お約束通り一時間考えましたが、向こうに参ります」と言ったら、「ああそう、それは良かった」と言って、握手しようとするんです。そういうことです。実はその間に、これは申しあげるべきか……。

私も少々腹に据えかねたのは、三輪次官というのは、私のところに来た時にいろいろ経緯があるでしょう。それが、私に一言も言わない

んです。官房長室、次官室、大臣室とあるでしょう。次官から私に、「海原君」と言つて話があつて然るべきでしょう。これが一言もない。まあ、言えなかったのかもしれない。それで私は次官のところに行つて、「いま実は大臣からこう言われた。ついでには、あなたは一言も私にそのことを言わない」と言つた。返事しないですな。できない。「そうですか。あなたとは警察以来の仲で、『柏村一家』と言つて、よく一緒に飲んだりした仲ですけれど、あなたから一言も話を聞いていない。それはそれとして、私が嫌だと言つたらどうします」と言つたんです。「私は何も悪いことをしたわけではない。現に大臣から、今度はよくやつた、ご苦労さん、仲間と飲めと言われて金一封をもらつているわけですから。私が行きたくないと言つたら、どうします」と言つた。返事できない。

それは替えられないですよ、悪いことをしているわけではないから。返事がない。これはもうしょうがないな、と思つた。「とにかく私は大臣に、あと三、四十分したら返事をします。しかし、こういうことがあつたということ、あなたにご報告します」と言つた。

その後、大臣のところへ報告に行く前に、次官にも報告の内容を話しておこうと思つたんです。次官室の中の別室に秘書がいるんです。次官が電話をかけていたので、聞いたなら、「いま法制局長官と話中だ」と言うんです。これは後でわかつたんですが、私が嫌だと言つたらどうするか。方法がないわけです。悪いことをしたんだつたら辞めさせられますよ。しかし、防衛庁から外に出るんですからね。本人が「うん」と言わないのに、出せませんよ。防衛庁の中だったら自由に替えられますね。役所はそんなものです。しかし、防衛庁から外に出るとなつたら、本人の同意なしにはできない。そこで、私が嫌だと言

つたらどうする、と言つたんですね。これは一つの嫌みですね。私もいきなり大臣から言われて、長年の付き合いだった次官から一言もないから、そこは人間としての情がありますな。嫌だと言つてお断りしたらどうされます、と言つたんです。それで法制局長官の高辻さん、亡くなりましたが、彼と次官が話し合つていられるんですよ。だからあの時、私が頑張つたらどうということになつたかと思つと、面白いですね。しかし、結論として私が受けましたのは、そういう空気なら残つても面白くないです。毎日不愉快ですね。それよりは国防会議の方に行つて、そこで別の角度で物を見ようか、と考えた。だから大臣に、向こうに行きます、と言つた時には、何の後悔もないです。そうか、そんなものか、ということですよ。

ところが、ですよ。やっぱり抜かっている点があるんですね。現職の北村さんには話していませんよ、私が行くということ。その時わからなかつたんですが、後で調べたら、当時官房副長官だった石岡という内務省の先輩がいて、これが北村さんのところに行つて、辞表を取るのにだいぶ苦労したらしい。だって、北村さんが辞表を出さなければいけないでしょう。私が本に書いてないことでは、そういうことがある。それは後で知つたんですが、わざわざ官房副長官の石岡さんが北村さんの部屋に行つて、だいぶ時間をかけて口説いたらしい。

伊藤 人事というのはそういうものですか。

海原 私が防衛庁にいる間は何とでもできるけれど、外に出すとなつたら、本人の同意なしでは出せませんよ。身分が保障されていますから。

伊藤 前任者はどうなるんですか。

海原 自分は悪いことをしたわけではないのに、なぜ辞めるんだ、な

ぜ俺が辞めないといけないんだ、という理由だ、と聞いたら困るでしょう。

伊藤 その前任者は辞めてどうなるんですか。

海原 北村さんは、辞めてそのままです。

伊藤 お仕舞ですか。

海原 もう古いんですよ。私より六年ぐらい上ですか。それでも長くなりますしね。三、四年経ちますからね。事実、仕事は何もしておられなかったんです。隠居役だった。しかし、その本人にどうしてOKを取っていないか。それは北村さんに見れば腹が立つでしょう。いきなり辞めてくださいと言われても、何で辞めるんだ、さっきまでそんな話は誰からも聞かないのに、ということになる。

それは私が国防会議に行つて初めて聞かされたことです。あの時、実はこつちでもゴタゴタしました、ということでした。いかに私の人事が順調でなかったかというこの傍証になりますね。急に、この際やっちなまえ、ということになったと思うんです。

伊藤 国防会議の事務局長を替えるというよりも、要するに海原さんをどこかに追い出そうということなんですね。

海原 そういう話です。

佐道 次官にさせない。

海原 辞めろと言っても辞めさせる理由がないですからね。だから、どこかに移すよりしょうがない。中に置いておくと、うるさい。それで北村さんも長いから、ということだったんですね。

佐道 北村さんは国防会議の事務局長としては二代目ですね。

海原 二代目です。私が三代目。初代は広岡さんという大先輩です。昭和二年「採用」です。そんなことがあるんですね。

佐道 国防会議事務局長というのは、特に任期があるとか、定年とか、そういうものはないんですか。

海原 ありません。最初、広岡さんが事務局長になったのは、前にちよつとお話したと思いますが、旧陸軍の服部さん方が国防会議を占拠しようと思つていて、それに対する対策として、池田さんが「君やってくれんか」と広岡さんを口説いたんです。これは警察畑、内務省畑では大先輩だし、人格も高潔な人だということもありますからね。池田さんとの仲で広岡さんがなったわけです。その時はまだいろいろなことをするわけではありません。一種の抑え、ですね。

その後を北村さんが受けて、ずつと来ていたわけです。だから北村さんにご苦労さんと言えば、すぐ辞めてくれると思つたところが、北村さんが案に相違して、何で俺がいま急に辞めなければいけないんだ、となつたわけです。ある意味では、私を庇おうとしたのかもしれない。そう解釈すれば、ですね。だって、私はそこしか行くところが無いですからね。

伊藤 やっぱり、そこしか行くところが無いんですか。

海原 ないでしょう。悪いことをがあつて辞めさせるのなら別ですよ。だって、ポストがないですよ、防衛庁の中には。外局の長にするか。そうすると施設庁長官とか、替えなくてはいけないでしょう。全然関係のないところに行つちゃう。だから、必要最小限度で事を処理しようと思つたんでしょうな。しかし、一つ解せないのは、後藤田君から電話をもらっているのに、なぜそんな無様なことになっているかということ。日にちがあるんですね。北村さんのところにわざわざ行つて、お願いしなければいけないというのは。上手の手から水が漏れたということですか。わかりません。私はそれを調べようとは

しなかつたんです、不愉快だから。これは私が辞めた時の経緯です。

その次にまた国防会議の事務局長を辞める時にもゴタゴタするわけです。これはまた先の話ですが。

伊藤 官房長を動かすという人事は、大臣のところでお仕舞なんですか。

海原 国防会議は、構成上、次官が幹事になるんです。国防会議は総理のところですから、総理のところまで行きます。後はないです。簡単に言えば、防衛庁長官のところまで全部決まるはずですよ。決まるべきでしょうね。何となれば、官房長というのは大臣の部下ですから。それを総理のところの部下にするわけですからね。今と違いますのは、今は安全保障室になっていきますね。これは官房長官の部下なんですよ。私の時の国防会議事務局長というのは、内閣総理大臣の部下なんです。これはだいたい違いますからね。これはまた後で私を辞めさせようとする時に出て来ますけれど。安全保障室ということで、いかにも立派そうに聞こえますが、その室長は官房長官の部下です。前の国防会議事務局長は総理大臣の部下です。ここで扱いが違うんですね。だから、佐々（淳行）君なんかが献策して内閣に安全保障室をつくったんですけれど、あれは私は格下げだと言っているんです。官房長官の下に並んでいますからね。なぜ、そういうことに中曽根君が同意したのかわかりません。私の時までです。偉かつたんです（笑い）。

伊藤 総理大臣の指揮下に入るということは、内閣総理大臣がOKと言わなければいけないわけですね。

海原 そういうことですね、当然。

伊藤 でも一応国防会議事務局長は、事実上の問題として、防衛庁が持っているポストだという慣例なんですね。

海原 そうですね。後はみんな次官が来ましたからね。私の後も、その後、防衛事務次官を務めた者が来たんです。そういう経緯になっているんですね。だから国会でも証言しましたけれど、別に私は左遷されたわけではありません。左遷という言葉をお使いになりましたが、わたしの後には事務次官をやった者が来ております。その後もそうですから、と言ったんですね。だから、そう簡単に左遷とか栄転とおっしゃっても困ります、と言ったんですね。まあ、それは受け取り方ですからね。唐突であることは間違いない。

伊藤 しかし、そういうふうに言われた時は、これは左遷だと思うわけでしょう。

海原 いや思いません。私はそこで仕事をしようと思っていましたから。増田さんがおっしゃっていたように、国防会議事務局を強化することですね。それは私がかねてから言っていたわけです。それは後でご説明しますが、国防会議事務局は形としては立派なものなんです。それは参事官も専任参事官が三人、そして兼任がいるわけです。これは各省から来ているわけです。それをどう取るかということですが、大蔵、外務、防衛から来ているから、形としては立派なんです。

伊藤 じゃあ、その話をしてください。

海原 私が追い出されたことは？

伊藤 それはまた後で質問します。

国防会議事務局とは？

海原 国防会議事務局というのは何をしているかと言うと、私の前の北村さんの時までは何もないんです。内容がない。強いてやったら、日本の将来をどうするかということ、安川君と私と小川君の三人で将来のことを書いて一冊まとめました。それを北村さんがあちこちに持って行って説明をしましたが、それぐらいですね。他に仕事がないわけです。私の時になって出て来たのが「中曽根構想」です。「赤城構想」の時は私は防衛庁でやりましたから、国防会議は関係ないですね。それまでは、国防会議でどうこうという仕事がないんです。だから簡単に言いますと、隠居役で良かった。ところが「中曽根構想」の問題になってから、隠居役では済まなくなったわけです。私が「中曽根構想」をぶち壊しちゃったんです。だからちよっと私が行くまでと、私が行ってからは、同じ役所ですが、動き方が違って来たわけです。それまでは、北村さんはゆっくり午後にお出になったわけです。それで済んでいたんですね。

佐道 増田長官の国防会議強化という狙いは達せられたわけですね。

海原 そうですね。強化でしょうね（笑い）。後で中曽根君がその被害を被るわけですからね。その強化の意味はよくわかりませんが、それは後でご説明しますからね。

伊藤 国防会議に仕事がないというのは、どういう意味なんですか。

海原 それは、やろうと思えばあるわけです。

伊藤 ちゃんと、その職務があるわけでしょう。

海原 だって防衛庁で何もなければ、何もないですな。国防会議の仕事の内容となると、普段どうこうすることではないですね。その質問が出るかと思って、用意して来ました。これは国防会議の構成に関するものです。「国防会議の構成等に関する法律」「同施行令」のコピーを示す」。

まず国防会議と言っても、幹事会があることをご存知ないと思います。幹事会というのは、関係各省の次官です。その下に参事官会議があるんです。私が中曽根さんに国会で「お茶汲み」と言われましたね。彼は知らないんですよ、国防会議の構成を。国防会議事務局長は、国防会議の幹事会の一人なんです。だから大臣がいる、幹事がいる、参事官がいるという三段階なんです。幹事は関係各省の次官になる。その下の参事官には、国防会議事務局専任の参事官と、各省兼任の参事官というわけです。専任参事官は、大体そういう例になっていますが、大蔵、外務、防衛の三人が行くわけです。これが事務局長の直接の子分です。その他に兼任の参事官がいます。これは外務省の安全保障課長であるとか、防衛庁の防衛課長であるとか、そういう連中です。

伊藤 それは職務によって決まっているわけですか。

海原 そうです。なったら、直ちになるわけです。通産省では誰とか、課長のポストで決まっているわけです。大蔵省は主計官とか決まっているわけです。それで参事官会議は週一回開く。そして代人を認めないということが規定に書いてあるわけです。内規です。だから必ず週一回は専任と兼任が集まるわけです。それが局長の前で会議をやる。普段はそれで済むわけですね。

伊藤 その参事官の会議は、誰が主催するわけですか。

海原 それは事務局長が主催するわけです。

伊藤 そうですか。どの段階でも事務局長がなさるんですか。

海原 恐らくご質問が出ると思つて持つて来たんですが、ちよつと見てください。「国防会議事務局・参考資料という手書き資料を示す」。

何日に出たか全部書いてあります。ただし、内容は書かないことにしています。それは置いて行きますよ。

伊藤 それで参事官の集まる会議は何と言うんですか。

海原 参事官会議です。

伊藤 その上に幹事会議があるわけですね。

海原 その幹事会議で審査したものが、国防会議に上がるわけです。

そういう段階になっているわけです。国防会議議員懇談会という表現を使うことがあります。両方とも性格は国防会議なんです。但し、物事を決める時だけを国防会議と言つて、後の会議は懇談会という扱いにしたわけです。

伊藤 自由に発言できるということですね。

海原 そういうことです。それで会議録は残さないということになっています。但し要旨記録はあるんです。表向きはないということになっている、何でも自由に話す、そういうことで始めたわけですね。

伊藤 ないことになっているというのは、公開法ですね。

海原 例えば後藤田君の時に問題になったでしょう。後藤田君が後あの時の幹事会の記録を出せと言つて、内海君がそんなものはありませんと断つた話もあるんですよ。ないことはない、あるはずだ、とか言つてね。私は全部記録を取りましたからね、最高の会議ですから。

伊藤 重要な会議ですからね。

海原 重要な会議で、議事録がないのはおかしいと。それで話が途中

になりましたが、「中曽根構想」の審議の時には、全て録音を取りました。後で全部これでやってくれと。そうしないと何を議論したかわからないし、人によつては受け取り方が違うし、国の政策に関係することだからということ、当時こんな大きいやつ「録音機」で、全部録音をしました。後の証拠にしてくれと。但し、どうなつたかは知りませんけれどね。そういうことで始まるわけです。

伊藤 この「国防会議の構成等に関する法律」の第一条に、「この法律は防衛庁設置法第六十三条の規定に基き」となっていますね。

海原 そもそも防衛庁設置法に国防会議は顔を出したわけです。ところが、その時は国防会議をどうするか決まらないものですから、決まなかつたんです。ただ、国防会議を置くということだけを書いて、後でこれを別に出したわけです。なぜ遅れたかというのは、先ほどもつと申しましたように、旧軍人の策謀があつて、改進黨が民間人を入れると言つてゴタゴタしたわけです。それでまた二年ぐらいかかりましたかね。

伊藤 いえ、内閣総理大臣が議長になるような組織を、防衛庁設置法で決めるというのはどういうことなんでしょう。

海原 だって、同じ法律ですから。内閣法が何かに入れるとおっしゃるのかもしれませんが、あれは防衛庁になるについて、国防会議をつくらうということになったから、ということなんです。

伊藤 そうですか。法律の上位と下位が違うような気もするんですが。

河野 内閣総理大臣の下に置かれてはいるけれど、実質的には国防会議は防衛庁の下にある、ということではないわけですね。

海原 「国防会議は防衛庁の上ですよ。内閣法になければいけない。

河野 でも内閣法にはこの規定はないわけですね。

海原 後でできましたからね。だから本来なら防衛庁設置法に入れな
いで、内閣法に入れるべきだったんです。ところがその時、旧軍人を
どうするとか、人数を三百人にするとか、ゴタゴタするものですから、
取り敢えず防衛庁設置法の中に頭だけ出したということです。

伊藤 国防会議を置く、ということを入れたわけですね。

海原 日本的で、ややこしいんですね。生まれる時からちよつとおか
しいんですね。正室の嫡子じゃないんですね。庶子が認知されたよう
なものです。そういうことでも言わないとわかりませんよね。おかし
いんですよ、防衛庁設置法で決めて、決めるのなら全部決めればいい
ですよ。それを一語だけ決めて、後は別にした。その頃はそういう政
治情勢だったということ、是非ご理解いただきたい。自民党があつ
て、改進黨があつて、社会党があつて、なかなか意見がまとまらない
んですよ。服部さんが三、四百人の事務局をつくろうということで、
あちこち運動する。結局、広岡さんが初代の事務局長になったのも、
池田さんが抑えるためだった。放っておいたら服部卓四郎ご本人が乗
り込むつもりだったんですからね。服部局長になるかもしれない。こ
要するに、防衛庁の中には入れない。だから国防会議に行け、とい
うのが当時の旧軍の作戦でしたね。

伊藤 これ「国防会議の構成等に関する法律」を見ていますと、第九
条で「国防会議に係る事項については内閣法にいう首長の大員は内閣
総理大臣とする」と書いてありますね。

海原 法制局もおかしいんです。この頃は、いかに役人が苦勞したか
ということ。だから、おかしいです。体をなしていない。防衛庁
が生まれた経緯が、そのまま出ているようですね。庶子で生まれたん

です。なかなか認知されない。だから、きちんとその時に整備すれば
良かったんですね。改進黨は改進黨で国防軍をつくれと言っているし、
自民党はそれは駄目だと言う。国防会議の委員には民間人を入れると
改進黨は言う、それは駄目だと言う。とにかく当時は大変だったん
です。

伊藤 これは「構成等に関する法律」ができてから、「法律施行令」
ができるまで六カ月ぐらいかかっていますね。

海原 かかっていますね。その間もゴタゴタしたんです。まず国防会
議事務局の人数からして、確か運転手三名を含めて二十二名ですよ。
それを服部さん方は三百名にしろ、四百名にしろ、と言ったんですか
らね。とにかく、防衛庁乗っ取りに失敗したから、今度は国防会議で
軍がやるんだという目で書けば、国防会議は面白いですね。旧軍の悪
戦苦闘ですね。

伊藤 その旧軍の悪戦苦闘を抑え込むことに成功したが故に、国防会
議は何か非常にいびつになったということですか。

海原 そうですね。それは言えますね。それで海原が苦勞したわけ
です。「海原天皇」というありがたい言葉をいただきましたね。

伊藤 旧軍の代わりに、海原先生が元帥になったんですね。

海原 昔なら、大勲位どころじゃないですよ。私は私の主義で勲章を
辞退しましたから、もらっていません。中曾根君が大勲位なんて、ち
ゃんちゃらおかしいと言っているんですけれどね。辞退して良かった
と思つて。彼が大勲位で、私が勲二等じゃしょうがないですからね。

伊藤 無位無冠の方がいいということですね。

海原 そうです（笑い）。その意味では私の判断は正しかったですな。
あの勲位はおかしな話ですね。

伊藤 これは「構成等に関する法律」ですから、国防会議設置の趣旨みたいなものは、防衛庁設置法の方に出てくるわけですか。

海原 そうです。今日は持って来ませんでした。防衛庁設置法の後ろの方に書いてあります。今度持って来ます。おっしゃる通り、防衛庁設置法の中には、ただ国防会議を置くということで、何の規定もないです。

伊藤 国防会議は何をやるんだという規定もないですか。

海原 それはちよつと、二、三行書いてあります。だって、こんな法律ができるわけですから。

伊藤 国防会議というのは何をやるどころなんですかね。ここ「構成等に関する法律」には書いてないですね。これは構成ですからね。

海原 「六法全書」はないですか。そこまで話が行くとは思いませんでした。国防会議で何をやるかということとは……。

伊藤 私が決めることです、ということですか（笑い）。大臣は外務、大蔵、防衛、経済企画庁、その他に予め指定された国務大臣ですね。

海原 それは今はありません。これは副総理ですね。

伊藤 その後に幹事十人を置くと。局長は幹事ではないわけですね。

海原 幹事十人以内、です。事務局長は幹事です。

伊藤 海原先生も幹事なんですか。

海原 幹事です。

伊藤 辞令はどういうふうに来るんですか。

海原 「国防会議幹事を命じる」という総理の辞令が来ます。

伊藤 事務局長はどういうものですか。

海原 それは別です。事務局長の発令と幹事の発令とは別なんです。ところが中曽根閣下は、それを知らなかったから、私のことを「お茶

汲み」と言ったんですね。後で「お茶汲み」は取り消しましたけれど

ね。速記録には線が引つ張ってあります。要するに、私が「中曽根構想」を批判したことが新聞で問題になった。それについて、「いや、あれは俺たちが決めるんだ」ということを言うために、中曽根防衛庁長官が、「国防会議事務局長は、会議を招集し、文書を配り、お茶を汲む存在だ」と言ったんです。その時、民社党の吉田議員が発言を求めて、その発言は不適切ではないか、取り消したらどうかと言って、「取り消します」と言った。それで議事録では線が引つ張ってある。

伊藤 議事録から削除する時は、そのまま削除しちゃうんじゃないんですか。

海原 違うんです。「お茶汲み」のところだけ線を引く。

伊藤 じゃあ、見えるわけですか。

海原 持つてくれば良かったですね。ありますから、今度持って来ますよ。

伊藤 あれは訂正するんじゃないかな。

河野 国会の審議の時には、発言の訂正の期間がなかったですかね。

伊藤 議事録を作ってしまうまで、ですよ。だから、その日のうちですよ。

海原 民社党の吉田委員からの質問があつて、「取り消します」ということになったんですね。

伊藤 じゃあ、それは後日ですね。

海原 いや、その日でしたね。

伊藤 じゃあ、印刷の途中だったら消すんじゃないですか。

海原 そうですかね。そこまで考えませんでしたか。

伊藤 ちよつと細かいことを言いましたが、それで他の幹事は非常勤

とすると。

海原 非常勤ですね。私はそこで月給をもらいますが、他の人は通産次官とかですからね。

伊藤 全部次官ですか。

海原 幹事は全部次官です。

伊藤 全省の次官ですか。

海原 国防会議の委員になる省の次官が幹事になるわけです。

伊藤 そうすると、副総理の場合は？

海原 これは、この当時はなかったですね。

伊藤 そうすると、外務、大蔵、防衛、経済企画庁。この四つですね。

海原 それで十人というのは。一つの省から二人出てくるとか。

伊藤 幹事ですね。そうではありません。「十人以上」ですからね。

伊藤 「十人以上」ということで、実際には十人いない、ということですか。

海原 十人はいません。そんなに発令しませんでしたから。

伊藤 各省一人ぐらいつつですか。

海原 もちろんそうです。

伊藤 じゃあ四人しかいないですね。

海原 いや、大蔵、外務の他に、警察もありますしね。

伊藤 警察は国防会議の構成員に入っていますよ。

海原 幹事十人以上は「関係行政機関の職員のうちから」ですからね。

伊藤 関係行政機関というのは、外務、大蔵、防衛、経済企画庁ですね。

海原 それから通産です。

伊藤 ここには通産大臣は入っていませんね。

佐道 「内閣法第九条の規定によりあらかじめ指定された國務大臣」というのがあるわけですね。

伊藤 九条は一般的な規定で、何かを指定しているわけではないんです。

海原 国防会議の幹事十人以上というのは、各省次官と考えていましたから、具体的に誰がならなかったか、覚えていませんが。

伊藤 それで参事官は、関係のある部局の指定席ですか。

海原 そうです。大蔵の主計官、防衛一課長、外務省の北米課長とか、ほぼ決まっています。

伊藤 防衛庁から二人とか、そういうことはない。

海原 防衛庁は一人です。防衛一課長です。それから専任参事官が出ていますからね。

伊藤 三人いるわけですね。専任の参事官はどこから採ったんですか。誰が選ぶわけですか。

海原 事務局長と話し合いです。例えば私が防衛局長の時は、防衛一課長は久保（卓也）君ですね。それから国防会議の方の参事官は堀田（政孝）君です。これは年次が違う。堀田君は十五年、久保君は十八年。

伊藤 専任の参事官を選択するのは誰ですか。

海原 事務局長と関係各省庁との話し合いですね。

伊藤 関係各省庁というのは、外務、大蔵、防衛ですか。

海原 そうですね。通産もあります。

伊藤 そうしたら四人になっちゃうじゃないですか。

海原 その時の都合です。

伊藤 そうですね。特定しているわけではないんですね、外務と防衛

は。

海原 絶対に必要なのは、大蔵省の主計官でしょうね。それから防衛庁の一課長。後は外務省か、経企庁か、通産か。その時の都合によりけりですね。

伊藤 そのイニシアチブは国防会議事務局長にあるわけですね。

海原 そういうことですね。

伊藤 誰にも相談しない。相手とは相談するでしょうけれど。いい人をもらわなければいかんわけでしょう。

海原 例えば私の時に参事官をしたのは、亡くなりましたが吉村君です。主計官です。それから堀田君が防衛庁から行っていました。これも好みがありますから、人によって違うかもしれません。

伊藤 やっぱり、それは出身の省庁が違いますから、完全な部下というわけにはいかないでしょう。

海原 部下じゃないでしょうね。

伊藤 事務局長というのは、本当の部下はいるんですか。

海原 本当の部下、と言われると困るんですが。

河野 先生の事務局長としてのお仕事を補佐するスタッフですね。

海原 例えば国防の基本方針を作った時、あれを中心になって書いたのは私ですね。そのとき私は防衛課長です。防衛庁の人間で、兼任参事官です。専任参事官はいますけれど、これは力関係です。いわゆる役職で決まるわけではない。国防の基本方針は、私が防衛課長の時に、私の方で案を作れというから、三案作っただけです。それをどうするかというのを議論するわけです。その時の専任参事官は、防衛庁の人間ではありませんね。私が兼任で防衛庁から行ってはいるわけですから。伊藤 ちよっと待ってください。そうですね。最初は、兼任の参事官

でいらつしたわけですね。

海原 私は兼任参事官ですけど、国防の基本方針は、防衛庁の防衛課長として書いたわけです。

伊藤 その時、専任の参事官には防衛庁から来た人間はいないんですか。

海原 いないです。

伊藤 そういうことがあるんですか。

海原 ええ。

伊藤 しかし、国防会議の専任の参事官に防衛庁からの人がいないと、言うことがあり得るんですか。

海原 兼任参事官ですよ。

伊藤 兼任参事官はいるけれど、専任の参事官として防衛庁から行っていないと。

海原 堀田君がいましたけれど、堀田君は私より下ですからね。

伊藤 そういう意味ですか。では、いたことはいたんですね。先生が兼任の参事官の時に、専任の参事官が。

海原 防衛庁じゃありませんからね。行っているのは堀田ですね。

伊藤 堀田さんは、その時は専任なんですね。

海原 大蔵省からは吉村主計官が行っている。通産から琴坂君が行っている。そうなるわけです。

伊藤 その時は、国防会議の事務局長の部下でもあったわけですね。

海原 そうですね、一人二役です。兼務ですからね。

佐道 今の防衛庁設置法をインターネットで出したんですが、今のは駄目なんですね。つまり国防会議は今はないですね。だから六十一條で終わりで、後は付則なんです。

海原 家にありますから、昔のものを持って来ます。

佐道 今のものを見ても駄目なんですね。安全保障会議になりましたからね。

海原 余計わかりませんね。兼任、専任もわかりませんね。私が兼任参事官で、堀田政孝君が専任の参事官ですね。出身が防衛庁だということですね。

伊藤 わかりました。それで、普通の役所と同じように、事務官もいるわけですね。

海原 もちろんいます。これも各省から来ているのがいます。事務局専任は運転手三名を含めて二十二名ですからね。

伊藤 その専任の中には、他省庁から来ている人もいるわけですね。海原 もちろんいます。

伊藤 そうすると、その二十二人が本当の部下なんだ。本当の部下だけれど、各省庁から来ている連中は……。

海原 ちよつと今ある役所では例がないでしょうね。いわゆるスタッフですね。アメリカでいう、スタッフとラインですね。それを事実上やっただのが、この国防会議の構成でしょうね。スタッフをやった。

伊藤 ですから局長がしっかりしていないと、バラバラになりますね。海原 まあ、そこまで出ますとね。どうでしょうか。北村さんの時までは仕事がないんですよ。

伊藤 お休み所で。

海原 私が行って、そこで「中曽根構想」を整理するものですから。それまではいわゆる国防会議は……。

伊藤 国防の基本方針は？

海原 それは、あそこで決めました。それを決めた後は何もありません。

よ。

伊藤 ないんですか。毎週一回、参事官会議をしているわけですね。海原 それはいろいろ。諸情勢です、外務省の情勢とか。

伊藤 情報交換だけですか。海原 そういうことですね。それが出てくるから、どこから取つてたか、ということになるわけですね。

河野 この「質問項目の」二番目で、国防会議に防衛庁や外務省の情報が入るといのは、週一回の参事官会議で入るといことですね。

海原 そういうことです。毎週一回必ずやりますから。

河野 これは形式的なものではなくて、本当に取りたい情報が入るんですか。

海原 それは、その時の連絡ですね。何も無い時は駄弁ついで終わりかもしれません。それが結構あるんです、あの頃ですから。何を調べろ、かにを調べろ、ということになりますね。それからご存知のように通産省辺りは、しぎりに兵器工業会辺りから国産の問題を突かれますからね。だから中曽根さんがどうしているとか、ああしているとかということになる。そうなると通産の参事官が必死になって、参事官会議をやる。そこ「国防会議事務局「参考資料」の小冊子」にありますか。そういうことをやっていったということですね。それを見ていただくとわかります。何もしないで遊んでいたように思われても困るから。

伊藤 「自衛隊の沖縄配備について」とか、「第四次防衛力整備五カ

年計画について」とか、ありますね。これは議題ですね。後は情報交換があるわけですね。情報交換というのは、やはり口頭ですか。

海原 大部分口頭ですね。

伊藤 ペーパーで配るといふことは？

海原 ペーパーもあります。

伊藤 ありますか。国防会議の事務局には、そういったものがあるわけですね。

海原 整理しているはずですけどね。もうずいぶん変わりましたからね。安全保障室になっちゃったし。

伊藤 しかし、組織としてはつながっているわけだから、引き継ぎはされているんでしょうね。

海原 引き継ぎしていませんね、私の感じでは。何十年経っていますからね。いつの、何をということになれば、どこかで調べるでしょうけれどね。くどくなりますが、私の局長時代は、全部会議の内容はテープに録音しておいたんです。誰でも後で聞けるようにしたんです。

伊藤 その会議は、参事官会議ですか。

海原 はい。

伊藤 幹事会というのは滅多に開かないんですか。

海原 滅多に開きませんが、次官会議は。国防会議で物を決める前に事前にやるだけです。

伊藤 国防会議というのはほとんど開かない。

海原 開きませんね。第何次防というのを正式に決めるまでは。ですから、国防会議で何を決めたかというのは、『防衛ハンドブック』に出ていますね。

佐道 あれを見ていると、ある段階から国防会議を開く頻度が少なくなっていますね。

伊藤 ご在任中にはかなりありましたか。

海原 私が事務局長の時代ですか。結構ありましたね。また同じこと

の繰り返しますが、私は、録音と速記と全部やりました。しかし私の後で、ゴタゴタしたでしょう、専門家会議などで。内海君がなりましたからね。内海君がなって、後藤田君がどうだこうだということ、内海君のところに、後藤田君が要旨をくれと言ったら、そんなものはないと言って蹴ったとか。いろいろあるものだから、あのとき全部ご破算にしちゃったんですかね。私は書類は残しておけという主義だったけれど、内海君はどうもそうでなかったようですね。

伊藤 結局、総理大臣が議長になって国防会議を開くということが何回かあったわけですね。

海原 そうです。

伊藤 でも、シナリオは全部事務局長が作っていたんですね。

海原 そういうことですね。

伊藤 あまりイレギュラーな発言はないと。

海原 幹事と相談していますからね。その前に参事官会議で、こういうことをやるからどうするか、ということをお話し合っているから、意見は集約されているわけです。幹事会でやる時には、問題点をどっちにするかということですね。

伊藤 そこで揉んで、後はセレモニーということですか。

海原 そういうことです。

伊藤 日本の会議のあり方ですね。

海原 そうですね。それ『防衛ハンドブック』にいろいろ書いてあるでしょう。

佐道 以前のものは、もっと書いてあったんですけどね。今年のものは、中期防衛力整備計画についてはどうだとか、その辺りからなっていますね。

海原 私は古いのを持っていきますから、調べて来ましょう。

伊藤 新しくなると駄目なんですね。

佐道 過去のものから切り捨ててしまう。

海原 新しい人は興味を持ちませんからね。

河野 でも、重要なことですからね。

海原 重要だとは思わないんですね。

佐道 「主要決定事項（国防会議）」の部分がありましたので、コピーして来ます。

伊藤 この国防会議のオフィスはどこにあったわけですか。

海原 総理府の別館です。今でもそうじゃないですか。最近行かないけど。別館というのは官邸のすぐ前の、あの何階でしたか。恩給局長の隣です。

伊藤 それでワンフロアぐらいはあったんですか。

海原 ワンフロア全部はありませんね。半分か三分の一です。でも参事官が来ていますし、机もいっぱいありましたから、結構広かったですね。それから会議室と局長室がありました。

伊藤 兼任の参事官は会議の日にしか来ないわけですね。

海原 そうです。別に参事官室はありません。

伊藤 専任の参事官は、もちろんデスクはあるわけですね。

海原 大部屋ですけれどね。机があつて、その前に部員が四、五人ずついるんですね。外務、大蔵、防衛とか。

伊藤 そういふ人たちは日々業務があるわけですね。

海原 そうですね。日々あつたんですね。

河野 運転手さんを入れて二十二人という人たちは、日々結構仕事をしていたんですね。

海原 私が局長をしてからは、ずっといろいろありましたからね。「中曾根構想」のぶち壊しがあつたりして。だから前のこととか、後のことを言われても知りませんけれど、私の時は一番忙しかつた。議案も、国防会議で三つぐらい用意しましたね。だから結構ゴタゴタしていましたね。

伊藤 前の、大綱の時に、兼任の参事官である海原さんが出張つて行ってやっちゃつた、ということはないんですか。

海原 出張つてやつたというのは。

伊藤 ちよつと言ひ方が悪かつたんですね（笑い）。

海原 それは会議ですからね。会議でお前はどしたんだと言われたら、極端なことを言うのと、それは私が全部やつたかもしれませんな。

伊藤 そういうことを言っているんです（笑い）。そうすると、専任の参事官がやる仕事はないじゃないですか。

海原 いや、専任の参事官にはちゃんと仕事を与えていますから。

伊藤 それは先生が局長になつてからの話じゃないですよ。

海原 それ以前は知りません。これは速記をやめませんか。

伊藤 大丈夫です。こんなものは百年後に出たからどうつていうことはないですから。

海原 前任者のことに関するから。

伊藤 ここは、人の悪口も言い放題ですから。

海原 先ほども言いましたように、北村さんは、お体もあまり良くなかつたから、午後三時頃出てこられて、「お早う」と言うわけです。

伊藤 それは、その日に出てくれば、挨拶はお早うです。グッドモーニングじゃないですか。

海原 それから会計はいないんです。国防会議事務局で予算は持つて

いるんですよ。その予算の執行は誰がやっているか。総理府の会計がやっているんです。そういうふうになっている。そういう委任の書類がある。私が持って来い、と言うとわからない。そういう状態なんです。

伊藤 それは海原先生が事務局長の時も同じですか。

海原 だから事務局長になって、予算はどうなっていると聞いたら、わからない。総理府の会計から説明を聞く。

伊藤 そうですか。独自の会計係がないわけですね。その二十二人中にはいないんですか。

海原 いない。少ないから、予算も少ないし、総理府会計課で一切の業務をやるということになっている。覚書がある。覚書はそれでいいから、じゃあ、今の予算はどうなっていて、来月までにどのぐらい使えるのか、と聞いても、わからない。それは総理府の会計課の人間が来なければわからないんです。

伊藤 総理府の会計課が来たらわかりましたか。

海原 わからせました。

伊藤 総理府はよくどんぶり勘定で、総理府の中でやりくりをするんですね。

海原 ひどい話は、十月頃になって、コピーして来いと言ったら、ありませんと言う。予算がなくなっちゃった。コピー機は会社との貸借契約でしょう。

伊藤 レンタルでやっているわけですね。

海原 レンタル。それで、予算ありませんと言う。だから紙代の話ですよ。そういうことを言うと、先輩の時はどうしておったのか、という事になっちゃうわけですよ。先輩の悪口になりますからね。

伊藤 いや、悪口には聞こえませんでしたよ。

予算先取りの「沖縄配備」

佐道 これは、国防会議ができてから、国防会議がどういう決定をしたかということですよ。「『平成十一年度・防衛ハンドブック』一五七―一六〇ページのコピー」。

伊藤 海原先生は、一九六七（昭和四十二）年からですね。どこから始まるんですかね。

海原 私は四十二年七月二十八日からです。

伊藤 そうすると、十二番「昭和四十四年一月」ですから、しばらく「国防会議は」開いていないんですね。「海原さんがなつてから」最初「の国防会議」は四十四年ですよ。

海原 国防会議で決定するためには、その前に幹事会が何回もありましたからね。ちよつと調べてみます。

伊藤 それで四十四年から四十七年まで「国防会議を」開いていないから、間歇的に開いていることになりましたね。しかし、四十七年にはまだ国防会議の事務局長ですね。四十七、四十八年はすぐたくさんやっていますね。

この問題は次回にしましょう。ちよつと「質問項目」の三番目の九大「米軍機墜落事件」の問題はいかがですか。

海原 これは、直接のあれはないですね。事件としての報告があった

だけです。質問の主旨が、私にはわからなかつたんですが。

伊藤 いや、この事件を突破口にして、この時期のことを思い出していただくかということなんです。

佐道 先ほどもちよつと出ましたが、これが一つ大きな話題になって、基地の整理・縮小・統合をもう少しアメリカに働きかけた方がいいんじゃないかという話になりますね。

海原 実は、それだけの問題ではないんですね。当時、自主防衛という言葉がだいぶ出て来たでしょう。基地の整理の問題も、それとの関係があります。しかし、どうこうということはなかつたですね。何をお知りになりたいか、ですけれどね。

伊藤 この事件についてはどんなご記憶がございますか。

海原 これは事件だというだけのこと、またうるさいな、と思っただけのことです。

伊藤 それじゃあ、それで通り過ぎてもいいんですけれど。

海原 このことのために、何かということはないですね。また基地反対闘争が激化したということだけですね。

伊藤 その時期、その時期の状況については、毎週の参事官会議で報告があるということですね。

海原 そういうことですね。

伊藤 参事官会議には警察も入っているわけですね。

海原 それは参考人として入る場合もあります。

伊藤 こういふ事件の場合は、警察がいけないといけませんね。

海原 これは一つの事件ですからね。

伊藤 でも、ずっと続く基地問題という流れがある。

海原 基地問題は前からずっとありますから。

河野 ただ、この時はたまたまですが、沖縄が還ってくるについて、基地をどうするかということで、結構ホットな国内情勢があつたと思うんですが、それはあまり関係ないですか。

海原 ないですね。

佐道 例えば「関東計画」などで、基地の縮小とか整理統合など、いろいろ議論がされてきたとか。

海原 基地の問題はいろいろ変転しているんですね。最初は基地は絶対に嫌だという人が大勢いても、そのうちに、基地ができると交付税があるということで、来てくれということになるし、地方によって非常に違うんです。だから一概には言えませんね。後で防衛庁長官になった人が、これは兵庫県の方ですが、そこに自衛隊の基地ができることに反対の陳情に来ましたよ。その人が反対陳情をされて、一カ月後に防衛庁長官になった。そうしたら、「私は昔から防衛庁のことにつきましては」と言う人ですからね。そういう時代です。もう亡くなりましたけれど。だから基地と言っても、その付近の人の動きが全部政治家に影響するだけのことですね。

伊藤 では、この問題は別の機会に伺うことにして、いまちよつと話が出ました沖縄返還ですね。それに伴って、沖縄に配備する自衛隊の問題がありますね。それを受け入れる沖縄の側の動き、四十七年四月十七日の国防会議で、「自衛隊の沖縄配備について」という決定をしておりますが、そこに至るまでのプロセスは、どういうものでしたか。

海原 これは、国防会議自体は何も関係なかつたですね。自衛隊だけの問題です。ただ、持つて行きようが違うんですね。沖縄は唯一国内で戦争をした場所だということで、沖縄の防衛こそが日本の将来の防衛の基幹である、われわれがまずそこに行つてやらなければいかん

だ、というのが防衛庁の大部分の意見でした。そこで最初に出て行ったのが陸上部隊で、しかも行った方が旧軍の人で、われわれの先輩が血を流したところだという演説をやっちゃったんですよ。それが大変な問題になった。僕は沖繩は輸送機部隊を持って行け、患者の輸送とかですわね。そういうものを持って行って、地元の人と因縁を深めて、自衛隊は昔の軍隊とは違うんだという認識を持たせた後で部隊を持って行くべきだと。何も一個連隊を持って行ったからどうこうということはないじゃないか、と言ったんです。しかし、駄目でした。これも防衛庁は、沖繩こそわが先輩の命を捧げたところだということで、沖繩の防衛こそ日本の防衛である、というような信念でしたわね。

伊藤 沖繩に出て行く場合、自衛隊の基地は新たに設定したんですか。

海原 そうじゃないですね。

伊藤 アメリカ軍の基地を使ったわけですか。

海原 それを逐次返してもらったんです。

伊藤 それを返還してもらって、そこに自衛隊が入って行くと。

海原 ただ、米軍が沖繩をどう見たかという点、沖繩は太平洋の要石であるという大きなスローガンみたいなものがありましたわね。それは要するに、沖繩から北京まで、あるいは台北までの距離の問題です。時間の問題ではない。太平洋の要石であるというのがアメリカの考え方でしたわね。それが、そのまま残っちゃったんです。それをどうするかという問題がありましたわね。

伊藤 残っちゃった、というのはどういう意味ですか。

海原 本土防衛の第一線であるということですね。

伊藤 この前先生がおっしゃったように、戦略的には極めて重要なところでしょう。

海原 それはそうですね。それはアジアの、ですよ。太平洋の要石であって、日本防衛ということになると、別に沖繩がどうこうということではないんです。そこが違うんですな。日本の防衛と言うと、何を防衛するんだということになるわけですよ。そうすると、私は、当時は「共産日本」ですから、政治体制の変革の問題ですから、それは東京だと言います。沖繩の政府がどうなるかが、どうってということない。東京とか大阪とか、国内の大都市における政治情勢がキーポイントだと。

伊藤 それは軍事ではなくて、治安の問題ですね。

海原 治安上大事なのはどこかと言えば、沖繩じゃないですね。沖繩は単に米軍の基地だという気持ちでしたわね。私は全部そういう気持ちでやりました。

伊藤 ウエイトの置き方が違うわけですね。

海原 沖繩は、そんな立派なところだと思いません。だから防衛庁が予算の先取りみたいなことで沖繩に持って行ったでしょう。あれが大問題になりました。あんな馬鹿なことをすべきではないと思っただすわね。あれは内海君が防衛事務次官の時にやっただす。沖繩に対する思い込みが違ってますわね。旧軍の人の、沖繩の防衛こそ日本防衛の第一線であるという信念ですな。

河野 旧軍の人の信念はそうかも知れないけれど、その時は、日米関係の中の沖繩よりも、むしろアメリカの機能を日本に返還した時に、基地機能に差があつてはいけないという配慮じゃないですか。旧軍の人のように、かつてあそこが前線であつたという意識で沖繩に行くとなると、沖繩の住民との意識のギャップが非常に大きいわけでしょう。

海原 それがあるはずなんです。それを、行った連中がわからないん

です。

河野 そうですか？

海原 「陸」の部隊長が演説をやっちゃったんですから。

河野 その話を伺って、だいぶギャップがあるなと思っただんですが。

海原 そういう人が行っちゃったことが問題なんですね。

河野 もし、政治的外交的配慮から言うと、そういうものではなくて、また別の配慮が沖縄には必要ではなかったかと思うんですけれどね。

海原 ですから、何も沖縄にいきなり武器を持って行くことはない、と私は言っただけです。輸送機を持って行け、と言っただけです。離島があるでしょう。ああいうところの病人の収容とか。沖縄と言うところは沖縄本島と各島との問題もありますし、難しいところだから、旧軍の伝統で、われわれの先輩が血を流したところだなんていう熱血漢的な情緒はマイナスだと言っただけです。そうしたら、防衛庁はそうではないんですね。

河野 アメリカ側の認識ともギャップがあつたし、沖縄現地の認識ともギャップがあつたと、こういうことですか。

海原 そう思いますね。私はそう思いました。

河野 アメリカが非常にナーバスなのは、返還したことによつて、これまで機能していた部分が継続的に機能できなくなる恐れがある。それは非常に困る、ということをやつていたと思うんですね。

海原 それは交渉の際の米軍の基本的な線です。それは間違いない。その線と、いま言いました旧軍の意識が違ふんです。それがあつたから、そんなに気負い立って行くよりも、むしろ素直に行つたらいいんじゃないか、と言っただけですけれどね。そのとき私は防衛庁におりませんから、内海君がやっておったわけですが、そこでいろいろな問題が起

こるわけです。おっしゃる通りです。沖縄というものは、東アジアの安全保障にとつては大事な基地だ。しかしわれわれの先祖、旧軍の先輩どもが血を流したところ、ということはあまり言えないと思うんですが、行つた人はみんなそれなんですね。

伊藤 確かに、その通りなんですけれどね。

海原 そこは考え方の差異がありました。だから、沖縄に荷物を運んだことでもいい問題になるでしょう。あれも別に国防会議で決めることでもないんですが、少し先走っちゃったんですな。それを新聞に嗅ぎつかれてゴタゴタした、と私は思いますね。だから内海君の時に、沖縄の「武器輸送先取り」で、国会で問題になりましたね。その時、中曾根君が確か総理だつたと思いますが、今度沖縄の問題でゴタゴタしたのは、内海だけが悪いんじゃない、海原もそうだ、なんていうことを新聞記者に言っただけですからね。辞めさせるのは内海だけじゃない、海原も辞めさせる、なんていうことを言っているんですよ。こつちは何も関係ないですよ。要するにその頃は、そういうことでも政治的に利用されたということです。だから沖縄に自衛隊が出て行くことについて、そんなに客観的な大きな意味があつたとは、私は思いませんね。

河野 予算先取り問題は大きかつたでしょう。勝手にやっちゃったわけですよ、航空自衛隊だか陸上自衛隊が。それは、何度も同じことを言いますが、国内で唯一血を流したところだという思い込みがあるんですね。ここを守るこそ日本を守ることであるという気持があつたんですね、自衛隊には。行つた人は、そういう意味の演説をやっちゃったんです。

河野 事前に沖縄側の意識を探るといふようなことはなかつたですか。

海原 それは知りません。

河野 沖繩の人たちの経験から言うと、微妙ですよ。

海原 これはくどくなりますが、沖繩の、と言われましてもね。私自身がちよつとあちらに関係がありますのは、私の秘書をしておった人の旦那さんが向こうに行つて、最後は宮古島にいました。行つて初めてわかつたですよ。まず沖繩全部と内地の人との関係があるし、沖繩本島と宮古島との関係があるし、さらには島津藩との関係があるし、非常に微妙なんですよ。それは言葉に出しちゃいけないことなのね。そういういろいろな因習、因縁のあるところなんです。そういうことを一切抜きにして、東京から行つた自衛隊の連中が、沖繩こそ祖国防衛の第一線である、われわれの先輩が血を流したところだ、ということまで演説しちゃつたものですから、非常にぎくしゃくしましたね。

伊藤 それはわかるんですが、当時の自衛隊にとつて、敵はソ連ですよ。

海原 ソ連？ あれが敵ですか。

河野 脅威ですね。

海原 いや、そうおっしゃると私も答えられないんですが、ソ連なんか脅威以上のものですよ。

伊藤 それはそうですが、どこを睨んでいるかと言つたら、自衛隊の配備だつて何にしたつて、いつも監視されている。

海原 それは先ほど申し上げたように、私は治安だと思つて。だからそれは、東京、大阪の方が大事だ。沖繩なんか放つておいてもいいと、私は思う。米軍がおればいいというのが私の感じで、全てそういうことでやりましたね。米軍は絶対にあそこを手放したくない。私が仮に米国人なら手放さない、沖繩と小笠原は。だから、あそこは全部彼ら

に任せておけばいい。何も自衛隊が出て行くことはない、という私は主義だつた。

河野 それはよくわかります。

海原 ところが、それが防衛庁の中では通らないんですね。

河野 でもアメリカは、それでやっていって、結局は基地の維持ができなくなると治安に響くという判断ですよ、最後は。例えば、さっきの板付もそうですが、嘉手納の基地で事故が起きて、当時の学生たちが入り込んでしまうと、それが東京に跳ね返つて首都の治安に響く、だから返還だ、という理論だつたと思つた。

海原 それは、非常に失礼な言い方ですが、「アメさん」にもいろいろな人がいるんです。だから、そういう思いの人が多かつたのは事実でしょうね。私もワシントンで、小笠原を還せ、沖繩を還せとやつたんですからね。そうすると、みんな違うんです。自分がいたか、いなかったか、その思い込みが将来はどうかということ、価値観が違うんです。だから、一概には言えないと思つたんです。確かに、そういう面もありました。それは間違いないですね。ただ、三度同じことを言つて恐縮なんです、日本から行つた連中は、唯一あそこは、われわれの先輩が血を流したところだ、ここを守るのがすなわち将来の日本を守ることだ、敵はソ連だ、ということになるわけです。私自身は、そんなことを言うな、と言つたんですが、結局出て行きますね。

伊藤 この問題は国会議の事務局長としては、取り立てて、中でガタガタするような問題ではなくて、これは防衛庁の問題だ、ということですね。

海原 そこまで話しますと、申し上げなければならぬんですが、あれは防衛庁が勝手にやっちゃつたんですね。予算の先行か何かで。そ

の後で新聞が問題にしたら、防衛庁の経理局長、防衛局長、六名ぐら
いが私の部屋に陳情に来ました。「急遽、国防会議を開いてくれ」と
言うんです。「なぜだ」と言ったら、「実はこうだ。これを防衛庁だ
けでやったら問題がある」と言う。「そんなこと今さら、お前たちが
勝手にやっておいて、問題になりそうだからと言って、国防会議を使
うことはまかりならん」と言って、追り返したんですよ。それが向こ
うにとっては大きなショックだったんですね。国防会議は、そんな防
衛庁の後始末をする機関じゃないと言ったんです。そう言った相手は
内海君です。それから経理局長もいた。これが実は後まで尾を引くん
です。私は、国防会議はそんなものじゃないと言った。ところが国会
で問題になって、予算先取り問題となって新聞が騒ぐでしょう。その
後で私のところに来て、「追認してくれ」と言う。私はノーと言った
んです。そういうことがありました。そこまで申し上げないと、その
頃の複雑な、それぞれの場所によって物の考え方が違うことがわか
りただけなと思いますね。

もう一度言いますが、私自身は、別に沖繩に部隊が行くことが大き
な問題になると思っていなかった。また行くについても、そんな〇〇
連隊が来たということでもなしに、ゆっくり行けばいいじゃないか、地
元の人の役に立つような輸送機部隊でも出して、と言った。

伊藤 それはどういうレベルでおっしゃるわけですか。

海原 そういうふうにするべきじゃないか、と言ったんですけれどね。

伊藤 ですから、どういう場面で、ですか。

海原 それは相手は局長です。当時、問題が起こってから来たんです。
予算先取り問題が起こってからです。国防会議は防衛庁の下部機関で
もないのに、国防会議の権威にかけて、そんなことはできないと私は

断ったことがあります。何でこんなことを言っているかという、沖
繩に部隊を出すことの意味について、それぞれの立場でいろいろお考
えが違うんですね。そんな大騒ぎをすることじゃないんじゃないか、
と言ったんですけれどね。

伊藤 わかりました。それでは次回に、四十四年一月十日、四十七年
二月七日、四十七年二月二十五日と国防会議を開いていますから、そ
れを巡る問題がありましたら、お話しいただければと思います。

海原 調べておきましょう。

伊藤 そしてその間に、一九七〇（昭和四十五）年に中曽根さんが防
衛庁長官になられる。その前に「新戦闘機（F-4E）の整備につい
て」というもの「国防会議の決定」があります。ですから、その話も
していただこうと思います。

海原 はい。よろしいです。今日は長々と済みませんでした。

佐道 国防会議のことは、よくわからないところが多いですから。

海原 わからんでしようね。

伊藤 でも、何となく輪郭がわかりました。

海原 私も、行った時にはわからなかったですよ。一体、これは何を
しているんだと。そこに「中曽根構想」が来て、初めて、ああ大事な
ところだと。

今日最後に「中曽根構想」に一步入りますと、中曽根君と内海君と
は、海軍短期現役の同期なんです。内海君は、私が弟分と言っていた
男なんです。そこで、中曽根大臣になった時に、中曽根大臣と内海君
と私と三人で会食になったんです。この前、「海原会」のお話をした
でしょう。そのメンバーなんです。内海も中曽根も。それもあるか
ら、中曽根が今度お世話になるからということで、昼飯、洋食をご馳

走になった。そうしたらその時に、中曽根大臣は、私のところで長期計画を審査するとは知らなかったらしい。私にどう言ったかというところ、「今度いよいよまとまった、大蔵省と喧嘩だ」と言うんです。「大臣ちよつと待ってください。それはまず私のところで充分、詳しく調査いたします」と言ったら、「ええっ」と言ったもの。内海君が隣にいるんですよ。「内海君、君はそういうことを大臣に言っていないのか」と言ったら、「いや、まだだ」と言う。中曽根大臣は、国防会議事務局で私が「中曽根構想」を審議するとは思っていなかった。そういう経緯があるんです。

伊藤 中曽根さんは、防衛庁長官になった瞬間に、もうそれを始めたわけですか。

海原 そうです。アメリカに行った時の話をしますと、あれはアメリカでぶち上げたんですから、第四次防、新防衛力整備計画。私は新聞を見てびっくりしたわけです。それで大蔵省で村上が主計局長をしていましたから、「(中曽根が)アメリカで予算のことも言っているけれど、大蔵大臣は知っているのか」と聞いたら、「全然聞いてない」と言うんです。これが中曽根さんという人の体質ですね。いきなりアメリカで、レオード国防長官に対して、自分の構想をぶち上げた。その時に、「私は日本海(シー・オブ・ジャパン)を日本の湖(レイク・オブ・ジャパン)にしたいと思っている」という有名な言葉を言ったわけですね。全部、それは速記に残っていると思います。それが問題になった。いや、そんなことは言っていないと言う。そういう人なんです。これはご参考までに「『諸君』一九八七年五月号の記事のコピーを示す」。

伊藤 よくこういう資料を綴じて取ってありますね。家中、こういう

ものの山ではありませんか。

海原 これを見てください。英文です「『中曽根構想』の英文を示す」。新聞記者に配ったものです

伊藤 一九七一年、これが「中曽根構想」の中味なんですね。

海原 これは最近書いたものです「山形新聞・二〇〇〇年二月八日付「防衛力世界四位の誤解」のコピー」。最近は書くのが嫌になりましたね。

伊藤 海原先生、失礼ですがお幾つですか。

海原 いま、満八十三歳です。

伊藤 まだ、お若い(笑い)。もつとも、僕はそのお年になるまでに十何年かかりますが、それまで生きていられないかもしれません。

海原 大正六(一九一七)年二月三日ですから。私はソ連と同じなんです。ロシア革命と同じです。

伊藤 ソ連崩壊と同時に亡くならないで良かったですね(笑い)。

海原 ソ連に行った時、「私はお国と同じ年だ」と言ったら、びっくりしていましたね。

伊藤 これは先生のご持論ですね、「防衛力世界四位の誤解」というのは。

海原 『ジャパンタイムズ』が、そういうことを書いているものですから、びっくりしましたね。

伊藤 山形新聞は何か因縁があるんですか。海原先生のファンがいるとか。

海原 山形新聞はずっと昔から因縁がありましたね。論説委員の方に知っているのがおるだけで、私はもう書くのをやめようと思っているのに、依頼が来たものですから、書いたんですけれど。

伊藤 お書きになった方が、健康のためにもいいんじゃないですか。

佐道 「山形新聞の記事についている写真を見て」防衛庁の新庁舎はすごく立派なビルですね。前を通ったら、すごいビルでした。

海原 これは源田さんのパンフレットです。「『沖縄返還と日本の防衛問題』（財・大陸問題研究所、昭和四十四年八月十日発行）の小冊子を示す」。この人がこういうことを言うものですから、表向き困るんです。中では大変なことを言っていますよ。ところが、彼も人間だと思ふ。私は彼とは悪くなかったんです。ある会に行きまして、国会のそばの会館で、廊下でばったり会ったんです。そうしたら僕に、「海原君な、やっぱり『陸』だよ。その一言。『陸』が大事なんだと、そういうことを言うんですね。その人が中では『空』が絶対だと言っているんです。僕には、『海原君、『陸』だ』と言っている。困るんですよ、こういうのはどうしたらいいのか。

伊藤 困りますね。

海原 源田がそう言った、と言いたいですけれどね。

伊藤 いや、「空」は「空」だと言えはいじやないですか。

海原 それが言えないんですね。前に申し上げたでしょう。防衛庁の中の統合幕僚会議で、源田は「空」だと言った。そうしたら「陸」の幕僚長が、いや「陸」だと言った。海幕長は両方の間にいて、様子を見ている。統幕議長的林敬三さんは捌けない。それを一回やっただけです。だから、統合ということではできない。

伊藤 それは日本だけじゃないです、どこでもできないんです。統合ぐらい難しいことはないらしいですね（笑い）。

海原 だから私は、あんなものはない、と言ったんです。できない、絶対にできない。

伊藤 やっぱり物事はできないと思っても、やって失敗する以外に学ば方法はないんです。

海原 なるほど。どうも済みませんでした。今日はだいぶ進みが遅かったですね。

伊藤 今日は国会会議のことをだいたい認識しました。

海原 それをご説明するのに困ったですね。ちよつとわからないですね、本当の話は……。

伊藤 どうもありがとうございます。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第19回

開催日：2000年5月12日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 19 回 質問項目

今回は、国防会議事務局長時代のお話を中心にうかがいたいと思います。

- ① 国防会議に移られて最初の会議が、1969年1月の新戦闘機の整備（F-104の生産機数および年度）ということでした。この問題の内容や経緯等をお願いします。また、これは閣議決定ではなく閣議了解でした。また、問題によっては閣議報告というものもあります。それぞれの違いなどをお願いします。
- ② 前回伺えなかったことですが、1970年1月、中曽根康弘氏が防衛庁長官に就任します。中曽根長官の下で「国防の基本方針」改定問題、四次防策定問題がありますが、中曽根長官が行おうとした諸施策について、当時どのようにお考えでしたか。また、中曽根長官のとき、第一回の『防衛白書』が出ました。同白書についての評価などをお願いします。
- ③ 上の質問と関係しますが、中曽根長官の下で策定が進められた四次防に関し、航路帯建設を中心とする「中曽根構想」に先生は異議を唱えられました。この問題について、同構想の内容、問題点、当時の議論の動向などについてお願いします。
- ④ 中曽根長官は70年10月21日、四次防の概要を発表、原案は翌年4月に発表されました。原案作成の中心は、70年11月に防衛局長に就任した久保卓也氏かと思いますが、久保氏も言わば「海原学校」の生徒ではないかと思うのですが、いかがでしたか。また、四次防をめぐる久保氏とはどのような議論をされたのでしょうか。なお、久保氏の防衛論等については、「防衛計画の大綱」決定等の問題のときに改めてお聞きしたいと思います。
- ⑤ 1970年11月、三島由紀夫と「楯の会」会員が東部方面総監部に侵入、クーデターを呼び掛けた後、割腹自殺するという事件がありました。この事件をどのようにご覧になりましたか。また、自衛隊内の反響はどうだったのでしょうか。
- ⑥ 72年（昭和47年）には四次防関係で国防会議が4回、同議員懇談会は7回開催され、国防会議が俄然、活性化しています。これらの会議で討議された内容、出席者等で印象に残る人物などお話し下さい。
- ⑦ 72年2月から3月にかけて、四次防予算先取り問題をきっかけに、シビリアン・コントロールの問題が浮上し、各党がこの問題で、例えば社会党が自衛隊を調査する特別委員会を設置する構想を出したり、民社党、自民党が防衛常任委員会を設置すべきだと主張していますが、この問題についてご記憶のことがあればお願いします。
- ⑧ 72年4月、佐藤総理が、国防会議の拡大、討議事項の再検討を指示したと朝日新聞が報道しています（4月17日夕刊）。その経緯や結果等についてお願いします。
- ⑨ 72年12月に先生は国防会議事務局長をお辞めになり、評論家の生活に入られます。同事務局長をお辞めになる経緯などをお願いします。また、同職在職中、もっとも印象に残っていることはどのようなことでしょうか。

情けない日本の政治家たち

海原 今日では中曽根君のことがあるので、いろいろ用意して来たんです。資料を用意しないと、言葉で言っても、海原は中曽根が嫌いだからこういうことを言っているんだろう、ということになる。それで証拠物件を持って来たんですが、証拠物件を探すのが大変なんです。「国防の基本方針」が出て来ましたが、これも話すと面白いんですよ。大騒ぎをして、結局は沙汰済みになります、ちよつとそれを見てください。毎日新聞が一番大きく書いてあったから持って来ました「毎日新聞・昭和四十五年三月二十一日「国防基本方針の全面書き換え」のコピーを配布、続いて「防衛庁の航路帯構想」の図があるページのコピーを配布」。

それから、これは後で説明しますが、これが「中曽根構想」なんです。黄ばんだ表紙に四十六年四月二十六日「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」とタイプされ、「中曽根構想」と手書きの文字が入り、「取扱注意」の印が捺された冊子を示す。以下「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」と表記する。

伊藤 「取扱注意」となっていますね。

海原 それがまた意味があるんですね。

伊藤 これは四十六年ですね。

海原 これが「国防の基本方針」の後ですが、アメリカに行つてぶち上げたやつです。

伊藤 「取扱注意」というのは、誰が作ったか書いてないんですね。

海原 それは「防衛庁」と書いてある。

伊藤 ああ、「防衛庁原案」と書いてありますね。こういうものは「防衛庁原案」と書くんですか。

海原 だって、国防会議で審査の上で決めていますから、防衛庁はあくまでも原案なんです。もう一つは、冒頭に「新」と書いてあるでしょう。普通は「第四次」なんです。それを中曽根氏は使わないんです。その辺に中曽根氏の心がある。「新」だと言う。今までのような一次、二次、三次ではない、俺は俺だ、というのが出ているんですよ。

伊藤 「中曽根元年」ですね（笑い）。

海原 そういうことです。そういう人だということですね。

伊藤 これは後でコピーさせてください。「取扱注意」ですけれど。

海原 いいですよ。ちよつと言っておきますと、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」には航路帯構想は全然ないんです。これがまた中曽根流なんです。これに書くと、やられると思うんですね。建艦は何隻とか書いてあるんです。その中に入っている。そういうやり方なんです。その、もう一つ前があるんです。事のついでですから、中曽根氏という人間がどんな人間が知ってもらうためです。そうしませんと、個人的な好き嫌いで言っているように思われたらいいけませんからね。

伊藤 嫌いなんですか。

海原 嫌いですよ。嫌いであることは間違いない。

伊藤 そうですか。僕は昨日会ってきたものですか（笑い）。

海原 こういうものはご存知ないでしょう。手が込んでいます。英文で配っているんです。各国に送っているんですから「産経新聞・

昭和五十七年十一月三十日付「『中曽根政治信条』各国に送る」のコピーを配布」。とにかく知能犯で、大変な存在ですよ。これほど信用できない人間はないですな。

伊藤 それは、海原さんが役人として、政治家である中曽根さんを信用できないという意味ですか。

海原 いやいや、個人として、人間として。だって、この前お話ししたように、警視庁時代から知っていますからね。政治家になる前から知っています。

伊藤 まあ、ご存知でしょうけれど、この時は立場としては中曽根さんは政治家ですね。

海原 その政治家の時に、例の「海原会」に出ていましたからね。だから、ずっと知っているわけです。

伊藤 立場としては、海原さんはお役人だし……。

海原 そこで伺いたい。何がお役人なんですか。

伊藤 じゃあ、政治家だったんですか。

海原 いや、私は政治家でもないし、お役人でもない。一国家公務員です。

伊藤 一国家公務員と言っても、いろいろありますからね。僕も国家公務員ですけど（笑い）。

海原 そういう話になりますと、あれですけど……。

伊藤 話を始めていただきますよ。

海原 今日は、ご質問に沿ってお話ししたいと思って、その参考になるものを予めお渡ししたんです。これはお渡ししましたか「産経新聞・昭和六十一年十月二十九日付「不沈空母 戦後総決算 天の声・神の声」のコピーを配布」。こういうものを見ていただきますと、「中曽

根が」どういう人間かということが、ほぼおわかりでしょうね。そこで、最初の質問は何でしたか。

伊藤 四十四年一月の新戦闘機の整備、F104ですね。

海原 F104ですね。これは前にちょっと申し上げたと思うんですが、ファントムというのを前から造りたいという空気が強かったですね。私がN156系統を推しているという事が出ていましたね。これもお話ししましたね。あの時にいろいろ申し上げましたが、簡単に言いますと、F104、ファントムというのは重戦闘機なんです。それから私が言っていたN156というのは、ノースロープの系統ですが、言わば軽戦闘機ですね。

これはアメリカに日本の調査団が行った時に、アメリカの責任者が言ったんですが、「これ「N156」は、アメリカが援助を与えている小さな国、すなわち大きな国土がない、（長大な）滑走路もない、そういう日本のような国のために開発した戦闘機だ」と。それが一つ。もちろんスピードは104に比べれば落ちますが、それも実際はこれだけの違いしかない、と説明するわけです。「この戦闘機を日本が造れば、他の国向けの援助の戦闘機に採用する」と、そこまではつきり言ったんです。

そこで私は念のために、「そこまで日本の航空機産業のことを心配してくれるなら、仮に日本でF104を国産した場合、それでも日本の国産のものを売って入れてくれるか」と聞いたんです。そうしたら、シャッフというのが国防次官補代理でしたが、空軍の責任者と話をして、答えはノーだと言う。何となれば、答えは簡単なんです、アメリカで造っているからだ、と言う。「アメリカはF104を造っている。それを日本で造るからといって、それを外国向けに買うわけには

いかない。だからF104を採用した場合には、そういうことはしない。しかしN156（これはF5という名前になるんですが）を日本が造れば、外国にも送るから、それを日本から買う」と言う。結局、三千機ぐらい造りましたかね、私知っています限りでは。これは日本の航空機産業に大変なプラスなんです。そこまで私は、一問一答をやりながら引き出したんですからね。しかし、当時の東京はノーです。

伊藤 理由は？

海原 F104だと言う。それはスピードが違ふと。しかし、その違いは上に行ったら、邀撃する時にはこれだけしか違わないと、ちゃんと向こうは書いているんですよ。私は空軍の専門家に、別の機会に三回ぐらい言われました。「どうして日本のパイロットはスピードのことしか頭になんないんだ。要するに戦闘機というものは、地上の、それを支援する施設と一緒に、ウェポンズ・システムとして考えなければいけない。その戦闘機個体の持っている能力だけではない」と言ったんです。三回ぐらい言われましたけれど、駄目でしたね。日本はそういうことがわからない。

伊藤 その「重」と「軽」というのはどういうふうに違ふんですか。

海原 それは一般的な言い方です。軽くて小さいから「軽戦闘機」と言うんです。ファントムなんかは「重戦闘機」になるんですけれどね。というのは、戦闘機と言っても翼の下に爆弾も積めるんですから。そこで、いろいろ出てくるわけです。昔はよく、重戦闘機、軽戦闘機と言っていました。それで私も使っているんですが、普通そういう言い方は紛らわしいから使つてはいけませんね。

伊藤 そういう決定のプロセスの中で、海原さんの意見はどこで潰されるわけですか。

海原 要するに、防衛庁内部では出てこないんです。

伊藤 防衛庁内部での支持がないんですか。

海原 私が潰したのは、国防会議事務局長として潰したんですからね。

伊藤 いや、今のN156の話です。

海原 これは、まだその時には決まりませんから。最終段階ではないですから。最終的に決まったのは、私が国防会議事務局長になってから出てきたんですからね。私が「防衛庁に」いる時には、ファントムなんか駄目だ、と言っていましたからね。だからへり空母と同じです。海原が防衛局長になったらへり空母は潰されると言われていた。それが局長になった。「赤城構想」の空母を潰したでしょう。そういうことです。

伊藤 今度はご自分は国防会議事務局長になっていますから、「F」を潰して「N」を、というわけにはいかないんですか。

海原 問題が全然違います。ファントムはもともと「N」との対照で考えられていた。ファントムに対しては、いろいろな方面から、是非これがいいと言われた。特に国会議員では保科さんですな、元海軍の軍人さん。これが自民党国防部の小委員長に自らなって、一所懸命やっていましたよ。

伊藤 ファントムがいい、とやっていたんですか。

海原 ええ、そうです。それで航空幕僚長の人選問題も、田中耕二君がなるのが普通なんです。田中は海原のボン友だ、仲がいい。田中と海原とが並んだら、当然ファントムは誕生しない」ということで、彼はならないんですからね。別の人、牟田（弘国）というのが幕僚長になる。

伊藤 その人事は誰がやるんですか。

海原 これは大臣がやるわけです。松野（頼三）がやったわけです。松野が三人の幕僚長を同時に替えたでしょう。その話はしましたね。それは根が深いんです。ファントム問題はずっと前からきているわけです。それで、私は申し上げているんです。私は、アンチ・ファントムだ、ということになっているわけです。もちろん、そうでしょう。でも、その時はもう国防会議事務局長ですからね。だから、海原が防衛庁の中におつてはファントムは駄目だということが、私を追い出す理由の一つになっているわけです。それで見事に私は追い出された。それで今度は、国防会議事務局長で受けるわけです。

伊藤 受ける時は、「防衛庁から」ファントムと言って出てくるわけですね。

海原 もちろん、そうです。そのファントムについては、当時、大蔵省は村上孝太郎君が次官でしたか、主計局長でしたか、ちよつとはつきりしないんですが、彼がやっていました。村上君とは、私は昔からの友人ですから、打ち合わせをしているわけです。そうしたら、村上君の方の大蔵省も、ファントムには反対なんです。そして、閣議の後で、水田（三喜男）大蔵大臣が残つて、総理に言うんですね。「こういうわけで防衛庁はファントムに決めたがつているけれど、この際は決めないでくれ」と、大蔵大臣が陳情するわけです。そうしたら佐藤総理が、「わかつた、決めない」と言つたんです。そのことが、村上君から私に電話で伝えられたんです。「海原、こういうことで、水田大蔵大臣が閣議の後で残つて、総理に陳情した。結論として、総理も『わかつた』と言つた』と言う。「『わかつた』か。それは良かったな』と言つたんです。

ところが、その翌日です。やはり、そういうことは伝わるんですよ。

うね。増田防衛庁長官が、統幕議長と空幕長を従えて、総理のところ
に陳情に行った。それで「是非ファントムに決めてくれ」と言う。そ
うしたら総理が何と言つたか、「わかつた、決める」と言つた（笑い）。
そんなものなんです。こういうことは話さないとおわかりにならな
いでしよう。

伊藤 それが聞きたいんです。

海原 私はなぜそれを知つたか。村上君から電話がかかってきたんで
す。「おい海原、もう無駄な抵抗はやめろ」と。そういうわけで、昨
日までは大蔵大臣がファントムに決めることはいいと思わないとい
うことで反対だつた。しかし、増田（甲子七）大臣が「制服」の連中を
連れて行つて総理に陳情したら、総理は「わかつた、よし決める」と
言つた。これ以上は無駄な抵抗だ。

伊藤 それは増田さんと水田さんのウエイトの問題ですか。

海原 そうじゃないですね。もともと、佐藤総理のところに行つ
ているんです、ファントムで。要するに、私が体験している政治家と
いうものは、なかなか言わないです。ぎりぎりの時まで言わない。敵
かと思えば味方であつたり、味方と思えば敵だつたりするんですね。
大蔵省の村上君まで諦めようと言うんだから、これはとても駄目だと
お互いになだれて、「月給が上がるわけではない」と言つた。とい
うことがあつたんです。

これは一切表に出ていません。恥ずかしくて言えないじゃないです
か。天下の総理大臣が、大蔵大臣には「わかつた、決めない」と言つ
て、増田さんが「制服」を連れて行つたら、「わかつた、決める」と
言う。そんなものなんです、日本の政治家というのは。情けないこと
です。こういうことは、みんな知らないでしょう。だから困るんです

ね。

伊藤 それで、今度ご自分が国防会議事務局長になると、そのファントムが出てくるわけですね。非常に皮肉な巡り合わせになるわけですね。

海原 そうですね。ですから、後でも出ますが、私が国防会議事務局長として、最も印象に残ったのは何かと言えば、やはりこの「中曽根構想」を潰したことです。もし私がいなければ、あのまま通ったかもしれない。というのは、他に、今のようなことで、誰も反対する人はいないんですからね。みんな、「ああそうか、ご苦労」ですよ。私は国防会議事務局長で何をしたかと言えば、その「中曽根構想」を潰したということです。

伊藤 そこ「『防衛ハンドブック』の表の記述」に、閣議決定ではなく閣議了解になったとありますね。

海原 これはその時の扱い方で、どう言ったらいいんですかね。正式に、問題なしにきちんと決まる時には、国防会議で決定しちゃうんです。それを閣議了解にするか閣議決定にするかは、その時の物事の重さの加減ですね。

伊藤 そんなに明確なものではないんですか。

海原 ないですね。官房長官と法制局とが相談してやるわけです。

伊藤 その重みは、閣議決定の方がずっと重いわけでしょう。

海原 法律的には全部閣議決定です。国防会議議員懇談会というのがあるでしょう。これはこの前申し上げましたね。議員懇談会なんて、ないんです。全部召集は国防会議です。しかし、そこで物を決めた時には「国防会議」にする。そうではなくて、お互いに意見の交換があったり、フリーディスカッションをやった時には「懇談会」と言う。

そういうふうには、事実上の扱いを分けただけのことなんです。だから、きちんとしたものは何もありません。

伊藤 じゃあ、今度中曽根さんの話に行きますか。

海原 一応今までの予備的な問題ですね。中曽根先生がどんな人であるかというのは、英文で用意した「中曽根政治信条」を各国の新聞社に送ったことでもわかりますね。「先に配布した、産経新聞・昭和五十七年十一月三十日付「『中曽根政治信条』各国に送る」のコピーを示す」。

伊藤 これは何年ですか。

河野 これは首相就任の時ですね。

海原 こういうことをやる男だということですね。これを見ていただくとわかると思います。「読売新聞・昭和五十八年一月十九日付「日本列島を不沈空母に」、一月二十一日「『不沈空母発言』は事実」の切り抜きのコピーを配布」。今まで申し上げているのは、この人がどういう人なのかということの具体的な例なんです。それ「中曽根政治信条」を各国に送ったこと」は首相になってからでしょう。これ「不沈空母発言」も首相の時なんです。皆さん、ご存知でしょう。これを見て、どういう人かということを見ていただきたいのと同時に、新聞というのとはどんなものかということを知っていただきたいわけです。

これ「不沈空母発言」は、総理として言ったんですね。それが『ワシントン・ポスト』に載ったんです。ところが随行者団がいるでしょう、この連中は知らないわけです。そこで、中曽根に聞くわけですよ。そうしたら中曽根は、「言った覚えがない」と否定するわけです。そうすると日本の随行者団が怒って、『ワシントン・ポスト』に「何だ、お前の方で勝手にやったのか」と言う。当然そうなりましょう。

そうしたら、ここに書いてあるように、「録音テープがあるぞ」と『ワシントン・ポスト』は言うわけです。

それで、普通ならどうしますか。謝るでしょう。中曽根がどう言ったか、「いや、あれはオフレコ会見のほうであつた」と。それで、随行記者団が収まっちゃうんです。これが問題なんです。これはいったん『ワシントン・ポスト』に載つたんですね。載つた時には、「俺は言つてない」と言つた。それに対して、『ワシントン・ポスト』の方から「ちゃんと録音がありますよ」と言われたら、「いや、あれはオフレコのはずであつた」と言う。それで随行記者団は黙っちゃうんですよ。いいですか、このぐらいおかしいことはないでしょう。それが、しかし収まっちゃうんです。どういう手を打つたか知りませんよ。

しかしそれぞれ、こういう有名な政治家には、全部「ぶら下がり」と称する記者がいるわけですね。後藤田君が私のテレビ番組に出た時に、当時は官房副長官ですから、ずらつと六、七名付いて来るわけです。「あれは何だ」と言つたら、「いや随行記者だ、俗に言う『ぶら下がり』だ」と言うんです。そういう「ぶら下がり」がいっぱいいるんですよ。

くだくりますが、いいですか。『ワシントン・ポスト』に記事が載つた。「そんなことは俺は言つていない」と言つた。それに対して、『ワシントン・ポスト』の方から「録音がある」と言われたら、それに対して中曽根総理はどう言つたか、「あれはオフレコのはずであつた」と言つた。それで済んじゃうんですよ。これが日本の政治家と新聞との、奇妙なもたれ合いの世界ですね。あり得ないことでしよう。

伊藤 オフレコというのはないわけですか。

海原 中曽根が新聞記者に言つたんです。「言つた覚えはない」と。

その後、「いや、あれはオフレコのはずだ」と。しかし録音テープがあるのなら、別の問題ですね。言つた、言わないの問題がまずある。その次はオフレコかどうかの問題。そういうことで、ごまかされちゃうんです。こういうものを見ていただくと、中曽根康弘という人間がどんな人間かわかりになると思います。

私をクビにしようとするにも関係するわけです。防衛庁が沖繩の予算の先取り問題でゴタゴタするでしょう。あの時の次官は内海（倫）君です。中曽根と内務省同期で、私の弟分と言われていた。私がいける面倒を見たというとおかしいけれど、一緒に仕事をした男です。その内海君が次官の時に、予算の先取り問題があつた。その時に中曽根が、取り巻きの記者に、「内海だけがいま批判されているけれど、あれは海原が協力しないからだ。内海が辞める時には海原も辞めさせる」と言つたんです。そのことは僕のところにも伝わって来ますよ。そういうことを言う男なんです。「内海だけを辞めさせるわけにはいかん。海原の非協力の方が問題だ」と言う。

その前に、「海原は『陸原』である、『海』と『空』には冷淡である」ということをちゃんと言っているんですよ。それは保利（茂）官房副長官がなつたばかりの時に私に会つて、「海原君、君は何かと『海』と『空』には冷淡だ、と佐藤総理が言つておつたよ」と言う。「そんなことはありません」と言つたんですがね。

伊藤 それは佐藤総理の話ですか。

海原 保利さんが私にそう言つた。総理のところまで誰かが言いに行つていらっしゃるんです。三島由紀夫氏も言いに行つていらっしゃるんですよ。

伊藤 有名なんですね。

海原 そういうことで、とにかく私が全部から「照準」されていたん

です。そういう背景があるんだということを申し上げないと、私の更迭問題についてもなかなかご了解いただけないと思うんです。

伊藤 大体わかりました。

海原 大体わかりましたか。そういう背景ですね。歌舞伎の芝居と同じでして、舞台の正面でやっている連中は大したことないんですよ。背後で筋書きを書いたり、密使が行ったりするわけですね。保利さんが私に、「海原君、君は『海』と『空』には冷淡なのか」と言うから、「何ですか」と言ったら、「いや、総理がそう言うておった」と言うから、「それはまた総理のところには誰かが言いに行っただけでしょう。こういうことです」と言ったら、「ああそうか」と言う。保利さんというのは、話せばわかりますからね。それ以後は私に何でも言うようになりました。

それで私のことを新聞記者に聞いたんですな。朝日、毎日、読売には、それぞれ一人ずつ老練な人がいまして、その人たちが保利さんに、いや海原はこういう男だ、ということを言ってくれたんです。朝日は死んだ篠原（宏）ですし、読売は堂場（肇）君ですね。毎日の人はまだ生きているから名前はいりませんが、たまたま朝日、毎日、読売のベテランの記者が私のことを弁護してくれました。それが私が国防会議事務局長になった直後の雰囲気ですね。そういう背景の中で、いろいろなことが起こるわけですね。話が長かったかもしれませんが、そういう経緯です。

「中曽根構想」を潰す

伊藤 それで中曽根さんが防衛庁長官になって、中曽根長官の下で「国防の基本方針」の改定問題が出てくるわけですね。それが、さつき配られた新聞ですね。

海原 毎日新聞が書いているでしょう。

伊藤 これは一月に「防衛庁長官に」なって、三月のことですね。

海原 彼がまずやったのは、「国防の基本方針」の書き換えですね。これを大きくぶち上げました。それから公海・公空で敵を撃滅するということを言いました。

国防方針の書き換えについては、少し細かくなりますが、事実を申し上げますと、これは結局どうなったかと言うと、官房副長官と外務次官と防衛事務次官の三人で三者協議をすることになったんです。国防会議事務局長の私は入っていないんです。そんな馬鹿なことがありますか。「国防の基本方針」というのは国防会議で決めたものでしょう。それを交えるなら、当然国防会議で議論しますね。そうなるとう、前回言った幹事会がある。私はその世話役でしょうが、私を除外している。私はこれに反対しましたからね。私だけではありません。外務省も、当時の北米担当の安川（壮）元駐米大使、彼も反対です。中曽根が用意した案というのは本当にくだらん案なんです。しかもそれはタイプで打っていないですよ。手書きなんです。それを送って来ましたよ、外務省にも。外務省の次官は幹事ですからね。

私は安川君に「おい、これどう思う」と言ったら、「誰が作ったんだ、こんな変な日本語は」と言うから、「これは防衛庁だ」と言ったら、「とんでもない」と言っていた。それで私は保利官房長官に、「外務省の安川も反対しています。私も、これはまずいと思います。だから、この中曽根が言っている『方針』の全面書き換えはおやめになった方がいい。やってはいけません」と言ったんです。そうしたら保利さんは「わかった」と言って、しばらく国会の委員会でも答弁していますね。外務、防衛、官房副長官の三人で事務的な検討を始めると。そういう格好にしないと、中曽根の顔が立たないという政治的な配慮なんです。私は呼ばれて「海原君、君は入らない。それはこういうわけだ」「わかりました」。そういう配慮なんです。だから国会でもずっと、「三人でいま検討中」と言っていた。そして最後は取り下げです。防衛庁が取り下げた。だから新聞に大きく出たでしょう。取り下げまでの間は、要するに時間稼ぎだった。事務局が現在検討中でありますと、国会の委員会では二、三度答弁しています。その肝心の事務局長は全然知らんですからね。これが事実です。そういうことを堂々と平気でやる人だ、ということをまず知っておいてもらいたい。そうしないと、これから後の説明がご了解いただけませんから。今までのところはいいですか。

伊藤 今の話は、「国防の基本方針」を全面的に改定するという問題ですね。

海原 そうです。

伊藤 アドバルーンを上げたただけではなくて、防衛庁が原案を作ったんですね。

海原 そこで話がこんがらがってくるんですけど、先ほども言いま

したように、事務次官の内海は、私が弟分と言っていた男なんです。それは経緯があるんですけどね。これはちよつと速記をやめてください。個人のことですから。

伊藤 いいですよ。大丈夫です、これは漏れるわけではないですから。海原 じゃあいいますか。それじゃあ話しますけれどね。最初、保安庁に私が後藤田君の後任に行くでしょう。その時に調査課長でいたのが内海君なんです。私と内海と、栃内という海上保安庁から来た男、栃内大將の息子ですが、この三人が保安局の課長なんです。その頃から僕は内海君を知っているわけです。付き合ってみたらなかなかいい男です。それから、後藤田君が帰った後だから、昔のことは内海調査課長しか知らないわけです。私はしきりに内海君のことを私の弟分と言っていた。彼は十六年「内務省入省」で、私は十四年で、二年違いますがからね。二年違つと先輩づらができるわけです（笑い）。それでいろいろな方面にも紹介して、私の弟分だと言っていたんです。

彼は警察にいてずっと上に行くんです。岐阜だったか京都だったか、その辺の本部長になるんです。その時に、「俺はここでお仕舞だ」というようなことを酒の席でしゃべるんですね。その話が私のところに来たから、後藤田君に電話したんです。後藤田君は当時、警察庁の人事担当の警務局長ですから。それで「内海が、自分は地方で終わりだ」というようなことを言っているけれど」と言ったら、「いや、そんなことは絶対にない。内海はできる男だし、必ず中央に引き戻すから、仮初めにも酒の席で、ここで終わりだ」というようなことを言わせてはいけません。お前から言ってくれ」と言うので、私が電話しましたよ。「後藤田君に聞いたら、こう言っている。だからお前は酔っばらつて、そういうことを言ったら駄目だ」「わかりました」。そういう仲間

です。その後、彼は警察庁の交通局長で帰って来るわけです。それでローマのオリンピックを見学に行くわけですからね。そんな関係で、内海君と私とは越中島でも一緒に苦労した仲ですからね。

私が後藤田君の後で行った当時は、複写機みたいな便利なものはないんです。全部ガリ版で自分で書く。部下の連中もたくさんいませんからね。内海君も僕も、昔の蠟紙でガリ版を切るんです。切ったことありますか。あるでしょう。私は一応原稿を書きまして、それを見ながらガリ版の蠟紙に鉄筆で書いたものです。内海君は、いきなり鉄筆で書くんですよ、原稿なしで。ああ、こいつは大したものだと思いますね（笑い）。とても私は、いきなり鉄筆では書けません。まずちゃんと原稿を作っておいて、それを写しておったんですがね。そんなことで、私が持っている能力もいろいろあるわけです。私も好きだったから、そういうつもりで付き合っていたんです。

ところが、中曽根が防衛庁長官になった。海軍の同期であるということから、しきりに中曽根は彼を重用しようとする。この前お話ししたでしょう。中曽根が長官になって、すぐ二人で食事をした時に、「一応原案がまとまった。今度は大蔵省と喧嘩するんだ」と中曽根が言ったので、「ちょっと待ってください。内海君、君、大臣に言っていないのか。大蔵省と喧嘩をする前に、まず私のところでちゃんと審議いたします」と言っただけです。そうしたら、中曽根はびっくりしてしまいましたね。「えっ」と言いましたよ。私は内海に、「そんなことも大臣に言っていないのか、困るじゃないか。俺のところでもやるんだよ」と言ったことがある。こんなことでおわかりいただけますように、そういう仲だったんですね。

ところが、四次防の中に当然出てくるところの翌年度の予算の執行

ということ、沖縄にいろいろなものを送ったということで大問題になった。その時に「海原が非協力である」ということが言われるわけです。それで、問題が起こってから、私の部屋、国防会議事務局長の部屋に、内海以下、局長が二人、課長が三人、計六人ぐらい来ましたよ。「至急、国防会議を開いてくれ」と言う。「何だ」と言ったら、「いま問題になっている沖縄の予算の問題だ」と言うから、「それは駄目だ」と言っただけです。「問題になる前にやらないといかん。問題になってから、これだけ国会でガタガタしてから、慌てて国防会議を開いてどうだこうだと言うのは、誰が見ても納得しない。同時に国防会議事務局は、防衛庁の下部機関ではない」と言っただけです。お断りだと言った。みんな帰ったんですね。これが伝わっているわけです。海原は非協力であるということになって、そこで先ほど申し上げたように、「内海を辞めさせる時には内海だけではない、海原のクビも取るんだ」と中曽根が言った。ということ、新聞記者から連絡を受けた。ああそうかな、と思っただけです。

今まで申し上げたのは、そういうような雰囲気だということですね。政治家と役人の最後の段階の人事関係の事柄はね。これがご了解いただけないと、後も全部わからない。そういうことで、なかなか難しいんですね。どこまで話が行きましたか。

伊藤 「基本方針」の改定のところですね。中曽根さんの改定問題には、どういう点で反対だったんでしょうか。

海原 それは中曽根案がありませんからね。後で私のところに来たのは、印刷もしていないんですよ。誰かが書いたんです。三人が協議したのは、ちゃんと印刷したものがあつたんですよ。私のところには来ないんです。ここがまた問題です。私を敬遠していたんですね。上か

らピシャツとやろうとしているわけです。外で空気を作っておいて、その政治的な空気、影響の下で物事を決めていこうというのが彼の手法ですな。そういうふうには私は思いませんね。

伊藤 それはいずれ国防会議にかかるとは思いますが。

海原 もちろん、そうですね。ところが、国防会議なんか一気に切り切れると思っただけです。だって中曽根長官は、旧短期現役の海軍の軍人ですからね。わかっているはずですよ。それがわからない。なぜ、あんなことになったのか。

そういう状況があるものですから、まず公海・公空で敵を撃滅するということをぶち上げた。これは新聞記事で出ました。それから、非核三原則も入れて「国防の基本方針」を変えるんだという記事が大きく出た。こういうふうには霧囲気を作るわけです。作っておいて、また用意させるわけですね、新防衛力整備計画を。これを用意していることは私も聞きました。

そして、それを最初に表でぶち上げたのはどこか。アメリカです、レアード国防長官と会って。ここが問題です。レアードと会って、いくら金をかけてやるということまで話しますからね。それが新聞に載った。私がすぐ電話をした相手は村上君です。村上君に、「おい、中曽根大臣がアメリカで壮大なる構想をぶち上げている。(ここに書きましたように、当時で)一六〇億ドルを充てると言っているけれど、その予算額について大蔵大臣は何か聞いているか」「何も聞いてない」「行く前に誰かから相談があったか」「誰からも相談はない」。こういう状況です。だから、まずアメリカでレアード国防長官に会って、自分の構想をぶち上げて、さて、そういうふうには外野の霧囲気を醸成しておいて、うちに帰ってこようやるというのが、彼の政治手法だと思

います。

伊藤 それでこれ「新防衛力整備計画(防衛庁原案)」ができたわけですね。三月にぶち上げて、これは四月二十六日ですね。

海原 だからぶち上げた時には、できているわけです。

伊藤 これは翌年かな。

海原 翌年です。一応の案はできているわけです。

伊藤 それで、この時にぶち上げたものなんですね。

海原 そうすれば金が出てくるわけです。これがなければぶち上げられませんから。

伊藤 でもぶち上げてから、これ「新防衛力整備計画(防衛庁原案)」になったわけでしょう。

海原 これは後で来たんです。だから、国内では大蔵省にも話してないんですから。最初に防衛庁の「新防衛力整備計画」を表にオープンにしたのがアメリカであり、レアード長官に対してですからね。これは普通考えられないことです。

伊藤 案は中曽根さんが作ったということですか。

海原 中曽根君というより、防衛庁で作ったんです。防衛庁がこういう作業をやったわけです。

伊藤 こういう作業はやっただけでしょうが、これはぶち上げた後に出て来たわけですね。

海原 もちろん、後です。だって、それを初めてアメリカで、今、こういうことを研究中だと言った。アメリカでは「研究中」と言っているんです。しかし、大体これだけの経費でやると言っている。

それからもう一つ新聞に一部載ったんですが、「Sea of Japan(日本海)を、Lake of Japan(日本の湖)にしたい、それが私の考えで

ある」と言っているんです。これが大問題になるんです。どういうものを日本湖 (Lake of Japan) と言うんですかね。これを国会で共産党が問題にするわけです。「速記録にあるだろう、だから出せ。日米の国防の最高責任者同士の話だから、その速記録があるに違いない、なければおかしい。だから速記録を出せ」。これが共産党の要求です。あつたんです。私は、その写しをもらっていますから。それにはつきり書いてある。「私はSea of Japan (日本海) をLake of Japan (日本の湖) にしたいと思う」と書いてある。

伊藤 そういう議事録はどうして回ってくるんですか。

海原 それは防衛庁からもらったんです。中曽根大臣が向こうで話した話です。それは来ますね。下の方には、私と親しい者もいますから。

伊藤 悪い奴がいるわけですね (笑い)。向こうから言えば、ですよ。

海原 だって (笑い)、国防会議の事務局長ですからね。当然、こういうことを言ったかということも聞きますな。そうすると出るでしょう。ちゃんとあるんです。それには「極秘」と書いてある。それを出せ、と言う。共産党はそれを持っているんです。さあ、それを出せと言った。

伊藤 海原さんが渡したわけじゃないですよ (笑い)。

海原 出せと言ったら、どうしたか。防衛庁長官は、もう焼きましたと。それで終わり。その昔、中曽根さんが言われた会議録は焼却いたしました、ありません。それで終わっているんです。これもまた日本ですね。だんだん、日本の政治の実態がおわかりいただけるようになるかもしれませんね。私は、しゃべってもいいですよ。しゃべるんだったら、公のところではやらないで、秘密会にすればいいんです。今

の国会でも秘密会はできるんですから。内閣委員会で秘密会を開いて、この間の中曽根訪米はこういうことでしたということを、きちんと報告すればいいんです。そうなるべきだ、と私は言ったんです。前から、「それはそうだ」という人が多いんです。新聞にいちいち書かれたら困る。それなら秘密会でやったらいいじゃないか。シビリアン・コントロールというのは国会が軍事をコントロールすることだから、と私は言いましたけれどね。前からあるんです、その秘密会の規定は。全然使わないんですよ。それで結局その一件は、「焼却いたしました」で終わります。だから表向きには、その時にレアド長官に対して、本当に「日本の湖にする」と言ったかどうかわからない。

伊藤 でも、海原さんはわかっているわけですね。

海原 私はわかっている。その根拠は速記録ですね。

伊藤 焼却しましたか？

海原 いや、しませんよ。私は別に誰の命令も受けるわけじゃないですから。

伊藤 じゃあ、そのうちいただきます (笑い)。それで、それがあつて、それを肉付けするような形で、これ「新防衛力整備計画 (防衛庁原案)」が翌年できるんですか。

海原 それは関係ないです。これは「国防の基本方針」とは全然関係ないです。

伊藤 「国防の基本方針」の全面書き換えですか。

海原 そう言っているんですけれど、全面書き換えでも何でもありません。ちょっとと字句をいじって、非核三原則も入っていません。初めは入れようとしたんだけど、入れたらまずいということになったんです。だから当時、最初に新聞に出たのはそれですけど、出て

いません。

伊藤 でも中曽根さんのこういう考え方が基本になって、「中曽根構想」として、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」があるのではありませんか。

海原 それがわからないんです。さつきも言いましたが、これにはヘリ空母は出ていないんです。何遍読んでみても出てきませんよ。しかし「中曽根構想」として世間に喧伝されたのは、航路帯をつくる、これですね。これはヘリ空母です。経団連で言っているでしょう。これが出てくると、敵潜水艦の跳梁は許さんと言っているわけですからね。それがどこかに書いてあると思ったら全然出ていない。いまサツと見てください、全然出てこないんです。

伊藤 これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」の中には、ですね。

海原 私の描いた絵「航路帯構想を示した地図」も出ていません。

伊藤 じゃあ、この絵はどこから出たんですか。

海原 この絵は私が作ったんです。作った元があるんです。それは誰が作ったか、旧海軍軍人さんです。この構想は、旧海軍軍人に航路帯構想としてかねてからあるんです。元々はこんな「両手を広げる」大きな図ですから。持って来てもいいんですけれどね。

佐道 海空技術懇談会ですか。

海原 ええ、そうです。

佐道 保科さんとか。

海原 そうそう、あの連中です。関野（英夫）氏らですね。

伊藤 それが出ていないとしても、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」は「中曽根構想」と言われているわけでしょう。

海原 しかし、よくわからないんです。「中曽根構想」というのは、中

曾根さんが経団連でぶち上げた内容を含めている。それにこれ「航路帯構想」が出ますから、それを「中曽根構想」と言っているんじゃないかと思うんです。誰が付けたか知りませんが。新聞ですからね。

伊藤 じゃあ、どれが「中曽根構想」かよくわからないわけですね。

海原 そう言われれば……。中曽根構想の元は、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」ですけれどね。

伊藤 まとめたものですね。

海原 まとめたものでしょうね。

伊藤

海原 じゃあ、実際にこれを作ったのは、防衛庁の事務当局なんですね。

伊藤 じゃあ、実際にこれを作ったのは、防衛庁の事務当局なんですね。

海原 じゃあ、実際にこれを作ったのは、防衛庁の事務当局なんですね。

伊藤 じゃあ、実際にこれを作ったのは、防衛庁の事務当局なんですね。

佐道 そうすると、航路帯構想を中心とする、中曽根さんご自身が発言された曖昧な考え方があって、それとは独立した形で、この防衛庁のこれ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」があるわけですか。

海原 そういうことが全然わからない。いかに役所の文章が無味乾燥であるか。何も無い、ただ数字があるだけです。

伊藤 じゃあ、どこかにあるかもしれないということですね。

海原 いや、入っていませんね。ヘリ空母の「空母」の字も出ていません。それから経団連に行つて説明しているでしょう、六機搭載とか。全然ありませんよ。だから、どういうことでやろうとしたかわかりません。当時の防衛庁として、何を考えておったか。久保（卓也）君も死にましたからね。

ご質問の中に、久保さんも「海原学校」の一員じゃなかったかと書いてありますが、「海原学校」なるものが私にはわからない。たまたま新聞記者がそういうことを言っただけの話ですからね。「海原学校」とは何か、生徒は誰かとなると、わからないですよ。私の直接の部下には、久保君と有吉（久雄）君というのがいましたけれどね。たまたま昭和十八年、両方とも「海軍短現」に行っているんですが、どちらかというところ、有吉君の方が私の考え方を理解していて具体的です。久保君は、理論が好きなんです。かつて私は、直接久保君に言ったことがありますが、「久保君なあ、君が言っていることは、大学の先生の経済原論だ。僕が言っているのは、いま潰れかかっている中小企業の会社をどうしたらいいかということだ。だから全然次元が違う、目標が違う」と言ったら、黙っていましたけれどね。

しかし、久保君は優秀な人です。「久保理論」とも言われていますが、あの人はもっぱら経済原論を語っていた。だから、私とは合わないところがありますね。だからこの質問の中に、久保君と相談していいか、と書いていますが、全然ありません。「海原学校」なるものも私はよくわかりませんから。皆さんそう書かれますが、誰が生徒であったのか（笑い）。生徒と言え、いま言った有吉君とか、伊藤圭一君、後に防衛局長から私の三代後の国防会議事務局長になりますけれどね。そのくらいですかね。

伊藤 では、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」は誰が作ったかというのにもよくわからないんですか。

海原 防衛庁で作ったわけです。

伊藤 もちろんそうでしょうけれど、防衛庁という茫漠たるものが作ったわけではないでしょう。

海原 だから、まとめたのは誰か、ということになるわけですね。そうしたら、久保君がまとめたということになるでしょうね。その前の穴戸（基男）君が防衛局長に付きますからね。だから穴戸、久保というところでしょうね。

伊藤 これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」は「取扱注意」になっていますが、発表されたんじゃないんですか。

海原 これは発表された後で、「取扱注意」になっているわけです。発表された後でも注意しなさいということで、「取扱注意」になっているわけです。それが役所のやり方です。秘密でも何でもありません。注意してやれよ、というだけの話です。「秘」ではないですね。取扱注意しろということですよ。だから伊藤先生に話してもいいけれど、他の人に話したら駄目だぞ、ということになるわけです。それを判断してやれ、ということですよ。

伊藤 「秘」になると、全然別なんですな。

海原 そうです。それは伊藤先生に見せてもいいけない。

伊藤 ああ、そういうことですか。じゃあ、「取扱注意」というのは、大したことはないんですな。

海原 そうなんです。大したことはない。

伊藤 新聞記者のブリーフィングに使ったわけでは必ずしもない。

海原 要するに、これが私のところにあるのは、送られて来たからでしょうね。もう要りませんから、取扱注意だからと。

伊藤 「海原学校」という言い方は、当時の新聞記者は大つぴらに言っていたわけですか。

海原 それは新聞記者諸君が言っていたんですな。私がうるさかったのは、理屈ではなしに現実はどうか、ということですよ。それから表現、

言葉にやかましかった。その言葉はどういう意味だと。というのは、昔の帝国大本営の文書を見ると、言葉が壮麗ですね。

伊藤 美辞麗句というやつですね。

海原 そうです。そんな美辞麗句はやめろ、と言ったことは事実ですね。それ以外は知りません。そこまでが、これに関連しての、中曽根防衛庁長官が大いに、華やかに、長官としての活動を始めた頃のムードですな。それを知っていただくために申し上げているわけですからどね。

伊藤 「海原氏が見ている書類を指して」今ご覧になっているものは何ですか。

海原 これは記者会見です。

伊藤 記者会見のための材料ですか。

海原 中曽根防衛庁長官が防衛庁記者会でしゃべった時の要旨です。「手書きの青刷りで、表題に「新防衛力整備計画について 長官の記者会見要旨 四十五年十月二十一日、記者クラブ」と書かれ綴じられている書類を渡す。以下「長官の記者会見要旨」と表記」。

伊藤 これは「(昭和)四十五年十月二十一日 記者クラブ」と書いてありますが、会見要旨を作ったのは誰ですか。

海原 それは防衛庁で作ったんです。

伊藤 防衛庁が作ったんですか。

海原 もちろんそうです。

伊藤 こういうコピーを作って関係者に配るんですか。

海原 私が要求したわけですよ。「防衛庁はどういう説明をしたんだ」と言ったら、「こういうことでございます」と言っただけで届けられたのが、これです。これも置いて行きます。そういうものだけということでは、こ

参考になるかもしれませんね、ならないかもしれませんが。

伊藤 これ「長官の記者会見要旨」は同じものが何部もありますね。この「新防衛力整備計画の概要について」は、「防衛局長が十月十九日十三時から十四時、防衛記者クラブにおいて事前説明したもので」とありますね。今度は後追いで、防衛局長が言っているということですね。「配付資料と二十一日に長官が補足的に説明する範囲の事項は、防衛庁発表とし、その他は取材として取り扱うことになっている」。

海原 中曽根君の頃の扱いですね。それは大臣によって違いますから。伊藤 説明資料を配ったわけですね。「海上自衛隊は自衛艦が三次防の完成時二一六隻で、四次防改正時が二〇〇隻」とか、かなり詳しい話が出ていますね。陸上自衛隊のことも出ていますね。こういうふうな新聞記者に説明したということですね。

海原 くどくなりますが、両方「新防衛力整備計画(防衛庁原案)」と「長官の記者会見要旨」を見ましても、へり空母の説明はないんです。

伊藤 でも質問は出ないんですかね。

海原 それは知りません。新聞記者が勉強しないからですね。

伊藤 だって、あれだけ派手にやったことですよ。

海原 やったのは私がやったんですから。国防会議に来て、事務局でやったんです。それまでどこも問題にしない、というところが問題なんです。それでわかりでしょう。要するに防衛庁における物の考え方は、昔のままに固まっちゃっているわけです。旧軍なみにね。

伊藤 それでも「海原学校」と言われるような、それと違った人たちがかなり防衛庁にいるわけでしょう。

海原 駄目ですね、力になりません、一人や二人では。下の方ではね。

伊藤 上の方には？

海原 いないですね。少なくとも中心課長がそうでないと駄目ですな。それから局長がそうでないと。だって、「中曽根構想」の前の「赤城構想」を見てください。私が全部ぶち壊したんですからね。私と村上君があれを分解しない前は、あれでいいということに来ていたんですからね。

伊藤 防衛庁の内局として、ですか。

海原 防衛庁全体として。だって、陸・海・空全部揃って、ですからね。統合幕僚会議を含めて、ですね。それでこれで行きますということとで、赤城さんがしゃべったわけです。だから私は、お前は何をしたんだと言われた時に、私は防衛庁で「赤城構想」を壊しました。それから国防会議事務局長では「中曽根構想」を壊しました。両方とも長年部下が研究して、主管大臣が最終的にそれを読んで、よしこれで行こうとなったものです。ところが私がこれを読むと、いろいろ問題が出て来た。そういうものだということですよ。

「新防衛力整備計画」を解体する

伊藤 今の話だと、「赤城構想」にしても、防衛庁自体が考えていたことを、この大臣が来たのでやろう、ということですか。

海原 そういうことです。だから大臣は、「ご苦労さん」と判を捺すだけです。

伊藤 これはなかなかいいな、大いにぶち上げれば、と。

海原 できればいいんですけど。

伊藤 まあ、構想ですから、できるのかどうかわからない（笑）。

海原 いや、そこでいまおっしゃったことが問題なんですよ。できない構想はしようがないじゃないですか。意味がないじゃないですか（笑い）。

伊藤 ちょっと賑やかにしよう（笑い）。

海原 まあ、そんなことですよ。

伊藤 じゃあ、賑やかな構想を先生が反対しなかったらどうなったわけですか。

海原 知りませんね。

伊藤 そういうものとしてでき上がるわけですか。

海原 でしょうね。

伊藤 だけど、別に防衛庁がそうやったからといって、大蔵省が金を付けてくれるわけではないでしょう。

海原 それはわかりません。「構想を」作った中で、経理局長とか、会計課長は大蔵省から来ているんですからね。

伊藤 じゃあ賛成しているんですね。それならできたかもしれない。

海原 わからないんです。各省から来ているんですから。少なくとも、防衛庁の経理局長、その下の会計課長というのは、歴代、大蔵省の優秀な人が来ているわけですからね。例を挙げれば石原（周夫）さんですね。後に次官になった石原さんなんかも、経理局長で来たわけですから。大蔵省としては、防衛庁の会計課長や経理局長には優秀な人を送り込むわけですね。だからその後、大蔵省出身者が次官になる。元は、そこにあるわけです。そんなことですからね。

伊藤 だんだん内務省から大蔵省に移っているんですね。

海原 もう内務省なんかにはありませんね、残念ながら。

佐道 そうすると、中曽根さんが経団連とかでおっしゃった航路帯構想とかは、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」にも、これ「長官の記者会見要旨」にも入っていないわけですね。じゃあ、海原先生が国防会議で審議をされるプランは、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」になるわけですか。

海原 そうです。

佐道 でも、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」には元々航路帯とか入っていないわけですね。

海原 ないですけど、どういうふうにするのか、ということになるわけです。対潜水艦作戦と書いてある。潜水艦の掃討、ということをやると聞くと、そこで出て来るんです。

佐道 そこで航路帯ということが、説明の中で出て来るわけですね。

海原 そうです。

伊藤 じゃあ、予算の積算もあるわけですね。

海原 積算もその間に出て来ます。だから、この前申し上げたでしょう。私は国防会議事務局では全部録音した。テープに全部取った。それを持っていないと、わからないですよ。だから誰でも後で聴けるようにということ、会議の一部始終を録音したわけですからね。後に残した。

伊藤 昭和四十六年だったら、テープレコーダーがまだ大きな時代だったですね。

海原 こんなもの「両手で抱えるぐらいの大きさを示す」でした。こんなもの「いま録音している小型録音機を指す」とは違いますから。

佐道 まだオーブプリンルですね。

海原 そう、そう。それでやっていました。私のところの会議は、全部それに入れる。そうでないとわからないですよ、こんな数字だけでは。

佐道 その議論の中で、ここに書いてあるこれは何を意味しています、というような形で航路帯とかが出て来たということですね。

海原 そうです。それはいくら頭の優秀な人であっても、それ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」を読んだだけでは、何が何だかわかりませんよ。言葉があるだけです。対潜水艦作戦を効果的に実施すると。これは何を言っているんだと（笑い）。それでいろいろと作戦構想など聞くわけですね。それで問題が出て来る。

伊藤 それは国防会議が開かれてからなんですか。

海原 国防会議事務局での審議になるわけです。

伊藤 正式の国防会議ではなくて。

海原 国防会議の機関として動いているわけですからね。まず参事官会議で審議をして、幹事会があって、それから国防会議ですね。その参事官会議の一段目ですね。だから、いつもこの「政策研究院・虎ノ門の会議室」ぐらいの部屋でやる。

伊藤 その場合、説明者は防衛局長になるわけですか。

海原 局長も来ますが、大体は防衛課長、それから各幕僚監部の責任の一佐とか二佐ですね。そうでないと、わからないですね。細かいことまで知りませんね。そういうことで細かくなつてくると、いろいろ具体的になつてきますからね。例えば、日本に攻めて来る敵襲の状態はどうだ、一体どこに来るんだ、何機来るんだ、それはどのぐらいの状況で来るんだ、ということは聞かなければわからない。聞いても、

局長も課長も知りません。「制服」の方になる。そういうやり取りが全部入っている。しかし、それはここ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」には一つも書いてない。そこで非常に問題が出てくる余地があることはおわかりでしょう。これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」を見ただけでは誰も何とも思わない。どこに問題があるかわからない。しかし、発表されるのはこれしかないんですね。

伊藤 それで新聞記者は、それに基づいて書くわけですね。

海原 新聞記者に書く能力があるかどうかの問題です。

伊藤 新聞記者がそれを見たつてよくわからないということですか。

海原 見てもわからんかも知れませんか。

佐道 この頃はもう朝日の篠原さんとか堂場さんとかは、一線ではやっっていないんですか。

海原 いたと思いますね。監督していきましょうね。

伊藤 まだやっっているでしょう。

佐道 一九七一年ぐらいですから、第一線ではないかも知れませんか。

海原 新聞記者諸君がその気になれば、聞いていなければならぬ。例えば「海上自衛隊は沿岸海域の防備体制を強化し、併せて上陸侵攻対処能力を充実するため、所要の護衛艦、高速ミサイル艇、潜水艦、対潜航空機等を充実するとともに、機雷敷設能力を向上」と書いてあるんですね。さあ、これは何を言っているんだ、と言うんですね。機雷敷設能力は今ほどだけあるのか。どこにどれだけあるんだ。それをどうするんだ。聞かなければわからないでしょう。どこにも書いてない。こういう作文だけで終わっているんです。

伊藤 裏に隠しているということですか。

海原 事実を針小棒大に書いてあるわけです。だから大本営の作戦計

画と同じだと言っているわけです。じゃあ、今の能力はどれだけあるんだと。この前、今の『防衛白書』の絵を持って来たでしょう。あれは嘘ばかり書いてあるんですけれどね。どこに敵が来て、そこにブワツと行って、そこに機雷を敷設すると。そんなこと、とんでもないことですよ。私は、それでは駄目だということをずっと言ってきたわけです。

伊藤 駄目なら、どうするんですか。

海原 だから駄目でないようにしろ、と言っているわけです。例えば魚雷の調整能力、機雷の調整能力、それぞれ全部用意しろと言うと、「します」と言いながらやらない。しかしながら、今の『白書』には、一旦緩急あれば、直ちに対応できるように書いてあるでしょう。『白書』の話を後でしますが。

伊藤 『白書』の話を伺いますよ。

海原 まず防衛庁が出してきた計画自体が、こんなものだということです。それを知っていたかかないと、おわかりにならないと思うんです。

伊藤 これが国防会議の参事官が集まった会議で議題になるわけですか。

海原 そうです、私が質問していくわけです。

伊藤 これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」がそうなんですか。

海原 そうです。これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」を防衛庁が出して来ましたから、ここにこう書いてあるけれど、それはどういうことですか、と聞くわけです。

伊藤 それがかかなり続くわけですか。

海原 もちろん、そうです。それで一番驚いたことを言いますと、防

空能力では、北海道に一カ所新しく飛行場ができるんです。それからミサイル部隊も一カ所余計にできるんです。北海道のどこにそんなものができるんだ、何カ月かかるんだ、いくらかかるんだと聞くと、全然わからない。

伊藤 わからないというのは、やっている本人がわからないという意味ですか、それとも言わないということですか。

海原 そういうことです。北海道のどこでやるんだと聞くと、返事がない。そんなものなんです。

伊藤 ちよつと待ってください。それは予算執行がもし付いたら、やらなければいけないわけでしょう。

海原 やらなければと言っても、認められるかどうかわからない。

伊藤 認められた場合、やらなければいけません。

海原 やれる場所がありますか。

伊藤 場所がないのに、ですか。

海原 そこでですよ、問題は。だから机上の空論だと言っているんです。

伊藤 そうしたら予算を使い残すということになるわけですね。

海原 そうなりますよ、と言っているわけです。そんなものでいいんですか、と言うわけです。だから、ご破算になるんです。その一番いい例が航路帯構想ですよ。

伊藤 では航路帯構想についての先生のお考えはどうですか。

海原 先生のお考えと言っても、私の考えはゼロですけれどね。

伊藤 所詮無理だと。

海原 まず、それ「航路帯構想の図」を見てください。伊藤先生からそういう質問が出るのは、当時の防衛庁がこういうものを作った以上は、しっかりとした具体的な計画があつての上のことじゃないか、

伊藤 まあ、そうですね。何かちゃんと積み上げていかなければ……。

海原 だから、そう思うことが間違いですよ、と言っているんです。どうして私が大きな声で言うかと言えば、そこなんです。かつての大本営と同じですよ、と言っているんです。皆さん方は、新聞記者どもはもつと勉強しなければいけないんですよ。架空の作文で満足しているからいけないという話なんです。それが「海原学校」です。それから、一番いい例が航路帯構想なんです。それを堂々と久保君が経団連で説明しているわけでしょう。それで中曽根大臣が、敵潜水艦の跳梁を許さないと云ったんですから。触りのところだけを言いますと、

ヘリ空母にヘリコプターは何機載っていると云いますか。そして何機が動いていると思えますか。そこに書いておきましたが。

河野 「六機搭載、四機実働」ということですか。

海原 問題はそこですね。一三三ページに書いてありますね。八、〇〇トンのヘリ空母が要る、と言っているわけですね。中曽根防衛庁長官が経団連の防衛生産委員会で言ったわけです。久保君が行って説明したわけですね。そこで八、〇〇トンのヘリ空母が要るわけです。

ヘリコプター六機搭載、四機実働、そういう計算になりますと、いかにも検討したようなことを言っているでしょう。その四行後ですが、

防衛庁長官は、「六機搭載、四機実働」と説明していますが、それが具体的に何を意味するか問題なんです。四機実働というのは、四機は常に飛べる状態にあるのか、同時に四方面で、それぞれ一機ずつが任務飛行をやっているのか、どっちなんですかと。四機実働と言

うと、いかにも四機飛んでいるように思うでしょう。

ところが、米海軍でこの実験をやっているんですけど、一〇〇キ

口平方ぐらゐのところ、常にヘリコプターが任務に就くためには、六機以上の保有が必要であると。六機持っていて、ようやく一機が実質活動するわけです。そういうふうには、米海軍が実験の結果を言ったんです。そうになると、中曾根さんの説明はおかしいでしょう。さて中曾根さんがそう言ったのは、誰がそう言ったからなのか。それは内局の局長じゃないですよ、海幕ですよ。

そこで私がこのことを問題にしたら、面白い話なんです、私の事務局に海上幕僚監部から、「海原局長さんがこうおっしゃっています、その根拠を伺ってください」と言ってきた。そこで、「それはお前さんの方の、海上幕僚監部の調査部で出している月報に書いてあるだろう」と言われたわけです。それに潜水艦特集があるんです。それに、そう書いてあるんです（笑い）。向こうは黙っちゃった。これでおわかりでしょう。同じ海上幕僚監部で、調査部と防衛部と隣り合わせですよ。隣り合わせにしているのに、防衛部の連中は隣の調査部で出している月報を読んでいないんです。それが日本の実態なんです。ところが海上幕僚監部からそういうものが出てくれば、それを調査部は本にして月報として出しているんだから、承知の上でやっていると思うでしょう。とんでもないです。海原局長があいいうことをおっしゃっているけれど、その根拠を教えてください、と言う（笑い）。

伊藤 そのヘリ空母は何隻ですか。

海原 取り敢えずは一隻ですよ。そこには何隻とも書いてありません。まず「ヘリ空母」という言葉が書いてないです。しかし中曾根さんは、表では「ヘリ空母」と言ったわけです。

伊藤 では、この中にはそれが込められてはいるんですね。

海原 いるんです。その辺に問題があるわけです。だから、そう簡単

なものじゃないということですね。

伊藤 とにかく空母を持ちたいところから始まるわけですね。

海原 そういうことです。「空母」と名の付くものが欲しい。それは保科さん以来です。それが「海」の人の夢ですね。見果てぬ夢だと私は思います。しかし、それは表では言えませんからね。

伊藤 その一機で、これだけの空域をカバーしようと……。

海原 敵の潜水艦の跳梁を許さずと言ったんです。たった一機で（笑い）。そんなことができますか。

伊藤 これは要するに、ソ連の潜水艦がウラジオからここに出て来て、日本のタンカーを邀撃するということですね。

海原 だからペルシヤ湾まで行け、と言うんです。それが旧海軍の人々の長年の主張です。

伊藤 ここ「航路帯」から先はアメリカ軍が、ということですか。

海原 いや、取り敢えずここまでということ、後は何とかなるだろう、です。

伊藤 何とかなるだろう、と言ったら、ここ「航路帯」だって何とかなるんじゃないですか（笑い）。

海原 私に言われても困るんですが、それが日本人の、司馬遼太郎さんの言う「遺伝的体質」でしょうね。

伊藤 いや、僕らも何とかなるだろうと思って、いろいろやっていますけれど（笑い）。

佐道 何とかせにやいかん、と言ってね。

伊藤 何とかせにやいかんです。

海原 その「何とかなるだろう」のお話もしたいですけどね。

伊藤 「何とかしなければならぬ」が「何とかなるだろう」になる

わけですね。

海原 その「何とかなるだろう」は、まだいいんですよ。「こうすればできる」というから困るんです。

伊藤 それは、お金を取る時は、そう言わなければ。

海原 お金と言つても、それで大日本帝国がどういうことになったか、あんた考えてごらんなさい、と私は言うんです。私がいつも言いますのは、口幅つたいことですが、私は満州の第一線で苦勞したんです。それがあつたからです。帝国陸軍、しかも当時関東軍と言えば、日本陸軍の最強部隊だつた。それも、対ソ作戦の第一線におつたわけですからね。その部隊がいかに哀れであつたかということ、身をもって体験していますからね。それを東京におつて、大本営だとかと称して、地図の上でやつていた。地図は小さいですからね。地図の上で一センチ行くことは何でもありませんよ。その一センチが實際やつてみたらどうか、ということなんです。それで、私はずっと防衛庁に長くいたんです。というのは、私を除けば、体験的にそういうことを言う人がいなくなつた。後は短期現役で、中曾根君とか久保君みたいに、海軍に行つた切りでしょう。船に行つた切り。第一線で、零下三〇度のところで苦勞した奴は一人もいないですよ。そういうことで、しょうがなしにずっとおつたんですね。

伊藤 そういふ人は、もういなくなつたわけですからね。

海原 いなくなりました。もう駄目ですね。

伊藤 駄目ですか。戦争で苦勞しないと駄目なのかな。

海原 私が仮に防衛庁に長くおつたら、内局に入ってくる大学出の連中の一カ月ぐらい北海道で演習をやらせますよ、いろいろな状況下で。それで初めてわかることですよ。今度市ヶ谷に立派な防衛庁ができた

でしょう。落成式に来いと言つて案内状が来ましたけれど、私は断りました。あんな、建物だけ立派になつたつてしょうがないですよ。建物で勝負するわけじゃないですからね。

伊藤 それはもつともです(笑)。

海原 そこなんです。私は大学を出た優秀な人に、防衛庁に来ていただきたいと思う。同時に、その人たちは、第一線の部隊というものがどんなものか、どういうふうに行動すべきであつて、そのためにはどういふマイナスがあるのかということを経験しなければね。

伊藤 それは実際に体験させていないんですか。

海原 していませんよ。何もやつていないです。

伊藤 すぐデスクなんです。そんなことはないでしょう。

海原 体験入隊と称して、一週間ぐらいあつちこつち行くだけです。それは、ただお客さんで行つていただけでしょう。お客じゃ駄目なんです。私みたいに、あの大きな馬の軀をマッサージしてやつて、馬に食事をしてもらつてから、ようやく自分の飯が食べたという、それが軍隊なんです。それは体験以外、何もありません。やれと言つても、やれませぬ。そこが問題です。しかも、単に内局だけじゃないんですよ。防大でもそうですよ。どんな演習をやつているかという問題です。

伊藤 外国の軍隊に派遣するということはやつていないんですか。

海原 今のところやつていませんね。

伊藤 アメリカ軍の演習などは、凄いいことをやつていくわけでしょう。

海原 それはそうです。特に海兵隊は凄いですね。あれはもつぱら実戦演習ばかりです。しかし彼らの戦争の仕方と、日本の自衛隊とは全然違うと思うんです。要するに、アメリカの軍隊というのは外征部隊

ですからね。アメリカのどこかで戦争をするんじゃないんですよ。必ずどこかに出て行って、そこでやるものですから、それは当然違いますね。日本の場合は、どこかに出て行くことはないでしょう。わが郷土を守ることですから、自ずと違ってくるはずだと思うんですが、駄目ですな。一体どうなるのか知りませんが。

伊藤 いずれ海原さんの国防論を伺いたいと思っておりますので。

海原 それはもう駄目です。諦めました。

伊藤 諦めたら困るじゃないですか。どうするんですか(笑い)。

佐道 四十六年四月二十六日という日付が入っていますが、この日付でこれができるって、先生のお手元に来たわけですね。それから国防会議で審議が始まったということですね。四十六年四月というと、まさに久保さんが防衛局長になっている時ですね。さっき、課長とかが中心とおっしゃいましたが、久保さんなども来て議論するんですか。**海原** 彼は、知らないんです。さっきも言ったように、彼は「経済原論」ですからね。今、うちの会社の貸借対照表はどうなっているかと言ったら、知らないです。この前申し上げたかと思いますが、彼は元々、警察庁では会計課におったんですね。そういう予算の経験があるんです。

その彼が、私の前任の「北村」局長の時には、ちょうど国防会議事務局の参事官で、予算をやっていたわけです。その彼のところに帳簿が何もないんです。総理府に預けちゃっているんですね。私が行って、すぐに「この予算はどうなっているんだ」と言ったら、帳簿がないんですね。「どうしたんだ。小なりといえども、一独立官庁である」と言ったら、「いえ、国防会議事務局は小人数ですから、全部総理府の会計に預けています。だから、ありません」。これが久保君です。

「警察で君は会計をやったんじゃないか」「やりました」「そんなことではないのか。仮にも、瘦せても枯れても国防会議事務局は総理大臣直轄の官庁じゃないか。その予算がどうなっているか、帳簿が局にないというのはおかしいじゃないか」「今まで、これでよろしゅうございました」。前の北村さんまではこれでいいことだったんですね。私が事務局長になってから、国防会議事務局の仕事のやり方から変えて行け、「帳簿を持って来い」ということになるわけです。

ですから、私の前までは何も問題になっていないでしょう、国防会議がどうしたこうしたということは。私の前の北村さんまでは何もやらないんですから。やらないで済んだんですから。

伊藤 この審議は、この前お話がありましたように、最初に担当者、つまり、いろいろなところから集まって来た人たちから始まって、だんだん上げて行くわけですね。それで最後の国防会議を正式に開いて、ということになるわけですね。どの段階で潰したと、先生はお考えですか。最後の正式な国防会議で、これじゃ駄目だということですか。

海原 これじゃ駄目だ、ということは、「国防会議に」行く前からですね。幹事会にも上げませんね。私のところ、要するに国防会議事務局での参事官会議でもう駄目だと。

伊藤 でも一応ずっとやって、国防会議まで行くわけでしょう。

海原 それは行きます。時間がかかりますけれどね。ただし、中曽根さんが考えたように、「俺の時に」ということにはならない。

伊藤 それは、国防会議で修正をしていくわけですか。

海原 修正ではなくて、一番いい例を言いますと、まず(自衛隊が)戦うということについて、何か月間戦うんですかと聞くわけです。

伊藤 敵が攻めて来た時の話ですね。

海原 「陸」は一カ月、「海」は三カ月。違うんです。どうして陸・海・空とあって、「陸」は一カ月に「海」は三カ月なんですか。もう一つ言いますと、「陸」と「空」は、戦場が日本の四つの島ですね。

「海」はそうじゃないんです。この四つの島に近いところよりも、そこに行くまでの広いところが戦場なんですね。ここで「海」は三カ月、「陸」は一カ月にわたります。それを、統合幕僚会議で調整しなければいけない。できない。大臣の下でちゃんと調整してやるべきです。この時に、「何カ月戦うことを考えているんだ。『陸』は一カ月、『海』は三カ月。どうしてそうなるんだ。『陸』が一カ月経って手を上げたら、『海』が三カ月戦ったつてしょうがないじゃないか。

この前の戦争の時、フランスはどうだったか。フランスはドイツに対して手を上げた。その時、フランスの海軍は地中海の各港で健在であった。君らは知っているだろう。だけど日本の場合、どうなるんだ」と聞くと、「はあ」と言うんですね。「とにかくそんなことじゃ駄目だ。陸・海・空ともに、どういう状態の下でどれだけのことができるか、やらねばならないか、そのためにはどういうことをすべきか、そういうことを用意して来てくれ」と言うわけです。

伊藤 ということで、次の会議になるわけですね。

海原 そういうことです。

伊藤 それで次の会議で、また別のところが問題になる。

海原 次の会議にならないですよ。もちろん、一週間や何かではできませんね。

伊藤 そういう会議を延々とおやりになったんですね。

海原 そういうことです。その間はまるで防衛庁の幕僚に勉強をやら

せているようなものです。

伊藤 海原にいじめられた、ということになるんですね。

海原 またやられた、と。

佐道 中曾根さんは、自分が長官の在任中にこれを決めようと思っ

ているわけですね。

「大綱」から「中曾根趣味」を除く

佐道 四十六年四月二十六日に「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」がお手元に行ったとして、その辺りから国防会議で審議が始まった。そうすると、国防会議の決定事項というところを「『防衛ハンドブック』」で見ますと、四十七年二月七日に、「第四次防衛力整備五カ年計画の取り扱いについて」という話になって、ほぼ同じ四十七年二月二十五日に、「関係予算の修正について云々」とあって、それからまた飛んで十月になって、「第四次防衛力整備五カ年計画の策定に際しての情勢判断及び防衛の構想云々が決まる」ということになっているわけですね。そうすると、もうとっくに中曾根さんがいなくなった後の話になるわけですね。その時に決まった構想とか大綱は、これ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」とは、全然違うものになっているということですか。

海原 なっていますね。

佐道 それは審議の過程で、そうなったわけですね。

海原 ええ。だから防衛庁の中で、今度は問題になる。防衛庁の中で改定作業が始まるでしょう。それに時間がかかりますからね。

佐道 先生の質問に答える形で見直しをして、ということですね。

伊藤 防衛庁の中で、ですね。

海原 ええ。それまでは、そんな細かいことは問題にならなかった。

一体、敵がどこに来るんだ、どう想定しているんだ、何機来るんだ、ということをお前は聞くわけです。答えはないですね。挙げ句の果てに出て来た案が、北海道の数カ所にせいぜい四〇〇トンくらいしか爆弾を落とさないよ。お前さん、それだけで終わりか。この前の戦争で、沖縄に対してアメリカがどれだけの攻撃を加えたのかということを考えれば、そんなもので済むはずがないだろうと。そうすると、「はい、勉強いたします」と言って帰るわけです。帰ってから大変ですよ。だって、そんなに戦えませんが。

伊藤 大体、ソ連の空軍が、極東にどれくらい配備されていて、それは実際の稼働がどれくらいで、戦争になった場合に、どれくらいの数を集めてくる可能性があるかという算定は、防衛庁は日常的にやっていることでしょうか。

海原 やっていません！ そんなこと、どこもやっていないですよ。おかしな顔をされますけれど、そういうものなんです。来年、再来年に何かがあると思っと思っていますから。毎年の予算は、毎年の教育でやっているだけです。

私が沖縄に行つて、これは前にお話ししたと思ひますが、沖縄にいる「空」の部隊のパイロットを十名くらい集めて、私が「君たちはF104の第一線部隊だ。どこで訓練をやっているのか」「できていま

せん」「それじゃ困るだろう。だから私が一案を出す。パイロットの代表がストライキをやれ。主張は、第一線の部隊が任務を達成するために必要な教育訓練の場を与えよ、ということだ。ストライキをやれ。そうしたら首謀者が処罰されるかもしれないが、それで初めて中央は考えるだろう」「はあ」と言つて、それだけですね。

伊藤 訓練の場がないというのはどういう意味ですか。

海原 空域がない。

伊藤 訓練空域がないんですか。

海原 ないんです。防衛庁が主張している訓練空域というのは、ただ飛んでいるだけです。本来ならば、アメリカのように一つの空域で目標を掲げて、それに対して射撃をして、それを測定しなければならぬですね。どこにもないです。

伊藤 余裕がないということですか。

海原 まず空域に余裕がありません。一般航空との関係もありますしね。それから金がないから。

伊藤 アメリカ軍のあれもありますしね。

海原 だからドイツはどうしているかという、ドイツはアメリカに行つてやっているんです。ドイツだって、そういう訓練が必要でしょう。しかしヨーロッパではできませんから、それでアメリカに行つて一人あたり五億円かかりますと言われて、やらせると言った。そうしたらいい状態。ある意味では哀れですね。だけど、誰もそれを問題にしなくておきます、なんて言っているわけでしょう。

だって、F104という飛行機については前にも申し上げましたけ

れど、これは全部退役しましたよ。F104を造る時に、国会で社会党の矢嶋議員から、「今、あれはサイドワインダーしか付けられない。これはレーダーホーミングではない。赤外線追尾方式だから、必ず敵の後ろに回らんといかん。そんなことじゃ駄目だから、レーダーホーミングのミサイルに改造する。費用はいくらでできるな」と念を押されています。防衛庁長官も、航空幕僚長も「できます」と言っている。しかし、できていません。できるはずがないんです。

それで全機、無事というか、退役したんですね。こんなのは、国民に対して嘘を言っているわけです。F104が最終的に決まる時に、国会の参議院で、社会党の矢嶋代議士からちゃんと念を押されている。「それじゃあ、防衛庁から説明を聞いたけれど、防衛庁は一機百十五万ドルを割る価格で、レーダーホーミングのミサイルを搭載するよう「できるな」と言われて、「できます」と答えている。できませんよ。誰も責任を感じていない。そんなものなんです。おかしいじゃないか。私は誰一人それに対して責任を感じないのは、おかしいと言っているんですけれどね。みなさん、黙って見ている。そういう状態なんです。

そういうことを、私が国防会議事務局長で、防衛庁原案が出て来て、これは具体的にどうするんだ、といちいち聞いていくわけです。そうすると、「いま実は資料がございません」「来週までに用意してくれ」「では来週ご説明します」ということになるわけです。

伊藤 「『防衛ハンドブック』によると」四十七年二月に二つの決定がされていますが、これは内容ではないんですね。

河野 四十七年二月八日に閣議決定がありますね。

海原 これは何をやったか、これだけではわかりませんね。いろいろ

ありますから。

伊藤 これは「取り扱いについて」なんですよ。

河野 「取り扱い」を閣議決定した、ということですか。

海原 閣議決定を二月八日に行っていますね。これは調べないといけません。

伊藤 「取り扱いについて」ですから、内容じゃないんですね。何の意味でこういう閣議決定が必要なのか、よくわからないんですが。そして次の決定は、ずっと後になって、十月になってからですね。

河野 この時も閣議決定ですね。

伊藤 これは「主要項目」というから、これは内容ですね。

河野 「情勢判断及び防衛の構想」と「主要項目」を分けていますね。

海原 これは私は今は記憶にありませんね。あの頃はいろいろなことがありましてね。

伊藤 ちょっと資料を見てくださると、いろいろわかるんじゃないかと思いますが。こういうもの「新防衛力整備計画(防衛庁原案)や」長官の記者会見要旨」が出てくるわけですからね。

海原 二月七日の国防会議決定ですね。

伊藤 なかなか決められないので、取り敢えず、これをどう扱うかという決定をされたんですね。

海原 これは沖縄との関係ではなかったですかね。

佐道 沖縄はまた別にあります。「自衛隊の沖縄配備について」というのが四月十七日にありますね。

海原 元々は沖縄から問題が起こったんですよ。沖縄の「先取り」だということ。

伊藤 それは四月十七日にやっていますね。

海原 それは調べてみましょう。いろいろなことがありましたからね。

伊藤 実際に決まったのは十月ですかね。

佐道 四十七年の「取り扱いについて」という二月七日の国防会議決定、翌二月八日の閣議決定ですが、その時に、「第四次防衛力整備五カ年計画の大綱」というのが決められているんです。ここにはそう書いてないんですが、これは『防衛ハンドブック』の「防衛計画」に載っているんです。

伊藤 括弧書きで書いてあるこれ「大綱」が決まったのか。

海原 二月七日の国防会議決定は出ていますね。「計画の大綱」ですね。

河野 翌日が閣議決定ですね。

海原 それは一応国防会議で決めておいて、たいてい翌日閣議決定をしていますからね。これは、これだけのことでしょよね。

河野 ということは、これ「第四次防衛力整備五カ年計画の大綱」と、さっきの「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」というのは全く別なんですか。

伊藤 いや、それ「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」を叩いていったわけでしょう。

海原 それは全部ご破算にしたわけですよ。

河野 じゃあ、いつご破算になったんですか。

海原 それは防衛庁の原案ですからね。

伊藤 その防衛庁の原案を叩いて、叩いて……。

河野 骨抜きになったわけですか。

海原 ええ。

伊藤 じゃあ、その「大綱」は、一体誰が作ったんですか。国防会議

で作るわけじゃないでしょう。

海原 いや、これは参事官会議で決まるんです。

伊藤 決めるのはそうでしょうか、原案はどこで？

海原 参事官会議で。

伊藤 原案を作っちゃうんですか。

海原 作っちゃう。

伊藤 ああ、そうですか。

河野 じゃあ、原案は、もう一回防衛庁に下ろすのではなくて、国防会議で。

伊藤 参事官会議で。

海原 作っちゃう。そこには防衛庁の参事官もいますからね。持って帰ってもらうわけです。それで幹事会で決めて、これで行きますよ、よろしい、となって、それで国防会議です。だから、参事官会議で大幅な修正をするわけですね。

伊藤 必ずしも防衛庁に持ち帰って、一回ずつ往復するというわけではないわけですね。

海原 必ずしも、そうではありません。しかし最終的には、これでいいなということでは承を取るわけですね。それで、よろしゅうございませすということになって、初めて幹事会を開くんです。

伊藤 参事官会議は、相当イニシアチブを持てるんですね。

海原 持てますよ。だって各省の中軸課長ですからね。この前ご説明しましたように、国防会議の参事官には、三名、大蔵省とかから来ますからね。

伊藤 それが常駐しているわけですね。

海原 それがちゃんと連絡を取って、兼務の参事官と一緒にやってや

っていますからね。だから大事は、大蔵と防衛ですからね。大体、そこがOKすれば、他所はOKですからね。

伊藤 では、この「大綱」なるものがそこで決められたということは、「大綱」については海原さんもこれでOKということですね。

海原 もちろんそういうことです。

佐道 「『防衛ハンドブック』で四十七年二月八日閣議決定の「大綱」を」ザッと見ただけですけれど、やはり「新防衛力整備計画（防衛庁原案）」とは「だいぶ変わっていますね。原案の方は、自主防衛云々とか、情勢判断とかいろいろあるんですが、その辺が全部抜けて、非常に一般的というか基本的なことになっていますね。

海原 それは「中曾根趣味」が入っているからです。

佐道 「大綱」の方は、具体的な目標とかは書いていないですね。そこまで詰めておいて、この「新防衛力整備計画」をご破算にして、基本的なところだけ「大綱」におまとめになって、具体的なことは十月に具現化したということですね。

海原 その時に、これは今までお話ししていませんでしたが、大蔵省の方の問題もあるんです。大蔵省というのは、予算で毎年決めていきたいわけです。五年間の予算の先取りは嫌だという基本的な気持があるんです。これは池田さんが総理の時もそうだったわけです。一体いくらぐらいの金を充てるんだと。用意しないとイケませんね。しかし、それを出してよろしいということは決められない。そういうことになるわけです。だから、防衛庁の希望するようなことをやるためには、これだけの金がたぶんかかるだろうと。それはわかる。しかしそれだけの金は、予算の先取りをやられてはいけないということになる。防衛だけに、そういう特殊な配慮をすることはできないと、これは池

田総理がピタツと言いましたね。いや、それは先取りではない、ないとできないんだと言うわけです。というのは防衛庁は、船を造るにしても飛行機を造るにしても、長期計画、五年計画が必要なんだと。その五年計画の間にどのぐらいの金がかかるか、それから会社に対してどれだけ負担させるか、そういうことを考えなければいけないから、具体的には予算の先取りと同じことになるけれど、やむを得ない、というのが、われわれの主張ですね。これがいつもせめぎ合いになる。大蔵省は、なるべくそういう予算の先取りを認めたくない。だから、総理の気持如何で違ってくるんですね。池田さんは、そこは厳しかったですね。

伊藤 今も財政のシステムは基本的に単年度主義ですよ。

海原 それはしかし、ちよつと違うんです。普通予算の繰り延べもできますし、年度を経過した場合には手当もできますしね。

伊藤 例外はあるんですね。

海原 ありますね。だから必ずしもそうじゃないんです。だからいま言いました船とか飛行機とか、そういうものの製造は当然五年くらいかかりますからね。防衛庁は比較的、そういう例外規定を認められやすい役所ではあったですね。しかし、それ以外の省は全部単年度が主ですね。だから、いつもそこでガタガタすることは事実です。総理大臣が、そういう意味でナーバスな人と、そうでない人によって、扱いが違いますね。

佐道 池田さんに比べて、佐藤さんはどうでしたか。

海原 それは大まかでしたね。やはり一番厳しいのは池田さんでしたな。吉田さんは、全然「われ関せず」です。他の人は適当にその時その時の政治情勢如何によって、ということですね。だって国債を見て

もわかるでしょう。絶対に国債は出さないということだったんですからね。借金を子孫に負わせてはいけないという議論だったのが、いや俺たちだけで負担するのもおかしいじゃないか、ということになったんですね。

伊藤 あれあれ、という間に、それが崩れたんですね。今や借金大国ですけれど。

海原 あれは最初は福田さんがやったんですからね。福田さんという方は、それに対して最も反対しておったはずの人なんですよ。

伊藤 そうですよ(笑い)。

海原 だからそこで、私の言う政治家というのは、いろいろなタイプがあるな、と思うわけです。

伊藤 でもあの時は、これは回復できるものだということだったんですけれどね。しかし、いったんできたら……。

海原 伊藤先生がおっしゃるように、あの時はこういう条件でやったんだ、という人はいないです。

伊藤 それは既成事実にしなよ、と言っても、やったら既成事実になるんですね。

海原 だからやっちゃいかん、という声の方が強かったですからね。留処がなくなると言ってるね。

伊藤 本当に今は留処がないですね。

海原 今はそれが当り前のようになっているでしょう。私なんかは今でも時々経済誌を読んでいるんですけれど、それが本當かわからないですね。

伊藤 もう、戦争かインフレか起こらないとね(笑い)。

海原 伊藤先生がそう言われたら困る(笑い)。

伊藤 どうにも始末がつかない。

海原 それは町の経済評論家もいっばいいますしね。一体どれが正しいのか。余談になりますが、私が一番わからんのは金利ゼロということとです。こんなことがあるとは思わなかつたですね。そのプラスとマイナスは何なんだ、と聞いてみても、よくわからない。一時は金利六〜七%で、郵便貯金も六%ということ、みんな計算しましたね。私も計算しましたけれど。それで定期預金とか言っていますけれど。いま金利をどうこう言ったら、非国民みたいに思われるでしょう(笑い)。

伊藤 いまコンマ以下ですからね。

海原 何が意味があるのか。これからは、預かってやるんだから手数料寄越せ、と言うかもしれない(笑い)。

伊藤 保管料として、とか(笑い)。

海原 そういうことが笑い話になるだけで、怒る人はいないですよ。

伊藤 本当にこれはわからないですよ。

海原 伊藤先生がおわかりにならないのなら。

伊藤 僕は経済は音痴ですから。

海原 そんなことで、変な話になりましたが。

三島由紀夫と陸幕の関係

伊藤 ちよつと話題を変えて、三島由紀夫の話にしましょう。

佐道 そろそろ時間ですが。

伊藤 じゃあ、この三島由紀夫の話で終わりにしましょう。先生どうですか、三島由紀夫の話は延々と長いですか。

海原 それは仕方によりますね。

伊藤 じゃあ、短い方のバージョンで。また次回も伺いますので。

海原 まず私は、一言で言いますと、三島さんは非常に危険な人物だと思っていました。

伊藤 前から、ですか。

海原 はい、あの人が有名になるにしたがって。それが「楯の会」というのを作つたでしょう。あの時から、おやつと思いました。これは危ないな、と思った。ところが防衛庁の大方の人はあれを歓迎していた。その一つの具体的な例があるんですが、私の上の三輪（良雄）次官と、毎日新聞の幹部と、三島先生の三人で会食して、三島由紀夫大先生に半年間自衛隊の各部隊の体験入隊をしてもらう。その体験記を毎日新聞に連載する、という企画が進んでいたんです。これは私は知りませんよ。本来、そういうことをやるのは官房長なんです。なぜわかつたか。これは小説になります、麻布に小さな『胡蝶』という料亭がありまして、伊藤忠がやっています。そこに私はたまたま人を呼んで、昼に行つたんです。そこに、三輪君が来ている。女中さんが「海原さん、次官が来ていますよ」と言う。「ああそうか、誰が来ているんだ」「三島さんと一緒です」「それだけか」「いやもう一人、何か新聞の方です」と言う。これでわかつたんです。この三人で談合していたんですね。私に一言も話さないんですよ。

さあそこで、二、三日して、三輪次官から私に話があった。こういうことをやってもらおうと。私はそういうことがあるということを知っていますから、ははあ来たな、と思った。「なるほど、三島さんに半

年間各部隊の体験をやってもらって、それを連載する、結構ですね。

ただし三輪さん、今までの防衛庁の行き方からすれば、例えば共産党の『赤旗』の記者が三島さんと同じような体験入隊をしたと言つた場合に、これは断れませんか。いいですね。それを考えておきなさい。特に三島由紀夫氏だからいい、『赤旗』の記者だからいけない、ということとは成り立ちませんよ」と言つたんです。「うくん」と言つていましたね。こういうことがあるんです。

伊藤 それは実現したんですか。

海原 これです「両手を×の形に交叉させる」。それは実現しないのが当り前ですよ。毎日新聞の重役まで話が行っているんですが、やめたんです。「いいですね」と言つたんです。「その時に対応するのは私ですよ」と言つたんです。官房長ですからね。「次官のところに行く前に『赤旗』の記者が来て、三島がこうらしいから、われわれにもこうさせると言つたら、どう言つたらいいですか」と言つたんです。

「私が共産党の記者ならやりますよ。そういう特定の人に対して防衛庁がどうこうすることはいけないんじゃないですか」と言つたら、「うくん」と言つていた。

伊藤 それで終わりですか。

海原 ええ。そういうことがあった。僕は、ああ危ないな、と思つたんです。私は「楯の会」なんていうものは、趣旨は面白いかも知れないけれど、何の役に立つのかと思つた。ところが三島さんは、日本有数の文豪になる人として有名でしょう。だから、それを利用しようという動きがありましたね。陸幕には特にありましたね。私は陸幕の第四部長を呼んで、昔から僕の好きな人ですが、「君、三島さんを利用しようとしているけれど、扱いをうまくしないと危ないよ」と言つた

んです。私がそのことを何故言うかという、三島事件が起こった後で、『週刊読売』にその部長さんが、海原さんからこう言われたということをしゃべっているんです。「三島由紀夫氏は非常に危険な人だから、扱いというか待遇に気をつけなければいかん、と注意されていた」と言っているんです。事実、注意したんです。そういうことがありました。そういうことで、一言で言うと、私はこの人は非常に危険だと思った。

伊藤 それは直感的にですか。

海原 なぜ、あの人があんなに国防関係に深入りするのか。あの人身は昔、体格不良で兵隊になれなかった。その負い目があるわけですね。その他のことも二、三個人的なことを知っていますが、私はこの人は非常に危険だと思っていた。同時に陸幕その他に、そういうことで利用しようとしている動きがあつて、これは二重に危険だと思った。だから私は注意して、会いませんでした。三島由紀夫さんが佐藤総理のところに行つて、「防衛庁の海原という官房長は危ない、悪い」と言つたんですよ。だから、どう思うかということに対しては、それが率直な答えですね。

伊藤 事件そのものはいかがですか。

海原 あの時はたまたま私は国防会議事務局長の現職でした。総理府の部屋に行つたら、新聞記者の友人から電話がかかつてきて、いまこういうことが市ヶ谷で起こっていると。それで、すぐ様子を聞きましました。びっくりしましたね。

伊藤 予想したことではなかった？

海原 ないですね。あそこまで突飛なことをするとは思わなかった。

伊藤 危険だとは思つていたわけですね。

海原 やるなら、あれだけ立派な小説をお書きになる方だから、いろいろなことを知っておられるはずだしね。

伊藤 多少児童に類することをやりになつた。

海原 児童というと語弊がありますけれど、何を目的にして、何を当座のプラスに考えたのか、わからんですよ。しかも、あのがんじがらめに縛られちゃつた閣下、益田（兼利）君、これは私はよく知っているんです。非常に真面目な人で、旧陸軍の人です。どういうふうな真面目かと言うと、四部長というのは補給関係を担当している。そうすると、地方の茨城県に補給廠がある。そこに火事が起こつた時に、私のところに報告に来て謝るんです。「私の責任です」と言うから、「益田君、どうして君の責任になるの」と聞いたんです。そうしたら、「私は陸幕長の補佐をして、その方面を担当している幕僚であります。したがって、陸幕長が監督指導しなければならぬ補給廠、これは長官直轄部隊ですから、そこでこういう火事が起こつたということは、とりもなおさず、私の責任です」と言うから、「あなた、そんなことを言うのはおかしい。それは何もあなたの責任にはならぬと思う。非常に責任感が強いことはいいことかも知れないけれど、補給廠で火事が起こつたことについて、いちいち四部長が私の責任ですなんて言つたら、いかんと思う。これは私の判断だ。他の人の意見も聞いてみなさい」と言つたんです。

このことでわかるように、非常に責任感の強い人なんです。それが東部方面総監の時に縛られちゃうわけですよ。よりによって、またあの益田君の時に狙つたなと思つたんですがね。これは不幸なことですけれどね。まあ、びっくりしたでしょうね。私は、ああいうようなことを彼が起こすとは思いませんでしたけれど、何か非常に突飛なこ

とをやる人だなと思いましたがね。それを一言で言うと、危険な人物だということですよ。したがって私は、ある紹介する人がいたんですが、お断りしたんです。私を三島さんに紹介すると言ったんですが、いや、私は結構ですよと言った。

伊藤 会わせる、ということですか。

海原 ええ。「あの人は私の考えとは違うから、結構です。私は、そういう有名な人と特別に親しくなろうという気持は毛頭ございませぬ」と言ってお断りしたんです。そういうことがありましたね。

自衛隊の反響はどうかということですが、何もなかったですね。それはたまたま『ニューヨークタイムズ』の女性記者ですが、あれを見ていて記事に書いていましたが、「三島演説を聴いた隊員がみな慎重であった」と。一般隊員の態度を誉める報道を送っていましたね。ああ、これは良かったな、と思ったんですけれどね。私は現場に行っていないからわかりませんが、そういうのを見て、外国人の記者がこういうふうを書くのなら、まあいいな、と思ったんです。ちよつと突飛ですね。だから、これまた話が飛びますけれど、小説家というのはああいうところがあるんじゃないですかね。今の東京都知事もそうですね。

伊藤 ちよつと違うんじゃないですか（笑い）。

海原 だって、彼「石原慎太郎」も核保有論ですからね。だって、核ミサイルを数発持った原子力潜水艦を数隻、日本海に浮かべると。それが日本の外交に力を与えることになるよ『諸君』（一九七〇年十月号）に書いたんです。核装備を持つことが、どうして日本という国の外交に影響があるのかわからないです。彼はそう書いてるんです。それに対して、私は（十二月号に）反論を書いた。その時に、この人

はこういう考え方をするんだと思って、ますます危険だと思いましたね。それ以上の批評はできませんけれどね。わかりませんから。

伊藤 やっぱり小説家一般に対して、反感をお持ちのようですね。まあ、学者じゃなくて良かった（笑い）。では、大体今日はその辺りまでにしましょう。

海原 今日は、私の更迭の話まで行きませんでしたな。

伊藤 この次の話の山です。

佐道 まだまだ先です。第一回の『防衛白書』の話も伺いたいと思いますので。

伊藤 まだ『白書』の話も抜けておりますね。

海原 今日は何をしゃべったんですかね。

伊藤 「中曽根構想」を潰す話です。これは大きな問題でしたから、今日は非常に大きな山を一つ越えたわけですよ。

海原 要するに、今日知っておいていただきたいと思ったのは、そういうことなんですね。

伊藤 この時も、また先生は無名のメモをお作りになったんじゃないかな、と思うんですけれど。

海原 そう言われると困るんですけれどね。要するに、悪い奴は海原だ、ということになっちゃったんですよ。

伊藤 まあ、悪い奴は海原なんでしょう（笑い）。せっかく、われわれが考えたのに、全部潰された、「この野郎」というようなものですよ（笑い）。

海原 私は敢えて自慢するんです。私の親父から言われたことです。孔子・孟子の教え、老子・荘子の教えを教えられまして、わけがわからないんですが、「孟子は、『千万人と雖も我行かん』と言った。そ

ういう気概を持って」と言われましてね。何のことかわからなかったですよ。そんな、千万人と雖も我行かん、ということがあり得るかと思つたけれど、防衛庁や国防会議における体験から考えますと、そういうことになりますね。「イエス、サー」と言っている方が楽なんですよ。「イエス、サー」と言った方が評判がいいですな。しかし、それではいけないですけれどね。それから先になると、私もわからんことなんですけれど。

伊藤 だけど、それでおやりになって、別に悔いがあるわけではないでしょう。

海原 悔いはありません。悔いはありませんけれど、何でこんなに俺ばかり悪者にならんといかんか、と思つたですけれどね。

伊藤 千万人と雖も、だからですよ（一同笑い）。

河野 敵は千万人いるわけですから。

伊藤 俺ばかりと言つても、そういう主義なんですから、それはしょうがないです。たぶん今度お話しいただくと、国防会議事務局長時代の終わりに行くか行かないか、というぐらいのところですね。

海原 密度の問題なんですよ。

伊藤 密度は濃くやりましょう。

海原 いいですか？ つくづく反省しましてね。老人の昔話ばかりで申し訳ないと思います。

伊藤 それでは、次回よろしく願ひいたします。

〈以上〉

海原 治
オーラルヒストリー

第20回

開催日：2000年6月16日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第 20 回 質問項目

国防会議事務局長時代のお話で、前回お聞きできなかったことを中心に伺いたいと思います。

- ① 70 年 1 月、政府は外交・防衛問題の協議のため、外相、防衛庁長官、官房長官による定期会合を開く方針を決定したと報道されています（1 月 17 日、日経）。この会合についてご記憶のことがあればお願いします。また、これと防衛問題閣僚懇談会との関係などはどうなっているのでしょうか。
- ② 70 年 10 月、防衛庁内に在日米軍基地問題に対処するための基地管理協議会を設けることになり、在日米軍基地の総点検が行われることになった旨の報道がありますが、これについてお願いします。
- ③ 70 年 12 月、日米安保協議委員会で三沢、横田、板付、厚木、横須賀の 5 基地を中心にした在日米軍の撤収・削減計画と日本側への返還・管理形態の変更などが正式に決まったと報道されています（朝日 12 月 21 日）。また、同委員会で米軍側は在日米軍の実戦兵力を翌年 6 月末までに、ほぼ全面的に引き揚げるという削減計画を説明したと追加報道されました。この時の米軍の撤収・削減計画の内容、背景等について、ご記憶のことをお願いします。
- ④ 72 年（昭和 47 年）には四次防関係で国防会議が 4 回、同議員懇談会は 7 回開催され、国防会議が俄然、活性化しています。これらの会議で討議された内容、出席者で印象に残る人物などをお話し下さい。
- ⑤ 72 年 2 月から 3 月にかけて、四次防予算先取り問題をきっかけに、シビリアン・コントロールの問題が浮上し、各党がこの問題で、例えば社会党が自衛隊を調査する特別委員会を設置する構想を出したり、民社党、自民党が防衛常任委員会を設置すべきだと主張していますが、この問題についてご記憶のことがあればお願いします。
- ⑥ 72 年 2 月、ニクソン大統領が中国を訪問しました。ドル・ショックと併せて、日本の頭越しの行動でしたが、中国と米国の接近は、日本の安全保障問題や日米安保の信頼性といった問題にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。
- ⑦ 72 年 4 月、佐藤総理が、国防会議の拡大、討議事項の再検討を指示したと朝日新聞が報道しています（4 月 17 日夕刊）。その経緯や結果等についてお願いします。
- ⑧ 72 年 12 月に先生は国防会議事務局長をお辞めになり、評論家としての生活に入られます。同事務局長をお辞めになる経緯などをお願いします。また、同職在職中、もっとも印象に残っていることはどのようなことでしょうか。

大臣の三つのタイプ

伊藤 全員揃いましたので、始めさせていただきます。大体「質問項目」に沿ってお話ししていただきたいと思いますが、何か前回の追加などはございますか。

海原 追加ではなくて、今回の話と混ざります。

伊藤 では一緒にお話しください。

海原 今日の、「第二〇回質問項目」の一番から行きます。日経新聞の報道で、「七〇年一月、政府は外交・防衛問題の協議のため（中略）定期会合を開く方針を決定」云々とあって、これと防衛問題閣僚懇談会との関係がどうなっているか、ということですね。これは全然関係ないでしょう。

これは前にもちよつと申し上げたことですが、政治家、特に大臣方は、何か新しいことを言わないといけないんですね。その知恵を付けるのは新聞記者諸君なんです。「新聞記者が」言うのと、十分吟味もしないで、すぐそのままパツと言うのが、大体の政治家の習性ですね。それで何か言うのと、すぐそれを新聞に書くわけです。そういうことが当時の一種のムードでしたね。「あつ、それはいいことだ」ということで、誰かがポツと言うわけです。それを新聞が書く。それっ切りです。したがって、この質問項目の一番も、私は実体的なものはないと思います。私の方には何も来ていません。

質問の二番目の、在日米軍基地問題に対処するための基地管理協議

会、これも私の方とは関係ありません。これは施設庁と施設担当参事官というのがおりますから、そちらの関係です。それから当時は、いわゆる有事駐留関係の動きが民間にあつたでしょう。それとの関係もあるんですね。基地を整理しようという一つの大きな動きがあるものですから、それに対応するために、そういうものを作つて勉強しよう、したらいよいよじゃないか、というようなことだったんです。それだけのことです。何もありませんよ。それから、例の基地問題協議会が出した有事駐留論はくだらないことでしょう。あり得ないです。特に私は関係ありません。

伊藤 関係ないものは、どんどん飛ばして行つてください。

海原 それから三番目ですね。在日米軍の実戦戦力を七一年六月末までに全面的に引き揚げるといふ削減計画、これが追加報道された。これもどこで調べられたかわかりません。その後、変わっていませんからね。多少は減ってきていますけれども。もともと在日米軍の、多くの新聞が報道するような削減は、私は実施できないと思つています。アメリカもできないし、こつちも困るわけです。こちらは、居てもらわなくては何ともならないわけです。この部分は、私は記者の独創だと思ふ。今でもそうでしょうけれども、その頃は特に各新聞記者個人の判断で、十分検討もしないで記事にした。それが活字になればいいと。特に大臣なんかは写真で報道されますと、それが楽しいんですね。そういうことがありますからね。結論的に、私には何も関係ありません。

その次、四番目ですね。四次防の関係で国防会議が四回、議員懇談会が七回開かれ、活性化したと言われていますけれども、それまでと比べると多いというだけの話で、当然のことなんです。というのも、

防衛庁の用意したものを、この前申し上げましたように、国防会議事務局でご破算にしてください。当然、そのついで、ついでに報告しなければいけませんね。その一つが例の国産問題です。この時は中曽根前防衛庁長官は通産大臣で、装備国産ということが、党でも民間でも、要望として声高に言われている。中曽根大臣はかねてから国産論者です。その関係のこともありますね。

ところが、そういうことを言っている人は何も知らんのです。それで、今日この綴り「装備の生産及び開発の現状と、それらをめぐる問題点」を持って来たんです。これは装備の国産化についてのものです。「一七二ページのコピーを示す（資料8）」。

伊藤 これは、四十六年四月ですね。

海原 その中で一つだけ皆さんに読んでいただいております。おわかりになると思うのは、ナイキとホークです。ここに書きましたように、ナイキは、米国では十八年前に実用化したんです。ホークの方も十三年前なんです。じゃあ、それを日本で国産するとなると、どうなるかということ、ここに書きましたように、「今から少なくとも五、六年はかかるというの、関係者の一致した見解である」ということなんです。ところが一般の人は、すぐ国産できると思っているんです。デッドコピーを真似して造ればいいと思っている。その、真似して造ることができないんです。精度が要求されますからね。

だからこの前、輸送機を持ってきましたね。例えば、ああいう戦闘機が国産になりますと、翼はインゴット、金属の塊をずつと切っていくんです。貼り合わせるものではないんです。まず、そんな金属がない。それから、その金属を削る機械がない。ことほど左様に、日本では全ての生産の条件が整備されていない。ということ、中曽根

も知らないんです。それから、そういうことをやりたいと言う、いわゆる兵器生産関係の会社の幹部も知らないんです。それで、何でもかんでも国産、国産と言うわけです。

この前、例として申しましたサイドワイダーも、同じものを日本で造るとすれば、価格は六倍以上になって、能力も悪い、ということなんです。それがわかるまでに時間がかかるんですね。

ところが一般の人は、とにかくそういうことで勉強したいと思うものですから、大臣に言いますね。大臣は「それは結構だ」と言つて、すぐに「国産だ」言うんです。私は、それを当時の「国産熱」と言っているんです。みんな、何でも国産だ、国産だと言っている。しかし、値段は高くなりますよ、数倍になりますよ。しかも、できたものは決して良くありませんよ、ということをおわかってもらうのに時間がかかる。それが後々までしばらく続きましたね。したがって、ここに書いてあることの関係で、いろいろ関係大臣が集まって相談をした。相談をしても、何も出てくるはずがない。まず、大臣さんが実態を何も知らないわけですから。

このついでに一つの別の例を申しますと、この前、中曽根大臣のことについて、私が批判的なことを申しました。田中総理の下で国防会議をやるでしょう。いろいろなものがありますが、ある時、隊員の充足率が悪いとか、辞めていく者が多いとか、そういうことについて、田中総理が言い出したんです。「自衛隊に在る間に、いろいろ資格を身に付けてもらう。民間に在ると違ふのだから、自衛隊の二年なら二年の間に、これだけの資格が手に入るといふことにしたい」ということを言ったわけです。そうしたら、それに真つ先に賛成したのが、通産大臣の中曽根なんです。

そんなことは、とつくにやっていることなんです。私は黙っていませんよ。国防会議懇談会だから、その連中が喋っているのを聞いていて、「ああ、やっているな」と思っていました。

国防会議の局長の部屋というのは、総理官邸から道路を隔てた総理府の上にあります。その私の部屋へ帰る途中に、渡辺（伊助）という筆頭参事官が歩きながら言った言葉が、非常に印象的でしたね。「局長、政治家というのはあんなものですか」と。「何だ、『あんなもの』というのは」と聞いたら、中曽根のことなんです。

というのは、中曽根が防衛庁長官の時に、渡辺君は教育課長だったんです。それで、中曽根から直接、「自衛隊にいろいろ国家資格が取れるようなことを考えろ」と言われた。そんなことは前から考えて、やっているんです。でもそう言われた時、「そういうことは一応やっておりますけれども、また新しく何かあるかもしれないから、調べます」と言って、調べたんですが、もうないんです。できることは、みんなやっているわけです。そのことを中曽根長官に報告したのが教育課長だった渡辺君なんです。「長官がおっしゃたので、いろいろ他にもないかと思って調べたけれども、もう全部手当て済みで、新しく自衛隊に勤務している間に付与できるような資格はありません」と。

それなのに、田中総理が「隊員が自衛隊に在る間に、そういう資格を取れるようにしたらいいんじゃないか」と言ったら、中曽根通産大臣が真っ先に「総理、それは名案です」と言ったんです。それをつかまえて、彼は「政治家というのは、あんなものですか」と言ったんですね。

伊藤 それは、おべんちゃらなんですか。

海原 そうです。あの中曽根にして、ですよ。田中総理の発言に対して、「それは名案です」と言った。ついその六カ月ぐらい前、自分が同じアイデアを持って、教育課長を指名して調査させた結果、「もう何もありません。全て、もう前の代までで手当て済みです」ということだった。それなのに、角さんが言ったら、真っ先に「名案だ」と言ったのが中曽根通産大臣です。「政治家というのは、あんなものか」と言うので、「そうなんだ。政治家というのは、みんなあんなものか」と私は言ったんですけれどね。そういうことなんです。そういうことは、皆さん方おわかりにならないでしょうからね、困るんです。

伊藤 国防会議が四回開かれて、それから同議員懇談会が開かれますね。これは何ですか。

海原 この前も申しましたように、全部国防会議なんですけれども、何か物を決める時には、一応それを正式に「国防会議」と言い、それを決める前のいろいろな意見のやり取り、あるいはいろいろな事情を聞く時とかは「議員懇談会」と言って、便宜上分けているわけです。

伊藤 同じ会議を二つに分けることもあり得るわけですね。

海原 ありますね。「ここまでは国防会議」というように。ですから、その例としましては、例の国産化の白紙還元の問題がありましたね。国会で問題になりました。私が証人で行った。あれは委員会、専門部会みたいなものを作って、そこで検討するということになった。それについて私が、「こういうふうに関係者の意見は決まりました。これは一応国防会議議員懇談会の決定ということにしたいと思います」と言う、「結構です」となる。というのは、国防会議にするためには、その前に幹事会、各省次官の会議をまず開くことが必要ですね。さらにその前に、この間から言っていますように、参事官会議で検討して

打ち合わせしなければいけない。そういうものを経て初めて国防会議になるわけです。ですから、それで分けているわけです。だから大臣方が集まっている自由に関談をする、物を決めない事前の会議は、全部「議員懇談会」です。それは、初代事務局長の広岡さん以来の慣習ですね。

伊藤 言ってみれば、フリー・トークングですね。その中で、ある程度形になったものを、「了解」というわけです。

海原 そうです。「ここまででは懇談会、これからは正式な国防会議といたします」「はい結構」というようなことになるわけです。言わば、歌舞伎の振り付けです。

伊藤 まあ、われわれもやりますけれども。「ここまででは教授会、その後は教授会の懇談会」とかやりますね(笑い)。

海原 その前に、予備懇談会もある(笑い)。

伊藤 「参事官会議の議事録を見ながら」でも、この参事官会議の議事録というのは、かなり分厚くて、いろいろな人がいろいろな発言をしているんですね。

海原 それは、ちよつとあったものを持って来ました。いろいろあるんです。そういうのを全部持って帰るでしょう。そして、次の週にまたやる。そういうことをやっているわけです。

伊藤 これには、ちゃんと海原先生は線を引いたりしている。「これは来週」とか書いてありますね(笑い)。

海原 だから、決してそんなに呑気な役所ではないんです。水鳥の足みたいなものですね。ずっと動かししている。

伊藤 参事官会議を開けば、その後で記者会見ということになるんですか。

海原 記者会見はやりません。参事官会議のことは一切話さない。そういうルールにしたんです。そんなものは、役所の中の下の打ち合わせですから。

伊藤 国防会議の後はどうですか。

海原 これは終わった後で、官房長官が「記者会見を」やるわけです。事務局長がやる場合もあります。その時、その時によって違いますね。大体、そういうことは官房長官にやってもらうわけです。

伊藤 じゃあ、官房長官が法螺を吹いたとか(笑い)。

海原 そういうことはありますね(笑い)。

伊藤 針小棒大に言ったとか。

海原 その辺になつてくると、嫌な話があるんです。政治家というものの生き様ですね。そういうことをやりたい人、新聞記者に話しておきたい人がいる。また、そういうことをやりたくない人もいる。大臣によって違います。人によって違いますからね。

伊藤 やはり、取材されて嬉しくて喋っちゃう人もいるわけですね。

海原 もちろん、そうです。大臣になつて「大臣、どうですか」と、新聞記者がメモを取りに来るのが楽しい人が、いっぱいいるんですね。それもわかりますけどね。

ことこのついでに言いますと、大臣と役人との関係で、私の仕えた大臣には、三つのタイプがあります。「このことについて、どうしますか」と言うと、「君、よきに計らえ」と言うタイプ。これは全部任せると言うタイプですね。それから、「この問題については、AとBとCと解決法は三案あります。どれにいたしますか」と言うと、「君はどうする。どれがいいと思う」と聞く。そうしたら、どれかを挙げて理由を言いますね。「じゃあ、それで行く」と言う人もいます。いろ

いろいろあるんです。その人によって、仕え方を分けませんとね。

伊藤 じゃあ、自分の方から「こういうふうにしろ」と言う人もいるわけですね。

海原 もちろんいます。それに対して、「一応調べましたけれども、こういうマイナスもありました」ということを後で言うのと、喜ぶ人もいれば、不愉快な顔をする人もいる。なかなか難しいですよ、大臣を補佐するということは。

伊藤 国防会議の事務局長は、直接大臣との関係はあつたんですか。

海原 「国防会議の事務局長は」総理大臣直轄の部下です。しかし、官房長官が総理の補佐をしますから、一応官房長官を通して、ということになります。これは事実上のしきたりです。

伊藤 官房長官が上司みたいな感じですか。

海原 一応そうですね。しかし、形の上では総理の直接の部下です。

伊藤 その時、官房長官はどなたでしたか。

海原 その時、私が行った時は保利茂さんです。保利官房長官から二階堂進に替わるわけです。このことはこの前お話ししたと思いますけれども、保利さんには初め、私の悪い話ばかり入っているわけです。それを「海原は、そんな悪い者ではない」と言ってくれたのが、朝・毎・読のそれぞれ一人ずつの新聞記者です。だって、官房長官の部下になつてから、ふた月かみ月ぐらい、全然話さないんですから。報告だけでした。

伊藤 二階堂さんはどうだったんですか。

海原 これはまた別ですけれどもね。前から知っていましたから。

伊藤 そうなんですか。

海原 だから、人によって非常に違うですね。

伊藤 じゃあ、二階堂さんとは非常にいい関係だったんですね。

海原 いい関係というか、そうですね。別に遠慮することは何もなかったですから。その二階堂さんとの関係は、佐藤内閣から田中内閣「に替わる時」でしょう。その時、例の私のクビ切りの問題が出るわけです。それが新聞に発表されるわけです。

「重要法案」を巡る攻防戦

伊藤 では五番目の質問に移りましょう。

海原 四次防予算の先取り問題ですね。これは長期計画が決まっていないのに、その一環となるべき沖繩配備のためのいろいろな措置を、防衛庁が独断でやったということ、問題になったわけですね。あれも、答弁の仕方如何によつては問題になることはないと思うんですよ。何も、長期計画で決めなくていいことなんです。ところが当時の防衛庁の対応が悪かったものですから、野党が騒いだ。それは、長期計画の中で沖繩に部隊を出していることが大問題なんだから、それが決まらないのに、勝手に出してはけしからんじゃないかと言われる。その時の防衛庁の対応がまずかったですね。そこで揉めてから、初めて防衛庁から、次官や局長、課長が揃って私のところに来て、「国防会議を開いてくれ」と言うんです。「それはお断りする」と言いました。

そんなことは初めにやることじゃないですか。揉めて、新聞は「防

衛庁は予算を先取りした」とか書いてある。私は「これだけ揉めている時になって、いわゆる追認の形で国防会議を開くことは反対だ」と言いました。「総理に聞いてくれ。総理がやれと言うのならやります。私の判断はノーだ。われわれは防衛庁の下部機構じゃないんだから」と言った。

私の部屋に次官、防衛局長、経理局長、官房長、それから課長など八人ぐらい来ましたが、「こんなに大問題になってから、急遽国防会議で追認するようなことをすると、お互いにマイナスだから、私は反対だ。ただし、総理が開くと言うのならやります。直接おたくの大臣から総理大臣に言ったらどうですか」というのが私の答えでした。それがずっと広がるわけです。「海原は冷淡だ。出身の防衛庁が困っているのに、助けようとしないう」と言う。だって、助けようがないですよ、そんなものは。防衛庁の失態ですからね。何も防衛庁の失態をいちいち国防会議事務局が庇うことはない。だから、そう言ったんです。

「何とかありませんか」と言う。経理局長は田代（一正）君です。それから防衛局長は久保（卓也）です。次官が内海（倫）でしょう。私は「駄目だ」と言った。ただし、何度も言いますけれども、「事務局長としては、総理が開くと言うのならいいよ。国防会議というものは、防衛庁がちょんぼをやったことの後始末をやるような存在じゃない」と言った。

伊藤 それで結局、総理に行つたわけですか。

海原 行きません。だから、国防会議は関係なしです。ただ、収拾については私もやりましたけれどね。一応議長裁定ということで、しばらく予算を預かるというようなこともありました。

伊藤 その後始末に関わったというのは、どういうふうに関わるんですか。

海原 予算はどういう予算でやるとか、それからどういう部隊を持って来るかについては、どういう意味があるとか、そういう説明ですね。それを全部書いて、国会の方とも相談して、これでよろしいですかということ、野党の了解を得て、それでOKになるわけです。

伊藤 その野党の了解をとる時に、少しおやりになったということですか。前から社会党と親しい、と言われていましたね（笑い）。

海原 そういう時のために、親しくしているわけですからね（笑い）。

伊藤 そういう時は、どこに行くんですか。議員会館の議員の部屋に行くんですか。

海原 そうです。社会党の部屋に行つたのでは、いろいろいますからね。社会党の中もいろいろとありますから、個人の、伊藤先生なら伊藤先生のお部屋に行くわけです。

伊藤 そうすると、やはり対応が違うわけですか。

海原 違います。特に社会党は、中で互いの派閥の争いがあるでしょう。だから、うるさいんです。誰が来て、誰と会った、とかね。役人ともなると、そういうことである種の神経を遣いますよ。

伊藤 議員会館だと、あまりそういう目はないですかね。

海原 ないですね。スツと行けばわかりませんから。社会党の控え室へ行つたら、もう駄目ですな（笑い）。

伊藤 それは駄目でしょうね（笑い）。周りが聞き耳を立てて、海原は何を言いに来たのか、となりますからね。

海原 そうそう。そこで、この前もちょっとお話ししましたが、中曾根が新聞記者に、「内海だけを辞めさせるわけにはいかない。内海を

辞めさせる時には、海原も一緒だ」ということを言ったわけですから。それは、そういうことがあるからです。あいつは冷淡だ、海原という奴は血も涙もない奴だ、古巣を助けたい、と言うわけですね。

伊藤 社会党は特別委員会の設置の話を出したりしたわけですね。

海原 これは、その時の加減ですね。

伊藤 こんなものは実現しなかったわけですね。

海原 実現しません。これは私は大いにやってくれと言ったんですけど、例によってサーブだけです。

伊藤 防衛の常任委員会を設置しているんですか。

海原 それは、本来はなくてはならない。あつていいわけです。安全保障ですからね。本来そうあるべきであるにも拘わらず、それをやらないというのが、日本の政治ですね。大変な予算も使っているわけですからね。

伊藤 そうすると自衛隊の予算はどこで審議するわけですか。

海原 内閣委員会です。内閣委員会というのは内閣全部の関係ですから、非常に間口が広いわけです。そんなところでやるのはおかしいです。

伊藤 その中に防衛だけの部会みたいなものはあるんですか。

海原 ありません。せめて、そういうものがあれば別ですけどもね。本来なら、きちんと安全保障委員会とか何かでやるべきです。しかしそれをやると、何か認知したような格好になるんですね。当時のことですから、防衛庁や自衛隊は認知しない。嫡出子でない私生児みたいなことを言っているわけでしょう。それを、委員会を設けて、そこでやるようになると、事実上認知と同じですね。それはまずいとか、そういうことがあるわけです。

私は前から、「シベリアン・コントロールはそこにある。国会でやらなければならぬ。防衛にこれだけの予算を取っている。そういう大事なことをやるのに、内閣委員会の中でやるのはおかしい。一緒にやるというのをおかしい」と言っているわけです。社会党の連中も、そうだと思っているんです。でも言わない。みんな「そうなんだが……」と言う。それは、国防省にならないのと同じです。

伊藤 要するに、安全保障というのは考える必要がないと。

海原 考えてはいけません。あんなものは考えるに値しない、というのが最初でしょうね。

伊藤 しかし安全保障を考えなかったら、国家ではなくなっちゃうじゃないですか。

海原 それは、そうはいかないんです。だって、「日の丸」も認めない、「君が代」も認めないと、社会党は堂々と言っていたんですからね。ついこの間もそうでしょう。それがまかり通っていた。そういう雰囲気の中で、防衛を議論するわけですからね。

おかしいのは、防衛庁関係の法案は「重要法案」ということになるんです。自民党も社会党もそうです。それはどういふことかと言いますと、それが通らなかつたということになると、社会党は「プラス一点」なんです。「重要法案」を押さえたということになる。それだけのことですよ、おかしいことですね。だから、隊員を十名増やす法案ですら通らない。

伊藤 それも「重要法案」なんですね（笑い）。

海原 だから、三年ぐらい溜っちやうわけです。毎年、スツと行った例がないですね。二、三年溜るわけです。それを「お願いします、何とかします」と言って、ようやく通る。そうすると、一方の自民党の

方は、懸案であつた重要法案を通したと言う。野党の社会党の方では、あれを通すについては三年引つ張つたとか言う。馬鹿馬鹿しいことをやっているとと思う。

これは前にお話ししましたが、私は隊員百名を増やすことまで法律に書くのはおかしいと言つたんです。いちいちそんなことをしたら、必ずやられるぞと言つたんです。ところが当時の加藤局長と、私の同期の麻生法規課長が、「いや、自衛隊の定員はきちんとしなければいけない」と言う。そんなことをやったら、百名増やすのも大騒ぎになるんだからと言つたんですが、その通りになつてしまいましたね。まあ、いろいろあるんです。ですから、防衛庁というのは哀れなんです。口では大事だ、大事だと言うんですけども、いざとなつたら、誰も面倒を見てくれない。しようがない、私は自民党に行つても駄目だから、社会党へ行つて「石橋さん、お願いします」とか、「横路さん、お願いします」とかと言つて、「ああ、そうか」ということになるわけです。

伊藤 自民党は頼りにならないわけですか。

海原 ならんですよ。

伊藤 でも、頼りになる人も少しはいるでしょう。

海原 いませぬ。私の体験した限りでは、一人もいないですね。自民党の防衛庁関係は、例えばナイキとホークの国産を分けるとか、片一方が東芝でやったら、片一方は三菱でやるんだとか、そんなことばかりです。戦闘機はファントムがいいとか、ですね。そういう旗を振るのが保科善四郎閣下でしょう。

伊藤 そういう人たちは応援団にはならないわけですか。

海原 なりませぬ。私の体験で言いますと、絶対に応援団になれる

ような、心強い、力強い人はいませんでした。立派なおつしやいますよ。でも、いざとなつたら、スツとどこかに行っちゃうんですね。それこそ秘書が探してもいない。「どこにいるんだ」と言つても、「ちよつとわかりません」とか言う。そういうのが政府委員の苦勞です。

伊藤 「海原が来たら、いないと言え」ということになつていたんだ(笑い)。

海原 それもあつたでしょうね。そんな中で役人は苦勞していたんですね。何で役人がこんなことをやらなければいけないんだ、と思ひましたけれどもね。

伊藤 まあ、政治家のやるようなことですね。

海原 ええ。

伊藤 それで、次は「ニクソン訪中」の話ですね。

海原 ええ。この時、外務省は大騒ぎしていましたが、防衛庁は何の影響もありませんね。

伊藤 それはどういう意味ですか。考えてみると、国防の根幹に関わるような問題じゃないですか。

海原 ニクソンが中国に行つても、別にどうということないですよ。むしろ中国との関係は、「田中訪中」が問題なんです。当時、私のクビ切り問題は別として、私は田中内閣になつても国防会議に残りますね。それで防衛庁には、角さんが中国へ行く前に四次防を決めてくれ、という要求が非常に強かったですね。なぜかと理由を聞いたんですが、わかりますか。面白いですよ。「中国へ行つて、『日本は軍国主義だ、けしからん、やめろ』と言われたら困る」と言うんです。私は、「賭けをする」と言つたんです。その時の防衛局長は久保君で

すけれども、私は、「そんなことは絶対ない。いくらでも賭ける。中国はそんなことを言わない。あそこは大国だから『今、お前の所では膨大な軍国主義の計画を立てているようだけれど、そんなことはやめろ』というようなことは言わない」と言ったんです。

しかし防衛庁は、「そう言う」と言うんです。「向こうへ行つて、言われてからおかしくなったのでは困るから、行く前に、とにかく決めてくれ。今まだ決まっていらないようだから、決めろ」と言う。真面目に、そう言っているんです。それが当時の防衛庁だった。私は「絶対にそんなことはない。そんな先を急いでもしようがないだろう。時間的余裕がないし、角さんの訪中前に国防会議を開いてどうこうというのは無理だ」と言った。結果は、角さんが向こうに行つても、何も言われませんでした。

たまたまそのことが「田中首相と中国の」ある人との会話に出た時に、「これから私が決めるんです」と言ったら、「結構なことです。どんどんしつかりやってください」と言われたというんです。そういうことがありました。ニクソンの方は全然関係ありません。

伊藤 そうでしょうね。その次はどうですか、朝日の報道ですけれど。
海原 朝日新聞は何でこれを書いたのか。佐藤総理が「国防会議の拡大云々」と言ったという。これはどう言ったのかわからない。朝日だけでしょう、これを書いたのは。「拡大」という意味がわからない。おそらく私は、こんなことは全くなかったと思います。一応法律で決まっていますね。関係の人を呼ぶことができません。そういうのを全部決めてしまえということ、誰か新聞記者が言ったんじゃないですか。拡大しても意味がないです。というのが、私のかねてからの主張です。この頃は、要するに各新聞とも、防衛問題で何か新しいことを

やるか、ということになると、みんな書くんです。

伊藤 新聞の報道というのは、どうも海原先生のお話を聞いていると、当てにならないという感じですね。

海原 これは当てになりませんね、本当に。

伊藤 やはり観測記事というか、希望記事というか、そういうことなんでしょうか。それとも誰かが適当なことを言っている、ということですか。

海原 それはもう、朝日は物の考え方が、その時その時で違っていますけれどね。

伊藤 でも、篠原（宏）さんみたいな人もいるわけでしょう。

海原 いるんですけれども、中でも違うわけです。だから朝日は篠原君がいなくなつてから、すっかり変わりましたね。篠原君というのは、もともと旧ホンチャンの海軍軍人ですからね。兵学校出身です。彼まではしつかりしていたんですけれども、その後いろいろな人が出て来まして、すっかり駄目になつた。だから記者によつて変わりますからね。それから記者の好みがありますからね。

伊藤 篠原さんの後継者みたいな人はいなかったんですか。

海原 いまありません。朝日は篠原君の後はいないですね。読売の堂場君の後はいない。毎日宇田川武という名前の人がやっていました。その後はいない。毎日が宇田川、いや本名は高橋、朝日が篠原、読売は堂場、この三人がそれぞれ防衛専門の記者でした。

伊藤 よく勉強していた、ということですね。

海原 していました。それは、そもそもはと言うと、私が防衛局長になつた時に、各新聞の政治部長と、新橋の駅前の、烏森のちっぽけな飲み屋で飲んで、これから必ず防衛問題が大事になるから、優秀な人

を今のうちから入れろということ、それぞれの人に話したんです。みんな、「わかった」ということで、やってくれたのが、いま言った人々ですね。堂場、篠原、高橋です。

伊藤 宇田川武というのは？

海原 宇田川というのは渋谷の宇田川町のこと、高橋君は宇田川というペンネームで『朝雲』か何かにも書いていました。

伊藤 みんなそういうペンネームを持っているんですか。

海原 堂場君や篠原君はなかったようです。

伊藤 本名でいろいろ書いていますね。

海原 毎日「新聞」は、中でいろいろあるんでしょうね。聞きませんでしたけれども。

伊藤 海原先生はペンネームでお書きになったことはありませんか。

海原 ありません。私はペンネームは使わない主義ですから。

伊藤 よく、ペンネームを使う人はいますね。

海原 います、います。

伊藤 それが誰なのかわからないという。

海原 私は、もしペンネームで書くならこれだ、というものを自分では作っていたんです。私の親父の守は「天涯狂夫」というのがペンネームで、大町桂月ばりの文章を書いていました。その方面では割合良かったんです。海原清平の代理をしていました。清平の演説は全部親父が書いていました。それで、私も大町桂月を読めと言われて、読んでみましたけれどもね。それが「天涯狂夫」という名前だった。私は、それをもじって「独夫」としました。そうしたら、全く「独夫」になってしまいました（笑い）。今でも、独りで物を言っている。

伊藤 僕は「毒」の方だと思います（笑い）。

海原 そっちもあるかも知れない（笑い）。そんなことで、私はペンネームは使っていませんけれどもね。

伊藤 現実にはお使いになったことはないわけですね。

海原 それは使おうと思ったことがあるんですけども、別にペンネームで書くこともない、本名で行けということで、やっています。そんなことです。

伊藤 じゃあ、これ「朝日の記事」は大した記事ではないですね。

海原 ありませんね。事実何もないですものね。

勇退・留任、退官の真相

伊藤 さて、そこで、最後の課題です。

海原 私が辞める話ですね。田中内閣になる時ですが、「海原辞任」の新聞はこの前お見せしましたかね。

もう一遍整理して申しますと、あの日は「昭和四十七年」六月三十日でしたか。ちょうど、田中内閣に佐藤内閣からの引き継ぎがある、その佐藤内閣の最後の閣議の日です。その時は最後ですから、次の引き継ぎを決めるわけです。当然、国防会議もどうするか決めますね。私は行っているわけです。閣議が終わったら、官房副長官の三原（朝雄）さんが私のところに来て、「官房長官室で待て」と言う。「はい」と言いました。それで、私はわかりました。

なぜわかったかと言うと、これも前にちよっとお話ししたと思いま

すけれども、その五日ぐらい前に、朝日の篠原、読売の現在の編集局長の老川君、当時は官邸のキャップだったんですが、その二人が私の部屋に来たんです。それで私に、「今度田中内閣に引き継ぐ時に、あなたをクビにするということになっている」と言うから、私は「俺はクビにされる理由はない。辞める意思はないし、何も私が辞めなくてはならない理由はない」と言っただけです。篠原君は「そうか」と言っただけ、そのまま帰ったんです。

そうしたら、老川君は翌日また来て、「あなたは官房付に発令される。国防会議事務局長・海原治を官房付に発令する、と言っている」と言うから、私は「それはできない」と言っただけです。「あなたは知らないだろうけれども、国防会議事務局長というのは、官であり職である。内閣審議官にまじりなつて、それで国防会議事務局長になるなら別だ。国防会議事務局長を外して、審議官のまま内閣官房付にできる。しかし国防会議事務局長というのは一本なんだから、その私を内閣官房付には発令できない」と言っただけです。そうしたら老川君もなかなかで、「ああ、そうですか。しかし、官邸の方では、もう発令すると言っているから、発令したらどうしますか」と言う。私は「俺は辞める意思はないんだから、そんなものは人事院に告訴する」と言っただけです。それがターツと伝わったんですね。私は、別にクビになる理由はないし、辞める意思はない。俺がいま辞めたら、四次防をまとめる奴はいない。こういうことです。

そういうことがあったでしょう。それがあったものだから、「官房長官室で待っていてくれ」と言われた時に、ああ、来たなと思った。官房長官室で二十分ぐらい待っていました。そこへ竹下（登）さんが入って来た。それで、座るなり、「海原さん、突然の話だけれども、

今度われわれの内閣は交代する。ついでにはあなたも、ひとつ後進に職を譲ってくれ」と言うわけです。「私は、お断りいたします」と、はっきり言いました。「竹下氏は」びっくりした顔をしていました。「はい、いま事務局長を辞める意思は全くありません。私が辞めたら、編成途中の策定作業はどうなるんですか。誰もいなくなりますよ。あなたは何もご存知ないかも知れないけれども、今の、この四次防関係のいろいろな問題は、全部私が捌いている。その私が辞めて、誰が後をやるんですか」と言ったら、「竹下氏は」黙っているんですね。「私が辞めたら、この四次防をまとめる人はいなくなります。そういう状況ですから、いつまでも役人をやっているつもりはないけれど、今は辞められません」と言っただけです。

その次に念のために、「長官、あなたのおっしゃった言葉は、総理から直接言われたとしても、私は同じ答えしかいたしません」と言っただけです。「竹下氏は」黙っているんです。その後、何も返事はないです。何も発言しませんから、「ご発言がないようですから、これで失礼します」と頭を下げて出て来ちゃった（笑い）。

まさか断られると思わなかったんでしょうね。そこが、僕はちよつと、あの人は役人というものを見くびっていると思うんです。官房長官が辞めてくれと言ったら、「イエス・サー」と言うと思っただけじゃないですか。「お断りします。私は辞める理由はありません。もし私が辞めたら、いま進行中の四次防をまとめる人はいません。この四次防の進行中に辞めることは、役人の信義上できません」と言っただけで、「たとえ同じことを総理から直接言われなくても、私は同じ答えしかいたしません」と言いました。その時の竹下官房長官の顔は、何と言っただけですか、びっくりしたでしょうね。まさか、一役人から、

そういうふうに言われるとは思わなかったでしょうね。それで、私は「お言葉が何も無いようですから、失礼します」と言った。「竹下氏は」「おい、君」とも言わないです。それで、「私は」スーッと帰った。

その後で、私は高知へ出張に行くわけです。それは前から総理の許可をもらっていました。それ「官房長官に辞任を求められた六月三十日」が金曜日でしょう。土曜日一日、どこからも何も言っていない。

あの時、私は官房長官に「この話はなかったことにしましょう」と言ったんです。そうでないと、佐藤総理は退任の際に、一役人のクビを切れなかったということになって、これはちよつとした問題とか、話のタネになりますね。そんなことは面白くないと思いますから、「なかったことにいたしましょう」と、私は言ったんです。その通り、なかったことになったと思っただけです。それが私の判断でした。

それで日曜日の朝、高知へ行きます。これは高知新聞の招待で、講演のために行っただけです。私は久しぶりに高知に行くわけで、センチメンタル・ジャーニーで、東京駅から鉄道にしました。それで、東京駅で新聞を買ったんです。私は家で朝日と読売を取っていたんですが、あとの新聞、毎日とか日本経済とかそういう新聞を買ったら、全部一面に大きく「海原国防会議事務局長勇退」と出ているんです。全部に出ている。こっちはびっくりしました。

もう一度言います。金曜日にそういう申し出があつて、断った。土曜日一日、何もなかった。それで日曜日でしょう。家で取っている朝日と読売には出ていません。それは私は断っていますからね。ところが、他の新聞には全部出ている。

そこですぐ私は駅から女房に電話して、「新聞に全部、俺が辞める

と書いてある。後任は伊藤という人だと。あっちこちから連絡があるだろうから、『高知へ行っているが、駅から電話してきて、辞めな』いと言っていた」と言っておけ」と言っただけです。「はい」ということだったので、それからずっとセンチメンタル・ジャーニーで、東海道を汽車で行ったんです。

そしてその日の夕方、高知へ着きますね。そうしたら、高知新聞の社長が一席設けてくれた。田舎は日曜日でもやるんです。『得月楼』と言って、高知一の料亭ですけども、『新喜楽』みたいなものです。そこで、ひとしきりその話です。何だ、新聞はインチキなことを書いて。本人が辞めないと言っているのに、俺は辞めることになって、後任まで書いてある。いかにマスコミというのはいい加減か、ということが酒の肴になりました。

翌日のお昼は、高知新聞で講演をやりました。その後、大阪へ出て、大阪で一泊して帰ろうと思っただけです。大阪の前の市長が大島という私の親友ですからね。しかし、大阪へ行く飛行機に乗る前に家へ電話をしてみました。「もうあっちこちからうるさいから、とにかく早く帰って来て」と言う。だから、高知からまっすぐ東京へ帰ったんです。

羽田へ着きましたら、車が迎えに来ているでしょう。その車の運転手さんから渡された紙に、三原官房副長官がここへ電話してくれ、という電話番号が書いてあるんです。見たら、それは料亭です。電話をしたら秘書官が出ましたから、「そこはどこだ」と言ったら、「料理屋です。お出でいただけますか」と言うから、「料理屋なんか行けない。俺は高知から帰ったばかりだ。料理屋で話をするような内容じゃないと思う。だから俺は行かないと言ってくれ。後で、どういうふうになったか電話するから」と言ったら、「お疲れでしょうから、今晚

こつちへ来ていただくことは結構ですが、明日の朝、八時半に官邸でお待ちしています」と。そういうことになったんです。

それで、翌日朝、行くわけです。官邸に八時半は、しょうがないですから。

伊藤 ずいぶん早い時間ですね。

海原 ええ早いですね。これから先は面白い話です。

伊藤 官邸というのは総理官邸ですか。

海原 いいえ。官房副長官の部屋があるでしょう、そこです。三原さんの部屋ですね。そこで三原さんはここにこししながら、「海原さん、金曜日に竹下官房長官が、あなたに後進に道を譲ってくれと言った時に、言い忘れたことが一つある」と言うんです。「何ですか」と聞いたら、「実は、今度内閣で三人審議官ができる。官房審議官だ。その一人はあなたなんだ。だから、いったんここで身を退いてくれ。それを竹下官房長官は言うのを忘れた」と言うんです。何を言っているかと思いましたがね。それで私は、「そんなことは私は全然興味がありません。私ははつきり官房長官に言ったんだけど、いま私が辞めろと言われて辞めないのは、四次防をまとめることが必要なのであって、審議官なんていうのは、まだできるかどうかかわからない。そんなものがどうだこうだという話には乗らない。私が辞めないのは、四次防をまとめるためだ」と話したんです。「それはわかった」と言っただけで、それから後は、ここにこししながら雑談です。「三原氏は」「じゃあ、私から総理に話します」ということでした。それが朝です。そうしたら、午後三時半ごろ三原副長官から電話がかかってきたんです。「海原さん、総理に話したらよくわかってくれた。だからどうぞ、ひとつあなたのおっしゃるように四次防のまとめをしつかりやっ

てください」と言うんです。「それはどうもご苦労かけました。ありがとうございました」と頭を下げたんです、電話なのに（笑い）。

それで一件落着かずでしよう。ところが、です。あの時ちよつと田中内閣の組閣が遅れましたね。福田さんがゴタゴタしたものだから一週間ぐらい経って落ち着いた時に、私は二階堂官房長官のところへ挨拶に行つたわけです。

二階堂さんは私の顔を見るなり、「ああ、そうだ。君の人事が、引き継ぎ第一号だ」と言うんです。「前内閣から田中内閣への引き継ぎ事項の第一号が、君の人事だ」と言う。「冗談じゃない。こういうことで、ちゃんと三原副長官が佐藤総理に話して、佐藤総理も完全に了解したということで、わざわざ電話をもらったんだ。それで、私は電話でお礼を言ったんだ」と言った。「いや、そうじゃない」ということです。いかに政治家の話が当てにならないかということの、いい例でしょうね。「ところで二階堂さん、私は辞めないといけませんか」「いやいや、それはまた別だけれども、話が付いていたことではない」「とんでもない。話はわかった、佐藤総理も了解した、後をしつかりやれ、頼むぞ、と言われたんだ」と言っただけで、そんなことは全然ないと言う。いい加減なものですね。

それで、その後どうなったかと言うと、今度は官房副長官が後藤田君ですね。後藤田君がちゃんと始末してくれたんですがね。新聞記者に発表することはないと。書いたのは一部ですから。しかし、毎日新聞はわざわざ書きましたね。それは方針変更だ、四次防をまとめるために海原事務局長は必要であるから留任決定、変更になった、と書いた。

伊藤 それは本当じゃないですか（笑い）。

海原 まだ、こんな話をしているのですか。それはまた後があるんです。じゃあ、なぜ各紙に載ったか、実は共同「通信」のネタなんです。共同通信の若い記者が、官邸と警察を取材したら、私が替わると言われた。後は斎藤一郎君だとわかったから、私に確かめても、私は否定するだろうということで、そのまま配信しちゃった。朝日と読売は私から言っておりませんから、載せない。他の新聞は全部載せた。

そのことを、共同通信の前から知っているキャップが私のところに来て、「済まなかった。うちの若い奴が勝手にやったんだ」ということを話していました。私たちがそうして話している時に、ある人から電話がかかってきた。私は竹下という人はずいぶんしつこい人だと思いましたが。一件落着と思っっているんです。斎藤（昇）大臣です。当時の閣僚です。今の参議員議員の斎藤十郎さんの親父さんです。私が警察庁長官で仕えた、その斎藤さんからです。部屋には共同「通信」の人が集まっている。だから、別の部屋へ行つて電話を取りました。

そうしたら「海原君、君の人事の問題で揉めていると聞いたけれども、そういうことで頑張るのは良くないと思う。君のためにならない」と言うんです。だから私は「私は別に揉め事しているつもりはありません。四次防というものが途中で、私が辞めたのでは、これは後始末ができないということで、お断りしているんだ」と言っただけですが、わからないんでしょうね。斎藤さんは、私が仕えた人でよく知っていますけれども、どうなっているかわからない。だから私は「長官、これは私の信念で行動しています」と言っただけです。そうしたら「そうか、君の信念か。じゃあしようがないな」と言っただけで、それで終わります。

なぜ斎藤大臣から電話が来たか。竹下さんの関係の仲人をやってい

るんですね。後で聞いたことですが。しかし、これはまた因縁がありますのは、前にお話ししたと思いますが、斎藤長官のクビ切り問題がありました。増田官房長官の時ですね。その時、私は大野伴睦のところにいきまして、動いたんです。「斎藤さんは、こういう立派な人だ」ということですね。私は大野伴睦に頼んで、国家公安委員会がクビを切ろうとしたのに反対して、させなかった。そのことを斎藤さんはよく知っているわけです。だって私は、大野さんの家からの帰りに渋谷の斎藤邸に寄ったんですからね。もう夜十時をちょっと過ぎていました。「こういうことで、私は大野さんに頼んできましたから、長官、絶対に辞表は書かないでください」と言っただけです。そうしたら「わかった、辞表は絶対に書かない」と言っただけ。

そういうことがあったんです。増田さんというのは、当時大変な権力者だった。私は、その時、斎藤さんのクビ切りに対して反対した男でしょう。その私が斎藤さんから、「君、辞めたほうがいいよ」なんて言われると、「おおっ」と思いましたね。そういう話があるんです。しかし、さっきも言いましたように、「私は信念で行動していますから、長官、こればかりは何ともありません。私は辞めませんから、悪しからず」と言っただけ。「ああ、そうか。信念か。信念ならしようがない」ということで、電話を切ったんですけれどね。参ったです。そういうことです。これが人の世ですよ。いろいろなことがあるものだと思う。その頃は、今の斎藤議員は学生でしたね。

ということ、私が辞めないと言った理由は、四次防の完成という仕事があったからです。そこで私は、暮れに四次防をまとめた時に、辞めるわけです。

最初四次防は、中曽根防衛庁長官がアメリカで派手にぶち上げたで

しよう。それについては、まとまった時には萎んでいたわけですが、とにかくこういうふうにまとまりましたというこの報告を「アメリカに対して」、防衛庁はやると思った。防衛庁が、本来やるはずです。そうしたら、何と統合幕僚会議長と防衛次官の二人とも、アメリカには行くんです。ところが、まずヨーロッパへ行つてからアメリカへ行くんです。それで、私はおかしいと言った。田中総理のところへ行つたんです。「一応四次防はまとまった。これはアメリカとの因縁もあるから、アメリカにこういうことになったというこの連絡をする必要がある。私が調べてみたら、防衛庁の方は、次官が一応行くけれども、まずヨーロッパから回るようになってる。これはおかしいと思う。いきなり東京からワシントンに、こうなつたというこの報告に行くべきだ。私が行きましようか」と言ったら、「うん、それは君が行つてくれ」と言つたんです。それで、私が行つたんです。そういう経緯もあるんです。

だから防衛庁が、どうしてヨーロッパへ行つて、それからワシントンへ行くようにしたか、おかしいと思うんです。派手に中曽根がぶち上げたんだから、あの長期計画はこうなりましたということは、当然防衛庁から報告に行くべきでしょう。そう思つたんですがね。

伊藤 そういう時は、田中さんのところにストレートにスツツと行けるわけですか。

海原 それは行けます。それは、私は総理の直接の部下ですから。

伊藤 それはそうでしょうけれども、官房長官がいるでしょう。

海原 それは報告だけです。

伊藤 その時はどうするんですか。やはり秘書官か何かに面会を申し込むんですか。

海原 ちよつと総理に都合を聞いてくれと言う。用件は、ちよつと自分の個人の問題だからと言うわけです。そのころの国防会議事務局長というのは偉いんです、総理直属の部下なんです。それが変わっちゃつたんですよ。今は安全保障会議事務局長でしょう。官房長官の部下になつちやつた。あんなものは決して強化でも何でもないと言つてゐるんです。弱体化と言つてゐるんです。あれが強化策だ、強化策だと言われているのはおかしな話ですけれどもね。経緯はそういうことです。

伊藤 アメリカへ行つて反応はいかがでしたか。

海原 アメリカ大使館の武官がちゃんと用意してくれていて、十四、五人、陸・海・空の政府の職員が集まつたところで、私の下手な英語で二時間ばかりで全部説明しました。そうしたら、通じたと思うんですけれども、終わった後で、五人ばかり寄つて来て、その連中が言つてくれたことは、「まことに率直な、具体的な説明を聞いて、われわれはうれしく思う。ご苦労さん」ということでした。率直、フランクだと言いました。それから具体的だ、そういう説明を聞いて良かった、と言いました。

ただ、その時ワシントンで、日本の新聞記者諸君が会見をやつてくれと言つてから、断つたんです。大使館の新聞係がいますからね。「俺は何も、そういうことをしに来たんじゃない。アメリカ政府に説明に来たんだから、それは向こうの方を取材するのは別として、私はこつちで説明するわけにはいかない」と言つたら、「わかりました」ということで、日本大使館の方で全部断つてくれました。

しかし後で考えてみると、向こうでやっていたら良かったと思ひますね。というのは、そう言われたので、日本の新聞記者諸君は全部ア

メリカの方を取材しちゃったんですね。そうしたら、間接的な取材でしよう。それが作文になりました。海原局長の説明でがっかりした、とかいうのが出るわけです。今までは中曽根が派手なことを言っていたので、大変な力があるかの如く思っていたけれども、極めて渋い説明のために、一様に皆がっかりしたのは日本の新聞記者だけです。後で、駐在武官から聞きましてけれども、「非常に具体的な説明で、よくわかった。これまでは政治家が非常に膨らませた希望的な観測を述べただけだが、本当によくわかった」ということでしたけれどね。

伊藤 それは十二月ぐらいですか。

海原 ええ。十二月です。新聞にもちよっと出ましたけれどもね。それも持って来ますよ。

佐道 四次防がまとまって、お辞めになる頃ですか。

海原 帰って来て辞めるんです。辞める直前です。十二月中頃ですから。

伊藤 それは自分の方から、お辞めになるということを申し出られたんですか。

海原 ええ、そうです。

伊藤 その時は、直属長官が総理大臣ですから、総理大臣に辞表を出すんですね。

海原 その前に官房副長官が後藤田君ですから、後藤田君に話した。こういうことで、俺は辞めることにしたと。それで総理に会って、まずアメリカの状況を報告して、「ついでには、この前こういうことがございまして、総理もご存知だと思いますけれども、私は四次防がまとまるまでは辞められないと言っていた。その四次防が一応まとまりまし

た。アメリカの方への説明も終わりました。向こうもよくわかったと言っていますから、これを機会に辞めたいと思います」と言った。そうしたら、「ご苦労さん」ということで、総理は餞別をくれましたよ。検事総長と同じ額、当時の金で百万円です。

伊藤 それは「ご苦労さん」と言ってくれたわけですか。じゃあ、行く前には餞別はくれなかったわけですね（笑い）。

海原 行く前には餞別はくれませんよ（笑い）。検事総長と同じ額だと言っていましたね。ただその時に、後藤田君が「おい海原、どこも満員だぞ」と言ったんです。

伊藤 ああ、行くところがないぞ、という意味ですか。

海原 そうです。私もそれはわかっているんです。その時、私は表でも話しましたが、あいつ「後藤田」は、けしからん。普通は『どこも満員だ』と言った後で、必ず言葉があるはずだ。『ついでには、お前は長年役人をやってきたから、しばらくのんびり休養しろ。世界一周でもしてこい。その間にどこか探しておいてやる』と言うのが、少なくとも内務省十四年の同期の友人の言葉としては当然ではないか、と思った。もちろん俺は言われても受けないけれども、そういう言葉が出ることを期待していた。ところが、あいつは非情な奴だ。『どこも満員だ』で終わりだ』と言ったんです。

伊藤 それで、満員のままですか。

海原 満員のままです。

佐道 最初に七月に竹下さんに言われた時に、嫌ですとおっしゃらずに、素直にわかりましたとおっしゃっていたら、その時はどこかあったんですかね。

海原 知りませんね。まず、ないでしょうね。ただ後になると、伊藤

君というのは僕の三代後の国防会議事務局長で、私の官房長時代の広報課長ですが、その伊藤君に竹下さんが「あの時は悪いことをした。どこか就職の世話をすべきだったのを、どうとうしなかった」と言っただそうです。そんな、後で言われてもね。本当か嘘かわかりませんよ。伊藤 竹下さんというのは、そういう後始末をちゃんとする人なんですけどね。

海原 いや、それはしないでしょね。

佐道 よつぽど驚いたんじゃないですか。

海原 ああ、そうでしょう。おそらく、それまでは役人をなめていたんですよ。ある友人が、そう言いました。それはおそらく、竹下という政治家の初めての体験ではなかったかと。役人というのは、政治家が「こうしてくれ」と言うのと、「はい」と言うものと思っていた。それが「お断りします」と言う。しかも、「総理から同じことを言われてもお断りします」と言う。まさかそんな台詞を聞くとは思わなかったんだらう、と言われましたね。

伊藤 この事務局長をお辞めになった時は何歳ですか。

海原 五十五歳の時でしたね。

伊藤 これからどうしようかとお考えになったんですか。

海原 それはもう、どうしようかではなくて、いろいろなことがあるんですけどね。私の弟が大蔵省にいましたが、その弟から、「大蔵省の上の人が、すぐ辞めないで、もう半年待てば、今度の議会で法律案が成立する。そうすれば、退職金が増える、と言っている」と言われました。「兄貴に、そういうことを言っておくぞ」と言うので、「ありがとうと礼を言っておいてくれ。俺は、しかし、そんなことは関係ない。辞めるんだ」と言っただけです。いろいろ心配してくれる

人もいました。まあ、そんなことです。

伊藤 それで、後は評論家ですね。

海原 はい、評論家です。

一 兵卒の評論家として

伊藤 どうですか。役人から評論家になつて。

海原 どうですかと言われても、ですね。楽でしたね。それから私は仕事の上で、自分の一つの自惚れかもしれないけれども、防衛庁や自衛隊の抱えているいろいろな問題点を知っているのは私しかないという自信はありました。しかも、それをちゃんと系統立てて説明できる人はいない。誰か代わりがあれば、私はそんなことをやらないけれども、誰もいないのは困る。これも放っておくと、どうなるかわからない。だから、現状を踏まえた防衛論議のためには、やはり評論家しかないな、と思っただけです。

田中総理が私に「海原君、君、大丈夫か」と言いましたよ。「君、どうするか」と言うから、「評論家をやりたい」と言ったところが、「大丈夫か」と言った。「大丈夫かどうか、やってみないとわかりません」と言いました。

伊藤 そうですよ。役人を辞めて、急に「私は評論家です」と言っただけで、直ぐにそういう商売が成り立つものかどうか。

海原 それは非常に、私は幸運でしたね。というのは、すぐ私を拾っ

てくれたのが、時事通信社なんです。内外情勢調査会の理事になってくれと言う。これは偶然、たまたまそういうところに巡り会うわけですからね。いいですか、この話をして。

伊藤 ええ。もう終わりですから。

海原 そのころ、時事通信は「アカ」だという雰囲気があったんです。共同通信も「アカ」だと。そうなった理由はあるんですけどね。というのは、それまでは時事通信の内外情勢調査会というのは、ご存知かも知れませんが、各都道府県にありまして、会員がいて、その運営は時事通信の人が全部やっていました。それではいけないということもあり、時事は「アカ」だという批判を跳ね返すためにも、部外から理事を迎えようということがありました。大蔵省関係、旧内務省関係、それぞれ向こうは人選していったんです。それで大蔵省関係から一人、内務省関係では私なんです。私を推薦してくれたのは、当時の理事の人事部長の伊藤（壽男）君で、元防衛庁の記者クラブにいました。が、もう亡くなりました。これが私を推薦してくれた。それは、大蔵省関係と私が理事になることによって、時事は「アカ」だという批判をかわず狙いもあつたんですね。それもありません。ですから、私はありがたいということで、辞めたのは十二月ですが、翌年の二月から内外情勢調査会の理事ということになるわけです。これは、ありがたかったですね。

伊藤 それは常勤の仕事なんですか。

海原 常勤と言えば常勤なんですけれども、常勤的なものですね。

伊藤 要するに給料をくれるわけですか。

海原 給料はわずかです。月十万ですから。ある意味で非常勤みたいなものです。しかし、講師としてずっと講演に行きますから、その時

に講師料として十万円、それからもちろん鉄道費が出ますからね。そういうことです。それで、一番喜んだのは女房ですよ。肩書きができたから。内外情勢調査会理事と言えば、いかにも偉そうでしょう（笑い）。

伊藤 いや、役人でなくなったので、がっかりされたんじゃないかなと思います。

海原 がっかりというより、心配していました。一般の人は、私が従来防衛庁でやっていたことがあるから、いわゆるどこの会社の顧問になるだろうと思っただけです。特に国際興業の小佐野と親しいことはみんな知っていましたからね。小佐野のところの嘱託か何かになるんじゃないかと思っただけです。しかし、私はそういう友人関係のところには絶対に行かないことにしていた。そんなところに行つて世話になると、お互いがまずくなることありますから、一切行かない。お陰様で、内外情勢調査会の理事と言ったら、さつきも言いましたように、女房が非常に喜びましたね。肩書きがいい。無職ではどうも、ね。今はもう理事は辞めて、顧問になっていますけれど。来月、また理事会があります。ですから、私が役人を辞めてからずっと、時事通信の関係で評論をやっていました。

それから途中から、日本テレビの「世相講談」を六年ばかりやりました。七二二回やりましたからね。そんなことで、私は本にも書きましたけれども、捨てる人あれば、拾う人あり、捨てる神あれば、拾う神ありということを経験しました。こんなことを話してもしようがないですね。

伊藤 それで、やはり評論活動の中心は国防問題ですか。

海原 そういうことです。というのは、ご質問にもありますように、

在職中に何を一番感じたかということ。私は簡単に言えば、防衛庁では「赤城構想」をご破算にしちゃった。それから国防会議事務局長としては、「中曾根構想」をご破算にした。これは全部、防衛庁がまとめた案を、私一人で引っくり返したことでしよう、簡単に言えば。もちろん一人ではできませんけれども。仲間と一緒に、ですね。ですから、これはいかんと思っただんで。この前も、「海原教室(学校)」のご質問がありましたけれども、例えばそこに出てきますが、夏目(晴雄)君なんていうのは、私の部下だったんです。夏目君は次官にもなりましたし、防大の校長もやったでしょう。彼は私の下にいたし、私が何を言っているかということとはよく知っているわけですから、本来なら、私の言っていることを受け継いでくれてもいいわけですね。いわゆる「海原教室」として、ですね。それが全然駄目です。

私は今でも心配しているんですけれども、どうして、「防衛庁は」観念的な作文でだけ満足しているのか。その代表が『防衛白書』です。これはやめられないんですね。誰かが「私の」代わりに、例えば夏目君でも言ってくれていけば、私は要りませんよ。しかし、私がずっとこれを言っているのにも拘わらず、私の後で同じようなことを言ってくれる人がいない。となると、伊藤先生、やめられないでしょう。

伊藤 そうですね。国防問題というか、安全保障問題の評論家というのは、そんなにいないわけですか。

海原 いないです、私のようなことを言う人は。

伊藤 そうじゃない人はいるわけですか。

海原 います。例えば危機管理問題の佐々(淳行)君とか。あれは、何が危機管理か、と思うんですけれどね。いわゆる危機管理だとか安全保障論、「外交フォーラム」とかありますね。ああいう人はいっぱい

いるわけですよ。ところが私のような泥臭い、元機関銃士が言うようなことを言う奴はいないわけですね。それはさっきもお話ししていたんですけれども、大部分が「短期現役」で海軍に行っちゃったでしょう。私みたいに、重機関銃を担いで馬の世話をしたり、ソ満国境の第一線で走り回った奴はいないわけですよ。

どことが違うか。海軍は全部船に乗って、死なばもろともです。それだけでしよう。陸軍みたいに広いところへ部隊を展開して、どうこうするなんていうことは体験していません。だから、俺は軍隊勤務をしたと言っても、どういうところで勤務したかによって、体験的な物の考え方が変わってきますね。後藤田君は台湾にいただけで、しかも司令部にいただけでしょう。それで、途中病気になって病院に入っていたということですから、これも駄目なんです。だから、昔のいわゆる一兵卒の悩みと言いますか、辛さと言いますか、そういうもの誇りとか、そういうものを全部体験した奴となると、私しかないんじゃないか。

伊藤 後継者を養成しなかつたら大変じゃないですか。

海原 後継者にはなり得ないんです。そういう環境でないと、とても話がわからない。だから、久保君は私の部下でありましたけれども、この前申しましたように、「君は経済原論をやっている。僕は今、この潰れかかっている会社をどうするかをやっている。全然違う。だから経済原論は経済原論として、現実の今の自衛隊はどうかということ、もつと君、興味持ってくれないか」と言うんですけれども、駄目ですね。それは無理なんですよ。だから、簡単に言うと、私の後はいないですよ。誰も、そういう泥臭いことをやれる奴はいない。

伊藤 お辞めになつてからもうだいぶ経ちますが、その間に軍事技術

の面でも、非常に大きな変化が生じていると思います。それをフォロ
ーなさるのは、なかなか大変なことではないかと思えますが。

海原 それはこの間差し上げた本ですね。『インタラピア』とか。

伊藤 自衛隊の現場や何かにも行かれますか。

海原 行きません。

伊藤 行けないんですか。

海原 行かないんです、辞めた以上は。野球で言えば、今までマウン
ドで投げていた奴が、上がったら終わりです。一切、批評もしないで
す。要するに私がやったのは対自衛隊というよりも、むしろ対国民で
す。防衛意識の問題です。そういうことになりましたよ。

伊藤 しかし、「こんな防衛白書でいいのか」「海原氏が『this is 読
売』一九九七年七月号に寄せた論文のタイトル」というのは、やはり
防衛庁に物を申し立てているのではないですか。

海原 雑誌は防衛庁にも行っているはずですよ。それだけではない。
それまでも、いろいろなどところに出しているんです。持って来たも
のは山形新聞ですが、同じようなことを産経の『正論』にも書きまし
た。だから、私は時々、こうやって注意しているんです。

伊藤 そういう議論に対して、議論を仕掛けてくるような人はいない
んですね。

海原 いないですね。「こんな防衛白書でいいのか」というのは『this
is 読売』ですからね。全部行っているはずですよ。それから、そ
の前にも「どのように海上交通の安全を確保するか」というものを出
しました。あれも各新聞社、それから放送局に全部十部ずつ送ったん
です。しかし、影響なしです。だから完全に無視されている。しよ
うがないと思っっているんですよ。

伊藤 今、新聞社の中の防衛担当の記者たちのお付き合いというの
はございませんか。

海原 ありません。くどくなりますけれども、篠原君とか堂場君とか
が亡くなってからは、一切新しい人たちとは付き合わないことにし
ているんです。

伊藤 付き合わないことにしているんですか。窓口はありませんか。

海原 ありませんね。例えば読売新聞の老川君とか、安全保障担当の
人がいますよ。そういう人も会って話はしましたけれども、それ
切りですね。興味がないんですね。こればかりは何ともならないです。
どうしたらいいかということ、いま考えているんです。

伊藤 興味がないんですか。

海原 私以外に、ですね。こういうふうにあちこちでやっているん
ですよということ、参考までに持って来たんです。「山形新聞への特別
寄稿記事を示す」。二年置きか、二年置きぐらいに出しているでしょ
う。何らかの反応があってもいいと思うんですけども、何もな
いんですよ。『正論』にも書いていますが、『正論』のコピーは持って来ま
せんでした。ちよつとくたびれたですね。本も、これまでに全部で十冊
出しました。何の反響もなしです。

伊藤 やはり憎まれ口の言い方がまだ微弱なんじゃないですか（笑い）。

海原 来月、内外情勢調査会の理事会があるんですよ。草柳君も来ま
すから、もし彼が出て来たら、どうしたらいいか教えてくれ、と話そ
うと思っっているんです。もう処置なしです。私は、もう一回本を書
うかと思っっているんですけども、ちよつと面倒くさくなりましたね。
しかし、誰も問題にしない。

一番困るのが、これは極めて簡単なことなんですけれども、自衛隊

は何のために存在しているかと言うと、敵を倒すためですね。敵を倒すのは「弾」しかないんです。ミサイルや弾丸です。そのことを誰も言わないんです。私は飛行機や戦車や船は、弾丸の発射台だと言っているんです。ところが、発射台の方ばかりにみんな興味があつて、あでもない、こうでもない、イージス艦だかと言っている。そのイージス艦が使用するミサイルはどうなっているか、弾はどうなっているか、全然言わない。

それで、これが船ですね『防衛白書』の中の図のコピーを示す」。今度出るものがまた楽しみです。おそらく同じものが出てくるんじゃないかね。これは、この前コピーを差し上げたでしょう。海岸に全部機雷を敷設すると言うけれども、一体機雷は、どこに、どういう状態であるのか、ということについて認識がない。しかし、平気で書くんですね。昔の『防衛白書』には、現状はどうかということ、抗堪性（こうたんせい）はどうかかというようなことについて、一項目あったんです。これは昔のものです「昔の『防衛白書』一四二ページのコピーを示す」。ところが、今の『防衛白書』には全然ない。

伊藤 これは何年のものですか。ある年から、この「継戦能力」という項目はなくなるわけですか。

海原 何年か書いてありませんでしたか（注・昭和六十三年版）。

伊藤 「現在、有事を想定したこれらの備蓄は、必ずしも十分でないため」と書いてありますね。

海原 「必ずしも十分でない」ではなくて、「全然十分でない」ですよ。でもその時は一応書いてあるでしょう。今はもう全然書いてない。じゃあ、それは良くなったのかというと、何もなっていない。そういうことを昔は書いていたんです。

佐道 この昭和六十三年の『防衛白書』の方は「継戦能力は……わが国にとつて重要である」ということが書いてありますが、備蓄は十分ではないということですね。

海原 そういうことについて、ともかく項目が上がっていたんです。今はそれが全然ないでしょう。

佐道 『防衛白書』を書いているのは、どこの部署ですか。

海原 これをまとめてるのは内局です。昔で言えば防衛局です。私はいま誰も知りません。材料は全部各幕です。要するに各幕、内局からチームを作るわけです。それで、何か月間か一緒にやってまとめて、これでよろしゅうございますか、ということになる。できた後はバラバラになっちゃうんです。私も、これはどうしたらいいかと思ひましてね。今の瓦長官も知っていますけれども、行って話すわけにもいかないし、そうかといって、これだけ新聞には出ているんですからね。話すことはいっぱいあるんです、これに関連したことはね。

これは、ご参考までに「保有機雷使用可能見込書」を示す（資料9）。要するに、機雷を実際に役に立つようにするまでに、どれだけの日数が必要かということなんです。今あるもので、ということなんです。三十日、六十日、百何十日とかかるんです。そういうものがあるんですからね。そういうことを知った上でこれを書いているのか、と思うんです。弾だ、弾だと言っているのは、本当に私だけなんです。全く情けなくなるんですけれどね。まあ、米軍がいる間は絶対に大丈夫ですから、いいんですけれどもね。後が私は心配になってくる。後は野となれ山となれです。私がわからないのは、防大を出た「制服」の諸君が全然問題を感じないことです。だって、昔の陸士・海兵でしょう。伊藤 そういう教育をしていない、ということですかね。

海原 だって、『防衛白書』を出しているんですから、読むはずですよ。ところが、栗栖君が書いています。「今の『防衛白書』というのは、わからないように書いてある」と言っていますけれどもね。それなら、なおさら問題にすべきなんです。伊藤先生、伊藤先生は史学会の会長ですか。会長として何かご意見はありませんか。

伊藤 これは歴史の問題ではなくて、現実の問題ですから（笑い）。

海原 現代史の問題です。これだけは何とかしたいんですけれどもね。私が瓦長官のところへ乗り込んで行って、こんなことでいいか、と言ってもいいんですけれども、それをやっても、果たして瓦君にできるかと言ったら、できないでしょうね。私が不思議なのは、私がこうやってあちこちに物を書いているんですから、若い諸君から、これについて何らかの受け応えがあつて然るべきだと思うんですがね。何も無い。どういうことでしょうか。

伊藤 何となく、今の日本の国防というのは、非常にバーチャルな感じがするわけですよ。

海原 どう言ったらいいですか、天下泰平ですね。昭和元禄ですね。

伊藤 まあアメリカ軍がいるから。

海原 それはそうです。だから私は本に書きませんでしたけれども、日本人が本当に防衛の問題を考えるのは、米軍がいなくなった時だ。

伊藤 元禄は昭和だけで終わりかと思つたら、平成まで続いています。

海原 朝鮮は朝鮮でお互いに抱き合っている時にね。もう脅威は全部なくなつちゃうんですかね。

伊藤 もう戦争はないよと、こう思っているんでしょう。

海原 そうです。その辺のところは、皆さんの方がむしろ若い人に接触されることが多いんだから。私はいろいろ心配して言つても、女

房が「あなた、そんなに心配しても何ともならない」と言う。まあ、それはそうだけど（笑い）。

伊藤 それを言われたらお仕舞ですね（笑い）。

海原 お仕舞なんですよ。防衛大学の学長をやった猪木正道さんなんか、一体何をしているのかと思うんですけれどもね。

河野 先生がお辞めになつてから今までの間で、興味が変わるとか、基本的な考え方の変化というのはあつたんですか。

海原 仕舞には、もう何もわからない。

河野 ここに来て、機雷なり、弾丸なりを使うような実戦があまり想定されなくなつてきているということはありませんか。

海原 そんなことはないと思います。

伊藤 実際に演習をしよつちゅうやっているとんじゃないですか。

海原 例えば途中で、猪木さんが校長を辞めてしばらくした時に会つたことがあるんです。みんなの前で、私もいた席で「海原さんの破壊力は原爆並みだ」と言うんです。そんなことを言う。

伊藤 まあ、原爆とは違うでしょう。

海原 「もう海原さんとは、とても話にならん。みんな爆砕される」と、そういうことを言っているんです、本人は。

伊藤 海原さん程度のこと爆砕されたのでは、もういよいよ日本の防衛はどうなるんでしょう。

海原 それは知りませんがね。

佐道 海原先生は『私の国防白書』を出されましたね。『国防白書』は最初に中曽根さんの時に実際に出されて、それからちよつと時間をおいて、今度は坂田長官の時にまた出て、それから後ずつと続いているわけです。どうも防衛庁の方も、先生の『私の国防白書』をいろいろ

ろ検討しているようなんですけれども。

海原 私は「著書」官房長に持って行ったんです。官房長とか課長に。しかし、それっ切りですよ。だから、「お前の言うのはおかしい、ここが間違っている」ということもないんです。天下泰平だからですよ。

佐道 久保さんのお話を、前日も今日もいろいろお聞きしましたが、例の「防衛計画の大綱」の問題などがありますよね。坂田長官、久保次官の時に、防衛方針、戦略を改めるという感じだったんですね。

海原 その話になってくると、「中曽根構想」の時に、久保君が局長でしょう。経団連の人に説明に行きましたね。外国が攻めて来る時には、一方ではか攻めて来ないと言っているんです。他にも来るかもしれないけれども、それは小さいものだ。一つの方面しか攻めて来ない。そういうことを言っているんです。そんなこと、誰が決めたんですか。だから、彼はそういう一つの芝居の筋書きを持っているんです。

伊藤 一方とというのはどういう意味ですか。

海原 だから、あっちこっち来られたら手が無いからです。攻めて来るのは一つの方面しかないだろう、というわけです。

伊藤 ソ連だけが攻めて来るとい意味ではないんですね。

海原 ソ連が攻めて来る時に、あっちこっちに来ないと言っています。一つの方面にしか来ないということです。

佐道 北海道のあるところには来ない、ということですね。北海道と新潟とか、一遍に来るわけではない、ということですね。

海原 そうです。そういうふうには勝手に決めちゃっているんです。制限している。だから私は、「勝てる相手には勝つ、ということを行っているだけだ」と言っているんです。今でもそうです。「どこでこん

な機雷の敷設ができるんだ、一体どこにどれだけの機雷があるんだ？」と聞くと、黙っちゃうんですね。私は本当に、これは腹が立っているんです。腹が立っているんだけれども、どうしたらいいでしょうか、伊藤先生。

伊藤 先生に教えてもらう以外に、私はどうしようもないですよ。この「保有機雷使用可能見込表」はどういう意味ですか。

海原 それは私が調べたんです、黙っているから。どっちでもいいですけれども、下に日にちが書いてあります。「S+30」「S+60」、これは日にちです。これは持っている機雷なり魚雷なりを、使えるようにするための所要日数です。だから保有機雷がいくつあると言っても、それはすぐに役に立たないですよ。最初のところは「S+30日」ですよ。そこでも、それだけしかありませんね。だとすると、どこへ来ても機雷を敷設するなんていうことは絵空事です。こういうことは、国会の委員会で調査しなければいけない。しかし、そういうことについてはもう全然関心がない、ということですね。

伊藤 社会党にやらせたらどうですか（笑い）。

海原 だから、私がひとりギョーギョー言っているかもしれないですよ。それから、これは前にちよっとお話ししたと思いますけれども、敵が攻めて来た時に、どういうふうな姿で来るかということなんです。「航空機の対地攻撃」という表を示す（資料10）。

伊藤 想定ですか。

海原 はい。その想定の一つの例ですけども、航空機の対地攻撃、一日何トンの爆撃、攻撃があるか。合計のトン数が書いてあります。七四〇トン、たったそれだけしか撃ってこない。私は笑ったですよ。ソ連が攻めて来るのに、場所も指定しているでしょう。浜頓別（はま

とんべつ)にはこれしか来ないという。誰が決めるんだ、これは。幕僚のウォー・ゲームというのは、こういう思考形態なんです。「だってお前さん方、沖繩戦ではどれだけの米軍の砲撃、爆撃があったか。サイパンではどうだった？」と聞くと、黙っているんです。これが要するに、天下泰平の時の幕僚の、まさに机上の空論ですよ。

だから何度も言いますが、私がおかしいということを書わなければ、そういうことにも気が付かなかったんですね。林統幕議長が総理から、「今どれだけの戦力があるか」と聞かれた時に、「これだけは戦えます」と言うけれど、そのための弾がどこにあるんだと思う。

佐道 これ「航空機の対置攻撃」は統幕の算定したものでですか。

海原 これは陸幕です。北海道へ攻めて来ると書いてあるでしょう。その北海道の地域は三カ所しかありません。そこにどれだけの対地攻撃があるか想定する。たった、これだけです。それは、この前お渡ししたでしょう。敵襲を受けても、地上の通信施設とかそういうものは破壊されないという前提なんです。そんなことがあり得るはずがない。そういう、あり得べからざる条件を前提に考えていますね。それが私が怖いと思うのは、旧海軍大学でもそうだったということなんです。

伊藤 この「配当ソーティ数」というのは、これは二〇〇機が来るという意味ですか。

海原 二〇〇回来ると言うんでしょうね。この細部はもらいませぬけれどもね。二〇〇機とは書いていない。

伊藤 「ソーティ」というのは何ですか。

海原 一回ということですよ。

伊藤 二〇〇回来て、ナバームを八〇発と、爆弾一六〇発と、ロケット

トを一、二八〇発発射するということですね。

海原 ええ。これだけを使うわけです。どうして、それだけなんだと聞いたら、黙っているわけです(笑)。

伊藤 根拠があるわけではないんですか。

海原 根拠はない。だって答えられない。だから、こういう考え方をする。それはかつてサイパンの陣地を視察した晴気参謀(中部太平洋方面担当の主任)が、「一キロあたり三・三門配置するから絶対大丈夫」と言った。それを受けて、参謀総長まで全部大丈夫だと言ったという。それと同じことです。それは旅順と同じですよ。二百三高地、兵隊を三面配置するから大丈夫だと。何も根拠がないんです。勝手に自分がそう考えているだけの話です。

伊藤 しかし、これだけでもっともらしい数が並んでいて、何の根拠もないんですかね。

海原 そうなんです。だから不思議だということをご承知ください。

だから、海原が非常に苦労したんだと。しかし、当分天下泰平だ。

伊藤 苦労のしがないが。

海原 そうということですよ。

誰が日本を滅ぼしたか

伊藤 天下泰平そのものは、僕はいいと思うんですけれども。ある日突然、天が崩れてくるということがあり得るわけですね。

海原 だって、そのことは外国人でアワーという人がいるでしょう。アメリカ人で海軍少佐ですか、いろいろ書いていますね。彼の本に出ていますね。アワー自身が日本海で海上自衛隊の演習を見に行つて、「今、ここにソ連の潜水艦が来て、攻撃されたらどうするか」と、そんな質問をした。そうしたら「はい、横須賀へ帰つて、米軍に頼んで魚雷をもらいます」と言つたというんです。ないんです、わが海上自衛隊の使える魚雷が。

伊藤 魚雷がないんですか。

海原 ええ。使える魚雷がない。

伊藤 使えない魚雷というのはあるんですか。

海原 それは整備をすれば、使える。

佐道 使うのに三十日ぐらいかかるわけですね。

海原 だから、おかしいと思つたら調べてください、と言っているんです。それで、済んじゃつているから怖い。

伊藤 じゃあ、即時は対応できないわけですか。

海原 できませんよ。だって、機雷は調整が必要なんです。昔と違つて、調整しないことには動かない。調整には熟練した者が四人一組で何時間と決まつているんです。「水雷調整」というのがあります。横須賀にもある、江田島にもある。でも、ほとんど行つていないでしょうね。私は江田島には行きました。現場に行つて調べました。

伊藤 それは在任中の話ですか。

海原 そうです。

佐道 じゃあ、この表は在任中にお作りになつたものですか。

海原 もちろん、そうです。

佐道 国防会議時代ですか。それとも、その前の防衛庁時代ですか。

海原 防衛局長時代です。しかし、かつては『防衛白書』にも、抗堪力とか、機雷なんかもちやんと用意しなければいけない、と書いてあつた。今は全然それがないんです。本来ならば、こういう機雷にはどれだけの日数が必要だ。どれだけの人員が必要だ、だからどうする、というのが出てこないといけないでしょう。

伊藤 いろいろ準備して、完備している。しかし、これは国防だから機密になつていると。違いますか。

海原 それで、日本人は大怪我をしたんです。今日は実は、大日本帝国にとつての全ての災害の元はこの人である、ということまでコピーを持って来ました。実はこれは朝日の『週刊20世紀』です。これは本屋へ行つたらもう売り切れです。その表紙です「『週刊20世紀』一九三七（昭和十二）年』の表紙コピーを示す」。表紙に「プリンス近衛」と書いてある。この人が組閣の天命を受けた時、日本中の新聞が、まさに本当に救世主が現れたかのように書いた。しかし私によれば、この人が日本を滅ぼしたんです。大政翼賛会を作つて、政党を解散して、それからずっと内閣を組織して、蒋介石を相手にしないとか、勝手なことを言つて、最後に自分は青酸カリで自殺したでしょう。それつ切りですからね。天皇陛下には上奏文を出して、「今後は共産党の手による赤色革命が心配だ」なんて書いている。心配なら、残つて助けなければいけないでしょう。まさに、これはお公家さんの代表なんです。そのあとが細川です。あれも最後のお公家さんですね。

私がなぜ彼「細川護熙元首相のこと」をそう言うかという、彼が国会で最初の質問をする時に、赤坂の小さな鳥屋の二階で、私が彼にいろいろレクチャーしたんです。彼から電話がかかつてきて「海原さん、今度私は参議院で質問しなければいけないんだけど、いろいろ

る材料が多くてわからないから、教えてくれ」と言う。それで、鳥屋の二階で教えた。「今日は、こんなところでしか食事を差し上げられない。いづれ改めて」と言っただけで、全然「いづれ改めて」なんか、ないですよ。そういう人なんです。これもお話ししましたね。

当時「近衛内閣発足当時」の新聞、是非どこかで見てください。まるで世の中が、この人のおかげで全て良くなるように書いてある。どうも日本人というのは、そういう甘いところがあるんですね。何で、五摂家の筆頭の近衛が日本の総理になったら、全てが良くなるんだと思っただけでも。この息子だって、ぐうたらな飲んべえで、死にましたけれどもね。

伊藤 息子はソ連に抑留されて、向こうで死にましたね。

海原 こっちにいる時には、新橋では有名でしたよ。親子で遊んでね。ところが、近衛が出てくれば日本中が良くなるかのように、当時の新聞は全部書いてあるんです。「プリンス」と書いてあるでしょう。「プリンス近衛」です。

伊藤 プリンスというのは公爵ですから。

海原 私は、日本の政治でおかしいのは元老政治だと思った。西園寺なんて、もともと琵琶を弾いていた。あれが元老と称して、天皇のところへ行つて、「次の総理は誰々でよろしゅうございます」と言う。誰がそんな制度を作ったんだろう。

伊藤 それは明治に作ったんですからね。

海原 誰もそれを批判しないでしょう。

伊藤 いえ、批判はしていますよ。

海原 当時はしていませんよ。

伊藤 当時、批判していたじゃないですか。そういう元老政治に対し

ては批判をしていた。

海原 でも、それは西園寺まであったでしょう。私は日本人というものの体質がよくわからないですよ。

伊藤 じゃあ、自分が日本人じゃないということですか（笑い）。

海原 どう言うんでしょうかね。

伊藤 いろいろありますけれども、しかし明治維新以来現在まで、この間の戦争は負けましたけれども、たった一回負けただけですよ。そうしたら、もうべちゃんこになった。

海原 負けたら、いろいろとその体験で悟らなければいけないですよ。

伊藤 敗戦の教訓を学ばなければいけないわけですね。だから、もう戦争はやめた、やめたと言つて、戦争はなくなるわけではないんですけれどもね。

海原 まだ伊藤先生は私よりはずっと若いんだから……。

伊藤 いやいや、ずっと、でもないですよ。そんな若いわけではない。

海原 もうそんなことを心配してもしようがない、と言われれば、その通りなんですがね。

伊藤 いやいや、心配しなければいけませんよ。

海原 いかんと言つたつてね。史学会の会長さんはどうなりますか。

伊藤 それは歴史をやっておりますね。

佐道 海原さんが個人的にご存知の方は、どのくらいまで防衛庁におられましたか。

海原 今は誰もいません。

佐道 今はそうでしょうけれども、例えば夏目さんは次官にもなられましたけれども、その後で言えばどこら辺ぐらいいまでですか。

海原 夏目君で終わりでしょうね。

佐道 そうですか。個人的にもよくご存知だという方は？

海原 私は要するに、敬して遠ざけられる、敬遠されていますからね。「去る者は追わず、来る者は拒まず」というのが、私の人生観ですから。

伊藤 来る者が、あまりいないんですか。

海原 いない。あまりじゃない、ゼロです。

伊藤 われわれは来て、いろいろお話を伺っているんですけども。

佐道 下手に行つて、爆砕されてしまうかも知れない(笑い)。

海原 これは不徳の致すところですかね(笑い)。便利な言葉がありますね。何が不徳かわからないんだけど。皆がそれでいいというなら、どうぞ。私が一人で憤慨していると、女房は「あなた一人で憤慨してもしようがないでしょう」と言います。

伊藤 やはり、いろいろ奥さんとそういう話をされているんですね。

この間お宅に伺つた時に、奥さんが中曾根さんのことを話していたから、ああ、これは夫唱婦隨でやっているなと思つて聞いていたんです。海原 あんなのが大勲位をもらう世の中ですからね。あれで勲章の価値が下がっちゃつたですよ。

伊藤 いや、それまでだつて「勲章に価値が」あつたとは思いませんけれども。これで一応お話は伺い終わつたということになります、これからいただいた資料などを読ませていただいて、秋ぐらいに、追加のインタビューを一度設定させていただければと思つております。いかがでございましょうか。

海原 それはもちろん、いつでもいいですよ。

伊藤 それから、今日いただいたものは、あまりにも貴重だと思つております。今までにいただいた、コピーではない原文書ものは、

まとめて海原さんの関係の文書として、わが大学に保存させていただくということにいたしましたと思います。また、追加の資料がございましたら、お願いしたいと思います。

ところで、「海原氏の出した資料を指して」それは何ですか。

海原 これは「新防衛力整備計画案の概要について」(資料11)です。

伊藤 「秘」となっていますね。

海原 そうなのが付いていると、みなさんびつくりされるけれども。

伊藤 いやいや、もうびつくりしませんよ。こういうものを捺すのが、お役人は好きですからね。その時は「秘」なんですよ。

海原 そうなんです。だから番号入りですけどもね。「再検討について」なんていうものもあります。

伊藤 これはしかし、誰が書いたものですか。

海原 わからないです。防衛庁でしょうね。

伊藤 「四次防の再検討について」ということは……。

海原 途中のものでしようね。行つたり来たりしていますから。もし録音テープが残っていたら、それを聞いていただければ、どういふ激しいやり取りがあつたかということがわかるわけですからね。それはですから、念のために国防会議事務局の文書として、そういうものが残っているかどうか、一度問い合わせてみるといい。私がそう言っているから、というふうには聞かれればいいです。今の安全保障調査室ですよ。

伊藤 たぶん言つても、そういうものはいませんかと言われる。

海原 じゃあ、どこから手を回して。

伊藤 また何か思い出されたことがありますたら、ちよつと声をかけてください。

海原 はい。わかりました。

伊藤 やはり、もう一遍速記録を読んでくださると、ああ、これは言い忘れていたなあというのがあると思います。それをちよつとメモしておいていただいで……。

海原 将来、何かの参考になりますかしら。

河野 なります。

伊藤 なりますよ。当時の国防会議の事務局長はこういうことを考えていたのかと。

海原 そんなことを考えていた人がいたにせよ、どうということはないでしょう。

伊藤 どうということがあるじゃないですか。それで、物事が動いているわけですから。

海原 私は、そうは思いませんね。昔はそういうささやかな期待、可能性を持っていたんですけれども。これは、その当時の行軍風景ですね「行軍風景の写真を示す」。この一人が私ですけれどもね。これは、しかし、やった人でないとわからないです。鉄砲を担いで、とぼとぼと満州を歩いて、初めてわかるわけでしょう。それを活字で読んでみても、どうということはないんですね。私が「弾だ、弾だ」と言っても、「いや、海原の言う通りだ。そうだ、弾をやるうじやないか」と言う人がいないんです。こればかりは何ともならないです。残念ですね。

伊藤 弾を撃つことを考えていないからですよ。

海原 それで終わりでしょう。それでいいか、と言っているんです。

伊藤 いや、良くない、と言っんです。

海原 良くないのなら、どうしますか、先生。史学会の会長として、

これをやるうじやないのですか。

伊藤 歴史にそんなことを言ってもしょうがないでしょう。

海原 いや、歴史を勉強してみると、なるほどこうだと。それだからこそ意味があるんですからね。ついでに、この際伺いたいんですが、誰が言った言葉か忘れましたが、「歴史を読んでわれわれが理解することは、われわれは歴史に学ばないことである」というのがあるんです。ゲートルではなかったかと思うんですが。

伊藤 僕が言っているのは、「歴史を学ぶと、いろいろな可能性がある」ということだけはわかるけれど、先のごことはわからない」ということです。

海原 その程度のごことは初めからわかっています（笑い）。

伊藤 もう、それ以上のごことはわからないですよ（笑い）。ただ、おっしゃった通り、戦訓をきちんと学んでいない。日本の陸軍はそうなんです。いや、陸上自衛隊にしてもそうだと思いますが、戦前の戦史をきちんと検討していないでしょう。いや軍隊ではない、われわれは自衛隊だと言っ……。

海原 そういふふうにしちやうことが、私にはわからないんです。名前はどうもかく、やることは同じですからね。

伊藤 そういうことですね。

海原 さらに私が老婆心的に説明するのは、責任を持っていたはずの人が何も言わないことです。あの時はこうだったんだ、だからそういうことがあってはいけません。君たちもよく考えろ。俺たちは弾薬のことを全然考えなかった。そこで到るところで玉砕が起った、と言っ……くれればいいんです。海原の言っ……る通りだ、と言っ……くれればいいんだけれど。

伊藤 もう、そんな人はこの世にいないですよ。

海原 旧海軍のある有名な方が、「なぜ私は海原さんが『陸』のこと、しかも弾のことしか関心を持たないのか理解できない」と言うんです。海軍だからです。それで済んでいるんですね。

伊藤 海軍だつて弾でしょう。

海原 海軍の撃つ弾と、陸軍の撃つ弾と、弾の意味が違うんですね。だからフランスが手を上げた時に、地中海にフランス海軍は健在だった。しかし、なぜドイツに手を上げたか。それは国内の陸上抵抗力がなくなつたからです。これは立派な戦訓なんですね。そう言わないんですね。「海原はなぜ『陸』の抵抗力ばかり言うか、しかも弾のことをギャーギャー言う」。旧帝国海軍の人がそういうことを言うんですから、しょうがない、と諦めるしかない。

伊藤 まあ、諦めるほどのこともない。これからも海原さんに大いに頑張つていただかなければ……。

海原 もう、それだけの元気はないですね。

伊藤 もうちよつと元気を出してください。

海原 何と言つたらいいでしょう。佐々淳行が危機管理だとか言っていますけれどね。それじゃあ、お前さんはどうなのか、と聞くわけです。

伊藤 今度、佐々さんに挑んでみたらどうですか。

海原 そんな……。これはミサイルの資料です。

伊藤 こういふものは、是非いただきたい。

海原 いや、面倒くさいんです。

伊藤 面倒くさいのなら、私どもが行きまして、自宅を搜索させていただきます(笑い)。

海原 これは、国防会議の議員懇談会の資料です。

伊藤 あるじゃないですか。ポロポロ出てきますね。これは穴が開いているというところはファイルをしてあつたということですね。

海原 そうですね。いつファイルしたのか、覚えていませんね。もう、この世と縁を切る頃になっていますからね、

伊藤 こういふものは、きつとどこかに積んであるに違いない。お忘れになつているんです。

海原 考えられることは、ちよつと本を書こうと思つて、除けてあつたんですね。私はあと二冊書こうかなと思つているんですが、女房が反対しているんです。一つは硬いものの最後で、それを文庫版にするかと考えているんですが、もう面倒くさいですね。

伊藤 エッセイでも書いた方がいいかもしれませんね。

海原 エッセイと言つても、思い出ですね。物事の初めということですね。婦人自衛官をつくろうとした時に反対された話など、いろいろあるんですね。ただ、そんなことは書いてもしょうがないな、と思うようになりましてね。

伊藤 あまり意味を求めない方がいいですよ。

海原 そうですか。例を言いますと、北海道の流水観測。いま自衛隊がやっているでしょう。あれを最初に私がやろうと言つたら、全員反対ですよ。なぜか。陸上自衛隊の観測機、あるいは海上自衛隊の船が出るよソ連を刺激する、と言う。「そんなことは向こうに通報すればいいじゃないか。何月何日から流水観測のために飛ぶということを通報すればいいじゃないか」と私が言うよ、黙っちゃうんですね。そういう感覚ですよ。ソ連を刺激するから良くないとか。まあ、いろいろあるんです。

伊藤 その話は伺ったことがないように思うんですが。

海原 いろいろありますからね。

伊藤 思い出してください。手がかりがあれば、思い出していただけることがたくさんあると思います。

海原 私はこの人「近衛の写真を指す」が、日本を滅ぼしたと思っ
ているんです。

伊藤 僕も、そう思っていますよ。滅ぼしたと言っても、なくなったわけではありませんからね。

海原 大日本帝国はなくなりましたですよ。

伊藤 帝国はなくなってもいいんです。日本という古くからあるものがなくなっては困る。

海原 しかし、大日本帝国というもののために一所懸命になった人がおるんですよ。この人がいかにかにけしからんかと思うのは、日独伊三国同盟の時に、海軍が変わりますね。前の時まで反対だったのが賛成になった。海軍を呼んで聞いたら、「情勢が許さない。政治情勢上、賛成するんだ」と言った。近衛さんは、「そういう政治情勢上、許す、許さんというのはわれわれが考えることだ。あなた方はそういうことを考えないで、お国のための戦いのことを考えればいい」と言っているんですね。

しかし、海軍の本心は反対なら、それを聞いた近衛はどうしたんだ、と言うんです。表向き賛成に転じたけれど、実は反対であると。それを知っているのなら、それを前提に物を考えるべきでしょう。私はそう思う。海軍は絶対反対論、できないと言う。日本の海軍はアメリカやイギリスの海軍と戦うようにできていないということを知っているのなら、それを前提に物を考えるべきですね。お公家さんですな。国

家に忠なる所以ではないと言う。あなた「近衛」もそうじゃないか、と私は言っているんです。しかも華族というのは皇室の藩屏でしょう。

天皇陛下の側近として絶対的な忠誠を守らねばならない。それが海軍の本心は反対だということを知っているのに、海軍も賛成したから、なんていうのはおかしいですね。それが私はわからない。

伊藤 海軍も、反対だったら反対と言ってくれなければ困るんですね。

海原 言うべきなんです。

伊藤 あの時も、海軍は短い期間だったら戦えますけれど、長期戦には耐えられませんと言っているんですね。

海原 長期戦というのはどのぐらいか、ですよ。

伊藤 ちゃんと、一年半は戦えますと言ったんです。

海原 一年半も戦えないじゃないですか。ミッドウエーでやられているんですから、嘘八百でしょう。それで思い出しましたが、最近警察が不祥事を隠していて、問題になりましたな。神奈川県警なんか。ああいうふう組織の防衛を考えるのが日本人ですね。その一番具体的な例が、台湾沖航空戦です。

伊藤 大戦果をあげたという話ですね。

海原 それはアメリカの機動部隊を殲滅したと発表して、天皇陛下から連合艦隊司令長官がお褒めの言葉をもらったんですよ。全部嘘だった。

伊藤 幻の大戦果ですね。

海原 誰一人、これに対して責任を取っていません。おかしいですよ。だって、レイテに陸軍が上陸する。その時、陸軍はアメリカの機動部隊を全滅させる前提で行くわけです。私の親友がレイテに上陸した時、四列側面縦隊と言って、連隊旗を正面に立てて、堂々の行進を

やっていたんですから。敵がいなかった。海軍が陸軍に教えていないんですね。ましてや陛下まで騙した。これを誰が責任を取ったか。軍令部総長は騙したんですよ。こんなことを言ってもしょうがないですね。

伊藤 今の人間が自分の持っている責任をきちんと果たす、ということが必要なんです。

海原 だから警察が庇うのも当たり前だと言っているんです。みんな、いざとなると自分たちのメンツですね。

伊藤 自分たちの組織と言いますが、最終的には自分ですね。

海原 そんなものですかね、人間というのは。

伊藤 それは、自己防衛です。

海原 そこまで行くと何とも言えませんが。今日は何の話でしたか。

伊藤 国防会議をクビになる話です。

海原 どうも失礼しました。勝手なことを申しまして。

伊藤 長い間、どうもありがとうございます。今後ともよろしくお願いたします。

〈以上〉

あとがき

海原治氏のオーラルヒストリーを始めるきっかけになったのは、平成十年六月二十二日にプレスセンターで行われた後藤田正晴氏のオーラルヒストリーをもとにした『情と理・後藤田正晴回顧録』（講談社）の出版を祝う会の席上で海原氏にお目にかかって、お願いしたことからであった。海原氏は快諾して下さったので、打ち合わせの結果、十月五日に第一回を行った。聞き手は、私と飯尾潤氏（政策研究大学院大学教授）、佐道明広氏（政策研究大学院大学助教授）、河野康子氏（法政大学法学部教授）、牧原出氏（東北大学法学部助教授）、（最初、政策研究大学院大学教授の御厨貴氏も出席）であった。海原氏には文部省科学研究費重点領域研究「戦後日本形成の基礎的研究」で阪中友久氏らによるオーラルヒストリー（二回、ORAL HISTORY シリーズとしてプリントされている）が行われており、参考になったが、これは部分的なものであった。以後概ね月一回のペースで続け、平成十二年六月十六日の第二十回で終了した。速記は毎回かなりきちんと、氏が修正追加され、その間、『戦史叢書』を政策研究大学院大学に下さるといので、お宅に伺い、頂き、奥様とも色々歓談する機会があった。

海原氏は批判精神の旺盛な方である。恐らく軍隊生活の経験がその基点にあると思われる。内務省から、保安庁保安課長、防衛庁防衛局長、国防会議事務局長時代を通じて、お話の中ではその面が強調され過ぎていくようにも思われる。海原氏のお話の中心は何と云っても、日本の国防政策との関わりである。氏が将来の日本の国防についてどのようにお考えなのか、追加質問の会合をしようという計画もあったが、この冊子の作成について平成十二年十月にお宅にお電話したときに、奥様からオーラルヒストリー終了から暫くして脳出血で倒れられ、入院中だと聞かされ、驚愕した。確かに終わり頃に少しお疲れの様子であったが、それでも毎回お元気でお話し下さったお姿からは、想像できなかった。最終稿を作成するに当たっては、奥様が病床の海原氏に内容を話され、元の秘書たちが確認作業に加わって下さった。

海原氏には、かなり多くの著書がある。このオーラルヒストリーを読む際の参考になるであろうから、以下にそれを示しておこう。

『戦史に学ぶ』（一九七〇年、朝雲新聞社）、『私の国防白書』（一九七五年、時事通信社）、『日本列島守備隊論』（一九七三年、朝雲新聞社）、『最近の国際情勢と日本の安全保障』（一九七七年、内外情勢調査会）、『日本防衛体制の内幕』（一九七七年、時事通信社）、『現実の防衛論議』（久保卓也氏と共著、一九七九年、サンケイ出版）、『最近の国際情勢と日本の防衛』（一九七九年、内外情勢調査会）、『誰が日本を守るのか!』（一九八〇年、ビジネス社）、『討論自衛隊は役に立つのか』（一九八一年、ビジネス社）、『間違いだらけの防衛論』（一九八三年、グリーンアロー出版社）、『日本の国防を考える』（一九八五年、時事通信社）、『日本人的「善意」が世界中で目の敵にされている!!』（一九八七年、講談社）、『安全保障・日本の選択』（一九九六年、時事通信社）、『治に居て乱を忘れず』（一九九六年、読売新聞社）

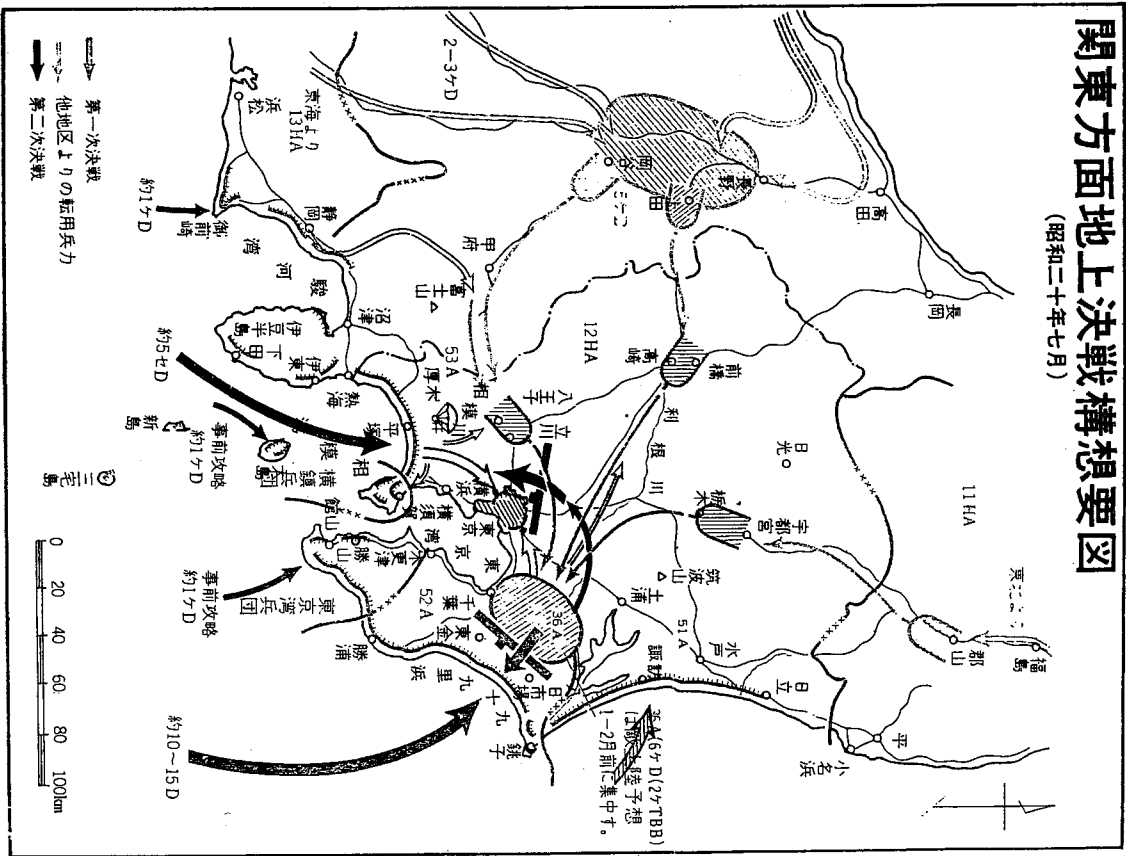
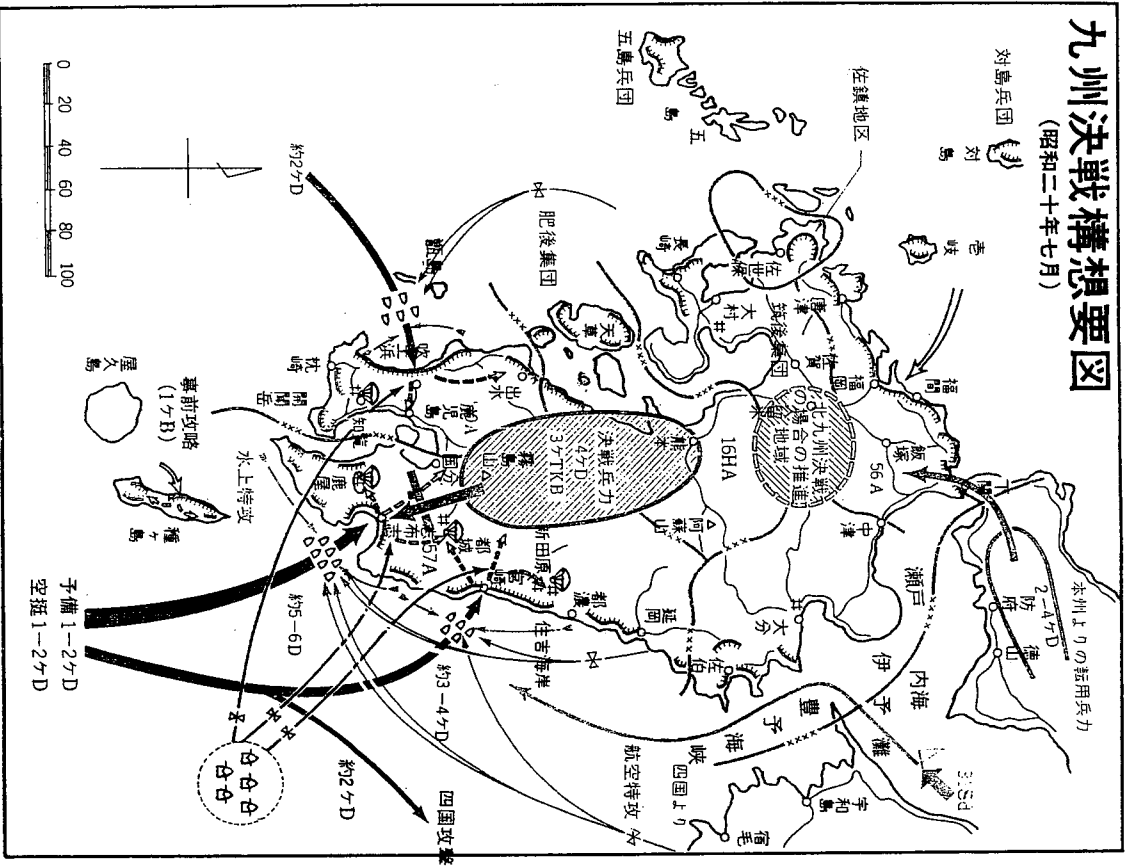
最後になったが、毎回貴重なお話をして下さい、速記録の点検を下さった海原治氏に厚く御礼を申し上げます。一緒に聞き手になって下さった諸氏、そして速記を担当して下さい下さった丹羽清隆氏、この冊子の編集に当たって努力して下さい下さった安田泉氏にもお礼を申し上げます。

平成十三年一月十日

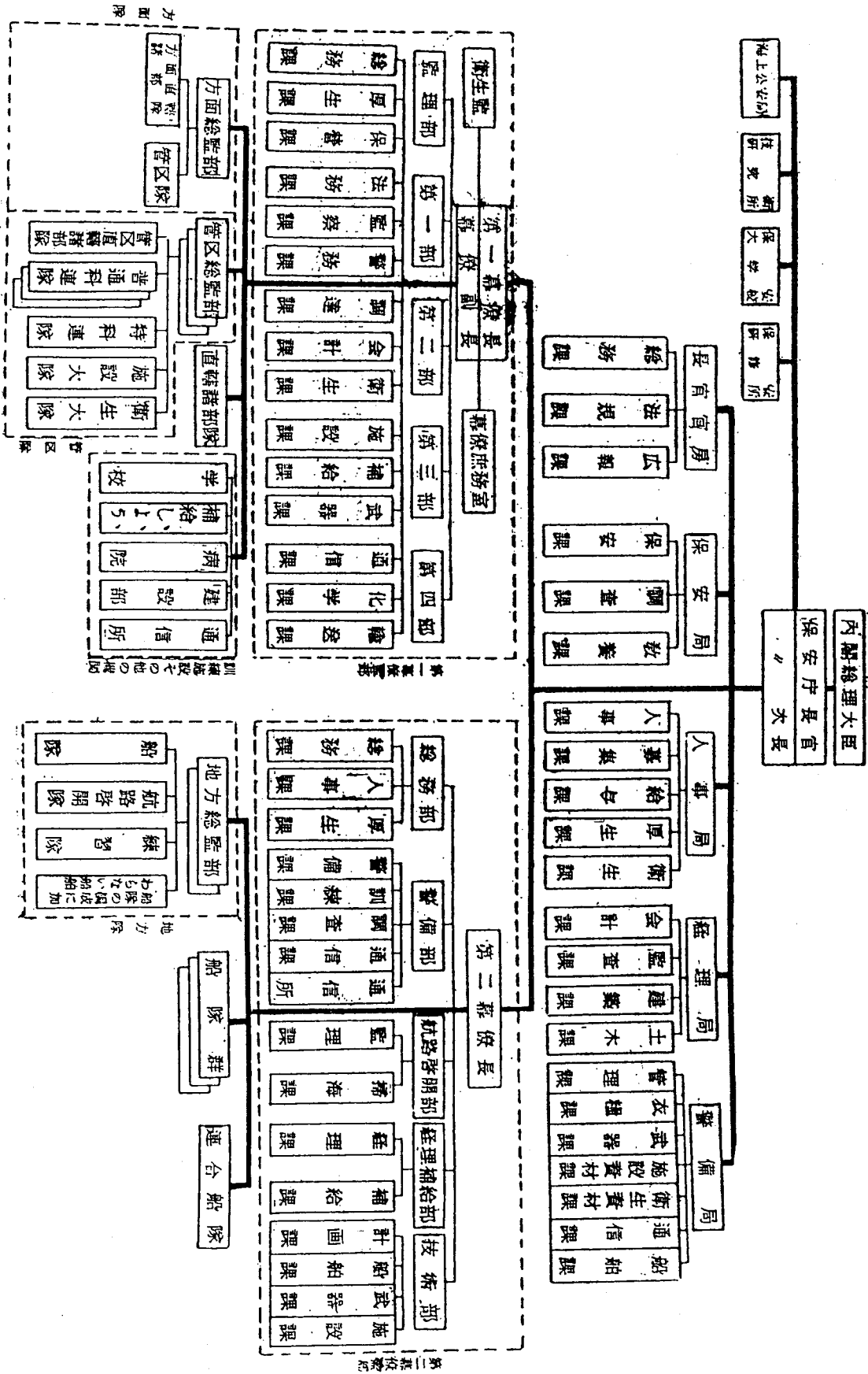
政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

資

料



保安庁組織表



A案

构想

(1) 方針

1. 目的
有事の際に、地方自治の本旨に則り、地方警察、自衛隊の補助隊として郷土の防衛を確立する。

2. 任務

(1) 郷土の防衛

1. 正規部隊の戦力不足を補う。情勢に即し、郷土の防衛に必要に応じて、速に連携して防衛を行う。

2. 地域住民の生活防衛を行う。

(2) 地域住民の生活防衛

1. 一般住民の生活防衛
遭害通報、通報の受け取り、設置した人の被害に對して救済、手当て、被害の防止を行う。

(3) 消防隊と原則として、地域内を巡回する。

町 廳

B案

构想

C案 郷土工

1. 任務

2. 組織

D案

目的

組織

【細案】

照 顧 脚 下

第6 要員の確保について 4.0 5.2.1

1. 昭和37年、ナイキ部隊の所属問題が深刻に討議された際、空幕は「ナイキの受入について」、「第2次要員の抽出により各部隊におよぼす影響を検討した結果は、次の通りであり、問題は殆んど考えられない」と主張した。(ナイキ所属について、3711.1.12航空幕僚監部 P. 8)

即ち空曹および空士について、SAM関連特技について、要員抽出後における練度状況(75レベル)の推移は、充足率をもつて示せば、37年度85.7%、38年度91.5%、39年度以降100%であり、各部隊の能力維持に影響することは殆んどない」と断定された。

2. 防衛局は、「スキルレベルの高い曹が甚だしく不足している今日、P-104、バツジ関係の教育所製量とも考え合せて、数的にはともかく質的には相当問題が生ずべきことを予想」して、ナイキ部隊の建設は陸上自衛隊が担当することを適当と判断する旨の意見を具申した。

(ナイキを空自に所屬させる場合の問題点——
3712.17 防衛局)

3. 4.0.4.1.3 空幕防衛課作成の「第2高射特科群の新編時における特設別所要人員および充足見積について」によると、充足の予想は次の通りである。

③ ナイキ管制

曹(7) 61% (22人欠) (5) 76% (22人欠)
士(5) 54% (66人欠) (3) 22.4% (102人過)

④ ナイキ発射

曹(7) 82% (8人欠) (5) 85% (15人欠)
士(5) 59% (91人欠) (3) 21.7% (117人過)

⑤ 搬送無線整備

曹(7) 94% (5人欠) (5) 5% (80人過)

⑥ ナイキ電子整備

曹(7) 85% (6人欠) (5) 19.1% (21人過)
士(5) 8% (24人欠) (3) 18.5% (11人過)

⑦ 有線整備の曹 (5)は74% (35人欠)
弾薬整備の曹 (5)は62% (15人欠)
車両整備の曹 (5)は67% (47人欠)
燃料力器材整備の曹 (5)は55% (59人欠)

4. この数字は、上記1の言明とは、およそかけ離れたものであるが、問題は、何故この様なこととなつたのかが、けんきよに反省され、再び同様なあやまりがくり返されないうことである。

5. 極めて危険なことは、士の(四)を200%、220%として、充足率平均を97%、100%と掲記してゆく、その考え方であり、算術の式である。

警の(四)レベルの数字と士の(三)レベルの数字とが同価値で計算されることである。

専門の技術教育を受けた老練下士官の価値は、もつともつと尊重さるべきではなからうか。？

6. 要員の確保が問題であるのは、ナイキ関係ばかりではなく、単に航空自衛隊だけではない。

昭和四十年三月十日

昭和三十一年度統合防衛図上研究（三矢研究）について

防
衛
庁

◎ 自衛隊は、毎年、防衛計画を立てている。

自衛隊は、法律の定めるところにより、わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略および間接侵略に対し、わが国を防衛する任務を有する。この任務を達成するため、防衛計画を策定し、万一の場合に備えている。

防衛計画は、外部からの武力攻撃を受けた場合、間接侵略その他治安維持上の重大なる事態が生じた場合等に対処するため、自衛隊運用の全般的な準拠を定めたものであり、各自衛隊の現有勢力でいかなることができるか、有事の際、どの程度の能力が期待できるか、などの見積りを基礎として、自衛隊の作戦運用に関する内容を定めている。

防衛計画には、統合幕僚会議で立案する年度統合防衛計画と、これをうけての陸、海、空各自衛隊の、それぞれの年度防衛および警備計画とがあり、これらの計画は、その立案の過程において関係部局と十分な調整を行なった後、長官の決裁を受けて決定される。

◎ 三矢研究は、防衛計画ではない。

自衛隊は、前述の任務を達成するために、常に有効な部隊の運用について各般の研究や教育訓練を行なっている。

昭和三十八年度統合防衛図上研究（三矢研究）は、この研究訓練の一つであつて、年度統合防衛計画そのものとは全く別個のものである。これは、統合幕僚会議事務局長が臨時に長となり、ある想定のもとに問題を出して関係幕僚の答案を求め、これを集めたものである。

この研究は、昭和三十八年二月一日から六月三十日に至る間、関係幕僚によつて、ほとんど常務のかたわら、研究され、終わりのころ、部隊の運用について合同で討議されたものであり、内局からも関係課長等若干名がオブザーバーとして数回、参加した。

◎ 三矢研究には、政治介入の意図はない。

問題となつてゐる事項は、今回の研究が自衛隊の部隊運用の領域をこえて、たとえば政治、外交、経済等に言及してゐるところから、国家総動員法を計画する等、制服が政治に介入し、全体主義的な国家体制の実現を企図してゐるのではないか、また、米軍の核兵器の持込みや、海外派兵を企図してゐるのではないか等である。

この研究は、有事における部隊の統合的運用を中心としたもので、防衛庁以外の諸機関の施策は、本来、想定として示すべきものを、問題の形で研究員に解答させ、これをそのまま想定として、次の問題に進んだものであつて、自衛隊の組織運用に関するもの以外は、項目を列挙する程度であつて、立ち入つて研究したものでない。

たとえば、いわゆる総動員体制については、有事にあつては国家の一致した体制がとられるであろうと想定して、種々の項目を列挙してゐるが、それらは、それぞれ権限ある機関によつて処理されることを想定してゐるのであつて、自衛官による政治介入の意図などは、毛頭ないのである。

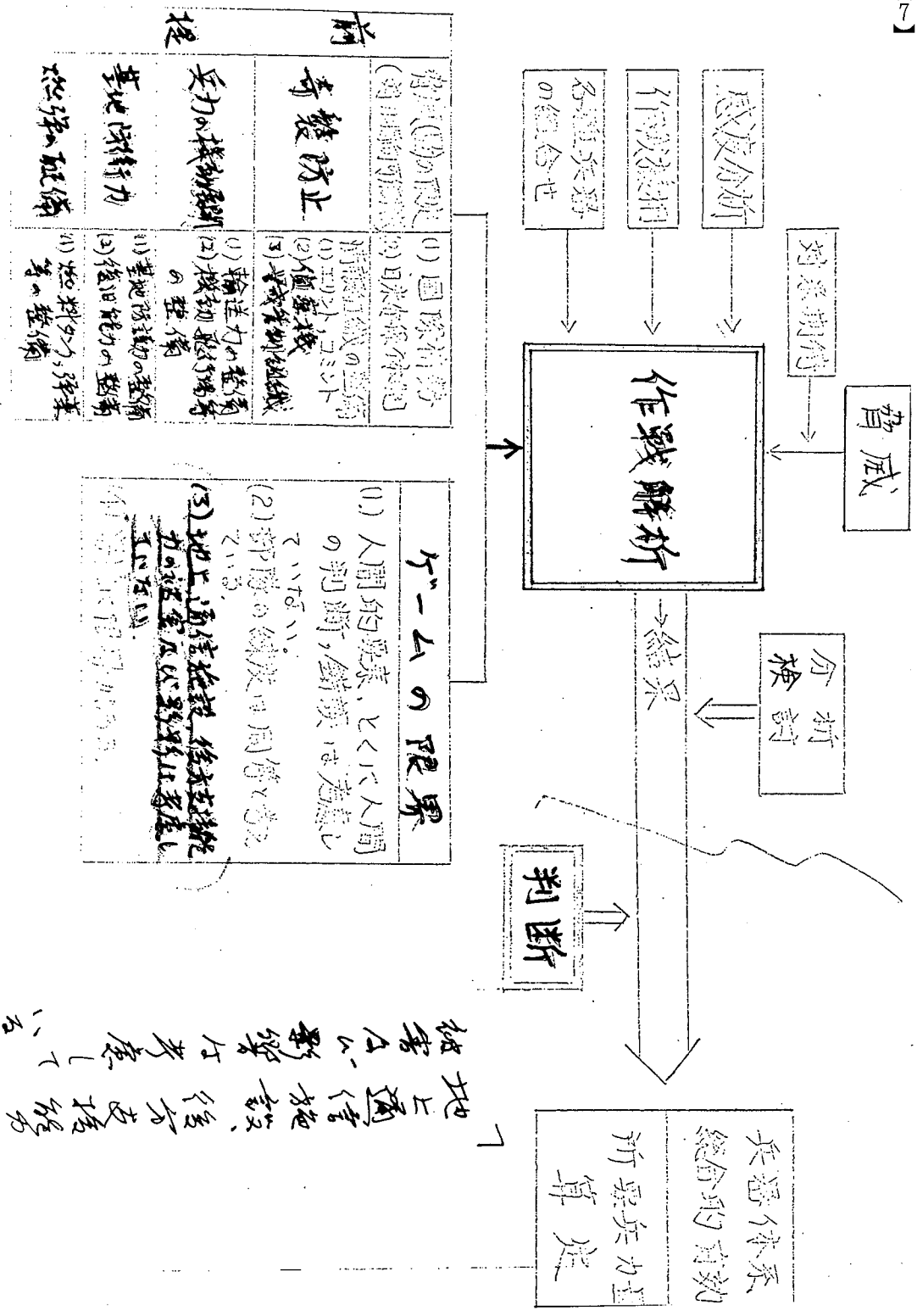
また、有事において事態が切迫した場合における米軍の核兵器の持込みや、海、空部隊の本土周辺への自衛のための行動については、政府の明確な方針が打ち出されてゐることをよく認識し、その判断を最高の政治判断に待つこととしてゐるのである。

◎ シベリアン・コントロールは、確保されてゐる。

このような研究が制服独走の形で行なわれたのは、自衛隊に対するシベリアン・コントロールが確保されてゐないためではないか、との疑問が出されてゐるが、この研究に当たつては、事前に内局に連絡があり、前述のとおり関係課長等が数回オブザーバーとして参加してゐる。また、これは、政府なり防衛庁のなんらかの計画、方針または意思の決定を行なうためのものでなく、単なる研究であり、もし、これらの研究の結果、政府および防衛庁のなんらかの措置を必要とすると思はれる事項があつたとすれば、その措置についての要望が統合幕僚会議および各幕僚長から、正規の手續により、長官に対し行なわれることになるのである。その際、こ

れをどのように処理するかは、防衛庁長官が判断することであり、この場合、次官、各局長等の政策的補佐が行なわれることになっている。すなわち、このような仕組みでシベリアン・コントロールは確保されているのである。

したがって、この研究が行なわれたことについて、シベリアン・コントロールが確保されていない、という批判は当たらない。



地上通信施設、後方支援能力の確保、及び影響を考慮して

例えば、米国では、今から18年前に実用

化した ナイフシステム、あるいは 13年前に実

用化した ホークシステム について見ると、日本

でこれと同程度のものを開発するには、今から

少なくとも
5~6年はかかるというのか。関係者の

一致した見解である。

とすれば、単純に考えれば、日本は、ナイ

フ、ホーク級のミサイルシステム^{の開発}について、米国

に20年ないしそれ以上遅れを取っている

ことになる。これは 相当な「ミサイルギャ

ップ」であると思えない訳には行かない。

保有機雷使用可能変化表
theme

K-15 2061
MK-57 56
K-16 1,124
K1~K 583
MK25,26 500
830x

500(5+120H)

initial

563(+150H)

440

(MK25,36)

340

(K1~K)

【資料9】

1個部 30MH
250x 8.515H

(Total)

4305(+240)
4273(+210)
3536(+180)
2859(+150)

300

300

200

200

(2182)

合計

100

(160)

50

(82.8)

(K-15)

2061(+240)
1970(+210)
1580(+180)
1190(+150)

(K1~K)

(K-15)

(MK-16)

1,124(+210)
837(+180)
550(+150)

160

90

320

140

570

(MK-16)

270

25

(MK-57)

820

400

NH

+30H

+60H

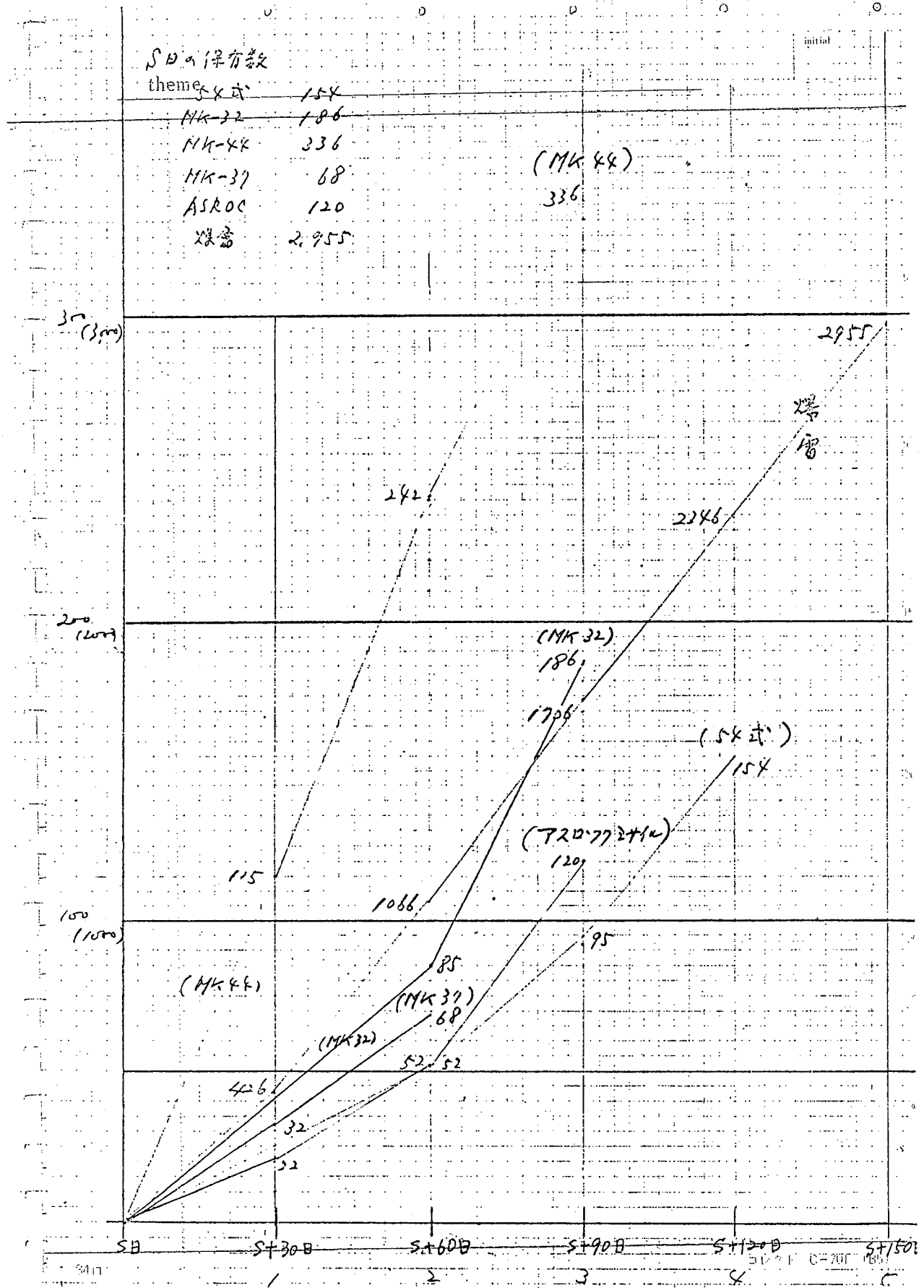
+90H

+120H

SDの保有数

theme	式	154
MK-32		186
MK-44		336
MK-37		68
ASROC		120
爆雷		2,955

(MK 44)
336



航空機の対地攻撃 (D日)

機種	正面	区分	配当 ノ-テイ数	投下弾数 (量)		
				ナパーム(発)	爆弾(発)	ロケット(発)
F/B	抜海		200	80	160	1,280
	天塩		100	40	80	640
	浜屯別		80	32	64	512
	計(ト数)		380	152 (51ト)	304 (69ト)	2,432 (119ト)
L/B	抜海		40		400	
	天塩		20		200	
	浜屯別		14		140	
	計(ト数)		74		740 (167ト)	

備 考

機種及爆装
 F/B: MIG 19-21
 ナパーム 2発 (750ポチ x 2)
 爆弾 2発 (500ポチ x 2)
 ロケット 16発 (512ポチ x 16)
 の何れかを爆装

4/B: IL 28 級
 爆弾 10発 (500ポチ x 10)

○ 比率 (ゲミグ結果) の集計
 ナパーム 1/5
 爆弾 3/5
 ロケット 2/5

○ 攻撃方法
 ナパーム 超低空
 爆弾 急降下
 ロケット 緩降下

○ 攻撃目標: 歩兵陣地, 砲兵, 戦車, 防空火器

○ 総投下弾量 406 トン

内訳

F/B	ナパーム	51 トン	計 119 トン
	爆弾	69 トン	
	ロケット	119 トン	
L/B	爆弾	167 トン	

防衛秘第45-160号 31

枚つづり

密

密

新防衛力整備計画案の概要について

新防衛力整備計画案の概要について

1 立案の趣旨

わが国の防衛力は、第1次から第3次に亘る整備計画の実施により、逐年整備充実をみているが、複雑な国際情勢のもとでわが国の独立と平和を守るためには、なお十分な体制にあるとはいえない。

最近の国際情勢からみて、わが国に対し差し迫つた脅威があるとは考えないが、武力紛争が断を絶たない国際政治の現実にかんがみると、防衛力は、国家の安全を確保するための最後の警として万一の事態に備えてこれを保持しなければならない。また、現代の防衛力は、科学技術の高度化に伴い、その整備・運用に多大の期間と経費を要し、一朝一夕に建設しうるものではない。

ここにおいて、既往の計画による防衛力を基礎とし、通常兵器による局地戦事態における侵略に対処しうる専守防衛の態勢を確立するため、長期的な展望のもとに昭和47年度から向う五箇年間に亘る新防衛力整備計画の原案を作成するものである。立案に当つては、わが国の国力国情にふさわしく、かつ、科学技術の進歩に即応した効率的な防衛力の整備を

45.10

防 衛 庁

密

密

秘

めざすとともに、所要経費の面において他の重要な
国家諸施策との調和に留意する。

2 情勢

(1) 今後の国際情勢は、いわゆる恐怖の均衡を前提とする米ソの対立と平和共存の関係を基調としてつ、各国の国益の追求と自主性の強調による政治の多極化の進展、更にはアジアにおける中共の抬頭により、総じて情勢は複雑かつ流動的に推移するであろう。この間、米ソの核戦力の存在により、全面戦争は勿論、全面戦争に発展するおそれのある大規模な武力紛争も強く抑制又は回避され、その生起の公算はほとんどないと考えられるが、反面、国際社会における戦争要因は依然断を絶たないで、軍事的摩擦が生ずる可能性は常に存在している。

(2) アジアは、自由圏と共産圏の接しよら地域に当たり、米ソ、ソ連、中共をめぐる関係が複雑であるとともに政治的不安定や経済的、社会的後進性あるいは分割国家問題等多くの国際緊張の要因を内包している。特に、中共の核装備の進展、米国のアジア戦略の転換、更にソ連海軍の急速な拡張と進出等は、今後のアジア情勢に微妙な影響を及ぼすものと考えられる。

秘

秘

3 防衛の基本構想

侵略を未然に防止するためには、周辺諸国の軍備の動向等を勘案しつつ、自らが有効な防衛力を保持して、侵略を誘発するような虚隙を生じないよう配慮する必要がある。

わが国の防衛は、起り得べき侵略事態に対して、専守防衛の面で有効に対応しうる防衛力を整備維持するとともに、米ソとの安全保障体制を堅持して、侵略を未然に防止することを基本としている。

現下の国際情勢等からみて、わが国を主対象とする本格的な、かつ、長期にわたるような侵略が行なわれる公算は殆んどないと考えられるので、わが国の防衛力整備の直接対象とする侵略事態としては、
当面

ア 侵略基盤の醸成、間接侵略の促進等を目的とする軍事力による示威、どう囁及び非公然又は奇襲的な武力行使等、小規模ではあるが不断の警戒を要する事態

イ 間接侵略が進行した状況において地域占領等の既成事実を作ることを行なう意図して行なう侵攻や、間

秘

秘

接侵略の仕上げのために行なう侵攻などかなり大規模かつ本格的であるが、時間的には限定された侵略事態が考えられる。

このような事態の生起に際しては、わが防衛力をもつて第一義的に対処し、わが国周辺における航空優勢、制海を確保しつつ、被害の局限、侵略の早期排除に努めるものとする。この場合攻勢的な作戦は、米軍に期待する。また、核の脅威に対しては、米国の核抑止力に依存する。

4 防衛力整備の方針

複雑な国際情勢のもとにおいてわが国の独立と平和を守るため、前記の基本構想に基づき、通常兵器による局地戦以下の侵略事態に対し有効に対処するとともに侵略事態の複雑な様相に迅速かつ柔軟に対応しうるよう、陸・海・空自衛隊の総合防衛力の向上を図つて、国民的基盤に立脚した自主防衛態勢の整備に努める。また沖縄の施政権返還に伴い、同地域に所要の防衛力を配備する。

防衛力の整備に当つては、若年労働力減少の傾向にかんがみ、要員確保のため、隊員の処遇改善、募集等の面において抜本的施策を講ずるほか次の事項を重視する。

(1) 科学技術の進歩等に即応して、装備の更新と近代化を推進するとともに教育訓練体制を充実して練度の向上を期する。

(2) 早期に事態に対応して適確に行動し、かつ、陸・

秘

秘

秘

海・空自衛隊の統合的運用効果を高めるよう、情報機能、指揮通信機能等を強化する。

(3) 将来の防衛力の向上と装備の国産化に資するため、部内外の能力を活用して、わが国の実情に即した装備の開発を推進する。

5 防衛力整備の主眼

(1) 陸上自衛隊

ア 5方面隊、13個師団、18万人体制を維持しつつ、装備の充実、近代化により、師団を中心とする部隊の戦闘力の向上を図るとともに新たにホーク部隊4個隊を編成するほか、部隊等の組織の合理化を行なつて、効率的な陸上防衛力の整備を推進する。

イ 装備の充実、近代化については、ヘリコプター及び装甲車の増強、各種火砲の自走化等による空地機動力の向上と戦車、対戦車火器及び対空火器の増強による火力の充実を重視する。

ウ 警備部隊等の要員に当てるため、予備自衛官を増員して期末60,000人とする。

(2) 海上自衛隊

ア 重要海峡を含む沿岸海域の防備体制を強化し、あわせて上陸侵攻対処能力を充実するため、高速ミサイル艇、潜水艦等の増強を行なうとともに、護衛艦の更新に際し、対艦及び対空ミサイルの導入等水上打撃力及び対空能力の向上を図



密

る。

イ 主要航路帯等わが国周辺海域における海上交通の安全を確保するため、ヘリコプター搭載護衛艦の増強等対潜機能の強化を図り、護衛部隊の充実、近代化と対潜掃討部隊の増強を行なう。

ウ 艦艇については、上記事業及び老令艦艇の更新に関して、期間内に新たに約80隻、約10万トン^{（イ）}を建造し、期末勢力を約1万700隻、約18万トンとする。また、固定翼対潜機について、その計画的更新及び増強を行なう。

(3) 航空自衛隊

ア 防空力を補備し強化するため、既定のP-4E^{（イ）}飛行隊4個隊を整備するほか迎撃配備及び将来の減耗に対処するため、新たにP-4E^{（イ）}飛行隊2個隊の整備に着手するとともにナイキ部隊3個隊を増強する。また、航空警戒管制組織を強化するため、固定三次元リーダー、移動警戒隊等の整備を推進する。

イ 現有の支援戦闘機部隊及び偵察機部隊の減耗に特種機種をそれぞれP-2改支援戦闘機及びR

密

密

P-4E偵察機に更新し、上着陸侵攻に対処する能力及び全天候哨戒偵察能力等を向上する。

ウ 現有の固定翼輸送機C-46部隊の減耗に伴い、機種を現在国産開発中のC-1輸送機に更新し、航空輸送力を充実近代化するとともに、現在国産開発中の超音速高等練習機(T-2)を整備し、操縦教育の効率化を図る。

(4) その他

ア 社会一般の生活水準の向上を勘案しつつ自衛官の勤務の特殊性に応じた環境を整備するため、隊舎の改善、国設宿舍の増設を行なうとともに任期制隊員の退職手当の増額を図る等隊員の処遇改善を積極的に推進する。

イ 医官の不足を解消し、衛生体制を充実するため、防衛医科大学校の設置に着手する。

ウ 良質の任期制隊員を養成して、隊員の充足の向上に資するため、防衛高校を設置する。

密

秘

6 計画達成に必要な経費

この計画を実施するために、昭和47年度以降昭和51年度までに必要な経費の総額は、おおむね5兆 億円程度と見込まれる。

(注) 上記金額は、昭和45年度給与改訂関連の所要見込額を含み、昭和46年度以降の給与改訂に伴う所要を含まな
い。

秘

本書(上巻・下巻)には、やや穏当を欠く表現や、現在は不適當と思われる言辭が散見されるが、口述としての記録性を重視するという観点から、修正することなく掲載した。

政策研究大学院大学(政策研究院)

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162 - 8677 東京都新宿区若松町 2 - 2

Tel : 03 - 3341 - 0458 Fax : 03 - 3341 - 0446

(無断転載禁)